
世界に蔓延る勇者達

霧助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界に蔓延る勇者達

【Nコード】

N1330L

【作者名】

霧助

【あらすじ】

大陸の一番北にあるノースポラ王国。

そこでは数十年に一度、魔王に対抗する為に勇者を召還していた。今代召還された99人の勇者……そして、遂に召還される最後の100人目。

しかし、召還された100人目の勇者はこの世界で生きる商人だった。

剣の腕は立てど彼はただの商人。いきなり魔王を倒せとか言われて

も困る。

そんな中、王都の闇市で出会った一人の黒い髪の少女。

気まぐれと幾つかの偶然で彼は彼女と一緒にこの世界を旅をする事になる。

基本、コメディー。たまにシリアス。

そんなラヴコメファンタジー、彼と彼女は今日もふらふら旅していきます。

2 / 23より本文の加筆、修正開始。とは言え話の大筋は変わらな
いし加筆はほとんどありません。

もしかしたら話の順番も入れ替えるかも。4 / 9日現状19話まで
終了。

一話 1と魔王の決戦（前書き）

初投稿なんで至らぬ所、多々あると思いますが楽しんで頂けたら幸いです。

最初二話まではプロローグ的な物になります。

一話 1と魔王の決戦

「まったく……厄介な剣だなあ」

黒い翼を持った少年が困ったように呟く。

その視線の先には黒い剣と黒い髪を持つ少女がいた。

「そもそも何故、君達……異世界から召喚された勇者かい？なんで勇者達は僕らを狙うんだい？僕らは別に人間に危害を加えちゃいないさ」

黒い翼の少年は困ったように尋ねる。

自分は魔王と呼ばれる存在ではあるが、進んで人に危害を加えたこととはない。

魔物の多くは人を襲うが自分が指示したワケでもないし、彼等の上に立っているわけでもない。

ただ単に…強いから魔王と呼ばれるだけだ。

「そう……。そんなのはどうでもいいの。ただアンタを倒せば私たちは元の世界へ帰れるのよ」

少女は冷めた声で話す。

「別に元の世界がそんなに恋しいワケでもないけどさ……いきなりこんなトコに呼ばれて敵を倒せ。なんて言われても困るのよ。だから、アンタを倒して帰るの！」

言い終えるのと同時に少女の手から黒い剣が消え、代わりに数多の氷の槍が出現する。

少女がこれまで頼ってきた最大の武器である魔法。

少女は誰よりも多い自分の魔力を誰よりもうまく使う事ができた。

「まったく……詠唱も無しによくもそんなっ……!!」

魔王はその翼を広げ高く跳躍する。

「逃がさないっ!!」

氷槍は魔王の跳躍より一瞬遅く着弾したものの新しい槍が次々産み出され、マシンガンのように空にいる魔王へと打ち出される。

魔王とて翼を羽ばたかせ高速で軌道をかえるが全ては避けきれなかった。

「痛っ……だが……やられっぱなしってわけにもいかないのさ!!」

魔力では少女は魔王を上回るが、魔法での戦いとなれば経験の差が出る。

「火竜の咆哮よ、打ち貫け!!」

となれば少女に大きな魔力を使う時間を与えず小さな魔法では防げない攻撃をすればいい。

「……っ!!」

魔王の放った魔法は、まるで閃光のように瞬く間に氷槍を薙払い少

女を襲う。

「避けても防御しても巻き起こる熱風からは逃げられないさ！少し痛いかもしれないが、降りかかる火の粉くらいは払わせて貰う！」

魔王は以前にも勇者を名乗る者達に襲撃される事はあったが、皆、この魔法により撃退された。

直撃しなければ殺すほどの威力はないが、熱風に巻き込まれるだけでも戦闘続行は難しい為、魔王も好んで使っていた。

しかし少女は変わらず冷たい声でささやく。

「うるさいな……この程度で」

少女が片手を振り上げると、そこには先ほど消えた黒い剣がまた握られていた。

「嘘だろう……」

魔王は目の前で起こった事を信じられずにいた。

自分の放った魔法は黒い剣に斬られた瞬間、消滅した。

「やれやれ……どこまで厄介な剣なんだよ」

黒い剣に魔法を消されたのは始めてではない。むしろ、これまで放った魔法のほとんどは消されていた。

しかし、それはなんらかの力による相殺だと思ったがどうやら違らしい。

自分の魔法は熱風すら起こさず消滅したのだから。

「幾ら攻撃しても無駄なのよ。だからさ……諦めて」

少女の武器が魔法ならば、黒い剣は武器の形をとってこそいるが、それは何にも勝る盾であった。

魔法を連発している為、少女の消耗は激しいものの、それは魔王とて同じ。

しかし、少女は全て魔王の攻撃は消滅させ、魔王は決して少ないとは言えないダメージを負っていた。

(やばいなあ……このままじゃジリ貧だ……)

この分では恐らく本気で殺すつもりで打った魔法も消滅させられるだろう。

「ケーファー！ やつとみつけた！」

さて、どうするか……次の手を考えていると頭上から慌てた声が聞こえた。

「ルーシー！」

少女と魔王が上を見上げるとそこには魔王とは正反対の色の翼を持つ少女がいた。

「ケーファー！ 大変だよ！ 早く逃げるよ！」

「逃げるのは賛成だが、そんなに慌ててどうしたんだ……って熱い！？」

ケーファーと呼ばれた魔王とルーシーと呼ばれた……どうみても天使の少女が話していると魔王に火球がぶちあたる。

「ちょっと！アナタ、ケーファーに何をするの！」

火球をぶつけた犯人にルーシーが怒鳴るが、犯人である少女はまったく動じない。

「逃がすワケないでしょ。私はソイツを殺して帰るの」

少女の冷たい声に逆にルーシーが怯んだ。

「ケーファー。この人怖い……」

涙目になりながら少女を見つめるルーシー。

「あー……うん。僕も怖い。殺されかけてるし。反則的な物もってるし……」

ケーファーとしては命掛けの為、本気で怖い。

しかしルーシーがいるなら逃げるのは簡単な為、安堵していた。

「ん……そういえばルーシー。逃げるってどうしたんだい？」

「そうだよ！逃げるよ、ケーファー！ここで大暴れしてるせいで魔獣の大群が興奮して突っ込んできてるんだよ！」

言うが早いかルーシーが手をかざすと光のゲートが現れケーファアを引っ張り込む。

「魔獣か……また厄介な……。勇者！君も逃げるんだ！魔獣は僕らと違って知性がない。問答無用で襲われるよ！」

「もう、ケーファア！自分の命を狙ってきた相手なんて放っておいていくの！」

二人のやりとりを見て暫し啞然としていた少女だが、いよいよ逃げる二人を見て怒りが込み上げてくる。

「そもそも私は逃げる事を許可なんてしていない……！」

火や氷では間に合わない。風でさえ怪しい。恐らくはゲートを潜られたら逃げられる！

少女の両手から発せられたのは雷。

光の魔法の次に早い雷撃はゲートを潜ろうとする二人をとてつもない早さで強襲する。

「下がって、ケーファア。」

先にケーファアをゲートに押し込み前に出たルーシーを雷は貫き、トラックが衝突したような轟音が耳をつんざく……が、ルーシーは平気な顔でケーファアをゲートに押し込み終わる。

「……っ！？効いてないの……？」

今度ばかりは少女が驚きの声をあげるが、ルーシーからしたらさも

当然の事だ。

「空に住む天使に雷が効くわけないでしょ！バイバイ。今度ケーフアーをいじめたら許さないんだから！」

「ちよつと、待ちなさ……あぁ、もうつ」

ルーシーは言いたいことだけ言うと少女には目もくれずゲートに消えて行った。

少女は追いかけようかとも思ったが、ゲートがそのまま存在してるはずもなく消え去るのを見て諦めた。

(……帰るチャンスだったのにな)

あの天使と一緒にいる時はすぐに逃げられるだろう。
自分は絶好の好機を逃がしたのかもしれない。

(ま……帰っても待つてる人なんかいないか)

暗いことを考え少し泣きそうになる。

駄目、泣いてる場合じゃない。

二人の会話が確かならここには魔獣が押し寄せてくる。

普段ならいざしらず、最近は魔王に会うために無茶をしすぎた。
そのつえ、魔王との戦闘でも魔法を乱発している。

今、魔獣の大群と戦うのは分が悪い。

「南に街があったはず。そこまで急がなきゃ」

今は自分の決めた目標。

元の世界に帰る為に少女は走り出す。

一話 1と魔王の決戦（後書き）

誤字脱字あれば指摘して頂けたら嬉しいです。

二話 1の一人旅のエンディング(前書き)

最初からシリアスになっています…。

二話 1の一人旅のエンディング

小さな村ならともかく街ともなればそこそこ多くの魔物に攻められたところで簡単に落とされはしない。

特に今回は「傾国の魔女」の異名を持つ勇者が近辺で魔王に決戦を挑む為に旅立ったばかりだ。

勇者が勝つにしろ負けるにしろ魔王がこの街に攻めてくる事も予想されていた。

勇者が勝ち逃げ込んできたならまだしも、勇者が負け、それでも攻めてきた時は街にとって死活問題である。

その為、万全の用意を持ち備えていた。

現に街にオークの大軍が現れたが門を閉じ自警団が足止めし矢を降らせオークを圧倒していた。

なのに……。

「何……これ……」

少女が急ぎ帰った場所は、すでに街ではなくなっている。

少女は知るよしもないが、自警団がオーク相手に奮闘してる頃、街の中はすでに血にまみれていた。

街を囲う壁を乗り越えられたか壁に穴が空いていたかはわからない。

街の中は多数のウェアウルフが走り住人を自らの食事に変え回っていた。

自警団がウェアウルフに気付くのは後方の弓手が襲われてからと余りにも遅すぎた。

前は人とは比べ物にならない力を持つオーク。

後ろは鋭い牙爪と圧倒的なスピードを持つウェアウルフに襲われ瞬く間に自警団は壊滅し街は廃虚に成り果てた。

少女が来てから数時間、日が沈んだ廃虚にある人影は少女のものだけになっている。

「雷、雷、飛べ！」

私は独自の詠唱を唱え目の前の敵を穿つ。

二つの雷は狙い通り狼を貫通していった。

「動きが早すぎる……！」

狼みたいな魔物、名前はなんだっけ。

さっきから何匹か倒してるけどまだ私を囲んでいるみたい。

普段ならこの程度なんてことないけど今はまずい。

魔力を使いすぎた……。無詠唱で打てばすぐに尽きるだろうし詠唱してたら発動が遅い。

一度に飛びかかられたら対応できない。

体力はあまりある方じゃないのに……さっきから走ってばかり……でも動きを止めたらやられるっ。

私は帰るんだ！元の世界にっ！

多分、私はそんなに幸せな人生を歩んではない。
幼い頃、父さんが蒸発して後からわかった借金が家に残った。
中学生の頃、母さんは他の男をつくって出ていった。

毎月、最低限にも満たないお金が振り込まれてくる。
けど、このお金がなければ暮らしていけないのも本当。すごく情けない気分。

高校に入って必死に勉強してアルバイトもはじめた。

まともな生活ができるようになったし、成績も結構良い方。

大学にいったって働いて、誰かを好きになって、そんな普通の幸せが欲しかった。

「なのに、なんなの！魔王を倒せとか……！」

誰に言うワケでもなく愚痴を漏らす。

こっちにきてからも弱音はなるべく吐かなかったのに大分疲れてるみたいだ。

走るのもそろそろ限界。

魔法なんて力は手に入れても体はただの高校生なんだ。

辺りを見回しても身を隠せそうな建物は何も無い。

はほとんどが半壊して住処としての役割を果たせない残骸ばかりだ。

それでも数十分の間必死に駆け回り疲れはてた少女は、残骸のど

ここに逃げ込むしかなかった。

少し遠いけど、あの大きな建物なら中に無事な場所、あるかもしれない……！

少女は僅かな希望にかけて元は劇場であった建物に走っていった。

「氷、巨槍、砕！行け！」

漢字…この世界ではなく元の世界の言語での詠唱。

魔法は魔力とイメージさえあれば発動する為、漢字での詠唱は従来
の詠唱を早さで遙かに凌駕していた。

私が思い描いた通りに巨大な氷槍は砕けちりウエアウルフに襲いかかる。

広い街中では雷の魔法以外では捉えきれなかったが屋内ならば逃げ場所はない。

あと……何匹いるんだろう……。

魔力がなくなつたら魔剣に頼るしかない……それでも私はこんなトコで死にたくない！

「ガールルルル……」

「ホント、きりがないわ……風、風……」

次々と通路にはウエアウルフが現れる。本当にもう、キりがない！

近付かれる前になるべく倒す！

数を減らして隠れて助けを待つしかない！

「切り裂け……きゃっ!?!」

私が風の魔法を放とうとした瞬間、天井が崩れ落ち瓦礫と共に黒い影が襲いかかって来た。

「狼!? 天井から来るなんて……!」

手元に黒い剣を召喚しウエアウルフの爪を受け止める。

「きゃあ! 痛っ……」

剣で防御したまではない。

しかし少女の筋力では到底受け止める事はできるはずがなく私は吹っ飛ばされ壁に叩きつけられる。

「ガールルル！」

痛みに意識を持っていかれそうになったが唸り声でそんな暇はないと気づく。

痛いっ。けど動かなきゃ食べられる！

「はああ！」

飛びかかってきたウエアウルフの口に魔剣を突き立てるがガキン！と高い音がなり歯に防がれてしまう。ウエアウルフはあまり力の強い魔獣ではないが、それでも少女に受け止めるだけの力はなく、あっさりと押し倒されてしまう。

「くっ……ああああ！！！」

右足に激痛が走る。自分では見えないがウエアウルフに踏まれ爪が食い込んでいうんだろう。

日本で暮らしてきた私には未知の痛み。でも生き残りたいと思う気持ちは痛みをも超え空中に魔剣を数本召喚する。

「魔女だからって……迂闊に近寄らない事ね」

召喚した魔剣は重力に従いただ落下する。

「ギャン！」

落下先は私の真上。

細かいコントロールは効かないけど自分の上にくらゐは制御できる。

必然、落下した剣は私に覆い被さっていたウェアウルフを貫いた。

もちろん自身も魔剣は貫いていたが自分の魔力で造られた剣は自分を傷つけない。

「いい加減……退きなさい！」

ウェアウルフの死体を左足で蹴飛ばす。

右足はほとんど動かない……。

……痛いはずよ。すごい血。

魔獣相手に接近された最大の危機は乗り切った。

けど、それこそが油断に繋がった。

気づくと目の前には拳大の火球が飛んできていた。

「きゃ……かはっ！」

熱い！喉が痛い……声が……でない……？

まずい、慌てて魔力をぶつけたから直撃は免れたけど喉をやられた……！？

さっき天井から襲われる少し前、風の魔法をウェアウルフに放とうとしていた。

そのウェアウルフ……最大の危機を乗り切ったとここで忘れていた。

通路の向こう側からはまだ口元に少し火を吹いたままのウェアウルフが走ってきている。

溜め時間が長い為、ウェアウルフは滅多に火球を吐かない。しかしその威力は侮れない。

声が出せなきゃ詠唱はできない……でも詠唱しなきゃ多分この一発で魔力は尽きる。

何もしなきゃやられるんだっ。まずは目の前の狼を倒す！吹き飛んで！

爆音とともにウェアウルフを吹き飛ばす。威力からしてまず動けないと思うけど……。

炎の高位魔法である爆発。さっき魔王が使ってたものを真似てみた

がうまくいったかな。

もう……魔力空っぽ……。

痛いし熱い。

助け……来るかな？

「おい、こっちだあ！すげー音がしたぞ！」

通路の角から男が現れる。

一瞬期待したがどうにもおかしい。

救助がくるには早すぎるし、その男の人の風貌は騎士には見えない。

「お、生き残りか？可愛いじゃねーか」

「おいおい、ロリコンか、テメー？ま、いい。ついでにコイツも持つていこう。」

次々と男達が現れる。

どう見ても盗賊の集団に見える。

後から知った事だけど事実、彼らは襲撃された街から物資を盗み出す火事場泥棒だった。

「犬避けの香が切れる前に逃げるぞ。その女には首輪をつけておけ」

リーダーらしき男の人が部下に首輪を投げ渡す。

その首輪には私も見覚えがある。非合法的な奴隷達が付けられていたものだ……。

「ちょっとデカイ帽子取らせてもらっせ。お？黒髪…お嬢ちゃん勇者の子孫か！こりゃ高く売れそうだ」

首輪を付けられた私は虚ろな思考で考える。

声……全然でないな……。右足の感覚もない……。

私……どうなるんだろう……。

声もです歩けもしない。

そんな女の子の奴隷がどう扱われるかなんてあまり考えたくなかった。

怪我や疲労、それに緊張の糸が切れたことにより私は意識を手放した。最後に叶わなかった願いを思い出して。

誰かと一緒に……幸せになりたかったな。

二話 1の一人旅のエンディング(後書き)

次の話から本編の主人公100番目の勇者の話になります。

三話 100人目の勇者（前書き）

やっと本編です。

拙い文章ですが、楽しんで頂けたら嬉しいです。

三話 100人目の勇者

「リユート！こつちだ！すげえよ、予想通りじゃねえか！」

金色の髪の若い青年が興奮したように話しかけてくる。

「ああ、このあたりは魔物が出るようになって数十年。絶対にあると思ったよ」

予想通りの成果にオレ自身も喜びを隠せず口元が上がる。

オレの名前はリユート。

武具の材料を扱う商人だ。

ただしオレの扱う材料は供給が余りにも少ない。

魔法金属や魔獣の一部等、普通のギルドを組んだ冒険者でさえも滅多に手に出来ない物を扱っている。

正直、売れない事も多いけど単価は高い。

他に変わった所と言えば……髪の色が灰色だつて事くらいか。この世界ではわりと珍しい。

「さて、ここまで案内したんだ。契約通り、オレの見つけた物は持てるだけ独占させてもらうよ」

「ああ、好きなだけ持って行ってくれ！これだけのミスリル原石の山は初めて見たよ……」

二人のいる周囲の壁はつつすらと輝いている。

ミスリルは知名度こそ高いが市場に出回る事は少ない。年に二度、王国の管理するミスリル鉱山に発掘隊が組まれるが、半数が参加税として王国に接收される上、取れる量もそれほど多くはない。

冒険者達が稀に鉱脈を見つけるが魔獣の嫌がる魔力を放出し続けるミスリルは冒険者達に大人気な為、ほとんど自分達の装備になるだけだ。

そんな中、お得意様からの依頼にオレは旧鉱山に目をつけた。

昔は鉱石や少量のミスリルが取れたらしいが数十年前の魔王との戦争により魔物や魔獣が住み着いてしまい閉鎖された旧セラ鉱山。

商人であれば普通は近寄らない魔物の巣窟だが、生憎オレは騎士の家系の生まれだった。

小さい頃より人や魔物と戦う訓練を積み剣を学んだオレは自身の強さを利用して冒険者しか立ち入らない危険地域に自ら商品を仕入れに行く。

今回は念のため商人仲間を声をかけ十二人程のパーティーでミスリルを探しにきた。

結果は上々。近年希に見るミスリルを発見できた。

さて、これだけのミスリル鉱山なら依頼品もあると思うんだが。

更に奥に進んでいると後ろから屈強な体をした白髪の男に話しかけてくる。

「よお、リユート！お前強いなあ！どうだ？うちのギルド入らないか？」

一緒にきた十二人のうち自分以外の商人は三名。

後はギルドから雇った傭兵である。彼はそのギルドのリーダーであるエンブス。

オレは歩きながらエンブスに答える。

「ありがたい話だがやめとくよ。気楽に商人やってる方がオレには合ってる」

お前がいれば心強いんだがなあ。とエンブスは嘆く。

エンブスのギルドは商人三人がお金を出し合い雇っただけあってかなりの大手である。

そんな中でも選りすぐりの八人にきて貰ったようだ。

その強さはかなりのもので途中遭遇した魔物を見事な連携で圧倒するほどだった。

「一人で魔物の群れに突っ込んだ時は肝を冷やしたが、慌てて助けようとしたら一瞬で五体もいる魔物を倒してるんだもんなあ。まったく商人の技じゃねえぜ」

そんなエンブスにこうまで褒められるのは正直嬉しい。

魔法が使えないうえに商人と聞き前情報で強いとは聞いていたが全くアテにしていなかった青年が剣だけで自分達八人と同じ様な戦果をあげている姿に戦慄を隠せなかった。しかもリユートの使う剣技にエンブスは見覚えがあった。

魔法が使えないうえに商人と言われたら大体の人は戦力としてアテにはしない。けれど、オレは剣だけで他の人に勝るとも劣らない成果を挙げてる自信はある。

何故、騎士のオレはそこまで剣を扱えるか？それには一つの理由がある。

隠すつもりもないけど、自分から話す事でもない。が、エンブスはその理由に気づいたみたいで小声になって耳打ちをしてくる。

「なあ、話したくなかったらいいんだけどよ……お前の技、王宮剣術だろ？」

「あー、バレたか。いやな、騎士の家系なんだよ、うち」

「いや、おかしいだろ。なんで商人やってるんだ!？」

「金が欲しかったからさ!」

自分でも最高の笑顔で言ったと思う。流石のエンブスも絶句している。

「ま、商人になるって言ったら勘当されてな。今じゃ名字無しの商

人さ」

王宮剣術を使う騎士の家系という事はそこその規模のだ。実際にウチはかなり有名な家系である。

その家名を捨ててまで商人となったオレを大体の人は理解し難いみたいだ。

「お、エンブス！これだよ、オレの本命は！」

しばらく歩いただろうか。その場所には明らかに他の場所よりも輝きを放つ鉱石があった。

「こ、これは……まさかミスリルの結晶？天然の結晶を見るのは初めてだ……」

ミスリルは大体は鉱物が魔力を帯びて変化する金属だ。

中にはミスリル原石自体が結合し大量の魔力を浴びて天然の結晶ができる。

普通のミスリルよりも硬度、魔力、美しさを大きく上回るソレは破格の値がつくが金があれば買えるものでもない。

ミスリルは探せばまだあるが結晶ともなると市場は愚か発見されることですら珍しい。

「とある貴族様が娘への誕生日にこれでアクセサリを作りたいんだとさ」

全く、お偉いさんの考えることはすごい。

でも、一欠片でも見つければいいと思ったが……わりとあるな。

袋に入りきらなさそうだ。

「よし、オレはこれを袋に入るだけ貰うよ。後はエンブス達と商人で適当にやってくれ」

「おい！？余った結晶とか貰っていいのか！？」

エンブスが驚いた声をあげるが一人ではそんな大量には持てない。

「構わないよ。昔はミスリルが採掘されてたらしいし魔獣が出るなら魔力も充満してる。結晶があるとは思ってたが、これだけの量があるとは思わなかったからな。大儲けさ」

ミスリルの結晶は巨大な氷柱のように天井から生えている。

剣にすれば10本は作れるだろう。

これを一人で持ち帰るのは無茶な話だ。

オレはミスリルの結晶を腰にある剣を抜き切り落とす。

「おいおい……今気づいたが、その剣もミスリルの結晶じゃねえのか？」

オレの腰には3本の剣が架かっているがいずれもミスリルの結晶で作られた剣だ。

「頑丈だし魔物相手に良く効くからな！。ま、今回一本折れちまつただけ」

耐久性からミスリル結晶剣を好んで使うが、それでもたまたま折れる。その為、数本持ち歩いている。

実戦で武器無しなんて想像したくもないからな。

「なんて贅沢な装備だよ……」

エンブスが呆れてため息をつく。

商会に所属こそしているが一人で危険地域に行き高額な商品を仕入れるオレはギルドやギルドから物資を仕入れる商人とは桁違いに稼いでいる。

稼がなければならなかった昔はともかく今は取って来たものを自分で使える上、今回みたいなレアアイテムの依頼は高額を一人で受け取れる為、生き残る為に装備やアイテムへの投資は惜しまない。

「ほら、余りだ。商人連中と分けるなり隠して持ち帰るなり好きにしな」

袋には7割ほどの結晶を積み終わった。残りの結晶をエンブスに投げ渡す。

「おっと！ふむ……商人と相談させてもらおう。これだけのものをこっそり持ち帰る度胸、オレには……リユート……」

エンブスが慌てて叫ぶ。

「リユート……魔獣だ」

エンブスの視線の先には頭が三つあり巨大な体躯を持つ犬のような魔獣がいた。

向こうもこちらに気づいているようだが距離があるため急に襲いか

かってくるような事はなかった。

「……食い止める。他の人たちを呼んできてくれ」

リユートの声にエンブスは頷くと来た道を走って戻っていった。

魔物と魔獣は元は同じ魔力を帯びて生物である。

魔物にもいろいろいるが強大な力を持ち人類に大して害を成す魔物は魔獣と呼ばれる。

ケルベロス……。目の前にいるのはとても特徴的でわかりやすく強力な魔獣だ

リユートはケルベロスより凶悪な魔物を倒して事もあるが今回は相性が悪い。

ケルベロスは接近戦も強いが何より三つの頭から繰り出されるブレスが厄介な魔物だ。

援護もなく一本道の洞窟内では近寄れもしないだろう。

ゆらりと右側の首が持ち上がり口を開ける。

ズドオン！と大きな音とともにケルベロスの口からは電撃が放たれ咄嗟にガードしたりユートの腕を貫く。

「っ！びっくりしたな……龍毛で編まれた籠手じゃなきゃしばらく動かなくなってたぞ」

右腕をぶらぶらさせる。少し痺れたがオレの防具は軽くて魔力をほ

とんど通さないドラゴンの毛皮で編まれた物で魔獣であろうと魔法でダメージを与えるのは難しい。

だけど遠距離から一方的に好き放題されたら持たないかもな……。

洞窟内を見渡すと来たときには気がつかなかった横道があった。

ケルベロスを見ると今度は真ん中の頭の口が空いている。

「それはまずいー!!」

慌てて横道に逃げ込むと入口付近を炎の波が通り過ぎてく。

「ハア……狭いとこの戦いじゃ強えーなあ…ケルベロス」

横道の先は小部屋になっていた。

オレはため息をついたまま立ち上がると、ふと変な物があるのに気づく

「これは……召喚ゲート？」

昔、王宮で見たことがある。

数十年に一度、魔王が現れた時に異世界の勇者を召喚する為の魔術門。

え？異世界から勇者を呼ぶ門がなんであんの??

頭が追いつかない。自分が勇者？いやいや、ここは異世界じゃない。あるはずがない。行き先は恐らく王宮の儀式場だろう。

「ガールルル」

考えていたらいつのまにか入口にケルベロスが立っている。

……真ん中の頭が口をあけて。

「炎はまずいつて！？ああ、もう、とりあえず考えるのは後で逃げる！」

せつかくケルベロスの方から接近して倒すチャンスだったのに！不意をつかれて召喚ゲートへ飛び込んで行った。

行き先は恐らく王宮！よくわからないが焼かれるよりマシだ！

体が浮遊感に包まれ視界が真っ白に染まる。

ああ、召喚される人ってこんな風に呼ばれるのか。とか思っている
と急に重力がのし掛かる。

「痛っ！」

体制を整えきれず前のめりに転ぶと目の前に手が差しされた。

『来てくださってありがとうございますとついでに。私は門を開く者、セシアと申します』

手を取り顔をあげるとそこには……召喚者であろう女性に、第一王女レーナ様、多数の近衛騎士……それに驚きの表情を浮かべる近衛騎士団長である兄の姿があった。

『貴方は100人目の勇者として召喚させて頂きました。私たちは貴方を歓迎します』

召喚者はすごく綺麗な笑顔を浮かべてそんな事を言っていた。

三話 100人目の勇者（後書き）

ミスリルや魔獣の設定はこの小説の中の物です。とは言えよくあるような設定ですが。

誤字脱字あれば指摘して下さいると嬉しいです。

四話 100と近衛騎士の模擬戦（前書き）

四話目です。コメディメインで行くつもりですがコメディに入れる
までは少し時間がかかりそうです。

最初の方は話は短い期間で投稿していこうと思います。
どうぞ、よろしく願います。

四話 100と近衛騎士の模擬戦

正直に言おう。訳がわからない。

勇者召喚の儀が一年ほど前から行われてるのは、王国に住む者なら誰でも知っている。

だがしかし、オレはこの世界の住人だ。

異世界から呼ぶんじゃないの？これって。

『勇者よ。この会話は魔法を用いて私が貴方に送っている思念です。残念ながら私達の言葉は違う為、貴方の言葉は私にはわかりません……。しかし勇者よ、私達は貴方を理解したい。ですからまずは名前を教えてくださいませんか？』

目の前にいる美人が微笑む。

ああ、頭に直接響くように聞こえると思ったら念話か、これ。

「セシア様、オレはリユートと申します。勇者ではなく……しがない商人ですが……」

『ありがとうございます、勇者リユート。しかし貴方の言葉は私達の知らない言葉なのです。大変だとは思いますがこれから王宮で言葉を学んで……て、え？』

「え？あれ……？言葉が……わかるのですか？」

「えっと、はい。南西のロファン地方に家を持つ商人です」

セシアと名乗った女性が固まる。

これまで99人の勇者を召喚してきてそれはもう色々あったんだろ
う。

打倒魔王に燃える者、帰りたいと言う者、口説いてくる者、信じな
い者……予想できるのは、こんな所か？つまり、どんな反応をされ
るかわからない。

その為、近衛騎士団を部屋に入れ召喚を行っていると言った事があ
る。

しかし歴史を紐解いてもこの世界の者を召喚した話なんて聞いた事
がない。

「ですが、リユート！貴方のその灰色の髪はっ」

この世界の髪の色は基本的に白か金色である。オレの灰色は比較的
珍しい。

しかし召喚された勇者は様々な色の髪をしている。

そして少ないがこの世界の住人でも例外的に違う髪を持つ人もいた。

「セシア様。そいつは、先祖返りなんです」

金色の鮮やかな髪的青年がセシアさんの傍に立つ。

昔、勇者の血が入った家系は希にその勇者の髪色の子供が生まれる事がある。

先祖返りを起こした赤ん坊は将来その勇者の力を引き継ぐ事が多い為、祝福される。

「我が騎士の家系の血を持つ……私の弟です、間違いありません」

近衛騎士団長を勤めるオレの兄、コガ。コガ兄さんが言えばセシアさんもオレが異世界の住人ではないと認めるしなくなるだろう。

「そうですか……わかりました。下がちなさい、コガ団長」

自分とは違い騎士の礼節を重んじるコガ兄さんが場をわきまえず口を挟むのは珍しい。

「兄さん……さんきゅ」

セシアさんに一礼して下がろうとするコガにオレが言つとコガは満面の笑みでリユートの肩に手を置く。

「父上は怒っているが……母さんもオレも妹もお前には感謝してる。気にするな」

オレが商人になったのは家の再興の為である。

騎士の家系であるフェトム家は金銭に疎くどんどん借金を積み重ねていった。

それを返済したのがオレだ。
家名を捨てる事に抵抗はなかったが兄と妹と離れたのは少し寂しかった。

ま、妹はたまに父さんに内緒でオレの家族のところにくるけどな。

ただ兄さんとは家を出て以来ロクに話していなかった。

忙しかったのもあるが騎士の道を閉ざした事により怒っているのではないかと怖かったと言うのもある。

「はは、ありがとう、兄さん。気になってた事が一つ解消されたよん？とよくわからない顔をして下がるコガ兄さん。回りを見ると騎士団もセシアもどうしたものかと首を傾げている。ただ一人……第一王女レーナが不思議そうな顔をしていた。

「なあ、セシア」

王女に呼ばれセシアさんは咄嗟に膝をつく。
オレも一応ゆっくりとだが膝をついておく。

自分は商人としての力はそこそこあるが相手は王族。

わざわざ無礼を働く理由はない。

白と言うよりは白銀というほうがしっくりとくる美しい長い髪。

まだ少女としての顔立ちが強いが将来は母親似の美人になる事が容易く予想できる。

「世界は数多くあるのだろうか？ たまたま今まで違う世界であっただけでこの世界から勇者が選定されてもおかしくないのではないか？」

この王女。可愛い顔してとんでもないこと言いやがる。オレはただの商人だ。

「しかしレーナ様、民を戦わせるわけには……」

「召喚された勇者とて人の子。私達と何の違いがある？」

いえ、あの、それは……と口ごもるセシアさん。

美人で仕事できそうに見えたがこの人想定外の事に弱いな。

「ふむ、コガよ。召喚された勇者には勇者特有の能力が付くのであったな？」

なんかすごく嫌な予感がする。何さ、能力って。

召喚される前とされた後で変わったトコなんてわからないんですが。

「よし、ならばリユート。近衛の一人と勝負をしてくれ」

「な、レーナ様！いくら勇者とはいえ行きなり近衛に勝てるはずありません！」

セシアさんがレーナ様に詰め寄る。

兄さんのほうを見てみたが余り気にしていないようだ。

まあ、兄さんはオレの剣の腕はある程度知ってるもんな。

「リユートを追い詰め能力を見るだけだ。何もなければわからぬが能力さえあれば勇者だと言っ証拠になるだろう?。」

結局セシアさんはレーナ様に言いくるめられオレは訓練所につれてこられた。

なんか流されてるなー、オレ。

オレの前には温和な笑みを浮かべた騎士が一人。
王女の命令故に逆らえはしないが本気でやるつもりもないようだ。
それも当然でよね。騎士の中でも王国最強である近衛騎士と商人で
は勝負になるはずがないし。

「災難だね。まあ、剣の稽古くらいに思ってくれ」

「あはは、助かります」

わざわざ勝つ必要もない。適当にやるか。等と考えているとレー
ナ様がまたとんでもない事を言い出す。

「よし、勝った方には私がハグをしてやろう」

一瞬固まる近衛騎士。というかオレ以外の全員。

「よし、リユート。命をかけてかかってこい」

ちよ、えええ！？

いきなり目の前の騎士から殺気が溢れ出す。先程までの温和な雰囲気
などどこにもない。

向こうではセシアさんがレーナ様に、レーナ様！？何を言って……
等と騒いでいる。

兄さんは頭を押さえている……ああ、あの王女はいつもこうなのか。
と納得するリユート。

「困惑する気持ちはわかる。しかし世界と言うのは理不尽なものな

んだ」

悲しそうな顔をして語る近衛騎士。

お前そんなに王女の抱擁が欲しいか。

やる気……もとい殺る気満々で構えてる近衛騎士。

仕方ないからオレも刃を引いた模擬剣を構える。

目の前の近衛騎士とまったく同じ構えを。

「ほう、これは王宮剣術の構えだよ、見よう見まねにしては堂にいつてるじゃないか」

目の前の近衛騎士の雰囲気少し柔らかいものに戻る。

向こうでは兄さんがニヤニヤしてるのが見なくてもわかる。

王宮とは堅苦しい場所かと思っていたがどうにもそうでないようだ。

「よし、ではこの試合、この私、王女レーナが見届ける！」

どうやらセシアさんとのごたごたが終わったようだ。いや終わっていない、まだ横で騒いでる！？スルースキル高いな王女……。

「双方存分に力を奮ってくれ！始めっ」

王女の合図と共に近衛騎士が距離を詰めてくる。

商人なんて警戒する必要もないって事かっ。

そのまま繰り出される突きを避ける。

近衛騎士の少し驚いた顔が心地いい。

近衛騎士がそのまま横に剣を薙いでくるが、それも避けると素早く剣を引いた。

ん……雰囲気が変わったな。ま、近衛騎士がこの程度って事もないだろう。

そして次の瞬間、近衛騎士の怒涛の連撃が打ち込まれてくる。

斬りからの払い。切り返して突き。薙ぎ払い袈裟に斬り振り上げ全力で振り下ろす。

しかしその全てを軽々と避ける。

普段から人以上の魔物や魔獣を相手に戦っているオレに幾ら近衛騎士と言えどそうそう当てれるものではない。

剣の腕だけで言うなら兄をも上回る自信がある。

うわー、本気で殺しにかかってきてるよ、この人。
ふう、適当にやったら怪我するな。

仕方ない……とりあえず反撃の準備をしよう。

ただの振り下ろし。

しかしそれは近衛騎士と言えど軽々しく受け止めれる一撃ではない。

ガキーン！

訓練場に高い音が響く。

剣と剣が打ち合った音ではあったが近衛騎士は自分の剣を落としていた。

予想以上の成果に口元が思わず釣り上がる。

オレの王宮剣術は基礎こそ同じだが中身は我流が多くを締める。

人相手の技は魔物通じない事も多いからだ。

剣を打ち合い自分に有利な状況を作り上げて行く詰め将棋のような王宮剣術に対してオレの剣技は決して相手の攻撃に触れず一方的に強打を打ち込む。

魔獣クラスになると力では絶対に敵わない為、打ち合えないのだ。

慌てて距離をとった近衛騎士は一瞬迷ってようだが自身の最大の武器を使ってくる。

「炎よ、その力にて我が敵を討て！」

近衛騎士の手元に小さな火球が出現する。

近衛騎士は全員宮殿の加護を受け神聖魔法を行使する。
これこそが彼らを王国最強と言わせている武器である。

おいおい、マジかよ。ていうかマジでやってんじゃねーよ。

オレの鎧は魔力は通さないが防いだ後に拡散する熱まではどうにもできない。

その為、鎧で守られてない部分が焼かれてしまう。

仕方ない……本気で終わらせるか。

「悪いけど終わらせるよ。ファイアボール！」

近衛騎士の手元から火球が放たれる。

けど、慣れた物だ。何も魔法は人だけの物じゃない。

この程度の魔法、ウェアウルフでも使ってくるさ！

オレは体制を低くして飛び込み近衛騎士の魔法を掻い潜り間を高速で詰める。

「な、爆発しろ！」

後ろで先程の火球が爆発する。だがタイミングが遅い。背中が多少焼けたがその程度だ。

「く、まだまだ！」

距離を詰められた近衛騎士は懐から短刀をとりだす……って、ちょっと待て。

おいおい、それ本物じゃねーか。

まあ、大した問題ではない。

突き出される短刀を避け籠手を切り上げる。

鉄製の防具に守られてるとは言えど剣で殴打されればそつとつな痛みを伴う。

近衛騎士はあっさりと短刀を落とした。

後は簡単だ。

胸当てをおもいつき蹴り転ばせて喉に剣を突き当てる。

魔獣を相手に戦う事に比べれば簡単すぎる戦いだっただ。

「ま、参った……」

近衛騎士から降参の声があがるが誰も動けない。

兄でさえも固まっている。

リユートの才は知っていたがまさかここまで強くなっているとは思わなかったのだ。

そんな中最初に動いたのはレーナ様だった。

「リユート！」

レーナ様はオレに駆け寄ると……思いきり抱きついてきた。

「おっと、レーナ様、これが賞品のハグですか？」

おどけて言うとレーナ様は満面の笑顔でオレに囁く。

「リユート相手にならいつでもしてやろう。なんだ？今の強さは！
剣術は！最強を誇る王国近衛騎士が形無しではないか！」

非常に嬉しそうなレーナ様。

まあ、オレとしても可愛い女の子にこう言って貰えるのは嬉しかった、が…

「伝説の勇者パーティーの魔剣士アウルを彷彿させる圧倒的な強さ……！リユートこそが真の勇者だ！今すぐ父上との謁見の準備をするから少し待っていてくれ！」

レーナ様は勝手にまくし立てると嬉しそうに走り訓練場から出ていった。

「いや、オレはただの商人……どうしてこうなった!？」

四話 100と近衛騎士の模擬戦（後書き）

一応5話までは書きあがってるので少し時間を置いて投稿していいかなと思います。

メインヒロイン再登場まではペース維持したいなあ…と思ってます。

五話 100の商人としての武器

「父上、この方こそ今代の真の勇者……リユートです！」

レーナ様が嬉しそうに声を高らかにあげる。

さて、どうしてオレは王の前になんて跪いているのだろう。あれから三十分程度たったたであるうか。よく状況を飲み込めないままオレは玉座の前にいる。

「しかし、レーナよ。この者は我が国の住民と聞いたが……？」

王様も困っている。異世界の特別な力を持つ者呼び勇者とし魔王を倒す協力を得る。

それがこの国が何百年も行ってきた慣習であり兵士以外の一般人を魔王相手に戦わせた事は記録にはない。

「父上、今の勇者で魔王を倒せると思っっているのですか？召還されたばかりとは言え我が国の近衛騎士に勝ったのはリユート以外では只一人ではないですか！」

ほう、オレ以外にも近衛騎士に勝ったヤツがいるのか。何だかんだ言ってもこの国最強の騎士団、召還されたばかりで勝てと言つのは酷であろう。

「それにリユートは召還されてすぐ勇者としての能力を発揮しております！」

おお、と謁見の間に居る人全てが歓声をあげる。

あ、よく見たらニーズヘッグ公爵もいるじゃないか。

ニーズヘッグ公爵は国の中でも並ぶほどのいない権力を持つ貴族。ちなみにオレのお得意様である。

今回のミスリルの結晶も公爵の依頼だった。

ふむ……これなら面倒くさい事は回避できるかもな。

周りを見てみると他にも何人がオレの顧客がいる。わざわざ王女が集めたのか？

て、ちよつと待て、勇者としての能力ってなんだ！？

「リユートの能力はその類稀なる剣技！伝説の勇者パーティーの魔剣士アウルを彷彿させる圧倒的な剣の腕です！ただの商人が魔法を使い本気になった近衛騎士を圧倒したのです！」

「なんと！近衛騎士は本気を出し敗れたと言うのか！」

王が驚愕する。その周りでも、ありえない！魔剣士アウルの再来だなんて……。いや、でもレーナ様が仰るなら……。等々周りも騒いでいる。

オレの剣技は小さい頃から習った王宮剣術を魔物や魔獣相手に命賭けで実戦的な物にしたものに過ぎない。魔法くらい魔獣も使ってくるしな。

魔剣士だかなんだか知らないが桁外れな力を持つ勇者と一緒にしてもらっては困る。

ふざけるな！と言いたいトコだが流石に王相手に切れるワケにはいかない。

この場にいる貴族の何人かは大切なお得意様なのだ。

「私は彼は勇者『傾国の魔女』にも対抗できると感じました。どうでしょう、父上、彼の称号を求国の剣王としては？」

なんだ、その痛い名前は。オレは只の商人だ。ていうか、傾国の魔女……？おいおい、国が傾いてどうする。そんなヤツが最強の勇者なのか？

「ふむ……聊か大仰すぎる気がするがレーナがそこまで言うならばいいだろう。リユートよ。そなたの勇者としての敬称として求国の剣王の名を授けよう」

「あ、ありがとうございます……」

大きく不服が残るがこの場で切れるわけにはいかない。何、謁見が終わり家に帰ればまた気楽な商人暮らし。わざわざ魔王を相手にする事もない。他の勇者に任せておけ。

「よし、それでは勇者リユート。そなたはこれより最短で三ヶ月ほど王宮で勇者としての訓練を受けてもらう。何、リユートは言葉に対する壁がないからな。三ヶ月だけで終わるだろう」

は？三ヶ月……？

待て、その間、家族はどうする。稼ぎは？

オレにとって家に残してきた家族は何にもまして大事なものであり三ヶ月も王宮にいる暇はない。

貯えはあるが小さい子もいるし彼らの身分では何かあったときに対応できない。

その為に仕入れでさえも時間がかかりそうな物はどんなに美味そう

な話でも迷わず放棄するほどであった。

「傾国の魔女の力は強大だな。彼女は言葉を覚えると一ヶ月で城を出て行った。しかしこれ以上例外を出すワケにはいかんだな。きっちり三ヶ月は従事してもらおう」

元の世界に帰る為に魔王を倒すから出せと聞かなかつたですからねえ……止めに入った近衛騎士は一瞬で蹴散らされますし城に大穴は空けられますし……と王の横にいる大臣が呟く。

ああ、なるほど。それで傾国の魔女か。実際に城を傾かされたのであろう。

しかし、オレだってこんなところに三ヶ月……いや、一ヶ月とて居る気はない。

2〜3日は王都に滞在しようとは思っていたがそこまで王宮に世話になる余裕なんてない。

「王よ、失礼ですが、私はそこまで王宮に留まることは……」

「貴様！王の言葉に逆らう気か？」

横に居る騎士が言葉を阻む。王も言葉を撤回する気はなさそうだ。

流石にイラついてきた。

王だから礼儀を尽くしてみたがこれ以上は譲れない。

オレは国に頼らなくても生きていける。

オレは自分の商人としての武器を解き放つ事に決めた。

「ニーズヘッグ公爵」

「お、おお、リユート。君が勇者になった事を私も歓迎しよう。何、城では最高の待遇を約束する」

少し驚いたようだがニーズヘッグ公爵は笑顔で歓迎してくれた。

ニーズヘッグ公爵はこの場での発言を許可を求める事なくできるほどの権力を持つ。

彼は国に忠誠を誓ってはいるが王と張り合うことでさえ可能であろう。

だが、何より彼は……娘を溺愛していた。

「公爵、私は貴方の依頼を受け旧セラ鉱山へ行ってきました」

「何？旧セラ鉱山だと？……なるほど！あそこは昔ミスリルが取れたと聞く！今は魔物の巣となっている場所……それなら人は立ち寄らぬしあってもおかしくないな！」

ニーズヘッグ公爵はさぞ嬉しそうに微笑む。

娘の誕生日は近い。オレ以外からミスリル結晶が今から買える可能性はほとんどない。

そしてニーズヘッグ公爵はオレに幾つ物レアアイテムの買取を頼んできた事があり、オレはそのほとんどを仕入れてきている。

ニーズヘッグ公爵にとってオレは恐らく……いなくてはならぬ商人であろう。

「はい、この通り手に入れてきました。ミスリルの……結晶です」

「……素晴らしい……何という輝き……大きさ……これほどの物は……初めて見たよ」

ニーズヘッグ公爵から感嘆の声があがる。王宮内はざわめき王でさえも目を見開く。

それほどまでにミスリル結晶は滅多に取れないものであり、特に今回のミスリル結晶はリユートでさえもこれほどの物は滅多に取れない。

「旧セラ鉱山で取れた物です。しかし、公爵……」

リユートの声が一気に冷えた物にかわる。ここからはリユートにとっても賭けだ。

下手をすれば国を出て行くことになるであろう。

「依頼を受けた先での強制召還……そして三ヶ月の軟禁。これは……ハメられた、と考えてよろしいのでしょうか？」

実際は強制どころか自分から飛び込んで逃げて来たんだがそこは無視する。

ニーズヘッグ公爵と一部貴族の顔色が急激に固くなっていくのがわかる。

「リユ、リユート！此度の召還は偶然であり、我らにそんな意図はない！」

ニーズヘッグ公爵が慌てて言葉を紡ぐ。一部貴族も何かを言いたそうである。

「さて、私には家族がいる為、ここに長期間滞在する事はできないのはご存知のハズです。」

う、それは……とニーズヘッグ公爵は言葉に詰まる。

リユートはミスリルの結晶を袋にしまい言葉を続ける。

「これ以上の滞在を望むようであれば……国周りとの取引は全てキャンセルさせて頂きます」

明らかに謁見の間の空気が凍る。

リユートは売る量こそ少ないが質は特一級品ばかりである為、間違いなく国を代表する商人の一人と言える。

「ふむ……それは国を出てく覚悟も辞さないと言う事であるな？」

王が言うと周りの視線が……大臣でさえも何いつてるんだ、お前とというような視線を王に向ける。

「そう望まれるなら仕方ないでしょう、私は家族が大事です」

そういつた瞬間流石にまずいと思ったのか貴族達が王に意見する。

「王よ！失礼ですが、彼がいなくなるのはこの国の大きな損失です！」

「家族を思うのは大事な事！ここは一度帰郷してから考えて貰って
も……！」

「我が国民に戦わせる事はないかと……！傾国の魔女も聖者率いる勇者パーティーだって……！」

おーおー、すごい擁護。ありがとうございます、貴族様。

お、王女様が若干引いてる。

「王よ、私は国に忠誠を誓っています。しかし、こればかりは譲れません。彼の家族を思う気持ちは理解できる。一度家族の様子を見に返すべきです」

ニーズヘッグ公爵も加勢してくれる。
流石、娘を溺愛してるだけはある。家族に対する情はわかってくれるようだ。

緊張したが……これはどうにかなったかな？

「う、うむ……しかし、これまでの勇者達にも例外は認めていないのだ。今更一人認める訳には……」

なおも折れない王に貴族は臨戦態勢。

これ内乱とかに発展したりしないよね？

「王よ、恐れながら助言いたします」

これまで様子を見ていた大臣が王に何かを囁く。

「なんと……！ふむ、リユートよ。そなたは今失うにはいけない人材のようだ。仕方ない……特別に例外を許可しよう」

ワアアアー！と歓声に沸く謁見の間。

嬉しいけど、そこまで騒ぐような事か……？まあ、ニーズヘッグ公爵は娘への誕生日プレゼントがあるから必死だろうけど。

「ノリのいい王宮だな……」

「あら、私、ここそんなところ大好きですよ？」

いつの間にか横にきてた王女が微笑む。

さて、とりあえずは無事に帰れそうだが、これからどうするか。礼をして謁見の間を出ると何故か王女が後ろからついてくる。

「帰郷まで一緒にしてよろしいですか？」

そんな問題発言を言い放って。

五話 100の商人としての武器（後書き）

読んでくれてる人いるかなー、とこつこつ投稿。
六話も今日中に投稿させていただきます。

六話 100に恋する竜と姫（前書き）

六話です。

相変わらず拙い文章ですが楽しんで頂けたら嬉しいです。

六話 100に恋する竜と姫

ずっと古い時代、世界は平和だった。

国同士の争いはあったものの概ね平和と言って良かったであろう。

しかしその平和はたった一人の魔人に壊された。

彼は自らを魔王と名乗り世界へと戦線布告した。

瞬く間に世界各国に魔物は魔獣が現れるようになり人々は恐怖と共に生活する事になる。

南の大国が落とされたのはそれから僅か1ヵ月後の事であった。

強大な魔王の力の前に各国は手も足も出ず蹂躪され遂に北、西、東の大国の大同盟が組まれる。

西と東が必死に魔王を食い止め北は食料や物資を援助し戦線を支えていたが、魔王率いる魔軍の軍勢は個々が非常に強力な力を持っており徐々に戦線は押されていった。

唯一平和な北の国、そこまで戦線が押されれば食料や武器の生産がままならぬ人類の敗北は決定的となる。

そしてもう少しで中央の戦線が突破されそうになると北の国はいよいよ伝説の魔術に頼った。

求国の魔法……どんな魔法かは定かではなかったが昔から国の崩壊の危機に使うべしとされてきた魔法である。

複雑な魔方陣に必要とされる膨大な魔力。

何が起るかわからなかった為、これまで迂闊に使うべきではないとされていたが、世界は形振り構っていられなくなった。

その結果は……たった5人の異世界人を呼んだだけであった。

人々は絶望に打ちひしがれる。

今、世界の希望は……絶たれたのだと。

しかし、召還された者の一人が王様を前にして宣言する。

「希望が絶たれたなら私が希望となりましょう。私たちがこの世界に呼ばれた意味を……ご覧に入れます」

王様はとても感激し彼に勇者の称号を授けた。

そして他の4人も彼に賛同し魔王を倒す旅に出る。

勇者シグルド

大魔法使いアリス

魔剣士アウル

巫女カミナギ

深遠のファルス

世界の命運は5人の若者に託された。

彼らは前線を押し返し魔人を倒し、多くの魔物を振り払い、遂には魔王の城へと剣を向ける。

人々の歓声を一身に受け世界の平和を取り戻す為に戦う5人に人々は希望を見出した。

遂に魔王を目の前にした彼らを襲ったのは魔王自身の圧倒的な強さであった。

勇者達5人を相手に互角に戦う強さ。そして何よりも魔王は受けた傷を次々と回復していく。

戦いは互角でも勇者達は一方的にダメージを受けていく。一人また一人と勇者は倒れていき魔剣により魔王に唯一ダメージを与えられるアウルも遂には魔王の猛攻の前に倒れる。

ついに立っているのは勇者シグルトだけになってしまふ。

魔王の勝ち誇る声が聞こえる。

事実、アウルが倒れた今、魔王にダメージを与える術はない。

しかし勇者は諦めずに魔王に挑む。

何合も剣を切り結び傷つき倒れても立ち上がり剣を構える。

絶望的な戦いであった。魔王はあれから一切ダメージを受けていない。

しかし、諦めていないのは勇者だけではなかった。

ファルスが身を隠し魔王から4人の目を逸らせ、アリスがカミナギに魔力を渡し、カミナギはアウルを回復していた。

そして魔剣士アウルがなんとか立ち上がった。

その姿はぼろぼろでどう考えても魔王と戦えるほどではない。

魔王の嘲笑が聞こえてくる。

それに対しアウルも嘲笑で返す。

魔王、お前の負けだと。

アウルは自分の存在全てを魔剣に込めソレを勇者に渡す。

再びアウルは倒れた。

ファルスもアリスもカミナギにももう力は残されていない。

しかし勇者の手には4人が助けしてくれた印である魔剣が握られてい

た。

魔王との激闘の末、勇者は遂に魔王の心の蔵を貫く。魔王の断末魔が世界中に轟いた。その声はこの世の全てを呪うかのような声で人々は恐怖に陥る。

だけど…人々が恐怖に陥った日はこの日が最後となった。

勇者は魔王に…勝ったのだ！

北の国に帰った4人は未永く平和の国で過ごした。

シグルトとアリスと結ばれ、ファルスは国の魔道機関で気ままに研究し、カミナギは聖女とし神殿で暮らしたという。

そして帰らなかった一人…彼の残した剣は魔剣アウルと呼ばれ今でも大陸の中央に正殿に飾られてるといふ。

救国の魔剣として…。

「ふう……リズ。君は本当にこの話が好きだねえ」

「あら、素敵じゃないですか。命を賭し戦った初代勇者達の英雄譚ですわ」

オレは今、ニーズヘッグ公爵の屋敷に来ている。

そしてオレの膝の上で絵本を開いている金髪の美少女リズ。ニーズヘッグ。

公爵の溺愛している娘だ。

彼女はこの絵本が大好きで今でも時々、オレに読ませる。

「リユート様、久しぶりにいらしてくれましたもの。少しは遊んでくれてもいいじゃないですか」

少し拗ねたように彼女は言う。まだ15歳とはいえその整った顔立ちとよく育った体は男性相手に反則的な凶器である。

「リズにあまり構っていると婚約者に焼かれちまうからな」

「あら、アルフレッド様は確かに将来有望で良い殿方ですが今はリユート様の方が上ですわ」

頬に手をそえ囁かれる。たまに本当に15歳かと思うな、コイツはしかし、手を出せばニーズヘッグ公爵に殺される為、邪な考えは浮かべちゃいけないな、うん。

ニーズヘッグ家は竜人と名乗った種族の勇者の末裔の名家である。下手な事をすれば本気で命にかかわる。この世界の貴族はなんらかの形で勇者が関わっていることが多い。それだけ世界が勇者に救われてきたという事だが。

「リユート……なんなの、さっきからその子、貴方に馴れ馴れしくないですか？」

今まで黙ってた王女が不機嫌に話しかけてきた。というかよく黙って勇者の話を全部聞いてたな、彼女。

「あらあら、レーナ様、御機嫌よう。いらしてたのですね」

とても良い笑顔で返すリズ。

何これ、フラグか？刺されるエンディングだけは勘弁してくれよ。

「さっきからずっといました！リユートは歴史上の英雄と大差ない勇者です！ニーズヘッグ家といえど少々馴れ馴れしいのではないですか、リズ！」

リズの明らかな挑発にわかりやすく切れるレーナ。それに対してリズは余裕そうだ。

「大変でしたわね、リユート様。お父様のお仕事の最中にこんな事に巻き込まれて……心中察しますわ」

あ、ちょっとわかってくれる人がいて泣きそうになった。

「まあ、ニーズヘッグ公爵のお陰でなんとか家には帰れそうだ。お礼を言っておいてくれ、リズ」

お父様がお役に立ったようで嬉しいですわと笑顔のリズは言う。

ソレに対してレーナはご立腹のようだが触らぬ神に祟りなし。放っておこう。

「あら、レーナ様、どうしたんですか？まさか、リユート様に思いを寄せて……？リユート様と出会ってこんな短期間で王女レーナともあろうお方が以外とはしたくないのですね」

おおい、何を仰るんですか、リズお嬢様！？

「な、違つ。私は最高の勇者としてリユートを尊敬しているだけです！」

真つ赤になつて言い返すレーナ。ほお、ほほお、と軽くあしらうりズ。

王女の方が年上じゃなかったっけ、確か…いや、リズが大人びすぎてるだけか。

女三人揃えばかましいと言うが二人でも随分賑やかだ。

「おお、随分と賑やかだね。リユート、いつも娘と遊んでくれて感謝するよ」

遊んでいるとニーズヘッグ公爵が来た。公爵にはミスリル結晶を渡し値段付けをして貰っていた。

「今回のものは私の求めてた物よりもずつといい。勿論、値段は弾ませてもらう。君に頼んで正解だったよ」

良かった、今回の物には公爵もご満悦のようだ。

リズが今回は何をくれたんですの？と聞いてきたが誕生日プレゼントなら伏せてた方がいいだろうと思ひ、そのうちわかるよ、とだけ返す。

「お金の事は後にしよう。今夜は泊まって行ってくれないか？」

いきなり王都にきて行く場所もなかったので遠慮なく甘えさせて貰う。

伯爵は今夜の食事は豪勢にしよう！と張り切ってくれていた。

まあ、ここの食事はオレの感覚だと普段から異常に豪勢だがな……。

夕食は大変美味しゅうございました。

まあ、少女二人が若干騒がしかったが。

二人の少女が寝静まった後、リユートは二ーズヘッグ公爵の私室に招かれ酒を交わしながら商談に入っていた。

「今回のミスリルの結晶、娘も喜んでくれるだろう」

「公爵にはいつもお世話になってますから……。またいつでも言うて下さい」

公爵は厄介な物を頼むことは多いがその分金払いはいい。

仕事の相手としては遣り甲斐もあるし成果も高いから鼻屑にしてくれるのはとても嬉しい。

現にオレの手には小さな袋に金貨が詰め込まれている。王城の民が1年間は暮らしていける額である。

「さて、明日には家に帰るのかい？家族が心配だろう」

家族は確かに心配だ。しかし、明日帰るとなれば旧セラ鉱山から帰るよりも1〜2日ほど早く帰れるだろう。

多少寄り道してもいいかもしれない。

「そうですね……明日は商会の暗部に顔を出してそれから帰ろうと思います」

公爵の顔が一瞬強張る。

暗部とは名前の通りオレの所属する商会の闇の部分である。違法な品やひいては人身売買等も行っている。

だが国の経済の一端を担っている為、国も大きく介入できずやりすぎない限りは見逃しているのが現状だ。

「まあ、君も暗部の人間だ……。だが、私は君を信頼している。身分さえあればリズを嫁に出してもいいと思うほどだ、非道な事だけはしてくれるなよ?」

公爵はリズが将来は婚約者と結婚をする事を条件に、今はオレに甘え恋する事を黙認している。

リズもそれがよくわかっていてから今はオレに遠慮なく甘えてくる。レーナに対する態度も嫉妬……もしくは警戒しているのだろう。後、何年か後にはリズはアルフレッドという名の貴族と結婚する。

それまで甘えられるのもオレとしては悪い気はしない。

「その暗部の人間を信頼してくれる貴族様も珍しいですよ」

リユートが肩をすくめながら言う。事実、暗部は貴族からは毛嫌いされる。

「君が暗部の人間でも君自身は他では扱えない商品売っているだけというのを私はよく知っているさ」

オレの周りにいる貴族は概ね自分に好意的にしてくれる。暗部の闇市を利用する事はあっても自身の売り物は清廉潔白な物だけと言

うのが理由として大きいだろう。最も、一般市場では値段と希少性ゆえに売れにくいものばかり扱っているから暗部ではあるのだが。しかし、中には暗部というだけで毛嫌いするものは当然いる。勿論オレの商品を知らない貴族も少なくはない。

公爵は数年前に初めて商売の關係を持つてから親しい貴族を紹介してくれたたり、パーティーにまで招待してくれたたり色々良くしてくれている。

公爵無しではオレの今の国を代表する商人の一人という名譽はありえない。

「公爵には……本当に感謝しています。騎士の名を失った名無しの私にここまで良くしてくれている」

「リユートの商品にはそれだけの価値がある。気にするな。まあ、私としては家に戻ってくれてリズの婿に来てくれるのが一番なのだがな」

公爵は笑いながら酒を煽る。

自分自身もそれは不可能だとわかりつつも満更ではない。

色々あったが今夜は気分良く寝れそうだ。

明日、商会に顔を出そう。そして馬の一頭を買い、途中で田舎の町で一泊してから家族の待つ家に帰ろう。

六話 100に恋する竜と姫（後書き）

そこそこハイペースでアップしてるつもりだけどどうなんだろう…。七話はまだ書きあがっていないので今日中にアップできるかは微妙なところですよ。

誤字脱字あれば指摘よろしくお願いします。

七話 100と1 (前書き)

七話です。

なんとかか今日中に投稿する事ができました。

ちょっと誤字脱字多いかもしれませんがorz
お気づきあれば指摘してくれると嬉しいです。

七話 100と1

オレは予定通り朝っぱらから闇市に顔を出していた。

王女はついてきたがつていたが彼女に見せるにはここは汚すぎる為、公爵の家に置いてきた。

代わりに公爵家で昼飯を一緒にすることになったが…。

レーナとリス。美少女二人の寂しそうな顔で頼まれて断れる男なんていないだろう…？

「リュ、リユート！？生きていたのか！」

昔馴染みの店に顔を出すとなんか驚かれた。勝手に殺すな。

「はは、すまないな。カリッツオ達からリユートはケルベロスに襲われて行方不明になったつてて手紙を鳥が運んできたんだ」

そういえば、そうだった。

旧セラ鉱山からいきなり姿を消したんだっけ。

カリッツオが慌てて伝鳥の足に手紙をくくりつける姿が想像できる。ちなみにカリッツオとは一緒にいった商人三人の中で一番オレと仲がよかった奴だ。

「ああ、なるほどな…心当たりはあるよ」

何にしても無事で良かったと背中を叩いてくる。

ちなみにこの商人も暗部の一人。

主に毒薬を扱っている。

もちろん国で禁止されているものばかりではあるが、一部の医者や魔物退治に出る冒険者も彼の毒をよく使う。

悪用されることも少なくはないが彼もまた国に必要な悪なのである。

「これは窓口に顔出したほうがよさそうだなあ、死亡扱いされてたらたまつたもんじゃない」

「お前の強さは知っているがケルベロス相手なら食われたと思われてもおかしくねえからな」

暗部といっても悪いやつはむしろ少ない。

そういったヤツはほとんど商会に加入しないで単独で活動しているからだ。

窓口とはオレのような供給の少ないアイテムを扱う商人に依頼する場所である。

指名制の冒険者ギルドみたいなものだろうか。扱うのは討伐とかではなく売買だが。

商人に直接頼むよりも高くつくが、オレみたいなダンジョンに籠ってばかりいたり王都にいない商人を捕まえやすいという利点がある。オレたち買い手の少ない商人にとっては確実に売れる為、いい客だ。とりあえず彼とは別れ窓口目指して歩き出す。

「あ、リユート様。無事だったんですね。丁度、リユート様に来た依頼をキャンセルしようとしたトコです」

ここの受付はいつも冷たい気がする。終いにや泣くぞ。にしても案の定死亡扱いされてるようだ。数年の付き合いだし、そんな簡単に淡々と処理しなくてもよくない？

「まあ、この通りさ。てか、依頼きてるの？珍しいな」

死亡届けはキャンセルしといてくれとだけ付け加え依頼の内容を書いた紙を受け取る。

「…ミスリル30K？随分大量だな。依頼主は…王宮!？」

なんで、王宮から依頼が……。

この依頼、いつ来たのか聞くと、今朝ですね。と簡潔に答えてくれる。

あー……なんとなく読めた。

昨日謁見の間で大臣が王に何か耳打ちしていたな。

その次の瞬間から王の態度が変わったんだ。

大方、オレなら兵の装備を全て新しくできるほどのミスリルを採掘してこれるとも言ったのかね。

少し考えてみよう。

まあ、旧セラ鉱山にあったミスリルなら30Kくらいは楽に採れるだろう。

商人連中が結構持って帰ってるだろうが、流石にあの量を持ち帰るのは常識的に考えて無理だ。

「ま、とりあえず一度家に帰ってからだな」

依頼用紙だけは懐に閉まっておく。期間は3ヶ月か。随分余裕をもつてくれる。

報酬が少なめに見積もられているが王宮に三ヶ月も軟禁されるような状況になるよりマシか。

受付嬢に、またな！と挨拶をして窓口を後にする。

……無視されたけど。彼女がデレる日って来るのだろうか。

とりあえず王都で最低限済ませる用事は終わった。後はニーズヘッグ公爵のトコでリズとレーナ様との食事だけか。

多少面倒だがあそこの食事はうまいから文句はない。

しかし、昼にはまだ時間があるし帰ったらリズとレーナ様が無意味なバトルを展開してゆっくりできそうもないなあ。

普段は仲がいらしいがソレ故にオレがいるとリズが嫉妬してからかってレーナ様が真っ赤になって反論する。

レーナ様、男慣れしてなさそうだしな。慣れてたら問題だけど。

何も考えずに闇市を歩き回る。

目に付くのは非合法な品から手に入らない希少物ばかり。

認可されていないのに王都の資産の半分はここに集まると思ってもいい。

そんな中、見知った顔を見つける。

闇市の中でも最も黒い部分に手を染める商人ハンス。

「ハンス！」

「ハンス、珍しいな。君が手入れを怠るだなんて」

オレはハンスの店を何度か利用こそしているが奴隷そのものはあまり好きではない。その為「何の」手入れを怠っているかは言わなかった。

「ああ……彼女か。最近、魔獣に滅ぼされた街があつてね。その少女らしい。ごたごたに巻かれて誘拐されたらしいが、着替えたがらないんだ」

こつちとしても綺麗な服を着せてやりたいんだがな。とハンスは続ける。

売られた後はどうなるかわからないが、ハンスに売られている間はハンスは奴隷に無理強いはしない。

ふむ。とリュートは少女を見る。顔の右半分には包帯を巻かれ見覚えのない白い服に紺のスカートを着ている。

そして何よりも特徴的なのは、その長い髪であった。

「黒髪……しかも、これほど濃くて綺麗なのは珍しいな」

少女の髪は夜空のように美しい黒一色であった。

先祖帰りにしてもここまでのはつきりと出るのは珍しい。

「先代勇者の子孫なのかもなあ。ただな……」

ハンスの声が暗いものになる。

彼曰く、彼女は右足が動かせず声もでないらしい。

黒髪という事で高値で買わされたが元値がとれるか微妙だとの事だ。

「顔はいいから、夜用で買い手はいると思うんだが……」

ハア、と溜息を吐き出す。

彼が奴隷商人をやっているのにもそれだけの理由がある。

理由があつたからといって許されるものではないが、ハンスには普通の仕事では賄えないようなお金が必要なのだ。

ちよつと見させて貰うぞ。とハンスに断りを入れ少女の前を移動する。

長い髪は見れば見るほど引き込まれるように美しい。

顔に包帯が巻かれているのは怪我だろうか。下がどうなっているかはわからないが、差し引いても十分可愛い。

「……？」

ちよつとまじまじ見すぎただろうか。うつむいていた彼女と目が合う。

「……！……！」

「おいおい、気持ちはわかるが、そこまで警戒しないで」

気づかれた瞬間、冷たい目つきで睨まれる。

まあ、警戒するのは当然だ。買われればどうなるかわかったものではないのだから。

それにしても怯えるのではなく威嚇するとは強気な少女だ。

ふむ。この子なら……いいかもな。

「ハンス！」

リユートはとある決意をしハンスの元に歩く。

「どうした？リユート。うちの商品が何か不備でもしたかい？」

「いや、そんなんじゃないよ、ただ……あの子はいつオークションに出されるんだい？」

ハンスが驚いた顔を浮かべる。

確かにリユートとは何度か取引をしていたが彼は奴隷を夜伽としては絶対に使わない。

だから、歩けず喋れない少女を気に入るとは思わなかったのだ。

「ああ、明後日の総合オークションに出すつもりだよ。もう出品登録もしてある」

ふむ、明後日か。滞在できない期間ではないが余計な時間を挟みたくない。

だからといって彼女は欲しい。

「ハンス、今、彼女が欲しい」

「ええ！？うーむ、いくらリユートの頼みでも無理だよ。わかるだろう？こちらは信用第一なんだ」

闇市に生きる人間としては顧客も危ない話を渡す事になる為、信用はとても大事である。

ハンスとしてもオレなら金払いは良いと知っているだろうがすでに出品登録した物を別に売るのは目をつけてた顧客の信用を少なからず失ってしまうかもしれない。

だから、オレはここから商人の交渉に移る。使う物は非常に単純だ。商売をやる理由そのものを使えば良い。信用は確かに大事だが、例外はある。

「わかっているさ、ハンス。それを承知で言う。今、彼女が欲しい」
リユートは旧セラ鉱山で採れたミスリル結晶の一番大きい物をハンスに握らせる。
仲間を脅すような真似はしないが、弱みに付け込むくらいはさせて貰う。

「妹たちの学費大変なんだろう？あれだけ大家族なのに皆を学校に行かせようとしたら当然さ」

ハンスの目が見開かれる。
ミスリル結晶は彼が初めて見るほどの輝きを放っている。
これだけの大きさでどれだけの純度を持っているのか想像もつかない。

6人の妹を持ち皆にちゃんとした教育を受けさせる為にこの仕事をしているハンスにとって、そのミスリル結晶は良い手助けとなるだろう。

教育は義務ではない。ソレ故に1人あたりの費用も庶民には辛いのだ。

「信用代と……後は口止め料かな。どうだい、ハンス」

オレは静かに問う。

これだけの結晶があれば2人分程度の教育費は入学から卒業までまかなえるであろう。

「ふう……わかったよ。リユート、この事はくれぐれもお互い内密にしてくれよ?」

「流石、ハンス。話がわかるじゃないか!」

ハンスと硬い握手を交わす。信用が第一といえど闇市。こついつた闇取引はたまにあるため、そこまで問題にはならないだろう。

「ところで彼女はどうするんだい? 見ての通り変えの服は着てくれないし、そのまま連れて行くかい?」

希望とあれば無理やり着せ替えるけど、気は進まないなあとハンスは言う。

リユートとしても、彼女にそこまで無理強いする気はない。とはいえ、今の格好は余りにもボロすぎる。

とりあえず追加でハンスに金貨を10枚ほど渡し服の修繕を頼む。

「ああ、後、お風呂にいれてやってくれ。ちゃんと女性の従者をつけてな」

ああ、勿論さ。ハンスは答えてくれる。

昼食を食べたら戻ってくる趣旨を伝えるとハンスもそれくらいには終わるだろうと言ってくれた。

「じゃあ、頼んだよ。ハンス。オレはこれからリスとお食事会にいってくるよ」

「相変わらず君は貴族に優遇されてるね、羨ましい限りだよ」

ハンスは笑顔で手を振り見送ってくれる。

あれで、奴隷商人なんてしていなければ、気のいい商売人なのだ、

彼は。

「さて、馬の一頭でも買おうと思ったが彼女もいるなら馬車を買ったほうがいいかなー」

背を伸ばしそんな事を考える。 退屈であろう帰りの旅路はもう楽しみなものになっていた。

七話 100と1（後書き）

少しだけとは言え、やっと本編でメインヒロイン出せました！

1話、2話で登場した彼女ですね。

ここまでちょっと読んでくれた方、本当にありがとうございます。
これからも読んでくれると嬉しいです。

八話 1の不安と猜疑心

もう…元の世界には戻れないんだろっな。

ここは王都。

でも多分、日の光の浴びない部分だろうな。

私はここで奴隷として売られていた。

声もでない。満足に歩けもしない私を誰が買っていくというのだろう。

まあ、女として買われる事ならあるのかもしれない。

ロクに恋すらしないまま、私の私としての人生は終わろうとしていく。

いや、もう終わってるのかもしれない。

考え事していると気づけば目の前には灰色の髪の男性が立っていた。

「……………!?!?!」

それに気づいた私は彼を睨みつける。
何もできない私の精一杯の強がりだ。

「おいおい、気持ちはわかるが、そこまで警戒しないで」

男は笑いながらそんな事を言ってくる。
ふざけないで。

気持ちはわかる？私のこの惨めで情けなくて死にたいような気持ちは？

警戒するな？こんなトコに出入りしてるような人間がロクな人間であるはずがない。

彼は少し私を見ていたがやがて私を売っている商人のもとへ歩いていった。

私の出品は明後日らしい。彼もオークションに参加するのだろうか。

勇者として何度か会ったことがある貴族の中年に買われるよりは彼みたいな人に買われた方がまだマシかもしれない。

ふう……何考えてるんだろう、私。

そもそも買われる事、自体が最悪じゃない……。

元の世界の暮らしも楽なものではなかったが、ここではもっと辛い暮らしが待っていきそうだ。

帰りたいからって無茶すぎたかなー……。

少しそんな事を思うが今更どうすることもできない。

傾国の魔女とか言われても、所詮はこの程度かあ。
考えも無しに突っ走って無様に負けた。

その結果がこれだ。自業自得以外のなんでもない。

「お嬢ちゃん、もうすぐご飯だけど、その前にお風呂に入ろうか」

沈んでいると商人が声をかけてくる。

言いなりになるのは気に入らないけどここで見世物になってるよりは湯に使っているほうがいい。

幸いこの国の入浴は私の国のお風呂と大した違いがない。

石鹸とかがないけど、そのくらいは我慢する。

いつもは大勢で入るお風呂だけど今日は何故か一人だった。

年配の女性の従者の一人もついてきている。

売られるのが近いからなるべくいい状態にするのかな。なんて考える。

駄目だ。状況が状況じゃ当然とは言え何を考えても気分が沈む。

桶にお湯を入れ頭から被る。

リンスもコンデションもないのが少し気にかかる。

これでも元の世界に居た頃は髪の手入れには気を使っていたんだ。

一応、お湯で念入りに流す。

どれだけ効果があるかはわからないけど、やらないよりはいいだろう。

体も軽く流しお湯につかる。

この後どうなるか想像はつかないが今このときだけはゆっくりしよう。

「貴方、運が良かったわね」

従者の女性が話しかけてくる。
運がいい？

「貴方の買い手が決まったのよ。法外な価格で今すぐ欲しいって」

……え？買われたの……？私。

今まで堪えてきたけど、少しだけ涙ぐむ。

従者の人がクスツと笑う。何、私のことが嫌いなのか？この人。

「大丈夫よ。貴方を買ってくれた人はとても優しい人よ」

頭を撫でられる。

優しいって言われても人を売買しようなんて奴は信用できない。

私はぼろぼろと涙を流す。

泣いてるのに声がでないのがすごく腹立たしい。

「大丈夫よ、貴方は本当に運がいいの。あの人の家に行けばわかるわ」

彼女の言葉が本当ならどれだけ嬉しい事か。

それでも最悪の事態だけは免れたらしい。

私は彼女に頭を撫でられたまましばらく涙を流し続けた。

どれだけ泣き続けたらうか。

私は多分数十分はお湯につかり続けてた。

「ほらほら、落ちついたらそろそろあがるよ。いい加減のぼせてし

まうだろう?」

ほら、顔を洗って。と女性は言ってくる。確かに少し頭がぼーっとする。

私は顔をパシャパシャと洗うと女性に手を貸して貰って脱衣場に向かう。

座りながら体を吹いていると女性が手に何かをもってきた。

「ほら、アンタの服だよ」

渡された服は私が着ていたボロと違い綺麗なシャツとスカートだった。

元の世界から持ってこれた唯一の物だから着ていたかったな……。ぼろぼろになった服ではあったが、間違いなく私を支えてくれた服を無くしてしまった。

でも裸でいる訳にもいかず服を受け取る。

服……返して貰えるのかな……なんて考えながらシャツに袖を通して所で私は気づく。

「!?!」

慌ててスカートも広げてみるがどちらとも多少デザインが変わっているが私が元の世界から来ていた学校の制服であった。

「アンタの御主人がこれまた大金を渡してきて、その服を修繕してやってくれって言ってきたのさ」

女性の言葉に私はスカートを抱き締めてまた泣き出した。

私を物扱いするような奴だけど、この事だけは本当に感謝しよう。

少しくらい変わっても、これは私の制服に間違いない。

「優しい人だっけっていつたろう？まだやることはあるんだ。着替えて早く行くよ」

女性は言い方こそ叱っているかのようだが、その表情は柔らかい笑みを浮かべて少女がゆっくりと着替え終わるのを待っていた。

あ、包帯着けなくちゃ。

あまり酷くはないけど私の顔は今火傷している。
ウェアウルフの火球を弾いた時に負ったんだと思う。

「ああ、それはいいよ。早くハンスさんのところにいくよ」

でも包帯を巻こうとした手は彼女に引つ張られて脱衣場の外に連れ出されてしまった。

あまり強く意識したことはないけど私だって女だ。

顔の火傷くらい隠させて欲しい。

私は彼女の手を振り払う。

彼女はそれに対して少し驚いた顔をするがすぐに笑って言った。
た。

「大丈夫大丈夫。ハンスさんのところにいけばわかるから」

よくわからないけど結局私はそのまま商人……ハンスさんかな？の
とこまで引つ張られてしまった…。

「お、きたか。お嬢ちゃん！」

彼は綺麗な女の人と話していた。

私 came たのに気づくと笑いかけてきたが私は睨み付ける。

「ははは、そんなに怖い顔しないでくれよ。ほら、この人は治癒術
師さ」

流石に慣れているらしく私の睨みなんて軽く流された。

でも、治癒術師って？

「頼まれた事ではないけどね。君をなるべく万全の状態で彼に届け
たいからサービスさ」

「はじめまして、可愛いらしいお嬢さん」

ハンスさんと話していた女性は私に笑いかけると椅子に座った私の
顔と足を手で触り始める。

「ふむ、ちよつと失礼」

彼女がそう言って私の顔に手をかざすとポウツと白い光に包まれた。

「!?!」

私は動かない足を引きずり慌てて彼女から距離をとる。

何をされたかわからないけど変な魔法をかけられて売られたらたまつたもんじゃない！

「大丈夫よ、ほら、見て」

彼女は気を害した様子もなく私の前に鏡を持ってくる。

火傷が…消えてる！？

「足を直すのはちょっと無理だけど、その火傷くらいなら直せますよ」

驚いてる私に彼女は笑いかけてくる。

「足も……動くようにはできませんが、まだ大分痛むでしょう？その痛みを和らげるくらいはできますよ」

そう言うと治療師さんは私の足に手をかざすとさきほどと同じようにポウツと白い光が灯る。

今度は驚いて逃げたりしない。

「これで大丈夫だと思いますよ」

治療師さんの言葉に傍に置いてある杖を取って少し歩いてみる。

よたよたと数歩進むが右足はまったく痛まない。

さっきまで少し動こうとするだけでかなり痛かったのに。

相変わらず動きはしないけど……。

「さて、私にできるのはここまでです。ハンスさん、失礼しますね」
「いやいや、こんなところまでありがとうございます」

治癒術師さんはそういうとハンスさんから金貨を一枚受け取って去っていった。

金貨一枚。私の怪我を直す価値。

一般家庭の月の平均収入が大体金貨二枚分くらいだと聞いた事がある。

王都の人はもつと貰っているらしいが、それでも大金なのだろう。

ハンスさんも商人。

なら損をする行動をとるとは考えづらい。

私を買った人はそれだけの大金で出したんだろう。

なんで私なんかそんな大金を出したんだろう……。

この服にしてもかなり丁寧な仕立で補修してくれている。

「さてお嬢ちゃん。お昼の時間だ。その後君を街の南門まで運んで君の主人に引き渡す事になっているけど……まあ、彼を少しくらいまたせても構わないだろう。ゆっくり食べてくれ」

ハンスさんは私にいつもより少し豪華なご飯を持ってくる。

でも、私は……これも私を買った人のお金で出して貰っているのかと思うと食べる気には慣れなかった。

私を買った人はすごいお金持ちでオークションを無視して法外な金額で私を買った。

服を直して貰ったり怪我を治して貰ったり感謝してるところもあるけど、どうにも好きになれそうもない。

結局出して貰ったご飯には手をつけず困った顔のハンスさんに連れられて南門へ行く。

そこには、見覚えのある灰色の髪の子の人がいた。

「いらっしやい。これからよろしくな」

あまりにも予想外な人物が待っていた事に私は思わず、こくと頷いてしまい…それを見た彼は…

すごく嬉しそうに私の手を引き馬車に乗せてくれた。

八話 1の不安と猜疑心（後書き）

久しぶりの1視点の話でした。

これから彼と彼女の物語は進んでいきます。

読んでくれる方々は勿論、少数とはいえお気に入り登録してくれる方もいて本当に嬉しいです。

ありがとうございます。

九話 100は有頂天(前書き)

今回ちょっと短いです。

大体同じようなページ数にしたいのですが難しいものですね。

九話 100は有頂天

「リユート様、お口を開けてくださいな」

「なっ!?リユート!こちらの美味いですよ!」

昼時、オレは予定通りニーズヘッグ公爵の屋敷：というか半分城みたいな家で昼食を頂いていた。

…リズとレーナ様に挟まれて。

ニーズヘッグ公に助けを求める視線を送ってみたが寛大に大笑いされた。

リズは立場上、対等と言える友達が少ない。

レーナ王女とは仲が良かったけど、それでも付き合い方は堅苦しいものだった。

しかし、今の二人は明らかに立場など気にせずリユートの取り合いを楽しんでいるではないか。

ニーズヘッグ公はそれが嬉しくてたまらないようだ。

とは言え、オレも美少女二人に接待されて多少困りこそすれど良い気分にならないわけがない。

結局は二人の差し出した料理を口に入れて貰う。

「ふむ、リユート。何か良いことでもあったのかね？帰ってきてから随分と機嫌が良いではないか」

ニーズヘッグ公は机に肘を寄せ拳を顎にあてながら尋ねる。実にダンディーだ。

普段ならリズから食べさせて貰うのを恥ずかしいからと断っているのに今日は受けているんだから回りから見れば機嫌良く見えるだろう。実際、良いしな

女好きではあるけど、一応人の目も気にする。

オレは少し考えたあと当たり前障りのない言葉を使って答える。

「えーと……少しハンスと取引をしてきたんです。それが楽しみでして」

ハンスは闇市では有名な奴隷商人である。
勿論ニーズヘッグ公も彼は知っている。

「ハンスか……君が彼と取引しているのは知っているし君のやっている事が悪だとは思えないが……関心はしないな」

そこはリユートも苦笑するしかない。

人をお金で買っている事には代わりないのだ。

リユートは奴隷を奴隷として扱いはしないが流通を助けているのは事実である。

「まあ、リユートがそこまで機嫌が良くなるのだ。素晴らしい買い

物だったのである。」

ニーズヘッグ公はあまり問い詰める事はなく適当に会話を濁す。
しかし、それで騙されない子もこの場にはいた。

「……春画ですか？」

ブフウツと飲んでいた水を吹き出す。
誰が？オレとニーズヘッグ公の二人が！

発言したリズはジト目でリユートを見上げる。
レーナはそれが何かよくわかってないようだ。

「レーナ様、春画とはえっちな絵の事ですわ」

リズが余計な事を言いやがる。

「リユート！貴方は国民を代表する勇者なのですよ！？不埒な行動は控えてください！」

リズが燃料を注いだせいでレーナ様が真っ赤になって爆発した！
ていうか、オレはそんなもん買ってねえ！

「リユート様。こればかりは私もレーナ様に同感ですわ」

そしてなんかよくわからないうちにタッグを組まれる。

「ちょっと待て！オレはそんなもん買いに行ったワケじゃ……！」

慌てて反論するが二人の美少女は冷たい視線を送ってくる。
さっきまで、あんなに懐いてくれてたのに…。

オレはガツクリと肩を落とす。

美少女二人からの蔑んだ目には耐えれなかった。

「クスッ」

笑ったのはどちらだったんだろうか。

ただ腕に抱きついてきたのは二人共であった。

「冗談ですわ、リユート様」

「リユートが少し私たちにデレデレしすぎてるからからかったのよ」

彼女達は両腕に抱きついたまま肩に頭をのせてくる。

すごく癒される……けど……。

……女つてずるい。

これを見ていたニーズヘッグ公は王女と公爵令嬢を両手に花として
持つなんて軽い国家問題ではないかと頭の角で考えたという。

二人に振り回された昼食も終わりリユートは南門に向かっていった。

レーナ様が見送りがあってはいたがハンスと待ち合わせをしている為、次に王都に来たときに必ず王城へ行く事を条件に公爵家で別れた。

一段と仲良くなったリズと遊んでから帰るんだろう。

「ふむ……。少し早く来すぎたかな」

南門まで来たが、まだハンスが来るまで時間はありそうだ。

ニーズヘッグ邸に行った瞬間待ちわびたように食事が用意されていたため思ったより時間がたっていないようだ。

南門は北国であるノースポラ王国の正面玄関の様な物だ。

北は北で港町になっており別の賑わいを見せているが南門にはやはり及ばない。

暇なので少し出店を見ていると見慣れた果実を見つける。

シャルの実だ。

真冬以外ではいつでも収穫できる生命力の強い果実。

少し遠出すれば野良の実を見かけるほど庶民的な果実である。

とはいえ一口食べてみればとてもみずみずしく甘い貴族にも人気のある実だったりする。

「お姉さん、10個ほどくれないか？」

「あら、嬉しい事言ってくれるね。一つ銅貨五枚だよ」

売り子のおばちゃんに銀貨を一枚渡す。

代わりに銅貨棒……銅貨をある樹液で10枚くっつけた棒を五個受け取る。

水をかけると簡単に剥がれる為、銅貨や銀貨は10枚ずつ棒状で持ち歩く事が多い。

ちなみに金貨はくっつかないらしい。

「お兄さんサービスだよ。11個入れといたからね」

シャルの実が入った袋を受け取り、お姉さん気前が良くて美人だなあとお礼を言うと、あらやだ！と嬉しいそうに笑ってくれる。

よし、さっそく一つ頂くか。

広場で立ちながら皮ごとシャルの実にかじりつく。

食事後のデザートには丁度いい甘さだ。

回りを見てみると他にも何人かシャルの実を食べながら歩いている。

一つ食べ終わった所で手袋が随分と濡れている事に気いた。

シャルの実はそれほどまでに水分を多く含む。

あー……普段なら気にしないけど、これからあの子に会うんだから変えておくか……。

今日、ニーズヘッグ公爵と昼食を取る前……ハンスと取引した後すぐに小さな馬車を買った。

少しだけ身に付けていた荷物と予備の手袋や回復アイテムはその時に馬車に放り投げて停泊所に預けていたのだ。

もうそろそろハンスも来るだろうし馬車も出してくるかー。

オレは滅多に手袋を外さない。

幼い頃から剣を振り家を出てからはそれこそ毎日剣を振り回す日々だった為、手のひらがぼろぼろだからだ。

オレが騎士であればそれで何の問題もない。

しかし彼は貴族を相手にする事もある商人だ。

ぼろぼろの手を見られ荒くれものだと思われるのは商売に悪影響が出る。

馬車を持ってくるついでに買ったシャルの実は袋ごと中に投げ込む。

後は馬車を門近くに起きハンスと彼女を待つだけだ。

……やばい。時間がすごく長く感じる。

リユートはそのままとても長い体感時間を過ごした。実際に待っていたのは精々10分程度だったのに、楽しみにしすぎるというのも考えものだ。

ああ、もう一個くらいシャルの実を持ってくるんだった。

今からでも何か買いに行こうか？でも、その間に来たら……などと考えてるのが三周くらいしたころ通りの向こうから黒い髪の少女がゆっくり歩いてきたのが見えた。

……あと、ハンスも。

「お待たせ、リユート」

「ありがとう、ハンス。無理言っつてすまないな、ここまででいいよ」
軽くハンスと握手を交わし少女に視線を移す。

顔の包帯は無くなっている。ハンスが治療術師でも呼んでくれたのだろう。

流石、一流と言われるだけはある。

包帯のなくなつた少女は相変わらず綺麗な黒髪に、それに合わせたような黒い瞳が印象的だった。

多少つり目だが整った顔立ちは可愛い。
ただ何故かすごく驚いているようだ。

「いらつしゃい。これからよろしくな」

柄にもなく緊張するができるだけ笑顔を作って話かける。

彼女は少し戸惑っていたけど、やがて小さく頷いてくれた。

オレは嬉しくて彼女の手を引く。

彼女はやはり歩けないらしく転びそうになるから、そこは強引に抱き寄せた。

む、嬉しくてついやり過ぎた。

そのままお姫様抱っこをし馬車の前の席に乗せる。

荷馬車に乗せたりなんてするものか。

声は出せないだろうけどオレは彼女と話したくて仕方がない。

苦笑してるハンスに手を振り馬車を出す。

オレが馬の手綱を握り彼女が隣に座っている状態だ。

さて、まずは一番最初にやらなくちゃいけない事がある。

オレは彼女に紙とペンを渡す。

「...？」

「文字はかけるかい？君の名前を教えて欲しいんだ」

彼女は少し迷ったようだが、やがて二文字だけ紙に書いて渡してく

れた。

「オレはリユート。ただの商人だ。よろしくな」

自分の顔がにやけるのがわかる。

オレは早くも随分とこの子を気に入っているらしい。
深呼吸して彼女の名前を呼ぶ。

「ミナ」

ミナはぶいっとそっぽを向いた。

九話 100は有頂天(後書き)

読んでくださってありがとうございます。

十話もほぼ書きあがっている為、明日投稿しようと思います。

十話 1は空腹(前書き)

十話です。

またヒロイン視点となります。

良ければ読んでやってください。

十話 1は空腹

ゴトンゴトンと車輪を回し馬が馬車を引っ張って行く。

馬車といっても天幕もない小さな馬車だ。

貨物スペースに雨が降った時に被せると思われるシートっぽいものがある。

お金持ちだと思ったわりには随分普通の馬車に乗っている。

その彼は隣でさっきから他愛ない事ばかり話してる。

こんな無愛想な女相手に喋って何が楽しいんだろ……。

少し意地を張りすぎてるかなと思うけど、それでもやっぱり彼に……

……リユートに好意的な感情を抱こうとは思えない。

人をお金で買うようなヤツだし。

いきなり手を引っ張られたしっ。

転びそうになったら抱き止められたし！

リユートもわざとじゃなくて少しはしゃいでやっただけみたいだからセクハラとか言ったりはしないけど……。

手袋越しに握られた手はまだ少し痛い。

強く掴みすぎなんだよ、馬鹿。

まあ……嫌なワケではなかったけど。

色々考えていると気が抜けたのか今まで忘れてたことを思い出す。

くきゅるるる〜

「……………」

「え〜と、ミナ？」

うるさい。

「お腹減ったのか？」

やっぱりコイツにも聞こえたらしい。

今の音は私のお腹が鳴った音だ。

「お昼食べてないの？」

………… 自分のせいだが食べてないのは事実だ。

こくん、と私は頷いた。

あの雰囲気じゃ黙ってたら余計恥ずかしじゃない。

お腹へったな。と思った瞬間に鳴るだなんて…。

「そつだ。ちょっとこれ持っててくれ」

リユートは私に馬の手綱を渡して荷台から何か袋を引っ張り出す。

持ってると言われてもどうしていいかわからない。

とりあえずギョツと握って恥ずかしさにうつ向く。

昼食を食べなかった自分とお腹に心の中で罵倒を浴びせていたけど、隣が何やらシャリシャリうるさい。

リュートがナイフで丸い何か削っている。

シャリシャリシャリシャリシャリシャリ。

なんか和む。

「食べないか？」

リュートが差し出してきたそれは市場でよく見る果実だった。

銅貨数枚で売られているのをよく見る。

ただお店で売ってたのとは違って皮がない。

うまいぞ？–といいながらリュートが別の皮付きの果実を口にす。

くきゅるる〜

また私のお腹が鳴く。

リュートがこつちを見る笑顔が気に入らないけど、ここで意地をはつてもまた恥ずかしい思いをするだけだろう。

私は素直に両手で受け取る。

コイツがさっきしてた通り、かぶつとそのまま食べてみる。

あ、美味しい。

一生懸命言葉を覚えてすぐ城を飛び出した為、宿以外では余りにご飯を食べてなかった。
だから、銅貨数枚でよくみるこの果実がこんなに美味しいだなんて知らなかった。

思ったよりも柔らかくてすごく水分が多い。
喉も乾いてたからすごく美味しく感じる。

元の世界ではたまに一人で甘いものを食べるのを楽しみにしていた。
そんなことも忘れてた。
かぶかぶと夢中になって食べてるとリュートがこっちもみているのに気づいた。

な、なによ……。

彼は少し笑うと私の口元に手を添える。

「!?!」

「果汁が零れてるよ、ミナ」

さ、さわるな!?!

私は慌てて頭を振りリュートを拒絶する。

……もう拭かれた後だったけど。

「ごめん、もうしないよ」

とリュートは言うてくる。

笑ってはいるけど、その顔はどこか寂しそうだ。

うつ向くとリユートが私の口元を吹いてくれた布が落ちていた。
私は慌ててそれを拾う。

ごめんなさい。

そう言いたくても声にならなかった。

結局私は黙って布を差し出す事しかできなかった。

嫌だったんじゃない。

少し驚いただけだ。でも私にそれを伝える術はなかった。

手元から布が拾いあげられる。

怒ったかな……考えてみたら私は奴隷……コイツの所有物。
何をされても誰も助けたくない立場だった…。

でも、コイツの行動は私の予想を裏切る。

「ありがとう、ミナ」

裏切ってくれた。って言った方がいいのかもしれない。

コイツは布を受け取ると何事もなかったかのように、また笑顔を向けてきた。

お風呂に入れてくれた年配の女性の従者さんの言葉を思い出す。

「大丈夫よ、貴方は本当に運がいいの」

……確かにそうかもしれない。

私が反抗的な態度を取れる事が何よりの証拠だろう。

リユートは私を奴隷として扱ってない。
なんで買われたかわからないけど、それだけはわかる。

リユートの考えてる事はよくわからないっ。

気まずくてずっと果実を食べてたら食べれるところはほとんどなくな
っていた。

真ん中はなんか固い。

多分りんごの芯みたいなものかな。

「もう一個食べるか？」

リユートのほうを見ると、またナイフと果実を持っていた。

まだコイツの事を信用したわけじゃない。

けど好意を受け取る事くらいは私もしたいと思った。

私はそっぽ向いたままリユートに手を伸ばす。

リユートは少し驚いたみたいだけど何が言いたいかわかってくれた
みたいだ。

私の手に皮付きの果実が渡される。

かぷつとそれをそのままかじってみる。

皮を向いた方が美味しい。
やっぱりリンゴみたいだ。と思いながら結局私は三個も果実を貰ってしまった。

日が傾く頃、リユートとミナの乗る馬車はともゆっくりと進んでいた。

徒歩より少し早い程度の速度で馬は駆けていく。

目的の町はもう遠くに見えている。そんなに急ぐ必要はない。

リユートの肩に頭を乗せスースーと寝息をたてるミナを起こさないように馬車はゆっくりゆっくり進んでいく。

「…………クシュツッ!」

ふいにミナがくしゃみをする。どうやら起きたようだ。

夜になるとまだ冷える。ミナの薄着ではどう考えても寒いだろう。

ミナは目は開いているがまだ、ボーっとして頭が回ってないようである。

どうやら寝起きはそんなに良いほうではないらしい。

ミナの顔がリユートを見上げる。

……あれ？リユートの顔が近い。
リユート……何をして……？
……違う！！

私は慌てて体を起こす。
気づかないうちに寝てたようだ。

私、何してたっ！？

多分、リユートの肩を借りて寝てた。
自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

「おはよう、ミナ」

リユートは気にした様子もなく笑いかけてくれる。
私は慌ててまたそっぽを向く。

でも、でも……！
さっきまでのと違って恥ずかしいんだからこれは仕方ないんだっ。

自分によくわからない言い訳をして誤魔化す。
でも、リユートはそんな私を気にした様子もなく、手綱を操り馬車
の速度を上げる。
前を見ると小さな町があった。
もう日もくれる。きつとあそこに泊まるんだろっ。

「……くしゅ……」

日が沈むと少し寒い季節になってきた。

この世界の1年は元の世界とあまりかわらないらしい。四季も私のいた日本と似通っている。

思い返せばそろそろ私が来てから季節が一巡するんじゃないだろうか。

そっか……ちょっとずれはあるだろうけど、私もう少して17才になるのかなあ。

高校に入って夏が終わる頃にこっちに呼び出されたから、それくらいのハズだ。

ちなみに、私の誕生日は秋。16才の誕生日は間違いなくこっちで迎えてる。

必死になって気づかなかったけど、こっちにきて随分立つんだなーと振り替える。

できれば帰りたいけど絶望的な気がする。なんか魔力が全然回復しないし。

最後の無詠唱魔法を打って以来、私の魔力は全然回復しない。

それっきり奴隷として売られ今に至るものだから原因の調べようもなかった。

「ミナ、今日はここで泊まるう」

色々と考えているといつの間にか町についたようだ。

リユートは馬車から私を下ろ……って、こら、お姫様だつこはやめて！

少し暴れるけど、『大人しくしてくれ！』と珍しくちょっと怒られてへこむ。結局、私はお姫様だつこで馬車から下ろされる。ていうか、リユートがこれくらいで怒るとは思わなかった。

……我慢の限界？私、我慢しすぎた？

リユートは馬車を町の入り口に預けて私にちょっとまっててくれと言いつ中を走って行ってしまおう。

何をしにいったかはわからない。でも、私が居ないほうが都合がいんだらう。

杖を持てばなんとか歩けるが走っていった彼に追いつく事は私にはできない。

態度も悪いし可愛げもない。

私は、溜息をついて壁に寄りかかって座る。動かない右足じゃ一人で立ってるのもかなり疲れるのだ。

リユート、戻ってきてくれるのかなーなんて考えてまた落ち込む。怒られたのが意外にも響いてるらしい。

考えてみたら私は半日間ずっとリユートを突き放してるようで甘えてばかりだった気がする。

これから何をされるか不安は大きいけど他の人に買われるよりも遥かにマシだったって事も今なら理解できる。

……今日の私は随分と涙もろい。また泣きそうになる。

この世界に来て一年、まったく泣いてなんていなかったのに。小さく体育すわりをして顔をうずめる。

どれだけの間そうしていたかわからない。

いい加減寒い。早くリユートに戻ってきて欲しい。

ああ、私はどれだけ我慢なんだろう。確かにリユートが居なきゃ今は何もできないとは言え、あんな態度しておいて戻ってきて欲しいだなんて……。

リユートはこんな私の面倒をみる必要なんてないのに。

不意にふわっと肩に何かかけられる。

「ミナ、ごめんな。待たせて」

私は自分の肩にかけられた物を見る。

それは緑色のローブのようなものだった。

「店が閉まっててさ。ちょっと無理やり開けて貰ったんだ」

何をやってるんだろう、この人は……。

「もう寒いだろ？馬車でもくしゃみしてたし」

こんな私の為に……。

「魔法使い用のローブだけど暖かいだろ？」

すごくサラサラな手触り。それにすごく暖かい。きっと、これ高い。

「さあ、宿屋に行こう。こんなトコで待たせて冷えただろう？」

私の為に急いで買ってきてくれたんだ。

怒ったのも……ただ早く私にこれを買いたかったんだ。

差し出されたリュートの手を今度は目を逸らさず握れた。
手袋越しの手はとても硬かったけど……安心できた。

リュートは私と手を繋いでゆっくりゆっくり宿屋へと歩いていく。

もう夜の風は寒くなかった。

十話 1は空腹(後書き)

ヒロインがうざい子と思われてそれで怖い…orz

次からはしばらく主人公視点が続くと思います。

十一話 100の思考と1の帰る場所（前書き）

ちょっと展開速すぎるかなと思いつつ十一話になります。

気づけば一日二話ペースになってますが、気づかないうちに文章劣化してそつで怖いです…。

そもそも元々が拙いですがorz

十一話 100の思考と1の帰る場所

「え、部屋空いてないんですか…？」

宿屋のおじちゃんが、悪いねー。と苦笑いする。

「なんでも南の街が魔王に滅ぼされたらしくてねえ……。行商人や街のお偉いさんが逃げ込んできてるせいで部屋がほとんどないんだ」

これは予想外だ。

こんな小さな町で宿がとれないとは思わなかった。

オレの家までは数時間で着くけど、なるべくなら夜に移動するのは避けたい。

理由は単純に魔物の奇襲を避け辛いからだ。

奴等には昼も夜もあつたもんじゃない。

かといって小さな町じゃ他に宿はないだろう。

待てよ……。

「特別室も埋まってるんですか？」

特別室とは主に貴族連中が利用する部屋……。ぶっちゃければ金持ち用の部屋だ。

余計な出費は好きじゃないがオレ一人ならともかくミナを野宿させるわけにはいかない。

「ええ、空いてはいますが……。お一人銀貨40枚になりますよ……」

流石の値段だ。

しかし背に腹は変えれない。

オレは公爵から貰った袋から金貨を一枚取り出し渡す。

店員と隣にいるミナが驚いている。

明日は家に帰れるし、これくらいの出費は許容範囲だろう。
それでも商人だ。金は下手な貴族よりある。

実際にリユートほどの商人は一握りだが、それでも下級貴族よりは
彼らの方が稼ぎやすい立場にいた。

盗賊や魔物に襲われる危険や破産するリスクはあるが違法か行商さ
えすれば商人はかなりの富を生み出す。

「す、すぐにお部屋を御用達いたします！」

店員は顔色を変えて階段を上がっていくのを見届けるとミナがオレ
の袖を引っ張ってくる。

大丈夫？

とでも言いたげな視線を向けられる。

最初は話かけても聞き流されるだけだったが、数時間馬車で過ごす
うちにミナは大分柔らかくなった気がする。

今では一応の意志疎通を図ってくれるようにまでなった。

奴隷の買い手なんて警戒されて当然。もっと難航するかと思っただけ
と彼女はオレを見る努力をしてくれてる。

本当にありがたい。

この分なら家にも早く馴染んでくれるかなーとか思いつつ、大丈夫だよ。と言いつ頭に手を置く。
またぶいっとそっぽを向かれるが振り払われる事はなかった。

「こちらでございます」

宿の人に案内された部屋は流石の豪華さであった。
オレとて普段はこんな部屋は利用しない。料金が10倍ほど違うから当たり前だ。
商人とは節約から始まるのだ。

適当に上着をかけ座る。ミナのローブもかけようとしたが首を振られた。
嬉しい事に気に入ってくれたようだ。

黒髪に黒い瞳と黒いスカート。
上は白い見慣れないシャツを着ている。
そしてさっき買った緑のローブ。買ったオレが言うのもなんだが似合っている。

こうしてみると改めて彼女は可愛いと思う。

家に帰った後は彼女の意志で自由にさせるができたなら留まって欲しい。

ミナを観察していると向こうもこちらに気づいたらしくジト目で睨まれる。

苦笑を返しておくともコンコンと扉が叩かれた。

「もう出掛けるには夜も遅いかと思ってお食事を用意いたしました。よろしければ如何でしょうか？」

おお……。

酒場にも行こうと思ったけどここで食べれるなら好意に甘えよう。流石、貴族御用達の部屋だ。サービスがすごい。

ベッドに座っているミナを見ると彼女も期待した目で見てきてる。

昼食を食べてないのだ。シャルの実を三個食べただけではお腹も空くだろう。

ありがたく頂く事にする。

テーブルに並んだ食事に二人で手をつける。

急いで用意してくれたにしては悪くない食事だ。

ミナは器用にナイフとフォークを使い前にある肉を切り分け口に運んでいる。

……いや、器用すぎる。

フォークもナイフも数世代前の勇者がこの世界に伝えたものを貴族が好んで真似たものだ。

一般の民なら串で刺すかフォークだけで食べるのが普通だが、彼女

はどう見てもナイフも使いなれている。

どこかでしっかりと教育を受けたのか？

確かハンスは彼女が滅んだ街から誘拐されたって……待て、さつきもそんな話を聞いたな。

「ミナ、食事中にすまない。少しいいか？」

本当なら食べ終わるのを待ったほうがいいだろう。

でも彼女の答えによつては明日からの予定を考え直さなければならぬ。

ミナは手を止めてオレが喋るのを不思議そうな顔をして待ってる。

「さつき、店主が南の街が滅ばされた影響で部屋が埋まってるって言ってたんだ。ミナは……そこから来たのか？」

ミナは少し驚いたようだ。まあ、こんな事をいきなり聞かれたら当たり前だろう。そして……彼女は小さく頷いた。

やっぱりか……時期が合いすぎてる。

「帰りたいか？」

彼女が頷いたら一度、家に寄った後送って行こう。帰る場所があるなら帰るべきだ。

でも彼女は帰りたいと言わなかった。
ふるふると首を横に振る。

「……帰りたくないのか？」

意外だった為、聞き直してしまう。だけど、これは正解だった。ミナはなんて答えたらいいかわからないようだ。

「……自分の暮らしてた場所に帰りたい？」

ミナはこくこくと頷く。何が言いたいかわかってくれて嬉しいようだ。

「その街には帰らなくてもいいんだね」

こくん

「そこに帰るかい？奴隷の事は気にしなくていい。なんとかする」
少し寂しいけど、元々奴隷として使う気なんてない。構わないだろう。

でも彼女はまた悩む。

「ふむ……帰り方が……わからない？」

少しうつ向いて彼女はまたこくと頷く。

……なるほど。自分がどこからきたかわからないのか。

「明日、オレの家に帰る。しばらくそこで一緒に暮らさないか？」

本来の目的をここで白状しよう。

別にオレは彼女をどうこうするつもりはない。家に招待した後は彼

女自身に決めさせる。

ミナはしばらく迷っていたけどやがて首を傾げる。
いや、可愛いけどどうした。

……遠慮か？

「なに、部屋は沢山ある。元々そのつもりだったんだ。ミナさえ良ければ一緒に暮らそう。無理強いはしないけどな」

少し考えたようだが、やがて彼女は小さく頷いてくれた。

「ありがとう。さて、悪かったよ。食事を再開しよう」

気分を害していないか少し心配だったがミナはまたすぐに美味しそうにお肉を食べ始めた。

この時のオレが知るよりもないが、ミナにとっては一年間ずっと悩み続けた事だから今更であり、さらにオレと一緒にいることで、この世界に来て初めて少なからず安堵していた為、あまり気にならなかったようだ。

自分自身も食事を再開する。

うん、うまいな。

家に帰って落ちついたらミナの故郷の情報を調べるのもいいかもな。それと彼女、言葉は喋れるようだが文字はあまり得意ではないようだ。

宿の受付で宿泊に関する契約事項を読めてないみたいだったし。その辺を教えるのもいい。

「ミナ、風呂に入らないか？」

食事が終わりシャルの実を食べているミナに言うとは時間かぶり
にすごい睨まれた。

しばらくは敵意のある視線はなかったのに、これはどちらかと言え
ば殺意が籠っている。

「いや、一緒にじゃねーよ。部屋に備え付けのがあるから、先に入
れって事だよ」

商人として普段は丁寧とまではいかずともやわらかい言葉を使っ
ているが思わず地が出た。

にしても流石と言うべきか普通は共同風呂なのにこの部屋には備え
付けのお風呂があった。

ミナは備え付けの寝巻きを手にとると壁際を壁に背を向けススス
スと移動する。右足動かないのに器用すぎんぞ。ていつか……。

「覗いたりもしないからゆっくりしてこい」

頭を抱えながら言うてはみたがミナの視線はどう考えてもオレを信
用していない。

ミナは視線を一度も外す事なくボタンと脱衣場へのドアを閉じた。

おいおい、そんな態度ばかりとつてると涙を流す事になるぜ？オレが。

とりあえずベットに腰を下ろし今日を振り返る。

騒がしい日だった。しかしそれはとても楽しい日だった。

ま、流石に少し疲れたな。

さっきまでミナが腰かけていたベットに横になる。まだ少し暖かい。

このベットはミナに使わせるか。ベットは何個がある。

他の奴が少し離れたところにあるのは主人と従者用だからだろう。

風呂からあがったらすぐ寝ようと思うが今はミナが入っているからどうしようもない。

とりあえず横になろう。

ベットには特に力を入れているのか最高に気持ち良い。

ミナがたっぷりと時間をかけ入浴を楽しんだ後、緊張しながら浴槽を出た頃にはリユートはすっかり寝こけていた。

「……………」

何をしても良い相手を前にしてこれでは警戒していたミナも喜んで

いいべきか女として自信を無くすべきか迷う。
ミナはどうしようか迷ったがせめて着替えくらいはしたほうがいい
だろうとリュートを揺さぶる。

不意に体を揺すられる感覚に意識が目覚める。
どうやら、疲れて寝ていたらしい。目を開けると黒髪の少女が傍に
座っていた。

「ん……、ミナ……？ああ、いつの間にか寝てたか。ありがとう」
こくこくとミナは頷く。

ミナは警戒してるのか笑ってこそくれないが、その表情はわかりやすい。

んっ！と背を伸ばしてベッドから立つと交代とばかりにミナがベッドに飛び込む。
ああ、駄目だ。眠い。
仕方がない着替えだけ済ませて寝よう。寝起きというのは一番眠いんだっ。

ここで着替えしまいたいがミナがいる。脱衣場までは頑張るか……。

中に入るとかなり豪華な風呂が見える。

湯も綺麗だ。

客が入る前に水を入れ後は朝までずっと火で沸かして置くのだろう。起きたら入るのも悪くない。

備え付けの薄着に着替え服はかけておく。

少々不衛生だがいきなり王宮に飛ばされた為、着替えは少ない。明日も着るものもある。

とりあえずその辺は起きたら考えよう。

手袋だけは忘れず着け直し一番近くにあるベッドに体を投げ出す。

オレの意識は速攻で深い眠りに落ちていった……。

リユートがすっかり寝付いた頃、ミナは硬直していた。

ミナは、お風呂は好きだった。久しぶりにゆっくりと一人でお風呂に入り彼女はご機嫌だった。

リユートが脱衣場に入ってからふかふかのベッドの感触を堪能していた。

ちなみに制服は壁にかけてきたがローブは畳んで枕の上に置いてある。自分の近くに置いておきたかったのだ。

少し眠くなってきたらリユートも脱衣場から出てきた。着替えだけですませたらしい。

そしてリユートは……ミナが寝転がってるベッドに体を投げ出した。

一瞬、女として警戒したが、すぐにリユートの寝息が聞こえてくる。

他のベッドに移ろうかとも考えたが何故か少し離れてるし、このベッドが一番寝心地が良さそう。

よくみたら杖はリユートの寝てる向こう側にある。

動くなら杖か他のベッドまで這っていく事になる。

少し考えた結論として彼女は今日だけは気にしない事にした。

ベッドの上にそのままダイブしてきたリユートに布団をかけて自分も端っこで布団にくるまる。

このベッドだけはとても大きい。二人で寝てもまったく窮屈じゃない。

ミナは少し緊張していたけどふかふかなベッドに疲れた体はよく眠れそうだった。

結局、彼女も数分と経たないうちに自分の意識を手放した。

安心して自分の気がつかないフリをして……。

十二話 100の盾(前書き)

今回ちょっと長くなっていますね。

話の長さをなるべく同じようにしようと書いていくつもりはないorz

十二話 100の盾

「んっ……！ふいっ」

背筋を伸ばして息をつく。

泥沼みたいな思考が少しずつクリアになってくのを実感できる。

昨日の記憶が途中からないけど、どうやらちゃんと着替えて寝たらしい。風呂は……多分入ってないな。

ボタンと扉が締まる音がしてそちらを向くとミナがいつもの白シャツ黒スカートにローブを追加した恰好で立っていた。

朝から風呂に入ってついでに着替えたらしい。

「ミナー、オレも風呂に入ってくるよ」

彼女はオレを確認したらよたよたと杖を突きながら歩いてくる。

「上がったらご飯を食べにいこ。近くに酒場が……お？」

喋りながら通り過ぎようとしたら腕を捕まれた。

止まれず少し引っ張ったせいで体制を崩した彼女を支える。

「えーと……どうした？」

「……！！」

「おおっ！？」

体制を立て直した瞬間にポスツツと胸を殴ってきやがった。

そりゃ痛くはないけど……。

ミナにとっては自分が寝てたらいきなり隣に来た仕返しだ。何もなかったし疲れてたのはわかるけど、起きたら一発殴ろうと決めていたらしい。

一応、朝早く目が覚めて二度寝しようと思ったのに意識して寝れなかったから少し寝不足気味だという実害もある。

よくわからないが……そこまで怒ってるようじゃなさそうだな……。

ミナはその後ベッドに腰かけて近くの袋からシャルの実を取り出してこつちに突き出す。

「ああ、食べていいよ」

彼女が一度頷いたのを確認してオレも風呂に向かう。扉を閉めようとしたらナイフで皮を剥いてるのが見えた。

ナイフも使えるのか……本当に器用だな……。

それにしても言葉を話せないわりには意思疎通は結構できる。いきなり殴られたり意味のわからない所もあるけど……。

男の入浴なんて簡単なもんだ。少し湯船に浸かり髪を軽く流して出る。

一応、汗を掻いたからシャツと下着、それに手袋くらいは変えるが後は昨日着ていた物をそのまま使う。

旧鉱山に置いてきた荷物どうなったんだろう……。

放置されたか仲間の商人に回収されたか、どちらにしる荷物のほとんどは手元にはない。

「……。」

部屋に戻ってみるとミナが無言で皿を突き出してきた。まあ、無言なのは当然か。

皿を見てみると少しだけ皮を残して一口サイズに切られたシャルの実が乗っている。

それは何か耳の長い動物のように見えなくもない。

「食べていい？」

視線を逸らされたけど、この場合は食べていいって事だろう。

一つ摘んで口に放り込む。

「芯もちゃんと取り除いてある……ミナ、君は本当に器用だなあ」

なんで？とでも言うかのようにミナはシャルの実を口に運びながら不思議そうにオレを見る。

彼女の事は本当によくわからないけど、少なくともオレ以上の教育は受けていそうだ。

これでも、一応、立派な騎士になれと言われて育ったんだがなあ。
と苦笑する。

「……？」

とりあえず、彼女の事は追々聞いて行こう。

「さ、ミナ。ご飯食べに行こう。そんな実、一つじゃ足りないだろう？」

ミナはまた小さく頷き、オレの手を取ってくれる。

一緒に歩く時は杖よりもオレを頼ってくれる分になっただけ、会ったときより格段に進歩してると思う。

まだまだ警戒はされてるけどな。

気づくとミナにまた睨まれてる。おっと、ニヤニヤしてたか？どうにも彼女はオレが笑ってみてると睨んでくるようだ。

「さ、行こう。今日は時間あるし、ゆっくりな」

ミナに無理はさせない。手助けはしても甘やかさない。

馬車の乗り降りみたいなの無理な行動は無理やりにも乗せるけど、

ミナはゆっくりとなら歩ける。

それを邪魔するような真似はしない。多分、それは彼女も望まないだろう。

オレたちは数分でいける距離を何倍もの時間をかけて歩く。

「お疲れ様、頑張った頑張った」

ミナにとってはこの距離を歩くのも一苦勞なんだろう。

まあ、元々体力もないのかもしれない。頭をぽふぽふ叩くオレに対して睨んではくるものの、息を整えるのに精一杯で振り払う余裕もないようだ。

オレはこの酒場にはたまに来る。王都からオレの家までは朝に馬を出せば日が沈んでもまもなく着くが昼過ぎまで王都でいたらして事もあるから、そんな時はこの町に泊まって昼過ぎまでいたらして帰る。

だからここは多少は馴染みがある酒場なのだが今日は雰囲気は違っていた。

んー、南の街から逃げてきたお偉いさんか？

いつもは情報収集に精を出す商人や、王都への旅仲間を探す冒険者、目ぼしい新メンバーを探すギルド員で賑わっているのだが、今日は妙にぴりぴりしている。

そして酒場のあちこちには、成金趣味の金の大事さをわかってないような中年が難しい顔をして飲んだくれていた。

まあ、ミナは気にしてないみたいだし、無理に関わることもないだろう。

オレが酒場を見渡ししてる間に彼女は空いてる近い席に勝手に座って、すでにメニューを開いている。

雰囲気には怯えるような場所を変えようかと思っただが、ミナが気にしないものをオレが気にする必要もない。

ていうか、ミナって文字苦手じゃなかったっけ…？

「わかるメニュー………あるの？」

試しに聞いてみたが、彼女はオレにメニューを指してきてパスタの項目を指差す。

パスタは読めるのか。まあ、こういった店は今までも利用してきただろうし、何もわからないって事もないか。

「そうか、何にする？」

オレは……朝だしな。適当なセットメニューでいいか。

自分の頼む物を考えているとペシッと腕に紙が投げつけられてきた。

「いつも」「ぱすた」

その紙にはその二つの言葉だけ書かれている。

向かいの席を見るとミナが何か言いたそうな目でこっちを見ている。

いつも、パスタ？

「いつもパスタ………だから違うものを頼んでみたってことか？」

適当に訳してみたが正解だったようだ。ミナがこくこくと首を縦にふる。

……こいつ、店に入って変な物頼むワケにもいかず、いつもパスタ

食べてたのか。

見てる分には笑えるけど実際に自分がそうだった場合は中々厳しそうだ。

何が食べたい？と聞くと少しの間、顎に人差し指を当てて次に何ももってない手でフォークとナイフで何かを切るような真似をする。

「お肉が食べたいのかな？」

こくこくこくと嬉しそうに何度も頷く。

昨日、お肉を幸せそうに食べてたのはそんなワケがあったのか……。なんか不憫に思えてきた。

とりあえず一つのメニューを二人で見えて彼女に料理の説明をする。言葉はほとんどわかるようなので、それに不自由はないみたいだ。

しばらく経って運ばれてきた料理はスープと野菜を挟んだパン。それに鉄板にのった分厚いステーキだった。

量自体は大したことないけど、あんな重いものよく朝から食べられるものだ……。

ミナはシャーベットを食べている。

シャルの実を美味しそうに食べていたから試しに注文してみたんだ

が気に入ってくれたようだ。

オレのテーブルには何人かの商人や冒険者が集まって談笑していた。情報収集は酒場の基本だ。貴族の事なんて気にしてられない。

そんなわけで一人に声をかけたらわらわら集まり出した。

みんな情報は欲しかったけど貴族連中がぴりぴりしてるもんで話にくかったみたいだ。

「そういえば、街が一つ落ちたって聞いたけど、どうしたんだ？」

街が落ちたって話は聞いたけど中身は良く知らない。

結構、有名な話のようで冒険者の一人が答えてくれる。

「ああ……今回召還された100人の勇者の中で最強って呼ばれた子を知ってるか？」

「確か、傾国の魔女……だっけ？」

この異名は何度か聞いたことがある。待て、100人の勇者ってオレも入ってねえか？

「そう。傾国の魔女ミヅキが魔王に敗れたらしい。魔王はミヅキを倒した後、そのまま街を攻め落としたって話だ。ウエアウルフの大群を使っただけ……」

なんか、その魔女、城に大穴あけたとか言ってなかったっけ？

それが負けたのか……化け物だな、魔王。

ふとミナを見るとシャーベットを食べる手を止め話を聞いていた。

自分が滞在してた街の話だから気になるのか？と思ったが目があるのと何事もなかったかのようにシャーベットをスプーンですくう。

「しかし！今代の勇者は粒揃い！『聖者』率いる最強の勇者パーティーに魔剣士の再来『救国の剣王フェトム』もいる！なんとって過去最高の100人だ。必ずや魔王を打倒するだろう！！」

なんか最後までごく嫌な名前が聞こえた気がする。

ちなみにフェトムはオレが追い出された騎士の名門フェトム家の事だろう。

オレの旧名はリユート＝フェトム。勇者の名前はどつやら家名が宛がわれるようだ。

オレのテーブルは勇者の話題でわいわいと盛り上がる。

ミナも若干うるさそうにしながらシャーベットを食べている。

まあ、酒場つてのはこうあるべきさ。あんなぴりぴりした雰囲気じゃ酒もうまくないよね。

店主も迷惑そうにするどころか、微笑ましく見守ってくれてるしな。

しかし、それが気に入らない連中も世の中にはやっぱりいるようだ。

「うるせえんだよ、金の亡者共がっ！！」

ガシャーン！と酒場にガラスの割れる音が響く。床には割れたグラスや皿が散らばっている。

その中心には金髪の男。どつやらそいつがテーブルの上の物を全部薙ぎ払って怒鳴ったらしい。

「オレの街が滅びたんだぞ？傾国の魔女がこなけりゃこんな事にもならなかったのに……。魔女がオレの街の住民全てを殺したんだ！」

酒場にいる全員が静まる。発言からしてコイツは街の中でも随分と上の方にいたヤツなんだろう。

「魔女は行方不明だつてな……。まったく運がいい。街一つ滅ぼしたんだ。死体を晒せない事が残念でならない。それくらいするべきだろ。なあ？」

男の発言は狂気の沙汰だ。世界を守ろうとして命を落とした彼女に対してなんて言い草か。

酒場全体の雰囲気も彼に対しては友好的ではない。だが、相手は元とは言え、街の重役。どんな後ろ盾があるかわからないから手は出しにくい。

ふとミナの様子をしてみる……。下を向いている為、表情は見えないが少し震えてるように見える。

「どつした？ミナ」

彼女の肩に手を置くが、なんでもないとつうように下を向いたまま首を振る。

肩に手を置いてはつきりと分かったが間違いないと震えている。元の話だからか……？

とりあえず、何にせよ、あの馬鹿を黙らせたい。

「ん……。？おい、その女。その下を向いてるお前だ」

ミナの肩がビクッと震える。

コイツ、今度はミナを指名してどつしようつてんだ。

「魔女はお前みたいな黒髪だったんだってな。何、お前、こんなトコで呑気に食事なんかしてるんだ？」

ヤツはいきなりミナを無理やり立たせようと引つ張る。って、そんな風に引つ張られたらミナはバランスもロクに取れない！

やばい、とは思ったがテーブルの反対側の席に居るオレでは止めるのが間に合わない。

予想通りミナは足をもつらせ転ぶ。しかも運が悪いことに……割れた食器の上に倒れた。

「ミナ……！」

急いで彼女に駆け寄る。

良かった。少し血が出てはいるけど、怪我は大したことないようだ。後はアレを黙らせる。どんな後ろ盾があるうが、こちらにも盾はある。こういうヤツは盾の名前を出せばあっさり引くだろう。

……と、思ったが気が変わった。

「おい、商人。そのの奴隷を渡せ。まだ、死にたくはないだろう？」

ミナの首輪を見て判断したんだろう。ヤツの護衛らしい屈強な男二人がオレの前に立つ。

あまり荒っぽいことは好きじゃない。けど、お前らには容赦しない。

「ごめん、ミナ……少し待っていてくれ」

なるべく笑顔で彼女にそういうとオレは護衛の一人に斬りかかる。

ダン！と大きな音がするとオレが斬ったヤツはあっさりを膝から崩

れ落ちる。

抜刀はせずに鞘付のままぶん殴ったから死んではないだろう。ここの流血沙汰は店主に迷惑がかかるしな。

助け起こした時、少しだけミナの顔が見えた。理由はわからない。でも彼女は……。

泣いていた。

泣かせたのは間違いなくお前たち。

間違いや喧嘩ならオレが出る幕じゃない。けど、お前らは只の嫌がらせだ。

オレの隣にいる女をそんな風に扱ったんだ。それ相応の報いは受けてもらおうじゃないか。

もう一人の護衛が剣を抜き斬りかかって来る。が遅い。

振り下ろされた剣ごと男の顔を横薙ぎに剣でぶん殴る。3メートル程度は吹っ飛んだだろうか。

二回三回転がって壁にぶち当たる。

よし、動く気配はないな。

さて、残り……というかメインだ。

護衛を二人ともやられたつてのに余裕そうな顔が癩に障る。

「ふん、お前、自分が何をしてるかわかってるか？商人。私はザハク子爵に命じられ街を守っていた男だぞ？貴様は子爵に喧嘩を売ろうと言うのだな？」

それを聞いて安心した。爵位があるとは言え下位の子爵か。

鞘に収まったままの剣をコイツの腹に突き当てる。一撃で気絶され
ては困るから手加減して……だ。

ヤツの顔は怒りに渗む。こいつは自分が有利な状況にいても思
っているんだらう。まったくもって滑稽だ。

「ゴフツ……き、貴様……！何をするか……ただで済むと思うな！
名など調べればすぐわかる。すぐに子爵に報告して……」

「リユートだ」

調べられるまでもない。オレは自分の名前を名乗る。ついでに顔に
蹴りを入れて。

蹴られながらコイツは信じられない物を見るような目つきでオレを
見る。

「リユート……まさか、ニーズヘッグ公爵の……」

そう、大体予想はつくと思うがオレの後ろ盾はニーズヘッグ公爵だ。
あまり頼るのも悪いが権力相手に屈するくらいなら彼に甘えておく。
……今度、リズにアクセサリーでもプレゼントして機嫌を取ってお
こう。

ちなみに、順位的に公爵＞侯爵＞伯爵＞子爵＞男爵くらいに格差が
ある。

「そして王宮直属の商人にしてレーナ様の護衛として選ばれたリユ
ートだと！」

予想外に言葉は続いた。待て、なんだ、それ！？

「くっそ！くっそ！くっそお！！」

よくわからないがオレの知名度が王宮の策略によって変な風にながっているらしい。とりあえずコイツは思い切り剣でぶん殴り黙らせておく。

はあ……ちょっと頭に血が上りすぎたかなあ……。でも、まあ、多分、またミナが理不尽に泣かされたらオレは同じ事をするんじゃないかと思う。

「ごめんな、ミナ」

彼女の元に駆け寄り手を差し伸べる。

良かった。手を握り返してくれた。また距離をとられないかかなり心配だったからな……。

彼女はオレの肩口に顔を埋めて小さく震える。声は聞こえないが恐らく泣いているんだろう。

とりあえず彼女が落ち着くまでこのままでいよう。長い黒髪をゆっくり撫でながら時間は過ぎていった。

周りの冒険者や商人のカップルを冷やかすかのような声を無視するのは大変だったけど……。

十二話 100の盾（後書き）

本来入れる予定のなかったぶち戦闘シーンです。

本来はスルーしてそそくさと家に帰る予定でしたw

次回はやっと主人公の家に到着できると思います。

十三話 1000の家じやんじそー！（前書き）

昨日のうちに投稿しようと思っていましたが時間が過ぎてしましま
したorz

少し短いですが、良ければ読んでください。

十三話 100の家じよじそー!

「落ち着いたか？」

新しく頼んだシャーベットがテーブルに置かれる。

ミナはそれを手に取りスプーンで食べはじめる……けど、なんですつとオレは睨まれてるんですか？

あの後、しばらくして彼女は顔を上げてそのまま、オレをポスンッと殴ってきた。

そして……よくわからないけど、怒ってる。

シャーベットはとりあえず機嫌取りに頼んでみたものだ。

ミナは怒ってるのではなく、ただ泣き顔を見られてどうしていいかわからないだけだったりするが、そんな事この時のオレにわかるはずがなく、彼女はものすごく不機嫌に見えるだけだった。

乱暴な事しすぎたかなあ、と考えているとミナにスプーンを突きつけられる。

上にのってる一欠けらのシャーベットを見てちょっと安心する。

本当に彼女が何をしたいかわからない時はあるけど、彼女なりにオレの事は信用してくれてるみたいだ。

「ありがとう、いただきます」

自然に笑いがこみ上げてくる。

口の中に入ってきたシャーベットは冷たくて美味しかった。

ちなみに、ぶっ飛ばした三人は他の貴族がせつせとどっかに運んでくれてた。感謝感謝。

「さて、行こうか」

予想外に時間を食ったが予定通りに今日には家に行こう。

ミナをお姫様抱っこで馬車に乗せるが、やっと観念したのか今回は暴れなかった。

少し顔が赤くなってた気はするけど。ははは、可愛いヤツめ。

「リユートさん、王都で見かけた時は是非よろしくお願いします」

酒場で出会った冒険者や商人が次々と声をかけてくれる。あれから酒場はさらに盛り上がった。

オレの素性がばれたせいでギルドに勧誘されたり一緒に商売をしないかと誘われたりで大変だったが、それも酒場の醍醐味だろう。

ここからほとんどの人は王都に行く。

中には隣国へ行ったりする人もいてそっちの道に行く人も多数いるけど、オレの行く道はミナとオレを乗せた馬車一台だけだ。

ミナは他の商人に貰ったシャーベットに使っていた黄色い果実を食べる。

……なんか、この子、食べてばかりじゃないか？

うん、でも言ったらまた叩かれる気がする。黙っておこう。

とりあえず何事もなく着きそうだなー。

オレの家の周りって何もなし。

リユートの家は王都から離れた場所にある大きな一軒家だ。

周りには本当に何もなくて町どころか村ですらない。

ただデカイ家がポツンとある。

大きい家が欲しかったけど、当時そこまで金銭的に余裕がなかったから土地代のまったくかからない辺境に家を建てたのだ。

ちなみに、1時間ほど馬で西にいくとそここの規模の街がある為、一応生活には困らない。

馬車を走らせて数時間、ようやく地平線には我が家が見えてきた。

「ミナ、あそこがオレの家だ。見えるか？」

遙か遠くに見える我が家を指出す。

ミナはちよつと驚いた顔でこつちを見る。

まあ、かなりでかいからな。下級貴族の屋敷並みの広さはある。流石にニーズヘッグ公の城みたいな屋敷には負けるが。

当時、自分の精一杯の金を出したからなー。と昔を懐かしむ。数年間住んできた愛すべき我が家だ。

ちよつと驚かれて気分がいい。

「……………」

「おっと」

またポスン！と殴ってきたのを受け止める。自分の顔がにやついてるのがわかったからな。

なんか拳が飛んでくる気がする。ミナはちょっと驚いた顔をしてて非常に可愛い。

「そうそう殴られないさ」

殴られても痛くないけど……。彼女がとても納得いかなさそうだ。

またぶいっとそっぽをむかれる。

ま、もう少しだ。流石に腰が痛い。どれだけ移動しても馬車の疲労っていうのは慣れない。ミナはよく我慢してると思う。顔には出していないけど、彼女も座りっぱなしで大分疲れてるハズだ。

一度、荷台で楽にしてもいいと言ったんだが首を振られたし、随分と我慢強い子だと思う。

他のヤツはオレと初めて馬車にのってオレの家に来るとき、みんな荷台で休んでたからなあ。

ミナがずつと隣に居てくれたお陰で退屈を感じる事なく、楽しく帰ってこれた。

ハンスからミナを引き取って本当に良かったと思う。彼女ならきつと、オレの家でも……。

「……なんだ、あれ？」

いよいよ家の前に来ると庭に何やら不思議なオブジェを見つける。

2Mくらいの大きさの木で作られた十字架が地面に思いつきりささっているのだ。

家の誰かが作ったのか……？つか、なんだ、これ。まるで墓みたい

な……ん、待て、墓？

「ミナ、ちょっとまっててくれ！」

ミナは首を傾げるけど、嫌な予感がする。とりあえず、玄関のドアを勢い良く開く。

「誰かいるか……って」

全員いた。

普段は西の街に暮らしてるクリアまでいる。で、全員こつちをとつても驚いた顔で見る。

……予想通りか。恐らくはカリッツォか？多分、オレの行方不明……いや、雰囲気的にはむしろ、オレの死を知らせたんだろう。

一番小さい子、コレットが一番最初にオレに駆け寄ってくる。

「リユート……！」

「おつとつ……。ただいま、コレット」

「リユート、お前、よく無事で……！」

コレットが勢い良く抱きついてきて、ついでランディが駆け寄ってくる。

「クリア、久しぶり。こつちにきてたんだな」

「リユートが死んだって聞いて慌ててきたのよ……。びっくりさせないで、もつ」

クリアは隣街で魔具屋で働いている魔法使い。1年前までウチにいたけど毎日隣街に往復するのはかなりの時間を要するから家を出て

そこで暮らしている。たまに戻ってきてくれるけど、オレも仕入れにいったりで会う時間は一番少ない。

後は奥で泣いてる女性とそれを慰める男……メリアとクロウ。メリア、よほど心配してくれたんだなあ。

さて、勇者云々は他の人には隠しておきたいけど、この家の住人みんなにはちゃんと説明しないと。

王都から一緒にきた、この子の事もある。

ミナが玄関からひよこつと顔を出してこっちを見ている。

「リユート、そのおねえちゃん、誰？」

「ミナ、こっちにおいで」

ミナはこくと頷くとオレのトコによたよたと歩いてきて手を握る。クリアが少し顔をしかめるけど、事情を話せば納得してくれるだろう。

「まずはミナに紹介しよう。彼らはオレの家族。ここで一緒に暮らしてる」

一番幼いコレット。活発な女の子で家族のマスコットの存在。

「コレットです！よろしくおねがいます、ミナお姉さん！」

オレと同じ年のランディ。剣士をやっている街で依頼を受けたり獣を狩ったり、時には近辺の魔獣と戦いこの家を守ってくれている。

「ランディだ。まあ、緊張する気持ちはわかるけど、気楽にしてくれ。ここにいる人はみんな、君と同じだ」

ランディの言葉にミナは首を傾げる。まあ、追々説明しよう。次にクレア。街の魔具屋で働く魔法使い。自分の魔法をみんなの役に立てたくて初めた仕事だが中々性に合ってるらしく経営者にも気に入られてる。

「リユート。その子、なんでリユートと手を繋いでるのかな？」

「あー、まあ、事情は後で説明するから次に進ませてくれ」

ミナはオレの手を離そうとするがギュッと力を入れて握ってやる。もう！とクレアの声が聞こえるけど後回しだ。

クロウ。薬剤師だ。薬草を取ってきたり薬を調合したり知識と器用さはそこらの医者を上回る。

軽い怪我や病気なら街までいなくても彼がなんとかしてくれる為、心強い。

「僕はクロウ。まあ、薬の調合なんてものをしてる。何かあったら気軽に聞いてきてね」

最後にメリア。クロウの奥さんでランディの妹。少し前までうちの家事を全般的に受け持ってくれてたけど今はクロウの子供を身籠っているから、他の人と分担してやっている。もう少ししたらお腹も目立つようになるだろう。

「よろしくね、ミナちゃん。で、リユート、この子。もしかして…」

「ああ、うん。まあ、大体予想はついてると思う。みんなに紹介させて貰うよ」

オレは彼女の手を握ったまま肩に手を置く。

「彼女はミナ。王都でハンスから引き取ってきたんだ。右足が動かなくて声も出せないから、何かあれば手伝ってやって欲しい、そして……」

少し深呼吸をする。うちの家族たちは一応もつ何が言いたいかわかってるのだろう。歓迎ムードで迎えてくれる。

意を決して口を開く。ミナ、怒らないかなあ……。

「ミナさえ、良ければ…君もオレの家族の一員になって欲しいと思ってる」

彼女の顔は今までで一番驚いていた。

十三話 100の家によつこそ！（後書き）

新キャラクター気に登場です。

そろそろ1章的なものが中盤に差し掛かってきたあたりだと思えます。

まだまだ続きますがよろしく願います。

十四話 100家族会議（前書き）

総合PV1万人、総合ユニーク1000人と突破しました。
すごいのかどうかよくわかりませんが嬉しいです。

読んでくださってありがとうございます。

十四話 100家族会議

騎士になる事を定められた家。騎士として国に仕える事が当然の家。オレが生まれたのはそんな家だった。幼い頃から訓練を必死でこなして年上の兄と互角の腕を持つオレに父さんはとても期待していた。オレも父さんの期待に答えるべくさらに修行を積んだ。痛かったし疲れたけど……剣を使うのは大好きだった。

だけど、オレにとってソレは……父さんが、母さんが、兄さんが、妹が好きで頑張ってただけで騎士になるとかはどうしてもよかったんだ。その事に気づいたのは14才の誕生日だった。

うちにはかなり大きな借金があったのだ。別に父さんが作ったワケではない……いや、正確には父さんも作ってた。だけど、それは先祖代々から積み重なる借金。うちは騎士の家系のため学校に通わず国に仕え子供が生まれたら惜しみない騎士としての教育をしていた。

その結果……金銭に疎くなったのだ。オレの上の兄も国の役に立てれば我が家の抱える借金など関係ないといっていた。

しかし、現実問題として払う宛がない借金を抱え、家はそう遠くないうちに取り潰されそうになっている。オレはその事に我慢ができなかった。騎士として修行しながらどうすればいいか必死で考えた。その結果、金を稼ぐのに一番最適である職業、商人になると決めたんだ。

そして父さんは激怒してオレを勘当した。それでもオレは家族を救うために必死で頑張って金を稼いだ。

今は家の借金も全て払い終えたワケだが、その話はまた今度にしよう。

剣の腕もありお金は順調に溜まっていったけど……オレは寂しかったのだ。

元々、家族が大好きだった少年。それがいきなり世間に出て一人で馬車に乗り野宿をして暮らすのはとても辛い事だった。

どんなに仕事がつまらなくてもオレは寂しい夜をすごしていた。

そんな時に出会ったのがハンスだ。最初は奴隷商人などまったく信用していなかったけど、彼が無理やりお前の為でもあると二人の奴隷をオレに買わせてきた。

オレが買わないと酷い貴族に買われると脅されては当時、甘かったオレには逆らうことはできなかった。まあ、結果的にこの事には感謝している。

オレは良く危険な場所に赴きアイテムを仕入れてくる。そんな物に奴隷二人がいては間違いなく足手まといだ。だから王都の端に小さな家を借りてそこに二人を住まわせておいた。

そしてオレはまた仕入れに行く。一週間ほど経って王都に帰ってきたんだっけか？一応、自分の所有物である二人が気になり部屋を訪ねてみる。

……そこには三人分の食事があって、彼らはオレにお帰りといってきた。きてくれた。

二人はオレに感謝してオレが紹介した商店で働いてソレが終わると毎日三人分……自分たちとオレがいつ帰ってきててもいいように食事を作ってくれた。

王都に3日ほど滞在してまた出る時、いってらっしゃいと言ってくれた。

それ以来、オレは、二人の待つ家に帰るのが楽しみになっていた。

まあ、それがランディとメリアだったりする。

それからしばらくしてオレはこの家を建てて自分たちの家として二人に家族になつて欲しいと頼んだ。

まあ、結果は今こうして一緒に暮らしてる通り。それから三人家族が増えた。みんな、元々ミナと同じ奴隷だ。

コレットだけは奴隷にされそうなトコを金銭で買い取った為違つたりするけど、まあ、同じような流れだ。

血はつながってなくてもオレはこの家族を本当に大事に思ってる。

今回、心配をかけた事は本当に申し訳ない。だから包み隠さず起つた事を話そう。

「まあ、それならカリッツオさんが死んだと思つのも無理ないわね……。でも、生きてて本当に良かった」

居間の大テーブルに座つてみんなに今までの事を話終わつたらクレアが一番に口を開いてくれた。わざわざ隣街からきてもらつて申し訳ない……。仕事もあつただろう。

ふと隣の席を見るとミナもちょっとびっくりしてる。まあ、勇者云々の話を聞けば驚くか。

この世界の人が召還された事なんて今回が始めてらしいし。

「で、リユートの勇者としての能力ってなんなんだ？」

ランディの発言に場が凍りつく。ていうか、オレが凍ったから場が動かないのか……。

「いや……ない……」

「は？」

「いや、召還される前とされた後で変わったトコは見当たらない……」

レーナ様は類稀なる剣技とか言ってたけど、あれはオレが元々持ってたものだし……。

勇者つてのは召還された時点で一つの特異能力が身につく。それがあからこそ、魔物や魔獣……そして魔王相手に常人より有利に戦えるのだ。

初代勇者達もシグルドは近辺の魔物の動きなら見えなくても全て把握できたらしいし、大魔法使いアリスは魔法を使っても魔力が減らなかつた。魔剣士アウルはその名の通り全ての魔力を打ち消す魔剣の召還。巫女カミナギは治癒術とは根本的に効果の異なるヒーリング。ファルスは自分や味方の姿を消せたそうだ。

「でも、あれから3日たつけど、まったく変わった事はない」

「あははは……リユートさん……らしいです」

メリアが気を使ってくれる。ちょっと泣きたくなるけど、いいじゃないか！勇者としての能力なんてなくなつたって！

「まあ、かなり限定された能力つて事もありますしね。例えば魔王相手に絶対無敵。とか」

クロウはクロウで気軽そうにとんでもない事を言ってくれる。まあ、

ありえない話ではないけど、魔王と会うまで一般人かよ。

「リユートが危ない事するのに、私は反対だなあ……能力なんてなかったほうがいいよ、うん」

ああ、コレット！一番年下なのになんてしつかりしたい子なんだ！
ありがとうなあ、コレット。と彼女の頭を撫でると嬉しそうに笑ってくれる。この素直さばかりはミナも上回る可愛さだ。

「ところで……リユート。私はそんなことよりも、そっちの彼女が気になるんだけど？」

あー……クレアさん、やっぱりそこで突っかかってきますか？クレアは家族の一員ではあるけど、ちょっと嫉妬深い。多分、付きっ切りで手を握って一緒に歩いてたのが気に食わないんだろう。

「言っただろう？ミナは右足が動かないんだ。一応、杖を使えば歩けるけど何かあった時の為に手を貸して歩いた方が安全だから手伝ってるんだ」

まあ……そういう事なら。とクレアも一応納得してくれる。

「ミナの事は良ければみんなも手伝って欲しい。本人の意思もあるけど、家族の一員として迎えようと思ってるから……ミナも遠慮せず自分の家だと思って寛いでくれ」

ミナはあの後、家族になる事を承諾してはくれなかった。とはいっても、家族の話を決してくれたのはランディとメリアの二人だけだ。これからどうなるかはわからないけど、彼女がここに居たいと思ってくれる限り一緒に暮らして行く事になるだろう。

「よろしくね、ミナお姉ちゃん」

コレットがミナの傍までいってにつきり笑う。

うん、コレット可愛いぞ！……てミナも笑ってる！？うわー……オレに笑顔見せてくれた事なんてないよ、あの子。

シャルの実やお肉を食べる時、嬉しそうな顔を見たことは見たことあるけど、オレ自身に笑いかけてくれたことなんて一度もない。

コレットに続いて、みんなも歓迎してくれてる。部屋を用意しなくちゃな、どこが空いてたっけ？、ご飯の量一人当たり多く作る事になりますねー、もう少し大きいおなべ欲しいなあ……。怪我したり具合悪くなったら遠慮なく言って欲しいな、僕ができるのなんてそれくらいだから。等々オレが加わらずとも勝手に話合っってくれる。事実ここは全員の家だがオレが買った家である為、最初はランディやメリアでさえも遠慮がちであった。今では本当に各自自由に使ってくれて嬉しい限りだ。

「一応、ミナの部屋はオレの隣にしようと思うんだ」

なんか合った時に誰かが傍に居たほうがいい。クレアが不服そうだけど他の4人が納得してくれたし、それで決定でいいだろう。

「ミナ、おいで。こっちだよ」

またミナの手をとるとクレアがジト目で見てくる。睨まない分、ミナより優しいなあとか思いつつ階段をあがっていく。ちなみに、うち三階建てだ。

自分の部屋を通り過ぎ1個先……2階の端っこの部屋の扉をあける。

「ミナ、君の部屋だ。まあ、自由に使ってくれ」

扉を開くとミナが中に入る。まあ、部屋とはいっても何も無い。多
少質のいいベッドと簡単な棚があるくらいだ。

家族の食事代や生活費はオレが全額出している。というか、まあ、
家を守ってもらってるからそれくらい当然って言えば当然だけど。
ただし、それ以外は自分で稼いで貰ってたりする。ミナはちょっと
事情が事情だし、どうしたらいいか迷う部分はあるけど、仕事を探
す手伝いはオレもしよう。考えるのはそれでも駄目だった時からで
いいだろう。

流石に右足と声のハンデはでかいからなあ……。仕事といえば、な
んか王宮からミスリルとってこいって言われてたか。

期限まではまだまだあるし、久しぶりに家でのんびりしてそれから
終わらせてもいいだろう。

ミナはよたよた部屋の中まで入りベッドに腰をかける。そして……。

大きくオレに頭を下げてくる。

ありがとう。てことなのかな。

いきなり奴隷として扱われ買われた先でこんなに普通に扱われるのは彼女はまったく予想していなかった。

それに……リユート達は気づいていないが、自分を家族として迎えてくれると聞いた時は本当に嬉しかった。

ここにいる人たちは多分、誰もがそれなりの過去を背負っているであろう。

父は消え母は逃げた。そんな自分と同じような過去を持っていてきつと、新しい家族を大切に思ってる。自分が家族になっても大事にしてもらえる。いや……多分、現時点ですでに大切に思われてるんだろう。

リユートは酒場でミナが泣いた時、何も聞かずに私に絡んできた人たちが殴り飛ばした。

その理由が、ここにきて彼女にもわかった。

リユートは……ハンスから私を買った時に、すでに私を家族と同等の扱いをしてくれてたんだ。

そう理解するのは彼女にとっても難しい事ではない。

短い旅だったけど、ミナはすごく優しくしてもらったのを実感している。

だから、今、自分にできる最大限の感謝をリユートに示したんだ。

「ようこそ、オレの……そして新しい君の家へ」

リユートは彼女の前に立ち頭をちよつと強めにくしゃくしゃ撫でる。少し迷惑そうな目をされたが振り払いもせずミナは大人しく頭を撫

でかせてくねていた。

十五話 1は感じる穏やかな生活（前書き）

今日ギリギリの投稿です。

日付で言えば三話投稿になってますがけど十三話は個人的には昨日の分なので今日投稿してみました。

ミナ視点のお話になります。

十五話 1は感じる穏やかな生活

私が……新しい家に来て1週間ほど立った。

みんな良い人だし、ご飯は美味しいし、すごく穏やかな日々……リユートは少しむかつくけど。

一番お世話になってるのに、なんでだろう。リユートが来るとつい睨む。良い人だったのはわかってるけど、一番最初の印象が多分良くないんだ。お金で私を買った最低な人だっと思ってたもんなあ……今は感謝してるけど。

「お姉ちゃん、これでいいの？」

コレットの手を見ると小さな編みかけのマフラーがある。少し歪だけど最初はこんなものだと思う。

そうそう、私に仕事が見つかった。リユートが仕入れたけど売れないアイテム……珍しい物ばかりだけど値段も張るから売れない事が結構あるそうだ。それを保管してる倉庫にふわふわした糸を見つけたのだ。リユートが言うには一角獣の皮を作る時に余る毛を紡いだ物らしい。皮は売れたけど、この糸は耐久力も低くて売れにくいみたい。

それなら、私が欲しいとお願いした時に、笑って、いいよ。って言うてくれた。言葉を喋れないのは大変だけど、リユートは私の言いたい事をよくわかってくれるから、あまり不便はない。

それで、その糸は私の世界にあった毛糸そのものだったのだ。適当に編み棒つばいものを作ってマフラーを編んでリユートにプレゼントした。今まで貰ってばかりだったから少しでもお返しがあったんだけど……リユートは予想以上に驚いて喜んでくれた。

それで、これを市場に出してみてもどうか？と私に言ったんだ。私がリユートにマフラーを渡してから3日後、新しくできたマフラーをクレアさんとランディさんが街にもって行って雑貨店に交渉してくれたらしい。

帰ってきたランディさんは私に銀貨を50枚ほど渡してくれた。びっくりした。

この世界では編み物って概念がないらしい。雑貨店に持って行って交渉していたら、その場に居たお客さんが即決で55銀貨で買ってくれたそう。4銀貨は店主の取り分で1銀貨は街までの移動費用。それで残りは私の取り分……正直、ちよつと多すぎる。

リユートに貰った毛糸はまだまだあるし無くなったら他から買っても良い。

ちなみに、リユート曰く、私にくれた毛糸全部で1金貨くらいだそう。うん、マフラーを売ってお金ができたらちゃんと払おう。

セーターとかも編みたいけど機械無しで編むのはどれくらいかかるかちよつとわからないから保留。

そして、今はコレットにも編み物を教えてる。

元の世界でお金があまりなかったから覚えた事だけど、こんなところで役に立つとは予想外だった。

コレットは可愛い。そして、まだ小学生を卒業したであろうくらいの年齢なのにすごく賢い。

多分、この家でリユートの次に私に気を使ってくれてる。……この年でこんな生き方を覚えるなんて、その前の生活をちよつと想像したくはないけど。

彼女も多分、辛い目にあってきたんだと思う……。

コレットの頭を撫でると、えへへ。と笑いかけてきてくれる。私も思わず笑う。

ああ、こんなに素直に笑ったのは何年ぶりだろう。

この世界に来てから…：それどころかお父さんが蒸発してからこれだけ穏やかな気持ちになった事はない。

少しずつ…：自分の中の帰りたいてって気持ちが薄れてるのがわかる。

はあ、本当にここの家族になってのんびり暮らすのも悪くないかなあ……。

「ん？ミナ、ちょっと待ってる」

階段を降りているとリユートが駆け寄って私の手を取ってくれる。階段を降りるのは一人じゃ大変だから、嬉しい。

けど、私は相変わらず素直になれないワケで……手を取ってくれるリユートを上目遣いで睨んでしまう。

「はいはい、危ないから我慢してくれ。ほら、ゆっくり降りるぞ」

いつも笑って私の態度を流してくれるリユート……。家族として受け入れられてるって事だろうし、すごく助かるけど、なんだろう。少し寂しい。

一階に行くとクリアさんが大きい鞆を持って、こっちを睨んでくる。

うっ……この人、他の人という時は優しいんだけど、リユートと居る時、特にこうやって手を引いて貰ってる時に冷たいんだよね……。多分、リユートが好きなんだろう。

「ミナ。クレアは本来、西にある街に住んでね。今日帰るんだよ」「リユート。弱みに付け込んで、その子に手を出したりしたら……」そんな事したことねえだろ！ってリユートは言ってる。まあ、そこは安心してる。できる立場にいるのに二人きりで同じ部屋に泊まった時も何もなかったし。

「クレアお姉ちゃん、もう帰っちゃうの？」

「うん、お仕事もあるからね。体には気をつけるのよ。コレット」コレットが階段を駆け下りてくる。手には編み掛けのマフラー。何かわからない事があったのかな？

私も最初に編み物を覚えようとした時は結構時間がかかった。案の定コレットはクレアさんに、いつてらっしゃい。と笑顔で言った後、こっちに駆け寄ってくる。

「えつとね、ミナお姉ちゃん……これ……」

ごめんなさい、と差し出されたマフラーを見ると編んでる途中で絡まっちゃったみたい。まあ、これくらいならすぐ直せるかな。

コレットから編み棒を受けとって毛糸を解いて行く。これくらいの失敗するのは普通だけど、コレットはすぐく申し訳なさそうな顔をして私をみてる。

あー、こういう時に喋れないのは少し不便だなあ。本当は大丈夫だ

よ、っていつてあげたい。

だから、私は代わりになるべく笑ってコレットの頭を撫でる。

「えへへ……ミナお姉ちゃん、ありがとう！」

うん、良かった。コレットが笑ってくれた。

彼女は多分、この家族のムードメーカー……精神的に大きく家族を支えているんだろう。

私は解き終わったマフラーをコレットに渡すと、ありがとう！と眩しいくらいの笑顔を見せてくれて階段を駆け上がったいった。

また私の部屋で編み物の続きかな？

「ミナ、私が居ない間リユートを見張っておいてね？変な事されそうになったらぶっ飛ばしていいからね？」

クレアさんが私の耳元で囁く。それだけ言うと彼女は、じゃ、またね。と言って扉を開いていった。

見送りとかしないでいいのかな？と思っただけど、西の街まで馬を使えば1時間くらいだって聞いたし、会おうと思えばすぐ会えるんだろう。

私も部屋に戻ってコレットの様子を見よう。自分の分も作らなくちゃいけないし。

……戻る時、リユートは当然といった顔で私の手を引いてくれた。

部屋に戻るとコレットがマフラーをもってくる。

うんうん、4分の1くらいの長さにはなったのかな？この子は覚えるのも本当に早い。

編み目も段々丁寧になってきてるし、すぐに街に持ってけるレベルになるんじゃないかな。

コレットに大丈夫だよ。と頷くと彼女はまた編み編みしだす。私も自分の分を編もう。

自分の部屋を見渡すとほとんど何も無いことがわかる。

流石にちよつと寂しいし許されるなら欲しい物もある。こんな自分でも仕事ができるのが……ちよつと嬉しい。

高校入ってすぐにアルバイトを始めたから働くのにはちよつと慣れてるしね。

今編んでるマフラーは素材がリユートから貰った最高の物だから、かなりの値段がつくんだと思う。

普通の毛糸を使ったらどのくらいの値段がつくのかなーなんて考える。

それに編む技術が広まったらそれこそ仕事になんてならないかな。

うーん、他のお仕事も考えないとなあ……。移動はできないし、声がでないから一人でできる仕事……。あるのかな？

ちよつと困った。まあ、食べさせてはくれるらしいし、少しずつでも稼げば一応暮らしていけはするんだらうけど……。

リユートの手伝いとかが……できないのかな？うん、ちよつと前の私ならともかく今の私じゃ足手まといになるだけだ。

まあ、今考えても仕方ない。とりあえず編み物で少しお金を貯めよう。

リユートから貰った毛糸で……後、5〜6個くらいは多分編める。

全部銀貨50枚として……金貨4枚くらい？ちなみに銀貨100枚で金貨1枚。

20金貨くらいで平均の年収くらいだから結構な値段になるかな。6個なら2〜3週間で編めるだろう。急げば1日1個だけど、食事の料理くらいは手伝いたい。

これでも、一人暮らしたたから料理には多少自身ある。今はメリアさんと一緒に料理してるけど、彼女は子供生まれるらしいし、そうだったら私が一人で作ってもいいかもしれない。それまでに、この世界の料理法をある程度覚えなくちゃ。

メリアさんの料理はお互い知ってる料理方法を教えあって作るため、とても楽しい。

この世界は下手に魔法が普及してるから、干したり漬けたりして保存するってことがあまりない事には驚いた。

氷の魔法で冷凍保存で簡単に持ち運びできるからなあ。

冷凍魔法くらいなら誰でも使えるほどに、魔法というのも珍しい存在ではない。

攻撃魔法や神聖魔法になると難易度が上がるらしいけど、凍らせる焼くなどの行為は時間さえかければ簡単にできる……らしい。

私はこの世界にきてすぐに魔法を使えたからその辺はよくわからなかったりするけど。

お城の人たちは未だに私の能力を異常な魔力量だと思ってるらしい。あまりもの出来事に激怒してお城に穴を開けて飛び出したことを思い出す。

見つかったら怒られる程度じゃすまないんじゃないかな……私。

リユートも勇者らしいし、そのうちまたお城の人たちと会う機会もあるかもしれない。

はあ……。

でも……一週間前、リユートに買われる前よりはだいぶ落ち着いていられる。

こんなに穏やかな生活ができるなんて本当に嬉しい。

編み物して料理してコレットと一緒に遊んで…元の世界で私が求めてた生活に限りなく近いものがここにはある。

コレットの頭を撫でると彼女は微笑んでくれる。私もいつか誰かと結婚して子供を生んで、こうやってのんびり過ごすのかな。

未来、誰かと一緒に暮らして手を引かれて一緒に歩く姿を想像する。その想像の相手が、リユートで……私はちょっと落ち込んだ。

リユート以外に信用できる人なんて知らないから仕方ないけど、なんだかなあ……。

十五話 1は感じる穏やかな生活（後書き）

異世界召還物で日常生活ってどうなんだろう？と思います。が次の展開まで少しほのぼのした内容になると思います。

z 今回説明文みたいな感じで長いし読みづらかったでしょうか… or

十六話 1の心情と状況（前書き）

今日は十六話のみの投稿となります。

明日も一応更新するつもりですが、どうなるか…。

十六話 1の心情と状況

穏やかな日々はゆっくり過ぎていく。あれからまた何日経ったかな。お昼ご飯も食べ終わると私は庭に出て、すでに日課になっている編物をしていた。

少し向こうでは、リユートとランディさんが剣の稽古をしていた。リユートの強さは酒場で少し見ただけだったけど、改めて見るとすごい。

多分私が城で戦った近衛騎士さんより強いんじゃないかと思う。

ランディさんも強いけど、彼曰く、ずっと稽古をつけて貰ってて対策がわかってるだけらしい。

それでもランディさんが勝った所は見たことない。

手数では圧倒的にランディさんが勝っているけど、リユートが模擬剣を一振りするだけでバランスを崩す。受け止めればいいのに、と思っただけで魔獣相手に通用するリユートの剣撃を受け止めるのは普通の剣士では無理みたい。

だから避ける事しかできず、そのうち避けきれないで吹っ飛ぶ。

あ、また吹っ飛ばされてる。痛そうだよね……あれ。

ちなみにリユートがランディさんの剣に当たった所は見たことがない。一応数えるほどはあるらしいけど、私はリユートが剣で防御したとこすら知らない。

全部軽々しく避けてる。

地面に転がってるランディさんにコレットが駆け寄りお水を渡す。

彼は立ち上がってお水を受け取るとグイッと飲み干すとリユートに向かって叫んだ。

「お前、ミナの前だと張り切りすぎだろ！居ない時より数段動きがいいぞ！」

軽く1Mくらいは飛んだと思ったけど……ランディさん頑丈だなあ……て、私？

「ミナにはオレの恰好いいとこ見て欲しいからな」

とか、リユートはリユートで言ってる。

自分の鼓動が少し高まるのがわかるけど、リユートにそんな状態にさせられるのが気に入らない。

一緒に宿屋に泊まった日から意識してるのは認めるけど、誰がコイツになんか惚れるか！

訓練が終わって隣に座ってきたリユートをポスンと殴る。

私の力くらいじゃあまり痛くなさそうだし、ただの憂さ晴らしだ。

「ミナ、昼のスープが飲みたい」

リユートが背筋を伸ばしながらそんな事を言ってくる。

今日のお昼は私が初めて一人で作ったものだ。

リユートは食事中もすごく美味しそうに食べてくれたし、そんな事を言われて嬉しくないはずがない。

わざとちょっと面倒くさそうにして立つけどリユートに手を引かれ台所に向かう私の心は間違いなく弾んでいた。

手袋越しに握られる感触も大分慣れたな。

少し前にリュートが手袋外したトコを見たことあるけど……すごく傷だらけでゴツゴツしてた。

剣術の鍛錬の結果だっけって言ったけど、どれだけ剣を振れば、ああなるのか、想像できない。

少し考えこんでたら頭の上にぽふっと何が乗せられた。

……リュートが人の頭に手をのつけてる。なんかまたニヤニヤしてるしっ。

髪には気を使ってるんだ、乱れる！

頭を動かして頭の上の手を落とすけどリュートはまた笑顔。

……なんか、また気を使われたのがわかってムカつく。

私はぶいっとそっぽを向いて、そのまま台所に一緒にいく。

……それでも一緒に行くんだな、私。
なんか凹んだ。

お昼に作ったスープをそそぐとリュートがテーブルに持って行ってくれた。

食事を作ることはできても運ぶのは難しいから有難い。

本当は夜の分まで作ったつもりだったけど、意外に好評でもう残り少ない。

特にリュート。何杯飲んだのよ……嬉しいけど。

中途半端に余ってるから私も食べよう。

「ミナの料理ってなんていうか……珍しいよな」

テーブルでスープを飲んでるといきなりリュートがそんな事を言い出した。

……確かにこの世界にはない方法で料理してるけど。

漬物や乾物がないのはまだしも、煮るって概念がないのは驚いた。この世界のスープはお湯に具を投げ入れて味をつけたものでしかない。

野菜を小さく切って塩湖沼で味付けした後にリュートに貰った常時数百度の熱を帯びた石で煮立てた簡単なスープが大好評だったほどだ。

とはいえ、元の世界にない料理もあるんだけど……。

魔法を使ってお肉や魚の中の部分だけしっかり焼く技法……外はレア、中はウェルダンで旨味がまったく逃げてなくて美味しかった。

世界の違いって大きいなあ、やっぱり。

お水に入れておいてもずっと発熱したままの石とかあるし。

「そう言えば、ミナは魔法まったく使えないのか？」

む……一応魔法は使える。ただ、よくわからないけど魔力が回復しない……どうなんだろう、これ。

「もしかして魔力が空っぽ？」

……リュートはなんで、こつも私の言いたいことわかってくれるんだろう。嬉しいけど表情には出さずに頷く。

「もしかしてミナ…… 奴隷の首輪の効果を知らないのか？」

……なにそれ。私がつつとしてるこの首輪？

リユート曰く、この首輪はどこかの奴隷商が売ったかの印らしい。ハンスさんじゃなくて、その前の誘拐集団の事かな。

で、その印の他にも…… 魔力が回復しなくなる機能があるらしい。魔法そのものが使えなくなるのもあるけど、高価な為、ほとんどは回復の障害。

奴隷として扱おうにも戦闘魔法の使える魔法使いは油断ならない。だから魔法使いとしての能力を制限する為の機能だつてリユートは言ってる。

「首輪を外したら魔法は使えるようになるよ。はずすには奴隷商人に納金するのが一番だ」

どんな仕掛けがあるかわからないからな。つてリユートは言う。

そっか……私、魔法はまだ使えるんだ……。

今までは戦つてばかりだったけど自衛にも生活にも役に立ちそうだから嬉しい。

少しだけリユートと一緒に仕事できるかと思ったけど、やっぱり足がネックになるだろう。声は……リユートとなら、なくても大丈夫な気がするけど。

「そういえば、ミナ。触媒は？」

……人がいろいろ考えてるのにリユートはまた私の知らない単語を

出す。

「いや、睨むな。流石に魔法使えるなら触媒はわかるだろ？ミナが触媒持つてるの見たことないなーって思ってたさ」

少し前まで魔王よりも魔法使えてたけどわかりません。
なんだよー、どうせ常識もわからずに飛び出したわよ……。

私はとりあえず首を横に振っとく。

「そつか。んー、倉庫になんか触媒あったかなー。ま、あっても首輪があつたら意味ないんだけどさ」

結局、触媒とやらの説明はして貰えなかった。

ちなみに首輪を外すには金貨20枚くらいが相場らしい。
今、手元にあるのはあれからさらに一角獣の毛糸で編んだマフラーを5つ売った分：銀貨250枚くらい。

新しい毛糸が欲しいけどリユートが、「ちょっと待ってる」とか言っ
つて、買わせてくれない。

銀貨は100枚で金貨1枚……遠いなあ……。

リユートが貸しとくか？って言うてくれたけど私は領かない。
だって私の体を気にして言うてくれるから。

私はリユートに普通の女の子として扱って貰いたいんだ。

……手、引いて貰えるのは嬉しいけど。事実、一人じゃ歩きにくい
し。

コホンっ……まあ、他の家族と同じ扱いしてほしいの！

一通り話し終わるとリユートは、ちょっと倉庫にいつてくる。とい

って三階に上っていった。

もう、こんな時間だし、私も夕食の準備をしよう。今日は夕食も私
が一人で作る事になる。

台所に来るまでは一苦勞だけど、台所自体は狭いしつかまる場所も
沢山あるから料理は辛くない。

昼はスープと炒め物だったから夜はシチューと……なんか、パンみ
たいな物にする。

似たような食べ物はいっぱいあるけど、微妙に違うから困る。パン
にしてはすごくぱさぱさしてるし……まあ、だからシチューには合
うんじゃないかな。

メリアさんが料理上手だから少し気後れするけど、この世界にない
煮込み料理なら私も自信を持って出せる。

全部、それっぽい材料を使ってるからできあがりはちょっと不安だ
けど……。

ああ、でも醤油だけは真似できる物が無い……すごく醤油が欲しい
……。

そんな事を考えつつ料理を作っていると時間はあっという間に過ぎ
ていった。

「うめええええええ！！ミナの料理って本当にメリアと同じ材料使っ
てるのかって思うなっ」

「あはは、兄さん、ご飯抜きにするわよっ」

ランディさんのリアクションは大げさで楽しい。メリアさんのご飯

もすぐくおいしいけど……多分、食べなれちゃってるんだろう。

「お姉ちゃん、今度私にも料理教えて欲しい！」

「ああ、コレット。メリアの代わりに俺に飯を作ってくれ！」

「コレットが包丁を持つのはまだまだ危ないんじゃないかな。僕は心配だよ」

食卓は賑やかだ。だけど……リユートがいない。まだ倉庫で探し物してて先に食べて欲しいそうさ。

せっかく美味しくできたのに冷めるぞ、ばか。

「ああ。そういえば後でリユートにも言っとくけど、俺、明日遅くなっかもしれねえ」

不意にランデイさんがそんな事を言う。ああ、メリアさんが心配そうな目をしてる……やっぱりアレなのかな？

「南の方で魔物が結構出たらしくてなあ。魔獣を見たって報告も上がってるみたいだし、王都で討伐隊を組むんだってさ」

それが明日来るから合流して傭兵として志願してくるそうさ。ランデイさんは傭兵や魔物退治でお金を稼いでいるらしい。

ま、心配いらさないさ。王国兵士と一緒に雇ってくれるかどうかもわからないからな！なんて気楽にいつてるけど、そのたびにメリアさんは心配してるんだろう。

クロウさんも真剣な顔で話を聞いている。この家で一番優しい人だからな、彼は。

「ふいー、見つかった、見つかった。ミナ、お待たせ」

そしてやっとリュートが降りて来た。彼のシチューを見るとまだ湯気がたつていて私は少し安心する。シチューを口に運びながらリュートは、ミナは本当にお肉好きだなと笑う。

作ったのはビーフ……かどつかはわからないけど、似たお肉を使っただけならシチュー。悪いかつ、1年くらいずっとパスタ食べてたから美味しくって仕方ないのよ！

「ミナ、おかわりっ」

って、リュート、食べるの早い！ていうか、夜は余分に作ってないからないっ！
ぺしぺしと隣に座るリュートの頭を叩く。

「そっか、残念。うまかったのに」

……なんで、リュートは私の言いたい事がわかるのか本当に不思議だ。

リュートは今度はパンを食べている。アレも一応私がやり方を教えてもらって焼いたものだ。
どうにかして、もう少しふわふわにできないかな……。

「そだ、ミナ。これあげるよ」

リュートが私に何かを手渡す。それは……リュートの髪と同じ灰色の宝石の指輪だった。

「オレが駆け出しの頃に見つけた触媒だよ。首輪取らない限りは意

味がないけど一応着けとけ」

だから、触媒って何！

私の視線に答えずにリユートはもうランディさんとさっきの魔獣退治の話をしていた…。

……て、指輪を着けろって言った！？

十六話 1の心情と状況（後書き）

ほのぼのほのぼの…異世界召還物としてこれでいいのだろうかorz

十七話 100の決断。災厄の襲来。(前書き)

今日中になんとか投稿できました…。

書き上げるのに非常に苦労しましたorz

最初からこの展開に持ってこうとはしてたのですが、どう文章にしているのか…。

ぐだぐだかもしれませんが十七話、読んでやっってください。

十七話 100の決断。災厄の襲来。

朝、顔を合わせるなりいきなり顔を赤くしたミナにポスンッと殴られた。

いや、痛くはないんだけど……普段ならミナの言いたい事はなんとなくわかるけど、殴ってくる時だけはわかんねえっ。

昨日、触媒の指輪まであげたのに、なんか途中から目を合わせてくれなくなった。

一応、指輪はしてくれてるし、たまにポーツと見つめてるから気に入ってくれたんだと思う。

ちなみに触媒とは魔法使いが魔力の回復をする際の補助アイテムだ。普通に休憩しても回復する量は微々たるものだけど触媒を身に付けて寝ると一般の攻撃魔法使いなら半分程度は回復する事ができる。

……つか、オレがミナにあげたのは竜の体内に埋まっていた宝石で作った物だから人間には過分な触媒だけど。

昔、とある事情から竜種と戦って勝ったんだが、その事はなるべく伏せて起きたいので売るに売れなかった宝石だ。竜の涙とも呼ばれる宝石は竜種が自身の触媒として体内で製造した物だから触媒としての効果は高い。

なんだかなー、と思いつながら居間に降りるとランディが出掛ける準備をしていた。

「リユート……腹減った……」

どうやら本当にメリアにご飯を貰えなかったらしい。テーブルではミナとコレットが仲良く食事していると云うのに……。

ランディをスルーして朝食食べてるあたりミナもこの家に慣れてきたなー、なんて思う。

ランディからしたら洒落にならないけどランディだしなっ。

「はあ、とりあえず行ってくるよ……雇って貰えるかどうかはわからないけどさ」

ランディとしても危険な仕事前にメリアが拗ねるのはなれたものだ。

「帰ってきたらご馳走を用意してくれてるさ、きっと」

「いつもの事だな」

二人で笑い合い玄関を出ると気持ちいいくらいの青空だった。

「兄さん！」

ランディが馬に荷物をくくりつけてるとメリアが出てきて手に持った風呂敷をランディに押し付ける。

「……お腹減って負けたって言われても困るから」

「メリア……オレはなんていい妹を……！」

いい妹は兄の朝食を抜いたりしないんじゃないかと思うけど、ラン
デイが感激してんのに水指すのも悪いな……。

「じゃ、行ってくるな!」

「絶対に帰ってきてね……。」

確かに危険な仕事だからメリアが心配するのもわかるんだけどなあ。

ていうか、台所から出てこないと思ったら、弁当つくってたのか、
甲斐甲斐しい。

「ほら、いつまでもランデイの背中追っついてないで家に入るぞー」

「あ、はい。あの……台所借りててもいいですか?」

多分、ランデイをご馳走で迎える準備だろうなあ……本当にいい兄妹
だな。

「好きにしていさ。明日買い出しに行こうな」

遠回しに冷蔵庫の中身全部使いなって事だが、ちゃんと理解しても
らえたらしく喜んで台所に走っていった。

「身重なんだから、気をつけ……。」

言ってる最中にガチャンと玄関のドアがしまりオレは取り残された。

聞いてよー!!

ま、そんな訳でメリアは台所に引きこもり。ミナとコレットは編み物。ランディは魔物退治とオレだけ暇になっちまったなあ。

とりあえず、やる事もないし部屋のベッドでごろごろしてみる。

そういえば、ミナは魔法使えるのかな……。使えそうだな、あの反応は。

使えるとして、どこまで？

触媒を持ってないって事はあまり回復しなくても今まで大丈夫だったって事だろうなー。

あまり期待はできないか。でも教えたら料理用の魔法くらいは使えそうだな。

ミナの飯はうまい。ちょっと楽しみになってきた。

ふむ、魔力を回復する薬でも作れば自然回復はしないまでも魔法を使えるようになるんじゃないか？

マジックポーション……。なんか偉い高かった気がするな。確か材料に高位魔獣の一部を使うんだっけ？

「ドラゴン……」

魔獣てか神獣って部類だけど保有魔力的には問題ないんじゃないだろうか。

そういえば、クロウって何してるんだ？あいつなら作れるかもなあ

……よし！

「クローワー！クローワー！！」

とりあえずどこにいるかわからないから叫びながら探し回ってみた。

「恥ずかしいから大声で名前呼んで走らないでよ！！」

ちなみに、裏庭の薬草畑を弄ってたらしい。

「まあまあ、どうせ家族以外には聞こえやしないって」

「それでも恥ずかしいんだよ！」

てれ屋さんめ。普段から温厚な彼が怒るのも、まあ珍しいんだけどさ。

まあ、コイツはなんだかんだ言って優しい。

「はあ。それでどうしたの？一応用があって呼んだんでしょう？」

溜息吐かなくてもいいじゃないか。

「いやな、マジックポーションを作れないかと思って……」

人が言ってる最中にまたクローウは溜息を吐く。

「はあ、リユート……？マジックポーション自体は作るの難しく

ないよ。でも材料が絶望的だよ？いいかい、まずは……」

つらつらと普通のライフポーションの材料があげられてく。ライフポーションはあれだ、飲む治療術だと思えばいい。

治療術は人体の回復能力を高める事で傷の治りを早くする事ができる。だから、自然治療しない傷は治すことができない。ライフポーションも同じだ。

「まあ、ここまでは簡単だよな。普通のライフポーションでも使われているし。後は聖水と太陽ハーブ……これも貴重だけどもあるけどさ……。最後の一つが絶望的だよ。魔力を多く持った生物の血」

「えっと……ドラゴンの鱗とかじゃ駄目？」

「鱗に血液は流れてないよ……ていうか、ドラゴン？どうしたんだい、それ」

「いや、前にちょっと倒してさ。じゃあ、翼とか……？」

「また無駄使いたんだね、リユート……。つて、翼！？うん、それならいけるけど……いったい幾らしたんだよ」

また溜息をつかれる。いやいや、一応本当に倒したんですよ？数年前に。

二人で倉庫に言ってミナに渡した宝石があつた場所をがさごそ漁る。心なしかクロウの顔も弾んでいるように見えるな……。こいつ怪しい薬作つたり、希少なアイテムをいじるのが好きだからな……。

「すごい！リユートの倉庫は何度か見たけどこんなところにドラゴンの部位があるだなんて……」

「高値つくけど売れにくいんだよなー、どうにも」

ちなみに、依頼で倒したんだが依頼主が欲しいのはドラゴンの角だけだった。普通ならドラゴン退治なんてまず引き受けないけど、た

またま山に巢を作つて近隣の街を襲つてるドラゴンがいる話を聞いた後、竜種的に下位な種族であつた為、大博打にでてみた。まあ、もう一度戦つたら死ぬ自信があるな。途中から折れたアダマンタイトソードで戦つてたし。

「一応、もつて帰つて来れそうなたこだけ持つて帰つてきたんだが……ドラゴンなんてもの市に出して目立つのも嫌だしなあ」
「その目立つ物を買つたのは君だよ……」

いや、だから倒したんだつて!!
結局、クロウは信用してくれなかつた。泣くぞ。

ま、マジックポーションはちゃんと作つてくれたからいつか……。

ちくしょう……どうなつてやがる!

俺達、傭兵が王国軍に掛け合つとすぐに雇つて貰えた。西の街の冒険者も何人が来ているようだ。

人手不足……いや、王国軍の数は十分居たが、ソレ以上に敵を警戒していたんだろうな。

ここよりもつと南の街が魔王に滅ぼされた後だからな……。数は多いに越したことはないし傭兵連中が消耗した所で国にとっては痛くも痒くも無い。都合がいいんだろう。

だが、冒険者にも国にもオレにも誤算だったのは……魔物達が手を組んでいた事だ。

魔物が他種の魔物と手を組むだなんて聞いたことがない！

ウェアウルフに翻弄されオーク共の力に押され、空からはガーゴイルが魔法を放ってきているが、数で勝る王国軍は隊列を入れ替え、なんとか凌いでいた。

敵方に魔獣がいたのは報告にあつたし、魔獣相手への対策も充実してる。だけど、それは単一種を相手にした時のみの話。複数種の魔獣を相手にする時の対策なんて……ない。

魔力を持って変化したとはいえ、ただの動物が他の種族と協力して狩りをするなんてありえないのだ。

「退却！！退却！！！！西の街まで下がれ！」

くそ！ついに撤退命令かよ！

……西の街の防衛施設を使って戦えば恐らく勝てるだろう。

でも、家はどうなる？

くそ！本当に来て良かった……！急いで帰って、みんなと逃げないと！

夕食前、ミナにまた色々聞いているとコレットが怪我をしたランデ
イを運んできた。クロウが慌ててライフポーションを持ってきて、
メリアが手当てをする。

「ばか！ばか！！ばか、ばか！！」

メリアは半分錯乱気味だ。けど、見た感じ怪我は大したこと無いな
……ちゃんとライフポーションを使えば明日には直るだろう。けど、
今の問題はそこじゃない。

「ランデイ……王国軍はどうした？一人なのか？」

様子が妙だ。怪我をして帰ってくるなら王国の付き添いくらいはあ
ってもいい。

途中に野盗にでも教われない限り、一人で怪我をして帰ってくるな
んて不自然すぎる。

「ハア……。ちょっと落ちついた……ありがとな、クロウ。メリア、
悪いちょっと話をさせてくれ」

ランデイは今日の朝からあった事を語りだす。

王国軍に掛け合うとすぐに雇って貰えて他の傭兵達と進軍していた。
最初は数匹の魔物との散発的な戦闘。それから段々と増えてきてオ
ークの大群と戦闘に入った。

優勢だったけど、気づいたらウェアウルフに囲まれて、密集しかけ
ていた所を上空からガーゴイルに魔法を打たれた。

「王国軍は撤退を決意、西の街で迎撃をする……。ここも危ない。みんな、急いで逃げようっ」

魔獣が手を組むだなんて話は聞いたことがない……。けど、ランディが言ってるんだから本当だろう。

よくわかってないコレットはともかくメリアとクロウは顔色を変えている。魔獣の大群……。全部が来るわけではないだろうけど、ここに留まるのは危険だ。だけど、一つ問題がある……。

「ミナ……。馬には乗れるか？」

ミナが馬で逃げる事を期待したけど残念ながら彼女は首を横に振る。馬は三頭いる。けどコレットも馬には乗れない。馬に乗れるのは二人……。

オレが馬にのってミナを後ろに乗せるか……。駄目だ。腕だけでオレを掴んでるんじゃない。乗馬経験がないんじゃない、ミナの足じゃ馬の全力に振り落とされる確立が高すぎる。ゆっくり走ってる暇は……。多分ない。

「クロウ、メリア。二人で馬にのって逃げてくれ。行き先は任せろけど、西の街は駄目だ。もう魔物が行ってる可能性が高い……。クロウ、頼んだよ、二人を」

メリアとその子供……。その二人の命を失うわけにはいかない。メリアが緊張から強張っているけど、クロウに任せろしかない。クロウはしっかり頷いてくれた……。次は……。

「ランディ、君も逃げてくれ」

「馬鹿言うな！お前残る気だろう……。？オレだけ逃げるとか言うな、一緒に戦う！」

直情型で剣の腕が立つランディはこういう時、非常に頼りになる。だからこそ逃げてもらわなきゃいけない。

「コレットをどうする？彼女を連れて一緒に逃げてくれ。後、お前しかいないんだ」

ランディはハツとした表情でコレットを見た。心情的には残りたいんだろうけど、それにコレットを巻き込む訳にはいかない。

「ランディ、一緒にどこかにいくの？」

「コレット、君とランディでちょっとお出かけして貰うことになったんだ。ちょっと急ぐから気をつけてな？ランディの言う事をよく聞くんぞぞ？」

「うん！」

コレットは元気よく返事してくれる。ランディもそれを見て悔しそうにしているけど、納得してくれた事だろう。

後は……。彼女だけだ。

「ミナ」

名前を呼ぶとすぐにこっちを見てくれる。彼女の表情は予想よりずっと穏やかだ。

多分……覚悟してくれてるんだろう。そして、オレはその覚悟に甘えなければいけない。

「ミナ、君は……この家に残ってもらおう……ごめん、それしかないんだ」

驚いた様子もない。むしろ笑ってオレに頷いてくれた。
今まで一度も素直に笑ってくれた事なんてないのにな……。でも……。

「大丈夫、オレも一緒に残るから」

今度はミナの表情が驚愕に歪む。馬はまだ一頭ある。けど、彼女を残してなんていけない。

オレが戦えば……。もしかしたら、王国か西の街から助けが来るかもしれない。最後まで足掻いてやるっ。

彼女を見るとオレを睨んでいる。頭を撫でようと近づくと頬パンッ！る思いつきり叩かれた。

痛っ……。普段殴ってきてるのより痛いぞ！

「逃げろってか？ミナを置いては逃げれないよ。でも、ごめんな。

ミナと一緒に逃げれる手段が見つからないんだ」

ミナはオレの胸に顔を埋めて両手で叩いてくる。まったく態度と違って優しい子だ。

……。まあ、これくらいはしたって許されるよな？

オレは彼女を両手で抱きしめて耳元で囁く。

「大丈夫、ミナはオレが……守るから」

十七話 100の決断。災厄の襲来。(後書き)

1章ラストスパートに差し掛かりつつあります。

無駄に展開早くなってますけど、ここからはさらに展開早くなつていくかもしれませぬorz

更新ペースを元に戻せるよう頑張ります。

十八話 2人きりの戦い（前書き）

今回、リユート視点、ミナ視点が何度か入れ替わります。

読みにくいかもかもしれませんが、ご容赦を…。

十八話 2人きりの戦い

地平の向こうに数匹の狼の姿が見える。

ただし普通の狼ではない。全長が2Mほどもあり簡易的ながらも攻撃魔法を使う魔獣……ウェアウルフ。

「来たか……」

何事もなく時間が過ぎるのを期待したけど、やっぱりそうもいかないみたいだ。

オレは腰に腰からミスリル結晶剣を抜く。

普段は3本ほど持ち歩いているが、今回はできるだけ体を軽くする為に1本しかもってきていない。

代わりに家の至るところに武器を置いてきた。折れたら下がってそちらに持ち変えるから武器の心配はない。

「さて、まさか数匹って事もないだろうし……そろそろミナに作動させてもらうか」

オレは持ってきた魔具に魔力を通す。

さて、頼んだよ、ミナ。

私はリユートの部屋にいる。彼は家の真っ正面で魔獣を迎え撃つて言っていた。

私の事なんていいから逃げて欲しかったけど……流石に今からじゃ間に合わないんだろうなあ。

他の人はもう逃げた後だ。

クロウさんはメリアさんを乗せて……ランディさんは本当は残りたかったみたいだけど、コレットを逃がさなきゃいけないから感情を殺してコレットを連れていった。

本当はリユートにも逃げてもらいたかったんだけどなあ。

馬に乗れない私が逃げる方法は多分ない。

でも、ここに来て1ヶ月弱の間……私は十分幸せを感じれたから、他の人だけでも生きて欲しい。

……リユートが残ってくれて嬉しい自分がちよつとやだ。
だから残ってくれたリユートに応えよう。

私の持つ硝子の球体がポワツと緑色に光る。リユートからの戦闘開始の合図だ。

目の前には大きなモニター……さあ、私の戦いを始めよう。

家には対魔獣用の仕掛けがいくつかある。

オレの持つ魔力感知器に魔力を通すとミナが持つてる硝子玉が発光してミナがそれを合図に稼働させる。

ドン！と何かが爆発するような音が聞こえて家を囲うように立ち上る炎の壁。

例外はオレの立つ正面のみ！

「いくら魔獣でも炎に突っ込むのは抵抗あんだろ？こいよ……一匹残らず叩き斬ってやる！」

ウェアウルフ供はすでに目と鼻の先。向こうもオレには気づいてるだろう。

後は真つ向勝負！

ミスリル結晶剣を構えてウェアウルフを待つ。炎の壁の途切れを守る以上オレから攻める選択肢はない。

お、一匹飛び出してきたな。

群れの中でもまだ若そうなウェアウルフ。魔獣は人を相手にする時、ナメてかかる傾向があるが、こいつもそんな思考を持つてるようだ。

好都合！

飛びかかってきたところを避けもせずに叩き潰す。ミスリル結晶でできた剣は容易く胴体を切り裂き若い狼を地面に叩きつけた。

まずは一匹！

一息もつけぬまま襲撃は続く。次は二匹。タイミングを合わせて飛びかかって来たのを見ると狩には慣れてるようだ。

炎の壁の内側に入れる訳にはいかないから横に避けるという選択肢は取れない。

バックステップで距離をとりながら一匹を切り上げぶっ飛ばす。そして着地と同時にもう一匹に思いきり剣を振り下ろす。

前者はキャイン！と悲鳴を上げ後者はそんな暇もなく絶滅した。

ハア……ハア……最初に斬った奴は仕留めそこなっただか…。

しかし、もう一度飛びかかってくるだけの余裕はないだろう。辺りを見渡すと他のウェアウルフも一応警戒してくれたようですぐには飛びかかってこない。

ありがたい……あんな調子で戦ってたんじゃ体力がもたねえよ……。

狼供が様子見してくれてる間、ありがたく息を整えよう。

リユートから最初の合図があっってから数十分、硝子玉が光らないのは戦闘が順調なんだと信じたい。

私にできるのはリユートの部屋で彼の合図を待つ事だけ…。

私を奴隷状態から助けてくれたリユートは今も私を守ってくれてる。だからこそ気を抜かず硝子玉が光るのをジッと待つ。

来た……！赤い光！

赤は攻撃用のギミック。続いて緑色に光ったっていうことは炎の壁を抜けたんだ。

モニターとパネルを操作して急いで庭に配置されてるトラップを起動。

私がどれだけちゃんとリユートの意図通りに動けるかでリユートの負担を減らせる……私が死ぬ前にリユートが死ぬ……。

次いで硝子玉は青く光る。

青、回復系……。

リユート怪我したのかな？

すごく心配だけどまずはパネルを操作してリユートが立っているだろう辺りにライフポーションを撒き散らす。

ただひたすら彼の無事を信じて。

「なっ、しまった!!」

再度始まったウェアウルフの猛攻。

次々と襲いかかってくる狼に思わず反射的に避けて壁の中への侵入を許してしまう。

ミナ……頼んだよ……!

探知機に通す魔力を調整、緑と赤に光るようにする。

一呼吸置いた後、庭の地面が爆発しウェアウルフはギャン!と鳴いて吹っ飛ぶ。

合図から発動までが早い……!それに簡易的な合図しか考えてる暇がなかったのに、こっちの意図をしっかりと読んでくれている。

これなら安心して戦える……ありがとう。

心の中で自分を手助けしてくれる黒い髪少女にお礼を言う。

前を見ると今度は四匹のウェアウルフが一斉に飛びかかってきてる、けど……。

「負ける気がしないな……」

力を込めて剣を横に薙払うと楽に三匹を切り裂いた。いずれも致命傷だろう。残りの一匹の爪を避けきれず脇腹を斬られたが大した傷じゃない。また飛びかかって来たから口の中に剣を突き立てる。

一匹一匹は大した事ないけど、これだけ数が多いと流石にきついなあ……出し惜しみしてる余裕はないか。

青の光の合図を送るとすぐにライフポーションの雨が振ってきた。ミナの反応の早さに本当に感謝する。

少し傷に沁みるけど徐々に痛みは和らいで体力も戻ってきた。

「よし、まだまだいける！」

気合いを入れ直してウェアウルフと対峙する……けど、何かが変わだ。

何がおかしい……？何か違和感がある……感覚！？まずい！

慌てて後ろに飛ぶとさっきまで自分のいた場所に数本の炎の矢が突き刺さった。

感じた違和感は魔法詠唱の時に生じる魔力の揺らぎ。

それに気づかなければ今頃上空からの狙撃で焼かれていただろう。

「ガー……ゴイル……」

空には5体ほどの黒い石像のような魔獣が飛んでいる。

その手には再び炎で作られた矢が出現し、オレ目掛けて飛んできた。

ファイアアロー……ガーゴイルがよく使う下級攻撃魔法だけど空から一方的に攻撃できるなら非常に効果的な魔法だ。

「魔獣同士が本当に手を組むなんて！」

ファイアアローを籠手で打ち消し、飛びかかってくるウェアウルフを一刀両断する。

竜毛で編まれた籠手は下級魔法程度は完全に打ち消す。

って言っても空と地上……いつまでも防ぎきれものじゃないっ！
前から来る敵だけに集中してた先ほどまでと違い今は上からの攻撃にも気を払わなければならない。
例えばダメージを防ぎ続けても、すごい勢いで体力を失ってしまう。

そしてオレにとってさらに状況は悪い方向に転がる。

「ガールルル……ガアアツ！」

「な、後ろに!？」

急遽、後ろから襲ってきたウエアウルフの牙を剣で受け止めた……が、そのまま牙に強く噛みつかれる。

やばいつ、幾らミスリル結晶とはいえ魔獣と真っ向で耐久勝負は……!
…!?

慌てて剣を引き抜こうとするがもう遅かった。

ガリツ！と金属が砕ける音がした。

リユートにとって唯一の幸運は剣を噛み千切ったウエアウルフがミスリル結晶を飲み込んでしまい悶えていた事だろう。

半分ほどの長さになった結晶剣をウエアウルフに叩きつけると、ソイツは動かなくなった。

一連の動作を終え辺りを見回すと、そこには信じがたい光景が広がっていた。

なんで、こいつら……炎の壁を潜りぬけてるんだよ!？

別に炎の壁でウェアウルフを倒せるだなんて思っていない。けれど下位の魔獣なら間違いないく躊躇して飛び込み難いはずなのだ。

そして飛び込ませない為に隙間を作りそこを自分が守っていたのに……現にウェアウルフの一部は炎の壁の内側にいて、今でも炎の壁に飛び込み内側に入ってきてるウェアウルフもいる。くっ、また魔力が練られてるっ。

ウェアウルフの動きに少し自失していた為に気づくのが遅れたが、上空から飛来してきたファイアアローをなんとか避けれた。

上空のガーゴイル……四方八方からウェアウルフ……流石にここで戦うのは無理か……。仕方ない……。

魔力感知器に手を伸ばしてミナに合図を出す。

来た!……白い光!?

白は撤退の合図……なるべくなら外で食い止めたと言ってたのに……。

さっきのライフポーション使用から時間はあまり立ってない。

それほどまでに状況は厳しいんだろう。

戸惑ってる暇はない、やれる事をやらなくちゃ！

ミナはパネルを操作して家の外の魔力核に炎の属性をつけて起動させる。さきほど庭で爆発したのと同じ物だ。ただし、数だけは違う。家の回りに埋まっている数十個……それを一斉に爆発させた。これで少しは数が減らせただろう。

リユート……私も……戦いたいよ……。

十九話 2人、手を取り…。

外で轟音が鳴り響く。

ミナが埋め込まれた魔力核を全て爆発させてくれたんだろう。

「これで少しは数が減ればいいんだけど……ハア、やっぱり中まで入り込んでやがったか」

恐らくは窓からだろう。家の中にはすでにウェアウルフがうろついていた。

「ガウツ」

「おっと、そう簡単にやられるかっ！」

飛びかかってきたウェアウルフを避け半分の結晶剣を投げつけ、玄関にある新しい剣を手にし斬る。

「この調子じゃ、何匹は入り込んでるやら……」

外の生き残りもいずれ来るだろう。

考えれば考えるほど気が遠くなる。

助けが来るまで持つのか？敵が予想外に多い。それに行動が読めなさすぎる。

今までは有効だった単一種を相手にする対策も、怯えて躊躇してた火も途中から効果がなくなつた。

そうだ……効果がなくなったのは途中から……最初はガーゴイルもいなかったし火にも近づかなかった。何かおかしい……。

「ガウツ……ガアアツ！」

「……なっ!？」

少し考え事をし過ぎて魔力の歪みに気づかないとは……!？

目の前にはウエアウルフのファイアボール。ウエアウルフが放つ唯一の魔法攻撃。動きを止めないと打てないので滅多に使ってこないがアローとは比べ物にならない威力を誇るソレは高速でリュートに近づいてくる。

避けきれない……仕方ない、やられるよりマシだ！

竜毛の籠手でファイアボールを防ぐが、爆発する。耳がキーンとなり腕が熱い。アロー程度なら魔力を遮断した瞬間に熱も消えるがファイアボールはその後爆発し籠手で守られていない場所を容赦なく焼いてくる。

痛いつ、熱いつ……けど、その前に目の前の敵だ！

ファイアボールを弾いた右腕は動きそうにない、左手で剣を持ちまだ反動で硬直してるウエアウルフ目掛けて振り下すと鈍い手応えと「ギャン！」と断末魔が聞こえた。

腕は……無事か……？つて、あれ？

覚悟して自分の右腕を見ると意外となんともない。んな、馬鹿な。

小規模とはいえ至近距離で爆発が起きたんだぞ？炭化はせずとも最悪爆風による骨折くらいしててもおかしくは……。

「ガウツ！」

「つと、遅いんだよ！」

飛び掛ってきたウェアウルフの牙を反射的に避けて、そのまま胴体に剣を突き刺し振りぬくと壁に激突して動かなくなった。

あー、考える暇すりゃありやしねえ！よくわからないが腕が無事だったのは僥倖だ。今は戦う事だけ考えようっ。

焼け焦げた手袋を外しついでに、もう片方の手袋も外す。今となつては剣の感触を掴むのに邪魔なだけだ。それくらい些細な事でも今は取り除いておきたい。

「じゃないと……ミナもオレも生き残れないからな……」

実際にこの場生き延びれるかどうかは正直怪しい。というか、現状では敗北は確定してる。

後は外部の要因に任せるしかないってのが辛いトコだなあ。だから……その外部からの要因が来る可能性をできるだけ高くする為に時間を稼ぐ。オレができるのはそれだけさ。

居間にある二階への階段。守るべきトコはここだけだ。

「やる事は外に居た時と変わらない！入り口をひたすらに守る！」

……誰に叫んでるんだらうな。オレ。まあ、テンションあげるの
大事な事だ、うん。

もう家の防衛機能は働いてないだろうけど後ろにあるのは壁と階段。死角からの攻撃がこないってわかってるだけで精神的に楽だ。

次々と物陰からいきなり飛び出してくるウェアウルフを切り払う。外よりも早い反応速度を要求されるけど、ダンジョンではいつもこんなものだ。

とはいっても……ここまで大量のウェアウルフを相手にする事なんてなかったけどな……！

剣を振りながら頭の片隅で考える。やっぱり、どう考えてもおかしい。ウェアウルフの群れの数は大体が20〜30匹。西の街の方にどれくらい多く行ってるかわからないけど、群れ1つ分の数くらいは斬ったはずだ。

それでもまだまだ飛び出してくるのを考えると余りにも多すぎる。

明らかに今までにない異常な事態だ……。魔王の影響か……？

最も歴代の魔王は人類に宣戦布告してきたがソレらしい話は聞いたことがない。一応、ミナの居た街が魔王に滅ぼされたとは聞いたけど実際に魔王を見たって人はいないらしい。

考えながらも既に5匹のウェアウルフを屠ってきた。いい加減死体が邪魔くさい。2Mを超える狼が倒れてるんだから動き辛い事この上ない。

状況はどんどん不利に追い込まれてる。後、何時間堪えられる……いや、何十分堪えられるか……。

孤立無援……この状況は流石に疲れるな。体力的にも精神的にも。だけど、まあ……まだ体は動く……なんとかなる！

剣を握りなおし目の前のウェアウルフを睨みつける。

……待て。こいつら今まで物陰から勢いよく飛び出て襲ってきたはずだ。なんで姿を見せてる？

近寄ってくる様子も無い……オレの注意を引く為か？ いったい何から……ガーゴイルは流石に中までは入ってこないはずだ。この部屋の様子はここから全部見渡せるけど、部屋にいるのはウェアウルフが三匹、一定の距離を保ってうろうろしてる。

一匹に構っている間に他のヤツに階段を抜けられては困るから、こちから斬りにはいけない……どうする？

その疑問はすぐに氷解する事になる。自分の横からドン！ドン！！と大きな音が響いてきた為だ。

「おいおい……嘘だろ……？」

信じたくはない。信じたくはないけれど、実際に自分の隣には壁しかなく……壁に徐々に亀裂が生じていく。

壁を壊すほどの力……ウェアウルフにはない。王国軍が相手していたのは、ウェアウルフとガーゴイルともう一種。

ドゴオン！

「オーク……！」

壁が崩れその巨体がリュートの目の前に現れる……人外の力を持つ化け物。動きは素早く無い為、本来なら強力な魔獣ではないのだが今は状況が違った。こっちは階段の前から動けないのだ。

「ちくしょっ……！」

子供ほどの太さがありそうな腕が持ち上がり、純粋な凶器である棍棒が振り落とされる。

避ける戦いをするオレから見れば呆れるほど遅い攻撃だけれど、階段の前から大きく離れるわけにはいかず紙一重で避け巨体に斬りかかるしかないっ。

……やっぱり一撃じゃ致命傷にならないか！

攻撃が幾ら人として強力だからといって、それは人の範疇をでない。オークを一撃で沈めるには明らかな力不足であり、二撃、三撃とオークの棍棒は振り下ろされる。

一撃振り下ろされる度に床は姿を変え足場は減らされていくばかり。

「ガウツ！！！」

「魔獣同士が協力してるんじゃないよ！」

オークと戦っているのをチャンスと見たかウェアウルフが飛び掛ってくる……けど、そんな事は予想済みであり、オークを倒すよりも遥かにウェアウルフを倒すほうが簡単だ。剣の一撃で容易く地面に叩き伏せる。

「ガアアアアア！！！」

ああ、もう忙しい！ウェアウルフが終わればオーク！オークに気を取られれば新しいウェアウルフかよ！

再び振り下ろされるオークの棍棒。リユートが半歩横にずれ棍棒を避けようとするが、いよいよそれも不可能になっていた。

な、ウエアウルフの死体が……足に引つ掛かって……！？避けきれない……！！

ズガアアアアーン！！

オークの振り下ろした一撃は轟音と共に床を砕き土煙を上げる。

その下では折れた剣を斜めに構えるリユートが…なんとかまだ生きてる事に安堵していた。

ハア………なんとか………方向だけは変えたけど………また剣が折れちゃったな………。

オークはオレを倒したと思って油断していたんだろう。折れた剣で腕を切り棍棒を落とさせる………けど、ここまでだ。この剣でオークを倒すことはできない。

もう、戦いは終わった………。王国軍が来る気配はない。最悪、西の街も落ちたのかもしれない。

それだけ魔獣動きが異常だった。本来、顔を合わせれば殺しあうはずのオークとウエアウルフが共に行動している。今まで有効だった戦法が通用しない。

最後は………せめて彼女の元で………。

オレはオークが痛みで悶えている間に階段を駆け上がって、ミナに最後の合図を出した。

「……………白い光……………撤退」

二度目の白い光……………それが意味する事は簡単。リユートは負けたんだ。せめて、無事でいて欲しい。私はリユートを信じて指示されていた操作を行う。

少し離れた所から小さい爆発音が聞こえた。階段の下に仕掛けてあった魔力核が爆発した音。階段を吹き飛ばす為だけに設置された物。これで一階から二階にあがる手段はない。しばらくの間の足止めにはなるはず。

ガチャンと扉が開く音が聞こえて一瞬、魔獣かと思ってビクツとしたけど、その顔を見てすごく安心した。

「ミナ、ごめん……………」

ううん、私はリユートがまだ生きててくれて嬉しい。下で魔獣相手に倒れて最後の力を振り絞って合図を送ったんじゃないかって……………もう会えないんじゃないかって思ってたけど、リユートはちゃんと来てくれた。

近づいてきた彼をまたポスンと殴る。なんか照れくさかったからだ。

でも、自分でもわかるけど…私、多分笑ってる。こんな状況なのに今日の前にリユートが居てくれるのが嬉しくて仕方が無い。リユートも一瞬驚いた顔をしたけど私の顔を見て笑ってくれる。

「ミナ……ごめんな。オレ、守りきれなかった」

ちょっと申し訳なさそうな顔をしてるけど、そんな必要はない。

私はリユートと過ごした一ヶ月弱の間、確かに幸せだった。

元の世界よりもこの世界に来てからの1年よりもリユートと居た1ヶ月がどれだけ大切な物が。

そして……最後の最後まで私を守ってくれた。感謝こそすれ文句を言えるハズがない。

これで最後だと思うとちょっと寂しいけど……だから、今は少し甘えさせてね？

実際にはこっちに来てからずっとリユートに甘えっぱなしだった気もする……けど、最後なんだから、もうちょっとだけ許して欲しい。私は彼の首を両手で抱きしめて、その胸に顔を埋める。

ありがとう……リユート。

「ありがとう……ミナ」

私の体もギュッと抱きしめられる。ちょっと痛いけど、それも心地いい。

「ごめん……守りたかったけど……」

けど……？

「もう無理なんだ……ここに居ればまだ少しは持つだろうけど上からの攻撃も来てる……」

うん、わかってるよ。天井からもドンドン音が聞こえるもの。

「俺達はここで死ぬ……でも、良かった……」

……？

「ミナと一緒に居てくれて……良かった」

不意に泣きそうになる。リユートは一人だったら逃げれたハズなのに……。

「死ぬ時に一人じゃなくて……ミナが居てくれて本当に嬉しい……こんなこと言って……ごめんな……最低だよ……」

謝る必要なんてない。私だってリユートと一緒にならいいんだ。ここでの人生はリユートがくれたモノなんだ。

私は必死に彼の手を取る。いつもの手袋越しじゃない感触……それでもゴツゴツしてたけど、暖かい。

必死に……もう壊れた喉を動かす。無理だって分かっているけど……それでも諦めきれない。

リユートが私の手をギュッと握ってくれる。今ならなんでもできそうなのがした。

ずっと使えなかった喉はうまく喋れはしなかったけど……震えていたけど……それでもちゃんと私のいう事を聞いてくれた。

「私も……リユートが居てくれて……リユートに会えて良かった……」

それだけ言うと私は自分から唇を突き出して目を閉じる。
最後なんだ、キスくらいしてくれてもいいじゃない。

目を閉じる直前のリユートの驚いた顔が瞼に写る。

驚いたのは、声が出たから？それとも、キスのおねだり？
何やってんだろう、恥ずかしい……。

でも、リユートの吐息が触れてから……そんな事はどうでもよくな
った。

「コガ……ここで間違いないんだな？」

「はい……ニーズヘッグ公」

西の街での攻防戦から4日後。王国率いる近衛騎士とニーズヘッグ公爵軍はリユートの家を訪れていた。本来ならすぐにでも駆けつけたかったが遅れた原因がある。

途中で魔獣の動きが変わり広地域への散開。それにより散発的な戦闘が数回あった為だ。

ここより少し西にある街も熾烈な攻防戦を繰り広げてたと聞く。一時は統率された魔獣の軍に門まで取り付かれたが、門が破られる前に魔獣が離散。

どういふ事はわからないが助かったらしい。

「そのお陰で……弟を助ける事はできませんでした」

急いで出ては来たが王都からここまで半日ほどかかる。少数精鋭とはいえ軍を率いてきたのだからもう少しかかったであろう。元々、間に合わなかったかもしれないが、僅かな可能性に賭けたかったのである。

リユートの家を見たことはなかったが、立派な家だったのだろう事は一目でわかる。

「家を出ても……ちゃんとやってたんだな……リユート」
「彼には世話になったのだが……やりきれんな……」

家の周りの状況は酷いものだった。土は荒れ、庭は燃え、家の所々には風穴が空いている。逃げてくれてれば良いとも思ったが、戦闘を行ったような後が何箇所にも見られた。

家の前まで来ると地面が焼けた後が地平まで続いている。どんな敵と戦ったのかはわからないけど、人間の限界を超えた相手だった事は確かなようだ。

「ニーズヘッグ公……これを……」
「これは……魔王の噂……あながち嘘とも言い切れんのかもしれんな……」

まるで超高熱の炎が通ったかのように地面が焼けた後……人間の技ではないだろう。それは遙か彼方まで一直線に続いていた。

「せめて遺体か遺品だけでも捜そう、コガよ、一緒に家に入ってくれぬか？」

「はい……ありがとうございます……」

100番目の勇者、救国の剣王フェトム敗北の噂が王都に流れるのは、もう間もなくの事であった。

二十話 魔王の思惑と現実（前書き）

久しぶりの魔王さん登場……ていうか魔王視点です。

二十話まで来てなんか感慨深いです……ここまで読んでくださり本当にありがとうございます。

それでは、楽しんでください。

二十話 魔王の思惑と現実

ある日、僕は天使と魔人を敵に回した。

それでも、一緒にになりたい女性がいたからだ。

幸いにも僕の力は強いらしく他の魔人や天使に遅れを取ることがなく大好きな彼女と二人で歩いてくれた。

魔王を名乗ったのはいつからだっただろう。

魔人は魔王に従い天使も魔王に迂闊に手出しはしないと聞き、その称号を欲したんだ。

意義を唱える者と戦い勝ち続けて、遂に僕は自他共に魔王と認められる存在になった。

……けど、人間相手に戦争をしない魔王に威厳はなく誰も僕の言う事は聞きもしないし、魔人の軍勢を従えてない魔王なんて警戒に値しないらしく、相変わらず天使も襲撃してくる。

だから僕は人間と手を組もうと思った。

代々、人と魔王は血塗られた歴史を歩んできたけど、それは魔王による一方的な戦争行為から。

こちらから歩み寄ればきつとわかってくれる！

……なんて思っていました。

「ケーファー、ずっと南西にある街が魔王に滅ぼされたって」

「どうしてそんな事になってるんだー!？」

「一応言っとく。僕は何もしてない。いや、一応その付近で戦った結果、魔獣を呼び寄せたかもしれないけど襲ってきたのは勇者だし。」

「後ねー、イライザさんが人間にやられたみたい」

「……え?イライザって急進派のイライザ?」

「うんー、と呑気な返事を返してくれる。」

「魔獣の軍隊で街を襲って遊んでんだけど、やられたみたい」

「イライザは結構、力のある魔族だったはずだけど……。」

「まあ、勇者も規格外な強さだしなあ」

「つい1ヶ月ほど前に戦った女の子を思い出す。僕すら凌ぐ魔力。僕の魔法すら消す剣。」

「反則的な強さだった。」

「痛てっ!？」

「ケーファー、他の女の子の事考えてる!」

「あまりにも強かった魔女の事を考えてたら隣にいる女の子に殴られた。妙なトコで勘がいい。」

「彼女はルーシー。」

少しへっぽこだけど、天界に住んでいた天使で…僕の恋人だ。

魔人と天使は本来とても仲が悪いから絶賛駆け落ち中だったりする。それを反対して襲ってくる魔人や天使を相手にて逃げ回ってるってわけさ。

……いいじゃないか、魔人と天使が恋したって！

ルーシーは僕のそんな気持ちも知らず膝の上に座って寛いでる。いつものスタイルだ。

ルーシーと僕は小さい頃から魔人と天使の領土の境界線付近で一緒に遊びにいった。魔天の境界線なんて普段は誰もこない。二人で思いきり走り回って遊んだもんだ。

その為、僕らは互いの常識がまざり合っている。僕は魔人にしては闘争心が薄いしルーシーは天使としては魔人以外の種族を傷つけるのに抵抗が薄い。ちなみに天使さんは魔人に対しては容赦ないです、はい……。

同種よりよほど怖い。

「ねえねえ、お腹減ったよー」

「ああ、そうだねー。今日のご飯はどうしようか」

ルーシーの訴えに即答できないのが悲しいけど、そこは普通の駆け

落ち中の男女なんだ。
食料もなければお金もない。
完全にその日暮らしである。

僕って歴代で一番貧乏な魔王なんだろうなあ……。

「美味しいねえ、ケーファア。ケーファアはやっぱりすごいよぉ」

ルーシーは焼魚を美味しそうに頬張ってる。

近くに川があったから試しに電力を流してみたら浮いてきた魚だ。

ハア……塩も少なくなってきたなあ。

魔人にも色々種族がいるが僕は運が良いのか悪いのか黒翼族と呼ばれる魔人の中でも強い魔力と黒い翼を持つ種族だ。

お陰で街に出ると「わあ、魔人だ！」と言われて物すら売ってくれないしギルドで稼ぐ事も不可能。

最近では噂が広まってきたのか「わあ、黒い翼の魔王だ！」とまで言われる始末。

ルーシーは焼魚にご満悦の様子でパクパク食べてるけど、もう少し良い物を食べさせてやりたい。

「どうにかして稼げないかなー、お金」

「んー、稼ぐのは難しいけど、いつもご飯は食べれてるからいいんじゃないかな？」

……へっぽこで抜けてても、僕はやっぱりルーシーが大好きだ。

小さい袋の中を見るとまだ小銭が幾らか残ってる。

明日、村で塩くらいルーシーに買って来て貰うか……。

「ルーシーはお肉が食べたいです」

「……え？」

翌日、昼食にまた魚を食べた後、塩を買ってきて欲しい。と頼んだらそんな事を言われた。

「ルーシーはとってもケーファーに感謝してるよ。でも最後にお肉を食べたのはいつですか？」

……確か2ヶ月くらい前に罾にかかった猪を見つけた時だ。 猟師さん、ごめんなさい。

「確かに結構前だね……」

僕がそう言つとルーシーは笑顔になる。

「だからね……！無理だったら仕方ないけど、今日はお肉を探して欲しいなって。私もお塩買ってくるから」

「うーん……わかったよ。見つかるかわからないけど、探して見るよ」

「本当！？ありがとう、ケーファー大好き！」

ルーシーは喜んで町のある方向に駆けて行った。

ルーシーが喜んでくれるならいつか。

少し大変かもしれないけど肉を探してみよう。運が良ければ野生の動物くらいは見つかるはずさ。

気を取り直して森の奥に進んでみる。川辺に水を飲みに来る動物もいるかもしれないけど、森の中の方が居る気がするじゃないか？

草を掻き分け耳を済ませて見る……あれ？何かの音が聞こえる……足音。……それも結構大きいのが複数！！

僕は獲物に向かって素早く滑空する。

無駄な殺生はよくない。近づいてちゃんと食べれそうか確認して仕留める！

バサッ！！

と翼を大きく動かし獲物の前に飛び出る。森は途切れていて、そこにあっただのは街道。

……がっかりした。

目の前には驚いている男女が二人……計四人の人間。

……いくらお肉でも人間じゃなあ。

僕は項垂れて森にまた入ろうとするけど人間達に呼び止められた。

「ま、待て、お前……！」

「あ、ごめんね。びっくりした？気にしないで。僕は森に戻るから」「いや、その翼……お前、魔王だろ！？こんなトコに普通の魔物みたく飛び出してきたのにもびっくりしたけど、何より何事もなく森に戻るトコにびっくりしてるぞ……！」

……魔王だって生活してるんだ。そりゃばったり会う事もあるよ。でも、やっぱり広まってるんだなあ。魔王は黒い翼を持って………ますます行動しにくいなあ。

「魔王、貴方にとって私達は無視できない存在のハズです。そして、それは私達も同じ……貴方を見過ごす訳には行きません」

四人のうち女性の片方がそんな事を言ってくる。

……なんか嫌な予感しかない。

「そつだ。魔王、オレは聖者カムイ……。召喚されし勇者が一人！」

……また面倒くさいことになった。他の三人も次々と自己紹介をしてくれるけど、あまり聞く気はない。

「僕は魔王ケーファア。それじゃ、ごめんね。今、ちょっと忙しいから」

「ま、待て！魔王だろう！？オレ達は勇者だぞ！？」

森に入ろうとするとまたカムイさんが僕を呼び止める。

「魔王だつて暇じゃないんだよ！！」

「な！？うむ……確かにそうかもしれない、すまん」

あれ？なんかカムイさん他の勇者と違って話せばわかってくれるタイプなのかもしれない。

……他の三人はカムイさんに、何納得してるんだ、お前。って詰めてるけど。

「ええい、うるさい！魔王を倒すのはこちらの都合！ならば、こちらが合わせるのが常識であろう！」

初めてだよ、僕の事をちゃんと考えてくれる人間は！！

「それで、魔王殿。何を急いでおられるのだ？」

「えっと、肉が必要なんだよ。今日の夜までに欲しいんだ」

夜か、なるほど、それは急だ。とカムイさんは、頷いてくれる。

「よし！わかった！魔王殿、勝負は預けておく！またお会いしよう！さ、皆、村へ戻ろう」

あゝ、やっと行ってくれたよ……。他の人は、カムイさんに抗議してるけどどうやら彼がリーダーらしくしぶしぶついていってる。

話のわかる人で良かった。

あゝ、駄目だ。お肉なんてやっぱり簡単には取れない。そもそも村の近くだから動物少ないんだよなー、きつと。食べるには小さすぎる動物なら何回か見たけど……。

ハア……。ルーシー、笑顔で許してくれるだろうけど内心楽しみしてるんだろっなあ……。

もう時間的に町から帰ってきてる途中であろうルーシーの期待を裏切るのは辛い。

「……………の……………ま……………！」

何か微かに聞き覚えのある声が聞こえる。

この声は……………カムイさん？

僕は声の聞こえる方に翼を大きく広げ滑空する。さっきの街道のようだ。

「おお、魔王殿！探したぞ！」

「カムイさん？まだ肉が採れなくて今日は……………」

カムイさんは僕の言葉を片手で遮りもう片手に持った物を手渡してくる。

「魔王殿、これでどうであろうか？町の人に譲ってもらったんだが……」

そこにあっただのは肉の塊……それも三種類も……！

「な、カムイさん、これは……！？」

「良い良い、困った時はお互い様だ。しかし魔王殿、こちらは魔王殿の都合を叶えたつもりだが……？」

カムイさんの後ろを見ると他の三人も呆れた表情で立っている。確か、戦いたいんだっけ？

手元にある肉をみる。

これならルーシーも大喜びしてくれるだろう。

彼は僕の都合に合わせて助けてくれた。なら、今度は僕が彼等に合わせるのは当然の礼儀じゃないか？

「わかりました……」

「おお！それでは一戦交えて貰えるか！？」

僕は体中の魔力を解放し応える。なるべく殺さないようにはするけど……。

「僕は魔王ケーファア。全ての魔人を超えた魔王。全力で相手になるよ」

僕の魔力を浴びて他の三人の目に少しだけ恐怖の色が見える。でも彼にはそんなものは欠片もなかった。

「はは……すごい魔力だ……すごいぞ、ケーファー殿！」

そして彼が高らかに宣言し戦いは始まる。

「オレは聖者カムイ！魔王を倒し、この国の王となる者だ！」

二十話 魔王の思惑と現実（後書き）

なるべく早く投稿しようとは思っていますが、これから少しペースが落ちるかもしれせん。

一応、二日に一話…できれば一日一話くらいは出そうとは思いますが…orz

二十一話 3人目率いる聖者の行軍（前書き）

カムイは日本人じゃなくて別のファンタジー世界の日本によく似た国から召還された人です。

二十一話 3人目率いる聖者の行軍

まるで嵐のような魔力の奔流。

目の前の敵が今まで戦ってきた魔獣なんかとは比べ物にならない強さを持つてるのが簡単にわかる。

「はは…すごい魔力だ…すごいぞ、ケーファー殿！」

鼓動が高鳴るのがわかる。

ここに来る前の俺なら絶対に勝てないであろう強さ！

魔王を倒し美しい王女を妻として貰うだけの予定であったが、これは考えを改めざるを得ない。

「オレは聖者カムイ！魔王を倒し、この国の王となる者だ！」

俺は魔王と…戦いたい！

宣言と同時にケーファーは地面を滑空する。

人種では無し得ないだろ挙動…予想外の早さで間合いを詰められる。カムイも近接戦闘は得意ではあるが魔獣と真正面から殴り合える魔人と零距离で戦うのは不可能。

ただそれは、この世界に来る前までの話だった。

早い…が、受けるくらいなら問題ない！

目の前で地に足をつけ滑空による加速と全体重が乗る拳にさらに魔力による身体強化を使ったケーファーの一撃。

それを受けるとは果たして正気の沙汰か。

ズドン！！

およそ打撃とは思えない轟音が鳴り響く。

後ろにいたカムイの仲間ですえも驚愕している。

いや、正確に言うなら驚愕したのは、この場にいるカムイ以外の全員…つまり魔王も信じられないものを目の当たりにしている。

カムイは魔獣ですら吹っ飛ばすケーファアの一撃を片手で受け止めていのだ。

「油断大敵だ。ケーファア殿」

あまりの出来事に硬直を晒した魔王目掛けカムイは攻撃を仕掛ける。肩に担がれた刀が一瞬ぶれて、まるで閃光のようにケーファアに襲いかかるが、少し遅れて我に帰ったケーファアも後ろに飛び上がり致命傷は避けた。

「ふう…完全に斬ったと思ったが、薄皮一枚とは…」

カムイの刀による斬撃は、この世界の主流である力で叩き斬るのとは大きく違い滑ら斬り裂くものであり、その速度も比べ物にならないくらい早い。

事実、ケーファアといえ背中中の翼が無ければ飛べずに斬られていただろう。

避けられたのには驚いたが…斬れたのなら勝てぬ道理はない！

それに聖殿の盾はやはり魔王にも通用する…と、そういえば言うを忘れていたな。

「はは、驚いたか？ケーファー殿」

カムイは右手を前に突き出し続ける。

「勇者はこの世界に呼び出された時に一つの能力を得る。そしてオレの力は全ての攻撃を通さない無敵の守り！聖殿の盾だっ！」

「だから、なんでお前は自分の能力を敵にばらすんだよ!？」

カムイが叫んぶと啞然としていた三人の一人、アウゼルが殴りかかる。

「どうしてって恰好いいであろう？王道であろう？」

「馬鹿か、お前は!?!いや、馬鹿だ、お前は!!!」

魔導師らしき男はカムイに怒鳴りたてるがカムイは気にした様子はない。

「どうやら、いつもの事のようにだ。」

残った女性二人も一人は楽しそうに一人は困ったような顔で笑っている。

「あはは、でも、これは気をつけなきゃいけないね…他の三人も特別な能力を持つてるって事だろう?？」

魔王ケーファーの問いに勇者パーティー三人の視線が残り一人に集中する。

「え〜と…実は私、勇者じゃなくて、ただの付き添いなんです。だから攻撃しないでくれると嬉しいな〜…なんて」

彼女はリツフィー。勇者と共に旅をしているが元は王宮の治癒術師。勇者が怪我をした時の為に付き添っているものであつて戦闘能力はほぼ0に近い。

だからといって攻撃するな、など虫がよすぎる発言ではあるがケーファーにも無闇に人間を傷つけるつもりなどない。

「そっか、うん、わかったよ」

「え…？本当ですか！？ありがとうございます！！」

いつかは人と手を組み、魔人を退け天使から隠れてルーシーと平和な生活を送りたいケーファーに人に…しかし勇者パーティーに良いイメージを植え付けとくのは決して無駄ではない。

そんな打算だつたけど勇者達には好印象だつたようだ。

「あら…魔王とは残虐無慈悲と聞いていましたのに…意外と話がわかりますのね」

「ケーファー殿は義理には応える傑物。今、戦ってもらえているのが証拠」

手袋をした緑髪女性が関心し、カムイが、頷く。カムイは根本的にあまり人を疑わない為、肉と引き換えに戦ってくれたケーファーを全面的に信頼していた。

「ケーファー殿は義に背くようなことはせぬ。ただ人より野心が強く、ただ人より強かつただけなのであるう」

「はあ…まあ、バカムイの発言は置いといても噂とは違うようです

わね…失礼、私はロザリアルセルティーナと申します。気軽にロザリーと呼んでくださいな」

二度目の自己紹介だが、今回はそれどころじゃなく話を聞いていなかったケーファーにはありがたかった。

「えっと…よろしくお願ひします」

ロザリーの優雅な立ち振舞いにケーファーは釣られてお辞儀をする。カムイが、そろそろ待ち疲れたとばかりに発言する。

「まあ、まあ、夕食も近いしそろそろやらないか？ケーファー…俺は君を倒したいんだ！」

せつかく少しい雰囲気だったがカムイが戦いたいのは変わらないようだ。

しかしケーファーとしても、そろそろルーシーが帰ってきそうだから早く終わらせたい。

「うん、そうだね…再開しようか。カムイ」

そうこなくては。とカムイは嬉しそうに笑う。他の三人にも先程までの緊張はないようだ。もっとも治療師の女性は明らかに、がんばれ。などと声援を飛ばし下がっていくが。

「さて、じゃあ、行くか」

最初に動き出したのは赤髪の魔法使風な男。

彼が上に手を掲げると一瞬で人を丸ごと飲み込めそうな火球が出現する。

「これくらいで…終わったりするなよ！」

彼はその見た目に変わらずファイアボールのような魔法を投げつける。ファイアボールとの差異を上げるとするなら大きさが数倍あるという事だけだろう。

「勇者ってのはどいつもこいつも常識破りだね！」

巨大なファイアボール自体は珍しくはない。しかし、それを無詠唱で投げつけてくるのは過去に戦った少女以外は思いあたらない。しかし、ケーファーも魔王と呼ばれた魔人。

黒い翼を大きく動かし周囲の風を操り火球を四散させる。飛び散った炎がケーファーの体を撫でるが魔力に守られた体にダメージを与えられる程ではない。

「何っ……まだまだあ！」

何匹もの魔獣を焼いてきた火球を消された事に魔法使いの男は驚いたが、今度は両手からそれぞれ先程と同じ大きさの火球を放つ。

「一個が二個になっても同じだよ！」

ケーファーは先程と同じように翼で風を起こす。数が増えたトコでやる事は変わらない。火球は同じように四散しケーファーに飛び散る。

些か視界が赤く染まるが、警戒さえ怠らなければカムイが斬りかかってきとも反応できる。ケーファーはそう考えていた。

「行きますわよ、魔王」

撒き散らされた炎の奥から聞こえてくる女性の声。
どうやらカムイではなく彼女が来るようだ。

ケーファーは構え警戒するが、それを嘲笑うかのように唐突に攻撃は来た。

「痛っ!?!うわっ!?!」

ケーファーの顔目掛けて何かが当たる。
しかし、それが何かケーファーにはまったく見えなかった。

「うわ…なんだい、今のは…それも勇者の能力?」

「さて、どうでしょうか?私、カムイと違い自分の手札を晒すような真似はしませんの」

確かにそれはもっともだと思う。

彼女はまるで格闘家のように拳骨に鉄板のついたグローブを着けて構えをとっているが、どう考えても打撃の届く位置にいない。

ケーファーは彼女の能力を予想するが検討がつかない…が、先程の威力では致命傷には遠い。少なくとも中距離では牽制にしかならないだろう。

さて…どうする?ケーファー殿。近距離は聖殿の盾を使う俺。中距離以遠ではロザリーの格闘とアウゼルの炎…。

カムイは恐らくはロザリーから潰しに来るだろうと予想をつける。
アウゼルの能力は炎を操る事だが、どうやらケーファーには余り効

果がない。だがロザリーの能力は小さいが確実にダメージを与えるし彼女自体の戦闘能力は高いとは言えない。

もつともケーファーにはアウゼルの使っているのは、ただの魔法にしか見えずそれが誤算を生じさせる。

バサツ！と翼を使い高速で滑空する…その相手はアウゼル。

ケーファーは、ロザリーの能力は攻撃力は低いと判断し、どんな能力を持つてるかわからないアウゼルを優先した。

なっ！？アウゼルを先に！？間に合うか？

カムイは慌てて駆け出すがケーファーの滑空は異常に早い。

駄目だ…間に合わない！

ケーファーが腕を振り上げアウゼルに殴りかかる。が、その瞬間アウゼルを助けたのはアウゼルの能力だった。

「この距離でも耐えられるか？」

彼は炎を召喚しケーファーに直接ぶつける。

「ただの火炎なんて僕には効かない！」

ケーファーによって腕の一振りですら散らされる火炎。アウゼルにはもう防御手段は残されていない。

「うああああー！！良く持ちこたえた！アウゼル！！」

だが、その腕を一振りする時間でカムイは間に合った。走る勢いをそのままにケーファーに斬りかり、ケーファーはそれをアウゼルを薙ぎ払おうとした腕で防ぐ。

「予定とは違ったけど、まずはカムイからやらせてもらおうよ！」
「聖殿の盾！！」

カムイの剣を上弾き隙だらけの脇腹に蹴りを入れようとしたが、右手に防がれる。いや、よく見ると右手にはあたってもない。その直前に不可視の何かに阻まれていた。

「なんて、デタラメな！」

ケーファーは大きく後ろに飛翔し距離をとる。囲まれたままでは分が悪い。

ケーファーが戦った勇者の中で一番強いのは明らかに一人で自分を圧倒していた少女だが、彼らもそれに次いで強い。油断すればやらねかないとケーファーは感じていた。

しかしながら勇者達は魔王を倒すには時間を掛けすぎた。

魔王はすでに彼ら相手の対策がわかってきている。そして、もう一つ…。

「何してるの？ケーファー。逃げる？」

ケーファーの隣にはいつのまにか、白い髪の少女がいた。翼は隠している為、勇者達からはただの魔法使いと写っただろう。

魔法使いだと思つた理由は単純。ルーシーはすでに白い光の門を脇に出現させていた。ちやんとお塩買えたよ。と笑顔で言う姿はこの場では浮いていたが…。

「セラフィックゲート…嘘でしょう？」

治癒術師の女性が咳く。勇者達は彼女が何故驚いているかわからないが、セラフィックゲートは本来、高位の神官が複数人で使う転移魔法。

少女一人が間違つても使えるものではない。

「お腹減つたから早くご飯にしようよ。大丈夫、お魚でも果実でも私、大好きだよ！」

いきなり現れた少女の存在にカムイもどうしていいかわからなかったが、次のケーファアの発言でさらに気を引き締める事になる。

ケーファアは彼女の頭をぽんぽんとして勇者達に向き直り言った。

「ごめんね、カムイ。そろそろ終わらせるよ」

「…なっ!？」

ケーファアの右腕に凄まじい魔力が集中するのがわかる。魔法が苦手なカムイですら知覚できる異常な高濃度の魔力。

「ちやんと能力で受け止めてね?じゃないと死ぬよ?」

体に悪寒が走る。それほどまでに、あの魔法はマズイと。

「雷竜の嘆きよ！降り注げ！！」

ケーファーは上空に魔力の塊を飛ばす。その魔力は遙か天上で拡散し雷となり勇者カムイに襲いかかった。

「せ、聖殿の盾！」

慌てて右腕を上空に掲げ雷を防ぐ。

大丈夫だ、聖殿の盾がある限りケーファー殿の攻撃は効かな…しまった！

雷を防げた事による少しの油断。

前を見たときにはケーファーが目の前で拳を握りしめていた。聖殿の盾を雷を防ぐのに使っているカムイにそれを防ぐ手段はない。

「ガハツ……見事……！」

ケーファーの拳が鳩尾に突き刺さりカムイは膝から崩れた。

「カムイ、大丈夫ですよ！？」

カムイを助けようと距離を詰めるロザリー。彼女との間を一気に詰める。

「早…簡単にはやられませんか…！」

繰り返される正拳と右回し蹴りを軽と避ける。どうやら彼女は近距離では普通の…いや、並以下の格闘家のような。

「ちょっと痛いけど、ごめんね」

さらに繰り出される後ろ回し蹴りに合わせて顎を叩く。

「きゃん…痛っ、でも、このくらいでは…へ、あれ？」

顎を打たれば足が思い通りに動かなくなる。彼女はその場にぺたんと座り込み立ち上がれなくなった。そして振り向きざまに拳大サイズの火球をアウゼルに数個放り投げる。

地面にあたり爆発したそれはどれも直撃はしていないが、わざと外した事は簡単にわかった。

「おいおい…あー、降参だ」

アウゼルも相手の実力がわからないほどではない。あっさりと両手を上にあげた。

「すごい！ケーファー強い！！」

「流石は魔王と言ったところか…まさか、ここまであっさりやられるとは…」

カムイが悔しそうに言うがケーファーとてカムイの強さには驚いていた。それに…

「今回は勝てたけどカムイ達はまだまだ強くなるよ。怖いなあ、本当に」

笑いながら、じゃあもういくね。とケーファーと天使はセラフィックゲートに入っていく。カムイは体を大の字にして寝転がると大声で叫んだ。

「負けたあー！世界は広い！」

悔しそうに…だけどどこか嬉しそうに大声で叫ぶと治癒術師の少女がこちらに駆け寄ってくるのが見えた。

「美味しいよー、ケーファーありがとー！」

「お肉久しぶりだねえ」

セラミックゲートを潜った先、昨日寝た川原で二人は久しぶりに少し豪華な食事を楽しんでいた。

それにしてもカムイ強かったなあ…。他にもあんなに強い勇者いるのかな…。

いや、自分はカムイより強い勇者を一人だけ知っている。

黒い髪に黒い剣を持つ少女。できるなら二度と戦いたくない。

あの子、ちゃんと魔獣から逃げれたかな？無事だといいなあ。

ふとそんな事を考えていたら、ルーシーにまた他の子の事、考える！と怒られた。

「ありがとう、買ってくれて」

黒い髪の少女と灰色の髪の青年が服屋から出てくる。少女の頭には今、買ったばかりの、緑色の鍔の大きい三角の帽子が乗っている。

「いいさ、おねだりなんて二回目だからな」

青年の言葉に少女は赤面する。一度目のおねだりは自分にとってすごく恥ずかしいものなのだ。

「…っ。馬鹿な事言っていないで早く行くわよ」

少女は青年の手を取り前を歩き引っ張る。

「ミナから手を握ってくるのも二回目だな」

「あら、私はリユートと手を繋ぐの好きよ？」

二十一話 3人目率いる聖者の行軍（後書き）

一番最後にちよつと主人公登場。
魔獣戦から少し後の二人です。

次話は、あの子の続きになります。

二十二話 1の剣(前書き)

19話の後、20話21話の前の話になります。

少し時系列が前後してますが、よろしくお願いします。

二十二話 1の剣

天井からズドン…ズドン…と何かが上からぶつかる音が聞こえる。
下から狼の遠吠えが聞こえる。

そんな中、私達は短い口付けを終えた。

「ミナ…声が…!」

「うん…出た…ね…」

しばらく使っていなかったからか少し喋りにくい。

「あ…あー、リュート。…リュート。…うん、大丈夫。ちゃんと話せる」

少しだけ発声練習をするとすぐに喉の違和感はなくなった。
前と同じように喋れる。

今までまったく声が出なかったのにどうして…?

治りそうだったなんて事もないと思う。昨日まで…いや、さっきまではまったく喉から音が出なかったんだから。

でも、これで…詠唱ができる…。

「リュート…首輪はずしちゃ駄目かな？」

リュートの言う通りなら首輪さえ外せば魔力は少しずつでも回復し

ていく。

魔力が0の今の私じゃ勇者としての能力さえ使えないけど、少しでも回復すれば私の能力…魔剣召喚と下級魔法くらいなら使える。

まだ抗えるなら…リユートと一緒に戦いたい。

「…それは駄目だ。勝手に外したら何があるかわからない。下手をすれば仕掛けられた下級魔法が発動する可能性もある」

…流石に何もしなければ死ぬ状況でも首元でファイアボール発動とかはちよつと嫌だな。

「でもどうして首輪を？」

「…私、実はちよつとすごい魔法使い」

リユートはぼかんとしている。まあ、私だって突拍子もない事言ってる自覚はあるけど。

「首輪外したら少しずつ魔力回復するでしょう！？そうしたら、私も戦える！リユートと一緒に戦える！」

「そんな雀の涙ほどの魔力でどうするんだよ！？それにミナ…足が使えなくちゃ標的になるだけだ」

うつ…。それを言われるとどうしようもない。魔力が全快した状態の私なら動かなくても殲滅できるだろうけど、下級魔法と魔剣だけでは不可能。せめて足が使えれば状況は……って、あれ？

「えつと…リユート。転んだら支えてね？」

言った後に気づいた。私、すっかりリユートに甘え癖がついてる…。

とりあえず右足に力を入れて体重をかける。

うん、よくわからないけど右足の感覚がちゃんとある。

リユートは心配そうな顔で見てるけど多分大丈夫。立てる…と思う。

ゆっくりと足に力を入れて立ち上がる。久しぶりに動かす足は動き方を忘れてるけど、それでも少しずつ立ち上がる。

「きゃんー!!」

「おっと」

バランスを崩したトコをリユートに支えられる。

ポスンッ!

「前々から思ってたんだけど、なんで殴るの!？」

「うるさい」

ただの照れ隠しだなんて言えるかつ。

リユートはため息をつくけど笑ってくれてる。

うん、大丈夫…立てる。

リユートを支えにして完全に立って…リユートから手を話す。

「うん…立てる…」

リユートが驚いてる。私だって理由はわからないけど、これなら希

望があるかもしれない。

「リユート。私は戦える。もう少し慣れたら走る事もできると思う」
体が急速に動かし方を思い出してるのがわかる。

「首輪を外したら魔法でリユートの援護もできる。…私たち、逃げられないかな？」

私は外の状況を知らないから言えるのかもしれない。だから、それでも無理だつて言うなら素直に諦めよう。
でも、どうやら彼も諦めは悪いようだ。

「援護を貰えば…なんとかなるかもしれない。魔獣のほとんどは、西の街には行ってるだろうから、もうこの一帯には、そこまでの数はいないハズ…。でも首輪は…」

やっぱり首輪…。でも何もしないなら、死ぬんだ。賭けてみるしかないじゃない。

「リユート…私の魔力はまったくくないの。少しでも回復したら必ず力になるから…」

「魔力…そうか、魔力があればいいのか！」

リユートは、ちょっと待ってる。つて言って引き出しの中を漁って、三本の瓶を持ってくる。

「首輪を外すのは許さない。だからミナ、これを飲むんだ」

瓶の中には青い液体の中につつすら光る草が浮いてる。

正直言つて美味しそうだとは思えない。

「リキュート、これ…怒る所かな？」

そう言つた私は多分すごく笑顔。

何、あの得体のしれない液体！！

「な、違つ。これはマジックポーションだよ！わかるだろ！？」

「…？」

まったくわからない。そしてリキュートは私がついてない事に絶句してる。

「魔力を回復する薬だよ。いいから一本飲むんだ」

名前から大体想像ついたけど、その通りのものらしい。

ほら、早く。とリキュートに急かさねられ仕方なく一本飲んでみる。

「けほつ…美味しくない…」

「竜の血とか入ってるからな。美味しいハズない」

血つて…なんて物を飲ませるんだ、コイツ。

でもポワツと体の中に懐かしい感覚が戻るのがわかる。

「魔力が…少しだけ回復した…」

「…少し？いや、全回復するはずだけど」

そんな事言われても少しは少しだ。

とはいえ首輪を外して回復を待つよりはよほど多い。

「大丈夫。これならちゃんと魔法使える」

「ふむ…とは言え馬も逃しちまった。長期戦になるだろうから、もう一本飲んでちゃんと回復させとこつ」

気は進まない…けど効果は本物のようだし、魔力はできる限り沢山欲しい。自然回復しないし。

「またちよつと回復したわ」

「なんで竜の血を使った最高級のマジックポーションが少しなんだ…」

仕方ないからもう、残った一本も飲んどけ。ってリユートが言うから飲んだ。

何回飲んでも美味しくない…。

けど…。

「1割くらい…魔力戻ったかな…？」

「1割…1割つて…クロウ、何かミスったのかなあ…」

クロウさんが作ってくれたんだ。このポーション。

リユートは不思議に思ってるけど私には心当たりがある。

多分…普通の、いや、かなりレベルの高い魔法使いでも全回復する薬なんだと思う。

けど…それでも私の多すぎる魔力には追いつかないんだ。城を半壊させても減った気がしなかったし、それから約1年もの間使いつぱなしで、おまけに魔王と戦ってやっと枯渴したレベルの魔力。寝てもそんなに回復しなかったし…。

「リユート、大丈夫。信じて？私はリユートの予想よりずっと強い」
「ハア…ミナがそういうなら…。実際にオレ、一人じゃもうどうしようもないしなあ…後はオレの武器か…。二階に置いてあるのは普通のミスリルソードが数本…ちよつと物足りないけど仕方ないか…」
ミスリルって結構高くなかったっけ？それを物足りないって普段何使ってるんだらう…」
リユートに私の魔剣を使わせてあげたらいいのに…。

そんな事を考えて、ふと思い出す。この世界に来たばかりの時に教え込まれた勇者について。
その中でも、未だ最強と名高い初代勇者パーティーと魔王の戦いの最後。

魔剣士…アウル…。もしかしたら私にもできるんじゃないかな？少なくとも魔剣を扱うことは下手かもしれないけど魔剣を召還する事そのものは私は魔剣士アウルも超えてると思う。

「リユート、試してみたい事があるの。手伝ってくれる？」
「ん？この状況だ。やれる事はなんでもやっておこう」

唯一、不安なのはこれをしたアウルが帰ってこなかったって事だけ。私がどうなるか。それだけはちよつとわからないけど、リユートには伏せておく。

リユートの後ろに回って抱きしめるように彼の手に自分の手を重ねる。

「これから、召還をするから…召還された物をちゃんと掴んでね？」
「お、おう」

さて…どうやっていいかはまったくわからない。でも、昔できた人がいるんだからやれない事もないハズだ。
自分の魔力の…その中心に意識を集中すると剣が何百…何千本とあるのがわかる。きつと、これは私が召還できる剣だろう。

でも…こんなものじゃない…もつと奥深く…もつと集中して…。

こんな靄みたいなものじゃなくて…この中にきつと、ある私そのもの。

そして奥深くに…小さな、何も見えない闇があるのをやっと見つけ、私は躊躇わずにソレに意識を潜らせる。

「あつた…！」

思わず声が出る。リユートの手が一瞬ビクッてしたけど、これからもつと驚いて貰うことになると思うと、ちょっといい気味。

ゆっくりゆっくりと闇の中にあつた剣を引つ張り出し、同時に私にではなくてリユートに魔力を通して召還する。

体の一部を他の人にとっていかれるような気がしてすごく怖い…けど、リユートにならそれもいいかと思えてくる。

…他の人に同じ事は絶対できないな、これ。

「これは…？」

リユートの声が聞こえる。やっぱり驚いてる。でも、これが…リユートの新しい剣。

私が創ったリユートの為の剣。

「リユートに…私をあげる…！」

そして、私の真ん中にある私自身。

ゆっくりと召還された剣はやがてリユートの手に収まる。

「すごい…今までいろんな剣を使って来たけど…これほどの剣は見
たことない…っと、ミナ!？」

「あはは…ごめんね…ちよっと疲れた…」

召還が終わった瞬間、力が抜けてリユートに寄りかかる。魔力はほ
とんど使っていないのに体力をこっそり持っていていかれた。

「ん、大丈夫。いきなり力抜けてびっくりしただけ」

気を取り直して一人で立つ。少しだるいけど、問題は無い。
リユートの手を見ると真っ黒な柄と白銀の刃を持つ剣が握られてる。

「…綺麗。うまく行ってよかった」

「ミナ…これは…?」

「ん…魔剣アウルと同程度の剣だとは思っただけど」

「アウツ!?!…え、いや。…え?」

言葉を喋れてないリユートに思わず笑いがこぼれる。
でも、もうそんなにゆっくりしてる暇はなさそうだ。

天井が崩れてきてる。

「ミナ、とりあえずよくわからない事の連続だけど話は後にしよう
!外に逃げる!」

「きゃ…ちよ、ちよっと!?!」

リユートは私をまたお姫様抱っこしだす。もう一人で走れるって！

「少し痛いかもしれないけど我慢してな？」

…へ？

そういうとリユートはいきなり部屋を出て廊下の窓から飛び降りた。急にかかってくる重力。急いでののはわかるけど、一言くらい相談しろ！

「上昇気流！」

言ってくれば…ちゃんと、私がリユートを助けるから。

足元から強い風が吹き落下の速度が軽減される。彼は少し驚いたようだけどちゃんと着地してくれる。流石に運動神経いいなあ…私だったら転んでる。そういう意味ではお姫様抱っこには感謝だけど…恥ずかしい。

やれやれ…私にも随分と余裕が出てきたものだ。

「…今の風…ミナが？」

どうしていきなり、喉と足が治ったのかもわからないけど、とりあえず今は戦える事に感謝する。

そう、私はこの世界に来た時から力があつた、当初は元の世界に戻る為だけに使ってたけど、今はリユートを助けられるこの力に感謝する。

辺りには多数の魔獣。後ろで崩れ落ちる我が家。絶望的な状況なの

にも関わらず、負ける気なんてしない。

「私は、勇者ミナミツキ。傾国の魔女ミツキって言った方がわかりやすいかな？よろしくね、リユート」

二十二話 1の剣（後書き）

ちなみに、ヒロインの名前は漢字で「美月 水奈」です。
本編ではカタカナでしか書かないとは思いますが。

二十三話 100と魔剣

無茶を承知で窓を突き破る。多少の怪我はするかもしれないけど天井がそろそろもたない。

「上昇気流！」

落下の衝撃を覚悟してたけどミナが何かを叫ぶと足元から強烈な風が吹いてきてオレ達の落下速度を和らげた。

微か魔力を感じる風…。

柔らかな風に流されてなんとか両足で地面に着地する。ミナを持っているのに痛みはほとんどなかった。

「今の風…ミナが…？」

それしか考えられないけど信じられない。

ミナが何かよくわからない言語で詠唱したのはわかったけど、あんな短い詠唱であれだけの風を起こすなんて…。

彼女はオレの腕から逃げ自身の足で地面に立ち振り向く。

「私は、勇者ミナ＝ミツキ。傾国の魔女ミツキって言った方がわかりやすいかな？よろしくね、リユート」

今日は信じられない事の連続だけど、その中でも飛びきりのありえない出来事を彼女は口にする。

「勇者…ミツキ…？って、あの城を大穴をあけて逃げ出して少し前に魔王に敗北して行方不明の…？」

「…なんで城に大穴とかそんな恥ずかしい事知ってるのよ。そうよ、そして奴隷商人に捕まってハンスに売られてリユートに助けられたミナです！」

なんか少し怒ってる。だけど、考えてみれば納得もいく…ミナの髪は先祖帰りにしても黒すぎるし、拐われたのは魔王と決戦があった街。そして故郷への帰り方がわからない…。

料理や編み物にしたってオレも家族も知らない事ばかり。

「ははは…どうやらすごい人物を家族にしようとしてたらしいな、オレは」

「…今更嫌いになったりしないですよ？」

彼女は少し不安そうに上目遣いでこつちを見てくる。ま…そんな事はありえない。

頭をぼんぼんと軽く叩きながら言うtomまたポスンツと叩かれた。

言葉が無くても言いたい事は大体わかったのに、言葉があってもこればかりはわからねえ！

「ガウウウウウ…」

「あら、リユート、囲まれてるわよ？」

ああ、そうだ。呑気に会話してるけどオレ達はまだ敵のど真ん中にいるんだ。

辺りを見渡すと数十匹のウェアウルフに囲まれてるし、上には相変わらずガーゴイルが5匹…どこかにオークも最低一匹はいるだろう。

てか、こいつらよく襲ってこなかったな…。

魔獣なりに空気でも読んだんだろうか：まあ、ありがたいって言えばありがたい。

でも、流石に痺れを切らしたのは、オレ達の辺りをぐるぐる回り始めてる。

「さて…ミナ。まずは少し数を間引くよ」

「狼はリユートに任せる。上からも狙われてちゃ集中できない」

「任せる。その代わり任せた」

ミナに貰った剣を構える。魔剣アウルと同格の剣…それが本当かどうかはわからないけど、竜の牙から削った剣よりもミスリル結晶剣よりも良い剣だっていうのは持った瞬間にわかった。

「ガアアアッ！」

「運がなかったな…この剣を持つ前のオレになら万が一には勝てたかもな！」

ウェアウルフの1匹が飛び掛ってくる。この剣なら…こんな魔獣怖くない！

オレはタイミングを合わせたつもりで斬るかかる…が！

な…軽すぎる！？

振った剣はウェアウルフが間合いに入る前にその目の前を通り過ぎる。

剣の重さは感じられるのに振った時にはまるで、その重さが0になったかのように軽い。

「くっ…！…！」

オレは慌てて剣を引き突きに移行し、ウェアウルフの胴体目掛けて突き刺す。

間に合うかどうか自身はなかったが、剣はあっさりとウェアウルフの胴体に突き刺さってくれた。

「なんだ、この剣…振るのにまったく抵抗がない!？」

「火、火、渦、放!…何やってるの!その剣はもうリユートそのものなのよ?自分の体を動かす延長だと思って!」

そ、そんな事言われても…確かに腕を振るときに重さを感じたりはしないけど…。

スーハーと深呼吸して剣を構える。次、飛び掛ってきそうなウェアウルフは2体。普通の剣とは違うから勝手は異なる…普通の剣以上の動きをイメージしなきゃコイツは使いこなせない。

「ガウツ!」

「ガールルル!」

1匹が先行して跳躍してもう1匹が遅れて頭上から飛び掛ってきた…普通の剣ならここで回避をしながら1匹目を叩き伏せる…けど、この剣はそんな遅くはないだろう。覚悟を決めて飛び込む。

流れるような動作で先行して飛んだウェアウルフを片手で袈裟に斬り、剣を構えなおす。動作は驚くほどスムーズに完了する。

二匹目…少し高い位置から飛び掛ってきてるウェアウルフを軽く剣を振って叩き落とす。

普通の剣では到底間に合わない動作…それを当たり前のようにこなせた。

「…とんでもない剣だな」

「最古の勇者が使ってた剣とほぼ同じ原理で作られた剣だもの。そ

の剣は私自身よ。…大事にしてね、私を」

ウェアウルフを屠るとミナが長い髪をかきあげながら傍に歩いてくる。空を見上げるとさっきまで飛んでいたガーゴイルはもういなかった。

「この一瞬でやったの…?」

「簡単よ。あの程度なら」

…空を飛ぶ標的に当てるのは地面にいる敵に当てるよりも遥かに難しい。それをこの短期間で打ち落とす彼女は確かに優秀らしい。

「リユート…あっち、わかる?」

「…いや?何かあるのか?」

ミナが唐突にウェアウルフの向こう側を指で示す。

他の場所より多少、ウェアウルフの数が多い気はするけど、他に思いつくことは無い。

「魔力が戻って初めてわかったんだけど…向こうにちょっと大きな魔力を持つ何かがいる…」

「まさか…魔王!??」

「いえ、魔王じゃない…魔王とは会った事があるから彼ならわかる。それに多分、魔王はそんなに悪い人じゃ…」

ミナが言いかけて口を紡ぐ。魔王と何かあったのか?

「ともかく…!向こうに何かいるの。それが例えば…魔獣を操作してるとかってないの?」

魔獣を操作…？いや、普通ならありえない。そんな話聞いた事もない。けど…。

「…魔獣の動きが普段と違いすぎる。魔獣は元々、他種と一緒に行動したりしないし、頭もそんなに良くない。普段ならありえない話だけど否定しきれないな」

「そっか…よし、ちよつと敵の数減らしましょう」

ミナはそついうと手を上に掲げる。

また何か魔法でも使う気だろうか…？

「魔剣召還、いっばい」

…は？え…ちよつと！？これは…！！

「えーと…ミナ？これをどうするのかな？」

上を見上げると数え切れないほどの剣：黒い霧のようなもので包まれた剣、剣、剣。恐らく数十本じゃ聞かないだろう。

「ん？落とすに決まってるじゃない」

そして彼女がそう宣言した瞬間、全ての剣は地面向かって重力に引かれて落ちてきた。

何故か全ての剣が刃先を下に向けて…。

「ぎゃああああああー！ー！！？」

剣はもちろんオレの頭上にもあったわけで体に何本も突き刺さる。確かに敵の数も減るけど、これってオレも死ぬんじゃないか…って、

あれ？

「うるさい、リユート。大丈夫よ。私の魔力は私を傷つけたりしない。そして、リユートの持つてる剣は私自身よ？私の所有者はリユート。私がリユートを傷つける事はできないわ」

「はは…あはは…本気で死んだかと思つた…」

周りを見ると串刺しになつてるウェアウルフが多数。まだまだ数はいるけど確実に数は減っている。

「ま、予想通りにリユートが無事で良かった」

「予想！？確認あつたんじゃないの!？」

下手したら死んでたんじゃないか。オレ。

「大丈夫よ。もしそうだとしても…その時はリユート自身の能力でなんとかなるハズだから」

オレの能力…？ミナはオレの能力を知つてるのか？

「ま、そんな事は後よ。ごめんね、リユート。お互い無事だったら改めてお話しましょ。それからでも遅くないから。それよりもまずは…」

能力とやらが気になるけどミナはまた地平の向こうを見る…あそこにいる何か…魔獣を操つてるのか？

「あそこにいるヤツを倒す。でも、逃げられたら厄介なの。今はまだ居るのがわかるけど離れてても魔獣は制御できるのかもしれないから…一瞬で倒さなきゃいけない」

魔獣を操ってるヤツがいれば確かにそれを倒せば個々の群程度の機能しかなくなるだろう。それなら逃げ切れる確立も上がる。だけど、その何かが逃げて遠くから魔獣を操ったら…今の状態が続く…か。確かに逃げ切れる確立は全然違う。

「私はこれから、ちょっと長い詠唱に入るわ。リユート…私を…守ってくれる？」

残ったウェアウルフは先ほどミナが指した地平の先にある何かを守るように終結している。

それは…地平にいる何かが魔獣を操ってる証拠だろう。

「…任せる」

「うん、任せた」

短いやり取り。だけど、ミナがやるって言ったんだ。後はオレ次第。ミナよりも少し前方に立ちウェアウルフの群に対峙する。見た限り100匹はいないと思う。

今までオレが倒したのとミナが魔剣で串刺しにしたのを合わせてそれくらいだろうか？つまり、半分くらいはやったって事だ。

「そして、後はミナを待てばいい…。前面に集中してくれたのは好都合。一匹たりとも後ろに抜かせたりはしない！」

剣を構えると数匹が飛び出してくる。ただし、今までと違って後ろのウェアウルフもタイミングをずらし走ってきている。

波状攻撃…やっぱり魔獣の取る行動じゃない…。これを凌げばミナがなんとかしてくれる！

飛び掛ってきた二匹をいとも簡単に斬る。少しだけ剣に慣れてきた。

さらに続く三匹目を飛び前に頭上に剣を振り下ろして仕留める。

下級魔獣とはいえ人よりも遙かに速いウェアウルフ…そのウェアウルフの速さに今のオレは順応できている。

まるで手を使うかのような感覚で剣を振り回し計6匹を一瞬にして斬る。

「ふう…ハア…さて、剣の性能は上がっても体は相変わらず。体力的にキツイな…」

でも、ミナが詠唱を終えるまではオレがここで食い止める。

速さに任せたワンパターンな襲撃。斬るのは簡単だけどそれは技術的な話。

ウェアウルフの動きに合わせて体を動かして斬るといふ行動は体力をかなり使う。それに加えて連戦の疲労も溜まってきている。

ミナのほうを見るとまだ詠唱の最中…でも前に突き出された両手の前には何か真っ黒いビー玉の様な塊が浮いている。ここにも魔法の変動は感じられないのを見るとそれほどまでに圧縮された魔法なんだろう。流石に魔獣がぼんぼん使う下級魔法とは違うようだ。

これなら…地平の向こうで余裕こいてるヤツに気づかないだろうな。

正面から飛び掛った一匹を突き刺しオレの沸きを通り過ぎてミナに向かおうとした一匹に刺したウェアウルフを投げつける。

「キャン…！」

駆け抜けようとしたウェアウルフはオレが投げたソレに当たって思いつき吹っ飛ばされる。

「いかせやしない…！」

まだ転んでるウェアウルフに駆け寄り起きる前に切り伏せる。と、そこでミナの視線を感じて振り向いた。

魔法の詠唱が終わったのか…！

多分、オレがいる場所が射線上で撃ちにくいんだらう。大きく飛び跳ねて射線外と思われるトコまで転がるとミナは口の端を吊り上げ笑ってくれた。

言葉が話せない時間はミナとオレに言葉がなくてもある程度の事はわかるようにしてくれている。それがこんなトコで役に立つとは…。

そして、彼女の口からオレの知らない言葉…多分、異世界の言語だらう。

彼女は異界の言葉でその呪文の名前を唱えた。

「レーザー・カノン」

その瞬間、黒いビー玉のような塊は彼女の両手が突き出した方向に暴虐な光となって地平の彼方を一瞬で貫いた。

大地が焼け焦げる匂いがする。射線にいた不運なウェアウルフは一瞬で消滅した。

速いなんて物じゃない。家一軒丸ごと飲み込みそうな大きさの高熱の筒は、人が、魔獣が、魔人が知覚できない光の速度で直線状を焼

いていく。

ミナがイメージしたのは現代の光学兵器。

雷よりも速く、火よりも熱い、光の束を自分の両腕を砲身に見立てて真っ黒に見えるほどに凝縮された光を打ち出した。

それは遙か彼方で魔獣の指揮を取っていた魔人を消滅させるに十分すぎる威力だった。

その魔人の名前はイライザ。魔人の中でも実力者で人間相手に戦争を仕掛けようとする急進派と呼ばれる派閥の魔人であったが、イライザですら気づかぬうちに一瞬に焼き尽くされ人間の間で魔人イライザの名前が出てくることはなかった。

「んーっ！流石にちょっと、使いすぎたかな…魔力」

「ミナ、うまくいったのか？」

残ったウェアウルフの動きが緩慢になってきてる。多分、その何かを倒すのに成功したんだろう。

「うん、大きな魔力は跡形も無く消えたわ。後はどうにかして逃げ切るだけ…」

ミナに駆け寄ると崩れかけた家からドオオオオン！と轟音が聞こえる。

そこから姿を現すのはこの戦場にいた1匹のオーク。しかし、リユートたちよりもそのオークに先に攻撃をした影があった。

「えっと…なんで、魔獣同士が喧嘩してるの？」

「はは：元々オークとウェアウルフは仲が悪いんだ。今まで操られてたからか一緒に行動してたけど：それがなくなっただけで元の敵対関係になっただけだね」

ウェアウルフは数で囲み少しずつオークにダメージを与えているがオークは手に持った棍棒でウェアウルフを薙ぎ払う。数的にウェアウルフが勝つだろうけど、暫くの間稼ぎくらいにはなってくれそうだ。

「ミナ、今のうちに逃げよう。走れるか？」

「あまり期待しないでよ？それでも体は普通の女の子なんだから」

二人で笑いあう。

オークがやられる頃にはかなりの距離を稼げるだろう。西の街の状況がどうなってるかわからないから、目的地は王都から帰ってくる時に寄った町。

休まず歩けば昼までには着くはずだ。

「最後にもう少し頑張ろう。ミナ、少し無理をさせるけど一緒に来てくれ」

「ん。リユートと一緒になら私はどこでもいくわ」

二十三話 100と魔剣（後書き）

次で一章が終わりかなあ。

まあ、別に関係なくまだまだ続いて行くんですが。

二十四話 100の能力検証会（前書き）

少し短いです。

一騒動終わり今回から新章といった感じになります。

これからは、怪我の治ったミナとの旅になります、よろしくお願ひ
します。

二十四話 100の能力検証会

「多分、ヒーリングだと思うの。それしか考えられない」

「ヒーリングって…カミナギのだよな？」

あれから少し休憩を挟みつつ町を目指して、やっと到着したのは夕方。

あれ以来ウェアウルフの襲撃もなかったしミナの体力も持たなかった為、予定よりも遅れた到着になった。

すぐに宿をとりお互い泥のように眠り今に至る。

酒場に来て遅い朝食を食べているとミナがオレの勇者としての能力について話出したんだ。

「治療術じゃ自然回復しない傷は治せないし…多分、私の足と喉はその類いのものだったわ」

実際、ハンスさんが呼んでくれた治療術師さんには治せなかったしね。とミナは続ける。

ヒーリング…初代勇者パーティーの巫女カミナギが使ったと伝えられるスキル。

治療術とは根本的に違いあらゆる怪我や状態異常を即座に治す神の御技と言われている。

確かにオレの能力がそれならミナの足と喉が治ったのも不思議じゃない…けど…。

「どうして、あの時まで発動しなかったんだらうな？」

「あの時、初めて発動条件を満たしたんだと思う。リュート、いつも手袋してるでしょう?」

確かにいつも剣ダコや傷を隠す為に手袋はしてる。

「リュートの手に直接触れる…とかが発動条件なんじゃないかな。ちょっと試してみましょ」

彼女はそう言うと止める間もなく自分の指先に歯を立てた。

「くら!?!…まったく、痛くないのかよ」

「痛いにきまつてるじゃない。だから…早く治して?」

そう言って差し出される彼女の右手をオレは溜め息をつきながらギョツと握った。

遅めの朝食が終わり宿屋に戻ったオレ達は特にする事もなくベッドで寛いでいた。

隣のベッドには指に包帯を巻いた少女が一人。

「ひりひりする…」

…まあ、オレの手を握ったところで怪我は治らなかったわけですが、はい。

「ばかりゆーと…」

「いや、えっと、オレ悪くないと思うんだけど」

「そうだけど…そうなんだけど…！」

ミナは枕をポスンッと殴る。近くにいたらオレが殴られてるんだろ
うなー。

本当はライフポーションを買ってあげたいけど、家に貨幣を全部置いてきたオレは文無しだったりする。

宿や食事の代金はどうしたかと言うと…情けない事にミナが払ってくれた。

うちに居たときに作ったマフラーがそこそこの値段で売れていて、そのお金らしい。

絶対に返す…絶対にだ…！

考えてると泣きたくなってくる。

確かに金持ち出す余裕なんかなかったけど、どうして金貨数枚くらい身につけてなかったんだ…！

「ね、リユート。これからどうするの？」

枕への八つ当たりも飽きたのか今度は大事そうに抱きしめている。飴と鞭か。

「商会で馬でも借りて昔の鉾山に行こうと思うんだ。で、悪いけど

「ミナはその間、この町で待ってて…」
「嫌。」

話してる最中に一刀両断された。

「えっと、ミナ…さん？」

「私も行く」

薄々そんな予感はしてたけど…。

「ミナ。君はまだ魔力だつて回復しないんだし、今回は馬車もない。今だけを考えれば大丈夫かもしれないけど王都につくまではなるべく…」

「リユート。昨日はゆっくり寝れた？ご飯美味しかった？」

ミナは人の言葉をまた遮って満面の笑みで聞いてきた。

「…ああ、ありがとう、ミナ」

「私も行っていいかな？」

文無しのオレには頷くしか選択肢はなかった。

「ありがとう。でもね…今、私が持つてる分くらいはリユートの好きに使っちゃっていいんだよ？」

…まったく、この子は普段強気な癖に思慮深いというか優しいというか。だからこそオレはこの言葉に甘えちゃいけない。

「ミナがオレの家に来て初めて稼いだお金だからな。それはミナが

自由に使うべきぞ」

必要最低限… 鉾山から往復する為に必要な食料分は使わせて貰う事になるだろう。

でも、そこまでだ。後は自分でなんとかしよう。

「リユートは強い。強すぎて少しつまらない。私はそこが不服です！」

「なんだそりゃ。ミナだつて十分強いじゃないか。声も出ないし歩けない奴隷に睨まれたのなんて初めてだぞ？それにミナが助けてくれなきゃオレは愛しの我が家と最後を共にしてたさ」

「最初から奴隷としてなんか扱ってないくせに。それに、あれは精一杯の強がり。今の私は… 全部リユートがくれたもの。それくらいわかる」

リユートとしては気に入った子を家族として迎えようとしただけ… ミナにもそれはわかってるけど、それでもリユートには感謝しても感謝しきれない。

「ね、リユート。なんであんなに剣が使えるのに商人になつたの？」

確かにオレの剣術はそこらの近衛騎士を上回る。王宮に勤めてたほうが楽だし権力も名誉もてに入る、けど…。

「お金が必要だつたんだよ。途方もない額の」

簡単な返事にも関わらずミナは、そう、大変だったのね。とだけ言つて追求はしなかった。

「私… 元の世界に帰らなくていいかも」

「家族はいいのか？」

「いるけど…いいの。私、そんなに愛されてなかったみたいだし」
「そっか、大変だったんだな」

真似するな。と睨まれる。

ミナが近い未来どうするのかわからない。
けどこの世界にいるなら会えるだろう。特に彼女は伝説に残るくらの魔女。居場所はすぐにわかりそうだ。

「悪くないな」

彼女が帰るのは寂しい。できるなら残って貰いたい。

「悪くないでしょ？」

彼女も立ち上がりながら微笑む。

最近のミナはよくオレにも笑いかけてくれるようになった。

「さて、先にお風呂入ってくるね。リユート、前に入らないんで寝たんだから今日は入りなさいよ！」

「そんな事もあったなあ…」

ミナはすたすた歩いて扉の向こうに姿を消す。

前にここに来た時は部屋がいっぱいだったんだよなあ…それで、高い部屋を取ったんだ。

流石に一ヶ月経てば落ち着いたらしく部屋はいつもどおり余っていた。

彼女と会ってから一ヶ月…状況は色々変わった。

「とりあえずは…王宮からの依頼をこなして、お金貰って…それが

らどつするかなあ」

期間は残り二ヶ月。王都を出る前に受けた依頼。まとまった買取だから金額も多い。何をするにしてもお金はかかるから今は確実なお金が入るのはありがたい。

家族を探さなきゃいけない。新しい家を探さなきゃいけない。魔剣をずっと使って目立つのも嫌だから、これは切り札として…常用の武器も欲しいな。

そして何より…ミナの首輪を外さなくちゃいけない。これから一緒に行くにしても別れるにしても危険はある。彼女の力がちゃんと機能すれば自身の危険は大きく減るだろう。

考える事に集中してたら隣からふわっと良い香りがしてきた。

「リユート？今度は起きてたね。早く入っておいで」

視線を上げるとミナが長い髪を拭きながら覗き込んできてる。

「…オレ、ミナの髪好きだな」

「な…なっ…！？早く行って来い！！」

蹴られたので素直に風呂に行く事にする。
元気になったものだ。

「検証だつて」

「いや、ないとは言いきれないけどないだろう」

風呂を浴びて、さて寝ようつて時にミナがまたよくわからない事を言い出した。

「リユートに触れること…これが発動条件の1つに間違いない」

「まあ、それにはオレも同感だ」

「だったら、色々試してみるしかないじゃない？」

「一緒にベッドで寝るのは問題あるだろう!？」

そう、ミナが同じベッドで寝るといつて聞かないんだ。

「前もこの宿屋で一緒に寝た!」

「嘘をつくな!…つて、あれ?ちょっと待て…前つて確か…」

風呂から上がったたら眠くて一番近くにあったベッドで即効寝た気がする。

…そのベッドつてミナが寝てなかったか?

「…あー、えーと、ごめん」

「うん、問題ないわ。だから問題ないわよね？」

「それとこれとは話が別だろ!？」

結局、最後まで反論してはいたけどベッドに潜ってくるミナを邪険にはできずに手を繋いで寝る事になった。

一応、二人とも狭いベッドの端に寄ってはいるけど…。

「おやすみなさい、リユート」

繋がれた手には小さく当たる指輪の感触があった。

二十五話 100と1の旅立ち

「登録名リユート。主に素材の仕入れと直売をしています。あ、これ登録証です」

「リユート様！？し、失礼しました。まさか暗部の方でしたとは……」
そんなワケでミナとの朝食が終わった後、オレは商会に来ていた。

商会は商人達を纏める組織。加盟するにあたり献金が必要で度が過ぎる違法商売はできなくなるが、そのメリットも大きい。

まず商会に加入するというだけで一定の信用が得られるし、他の商人とのネットワークにもなる。

オレみたいな買い手の少ない商売には直接依頼がきたりする。

そして何より大きいのが、これ。

「魔獣の襲撃ですか……。南西の街が襲撃を受けた話はこちらにも来ています。すぐに申請は通ると思います。支援の内容は、どういった物を希望でしょうか？」

そう、災害、強盗、魔物、詐欺。このような予想のできない物により商売の続行が難しい場合に最低限の支援が受けれるんだ。
破産するリスクを考えれば月に支払う多少の上納は安いものだ。

「足が欲しいので馬が一頭。後はできれば一週間分の食料を」

王都までは一日でつける距離だ。馬はともかく食料は怪しいと思うたが、意外とすんなりと承諾された。

「あ、リユート様。王宮直屬なんですね。えっと、馬一頭に食料一週間分。小さな町なので限りはありますが、もっと良い支援も受けれますよ？例えば…小さな馬車ならすぐに用意できます」

…そういえば、前にこの町に来たときに馬鹿な貴族が、王宮直屬だとかレーナ様の護衛だと言ってたな。

オレ一人なら問題ないけどミナもいるなら馬車のほうがいいか。

旧鉱山までは2〜3日かかる。地面よりは荷馬車のほうがまだ寝やすいだろつ。

「んつと…じゃあ、馬車をお願いします。後は…毛布も二枚ほど貰えたりしますか？」

「はい、わかりました。すぐに用意しますね」

流石、王宮直屬。急な要請にもかかわらず多少の贅沢品も用意して貰えるとは…。

聞いた時は勝手に何してくれてんだと思ったけど、これは感謝しておかないと駄目だな。

小さな町の小さな商会の建物を出る。

すぐ前にある広場には黒い髪の少女が手に大きい紙袋を抱えてベンチに座っていた。

「ミナ、お待たせ。何買ったんだ？」

「おかえり。前にリユートがくれたヤツが美味しかったから。次の目的地まで時間かかるんでしょ？だから買い置き」

差し出された袋の中にはシャルの実が十数個入ってる。

「元の世界にあつた林檎つて果物に似てるのよ、これ。こっちの方が好きだけど。ね、ナイフない？」

ナイフくらいはいつも身につけてる。シャルの実の皮でも剥くんだろつ。

「指怪我してたら剥き難いだろ？やってやるぞ」

「ん、ありがとう」

ミナは一つシャルの実を投げてよこしてくる。馬車の準備ができるまでの間、ミナと広場でゆっくりしてよう。

馬車の用意が出来たのは、あれから一時間後。一週間分の食料まで頼んだんだから早い方だろう。

「荷台にいたほうが楽だぞ？」

「リュートも荷台に居るなら荷台に乗るけど」

「誰が手綱引くんだよ、それ」

ミナの言い分に苦笑しながら返しはするもののまた隣に座っててくれるのは嬉しい。

足を掛けて身軽に馬車に乗る彼女を見て、お姫様抱っこはもういら

ないんだなあと少し懐かしくなる。

「リユートー、行かないのー?」

「ああ、行こうか」

「目的地まではどのくらい?」

「2〜3日かな。途中で野宿になるけど大丈夫か?なんなら…」

「絶対に一緒に行く」

宿で待ってた方がと言おうとしたら先に察知されてすごい睨まれた。笑顔を見せてくれるようにはなつたけど睨むの今までと変わらないのはどうなんだろう。

「誰かと一緒に旅に出るのなんて初めてだから楽しみなのよ。リユートの家に行くときも少し怖かったけど…今考えて見たら楽しかったし。それに野宿なら何度もしたわ」

…そういえば、一年くらい勇者として一人で旅に出たのか。この子は。

宿にいてくれた方が安心だったんだが無理そうだなあ…。

諦めて馬車を走らせるとするか…。

なんだかんだ言っても魔力はまだ残ってるらしいし戦力的には心強いし、一人旅より楽しい。

何かあったらちゃんと守らなきゃなあ…。

「ねえ、リユート」

町はもう遥か後ろに見える。空高く雲は流れ暖かい風が吹く田舎道でミナは話し出す。

「ごめんね、助けて貰って恩知らずかもしれないけど…私、リュートの家族にはならない」

こんなにも旅立ちには良い日なのに…心にぽっかりと穴が空いたような気分になる。

「そっか。ま、強要はしないさ」

訪れるのは沈黙。

馬の蹄の音と車輪が地面を走る音だけが聞こえてくる。

どれくらい時間がたったか…ミナがオレの袖をキュツと掴んでくる。

「他の人にも…断られた事あるの？」

「ん、あるよ。だから、ま、そんなに気にするな」

気にしてるのはオレ自身だと言うのに、よくも人に言えたもんだなあと思う。

「その人はどうして？」

「故郷に帰りたい。と、妹を忘れて幸せにはなれない。かな。良かったらミナの原因も聞かせてくれないか？」

ミナ以外に断られた時も残念ではあったけど、ここまで寂しくはなかった。

オレは余程この子を気に入ってるらしいな。

ミナに顔を向けると頬を朱く染めて驚いていた。

…え、なんで？

「理由…って…そ、そんな恥ずかしい事、言えない！」

「恥ずかしいのかよ!？」

「うるさい!！」

顔を真っ赤にしたミナに怒られる。いや、恥ずかしい理由ってどんなだよ。

「家族は嫌…じゃないけど、家族じゃない方がいいの。それだけよ」

ミナはふいつと視線を明後日の方向に向けた。

まー、よくわからないけど…はあ、軽く騒いだせいかシンミリした雰囲気は飛んでったな。

掴まれていた袖は放されて次いでポスツと肩が殴られた。

ミナが殴ってくるタイミングは本当にわからん。

「家族じゃなくても…一緒にいていい？」

「…ああ。ミナが一緒にいてくれるなら嬉しい」

家族という繋がりは安心する。

けど…ミナが傍にいてくれるって言うならそんな繋がりがなくても大丈夫だ。

「新しい家買ったらさ…また一緒に暮らさないか？オレは出てる事も多いと思うけど…」

「リユート、自分が何言ってるかわかってる…？まったく指輪の事といい…」

何故かジト目で睨まれた。少し頬も朱い気がするけど怒ってるのか

？ていうか触媒がどうした。

「ま、いいわよ。リユートが良いって言ってくれるなら、こっちからお願いしたいくらい。でも一つ条件つけてもいいかしら？」

「多少の無理は聞こう」

オレがそう言うとなミナはまた満面の笑顔を浮かべ…まずい、嫌な予感しかない。

「私も仕事の時に連れてって？」

「危ない。駄目」

「なんでよ！」

いや、理由言っただろ、簡潔に。

「冒険者も傭兵も一日に何十人も死んでる。そんな仕事なんだよ」

「私、一応、傾国の魔女とか呼ばれてるんですけど？」

ジト目したって駄目。

「オレにとっては一人の女の子」

「それは嬉しいけど…リユートの力になれない？私」

…や、まあ、多分、オレより強い。

「でもなあ…あまり危険な目にはあつて欲しくない」

「私もリユートにそう思ってる。だから力になりたいの」

引き下がる気ないよなあ…。でも今回も連れて来ちゃってるし…オレも甘いか。

「首輪…それなんとかしてからな」

確かに首輪さえなければミナとオレならそうそう危機には陥らない。

「あ…うん！」

…この子が笑ってくれるなら、それでいいかと思いかけた自分が嫌だ。

「リユート、初代勇者パーティーの話は知ってる？」

「ん？この世界で知らないヤツはいないだろうな」

「魔剣を受け継いだ勇者シグルドと大魔法使いアリス。私たちってこの二人に似てない？」

「あはは、確かにな。魔剣を受け取った人間も、ここまでの大魔法使いは歴史に二人ずつだろうね」

この時、オレはミナの言葉の裏の意味に気づいていなかった。

シグルドとアリス…二人は魔王を倒して国に帰った。その後のエピソード…。

二十五話 100と1の旅立ち（後書き）

えーと、ぶつちやけ、この後、鉦山まで何事もなく着きます。

そこを書くのも飛ばすのも微妙なんで、次はサブキャラ視線の話でも書いて次に本編に戻ろうと思います。

二十六話 王都の彼女達と+ (前書き)

19話の最後から数日後の話です。
本編より少し進んだ時間のお話です。

今回あんまり本編には関係なかったりしますが良ければ読んでください。

二十六話 王都の彼女達と+

リズニーズヘッグ。私は、この国でも有数の権力を持つ家に生ま
した。

とても広いおうち。多くの従者。すごく美味しい食事。

そして優しいお父様。

私は人が望む多くのものを生まれながら持っていました。

でも、ただ一つ…友達がいなくて寂しかったのは今でもよく覚えて
います。

貴族という立場上仕方がない事なのかもしれませんが、社交界で会
う貴族の付き合いではなく、遠慮して気を効かせてくれる王都の子
供達ではなく…ただ、思いつきり遊んでくれる友達が欲しかった。

そんな中、私は当事流行っていた病に伏せました。

病といっても死に至るようなものではなく、1ヶ月ほど体温が下が
り寒さに震える病気です。

ただ…お父様は私の事を大変愛してくださって…お恥ずかしなが
ら治療できた人に謝礼をお支払いすると御触れを出したんです。

とはいっても、この奇病は今でも治療方法はありませんから…当然、
当事見つからなかったという事になります。

この病気はどうかやら自分の魔力が何かの拍子に冷気を運び、火の側だろうと室内だろうとまったく暖をとれない厄介なものでした。

寒さに震える事、一週間…次々試される治療方法にまったく効果は得られませんでした。

そんな時にお父様に見てほしいものがある。と一人の商人が訪れま
した。

灰色の髪に所々に傷のある服。

商人というよりは冒険者のほうが似合っている彼は私に小さな鉢植
えを差し出さしてきました。

中に入っていたのは花ではなく赤い光を放つ不思議な苔…。

「……！！…暖かい」

一週間ぶりに感じる暖かさ…私は今まで我慢してきたのがくずれポ
口ポ口泣いてしまいました。

「君…！これは一体なんなんだね！？」

後から聞いた話ですが、それは火山に住む魔獣の毛皮に付着してる
溶岩苔というものらしいです。

常時魔力を持った熱を発するから魔力の冷気も暖める不思議な苔。

病気を治す方法ではありませんでしたが溶岩苔のお陰で私は残りの
治るまでの間、暖かく過ごせました。

これがお父様と彼の…そして彼と私の出会い。

お父様が無言で使い込まれた手袋を差し出しました。

片方は焼け焦げていて着けていた人の手も無事ではないと思います。

「…遺体は見つからなかった。だが、周囲には夥しい数の魔獣の死体もあつたし、馬の蹄の後も見つかつてはいない。…絶望的だろう」

リズはニーズヘッグ公爵から手袋を受け取ると、その場に膝から崩れ彼の名前を呼び出す。

「リユート様…リユート様…!!」

五年前に初めて出会ってからお父様もリユート様を気に入って王都に来た時にはうちで一緒に食事をしたり遊んだりしてくれました。

まだ小さなリズにとって彼が友達から初恋の人に変わるのにそう時間はかからなかった。

そして、それは今も…である。

「惜しい人を亡くした。彼は…素晴らしい商人で…私の友人だった」

公爵さえも助けられなかった事を悔しがるように俯いている。

リユート様…私はリユート様と結ばれる事はありませんが…それでも残り数年は甘えさせて欲しかったですわ…。

不思議と涙が出てこないのは…いつか、こんな時が来る覚悟していたからでしょうか…。

リユートの仕事は余りにも危険すぎる為にいつ死んでもおかしくない。
生きているのは単に運が良かったただけだ。

それでも…しばらくは立ち直れそうにありませんわね…。

リズが手袋を手に自分の寝室に戻ったのは、それからしばらく立つてからの事だった。

「騎士の道を捨てた不祥の弟は…勇者としての道も進めなかったよ
うです」

近衛騎士団長コガ「フェトム。彼は今私の前に片膝を付き父上に報告をしてる。

けど、何を言ってるかわからない。
いや、わかりたくないだけだ…。

リユートが…死んだ…？

「勇者として召喚されようと…やはりただの商人であったか」
「申し訳ありません」

父上とコガは何を言ってるんだろう。
私は初めて父上の言葉に腹が立った。

リユートがただの商人と言うなら、この国の近衛騎士はソレ以下ではないのか。

私だって長年、騎士を見てきたんだからリユートの剣がどれだけすごいものかはわかる。

父上は…治世は素晴らしいかもしれないけど人を見る目がない…。

初めて父上の至らぬ部分が目につく。

「父上、少し体調が優れないので失礼させて貰っても宜しいですか？」

「おお、レーナよ。大丈夫か？すまん、コガよ。レーナを部屋まで送ってやってくれないか？」

…報告はどうしたのかしら？

まだまだ聞かなきゃいけない事は沢山あるはずだ。

魔獣の残党の予想、周囲の街の被害状況…父上は王都しか見えない

のか…。

部屋を出て無駄にきらびやかな廊下を歩く。

レーナは少しイライラしてるのか早歩きで部屋に向かっていく。

「リユートは…素晴らしい剣士だったと…私は思います」

ふいに後ろに付き添ってたコガが口を開いた。

レーナは驚いて振り向く。

「アイツは確かに騎士ではありませんでした。その道は自分で捨てましたしね…。それでも…剣の腕だけはオレよりも上です。まあ、戦闘となれば負ける気はありません。もっとも…今となってはそれもできなくなっしまいました…」

レーナはコガも王よりの考え方だと思っていたので、彼の発言には驚いていた。

「コガ。貴方は…弟の事をよくわかっているんですね」

「…ありがとうございます」

「私…彼の事、尊敬してました。いえ、尊敬してます」

死んだと言われて敬意がなくなるはずもない。

傾国の魔女が圧倒的な力を持つばかりに、他の勇者は頼りなく感じた。

でも、リユートは違った。最初は今までと同じかと思ったけど、いきなり近衛騎士を相手にさせられて冷静でいて…しかも勝った。

でも…その頼りになった勇者は二人共いない。

あと魔王を倒せそんな勇者は聖者カムイくらいのもの…。

「コガ。本当に…自分達の世界を勇者に任せちゃっていいのかしらね」

「伝統…ですからね。そうそう変える事はできませんまい」

…リユートとも話してみたかった。商人の…王宮に関わりない人の意見も重要だろう。

他の人に聞いても本心を話して貰える訳はない。

「コガ、送ってくれてありがとう。貴方の事、少し見直したわ」

「いえ…それとレーナ様、これを…」

コガは布に包まれた物体をレーナに渡す。

レーナが首を傾げながら布を取ると中には美しい剣がくるまれている。

ただし…それは中程で真つ二つに折れている。

「リユートが使ったいた剣です。…家の中に捨てられたように落ちてました」

「…私が貰ってもいいの？」

「…はい」

「ありがとう、コガ」

それだけ言うと私は部屋に戻った。

あまり長い間、顔を合わせるとまずい…。

私は王族。王族は…弱味を見せてはならない…。

「…リユート…なんで…ふ、ふえ…ひつく…なんね、しんらの…う
う…」

外に漏れないように声を押し殺して泣く。

たった二日間会っただけの相手の為に泣くとは思ってなかった。

「王都も久しいな」

人が大勢集まる南門。それに紛れてとあるパーティーが広場へと入
って行く。

「さあ、まずは城に行つて王女に会おうじゃないか！」

「このロリコンが！！」

元気良く叫ぶ馬鹿に赤髪の男が頭を思いっきりひっぱたく。

「何をするか、アウゼル」

「お前のロリコンっぷりは本当に危ねえんだよ」

「ま、どうせ王宮には行かなきゃならないのですれど」

聖者カムイ率いる勇者パーティー。

彼らは魔王に負け一度王都に戻ってきたのだ。理由は簡単…。

強くなる為だ。

「ケーファー殿は強かった…。俺も剣の腕を磨きアウゼルも炎の扱い方をロザリーも格闘術を極めねば勝てまい！」

元々、侍であったカムイとは違いアウゼルやロザリーはこの世界に来てからの付け焼き刃。今まで能力任せで戦っていたが魔王にほとんど通用しなかったから、一度、鍛え直そうと結論が出た。

「え〜と、カムイさん、私はどうしたらいいですか？」

勇者パーティーの一人。治癒術師の少女。

彼女は王都出身の為、実家に帰ったり友達と遊びたかったりする。

「貴女は昼間王宮で私達の手伝いをしてくだされば後は好きにしてよろしくてよ」

「なんでロザリーが答えてるか!？」

「とりあえず今日は疲れたし修行もしねえ。家にも帰って両親に顔を見せてきな。心配してるだろうしな」

「アウゼル!？」

本来リーダーであるカムイを無視して適当に進める二人。

少女も、ありがとございます!!!と行って走っていった。

大事なとき以外、カムイがスルーされるのはよくあることである。

「ハア…まあ、泊まるトコもないし二人とも、早く王宮に行こうではないか」

気を取り直して話しかけたカムイだがそこに二人の姿はなく遙か先を仲良さそうに歩いていった。

彼女と彼女と彼等がリュートと会つのは翌日の事である。

二十六話 王都の彼女達と+ (後書き)

リユート、ミナ。

リズ、レーナ。

カムイとその他が王都に集結しますがまだ少し先のお話です。

次話は旧鉾山が舞台のお話になります。

二十七話 100と1と3つの首の大きな犬（前書き）

本編に戻ります。

時系列が前後して非常に分かりにくいことになってるかもしれないせんが二十六話よりも数日前の話です。

楽しんで貰えると嬉しいです。

二十七話 100と1と3つの首の大きな犬

旧セラ鉱山…1ヶ月以上前にミスリル結晶を取りに来て、何の因果か王宮に勇者として召喚された場所。

オレは再びそこに立っていた。隣に黒髪少女を連れて。

「リユート…あつちに煙が見えるんだけど…」

「ん？ああ、街があるからな」

入口につくなりミナが怪訝な顔して遠くに立ち上る煙を指した。

昔、ここが現役の鉱山だった時に栄えた街…今はその時に培った鍛冶が盛んらしい。

「…普通こういうのって街で準備してからダンジョンに入るものなんじゃないの？」

…ああ、煙が何か。じゃなくて街に寄らない事を疑問に思ったのか。

「寄ってもいいけどまだ昼過ぎだしお金もないからなあ。先に鉱山に行つて帰りは街で一泊して帰ろう？」

「…お金なら私の使つていいのに。ま、確かに野宿にしてもそこそこゆつくり休めたし休憩はいらないけど。毛布一枚で随分違うものなのね」

…一人旅の頃の野宿はどうしてたのか気になるな。

ミナはとことこ歩き洞窟の前で立ち止まる。

「ね、中に少し大きめの魔力があるけど何かいるの？」

大きめの魔力…？

下位の魔物ならうじゃうじゃいたが魔獣クラスの敵なんて……いた。

「ケルベロスがまだ倒されてないのかな」

一緒に来たエンブスとカリッツオが少し心配だ。

「ケルベロスなら心配ないわね」

「……待て。なんでそうなる」

ケルベロスは魔獣の中でもそこそこ上位にいる。ウェアウルフよりずっと強い。

「ケルベロスって、犬じゃないの？」

こいつすごい。パーティーが全滅してもおかしくない魔獣を犬と言
い切った。

「火と水と雷のブレスを吹いて、鎧を着込んだ兵士を鎧ごと真つ二
つに切り裂き、気性も荒い魔獣を犬と言うなら犬だな」

見た目以外犬っぽくない。

「…襲ってくるの？」

「もちろん」

ミナは、そっか…。と言って少し落ち込んだ。

…異世界のケルベロスは大人しいのか？

無論、ミナの居た世界にはケルベロスなんていない。

「ミナ、よくわからないけど、そう落ち込むな。早く言って宿でゆつくり休もう？ほら、シャルの実でも買ってさ」

「別に落ち込んでなんか…はあ、そうね。早く終わらせよ…。リュート、魔剣出すわ」

「ん、頼んだ」

キィインと甲高い音が鳴り目の前に黒い柄、白銀の剣が出現し、これを握る。

ミナはこれをオレにくれているので自分でも出せるんだが、慣れてなくて時間がかかる。

「ありがとつな。さ、いこうか」

お礼に頭を撫でると拳を握り出したので慌てて離れる。いや、別に殴られても痛くはないんだけどね？

「ツチ。私も何か武器買おうかしら…」

舌打ちしやがった。

ついでに、その武器は何に使うのか聞きたいけど怖くて聞けない。

「何してるの？早く行くわよ。私が前歩いてもいいけど…いいの？」
「言い訳あるか!？」

魔法使いに前を歩かせるだなんて聞いたことない。まあ、オレも商人だけどね!!

「日光、追従」

ミナがまたよくわからない言語で詠唱する。
途端に小さな光の玉が上にあがりペアと辺りが照らされた。

「なんて便利な…でも魔力使っていいのか？」

ミナの首にはまだ首輪が付いている。それがあある限り彼女の魔力は自然回復はしない。

「使ったうちに入らないわよ、こんなの。無詠唱魔法さえ使わなければ大丈夫」

無詠唱魔法は魔力の消耗が異常に激しいらしく優れた魔法使いでも数発で弾切れになるらしい。

「前はソレばかり使ってたんだろ？本当に規格外だなあ…」

「誉め言葉と受け取っておくわ」

ミナは得意気な顔で長い髪をかきあげる。

彼女がトコトコ歩くと上の小さな太陽もふわふわ着いてきてる。

本当に便利だな、おい。

魔法ってここまで自由なものだったけ？

まあ、異世界の発想なんだろう。

ミナの居た世界では魔法は無かったのに魔法という概念はあるらしい。

実際の魔法を知らなかったからこそ自由な想像ができるんだと思う。

「…リユート。何か来る。小さな魔力が沢山」

…それに加えて敵の魔力を察知する事もできるようだ。

「魔力回復するようになったらオレ、いらなんじゃないか、これ

…」

「…？どうしたの、リユート」

ミナが落ち込むオレの顔を覗きこんで首を傾げる。

「いや、なんでもない…ミナは可愛いなあって、痛っ！？」

言ってる最中に足に痛みが走る。

視線を下ろすとオレの足の上に誰かの足が乗っていた。ていうか、一人しかいないよね。

「リユート、人の話聞ってる？私、敵が来るって言ってるんだけど？」

「痛い、痛い！悪かったから足をどける！」

すぐに足はどけてもらえたけどバーク！とか言われて、ついでに舌もベーツと出される。

そこまで怒らんでも…。

「敵っていつても、この辺のは多分…」

薄暗い奥の道を凝視する。洞窟や鉱山に出る魔物なんて大体決まってるよなあ…。

バサツバサツと羽ばたく音が聞こえてくる。それも複数。

魔物は突然変異や新種やらが多すぎて名前が付けきれない。だから大雑把に呼ばれてる。

「コウモリタイプか…」

前、来たときにも戦ったが正直そんなに強くない。ていうか噛まれても、痛い！ってだけだったりする。

「3、4、5、6…数だけはいるな。ミナ、ちょっと下がってる」

「なんで？」

…魔剣を構え魔物を倒そうとしたら隣には魔剣を両手に一本ずつ持った女の子が立っていた。

「…え？あれ？戦う気？」

「うん？あんまり強くなさそうだし」

えーと…まあ、こいつくらいなら大丈夫か…。

「まあ、いいか。弱いけど攻撃されたら痛いからな。気をつける」

はい。と緩い返事をしてミナは両手に剣を持ち突っ込む。

オレにくれたしっかりと実体のある魔剣は一本だけらしいが、あの薙みたいなきれたいな魔剣は何本召喚できるんだろう…。

とりあえず自分に向かっ てきた2匹を無造作に切り払う。
ピギヤ！と鳴き落ちる様は少し哀れにも思えるけど…。

「一応、害意は満点だしな…」

突っ込んだミナを見ると意外に剣は使えている。

切り方こそただ振っているだけだが、剣を投げたり弾かれたりしても次々新しいのが召喚され実に厄介そうだ。

「あの子に剣を教えるのもいいかもなあ」

そんな事を考えていたがあっという間に残りの敵を倒したミナが帰って来た。

「リユート、サボってたな」

彼女はちよつと頬を膨らませて怒っていた。

それから小さな戦闘か何回。前着たときにある程度間引いたせいか、今回の戦闘は楽なものだった。

一度、ゴーレムの大群に襲われた時は流石にミナの魔法を頼ったけどソレ以外はお互いの剣でなんとかなる程度の物。

そして、鉱山も中ほどにかかった辺り…目的の場所に辿りつく。

「すごい…綺麗…」

暗い洞窟でも尚、青白く輝く…壁一面に飾られたミスリル。

前に来た時から少しも量が減っているように見えないのはカリッツオ達だけでは大量に取りきれなかったのだろう。

それに未だケルベロスが徘徊してるとしたら危険極まりないため気軽にこれる場所でもない。

…ケルベロスと遭遇した時は流石にミナの魔法を頼るかあ。

王都で採掘品を売れば首輪を外す代金くらいにはきつとなる。

そうすればミナの魔法を大幅に制限する事もないから今日少しくらい使ったって問題はないだろう。

「ミスリル…リユートの剣でしか見たことなかったけど…すごく綺麗…」

「あまり採掘できる鉱石じゃないからな。オレが知ってる限りじゃここくらいだよ、これだけ大量に残ってるのは」

国が持つてる鉱山はもうほとんど枯れてるしなあ…取れてるだけまだマシだが。

「ミナ、もっと奥に行こう。もしかしたら結晶もあるかもしれない」

オレが彼女に手を差し出す。

ミナはちよつと拗ねたようにその手をとってくれた。

「私、もう一人で歩けるんですけど？」

「まあ、いいじゃないか」

こういうのは雰囲気だ。

彼女の手を引つ張り奥へと進む、以前に結晶を採掘した場所。ケルベロスが居た場所だから警戒はしておくけど、魔力を察知できるミナが反応してないんだから大丈夫だろう。

「ミナ!!」

彼女の名前を呼ぶ。壁どころか天井までもミスリルで飾られた部屋。全てを持ち帰れば一生は遊んで暮らせるだろう。

「…リユートはズルい」

「なんで!?!」

ミスリルの壁を見て綺麗だと喜んでたからもつと綺麗なものを見せたくて連れてきたらなんか怒られた。

「私、こつちにきて一年も何してたんだろ…そしてその間もリユートはこんなに楽しい事してたのね?」

「あー…えーと…ごめん?」

なんとなく謝ってみる。確かにこの仕事は命賭け…多分もう一回同じ人生を歩んできたら死ぬ自信がある。けど、まあ…普通の生活をしてたら得れない感動があるのも確かだ…。

綺麗な景色、新しい発見、未開の地域、それらは男の冒険心を十分に刺激するものだ。

商人でやってる人は珍しいかもしれないけど…この世界にいる冒険者の多くは、そんな楽しみの為に命を賭けてるヤツがほとんどだろう。

ミナはクスツと笑ってオレの手を強く握り返してくる。

「私、やっぱりリユートについているんなトコ行きたい」

「はぁ…心配だけど、もう止めはしないよ…」

止めるだけ無駄だろうしなぁ…。

「ね、持ち帰るにしてもどうするの？これ。ツルハシ？」

「いや、普通のツルハシじゃ硬すぎて採掘できん。前はミスリル結晶剣で叩き斬って持って帰ってたんだけど…魔剣で斬れないものかな」

剣を抜いて鉱石に叩き付けて見るとキンと高い音がしてミスリルの塊がゴロつと落ちてきた。どうやらいけそうだ。ミナが、剣使い荒いなぁ…とか言ってるけど、とりあえずこの方法しかない。

オレはミスリルに向かって何度も剣を振り下ろして塊を袋に詰めてく。

そんな作業をしばらく繰り返していると座り込んで作業を見てたミナが声をかけてきた。

「ねえ、リユートお」

「うん？」

「一応、言っとくけど…大きい魔力がさっきから近づいて来てて、今、その角を曲がったトコにいるから」

…は？

向こうの曲がり角を見てみると、黒いお犬様が顔を出してくる。

ただし、その体軀は3Mを超え首は3つある。

「えーと…一応聞くけど今気づいたのか？それ」

「んーん、ずっと場所はわかってたけど。まあ、大丈夫かなあってでも、ほら、見える前に言っておかないとびっくりするでしょ？」

「このタイミングまで黙ってた事に驚いたよ！？」

慌てて魔剣を構えてケルベロスに対峙する。いや、もっと余裕を持って教えて欲しかった。

ていうか、なんで冷静なんだ、この子。ていうか…。

「いや、せめて立って！？ブレスくるよ！？」

「ん？いや、そんな気配ないし大丈夫じゃないかな？」

は！？

ケルベロスの方をみてみると確かに前回と違いブレスを吹く気配もない。

ていうか、唸り声すらあげてない。ただこっちの様子をジーツとみているだけだ。

…どういうことだ？

「ほら、ね？ケルベロスなら心配いらんじやない」

「んな、バカな…」

正直何がかんだかわからないがミナは楽しそうに壁やケルベロスを見て笑っている。

とりあえずオレとしては気が気じゃないんだが…。

そうこうしてるうちにケルベロスはノソノソとこっちに歩き出す。

歩くといっても大きさが大ききなので結構早い。

「ミナ、近づかれる前に魔法で…」
「うん、嫌」

…まあ、予想はしてたけどね。
となると…頼りになるのは剣だけか…。

「召還解除」
「な、ちよ、そんな事できるの!?!」

剣を構えた瞬間、オレの手の中から剣が消える。え？これ、オレの剣なんじゃないの？

ミナはミナで人の話を聞かないで、危ないでしょー。なんていいながらこつちをジト目で睨んでくる。

…ケルベロス相手に素手のほうがよほど危ないんですが。

てワケでオレとミナの前には今すっごい大きいわんちゃんがあります。オレの武器、無し。隣の彼女、やる気無し。どうしようか、これ。ミスリルで殴りかかってみる？剣で斬るのも一苦勞な相手に？

そして目の前に来たケルベロスはついに行動をはじめ。
鋭い爪を引っ込め、牙のある口から舌を出し、足を折りたたみ、寝転がって、腹を天井に向け…って、あれ？

隣ではミナがクスクス笑っている。とりあえず何がなんだかわからないけど、これは…。

「ね？これって犬の服従のポーズでしょ？ケルベロスってそんなに凶暴じゃないのよ」

ミナはケルベロスに近づくと無防備なお腹を撫でだす。多分、こいつ以前にオレを襲って来たヤツだと思っただけど…なんでこんな事になってるんだ？

ミナはヨシヨシと機嫌良さそうにケルベロスを撫で回してるし、ケルベロスもクウーンとか鳴いて気持ち良さそうにしてる。以前、オレを殺そうとしたヤツとはとても思えない。

そして、オレが戸惑っているとミナはさらにとんでもない事を言い出した。

「リユート、私、この子、連れて行きたい！」

…え？何だろう、この…え？

二十七話 100と1と3つの首の大きな犬（後書き）

あらずじょっと変えてみました。

前の方が良かった等の意見があれば、教えて貰えると嬉しいです。

二十八話 1と仲良し(前書き)

鉦山後編です。

久しぶりのミナ視点！

なんか書くの難しかった…けど、今日中に書きあげましたのでよければ読んでください。

二十八話 1と仲良し

「無茶言うな、そんな話聞いた事ねえよ!？」

「可愛いし、大人しいじゃない。ね?」

もふもふした犬…首が3つあるし、やたら大きいけど犬は犬だろう。私に擦り寄ってきてるのが、その証拠じゃないかな。

「この子に荷物持ってもらえば楽だし、普通の馬より強いよ?きつと」

「いや、確かにそうだけど…ケルベロスだぞ?」

「うん、だから大丈夫だよ。私、他の子にも会ったことがあるもん」

まさか、二匹ともが偶然大人しいって事もないだろう。

「大人しいってケルベロスがか…?オレ、こいつに襲われたぞ?」

「リユートが剣なんか構えてるからだと思っただけ…動物だって武器持たれたら怖いに決まってるでしょう?」

いや、うーん…と彼は言葉に詰まる。

実際に今、襲ってきてないんだからいいじゃないか。

私達が口論しているとケルベロスがいきなり立ち上がって近づく。

リユートは慌てて逃げようとするけど、それよりも早くケルベロスはリユートに近づいて顔をペロっとした。リユートのきよとんとした顔が面白い。

「ほら、この子もお願いって言ってる」

ケルベロスはリユートの前で尻尾を振ってちょこんと座ってる。以前会った時も懐いてくれたのに、その時はあんまり余裕なくて冷たくあしらっちゃったからなあ…。

今回、襲ってくるって聞いて残念だったけど、そんな事なくてよかった。

「よくわからないけど、確かに襲ってこないらしいな…なんでだろう…」

「犬と人間は仲良しなもの」

ミナの魔力のせいか？ともリユートは思ったけど、今考えてもどうにもならないから王都に着いてから調べることにする。

「ああ…わかった、わかった…。確かに荷物もちには便利そうだけど、危なそうだと思ったら斬るからな？」

「…リユートまだそんな事言うんだ」

本当は、リユート嫌い。と言いそうになったけど慌ててその言葉を飲み込む。

多分、私が一番言っちゃいけない言葉だ。

「前にいたウエアウルフは襲ってきたのになあ…。ケルベロスの方が遥かに格上なのに」

リユートは目をつぶって自分の手を握るとゆっくりと魔剣が生成された。

私が出すほうが早いから私が消すこともできるんじゃないかなーって試してみた結果できたけど、やっぱり剣はもうリユートの物なんだなあって実感する。

「あれは狼。こっちは犬。当たり前でしょう？」

「…その判断基準がオレにはいまいちわからない」

一応、ケルベロスに襲いかからないかだけ警戒してみたけど、すぐにミスリルをカッソカッソたたき出したからそんな心配もなさそう。

…まあ、残念ながらリユート以上に信用できる人は私にはいない。

「リユート、私も手伝う」

「んー？じゃあ、そこらに転がってるミスリルを袋に詰めといて欲しいな。後でどうやって運ぶか考えよう」

床一面に散らばってるミスリル。

さっきまですごく綺麗だったのに、なんだろう。こんなゴミみたく飛び散つてるとすごくありがたみが無い…。

拾ったミスリルは結構な大きさがあるにも関わらず私が持てるくらいに軽い。袋自体は沢山あるけど、一つ一つはそんなに大きく無い為、すぐに一つ目の袋は満杯になってしまった。

んー…この紐でケルベロスの毛皮に結んでそのまま運べないかな？

ケルベロスが怒ったり困った顔したらやめようと思いつつギョツと結んでみたけどケルベロスは大して気にしてなさそうに欠伸をしている。

うん、これなら運ぶのも楽なんじゃないかな？これだけ大きい子だから力も強いハズだし。

「リユートー、ちょっと結んでみたけど、このまま持ち帰れないかなー？」

相変わらずミスリルをカツンカツンしてるリユートに後ろから呼ぶとすぐに振り向いてくれる。

そして、何故か盛大に溜息を吐かれた。

「ミナは本当にケルベロスを魔獣と思ってないね…。ま、いいんじゃないか、これで。コイツもあまり気にしてなさそうだし」

なんだよー。魔獣だからってそんな毛嫌いする事ないじゃない。

魔獣は魔物の中でも人に強い害意があり強力な固体を指すためにリユートが警戒するのは当然なのだが、ミナはケルベロスに関してはまったく警戒心がない。

「ねえ、リユート…。そんなに、この子、連れてくのが嫌かな…？」
ミナが不安そうな顔でリユートを見上げる。どんなに自分が気に入っても、それでリユートに迷惑をかけるワケにはいかない。
けど、リユートはそんな彼女の頭をぽんぽんと優しく叩く。

「ま、いいさ。連れて行きたいんだろう？それに、確かに襲ってくる気配もないし…役に立ちそうだ」

頭を触られながらミナは俯く。

リユートが自分の言う事に耳を傾けてくれるのが嬉しい。リユートが我俣を許してくれるのが嬉しい。

元の世界では誰かに我俣を言うだなんてありえなかった為、なんてお礼を言っただけいいかわからない。

だから…。

「子供扱いするな！」

「だから、いきなり殴ってくるな!？」

照れ隠しにとりあえず殴っておいた。

「さて、リユート。全部、括り付け終わった」

「ん、ありがとうな。まったく…こいつミナ以外には気を許してるわけじゃないんだな…」

あの後、ある程度探掘と袋詰めが終わったりリユートもケルベロスに袋を取り付けようとしたけど、ガウウウウと唸られた為、断念した。

うーん、一応、ケルベロスから舐めたりするのに…不用意に体触られるのは嫌なのかなあ？

ていうか、いい加減、ケルベロスって言いにくい。

「ね、この子に名前つけていいかな？」

「飼い主はミナだ。好きにするといいさ」
「本当!？」

元の世界ではどっちかといえば猫の方が好きだったけど、そんなの飼ってる余裕はなかった。

それで、こっちの世界に来てケルベロスが懐いてくれて、ちよつと犬も好きになってきた。

そして今、この子に名前をつけれるだなんて嬉しくて仕方が無い。

「んーとね…ケルロン」

「…。」

「リユート、なんか言え」

何、今のそんなに駄目?可愛いしわかりやすいじゃん。

「いや…好きにしたらいいんじゃないか…?」

すつごく歯切れ悪い…。

いいよ。好きにしろって言うならこれで行くもん。

「ケルロン、これからよろしくねー」

呼びかけるとケルロンはガウ!と大きな声で返事をしてくれる。

リユートが言うには魔獣は知能が高くて人間の言う事はほとんどわかるそうだ。

「さて、結構時間も経ってるだろうしとりあえず宿まで戻ろう」

…確かに何時間も潜ってたんだろうな。外は多分夕日が沈む暗いじ

やないかと思う。
帰り道で魔物と戦いながら帰ったら…もう真っ暗じゃないか。

リユートが帰る準備をしてるとケルロンがその場でくるくる回りだしてガウ！と吼えると来た道とは反対の鉱山の奥へと進んでいく。そして曲がり角でこっちが見えなくなる前にお座りをしてガウウ！と鳴いた。

「…どうしたんだ？」

「えっと…着いて来いって言うてるんじゃないかな…？」

勘だけど。

「荷物はどうせケルロンが持つてるんだし、着いていってみようよ」
私がケルロンに駆け寄るとリユートも、仕方ないか。といいつつ歩いてきてくれる。

私達が追いつくとケルロンはまた奥に進んで行って見えなくなる前にお座りして待つ。その繰り返しを何回続けたんだろう。
ふいに私の魔法で作った小さな太陽とは違う光が差し込んでくる。

「出口…こんなトコロ…」

ケルロンは外に出て今度は伏せてまっていた。ここがゴールって事で良さそうだ。

来る最中一度も魔物に会わなかったお陰で早く外に出れた。多分、入った入り口よりも街に行くには少し遠いけど、ソレを差し引いても十分近道だろう。

だって、外は夕日が落ちきる直前だ。真っ暗には程遠い。

「ね、ケルロン、いい子だよ?」

「…確かにこれは認めなきゃいけない…。普通に帰ってたら今頃中で戦ってただろうし」

ケルロンも嬉しそうに喉をグルグルウと鳴らしている。

「入った洞窟の西側なのかな、ここは…。昔、鉾山として使われてた時の見取り図にはなかったから、落盤か何かで新しくできたのかな」

鉾山として使われてたのはすでに数十年前。先代魔王が出現する以前の話だ。

新しい道ができていてもなんら不思議ではない。

「さて、今回のお仕事終了かな?私、役に立った?」

「…悔しいけど、とつても」

やった。と私は小さく喜ぶ。

今まで迷惑かけてただけだったからなあ。それに今回、ちゃんと役に立ったことで今度からもちゃんと連れてって貰えそうなのがする。

実際にミナの功績は洞窟内での灯りの確保、ケルベロスとの戦闘回避、荷物の運び出し、近道による帰還と多大な物でリユートとしても一人で来るよりも明らかに楽だったであろう事は容易に想像がつく。

「はあ…わかったよ。ミナ、これからもよろしくな?それと、お前も」

私に続いてケルロンに向き直ってリユートが言うとケルロンもそれ

に答えるようにガウツ！と鳴いた。確かに、この子って頭いいなあ…。

「…さて、街に戻るとして問題はケルベロスの事をどうやって説明するかだな」

ちゃんと宿取れるかなあ。ってリユートは言ってるけど私にとってはそんな事よりも大きな問題がある。

「リユート、ケルロン」

「ん？ケルベロスがどうかしたか？」

「ケル・ロ・ン！」

「…えーと、ケルロン？」

私はこくりと頷く。せっかく私が名前をつけたのに呼ばないだなんて失礼じゃないか。リユートも意味がわかったようで苦笑しながらわかったわかった、ごめんな？って言うてくれるのでとりあえず許すことにしよう。

「ほら、リユート、行こう？駄目だったら私とケルロン外で待つてるから買い物だけして野宿でいいじゃない」

ていうか、私はリユートが居てくれれば別に問題ない。いないと流石に不安だけど。

「ま、そっか…。なるべく泊まるといいんだけどなあ…」

これが私の始めての仕入れ。リユートとした一番最初の仕事だった。

二十九話 100に頭突く想い(前書き)

投稿に結構日が空いてしまいました…。

今回の話で、やっと二十一話のラストに追いついた形になります。

そういえば、感想、ユーザー以外は送れなくなってたんですね。
何が変わるわけでもないですが一応制限解除してみました。

二十九話 100に頭突く想い

「遅い」

「ミナの方がよほど長風呂だって」

風呂から上がるといきなりミナに怒られた。

いつもはすぐ終わる風呂だが流石に今日は鉱山に潜って汗だくだつた為、念入りに体を流した結果だ。

ちなみに宿屋は意外とあっさり泊まらせてくれた。ケルベロスは外に繋いである。

ミナが自分は勇者で能力は魔獣を従える事だと嘘をついたら諸手を挙げて歓迎してくれたのだ。

お陰で少しいい部屋だったりする。

「この世界の人って本当に勇者が好きね」

「ああ…だから勇者の事で嘘つかれるとは思ってもなかっただろうねえ…」

まあ、オレは別にそこまで勇者に興味はないけど、それでも思う所くらいはある。

「別にいいじゃない。そんなことより、ほら、リユート、ちょっとこっちきて」

「こっちって…」

「じ・じー」

ミナは自分の寝る予定のベッドの横をポンポン手で叩いてる。

疑われるのも嫌だけど、これはもつ少し警戒するべきなんじゃないかなあ…。

まあ…行くオレも駄目だな…。

ミナの傍に近寄りベッドに座る。するとふわっとどこからか甘い香りが漂ってきた。

「これ…ミナ…？」

「ん。気づいてくれた？」

甘い香りがどこから漂ってきてるか。心当たりは一つしかない。

「ミナ…良い匂いする」

「うっ…面と向かって言われると流石に困る」

どうしろってんだ。

「ていうか、どうやったんだ？これ」

「んー、どうやったっていうか…。シャボン！」

彼女が人差し指を立てて詠唱するとそこに小さな泡が少しだけ沸き立つ。

原理はよくわからないが虹色に反射していて綺麗だ。

「…また珍妙な魔法を」

「珍妙とは何よ。私が元いた世界ではこれで体を洗ってたのよ。普通に水で流すよりも綺麗になるんだから」

「…また珍妙な魔法を」

「ねえ、なんで二回言ったのかな？」

笑顔だ。この笑顔はすごく怒ってる。

「まあ、そんなに怒るな…にしても…ミナ、もう少し警戒した方がいいんじゃないか？」

「警戒？」

信用してくれるのは嬉しいけど万が一が起きないとも限らない。

ミナは少し童顔だけど十分年相応に可愛いし、何より…彼女は完全な黒髪。

勇者に対する憧れは、多少なりとも誰でも持つてる。

だから、勇者の子孫…ましてや先祖帰りを起こしたオレみたいな髪の色が違うヤツは、注目されやすい。

女性であれば、それだけで貴族に嫁げる事だつて珍しくない。

そして、その感情は、この世界の色…つまり白や金と離れるほど強くなる。

ミナはその真逆…オレの目から見ても魅力的だ。

だからこそ…。

「襲つぞ？」

「…え？…ふあ!？」

ミナは一瞬何を言われたかわからなかったようだけど慌ててベッドの端まで後ずさる。

うん、そこまで大袈裟な反応されると、ちょっと傷つくな！。

「だから…ちゃんと警戒してくれな？なんなら今度から部屋も二つにしたっていいし…」

そこまで言った所で彼女は顔を赤くしてはいるが、キツイ視線で口を開く。

「じゃあ、襲え」

……はい？

「えーと…ミナさん？」

「絶対にリユートを警戒なんてしてやんない。だから好きにしたら？」

ミナはそういうと本当に警戒してないのか人が腰掛けてる後ろに寝転がる。

…完全にリラックスしてやがるな、コイツ。

本当に襲う事もできずに頭を抱えてるとミナから止めの一撃が飛んでくる。

「へたれ」

「そこまで言うか!？」

ていうか初めて言われた気がする。

普段は公爵令嬢を陥落させたとか言われてるからな…。

「襲われないってわかってやってるな…」

「ん。まあね。今まで大丈夫だったんだから。安心して。他の人の傍でこんなに無警戒じゃないわ」

「それなら、まあ、いいんだが…」

一応、オレ限定らしい。まあ、悪い気は…ていうか素直に嬉しい。

「だけど…リユートを警戒するくらいなら好きにして貰ったほうがまだマシ」

「いや、言ってくれるのは嬉しいけど、それは度が過ぎてるだろ」「んー、だつてさ」

よいしょ。と体を起こし座り直して彼女は続ける。

「一人で暮らしててさ。学校と仕事で忙しくて友達もいなかったんだよ？そりゃちよつとお喋りするくらい知り合いはいたけど…」
「聞いてると痛い子に聞こえるぞ」「うっさい。実際に生活が大変だったのー。で、そんな中、異世界に飛ばされて魔王を倒せ、と。ていうか、何なのよ、この傍迷惑な勇者システム」

オレも漠然とそういう物だと思ってたけど、自分が呼び出されてよくわかった。このシステム、呼び出される方はいい迷惑だ。王宮はどう対処してんだ？

「そして一年後。最悪な状況に陥ってるトコを一人のへたれに助けられたの」

「へたれ言うな」

「その人はお金が大好きで融通きかないし危険に自ら飛び込む考えなしだけど…私、その人だけは信用できるの」

…これ以上ないくらいに誉められてるはずなのに、なんか悪口が混じってる気がするのなんだろう。

「誰も信用できないのって寂しいのよ？」

…それは痛いほどによくわかる。

家を出てランディと会うまではオレもそうだった。

「はあ…精々その信用に見合う様に心がけるよ…」

「ありがとう、ご主人様」

「ごしゅっ!？」

綺麗な笑顔でいきなり何を言い出すんだ、コイツ。

「ほらほら、私、リユートの奴隷だし」

「そっぴやそんな話もあつたな…」

ミナが笑って首輪を見せてくる。

王都に戻れば取る事もできるだろうから、その首輪は遠からずなくなるだろう。

「びっくりした？」

「ま、な。そんな事言う性格してないくせに」

「自分でももう二度と言わないと思う」

可愛かったが心臓に悪すぎる。

「ま、そういうのは好きな人にとっておきな」

そういうと彼女はすごく驚いていた。

そして数秒かけた後にゆっくり近づいてきて…オレは胸ぐらを掴まれる。

「ね、リユート。好きな人に…って、どういう意味かな？」

いや、笑顔のわりに胸ぐらを掴む手にすごい力入ってんすけど。深い意味はなかったけどそれを言っただけ許して貰えんとも思えない。

「えーと…ミナさん？ちよつと落ち着いて…」

「まさか私が誰に恋い焦がれてるかわからないんですか？」

何故敬語。

「いや、大体の予想はつくけど間違ってたら恥ずかしいから…」

ただの自信過剰だったりしたらやるせなさ過ぎる。

「そう、あのね…」

今までの笑顔から一転真剣な表情になる。

そして思いつきり自分の額をオレの額にぶつけてくる。

…要は頭突きだ。

ちよつと洒落にならないくらい痛い。

ミナを見ると涙目になっている。

頭突かれた衝撃でベッドに押し倒されたけど額はくつついたままだ。お互いの息が触れるほどに距離が近く、今更ながら失言だったかと思っ。

「痛っ…散々生活に苦労して友達もいなくて…拳げ句に異世界で魔王を倒せって言われて負けて誘拐されて…奴隷になった私に、自由も生活もくれて…一緒に死のうとまでしてくれて…それから…えつと、声も足もくれた。そんな人に惚れない訳はないじゃない！」

いや、まあ、手や足についてはよくわからないし、オレにとっては気に入った子を家に招待しただけだが彼女からみたらそうなるか…。

「好かれてるのは…気づいてた」

「だったら好きな人にとか言っつな」

「ん。ごめん」

ボスツと音がするほど強めに拳を叩きつけられたがオレには当たらず枕に突き刺さった。外してくれたみたいだ。

「…もう寝る」

一応許してはくれたみたいだけど流石にまだ拗ねてるみたいだ。

これは明日くらいにご機嫌取りでもした方がいいかな。

幸いにも宿屋に入る前に、鉱山で取れたミスリルを一袋売ってきた為、お金はある。

今回の宿代もそこから出した物だしな。

よし、明日は街を出る前に少しミナとお店でも回るか。

そうと決めたらオレも早めに寝て明日に備えよう。

「おやすみ、ミナ。オレも自分のベッドで寝るよ。また明日…」
「檻」

ガシャーンと甲高い音が周囲に響く。

人の就寝の挨拶に割り込んで何を詠唱しやがった。

回りを見渡してみると四方を細い鉄の棒らしき物で囲われており丁寧天井までついている…何、この牢屋。

牢屋はオレとミナがいるベッドをぐるっと囲んでおり当然抜ける隙間なんてない。

「ミナさん…？えっと…これはなんですか？」

「寝る」

「いや、オレも寝ようと思ってな…」

「寝れば？」

…一緒にこのベッドで寝れとでも言ってるのか、この子は。

「魔剣で斬れる？この牢屋」

「斬れるわよ。魔力なら全部斬るから。好きにしたら？」

なら好きにできる雰囲気を作っただけです。

はあ…選択肢ねえよなあ…また一緒にベッドで寝るのか。

思い返してみたらミナと泊まる日は毎回同じベッドな気がする。

これってあんまりよくないんじゃないかなあ…。

とは思って檻を斬るわけにもいかず今日も一緒に寝る事になった…。

オレが朝起きた時にはミナはまだ寝ていた。

あの後も随分寝付けなかつたみたいだし、今起こしたところで睡眠不足だろう。

一応馬車に乗れば寝る時間は幾らでもあるとはいえ、無理に起こす必要もないワケで…オレは一人でこれからの食料等を買ってきた。

で、今宿の前に来たんだが…そこにはケルベロスに向かって風の魔法を使つてる少女がいた。しかも何故か子供に囲まれている。

「何やつてるんだ…？」

「あ、リユート。おかえりなさい。お買い物？」

オレの両手にぶら下げられた袋を見てミナが聞いてきた。

「ああ。王都までは2〜3日かかるからな。その間の食料」

「そっか。ありがとう。私はこの子を洗つてたの」

「…洗つて？」

ケルベロスを見ると確かに昨日よりも毛皮が綺麗になつてるし砂や泥も見当たらない。

「王都までケルロンに乗って行こうかなって思ったんだけどちょっと汚れすぎてたから昨日のシャボンで洗つて見たの」

確かに獣独特の臭いがほとんどしない。

シャボンすごいな…。

その前にケルベロスに乗って移動しようって発想もすごいけど。

「で、なんで風の魔法なんかケルロンに使ってるんだ？」

「お水いっぱいかけたんだから乾かさないって風邪引いちゃうじゃない」

少なくともオレは魔獣が風邪引いたなんて話聞いたことないが。

とはいえ見たところケルロンも風に吹かれて気持ちよさそうだしいいか…。

にしてもミナの機嫌はすっかり直ってるみたいだ。

これなら誘ったらすぐに承諾してもらえそうだなあ。

「ミナ、出る時間まで少し余裕あるしちょっと買い物いかないか？」

「ん、いいけど買い忘れ？」

元々ミナと一緒に来て買おうと思ってたけど、そこは、まあそんなトコだ。と適当に濁す。

そして彼女を連れてった場所は…小さな服屋。

「…なんで洋服？」

「ミナ、一着しか持ってないだろう？他にもあった方がよくないか？」

「一応、毎日洗ってる…」

その度にローブだけ羽織って歩かれるオレの身にもなれ。

一応魔法で即効乾燥させてるけど…。

「ま、いいじゃないか。服は嫌かな？」

「そんな事ないけど…これが気に入ってるっていつか…王都に戻ってからゆっくり決めよ？」

うーん、まあ、確かにそれでもいいんだけど…ミスリルも大分安く買い叩かれたから言うほどの余裕はないし。

考えながらミナを見ると彼女の視線が一点で止まっている。そこにあるのは…。

「帽子？」

緑色の大きな帽子。

罎が大きく上が三角垂になった魔女がよく使ってる帽子だった。

「あ、うん…。この世界にきてすぐにあんな帽子を買って気に入ってたんだけど…誘拐された時に取られちゃったの」

彼女は言いながらもブーツとした表情で帽子を眺めてる。

服を買いに来るつもりだったけど…こりゃ思った以上にいい買い物ができるかな？

隣でミナを待っていると彼女がちらちらこっちを見てくるのがわかる。

言いたいことはわかるけど、ここは彼女の口から聞きたい。

随分悩んでいるんだろう。最悪、こっちで勝手に買ってやるかと思っただけ、彼女がついに口を開く。

「リユート…私、服よりも、この帽子を買って…欲しい…です」

少し困ったような顔で上目遣いをお願いしてくる彼女はとても可愛かった。

「ありがとう、買ってくれて」

黒い髪の少女ミナと灰色の髪の青年リユートが服屋から出てくる。ミナの頭には今、買ったばかりの、緑色の鍔の大きい三角のトンがり帽子が乗っている。

「いいさ、おねだりなんて二回目だからな」
青年の言葉にミナは赤面する。一度目のおねだりは彼女にとってすごく恥ずかしいものなのだ。

「…っ。馬鹿な事言っていないで早く行くわよ」

ミナはリユートの手を取り前を歩き引つ張る。

「ミナから手を握ってくるのも二回目だな」

「あら、私はリユートと手を繋ぐの好きよ？」

彼女にそういつて貰えるのはすごく嬉しい。昨日、好意を伝えてくれた後だから尚更だ。

「ミナ、ごめんな」

「ん。気にしないの」

突然の謝罪に彼女は内容をわかっているかのように返してくれる。

「…何がわかってるか？」

「リユートの言いたい事は大体わかる。昨日の返事くれてない事でしよう？」

凶星だ。結局あの後オレは返事もしてないし自分の気持ちを伝えてない。

けど彼女はその理由すらわかっていた。

「リユートがこれから何をやりたいか…ううん、やるうとしてるかな？わかってるから、それが終わってからでいい」

…本当に…この子は優しいな。

すぐにも返事が欲しいだろうに…。そしてオレが悪い返事をしないのもわかってるだろう。

だったら…オレもやらなきゃいけない事は終わらせよう。

「よし…！宿屋に戻って準備でき次第、王都に行こうか」

彼女は声を出さない代わりに手をギュッと握り、こくんつと頷いてくれた。

まるで、まだオレまだ彼女の手を引いて歩いてた頃の様に。

二十九話 100に頭突く想い(後書き)

初めて3日投稿感覚空きましたねえ…。

言い訳になりますが書いてはいたのですが、一回ほど書き直してました。

一回目はリユートがへたれすぎて没。

二回目はミナがヤンデレすぎて没。

一応三回目も半分くらい直して今の形になりますがどつだったでしようか…orz

三十話 100と旅する道中での出来事（前書き）

道すがらの会話になります。

Orz
この後の展開にちょっと絡んでくる話ではありますが、中身薄い…

三十話 100と旅する道中での出来事

夕焼けの平原を2つの影が走っていく。

一つはオレの乗る馬。もう一つはミナを乗せたケルベロス。

オレの馬は無理のない程度に速度を出させているのにも関わらず彼女の乗るケルベロスは小走りをしている程度にしか感じてないようで機嫌よさそうな顔で気持ちよさそうにかけている。

流石は魔獣といったところか。基本値からして馬とは比べ物にならない。

この調子で走れば夜中には王都に到着するだろう。

…ま、そんな急ぐこともないし今日はもういいか。

「ミナー！今日はこの辺で火を焚いて寝よう！」

走りながらの為少し大きめの声をあげると彼女は手を振って返してくれそのままケルベロスを減速させてくれる。

「ふう…今日は疲れただろう？ゆっくり休んでくれ。明日も走ってもらわなきゃいけないから」

乗ってきた馬の頬を撫でる。まだいけそうではあるけど、明らかにのんびり馬車を引っ張ってきた時よりは疲労しているようだ。

…隣に魔獣が走っているって緊張感もありそうだけどなあ。

ちなみに馬車は街の組合に帰ってきて馬だけそのまま借りてきた形

になる。

ミナがケルベロスに乗るなら荷物だってそんな多い訳ではないし、のんびり走る必要もないため、邪魔になるだけだと判断した為だ。

ま、置いてきて良かったな。いつもの半分の期間で王都にいけそう
だ。

「リユート。火、付けようか？」

馬から下りて考え事をしてるとケルベロスを連れたミナが駆け寄ってそんな事を言ってきた。

何もない空中に炎が揺らぐ。

オレが火を焚こうとしたらミナがぼんつと作り出した火球だ。物自体はただのファイアボールだから不思議と消える事がなくその場に留まり続けてる。

「…本当なんでもありっすね、ミナさん」

「この世界の人たちは魔法の形を決めすぎなのよ」

いや、火球っていったらもう飛ばすしかないじゃん。一托じゃん。

まさか空中に留めるだなんて考えない。

「ていうか、ずっと魔力消費してるんだろ？これ。燃費悪すぎる」
「まあね。私からしたら微々たるものだけだ」

一般的に使えないような魔法が普及なんてするものか。

彼女の発想は彼女が持つ魔力故の物だろう。

ミナは、ふあ。と欠伸をしながら丸まつてるケルベロスにもたれかかる

ケルベロスもあまり気にしてないようだ。

…本当に魔獣か、こいつ。

見た目は本当に首が増えてるだけの犬でしかない。

本当に警戒する必要ないのかもなあ…この犬は。ミナほどとはいかなくてもケルベロス以上の魔力を持った人は歴代にいくらかいるはずだ。

王都に着いたらその資料を集めてみるのもいいかもしれない。

オレの能力、ケルベロス…調べるのはこの二つか。

後は城にいったってミスリルを渡してお金を受け取って…余ったミスリルは市にでも出すか。

次は急いで王都から出る事もないだろうから、買い叩かれる事もないだろう。

そして王都でお金を貯めたら…家族を探さなきゃなあ。

とはいっても手がかりなんてないし、どうするべきか…。

「考え事かな？」

「ん、これからどうする事を頭の中で整理」

ミナがこつちにきて隣に座る。その目は少し眠そうだ。

馬車と違ってケルベロスに乗るのは馬に乗ってるのとそんなに変わらないハズだ。慣れてない彼女にとって体力の消耗は大きいだろう。

「寝ていいぞ。毛布は馬の横にくくりつけてあるから」

「んー…もうちょっと話す」

眠そうな目を擦りながらミナは口を開く。

「王都か…久しぶりだね。一ヶ月ぶりくらい？」

「そんなもんだな…。これだけ王都から離れてたのも久しぶりか」

商売のほとんどの売りは王都で行う為に一ヶ月離れているのは珍しい。

つまり仕事を一ヶ月してないって事だし。

リズ寂しがつてるだろうなあ…。戻ったらレーナ様にも顔を出さないと。王都による約束してたしな。

その二人は現在、部屋でリユートの死を悲しんでいるとは知らずに呑気な事を考える。

王都では、傾国の魔女と救国の剣王はすでに死亡と同じ扱いを受けており魔王を倒す希望は聖者パーティだけになっている。

まさか、その二人が一緒に行動しているとは誰も予想していないし、すごい騒ぎになるのだが今の彼と彼女にはそんな事知る術もない。

「王都かあ…ちゃんと行くのは初めてだなあ…」

「そっか。召還されてすぐに城壊して飛び出したんだっけ？」

「う…その話はいいじゃない。一ヶ月くらいはいたけどね。流石に言葉が分からないのは困るもの」

文字は覚える前に飛び出したからずっとパスタ食べることになったけど。と彼女は苦笑する。

てことは他の勇者は一応文字も覚えてると思っただけなのか。

ミナはわりと深く考えないで突っ切る事があるからな…。

「…なんか失礼な事考えてない？」

「や、そんな事はない。勇敢だなんて思っただけさ。そういえば魔王とは戦ったのか？」

「うん、戦ったわよ。逃げられたけど」

「逃げられた…？」

魔王が逃げるって…どんな状況だ？

「今はもう興味ないからどうでもいいけど、当時は悔しかったわよ。倒したら帰れる、って思ってたから…」

「倒したら…帰れる？」

「うん。魔王を倒したら元の世界に帰してくれるって条件で旅に出たから」

…そんな話聞いたことない。異世界なんて星の数ほどある。それなのに、どうやってミナのいた世界に帰そうと言っのか。

異世界に飛ばすことはできる…けど、そこがどこかなんてわからないハズだ。

「どうしたの、リユート？難しい顔しちゃって」

「いや…なんだかきな臭くなってきたなあ、と思ってさ」

ミナは、ん？と首を傾げてる。この話はミナには言わない方がいいだろう。

まったく…調べることが一つ増えたな。今度の王都での滞在時間は長そうだ…。

住むトコロ…どうしよ。

もちろん、そんな金も無い。

「うにゅ…リユート…？」

「ん、おはよう。ミナ」

「む…私、いつの間にか寝てた？」

彼女はあの後、すぐに寝息をたてた。まあ、疲れてたんだろう。変に今日に疲れを残すワケにもいかないしな。

「ま、気にするな。ほら、朝ごはん。昨日の夜食べてないだろ？」
「うん、ありがとう」

そう、考えてみれば昨日はご飯を用意するのを忘れていた。一人だと元々食べてなかったからなあ…。
今までは馬車で移動だったからずっと暇つぶしに何か摘んでたし。

ミナは昨日から出っ放しの火球であぶった干し肉を美味しそうに齧っている。

ただの干し肉なんだけど、よほど肉に飢えていたんだな…。

「明後日には王都につくのかな？」
「いや…予想以上に早く走ってきたから今日の夕方くらいにはつけると思うよ」

そっか。とミナは背筋を伸ばす。
きっと彼女も疲れてるんだらうなあ…。今日で移動が終わって本当に良かった。

「よし、んじゃ、そろそろいくよ、ミナ」

「うん。今日もよろしくね、ケルロン」

彼女の呼びかけにケルベロスは嬉しそうにワフツ！と吠えた。

三十話 100と旅する道中での出来事（後書き）

次回から王都編になりますー。

リズとレーナの再出演…彼女達も魅力的に写るように書きたいです。

三十一話 1と彼女達のすれ違い(前書き)

本編でここまでリユートの出番がない話は初めてな気がします。

少し投稿間隔空いてきてますが、なるべく早く更新するよう致しますorz

三十一話 1と彼女達のすれ違い

夕暮れの王都大通りは、帰り支度をする者、最後に売り切りを目指して声をあげる者、これから商売をする酒場などの活気が入り交じり賑わっている。

そんな中、夕陽に照らされながら一際目立つ二人組がいた。

「ねえ、なんか見られてない？」

「そりゃケルベロスなんて乗ってればな…」

道を行く私たちは明らかに人目を集めていた。でもケルロンも馬も大した違わないと思うんだけど。

回りを見ると馬に乗ってる人は沢山いる。

あ、向こうにユニコーンに乗ってる人もいた。どう考えても、あっちの方が目立ってるじゃないかな。なんか淡く光ってるし。

ユニコーンは幻獣種であり人懐っこい。確かに見た目自体はケルベロスより目立つが、危険が無いため人々の意識は魔獣であるケルベロスに集中する。

「とりあえず、そろそろ降りとけ。乗ってるのが一番目立つんだ」「ん…わかった」

ちょっと不服だけど目立ち続けるのも嫌だから素直に降りる事にする。

「よしよし、ありがとね」

頭を撫でるとケルロンはグウウと喉を鳴らす。

その姿を見て回りの人も心なしか安心したような空気になる。

「それにしても…ケルロンは闇市には連れていけないな。どんな騒ぎになることやら…」

何より恐ろしいのは、馬鹿な貴族に目をつけられる事。

あいつらは欲しいものは力づくで手に入れようとしてくるからな。とリユートは悩むけどミナは別の理由で足を運びたくなかったりする。

「闇市って…私がいた場所だよね？あまり近づきたくないんだけど…」

自分が奴隷として売られてた場所になんて誰が近寄りたいたいものか。リユートもそれがわかるからミナをどこかで待たせようかと思ったけど、ケルベロス連れで目立つ彼女を一人にするのも心配だ。

「だよなあ。どうしたものか…宿をとるにしても、金がいるから闇市には行つときたいし…そうか。ミナ、王宮に行つててくれないか？」

「王宮って…一人で？」

器物破損の前科もあるし、ちょっと不安なんだけど。

「すぐにオレも行く。ニーズヘッグ公爵にオレの名前を出しとけば安心だから」

…確かに王宮ならケルロンが一緒でも勇者の私が連れて来たならそうそう無下にもしないとと思うしリユートが信用できる人もいるなら安心かもしれない。

「はあ…気は乗らないけどそれが一番良さそうね。わかったわ」

「ああ、頼んだよ。オレもすぐに王宮に行くから」

「ん。待っている」

んじゃ、頼んだな！って言ってリユークは人通りの少ない道歩いていく。闇市っていうくらいだから表通りみたいな賑わいはないんだろう。

「まあ…中には結構、人いたっけ？いこっか、ケルロン」

「クウウウウ」

うん、一人はちょっと不安だったけどこの子がいれば大丈夫かな。ていうか、私、久しぶりにリユートと離れた…。駄目だなあ、こんなんじゃ。

よし…！リユートがいなくても私はちゃんとやれる！王宮いこー！

「あの、すいません」
「ん、なんだお前は？」

王宮の前に立つてる兵士さんに話かけた瞬間、睨みつけられる。
：前は勇者だなんだって大喜びされたのに一般人には偉そうって兵士としてどうなんだろう。

こほん、まあいいや。私が用事あるのはこの人じゃない。

「ニーズヘッグ公爵様にリユート様からのお使いなんですが、取り次いで頂けないでしょうか？」

うん、現代人の私は大人の対応だ。

「リユート…？知らん知らん。公爵様はお前に構ってる暇などない。帰れ」

……………。

「いいからさつさと中に行って来てくれない？」
「しつこいな。いい加減にしないと…ヒッ!？」

流石に今のは酷いと思う。私、ちゃんとやった!

ミナの手には燃え上がる炎。立ち上る高さは数メートル。笑顔で右手から炎を噴出される彼女はまさに魔女に相応しい。その姿に流石の兵士も気づいた。

「ゆ、勇者…傾国の魔女!？」

「あら、光栄ね。覚えていてくれたので、早く公爵のトコに案内して貰える?」

「魔女：死んだんじゃ…!？」

もう一回、城に大穴あけようかしら…一瞬そんな考えが過ぎるけど昔みたいに一人の責任じゃなくなるからなんとか抑える。

ニーズヘッグ公爵の名前出しちゃってるしね…どんな人が知らないけど。

私はわざと冷酷な笑みを浮かべて兵士に話しかける。

「ねえ、燃える？それとも、さっさと行ってくる？」

「ヒ…すぐに…お呼びしてきます…!」

兵士は気丈に振舞おうとするけどその足はよたよたと頼りない。

まあ、ここまでしたら流石にすぐに呼んできてくれるだろう。

私はケルロンと戯れながらちょっと待つとする。

「グルルルルウウ…」

ケルロンの喉を撫でながら時間を潰していると王宮から沢山の人が出てくる。ケルロンはどうやら警戒してるようで唸り声をあげている。

「大丈夫だよ、安心して」

ケルロンの頭をぼんぼんするととりあえずは追いついてくれたみたいだ。睨んではいるけど。

それにしても…あの人は確か…。

先頭を歩いてる人には見覚えがある。

王の傍に控えていた人。強くは無いだろうけど…恐らくは油断できない人種。

「大臣…」

「傾国の魔女…よくぞ、ご無事で！ささ、こんなところではなんです。まずは中でお話しようではありませんか。聞けば魔王と戦ったとも…」

…気に入らない。

何を考えてるかわからない。けど、とりあえずは王宮の中についてくしかないだろう。

「お久しぶりです。いろいろありましたが、とりあえずここに帰ってくることにできました。できれば公爵様に取り次いで頂きたいのですが」

「公爵…ふむ。ニーズヘッグ公ですか？ええ、問題はありません。しかし、公爵は今、自宅にいます…彼をお呼びしますので、まずは王に挨拶をお願いしてよろしいか」

はあ…ニーズヘッグ公爵を出してくれる以上、ここは引き受けるしかないかな…。

正直言えばちょっと面倒くさい事になったなあと思う。

「…手短にお願いします。私は…気が短い」

再び手に炎を灯す。正直、魔力残量もそんなに多いわけではないか

ら使いまくるわけにはいかないけど、ここで強気に出ておかないで
済し崩しにされても困る。

「はは…存じておりますよ」

流石の大臣も城に大穴を穿たれた時を思い出して冷や汗を流す。

彼らにとって傾国の魔女とは今でも全軍が束になっても敵わないで
あろう化け物なのだ。

事実、一年前のミナはそれほどまでに強かった。

ま、魔力使い放題使ってどんどん少なくなっただけで今じゃ底に残ってる
魔力をかき集めて使ってるようなものなだけだね。

だから、リユート…早く来てね。

「貴様…王の前だぞ！」

「私には関係ない」

何が王だ。私を勝手にこの世界に呼び出した癖に。

…今じゃちよっとだけ感謝してるけど。

私は一年前、王の前で取った態度を変えずに今、王座の前に居る。王の御前であるそこではいろんな人が頭を下げているけど私は絶対にそんな事はしない。

「まあ、良い。勇者にとってこの世界の権威など関係ないからな。

珍しい事でもない。それにしても傾国の魔女ミツキよ。良くぞ無事帰ってくれた。大きな希望が尽きずにいてくれて嬉しいぞ」

「別に…運が良かっただけよ」

一歩違えば今私はここにはいけない。本当に…運よく助けられただけだ。

「はは、相変わらずの反応だな。まあ仕方あるまい。いきなり此方呼び出したのは我々だ」

「へえ、ちよつとは話がわかるのね。少し見直したわ」

「貴様…！」

詰め寄ろうとする騎士を王が、よい。と行って下がらせる。

…この王様は少しは話が分かる人のようだ。

まともに話し合えば少しは前向きな答えが見つかるかもしれない。そういえば元の世界に帰す代わりに魔王を…って条件もこの人が出してきたものだった気がする。

はあ…一年前の私、本当に余裕なかったんだなあ…仕方ないとも思うけど。

ただ今、意地を張っていても意味はなさそうに思える。

自分にはもう帰るつもりもないし、少しくらいちゃんと話し合おう。

「まあ、久しぶりに王都に戻って来たのだ。暫しの間の休んでいくといい。部屋は…ふむ、今から用意するとなると夜になるか。そうだ！今夜は丁度、パーティーが開かれるのだ。良ければソレに参加してくれ。その間に部屋は用意しよう」

まあ…もう夕方だし部屋についてどうこう言えはしないけど…。

「パーティーって…そんなの私が出てもいいの？」

勇者と言えど私は悪名高いと思うんだけど。

王はミナの心配を笑い飛ばす。

今回のパーティーは昨日の急遽開催が決まった物でミナが参加する理由も十分あるパーティーなのだ。

「ハツハツハ。今日のパーティーは昨日、帰還した勇者「聖者カムイ」達の為のな。傾国の魔女が加わっても不自然でもなんでもない」

隣にいる大臣も頷いている。

「そういう事なら参加させて貰うわ」

どうせリユートが来るまで暇だし。

ちよっと元の世界とは体験できないパーティーとやらも少し興味がある。

「ああ、それと私をここまで助けてくれた人がいるの。同じ部屋でいいから、その人も泊めていいかしら？」

「ほう。まあ、構わない。部屋は広い。好きに使ってくれ」

「ありがとう」

後でリユートが困る姿が思い浮かんだけど気にしない。

二言三言、義務的な会話をして私は外に出る。

ふう…わざと敬語使わなかったけど逆に疲れたな。

「失礼。傾国の魔女とやら、私に用があると聞いたが？」

いきなり声をかけられて、びくつとした。ちょっと恥ずかしい。

ぼんやり歩いてたら前から人が来るのにも気がつかなかったみたい。

「えつと…あの…ニーズヘッグ公爵？」

「ああ、如何にも。今日は外に出るつもりなんてさらさら無かったんだがね」

普段は自分を訪ねてきた客にこんな態度は絶対に取らない公爵だが、今日はリユートの死を悲しむ愛娘にずっと付いてようと決めてた為、機嫌が悪かったりする。

呼び出した相手が勇者でなければ断っていた所だろう。

ミナは公爵の迫力に気をされるが、なんとか用件を口に出す。

「私を助けてくれた商人が…ここに来てニーズヘッグ公爵を頼れと言ってくれたんです」

その言葉を聞いてきたニーズヘッグ公爵の目が見開く。

「商人…？名前はなんという…？」
「リユート」

ミナが慣れ親しんだ名前を呼ぶと公爵は目を閉じて語りかける。

「彼は私の娘が病気の時に助けてくれてな…。それからも、貴重で手に入りにくい物を色々持ってきてくれた…。今はもう頼めないが彼は良い商人だったよ…」

別にリユートは今でも頼めば取りに行きそうだけど。やっぱり公爵って立場上、勇者になったリユートには頼めないんだなあ。なんて私は思った。

「彼は最後にニーズヘッグ公爵に頼れと言ってくれたんです。…おやすみなのに…来てくださって」

「いや、彼の頼みだ。来てよかったよ」

せつかくのお休みにいきなり呼び出した私に公爵は柔らかい笑みを浮かべてくれる。

リユートが信用するだけはある。

この人…いい人だ。

「まあ、こんな所ではなんだろう。時間があるならうちにごないか？なんなら王都にいる間はうちに泊まっていくといい。リユートもそれを望んでいるだろう」

んー、王宮で待ってるとは言われたけど確かに公爵家の方が王宮よりいいんじゃないかな？

「はい、お言葉に甘えさせて貰います。彼も、そちらの方がいいでしょうから」

公爵は軽く頷いて歩き出す。

私が少し後ろを歩くようにして公爵家に案内して貰った。

「お父様、お客様ですか？」

公爵家に入るといりなり、すごいスタイルのいい金髪のお嬢様が迎え出てくれる。

自分のスタイルと比べて少し悲しくなる。

…でも、ちよつと元気なさそう？

「ああ、彼女もリユートに助けられた一人だ」

「そうですか…此処まで大変だったでしょう。私、リスニースへツグですわ」

「あ、ミナニミツキです。よろしくお願いしますね」

差し出された手を握り返す。

彼女の顔は何処か疲れたような表情をしているのが気にかかる。

リズさんの手を話すと今度は奥の扉がカチャツと音を立て開き白銀の髪をした少女が顔を覗かせる。その少女にはミナも見覚えがある。

「王女…レーナ…？」

でも、なんで目が充血してるの？

レーナは昨晚リズの屋敷にいきなり来て一晩中泣いていた為、本来なら可愛いその容姿は些か繊細さを欠いている。

…公爵家で何が起きてるんだろう。

「傾国の魔女：生きてたのね。ま、良かったわ。これ以上…誰にも死んで欲しくないですから」

レーナの言葉にミナは首を傾げる。

一年前は自分を嫌ってたハズだ。

王宮で誰か死んだのかなー。

マズイ時期に来ちゃったかも。

「レーナ様。夜はパーティーに出席するのでしょうか？そろそろ泣き止まないとファンの方々が心配してしまいますわ」

「…そうですね。皆に心配をかけるわけにはいきません。ありがとうございます、リズ」

王女は少し何か吹っ切ったようだが寂しげに呟いた言葉はミナにとって無視できるものではなかった。

「できれば…リユートにも参加して欲しかったです」

…む。

まるで恋人の名前を呼ぶかのようにレーナがリュートの名前を口に
する。

…リュート、まさか王女と？

少しだけ真剣に考えたけど、そんなハズない。と馬鹿な考えを一蹴
する。

「はあ…きつとリュートも来てくれますよ」

私が出席するならリュートも来るだろう。ていうか引つ張ってく。

「そうですね、レーナ様。リュート様ですもの。きつと見守ってて
くれますわ」

「…そうですね。リュート様ですからどこからでも来てくれそうです」

寂しげな笑顔でリスとレーナが笑う。

…なんだろう。何かおかしい！

さつきから会話に違和感を感じずにはいられない。けど、その違和
感が何なのかはミナにはわからなかった。

しかし次の瞬間、その疑問が氷解する事になる。

「三人供、リュートはいろいろな物を残して死んでいった。なら、
それを無駄にしないように生きるのが残された者のすべき事だろう」

黙って成り行きを見守ってた公爵がとんでもない事を言い出した。

へ…？リユートが死んだ…？

…あ、ああ、そういう事ね。」

思い返して見れば私とリユートは魔獣に襲われ本気で死にかけながらなんとか逃げて来たんだ。

もし、あの後に半壊した家と戦いの後を見たら死んだと思われて当然かもしれない。

「そうですね、お父様…」

「ニーズヘッグ公…私はリユートの分まで強く生きてます！」

ああもう、そんなゆつくりと考えてる場合じゃない！ちゃんと言わないとどんどん誤解されちゃう！

「あ、あの…！」

私が声をあげると公爵が、いいんだよ。と言わんばかりに肩に手を置いて微笑んできた。

だから…違うの！

「リユート…ちゃんと生きてます！」

「…む？」

「ふえ？」

「えーと…？」

上からニーズヘッグ公爵、レーナ王女、リズの反応。いきなり言われて頭が回ってないみたい。

そりゃ死んだハズの人が生きてるとか言われてもね…。でもリユー
トはまだ生きてる。

ミナの発言によって固まる公爵家の一室。

そして、全員の考えが纏まらないまま沈黙を打ち破ったのは屋敷に
務める侍女であった。

「お話の最中に失礼します。ニーズヘッグ様、いつもの商人様が訪
ねて来てますが、ご案内してよろしいですか？」

多分、リユートが来たんだと思うけど…レーナ王女とリズさんのあ
の反応…嫌な予感がする…。

三十一話 1と彼女達のすれ違い（後書き）

次回からリユートが非常に大変そうです。

女性陣だけではなく男にも目をつけられていきます（笑）

ああ、やっとコメディィ分が増えていきそうだ…。

三十二話 100の泣きたくなる一日(前書き)

今日で丁度連載一ヶ月になります。

累計PV15万

ユニーク1万2千

お気に入り登録200件以上。

連載当初ここまで読んでくれる人がいるとは思っていませんでした。
本当にありがとうございます！

三十二話 100の泣きたくなる一日

「ツチ……また生きてたんですか」

「……一応、商会の暗部の中でもそこそこの地位にいると思うんだけど、オレ」

ミナと別れ直つ直ぐに暗部の窓口にくると、いつも以上に冷たい受付嬢が迎えてくれた。

別段、地位や権利に拘るつもりはないけど、この態度もどうかと思うんだ。

「私の方が商会に入つて長いからいいんです」

「二日しか変わらないけどね!？」

オレが商会に入つて6年ほど立つ。

目の前の彼女はどうみても十代だが、オレと同期だったりする。

そう考えると彼女もまともな人生送つてねーんだろうなあ……ま、いや。

「それより商売だ。王宮から依頼されたミスリル。これ依頼書な」

ドスツとミスリルの袋をカウンターに置き、ついでに依頼書を上に乗せる。

流石の冷酷受付嬢もこれには驚いたようで目を丸くしていた。

「……これだけのミスリルを本気で集めてくるとは」

「一応、希少な物を専門に扱つてるからな」

今回の事前に鉾脈を発見していたという運もあるが。

「まあ、どうでもいいです。えーと…はい、金貨20枚。では、忙しいので」

「……………」

最初はこんな冷たい子じゃなかったんだけどなー。

泣きそうになるのを我慢して金貨を受け取る。彼女はもう他の商人の所で笑顔で商談して…って、初めて見たよ？彼女の笑ってるトコそこには大金を手に入れたにも関わらず肩を落として王宮の方に歩いて行く成年がいた。

「ハツハツハ。またリユートの旦那にきつくあたったみたいだな」

「あの人に愛想ふる意味ないですから」

「王国を代表する商人の一人も我が商会のアイドルにかかっちゃ形無しだな！」

「どうでもいいです。そんなの」

あの子の稼ぎ方は…いつか死ぬから。

そんな人と仲良くしても…辛いだけだから。

王宮に行ったらリユートは死んだと言われ、食い下がったら槍を突きつけられ、仕方ないから傾国の魔女の名前を出したら、ここにはいないと一蹴されなんとか情報を手に入れてやってきました。公爵家に！

…無駄に疲れた。

聞けば王宮も急なパーティーの準備で忙しくまともに対応できる余裕がある人が少ないそうだ。
ま、パーティーなんてオレには関係ないからどうでもいい。

「あら、商人様。えーと…今日は商人様が来るとは何ってませんでしたか…」

門の前で頂垂れていたら買い物から帰ってきたであろう侍女に見つかった。

「すみません、連れが公爵のお世話になっているみたいでして…良ければ御取り継ぎお願いできませんか？」

「あらあら、わかりました。今、お伺いしてきますね」

そう言うと侍女のお姉さんは屋敷に入って行き、また一人取り残された。

ふう、無事に合流できそうなのは良かったが…まさか公爵家とはなあ。

レーナ様とリズの件もある為、いきなりリズとミナが顔を合わせる事は避けようと思ってたんだが、いきなり瓦解した。ま、レーナ様がいるよりドタバタしないと思うんだが…。

また一悶着ありそうだなー、なんて思考を巡らせていると玄関のドアが勢い良く空きニーズヘッグ公爵が飛び出してくる。

「リユート！本当にリユートだな！？よくぞ、無事だった！」
「え？あ、はい。なんとか」

ニーズヘッグ公爵にいきなり捲し立てられ若干困惑する。ていうか王宮でもそうだったけどなんで死んでるんだ、オレ。

「えーと、公爵。とりあえず落ち着いてください。あのオレの連れが此方でお世話になってると聞いたんですが」

「おお！魔女は中に居る！リズもレーナ王女も待っている。ほら、早く中へ来んか！」

やたらテンションの高い公爵に肩を抱かれ中へと案内される。まあ、生きてて喜んでくれてるみたいだしいいか。

つて、ちょっと待て…レーナ様もいるの！？

「リユート！！」

「おっとっ…お久しぶりです、レーナ王女」

部屋に案内されるなり王女に抱きつかれた。

視界の影に黒髪の少女がテーブルに座ってるのが見えたけど直視できん。怖くて。

「魔獣に襲われ死んだと聞いたが…無事だったようで本当に嬉しいぞ！」

王女は腕を回しきつく抱き締めてくる。

人懐っこいなあ、王女。

「ああ…なるほど。それでオレの死亡説が…。まあ、見ての通りと
りあえず五体満足です。彼女のお陰ですけどね」

そう言つて勇気を出してミナの方を見ると彼女は我関せずといった
態度で優雅に紅茶を口にしてる。
ていうか完全に無視されてる。

とりあえず王女をひっpegして、こちらに歩み寄ってきたもう一人
の少女に向き直る。

「お帰りなさいませ、リユート様」

「うん、ただいま。リズ」

お帰り、ただいま。本来なら、この場では相応しくない言葉だろう。
けど、これはもう数年前にオレとリズの間で交わされた約束。

私はここで帰りを待っているからちゃんと帰つて来てください。

彼女のその言葉に当時一人だったオレはどれほど救われたか。

リズは穏やかな笑みを浮かべている。だけど…。

「心配かけてごめんな。ちゃんと帰ってきたよ」

そう言いながら彼女の目元を拭う。

「リユート様…？つて、え、あれ？私…泣いて…？」

確かに笑顔だ。笑顔だけど彼女は…涙を流していた。

「私…ちゃんとリユート様が死んだって聞いた時も泣きませんでしたわ…強くなんなきゃって…ひつく…あう…」

今までよほど溜め込んで来たのか彼女の目からはどんどん涙が零れてくる。

後でミナが怖いけど…仕方ないなあ。

オレは彼女の頭を抱えて、そのまま喋りかける。

「いつも心配かけてごめんな。でも、リズが待っていてくれて嬉しいよ」

「うう…リユート…お兄…様…ふえ…ううう…お兄様あ…」

婚約が決まってから彼女はどんどん強くなった。そのころから呼び方もリユート様になったんだけど…やっぱり15歳か。中身は昔と大した変わっていない。

そのままリズは少しの間、声を殺して泣いていた。

「で、リユート。久しぶりなんだろうから少しくらい仕方ないかなあつて静観してただけけど…これは私、怒っていいのかな？」
「私も人をひつpegがして公爵令嬢といちゃつくのはどうかと思うのですが？」

リズが泣き止むと即効で二人に詰め寄られた。

ていうか、なんで初対面なのにタッグ組んでるんだ、この二人。公爵は公爵で笑顔で親指立ててるし、どうしろってんだ。

「まあまあ、落ち着いてくれ、二人共。リズとは昔からの知り合いで兄妹みたいなものでだな…」

「そうですね。ちょっと兄に想いを寄せる健気な妹…兄も満更ではないようですが」

「余計な事言わないで！？あと、ちょっと膝から降りてくれたら嬉しいんですが」

あれから勝手に人の膝の上に座るリズに抗議するが、嫌ですわ。と一言で避けられる。

多分、この状況も二人の不機嫌さを加速させているのだろう。

「リズ、いい加減にきなさい！リユートは気高い勇者なのですよ！？それを婚約者を持つ令嬢たる貴女が…」

「では、レーナ王女は自分がここに座ってみたくはないと仰りますのね」

「ひゃ！？な…うつ…それは…」

座りたいのか、王女。

でも国家問題になりそうなので断る。

「ふう、リズ…だっけ？婚約者いるの？」

「ええ、一応は。将来はその方と結婚する事になると思いますわ」

ミナはリズの言葉を聞くと少し考えた後、長い髪をかきあげて言う。

「そ。なら、いいわ」「あら、ミナ様は器が大きいのですわね」

「そんなじゃないわよ。ただリユートをそこまで拘束するつもりもない。妹だつて言うなら信じるわ…それに」

ミナはリユートをちらりと見て不敵な笑みを浮かべると次の瞬間、リユートにとつてとんでもない事を言い出す。

「私、リユートとキスしたから」

だから、これくらいなら慌てる必要ないわ。と彼女は興味なさそうに続け、パキツと本来聞こえないハズの空気が固まる音がリユートには聞こえた気がした。

「あの…ミナ？」

「何よ」

彼女の名前を呼んでは見たものすごい冷たい目で睨まれる。

ああ、気にしてないとか大嘘だ。絶対に怒ってる。

今日はよく泣きたくなる日だ…。

しかし、動き出した空気はさらにリユートに追い討ちをかけるのだ。
った。

「リユート様：本当にミナ様と接吻なさったんですか？」

「えーと…一応」

「へえ、アンタにとって私とのキスは一応程度の物なんだ」

あちらに言い訳をすれば、こちらが怒る。

前回、二人でも騒々しかったがミナが加わり手がつけられない。

「いや、割りとは本気でキスしましたっ」

「割りとしてどれくらいかな？10割？」

それ100%だから！？

「ふ、ふん、魔王を倒した勇者は私と結婚するのを知っているの発言か？」

今度は王女ががわけわからない事を言い出す。

え、何それ、初耳。

「何よ、それ。私とリユートは魔王になんて興味ないわ」

「な…！？それでも勇者ですか！！」

「なら、私が倒せばどうなるのかしら？」

「負けて行方不明になったのでは？」

「負けてない！」

開催される王女対魔女。

そして、その隙に膝にいるリズが首に手を回してくる。

「将来は、あの二人に任せますわ。だからリユート様、今だけ私に構ってくださいまし」

「リユート!!」

「リズ!？」

なんでミナはオレに怒るんだ!?

というか、リズの顔が近いって!!

「ちよつ、こ、公爵! ニーズヘッグ公!! そろそろ笑ってないで助けてください!」

もうオレの力ではどうしようもない。

ダメ元でニーズヘッグ公爵に助けを求めては見たが意外にもすぐに動いてくれた。

公爵は手をパンッパンッと叩く。

「ほらほら、皆。そろそろ準備をしないとパーティーに間に合わないぞ? リユートに自分のドレス姿を見て貰いたくはないのかね?」

公爵がそういうと全員の動きがピタッと止まる。
そして最初にリズがオレの膝から立ち上がった。

「あら、もうそんな時間ですわね。ミナさん、レーナ王女、王宮に戻るのも手間でしょう。よろしければ、うちのドレスをお貸ししますわ。いいでしょう? お父様」
「うむ、構わないぞ」

公爵がそういうと、少し考えはしたが、二人とも頷いた。

「お願いしたいわ」

「ま、王宮のドレスも飽きてきましたしね」

そう言って彼女達はリズに案内され奥の部屋に消えていった。

…はあ、助かった。

「いや、ありがとうございます。ニーズヘッグ公」

こんなに簡単に收拾がつくとは思わなかった。ニーズヘッグ公には本気で感謝したい。

「ん？何。次の戦場はパーティー会場だ。頑張ってくれたまえ」

ハツハツハ。と笑いながら公爵は肩を叩いてくる。

さっきまでの感謝を取り消したい気持ちでいっぱいのおれはパーティー会場で、どんな波乱が起きるかを考えて絶望する。

ん？って、おれもパーティーに出んの！？

三十二話 100の泣きたくなる一日(後書き)

今までシリアスが強かったので今回思いきりラブコメにしてみました。

リズがわりと勝手に動いてくれます(笑)

今のところ王女が影薄いかな、なんて思ってますがどうでしょうか。

三十三話 100と盛大なるパーティーと。(前書き)

また更新少し遅れました…orz

気を抜くと3〜4日とかすぐ過ぎますねえ。

書くのは好きなんです…。

三十三話 100と盛大なるパーティーと。

「うわー、久しぶりに正装なんてしたな…」

前にちゃんとした恰好をしたのなんて商人になる前じゃなからうか。

あの後、公爵に王宮まで連れてこられ、そこで無理矢理着替えさせられた。

パーティーなんて柄じゃねえし、第二ラウンドが始まるかと思うと更に気が重い。

「ま、ここまで来た以上は後戻りなんてできねーか…」

パーティー会場のご真ん中。すでに人溢れる会場から開催前や直後にいなくなるなんて、あまりに礼儀に欠けている。

因みに中盤以降はよく会瀬に二人きりで抜け出す人も珍しくはない。

パーティーとは貴族達の仮初めの自由恋愛の場でもあるのだ。

「あの…もしかやフェトム様ではありませんか…？」

「あ、いえ、オレはコガ隊長の弟でして…今は家名無しのリユートと申します」

リユートはいきなり身なりのよい女性に話かけられ兄と間違われたのではないかと判断した。

兄と自分は髪以外の顔立ちは似てると言えば似ている。

だが、リユートに話かけた女性は目を輝かせて喜んだ。

「まあ！そうですか…今は家名無しなのでですね。事情は存じませんが、それならリユート様とお呼びしてよろしいですか？」

「え、あの…ですから、自分はただの商人でして…」

リユートがどうにかわかって貰おうと説明するが女性はクスクス笑ってリユートに微笑みかける。

「コガ隊長とリユート様では髪の色がまったく違いますから見間違えませんよ。私は、リユート様とお話したかったのです」

「オレと？それはまた随分変わったご趣味で…いや、失礼」

リユートは失言とも言える無礼な言葉を使っけど、それでも女性は笑うばかり。

「あらあら。リユート様は御自身の事をよくわかってないご様子で「オレ自身を…？」

いいですか？と女性は人差し指を立てて説明を始める。

「凄腕の剣士でありながら多大な富を生み出す商人。元々は知る人ぞ知る希少物商だったリユート様ですが、王都に召喚された日から、この世界で生まれた勇者と話題にはなっていたんです。それが、つい先程、行方不明とされていた傾国の魔女を保護して絶対絶命と思われる千の魔獣軍との戦いを見事切り抜けての帰還。今やパーティーの話題は聖者を押し退けて剣王と魔女の新パーティー一色です！」

なんだかオレの知らないトコでとんでもない英雄譚ができあがってるらしい。

ミナと一緒に居たのは偶然だし魔獣の数も千にはほど遠い…。街を襲った魔獣の数をいれても半分くらいじゃないか？多分。

ミナではないが、民衆は本当に勇者が好きだなー。と思う。

とはいえ、自分がこの立場に立たなければオレも客とわいわい話していた事だろうけど。

目の前の女性は嬉しそうに剣王と魔女について語るがオレの耳には半分も入らない。

というか脚色され過ぎてて、どっかの物語を聞いているかのような気分になってくる。

ま…一人でぼんやりしてるよりは楽しいか。

王女様はともかくとしてミナもリズの来ない。

構ってくれる人は貴重だろう。

どれくらい彼女と他愛ない話をしただろうか？
その時間もやがて終わりを告げ薄暗い会場の一点に魔法による灯りが灯る。

自然と静かになる会場。

さきほどまでオレと話していた女性でさえ、うつとりと照らされたステージを見つめている。

幻想的とも言える光景の中、そこに立つのは国王と…六人の男女。

…って、なんか見覚えがあるのが二人ほどいるんですけど。

3人は見たことが無い…けど、髪の色から察するに勇者だろう。

1人は久しぶりに見たけどレーナ様の弟シャルンだと思う。で、見たことある1人のレーナ様。

で…最後にやたら妖艶な雰囲気醸し出す美少女。

白い刺繍で飾られた黒いドレスは彼女の髪や瞳の色と合わさっているもの可愛らしさよりも美しさを前面に出し、その黒の中に映える刺繍が神秘的な雰囲気を感ぜさせる。

オレの知ってる彼女とは少し違うけど…ミナがそこに立っていた。

えーと…なんでミナが他の勇者と一緒にいるんだ？って、アイツも勇者か。

…あれ？オレは？

別に目立ちたいわけではないけど何故か自分だけ除け者にされててシヨックを受ける。

舞台上のミナは会場をきよきよと見渡している。見るからに興味津津といった様子だ。

王が開催の言葉なんて口にしてるが、この場の人は誰一人として聞

いてはいない。
みんな今代の勇者達に夢中になっている。

「ところで、なんでリユート様は、あそこに並んでないのですか？」
「…さあ？」

オレが聞きたい。まあ、並びたくもないけど。

だけどその答えは意外な方向からとんできた。

「あそこに居る方は自分の希望で立っているんですもの。リユート様がいないのは当然ですわ」

聞き覚えのある声に振り向くとそこには金髪的美男美女が並んでいる。

「リズはあそこに立たなくていいのかい？それにアルフレッド様、お久しぶりです」

「お久しぶりです。リユートさん。僕が我が侂言って今日は一緒に居て貰える事になったんです」

「そういう事ですね。私としてはみなさんやレーナ様とご一緒であれば前に立つのも面白いかとも思ったのですが」

リズの言葉にアルフレッドは肩を竦めて苦笑する。

彼はアルフレッド・イエーガ。

とある貴族の息子で…リズの婚約者。

まあ、リズはあまり相手にせず、ふらふらと好き勝手やっているが…。

「たまにはアルフレッド様のお願いも聞かないとお父様に怒られてしまいますから」

涼しい顔でそんな事を言う彼女。

「アルフレッド様も大変ですね…」

「…本当ですよ。ありがとうございます」

昔のアルフレッドは典型的な下を見下す貴族の子で、父親も手を焼き、リズも嫌っていたが、今では大分更生し人の上に立つ人物としての器ができ始めている。

ま、リズはアルフレッド様にもっと上を目指して貰いたがってるけどな…大変だなあ、貴族も。

今の彼はリズに育てられたと言っても良いくらいだ。

「そんな事よりいいんですか？リユート様」

「ん、何がだ？」

少し心配そうな声でリズに訪ねられたので、聞き返してみたが彼女はオレの隣を見て視線を動かさない。

て、隣？

オレの隣には先程から話し相手になってくれてた女性が一人。どうやら貴族の中でもかなり上に位置する二人を前にして緊張してるらしい。

カチコチに固まっている。

「ああ、彼女は……えっと、ここに来て話かけて来てくださって。リズとアルフレッド様を前にして緊張してるみたいだな」

隣の女性はハツとして頭を勢いよく下げる。ってか、名前を知らない事に今になって気がついた。

「いえ、リユート様。そうではなくて……」

リズの視線が女性からもっと遠くを見るものに変わる。その先にあるのは…王と勇者達の立つ舞台。

そして、恐らくはその中の一人。

「あー……えっと、怒ってるかな？あの子」

「多分、怒ってると思いますわ」

理由は多分、自分を無視して、知らない女性と仲良く喋ってるのを見つけた…とか、そんなんだろう。

舞台上の魔女は、こっちをおもいきり睨んでいた。

「はあ……ちょっとミナを迎えに行ってくるよ。挨拶もそろそろ終わるだろうし」

あら、羨ましいですね。と微笑み手を振ってくれたリズの横でアルフレッド様が凹んでいた。

「リズ……僕、リユートさんに負けないくらい強くなるよ」

「くすっ、強さだけではないのですよ？あの方の魅力は。でも……」

ゆっくり待っていますわ、アルフレッド様」

……なんだ、これ。

舞台の近くまで来たはいいけど、そこにあつたのは人、人、人の人の山。

挨拶が終わった後、王族の回りに人が集まるのは、いつもの事だけど今日は多すぎる。

回りの人の声に耳を傾けてみると、聖者様恰好良い！これで頭も良ければ……。とか、ロザリーいい！！だの、アウゼルが一番素敵よ。とか声が聞こえる。

名前は多分勇者のものだろう。

あー、なるほど。普段は散らばって異性のトコに行く人達が勇者目当てでここに足を運んできたワケか。
本当に勇者好きだなー、この世界。

良く見ると人が特に固まっている場所が幾つかある。
このどれかにミナもいるんだろう。

なんとか中心にいる人物を見ようとすると流石に人が多すぎる。
さて、どうしたものか……。

少し悩んでいたら少し遠くの集団から、美しい黒髪がどうこうと女性を口説く声が聞こえて……って、あれか？

勇者の中で黒髪は二人。うち一人は男だから口説いてるヤツが、ちよっと変わった趣味を持ってない限り、あそこにミナがいるんだろう。

オレはそう判断して人混みを掻き分け入って行く事にした。

「傾国の魔女と呼ばれるのも納得がいく……貴女の美しさは、国の上層部を籠落して思いのまま操りかねない……」

「え、えっと……ありがとう」

中心にはやたら身なりのいい男……多分、貴族。と普段より三割増しで美しい困っている少女がいた。

「随分、もてるな、ミナ」

「っ！？リユート、遅い！」

ミナはこっちにツカツカ音を立てて歩いて来て……オレの胸に軽くパンチして来た。

「そっちこそ……随分おもてになるんですね、剣王様？」

……恥ずかしいから流石に、その名前で呼ばないで欲しい。

ていつか、やっぱ怒ってんな。

「ミナ。ドレス似合ってる。綺麗だ…って、うお!？」

人が誉めてるのに最後まで言う前に素早く正拳が打ち込まれてきた。一応、手で受け止めたがパスツ!といつもと違い良い音が響く。

…モロに食らったら絶対に痛いぞ、これ。

「ははは、こんな人が沢山いるトコでいちゃつくのはどうかと思うぞ?」

「だ・れ・が、いちゃついてるって?」

冷や汗をかきながら軽く長そうと思ったら、やたら殺気を込めて怒られる。

回りからは、流石魔女!と歓声とも動揺ともとれる声が聞こえて来る。

まあ、よく見ると頬が少し赤い。

多分、半分以上は照れてるんだろう。

オレも慣れたモンだなー、とか思いつつ彼女の手を取り引っ張る。とりあえず、この人混みからは抜け出したい。

「ほら、いくよ。ご飯はあっち」

「なっ!?!いつも食べてるみたいな言い方するな!」

…わりとシャルの実とか食べてないか?

とりあえず彼女の発言は無視して引っ張る。彼女もそれに抵抗なん

てしない。

ただ、ミナを口説いてた貴族が何か言ってるのだけは聞こえた。

「…この闇商人が」

「…リユート、今のは？」

「あー、気にしないでくれると助かる。たまにある事だ」

闇市を嫌う貴族は多いからなあ。

面倒な事にならなきゃいいんだが。

「そっか…リユートがそういうならわかった」

「ありがと、ミナ。それと改めて…ドレス似合ってる。今日のミナはすごく綺麗だ」

さっきは途中で遮られたから改めて言ってみた。彼女はさっきよりわかりやすく顔を赤くして答える。

「…バカ。普段は綺麗じゃないみたいなの言いかね？」

オレは苦笑するしかなかった。

いつもはまだ綺麗ってより可愛いつて感じだからな！。

三十三話 100と盛大なるパーティーと。(後書き)

パーティー(前編)です。

次回は後編になります。
少し区切り悪かったかなあ…。

三十四話 100番目と3番目(前書き)

お待たせしました。

一週間ぶりの投稿です。

きっと待っていてくれた人もいるはずだと信じたい作者心。

いつもより少し長くなっております。

三十四話 100番目と3番目

多くの光が灯る会場を彼女の手を引いて早足で歩く。
パーティーは徐々に盛り上がり流れる音楽と共に踊る男女もちらほらと出てくる。

「綺麗……」

後ろで手を引かれる彼女がぽつりと眩く。

その視線の先にはダンスの為に儲けられた光輝く広場があり、すでに何組かのカップルが踊っている。

「一緒に……踊るか？」

騎士の家系として恥をかかない為にダンスも多少仕込まれている。

正直、あまり気は乗らないけどミナが望むなら踊るのも悪くないかと思う……が、彼女は首を横に振る。

「ダンスなんてしたことない。踊るのは無理よ。リユートは踊れるの？」

「あまりうまくはないけど……少しはな」

今度、躍り方教えてね。と彼女は言う。

まあ、この世界の大半の人はダンスなんか踊れない。貴族やソレを相手に商売する人々だけだろう。

彼女がこういったパーティーと無縁でも不思議ではない。

「落ち着いたら幾らでも教えるさ。さて……これからどうする？」

実を言うとパーティーなんて実際に来たのは初めてでまったくどうもしていいかわからない。

ミナのしたい事をさせた方がスムーズだろう。

「…………リユートが案内してくれるんじゃないの？」

どうやらオレの考えは甘かったみたいだ。

「ちょっと懂れてたけど実際に来てみたらどうしたらいいかわからないものね」

オレは懂れてもないししたい事もないんだが…………。

はあ、とりあえず一緒に回る事くらいか。オレにできるのは。

「オレもあまり詳しくないからな。それでも良ければ」

そう言いながら手を差し出す。

「ん、ありがとう」

彼女は短くお礼を言いながら手を取ってくれた。

「で、これはどういう意味かな？」

ミナはオレの前で笑ってくれてる。
ただし、オレは彼女に胸ぐらを掴まれているが。

「リユートは私をそんなに食べてばかりいるキャラにしたいんだ？」
「な、違っ!？」

とりあえず連れてきたのが立食を主とした場所。

パーティーなんて偉い方と会話するか食うか踊るかしかオレの頭にはない。

偉い人と話しても楽しいと思えないし、彼女は踊れない。
だったら食べるかと思っただんだが……。

さっき貴族の前で食べ物で誘ったの……気にしてたんだなあ……。

彼女の表情は笑顔からジト目になっている。というか、胸ぐらは放して欲しい。

「いや、昼に移動しながら軽食食べてから何も口にしてないだろ？
流石にオレがお腹減ったんだよ」

とりあえず必死に言ってみる。だが、それは意外にも効果が高かった。

「……それもそうだけど」

彼女の手が降ろされ少しイジケタ顔で上目遣いをしてくる。

うわ、この顔ちょっと可愛い。

口に出したら殴られそうだが。

「確かに……お腹減ったけど……」

そりゃそうだ。昼だって軽食。

それが今まで持つハズない。

「そうね、いいわ。」ご飯食べる」

「な？ここにある食事は普段は食べれないものも多いしな」

なんとか機嫌を直してくれた事に安堵しながらミナに料理の説明し、テーブルからテーブルへと回っていく。

ミナは初めて見る料理を口にしては喜んでいる。

あまり好き嫌いがいいのか基本的に美味しいようだ。

んー、パーティーを楽しむって趣旨からはズレてる気がするけど……まあ、いいか。ミナ、楽しそうだし。

「はは、噂道り仲がいいんですな、リユートさん」

「はい？あー……えーと」

「……？」

適当に美味しそうな物を摘まみながらふらふらしていると、ふくよかな明るいおじさんに話かけられた。

見覚えは……うん、ないな。

ミナも串に刺さった牛肉を手に持ち、口にしたまま首を傾げている

のを見ると知らないようだ。

身なりからするに貴族ではなさそうだが……勇者か、同業者といった所か？

「おっと、すいません。リユートさんの事は前々から知っていたので、つい知り合いのつもりで話かけてしまいました。私、ストロノー牧場のレリック・ストロノーと申します」
「ス、ストロノー!？」

ミナは今度は反対側に首を傾げているが、王都処か、この世界でストロノーの名前を知らない人は少ない。

王都の南、国の中央に位置するストロノー牧場は、世界各国に食物を輸出している大牧場だ。

恐らくはこの料理にもストロノー産の肉が多く使われているだろう。

「失礼しました。レリックさん。ストロノー産の食材はうちでもよく使わせて頂いてました」

もうないけど、うち。

「それはそれは、ありがとうございます」

レリックさんは笑顔でお辞儀をしてくる。商人は貴族と違い偉くなるほど腰が低い人が多い。

単純に多くの利益を産み出すためには敵はいない方が圧倒的に楽だからだ。

「んと……牧場の経営者さん……って事？」

ミナが袖を引つ張りながら聞いてくる。

まあ、大体その通りだがオレの代わりにレリックさんが答えてくれる。

「はい、ここよりずっと南で牧場を拓かせて貰っています。そのお肉もうちの牧場の物なんですよ」

といいながらレリックさんはミナが手に持っている串焼きを指差す。

「これですか？あの……すごく美味しいです」

「ははは、そう言って貰えると嬉しいです」

ふむ……。確かにレリックさんは陽気な腰の低い商人のようだ。……けど、商人たるものそれだけではやっていけない。

さて……彼はオレか……又はミナにどんな話を持ちかけてくるだろう。

商人とは頭の隅ではどうやって儲けるかを考えているものなのだ。

そしてレリックは大きく息を吐き気を引き締め改めて二人に話しかける。

「実は……お二人に折り入って味見して貰いたいものがあるんです」

……やっぱり何かあったか……って味見？

てっきり希少アイテムか貴族でも紹介して欲しいかと思ってい

たリユートには予想外の頼みである。

そしてリユートが一瞬硬直してる間に特に難しい事は考えてないミナが即答する。

「味見ですか……？それくらい良いですよ」

と可愛い笑顔で。

……まあ、味見くらいなら問題ないけどさ、確かに。

警戒してた自分が馬鹿らしくなってくる。

レリックは少し離れたテーブルに走って行き小皿にそのテーブルに乗っていた料理を一つ乗せてくる。

「どうぞ。うちの牧場で新たに出荷しようと思っている物なんですよ。ただ……あまり知名度が高い物ではなくて……ささ、リユートさんも」

「お、ありがとうございます」

ミナに続いてオレも皿を受け取る。

ふむ……見た目は鶏肉みたいだが……？

皿の上に乗っているのはサイコロ型に斬られた鶏肉っぽい物。どこかで見たことあるような気がするけど……。

「頂きます」

隣のミナはそういうとパクっとフォークで指して口にした。

「ま、食べてみりゃわかるか。頂きますっ」と

彼女を習いとりあえず食べてみる。

ここに並べられてる料理に警戒する必要なんてないだろうしな。

お……これは……。

肉を噛むとシャリツと凍ったフルーツを食べたような歯ごたえが返ってくる。

この特徴的な歯ごたえは覚えていた。過去に何度か口にしたことがある。

「わ……美味しい」

「これは吹雪の精ですか？」

雪山に住む魔獣「吹雪の精」。精とは言っても立派な鳥だ。

雪山で人を襲う魔獣な為、たまに討伐され、その肉が市場に流れる。魔獣の肉は珍味として知られているのだ。

「おお、流石リユートさん。ご明察です」

「でも、これ……オレが食べた事ある奴で一番美味しいですよ」

食感こそ同じだが旨味が段違いだ。

「実は卵から、うちの牧場で育てた吹雪の精なんですよ！味に自信にあります。ただ、その……魔獣の肉は珍味扱いですから……」

……あー、読めた。

魔獣の肉なんてよほどの物好きか冒険者しか食べない。
新たに美味しい商品はあるけど買って貰えなきゃ食べても貰えない。
だからミナとオレに食べさせて回りへの宣伝にするつもりか。

この世界は貴族ですら勇者大好きな人が多いからなあ。
勇者の好物にでもなれば影響される人は多い。

「リユート！これ、美味しいっ」

「や、うん、うまいな」

……隣には思いきり策略にハマってる魔女がいた。

レリックさんも上機嫌で追加の鶏肉を持ってきてる。

ま、いつか。これで誰が損するワケでもない。

レリックさんは良い宣伝になりそうだしミナも楽しそうだ。

「お、レリック！」

「これはこれは男爵、お久しぶりです」

「いつも世話になってる。おや、そちらのお嬢さんは……」

ふらりと貴族風の男が寄ってきてレリックさんに話しかける。彼な
ら貴族の顧客も沢山いるだろう。

貴族はミナが勇者だと気づき彼女が食べてる物に興味を示して口に
し絶賛する。

はは、レリックさんの思惑通りになってるな。

こんな利用のされ方なら悪くはない。

もう一切れ鶏肉を口に運ぶ。

うん、うまいな。

「リユート！リユート！」

「お？」

しばらく適当に食べ物を摘まみながらふらふらしてたら不意に後ろから声をかけられた。

「レーナ王女。こんばんわ」

白銀の髪をなびかせてこの国の第一王女が駆け寄ってくる。

「何やら人が集まっていたのでな。何かと行って来てみたらリユートもいるとは運がいい」

「あー、アレですか……」

オレから少し離れた位置にかなりの数の人が集まっている。そしてその中心で……ミナが回りに笑顔を振り撒いていた。

……オレ、あんな風にずっと笑顔で話して貰った記憶ないんですけど。

「どうした？リユート。泣きそうな顔をして」

「な、泣いてなんかないです！」

ならよい！と王女は頷いてくれる。

「ところでリユート。あの人だかりはなんですか？」

「勇者を愛でる会？」

「……なんです、それは」

王女が怪訝な顔をする。まあ、言ってるオレとしてもよくわからないんだがな。

あの後すぐにミナの回りにわらわら人が集まって来た。

どうやら皆、ミナに話しかけたかったが、何を話せばいいかわからず様子を伺っていたトコにレリックさんが来て、それをきっかけに話かけ始めたようだ。

今日のミナはいつもより美人だし……話をしてみたいと思うのも当然だろう。

「えっと、魔王には逃げられちゃって……」

彼女に意識を集中してるからか声が聞き取れる。

「好きなもの……？シャルの実とか」

どうやら回りからの質問に律儀に答えてるようだ。

「いえ、リユートとはそんな関係じゃ!？」

ていうかさ……。

「今は……特定の人はいないです。でも……っ」

オレと居るときより明らかに笑顔で……。

「可愛いつて……その……ありがとうございます……」

顔を赤らめてすごい可愛いんだけど……。

えー……オレが可愛いなんて言ったら理不尽に殴られるぞ。
痛くはないけど。

「……リユート、やっぱり泣きそうになってない？」

「そんな事……ないさ……」

泣いてたまるか。

ずっとミナの方を見ていたせいか彼女もオレに気づき続いて隣の王女に視線を移す……そして、ジト目。

オレにも笑顔をください。

「すみません、ちょっと失礼します」

ミナはそういうとこっちに歩いて来る。

……明らかに彼女の声の温度が下がった為、それを止める人など居

ず人の固まりは徐々に解散していった。

「リユート……やっぱりもてるのね」

「ん？いや、え……ええー？」

明らかにモテモテだったのはそっちじゃねえ！？

「リユートは今や話題の勇者ですから同然です」

王女もしれつと何を言ってる。

「とりあえず落ち着け。さっき王女と会ったばかりだ」

「……それならいいけど」

なんて言いつつ目が笑ってないです、ミナさん。

「そういえば王女……一人でここに……？」

せつかくのパーティー。王女を誘おうなんて人は山ほどいるはずだ。

「殿方に囲まれては楽しめないので……逃げて来ましたわ」

「逃げてって……」

一応、そういったのを相手にするのも王族の勤めではないのかと思う。

「普段なら適当にあしらうんですが、一人厄介なのがいて、その方に」

「レーナ王女ー……！」

「今、見つかったトコです。最悪……」

王女が落ち込み具合が端から見てもわかりやすかった。
「王女ー！！と叫びながらこちらに走ってくる黒髪の成年……って、
見覚えあるな、あの人……確か……。」

「えつと……勇者？」

「バカ勇者」

二番目の発言はミナである。王女の嫌がりかたといい随分酷い扱いを受けてる勇者だな。

「おっと、これは失礼。俺は三番目の勇者カムイだ。魔王を倒し、
レーナ王女と結婚する者だ」

「勝手に決めないでください！勇者は100人いるんです！」

そついや魔王を倒した勇者は王女と結婚できるとか言ってたな。

「初めまして。オレはリユート。しがない商人さ」

「久しぶりね。バカ勇者。王女を幸せにしてあげてね？」

「よろしくな、リユート殿！そして、ありがとう、ミツキ殿」

バカと呼ばれてるが本人は気にしてないようだ。
まさか慣れてる？

「てか、知り合いか？ミナ」

「一番最初に召喚された五人のうちの一人よ。番号は強い順」

三番目って事は中間か。てか、ミナが一番かよ…。

流石は傾国の魔女。

「ミヅキ殿の強さは反則だ……」

カムイさんがぐったり頂垂れている。

「刀を使えば自信はあるが近づけずらしいからな……」

まあ、ミナの魔法は反則だと思う、素直に。

「剣の腕もリユートのの方が上ですけど」

「はは、王女も冗談が過ぎる。幾らなんでも商人に……」

「そこは私も同意かな。アンタ、近衛に負けたじゃない。リユートは勝ったみたいだし」

王女の発言にミナの援護でカムイさんが凍る。

「近衛に負けたと言っても……あれは剣だからであって刀さえ使えば……」

「カムイ。言い訳は見苦しいですわ。リユートは魔法を使った近衛騎士に勝ったのですわよ？」

「な、本当か！？リユート殿！」

なんか前にミナとオレ以外は近衛騎士に勝てなかったとかいう話があったな……て、事は負けたのか。この人。

「えっと……一応」

「商人ではなかったのか!？」

「よく物資の調達に魔獣を斬ったりするんで……自然と剣は」

カムイさんがガクツと膝をつき両手を地につける。なんかすごく凹んでるようだ。

「俺は……また負けたのか……」

「ちよ、どうしたんですか!？」

「前に居た世界じゃ一番強かったらしいわよ、彼。それがこの世界で私と二番目の勇者と近衛騎士。おまけに商人に負けてショックなんでしょう」

ミナはさらっと止めを刺す。

ミナの一言の度にカムイさんの心に剣が刺さっている気がするの
は気のせいではないだろう。

「カムイさん、大丈夫ですか？」

「放っておけばいいのよ、そんなバカ」

「また、結婚の話かと思つて嫌気が刺しましたけど予想外に静かになつて助かりましたわ」

女つて酷い。

しかしカムイも約一年の冒険でバカなりに多少は成長していた。
なんとかかふらふら立つ姿は見てて可哀想になるが、それでもしっか
りと立つた。

「リユート殿……俺と勝負をしてくれ！」

「……は？」

え、なんでいきなり勝負？

「近衛に負けたのは一年前の俺……。今の俺なら勝てる！そしてリ
ユート殿にも勝ちたい！」

カムイは根っからの戦闘好きであり強い敵がいるなら勝ちたくなるタイプだ。

リユートには迷惑以外の何物でもないが。

「いや、いきなりそんな……場所とかもないですし」

リユートは苦し紛れの言い訳をするが、この発言は更に状況を悪化させる。

「あら、それなら王城の訓練場を貸しきって盛大にやりましょう。

勇者同士の戦いをみたい人も多いでしょうから」

「あの……レーナ王女!？」

「別にいいんじゃない? 私もリユートがどれくらい強いかちゃんと見てみたいし」

「……ミナまで」

どうやらこの場にオレの味方はいないようだ。カムイさんに至っては、燃えてきたああ!と声を張り上げている。

「ではレーナ王女!俺が勝てばちゃんと婚約者候補として見てくれるか!？」

「負けたらリユートを婚約者候補として見ますよ?」

「構わん!!絶対に勝つ!!」

ちよつと、そこ二人は何を勝手に話を進めてんだ!?

あまりの出来事に動揺するが、そのオレの肩をポンと叩かれて振り向くと……なんか不機嫌になってるミナがいた。

多分……婚約者云々って話のせいだと思う。

「リユート……試合には出て欲しいけど、あまり無理して勝たなくてもいいからね?」

……最近、理不尽が多い気がする。

三十四話 100番目と3番目（後書き）

最後が少し展開早かったかなー…。

文章にするのはやはり難しいですね。

リユートvsカムイな流れですが実際に戦うのはまだ少し先のお話になりそうです。

今回も読んでくれてありがとうございました。

三十五話 100の考察

「……なんか面倒な事になつたなあ」

公爵家に帰つたオレは用意された部屋のベッドに正装のまま体を投げ出す。

結局、あの後レリックさんまで話に乗ってきて回りにいた貴族達も興味を持ってしまいオレとカムイさんの試合は一週間後に観客まで入れて行われる事になった。

お互いにライバル心でもあれば気合いが入るのかもしれないが、向こうはともかくオレにそんな気はない。

向こうはすごい気合い入つてたけど。

慣れないパーティーとこれからの試合の話に疲れ着替えるのも面倒になりベッドに仰向けになつて転がる。

このまま寝てしまおうかとも思ったけど少し微睡んだ所で現実に引き戻された。

コンコン。

小さくドアをノックする音。

リズならいきなりドアをあけてくるだろうし公爵はこんな丁寧な性格はしてない。ならば、ノックの主は一人しかいない。

「……ミナ？」

「うん。リユート、ちょっと良い？」

「ああ。入っておいで」

ギーと小さい不協和音を奏でてドアが開く。そこにはまだドレス姿のままのミナが立っていた。

「まだ着替えてなかったのか」

「うん。こんな服着たの初めてだから、なんか脱ぐのが勿体無くて」

ミナはオレが寝ているベッドの横に腰を下ろす。

……なんだこのシチュエーション。

ドレス姿のミナは普段なら少しだけ感じられる子供っぽさが無くなり美人だ。

「やっぱり今日のミナは綺麗だ」

「なっ……！？う、ありがと……」

また殴られるかとも思ったけど彼女は頬を赤く染めて、こつちを睨んで来た。

一応は照れ隠しなんだろうけど……やっぱり少し引つかかる。

「ミナってさ、結構良く笑うんだな」

オレは気づけば、そんな事を口走っていた。

ミナがオレに笑いかけてくれる事は多いとは言えない。

でもパーティーの最中の彼女は沢山の人に話しかけられ笑顔で……
すごく魅力的な笑顔で答えていた。

彼女はオレが何言ってるのかよくわからないようで首を傾げている。

「パーティーの時に、すごく沢山笑ってたからさ。あんなに笑ってるミナは初めて見たよ」

オレにも笑って欲しいと思うのは我が侘なのかどうか。

そんな想いを知ってかミナは機嫌良さそうに答える。

「嫉妬？」

「なっ……!?!？」

彼女は勝ち誇るような笑みを浮かべた。

笑顔は笑顔でもこれは嬉しくないっ。

「私ね、多分、プライドが高いんだと思う」

ベッドに寝転がり彼女は言葉を続ける。その声は先程までの機嫌の良さそうな物ではなく寂しそうなものだった。

「誰にも甘えないように生きてきた。自分の力で絶対に幸せになるうって……」

三年も前にそう決めて以来、一度も泣かず自立したいが一心で生きてきた。結果、上辺での人付き合いもうまくなっていた。

「でもね……。リュートが私を拾ってくれた時、私は誰かに頼らなきゃ歩く事すら大変だったの」

甘えざるを得ない状況。その環境は彼女を少しだけ変えて例外を作った。

「リユートには最初から甘えっぱなしで……リユート以外の人に甘える方法がわからないけど……リユートに甘えない方法もわからないの……」

ミナは恥ずかしそうにうつ向く。

「だから、ごめんね。リユートに愛想笑いは……」

「くくく……そっか。はは、なるほどな」

「な、なんで笑うの!？」

彼女が自分以外によく笑う理由。それを聞いてリユートの中で燻っていたものが消散していく。

考えてみたら、大勢に囲まれている時の彼女は、ずっと笑顔だった。それに対してオレの隣にいる彼女は様々な表情を見せてくれる。なら笑顔の比率が減るのは考えてみれば当然だ。

「リユート、うるさい……」

少し笑いすぎたか。機嫌を損ねたミナが少し赤い顔で睨んでくる。

「ごめん、ごめん。ありがとな、ははは……」

「まだ笑うし……!」

少し安心しすぎた。不思議と笑いが止まらない。

「とりあえず、起きたらどうだ？せつかくのドレスがしわくちゃになっちまうぞ？」

「まだ、にやけてるし……。ていうかリユートだってまだ正装の癖に……」

ミナは文句をいいながらもベッドから立ち上がり扉に向かう。

「いいわ。せつかくリズが貸してくれたものだし、ちゃんと着替えってくる」

「ああ。すごく似合ってたぞ」

「ばかっ！」

せつかく誉めたのに彼女は、そう言い残して少し強めにドアを閉めて出ていき、ガチャン！と大きな音がした。

「やれやれ。ドレスを着てもおしとやかにはないか」

なんて言いながら自分がまだにやけているのがわかる。

さてオレも着替えるでしょう。流石にこんな堅苦しい恰好で寝たら逆に疲れそうだ。

重い正装を脱ぎ公爵が用意してくれた軽装に着替え再びベッドに体を投げ出す。

色々あったけどやっと少し落ち着いた。

これからの事を整理すべきだろう。

まずは先程のパーティーでいきなり決まった試合。気は乗らないが無闇に投げ出す訳にもいかないだろう。

オレの顧客の人まで乗り気だったしな……。

王との謁見もあるだろうが、これは向こうから言い出さない限り放つておいても問題ないだろう。オレの帰還は知られてるハズだしな。

この辺の事を全部終わらせたなら……まずはクレアに会いに行かなきゃな。

五人の家族。そして唯一別居してるクレア。

他の四人がどこに逃げたかはわからないけど彼女だけは間違いなく西の街にいるだろう。

他の人から、もしかしたら彼女に連絡がいつてるかもしれない。

そして後一つ。

これは明日にでも終わらせよう。多分、金も足り……。

と、そこまで考えた所で、ギーと音を鳴らしてドアの開く音が聞こえてくる。

いきなりの来客に驚きながらも顔をあげると、そこには先程までドレス姿だった少女が寝間着姿になって立っていた。

「……ミナ？どうかしたか？」

彼女は無言でこちらに歩いて来てベッドに腰かけた。ふわりと柔らかい香りがしくる。髪も多少濡れている。

「お風呂入ったんだな」

「うん、すごいわね、ここ。お風呂大きすぎて落ち着かなかった……」

なんか疲れた。と言い彼女は寝転がる。

貴族でもトップクラスの地位にいる公爵家だから……。公爵は散財を好む人ではないが、金を使い循環させる事も貴族の仕事らしい。

「……って、ちょっと待てっ」

「うるさい」

「……なんでオレのベッドと一緒に寝てるんだ？」

話ながら自然に横になってきたせいで一瞬気づくのが遅れた。

こいつ、ここでも一緒に寝るつもりか!?

「嫌ならそっちが出てけ」

……まったくこの子は。

言っても無駄だろう。

「出ていっいたら怒るだろ？」

もう今日は諦める。なんとかしようとは思つが流石に疲れた。

ミナはオレの言葉に小さく肩をポスツと叩いて返す。恐らくは肯定の意。

「やれやれ……ああ、そっだ。明日、出掛けるからミナも一緒に来てくれ」

「どうして？」

多分、嫌がるんだろうなあ……。でも、これは早急に済ませなければいけない。

「闇市だ」

それを聞いた彼女は少し驚いたようだけど、すぐに今日他の人達に見せていた物なんかよりも綺麗な笑顔でこう言った。

「絶対嫌」

三十五話 100の考察(後書き)

最初に携帯に書き溜めた数話以降はパソコンから投稿していたのですがパソコンが壊れましたorz

今日、やっと戻ってきたので少し短いですが投稿してみました。

これからの大雑把なあらすです。

そろそろまた魔王視点も書くころと思っけどどこらへんに入れようかな…。

三十六話 2人、出会った場所で（前書き）

投稿遅くなりました。

誤字脱字あればご指摘くださると嬉しいです。

三十六話 2人、出会った場所で

「大丈夫か？」

「……………なんとか」

王都の大通りからひっそりと伸びる目立たない道。

しかし、その存在感とは裏腹に人通りは意外と多い。

薄暗いその道の先にあるのは、王都の財の大半が集まると言われる

……………闇市。

リユートとミナは再びこの場所に訪れていた。

リユートにとっては慣れた場所だがミナにとっては悪い意味で特別な場所だった。

寒いわけでもないのに体が冷えてゆく。

手の震えが全然止められない。

私の心を占める感情はたったの一つ……………恐怖。

「ごめん……………でも、大丈夫だから、行こう？」

リユートは申し訳なさそうに繋いだ手をギュッと握ってくる。

自分でも信じれないくらい、この場所はトラウマになってる……………けど、彼が手を繋いでてくれるなら、きっと私は大丈夫。

私は私の為にリユートの隣を歩いて行く為に今日、ここで私を取り戻す。

今日この場所に来たのは私の首輪を外す為。別に首輪自体はどうでもいい。命どころか全てをくれたリユートの奴隷だって言うなら私は納得する。

だけど……これからもずっとリユートと一緒に歩いて行くには私は強くならなくちゃいけない。

だから首輪を外す。私の魔力の回復を阻害しているこの首輪を。彼と一緒にいられるなら、これくらいの恐怖は我慢するんだ！

繋いだ手が震えてる。

一度は全てを失ったであろう闇市……彼女にとってどれほどの恐怖なのだろう。

でもミナがオレと一緒に居てくれるなら避けては通れない。

本当ならこんなトコに足を踏み入れさせるべきではないけれど……首輪を外すには主人と首輪をしている本人が、奴隷商の元へ一緒に行かなければならない。

普通の商談であればハンスに来てもらうという手もあるけれど商會に登録している者は商會の管理下でしか品物の受け渡しをできない。唯一の例外が手数料が必要となる窓口だ。

その為、ミナには無理を言って闇市まで来てもらっている。

普段は気にもならない奴隷市までの距離がすごく遠くに感じるな…。

もう一度ミナの手をギュツと握ると彼女は顔を上げて無理矢理な笑顔を作ってくれる。

こんな時までオレを心配させないようにしなくてもいいのにな……。ハンスめ…こんな奥地に店を構えやがって……。

闇市の中でも最も暗い部分である奴隷商であるハンスが中心部に近い場所で店を構えているのは当然であるけど、この時ばかりはそれを恨んだ。

「ハンス！」

あれから十分ほど歩きやつと奴隷商人ハンスの店に辿り着いた。

「リユートじゃないか。久しぶりだな。一時期は死んだなんて噂が流れてたけど、やっぱり生きて帰ってきやがったな」

「もう何度死んだ事にされたかわからないよ」

危険な仕事だからなあ……。

「そんな事より商売だ。ハンス、首輪を外したい」

「首輪？ああ、いいよ。今日は誰のだい？」

以前にランデイの首輪を外してもらった事もあるためハンスも慣れたものだった。

ていうか、外して欲しい対象は目の前にいるんだけどな。

「ミナ、おいで」

「うん……お久しぶりです」

オレの後ろに隠れてたミナがひょこつと顔を出す。

ハンスは自分の売った子達はほとんど覚えてる。ましてミナくらい印象的な子を忘れは……。

「えっと……ごめん、リユート。誰だい？この子」

ハンスさんがきよとんとした顔で私を見る。彼は本気で私が誰かわかってないみたい。

……それもそうか。私とリユートはもう慣れたから今の私が私だけどハンスさんが知ってる私は昔の私だ。

「ハンス………忘れたのか？君から預かった子じゃないか」

リユートは不思議そうに詰め寄るけどわからなくても仕方ないと思う。

「ハンスさん、私です。足が動かなかった子です」

「え………？ええ！？立てるようになったのかい！？それに声も！！」

「………ああ、そうか。ハンスは知らなかったんだっけ」

うん、やっぱり覚えてたくれた。

私の中でハンスさんちよつと良い人に格上げ。

………この場所に長く居たくない事には変わらないけど。

「リユート………ごめん。あんまり長くここには居たくない」

ハンスさんのお陰でさっきよりは落ち着いてるけど……やっぱり怖い。

彼は頷いて手を強く握ってくれる。

「それでハンス。さっき言った通り首輪を外して貰いたい」

「この子かぁ……。ごめん、実はこの子の首輪ね……。高いんだけど大丈夫かい？」

「高い……？」

「ああ、この値段だ」

ハンスさんがリュートに向けて指を4本立てる。

首輪を外す値段の相場が金貨20枚くらいだってリュートは言うてたから……。金貨40枚って事なのかな？

……。リュートの手持ちって金貨20枚ちょっとじゃなかったっけ。

「なっ！？相場の二倍じゃないか！」

「その子が余りにも珍しいくて綺麗な容姿だからって、ふっかけてきてるんだよ……」

最初に説明するべきだったなあ。ってハンスさんが呟く。

む、ちよつと困る。

魔力が回復しないとリュートと一緒に連れてって貰えない。かと言って私が持つてるお金なんて残り金貨1枚にも満たない。

「でも、こんなに早く首輪を外したいだなんてどうしたんだい？ラ
ンデイの時は傭兵の時に奴隷は扱いが悪いつて話だったけど……」

「この子、魔法使いなんだよ」

「ああ、魔力回復の障害か。そうだ、それなら首輪の交換でいいじゃないか！」

交換？

また私にはよく知らないシステムみたいだ。そのままの意味で考えるなら首輪を違う首輪に変えるって事だろうけど……。

「できれば外してあげたいからなあ。仕方ない、適当な装備を一個売って来るかなあ」

「リユートの装備、高いからね」

……つて、なんかとんでもない話してる！？

「リユート、うるさい。あの……ハンスさん。首輪の交換ってなんですか？」

リユートを軽く殴って黙らせる。相変わらず痛くはなさそうだけど。

「ああ、そのまま首輪を違う首輪に変えるんだよ。魔法使いとして奴隷を使いたいけど魔力が回復しなかつたら困るでしょう？だから、奴隷である印の意味しかない首輪もあるんですよ」

我侭な貴族相手が多い商売ですから……首輪一つでもいろいろあるんです。とハンスさんは続ける。

……別に魔法さえ使えればよくないかな？首輪交換ってどれくらいかかるんだろ。

「あの、ハンスさん。交換の方が安いんですか？」

「もちろんさ。高いのは奴隷の解放料だからね。首輪だけなら新しい首輪の値段分だけだよ」

「えっと……これでできますか？」

私は自分がお財布として使ってる袋に入っている貨幣を全部見せる。銀貨棒9本と銅貨が数枚。

それを見たハンスさんは笑って答えてくれた。

「ああ、十分だよ。首輪なんて本当にただの首輪だからね」

「待て、二人とも、勝手に話しを進めない」

む、なんだよー。

リユートがいらないうとこで介入してくる。

いいじゃん、魔法さえ使えれば。

「適当な装備を売って金を作るから少し待ってる。ミナ……悪いけど、ハンスと一緒にここで待っていてくれないか……？ハンス、悪いけど少し頼……」

「リユート、うるさい」

今度はさつきより強めに殴る。

すぐ殴んな！って叫んでるリユートは取り合えず無視。リユートが装備売る前に私が自分で買ってやる。

「一番安いのでいいから、魔力回復する首輪お願いします」

「ははは、まさか、あの子がリユートを殴るようになって戻ってくるとは思わなかったよ。うん、ちょっと待ってね。安めなの幾つかあるから……えっと……これとこれと……うん、この4つだったらどれでも銀貨棒1本でいいよ」

私の目の前に置かれたのはシンプルで特に特徴がない首輪が一つ。別にどれでもいいやと思って適当に一つ取るうとする私の手首をリユートが掴む。

「……何」

「いや、睨むな。怖い」

だったら腕放せ。

ずっと片手を繋いでいるのに腕まで掴まれて実に変な体勢だ。

「……譲ってくれそうもないし交換でいい。代わりに首輪はオレに買わせる」

……そう来たか。確かにそれなら断る理由もない。

「……わかった」

「だから睨むな。ハンス、予算は金貨20枚まで。お勧めの見せてくれないか？」

「そんな高い首輪ないって。予算に糸目はつけなくて良さそうだね。ちよっと待ってて」

そういつてハンスさんは奥に行く。沢山の首輪を持って戻ってきた。……って奴隷用にしてはデザインが普通にオシャレだし綺麗。何これ。

「貴族が特に気に入った子に買ってあげる為の物ばかりだからね。印にさえなればいろんなデザインがあるんだよ」

どこの世界もお偉いさんは無駄遣いが好きらしい。

沢山並べられた首輪をリュートが一つずつ見ていく。

……あれ？よく考えたら、これプレゼント？

物は首輪だけと見た目はそこらのアクセサリーと何ら変わりはない。リュートには以前、指輪を貰ったけど、これもプレゼントじゃなからうか。

……なんか緊張してきた。

私は少しだけ怖いのも忘れてリュートがプレゼントを選んでくれるのを大人しく後ろで待っていた。

テーブルの上に無造作に並べられた大量の首輪。
流石は一流と名高いハンス。今並べられているのは全て並みの奴隷商なら店一番の一品とするモノばかりだ。

ミナの首輪を無くせなかったのは計算外だし残念だが、ここに並べられているモノならそもそも首輪とわかる人も少ないだろうし、も

しわかってても貴族がお気に入りにつけるような首輪をした子に手を出す輩もいないだろう。

そして一つ。オレの目に赤い宝石のついた首輪……というよりはネツクレスに近い装飾具が映る。

ミナを見るとまず最初に目が行くのは長く綺麗な黒髪。次に緑のトンがり帽子とローブ。

赤か……。似合うんじゃないかな？

「ハンス、これでいくらだ？」

「また高いのを選ぶね、リユートは。これくらいだよ」

そう言ってハンスは片手の指を全部立ててこちらに向ける。

金貨五枚か……。

「ミナ、これはどうだい？」

「……別になんでもいい」

ミナに新しく首輪を見せるがそっぽを向かれてしまう。

え、何、怒ってる？

少し焦るけど思い返せばいきなり冷たくされるなんていつもの事か。

……別に嫌われてたりはしねえよな？

「ほら、付けるからこっちは来い」

ミナの手を引き正面から抱きしめかのように首の後ろに手を回す。

「なっ……近……っ!?!」

「はいはい、すぐ終わるから」

リユートはそう言ってミナの首に手を回し新しい首輪の止め金を付ける。

ポウツと魔法が発動する音が聞こえた。

首輪が二つ付いている現状少し不恰好ではあるがリユートは素直にこう思う。

「ん、やっぱり似合ってる」

「近いっ!うるさい!」

顔を真っ赤にしたミナが殴りかかってくるがポスンツと軽い音を立てるだけで痛くはない。

まったく乱暴な子だ。と思いつつも悪い気はしない。

「ハンス、後は頼んだ」

「うん、任せて。ミナちゃん、少し後ろ向いて首を見せて貰える?」

「あ、はいっ」

ミナは短い返事をしハンスへとうなじを向ける。

……本当にオレ以外には素直な子だ、ちくしょう。

「盟約に縛られた枷を新しき鎖に。解き放て古き鎖」

ハンスがミナの古い首輪に手を当てると青白い光が灯る。

奴隷専用の解錠魔法……詠唱や術式は簡単ながら鍵毎に波長が違いためそれを知らなければ意味を為さない。

その為、今日はミナに嫌な思いをさせてまでここに来る必要があった。

そして……彼女を縛っていた古き封印の楔はキィィンと甲高い音と共に鍵が壊れ地面へと落ちる。

一瞬訪れる静寂。

そして……変わる世界。

いつも傍に居たりユートでさえも一瞬、自分の身を守るために魔剣を召喚しようとした。

思い止まったのは恐怖の発信源が自分のよく知る黒髪の女の子だったからに過ぎない。

魔法というのは通常、発現する時に波のようなエネルギーが放出される。

魔力を扱える者ならその波の揺れを感知し魔法の発動を予測できる。

そしてリユートを含む辺りにいた数人は……首輪が外れた瞬間に大魔法クラスの波を感知したのだ。

「ミナ！」

「リユート！これ……すごい！」

彼女が見せてきたのは以前、魔力を回復する為にあげた触媒「竜の雫」。

竜種が膨大な魔力を回復する為に自らの体内で精製した宝石。

それが、ほぼからっぽなミナの魔力を高速で回復させている。

まるで巨大なコップに勢いよく水を注いでるかのようだ……周囲に漏れてる大魔法並みの魔力は受けきれずに零れた水滴と言った所だな……。なんて途方もない魔力量だ！

「ミナ、今自分が受け止め損ねて外に返してる魔力があるのはわかるか？」

「えっと……あ、うん」

「落ちて置いて零れてる魔力を抑えて欲しい。できるか？」

「どうかな……？」

彼女がそういうと明らかに周囲に漏れてる魔力が減少する。幸いにも彼女は魔力量だけでなくコントロールにも優れるみたいだ。

まだ多少漏れてるがこれなら許容範囲だろう。

先程まで何事かと驚いてた人も徐々に散っていくのを見てオレは安心する。

「ありがとう、ミナ。それと……おめでとつ」

「うん。これでリユートと一瞬に冒険するのに……異議なんてないわよね？」

ミナがそう言うとオレには苦笑を返すしかなかった。

今のミナなら……オレなんかよりも余程強い。

意地でもオレが守るって言うけどなっ！！

一年前に王都に召喚された少女。

彼女は魔法に秀でていて城の誰もが彼女に勝てなかった。

国は必死に彼女を引き留めようとしたけれどどんな大軍もどんな作戦も彼女の魔法の前には意味なんてなさなかった。

結局、死人こそ出なかったものの重軽傷者多数に城の至るところは破壊され挙げ句の果てには大穴まで空けられ彼女は魔王を倒す旅に出た。

彼女は勇者として恐怖と希望を併せ持ちこっ呼ばれた。

傾国の魔女。

国すら滅ぼす最強の魔女と。

三十六話 2人、出会った場所で（後書き）

リユート視点とミナ視点どっちにしようか非常に迷って両方書いた拳句、それぞれを組み合わせた視点がころころ代わる話になりましたorz

わかりずらくなっではしまいますが二人の心境をどっちとも書きたかったのです（涙）

そしてやっとヒロイン完全復活！
長かったなあ、思ったより……。

テンポよく纏めれる実力が欲しいっ。

三十七話 1は御機嫌(前書き)

誤字脱字あれば御指摘して貰えると嬉しいですよ。

三十七話 1は御機嫌

指先に小さな火を灯し徐々に魔力を加え圧縮する。

最初はマツチ程度の火だったソレは魔力を加えられ温度を上げて青白い炎となる。

「……綺麗。よしっ」

私は少し気合いを入れて属性を反転させる。

青白い炎は即座に固まり周囲の空気ですらパキパキッと音を立て凍る。

「うん、こんな感じかな」

「いいから、その物騒な魔力塊を消せ」

「いたっ」

隣を歩く灰色髪の成年が私の頭を軽く叩く。

なんだよー。

「……間違つて魔力暴走したらどうする気？王都の夜は雪になるわよ？」

「だからそんな危険な魔力を歩きながら適当に込めるなよ!？」

む。それは一理ある。

口では暴走なんて言ったけど私にとってそんな危険はない。

あの程度の魔力量、私が持つ魔力総量に比べたら微々たるものなんだから。

かと言って回りから見たら危ない事なんだから歩きながらやる事でもない。

「わかったわ。とりあえず帰りましょ」

「当たり前だけど…機嫌良さそうだな」

「うん。リユートから選んでくれたプレゼント……嬉しかったから」

リユートがくれたネックレスを見る。意味合的には奴隷の印だけどほとんど意味を成してないだろう。

「そつちかよ!?!」

……もちろん魔法がちゃんと使えるようになったのも嬉しいけどね。

魔力がちゃんと回復するようになって幾つか分かった事がある。

まずは私が成長していた事。

肉体的にはほとんど変わらない……うるさい。けど魔力は一年前、ここに来た時よりも強くなっている。

ちゃんと回復したら一年前の私では、今の私には勝てないだろう。

そして魔法を使うのを楽しんでいる自分がある。

リユートと一緒に入った洞窟で小さな太陽を作る。

焚火の代わりに火球を浮かせる。

元の世界の石鹸をイメージした魔法シャボン。

薄々気づいていたけど私はこんな下らなくも便利な魔法が大好きみたい。

前は魔王を倒す事だけを考えていたのに、いつの間にこんなに変わったんだろう。

まあ……いつかはわからなくても誰のお陰かはわかるけど。

隣で歩く彼を見る。

……感謝なんて言葉じゃ表現しきれない。

今、高速で魔力が回復してるのもリユートがくれた指輪のお陰みたい。

今までは回復量が少なすぎて魔王戦以外は魔力を節約してたから、気軽に魔法を使えるってのは楽しみだったりする。

さっき魔力を圧縮してたのも自分に何ができるかの実験だし。

闇市から公爵家に帰るまで私はぼんやりと今までの事を考えていた。

行く時は恐怖心でいっぱいだったけど、ちゃんと行って良かった。

行く時はあんなに長く感じた道も心が弾む帰り道になりすごく短く感じる。

新しい魔法をあれこれ考えながら帰ると大きなお屋敷の広い庭で二ーズヘッグ公がどこか吹っ切れたような目で遠くを見つめていた。彼の前にはケルロンが気持ち良さそうに寝転がって暢気に真ん中の口が欠伸をしている。

「公爵、今戻りました。……あのどうかしましたか？」

余りにも清々しく遠くを眺める公爵にリユートも心配そうに話しかける。

私も公爵の様子は気になるけど、話しかけるのは緊張するから助かる。

……王様とかにはイライラしてて失礼な態度だったけど。

公爵はちよつとだけ困った顔でリユートに笑いかける。

「ははは、うちの庭に、この子がいるのが未だに信じがたくてね」

そう言つて彼はケルロンを見る。

ケルロンはパーティーの後に私が公爵に頼み込んでここに連れて来て貰った。

ケルロンも自分だけ王城にいるんじゃきつと寂しいだろうから。でも、やっぱり迷惑だったかな……。

「魔獣の中でも上位のケルベロスが庭で呑気に寝てるのが不思議だね」

「……ごめんなさい。あの、私！」

迷惑なら街の外でケルロンと一緒に暮らそう。そう思つて言おうとしたけど公爵に手で制される。

「迷惑ではないよ。慣れない事に少し驚いてはいるがね。ケルベロスとは言え……この子は大人しくて敵意もない。追い出す理由には

ならないさ」

そう言つて笑いかけてくれた。

流石リユートが信頼してるだけはある。

「それに今更ケルベロスを理由に追い出されたら私が拗ねますわ」

玄関のドアが開き金髪の美女がそう言いながらケルロンに歩いて行く。

その手に持っているのは……骨が付いたままのゴツイ肉の塊が乗った皿。

「この子の朝ごはんに……と思ったのですけれど大丈夫かしら？」

ケルロンが普段何食べてたかはわからないけど、ここまでの道中食べてた干し肉よりは余程良いと思う。

「ありがとう、リズさん。お礼はちゃんと……」

「構いませんわ。私、動物は大好きなのですけれど……お父様が許して下さらなかつたので、すごく嬉しいですわ」

リズさんは本当に嬉しそうに笑う。

これで恋敵じゃなければ素直に好きになれるんだけどなあ……とはいえ一方的にかもしれないけどリズさんを友達のように感じてるのも事実で少し悔しい。

「リ、リズ！別に僕は動物が駄目だと言ってるのではなくだ……！」

「ニーズヘッグ家は、その名のとおり龍族の血を色濃く継いでいる為、動物が怯えて可哀想……でしょう？頭では分かっていますわ」

必死に弁解するニーズヘッグ公をリズさんが溜め息を付きながら睨み付ける。頭では分かっても心では納得いかないのだろう。

でも昨日からケルロンに怯えた様子はない。

流石は魔獣というべきなのだろう。

……っというか、すごい見てる。リズさんを。

正確にはリズさんが持つてるお皿を……かな？

リズさんもすぐにそれに気付いたようで嬉しそうにケルロンに近づく。

「あら、食べてくれるのかしら？」

そう言ってケルロンの前にお肉を置くとケルロンは私の方を見ている。

えっと……？

「食べていいよ、ケルロン」

「あら、いい子ですわね」

いいよ。そう言った瞬間、ガウツと小さく吼えてケルロンは美味しくそうにお肉に噛みつく。

うんうん、お肉は美味しいよね。

それにしても貰った物を勝手に食べないなんてリズさんの言う通りすごくいい子だ……。

「ほら、みんな！こっちもご飯にしようではないか！」

少し額に汗を浮かべ公爵が声を張り上げる。

きつと動物関連の話題で少し御機嫌斜めなりズさんをどうにかしたいんだろつ。

普段は気さくながらも威厳ある公爵がリズさんの前では少し情けないお父さんといった感じた。

「仕方ありませんわね……。拗ねてても仕方ありませんし行きましようか、ミナ様」

「えっと……。今日もお世話になります」

一応、宿借り身。私は頭を軽く下げる。

「いいですわよ。リユート様の家族は私にとっても他人ではありませんから」

そう言っただけで彼女は先に歩き出す。

本当に……。ありがとう。

あ、こら！感謝はしてるけどリユートの腕に抱きつくくな！

先に行くリユートとリズさんの後を私は追う。

そして彼女はリユートにとっては致命的で私にとっても予想外の言葉紡いだ。

「ところで、リユート。昨日はなんでミナ様と一緒に寝たのかしら？」

あ、バレてた。ま、いいけど。

「龍族の血は五感が常人より強くなりますから。ミナ様独特の柔らかい香りがリユート様からも香ってれば気づきます」

食事中、リユートはリズさんに詰問され公爵は笑ってる。

ちなみに私は自分に関係ないですみたいな顔で澄ましてるけど実は恥ずかしくて仕方ない。

幸いにもリズさんの批難はリユートに行ってるからボロはでないだろう。

リユートはいろいろ言い訳してるけどいつまで持つかな。

「その……ごめんなさい」

あ、意外と早く折れた。

「リユート、情けない」

とりあえず追い討ち。リユートはガクツと頂垂れる。

「あらあら、ミナ様が自分からリユート様の寝室に行ったのでは？」

「うん、そのままリユートのベッドまで潜り込んだのも私」

「あら、大胆ですわ」

クスクスとリズさんが笑い私もそれに釣られて笑う。

リユートは隣で納得いかなさそうにしてるけど、どうやら私たちの嫉妬はリユートだけに向きそうだ。

王女はまだわからないけどリズさんとは仲良くできそうだ。

「ねえ、リズって呼んでもいいかしら？」

「いいですわよ、ミナ」

「ありがと、リズ」

笑い合う私たちを見てリユートが驚いている。

後で聞いた話だけどリズが敬称に「様」をつけない事は非常に珍しいみたい。嬉しい。

「龍族ってリズの御先祖様ってもしかして勇者？」

「そうですね。誇り高き龍人ニーズヘッグ。彼からニーズヘッグ家は生まれましたの。ちなみにリユート様も勇者の子孫ですわ」

「ん、聞いた事ある。リユートは先祖返り……だっけ？」

「ああ。たまに先祖の勇者の血を色濃く継ぐ人がいるんだよ。オレがたまたまそうだった」

灰色の髪がその証拠らしい。

髪の色が金か白以外は憧れの対象なんだっけ。

リユートは灰色……なんか、気に入らない。

「前々から気になっていたんだがリユートは先祖返りの能力はもっておるのか？」

さつきまで笑っていたニーズヘッグ公爵がフエークを口に運びながら質問する……が、それはリユートにとっての地雷であり事情を知っているリズも固まる。

私は始めに王都で勉強した時の事を思い出す。

先祖返り……勇者の子孫が勇者の特徴を引き継ぎ生まれてくる事。その多くは髪の色が代わり、勇者の特殊能力を生まれつき使える。

こんな感じだったかな。

でもリユートがそれらしき能力を使ってるのを見たことがない。

「ごめんなさい、リユート様。お父様も悪気があるわけでは……」
「わかってるよ、リズ」

リユートはかなり凹みながら答える。

「使えないんだ？」

うん、ここで遠慮する私じゃない。別にいいじゃない。使えなくても。

「使えぬからと言って恥じるものでもない。生まれつきの事だからな」

公爵はやっぱりいい人だ。

だが、そんな二人の予想に反してリユートは白状する。

「能力はあります。けど……使い物にならないんです」

リユートが頂垂れる。

んと、話を整理すると能力はある。けど使い物にならない。

つまり……役立たず。うわ、微妙だ。

いつそないほうが少しスッキリするだろう。

リユートが凹む理由が少しだけわかった。

「す、すまん。リユート」

「ほら、リユート様！そんなことより久しぶりに剣の相手をしてくださいませんか!？」

公爵の謝罪と共にリズが無理矢理話を反らす。

リズにとっても思いついた事を言ってみただけだったが意外にもそれは高い効果を出した。

「そうだな……今更気にしても仕方ないか。うん、久しぶりにリズの剣を見るのもいいな」

「見てくださいますの？嬉しいですわ……!!」

リユートの快諾に掛け値なしの笑顔がリズに灯る。

剣の稽古を欠かした事はないけど剣を教えてくれたリユートに見て貰える事は稀である。

普段、父とばかり手合わせして負けているリズに嬉しくないはずが

ない。

そんなリズを見てると置いてきぼりにされたような心境で寂しがる少女が一人。

「……リユート、私には剣を教えてくれた事ない」

「いや、魔法使いだろ、ミナ」

そうだけど。

「剣があるんだしせっかくだからちゃんと使えるようになりたい」

ふむ。とリユートは考える。

リズに対抗心を燃やしたのもあるが、せっかくある魔剣を剣として使えるようになりたい。

「確かにミナは接近戦さえ凌げば負ける要素はないもんな……」

どうやら私の中距離での強さはリユートも評価してくれてるみたいで嬉しい。

今日は二人でリユートに剣を習うんだろう。

私はそうなると予想したし少し仲良くなったリズと剣を手取るのは楽しみだった。

それはリズも同じ事を考えてくれてると思う。

その証拠にリズはこちらをみて片目を閉じた。

「ああ、そうだ。ならリズ、君がミナに剣を教えてくれないか？」

「……なんでそうなるんですの!？」

……またリユートが変な事を言い出した。

三十七話 1は御機嫌（後書き）

3〜4話あたりでふれたリユートの先祖返りについて改めて説明してみました。

補足として先祖返りで得れる能力は先祖の勇者の能力と全く同じか多少劣化したものになります。

リユートの御先祖様は能力を使い大活躍しましたがリユートにとっては相性が悪くてほぼ使えない能力になってるのが現状です（笑）

本文に入れるのも無駄に長いかと思いい後書きにいれてみました。

三十八話 1と竜

私の両手にあるのは二本の魔剣。
ただ切れないように白い布で巻かれている。

対峙する金髪の美女の両手にあるのは二本の大剣。
向こうの剣も切れない模擬剣であり使用者への重量は魔法で本物と
変わらないソレを再現しているもの。実際に殴られても大怪我はし
ないだろう。

無論、痛い。

お互い剣を持って対峙している以上やる事は大部限られているんじ
やないかな？

もちろん剣を習うというのもあるけど残念ながら今回は違う。

これから始まるのは私とリズの試合。

余りにも予想してなかった展開に私は頭を悩ませる。

どうしてこうなったんだっけ……？

「私よりリユート様が教えた方がいいのではないですか？」

もちろん私の練習も見て貰いますが。とリユートの提案に異を唱えるリズ。

でも流石のリユートも何も考えずにリズに剣を教われと言った訳ではないらしい。

「ミナは剣は初心者だけど二刀流なんだよ。オレが一刀から教えてもいいんだが、せっかく二本使えるなら使うべきだと思う。それならリズの方がいいだろう？」

「二刀流……本当にですの……？」

リズが信じれないと表情で語る。

二刀流は一見強そうに見えるが、二本の剣を扱うのは重量的にも技術的にも非常に難しい。

リズは竜の血の影響で常人より力が強いいため振るえるが二本の剣を扱うのはリユートでも簡単ではないのだ。

ただしミナはどちらかと言うなら同年代の女性の中でも力は弱い方だが使う武器が特殊であった。

魔剣……最たる能力は魔法を消滅させる斬撃だが、同じく魔剣を使うリユートはもう一つの能力もかなり強力だと判断している。

それは単純に魔剣は所持者が手に持てば重量をまったく感じさせない。

だからこそ素人のミナでも迫り来る魔法を正確に斬れ、二刀流だろうとも簡単に振り回せる。
ならば後は技術の問題だけだしリユートに二刀流を止める理由もない。

「彼女の武器が少し特殊でな……。まあ、すぐにわかる。オレは剣を二本使うなんて器用な真似はできないし教えてやってくれないか？」

「リユート様が言うなら……。だけど、一つ条件がありますわ」

ここでリズが出した条件。これがさっきの私とリズの状態に直帰する。

「自分より強い人に教えるなんて恥ずかしいですから……。私と勝負して欲しいですわ」

「……勝負って私、魔法以外は全然駄目よ？」

ましてや剣とかまともに触った事がない。

「ミナが負けたなら素直に教えますわ」

リズは私を過大評価しすぎだ……。

だから私は誠意を持ってちゃんと返事をした。

「無理」

勝てるはずないじゃない。

さて、これが少し前の出来事。

あれ？私、ちゃんと断ったのになんで剣を持って対峙しているだろ？

「行きますわよ、ミナ」

「ちよつと待つて。私……なんか流されてない？」

その言葉を聞いたリズは美しいまでの笑顔で返事をしてくれる。

「流してますわ、では」

「……っ！！」

身構える暇もなくリズは数メートルを一足で詰め大剣を降り下ろしてくる。

ああ、もう！！まだやるだなんて言ってないのに！

幸いにもリズの斬撃は素人の私にも見えるほど遅い。
剣が私を捉えるより先に横に飛び避ける。

「やるって言ったのは……そっちだからね！」

切れないように布を巻いてあるとはいえ、ある程度以上の硬度を持

つだろう魔剣を攻撃を外して無防備なリズに降り下ろす。
正直に言って私はこの時点で勝ちを確信した。

最も、それは私が剣を知らなかったからそう思えたただけだったけど。

「甘いすわー!!」

リズはそう言い放ち片手を振り上げミナの剣を迎撃する。

魔剣と大剣がぶつかり合いわずかに魔剣が押す……のも一瞬。
競り合いになると大剣が魔剣を簡単に弾く。

魔剣は所有者本人には重さはないが、それ以外の人にはちゃんと重さがある。

ミナの力が完全に魔剣に乗った結果、斬り結んだ瞬間は竜の血を持つリズの力を上回ったが純粹な力勝負になった瞬間、リズが圧倒的に優勢となった。

加えて……ミナは圧倒的に自分が不利な要素を見つけてしまった。

これが……二刀流。

私はただ二本使ってるだけね……。

元の世界での刃物なんて包丁くらいしか使ってた事ないんだから当たり前だけど……私は剣を二本扱えてない事が今、わかった。

その時に使いやすい方を片方ずつ使ってるだけ。

それに加えてリズは……参ったなあ。

素人のミナにもわかるほどリズの剣は二本が連携して攻撃と防御を担っていた。

リズにとっては、競り合いでミナの剣をあっさり撥ね飛ばし彼女が下がったのこそが計算外であり、本来なら先程避けられた剣を振る

い決着をつけるつもりだった。
それくらいリズは二本の剣を多彩に使いこなす。

「驚きましたわ。今ので決めるつもりでしたのに……」

「私も一撃で終わると思っただのにびっくりしたわよ。一刀流……す
ごいわね。是非、教えてもらいたいわ」

「私が勝てば教えますわ」

そう言つてリズは笑う。

別にこんな試合勝つても何があるわけじゃない。
むしろ勝たない方が剣を教えて貰える。

けど……。

「黙つてやられるのは……趣味じゃないのよ」

昔の私みたいに冷たく告げる。

勝てないからつて負けて溜まるか！

リズも目を細め二本の剣を構える。

場違いにも、ああ、この子こんな顔もするんだ。なんて私は考えし
まった。

いつも柔らかく笑っている彼女とは大違いだ。

怖い……けど、少し楽しい。

考える……！どうすれば勝てる……？

互いにある武器は両手にそれぞれ持つ剣。

速さは私が勝ってる。

負けているのはいっぱい。

中でも致命的なのは力と技。

技はどうしようもないわね……。

何千何万と繰り返して得れる強さを今すぐ手に入れようなんて無防だ。

それならもう片方の力はどうかだろう？

これも本来なら日頃の鍛錬が生み出す物。

でも……私は例外を見たことがある。

元の世界では概念はあった。

実際に彼は使っていた。

なら私にできない理由なんてない！

「行きますわよ！」

リズが剣を頭の上で交叉させ距離を積めてくる。

片手で僅かに勝る程度の差。それなら両手で同時に斬られれば私に受ける術はないだろう。

そして同じ事を上手くやれる自信もない。

本来なら避けるのが上策。

でも……。

「好都合！」

声を上げて私もリズに突っ込む。

彼女は少し驚いたようだけど直ぐ様、剣をX字に降り下ろす。そして……。

「強化！身体能力、攻撃力！」

一か八か魔法を発動して全力で剣を降り下ろす！

ダンッ！！

軽い金属と布を巻いた剣を叩きつけあつたとは思えない轟音。

結果は……。

「信じれませんわ……。私の一番、力のある技ですのに」

「成功……って考えて良いみたいね。それでもリズには勝てないか」

お互いの剣はぶつかり合った所でピタリと止まっていた。

完全な互角。次の瞬間から少しずつリズが押すが剣撃の威力は両者

一歩も譲っていない。

「これでも……力勝負じゃ勝てないかな」

徐々に押され始めたミナが後ろに飛び逃げる。

「私、両手使ってますのよ？なのに押しきれないのが不思議ですわ」

リズが呆れたとばかりに溜め息をついて笑う。

「魔人の技を魔女が使っなんて始めて知りましたわ」

魔人の技……その言葉を聞きミナは納得する。

だから他の人は使っていなかったんだ。

だから魔王は使っていたんだ。

魔王と戦ってすぐに彼が自分の身体能力を魔法で強化してるのがわかった。
でなければ、精々1Mほどの大きさの翼で人が空を飛べるはずがない。

そしてそれは自分も使えた。

リユートの隣を歩くには……この魔法は大きな助けになってくれそうだ。

「今度はこっちから行かせてもらおう!」

私は一人、リズに感謝しながら剣を振るった。

「ふう……中々やりますわね。でもそろそろ限界でわなくて?」
「……うるさい」

あれから数分斬り合った。
力、速さで優位を取った私は始めこそ互角以上に打ち合えたもの、すぐにもう一つの弱点を晒すことになる。

……持久力。

剣を振るい続けるのは思いの外、体力を消耗するみたい。

「無駄な動きが多すぎますわ……本当に素人なんのですわね」

うるさい。と言いたい所だけど肩で息をしてる現状、喋るのも疲れる。

それに……適当に振り回してるだけだもんね、結局。

無駄な動きが多い…自覚はできないけどもつともなんだろう。

それでも……負ける気なんかないけど！

実際に勝てるかどうかはおいといて負けたくないんだ！

私は重くなってきた腕をあげて見よう見まねでリユートと同じ様な構えを取る。

「その心意気は立派ですけど……実力が備わるのはこれからですわね」

リズムも構えを変える。その構えはどこか私に似て……違う！
リユートの構えに似ている！

「私に剣を教えてくれるのはお父様とリユート様ですもの。驚かれる程の事ではありませんわ」

そしてリズムの目が変わる。

敵を本気で倒すときのソレに。

「行きますわよ、ミナ」

リズはそう言うところを見ると回転しだす。

その速度は徐々に上がっていき剣が風を切る音がヒュンヒュン聞こえてくる。

……なんか独楽みたい。

そんな事を考えてるのが失敗だった。

これは勢いが付く前に止めるべき技。

回転しながらも近づいて来ていたリズはそのまま私に斬りかかってきた。

「なっ……早!？」

予想外に早いリズの剣に必死に魔剣をかち合わせる。

すると大きな音と共にお互いの剣が大きく弾かれた。

力が強くなってる……!

遠心力を利用した斬撃。

回転の力をそのまま乗せた一撃は魔法で強化し魔剣の力を乗せた攻撃に追い付いている。

そして……。

さっきまでとは比べものにならない速さね……。

なんて考えてる間に即座に二撃目が襲ってきた。

避ける。そして先程、弾いた一撃目が一周して襲ってきたので弾く。次の瞬間、避けた二撃目が四撃目となり降りかかる。

独楽なんて可愛いものじゃない……竜巻だ、これ！

避けても弾いてもリズが一回転する度に二つの剣が襲ってくる。

……やばい。必死に竜巻のような斬撃をやり過ごすが、その度にリズリズの速度は上がって行く。

まずはリズリズの動きを止めなくちゃ……でも、どうやって？

遠心力の加わったりリズリズの一撃は私の強化された一撃と互角。凌げはするけど動きを止めるには及ばない。

でも……リズリズはさっき力で上回る私の斬撃を技で止めた。

大きく息を吸って吐き出す。

まったく今日は一か八かの多い日だ。

私は剣を頭の上で交叉させる。

さっきリズリズが見せてくれた技だ。

もちろん使いこなせるだなんて思ってはいないけど……。

「片手で斬るよりは強くなってくれてもいいハズ！」

竜巻のようなリズリズの連撃にタイミングを合わせて叩きつけた。

「ミナならこれくらい止めると思っていましたわ」

ガキインと甲高い音が響きリズの手から剣が飛ばされた……けど。
手応えが……なさすぎる!?

剣を飛ばされたというよりは、わざと放したかのように手応えがない。
気がつくともリズが剣を持っていた手は代わりに私の胸ぐらを掴んでいる。

「うー！しまっ……」

最後まで言う余裕もない。
リズにしてやられた!!

全力で放った攻撃をいなされ体制を崩してる私をリズは回転の力をそのまま乗せて柔道の背負い投げのような技で浮かされ、そのまま蹴り上げられる。

「きゃっ……!?!」

思わず悲鳴が漏れた。

……多分、リユートにも聞かれたらろうな。
よし、後で殴ろう。

そんな事を考えてる余裕があるくらいに蹴られたのは痛くなかった。
うっん、そもそも蹴られたというよりは跳ね上げられたと言っべき。

地面と私の距離は三メートル程度離れていた。

マズイ……!!

まったく身動きできない空中に放り投げられたら後は落ちて行くだけ。
強化された体なら三メートル程度なら多少痛い程度だろう。

けど……下にはリズがいる！

足場もない空中ではリズの攻撃を受け止めれないっ。

当然これはリズの狙い通りで彼女は下で剣を構えている。
ミナにも対抗する術はあるが、それは身体強化のようなグレイゾーンではなく完全に剣ではない魔法の戦いになってしまう。

どうする？考える！！

攻撃魔法は駄目……。

魔法で防御するのも論外っ。

上昇気流……落下を緩やかにするだけね、無意味。

考えてる間にも無慈悲に地面は近づいてくる。

「楽しかったですわ。また今度、手合わせお願いしますわ、ミナ」

いつもの優しい笑みに戻っていたリズは私の落下に合わせて大剣を降り下ろした。

三十八話 1と竜（後書き）

改めて読むと急展開なバトル突入だったかなあ…orz

と思いつつ予定通りな展開ではあるのですが。

誤字脱字あれば御指摘頂けると嬉しいです。

三十九話 1の実力とその後の……。 (前書き)

またまたヒロイン視点です。

主人公空気だな……。

更新速度が少し落ちていますが、変わらずコツコツ更新していきます。

三十九話 1の実力とその後の……。

「……信じられませんわ」

床を大剣で強打したりリズが呟く。

「ちょっと反則な気もするけど……どうかしら？」

「これくらいなら問題ないのではないでしょうか。魔法禁止でない限り剣術大会で飛翔する方もいらっしやいますし」

飛翔かあ。流石に空を飛ぶのは考えてなかったなあ。

リズが剣を降り下ろした直後、私は魔法を発動した。空中で私の動きを補助できるような魔法を思い浮かべて……。

結果、私は地面から1Mほど離れた空中に立っていた。

「魔力の物質化……そして空中での停滞。どれだけ魔力を注ぎ込めばこんな真似ができますの？」

「大した量じゃないわ」

リズが呆れて溜め息をつく。

ミナが創造したのは小さな煉瓦のような足場。

これを空中に座標を固定化しただけの簡単な原理の魔法だ。

しかし原理自体は簡単でも使う魔力量は大魔法にも匹敵する。

魔力を物質化するほどの濃度で硬め、重力等の物理法則を無視して

停滞させるにはそれほどの魔力を使わなければならない、一般の魔法使いには負担が大きすぎる。もっとも魔法では魔王すら凌駕するミナにとっては微々たる消耗でしかない。

これなら勝てるかもしれない……！

力で押しきれない。技では圧倒される。私が頼れたのは僅かな速度の差だけ……。でも、この魔法があれば！

「行くわよ、リズ！」

叫ぶと同時に宙を翔る。

空中に次々と足場を生成して走る。

「そんな高度な魔法をよくポンポンと……！」

試合が始まって始めてリズが動揺した。大魔法使いとは聞いていたけど、まさかこのレベルの魔法を事も無げに連発するだなんて誰も思わない。

「考え事とは……余裕ね！」

「……っ!？」

下にいるリズに剣を振り下ろす。

ちよつと攻撃しにくいけど下にいるリズはもっとやりにくいだろうから、我慢。

甲高い音がしてリズの剣が弾かれた。

上からの攻撃なら……リズの力に完全に勝てる！
下がるリズに対して再び足場を生成して駆け寄る。

「ふう……ミナ。貴女の魔法の発想には本当に驚かされますわ。でも……剣ではまだ致命的な弱点があります」

「なら、私を負かしてから言っただう！」

「そうですね」

リズはそういつと私と同じくらいの高さまで飛び上がり……そこから空中でもう一度何かを蹴って飛び上がった。

「なっ……私の足場を……!?!」

ほぼ全力で駆け出した私はもう止まらない。

より高い場所にいるリズに愚直なまでに突っ込むしかなかった。

「相手が予想外の行動をとった時に咄嗟に行動できないのがミナの弱点ですわ」

リズはそういつと縦に回転しミナに斬りかかる。

上下を逆転し力関係が変わった私に受け止める術などあるはずもなかった。

「うう……悔しい」

「あらあら。でも正直、あそこまで素人にやられて泣き言を言いたいのには私も同じですわよ?」

リズが柔らかい笑みで微笑む。

剣を持つてからの時間が違いすぎるから負けて当然かもしれないけど……それでも、最後にあそこまであっさりやられるとは思わなかった。

「ミナは次の手を考えるのは本当につまいんですけど、予想外の事には一瞬悩んでから行動してますわ。その一瞬の遅れが今回の負けに繋がってるのです」

「冷静になればあんなの足場を消すなり下に転がるなりすれば避けれるしな」

今まで黙ってたリユートが口を開く。

てか、コイツの言葉、試合を終えるときの合図くらいしか聞いてない気がする。

「ばか」

「なんでだよ!?!」

うるさい。

「まあいい。とりあえず手出せ。手」

手?

よくわからないけど私は黙って両手を差し出す。

「片方ずつな。まず右でいっか」

「そっち、左手」

「オレから見て右なんだよ」

リユートは私の手を両手で掴み、おもむろに……指でギュッと押した。

「ひゃん!？」

「落ち着け」

落ち着いてるわよ!てか、何やってるんだ、コイツ!?

「運動になれてないんだろ?ちゃんと筋肉を解しておかないと後ですごく痛くなるぞ?」

……痛いのはちょっと嫌だ。

リユートは黙って私の左手を押し続ける。

マッサージみたいなものかな……ちょっと気持ちいい。

「リユート様、私にはそんな事やってくれた事ありませんのに……」
「やって欲しければやるけど、リズは身体能力からして必要ないだ
る……?」

そうですねどやって欲しいですわ。と続ける彼女に、後でな。と
笑うリユート。

……ちよっと気に食わない。後で燃やすか。

そんな物騒な事を考えながら四肢をリユートに預けていった。

……ちなみに背中は何となく恥ずかしいので断った。

「……いろいろ痛い」

「魔法使いがあんな激しく体を動かすからだ」

あれから数時間後。

私の体は激しい運動の反動に襲われていた。

今までも何度か軽い筋肉痛になった事はあるけど、今日の比ではない。

リユートがマッサージをしてくれたお陰で和らいでいるらしい……
今回ばかりは感謝しよう。

「私もリユート様に剣を習い始めた頃はよく動けないくらい体が軋んだものですわ」

多分、リズムも当時は笑い事じゃなかったんだろう。

……今の私みたいに。

「今日一日大人しくしてれば治るさ。部屋まで送ろうか？」
「いい。一人で行……痛っ！……お願い」

立とうと思ったけど予想以上に体がうまく動かない。

……悔しいけどちょっと頼らせて貰おう。

差し出されるリュートの手を取り……。

「つて、わ！？ばかつー！」

久しぶりのお姫様抱っこか！？

「暴れんな。体痛いんだろ？」

「うるさい！」

とか言っても痛いものは痛くて殴れない。

「あらあら。リュート様、後で私にもお願いしますわ」

「リズも勝手な事言わない！」

リズは、あらあら。と優しく微笑む。

あの子は憎みきれないなあ……。

私は自分の事を棚にあげてリュートが意外とモテる現実に納得いかないまま部屋まで運ばれていく。

「悪い。ドア開けてくれないか？」

「ん」

お姫様抱っこだと両手塞がるもんね。
それくらいなら今の私にもできるし。

「ふぁう……気持ち良い……」

ベッドに寝かされた途端、思わず声が漏れた。
相変わらず反則的な寝心地だ。

ベッド一つでどれくらいのお金が掛かっているのか想像したくもない。

でもお世話になりっぱなしって訳にもいかないよなあ。

まあ、それはまた後日考えよう。

「大丈夫か？」

「ん、横になつてると大分、楽」

「そっか。ちよつとごめん」

そう言つてリユートが手を私の額に当てる。

そこから少しずつ流れてくる魔力……。

治癒術ともまた違うけど柔らかい感覚。

「リユート……魔法使えたんだ」

「少しだけな」

戦つてる時にリユートが魔法を使った事はない。

恐らく本当に少しだけなんだろう。

「魔法つてよりは体の力を抜くおまじないに近い。まあ、少しだけ治るのが早くなるだろ」

確かに体がリラックスして行くのがわかる。

こんな魔法もいいな……。

今度教えて貰おう。

そう思いながら私の意識は微睡んでいった。

「リユート様。レーナ王女が……あら？余程、疲れたのですわね」
扉が開き顔を覗かせたリズがミナを見て楽しそうに笑う。

「リズは王国の一般騎士より強いだろうからな。それなのに、あそこまで頑張ったんだ。疲れもするだろ」

「リユート様に誉められると嬉しいですわ。隊長クラスにはなれたでしょうか？」

「んー、小隊長クラスかな」

期待していたらしくリズは大きく肩を落とす。

日夜、剣を降っている王国騎士を凌ぐというのは、それなりにすごい事なのだがリズは納得いかないようだ。

「まあ、いいですね。リユート様、レーナ王女がお呼びですわ」

「王女が来たのか？」

恐らくは謁見かカムイとの試合の話だろう。或いは、その両方が。

リユートとリズは階段を降りていく。

その途中、リズがぼつりと話し出した。

「ミナが羨ましいですわ」

「どうしたんだ？いきなり」

まったく訳がわかってないリユートをリズが呆れ顔で見つめる。

「リユート様は今まで一人で、ずっと頑張っていましたのに……今はミナに心を開いてますわ」

うつ……。と小さく声をあげてリユートが怯む。

ミナはリユートに助けられたと言っているが、リユートからしても魔獣の件以来ミナには何度も助けられているのだ。

短い旅ではあるがお互いが信頼を築くには十分だった。

「リユート様はわかりやすいですから。でも……」

普段、大人っぽいリズが小さな子供が悪戯をする時のような笑みを浮かべる。

「もう少し先まで私も精一杯、リユート様には甘えさせて貰いますわ」

「はは……お手柔らかに頼むよ」

リユートとしても嫌ではない為、断れない。

……が、ミナに怒られるか拗ねられるかするのが容易に想像できて喜ぶ事もできなかつたりしていた。

三十九話 1の実力とその後の……。 (後書き)

戦闘シーンを書くのが難しい事、難しい事。

一話から少しずつ加筆、修正してたりします。

ほとんど変わらないので読み返す価値はないと思いますが…… (笑)

誤字脱字その他、御指摘頂けると嬉しいです。

四十話 1000といる1の場合(前書き)

前話を更新した時に始めて一日のユニークが千件超えてました。

これだけの人に読んで頂いて本当に嬉しいです。

これからもどうぞよろしくお願いいたします。

四十話 100といる1の場合

「んー、疲れたっ」

「オレの台詞だ……」

昨日のレーナ王女の訪問は、やはり謁見の日時を知らせるものだった。

その後、動けないミナの部屋でみんなで食事をしたりしてレーナ王女も公爵家に泊まり、今日謁見をしたわけだ。

内容はただの折角、王都に帰還したんだから顔を見せろ。と言う挨拶……のハズだった。

ミナが変なことを口走らなければ……。

王室に入った瞬間、いつもより空気がぴりぴりしてるのはすぐにはわかった。

その時はまだ理由はわからなかったが、傾国の魔女がいるのが原因だとか。

多少の居心地の悪さを感じながらも王の前に片膝をつくミナもそれに習い片膝をついた瞬間、室内がざわめいた。

どうやらミナは、これまでに相当無礼な態度だったらしい。

だけど強大な力を持つ故に誰も咎められなかった。

その彼女がいきなり粗は多いが礼儀正しい態度を取ろうとした為、回りの貴族は驚いたようだ。

ここまでは問題ない。

問題はここからだ。

「ふむ……今日は随分とおしとやかだな、魔女よ」

と王が言い出したのだ。

前回までを知らないオレは咄嗟に意味が理解できず、知っている貴族達は、余計な波風を立てるな。と思い固まる。

唯一、発言したのは問われた彼女のみ。

「リユートを怒らせたくありませんから」

それからもう凄かった。

まるで王室の中だけお祭りの様に騒いでいた。

勇気ある貴族がミナに話しかけると彼女も笑顔で対応し、それを見て次から次にと話しかける貴族達。

中には息子と結婚してくれと言い出す貴族もいる始末。

ちなみにミナは丁重に断っていた。

普通なら注意する側の王でさえ肩の荷が降りたかのように安心した顔で笑っていた。

そして出た結論が……。

「傾国の魔女をよろしくね、リユート」

ミナが機嫌良さそうに微笑む。

結局、魔女の手綱を握っているのはオレだと判断されミナについての事は一任されたのだ。

「……面倒」

「なによ、その言い草」

ミナが少し拗ねて上目遣いで見てくるが可愛いだけで怖くはない。

「私が暴れたらリユートの責任になるのかしら？」

「頼むからやめてくれ」

なんて事を考えるんだ。

というか、ミナが暴れたら城が全壊するんじゃないか？

「リユート次第かなー。私、お腹減った」

脅す気が。

いや、内容は可愛いが。

ま、どっちにしる昼時か。

「港の方に行くか。城より北には行った事ないだろ？」
「北の方って……何があるの？」

王都の北は漁業が盛んで、行商人や冒険者で賑わう南門付近とは違い、酒場や市場など王都民向けの店が多い。

「それに港だからな。あそこの魚介類は中々の逸品だ」

「悪くないわね。連れてって貰える？」

「ああ、オレの馴染みの店にでも行くか」

ミナの手を取り歩き出す。

さて、港に行くには西門から出るのが一番近いか。

などと考えていると前から魔法使いの団体さんがこちらに歩いてきた。

……嫌な予感しかしない。

「随分と仲が良さそうですね、魔女」

「……何？アンタ達」

……いきなり一触即発な雰囲気だし。

やれやれ、面倒な事ってのは連鎖して起きる物なのかな。

「私は魔術師隊長アリエス。一年前……私が不在の間に随分、勝手な真似をしてくれたようですね、魔女」

「……いきなり連れてきたのはアンタ達でしょ？今更、蒸し返すつもりなんてないけど、喧嘩売ってるの？」

「はい、その通りです」

……いやいやいや、その通りじゃねーよ。

魔術師隊隊長ともなれば国でもトップクラスの魔法使いではあるだろう。

それでも真つ正面からミナに喧嘩を売るのは正気の沙汰とは思えない。

「……いいわ。買ってあげる。ごめんね、リユート。すぐ終わらせるから一緒に来てね？」

「え、あ……はい」

ミナさん、笑顔がなんかすごく怖いです。

そんな笑顔で言われたら素直に頷く以外、選択肢はない。

「話が早くて助かります。ここでは狭いですから場所を移しましょうか」

そう言うと魔術師達は奥へと歩いて行きミナもソレについていく。

「リユート、行くわよ」

……どうなるんだ、これ。

「ここなら多少、派手にやっても問題ないでしょう。一応、使用許可も取っております」

連れてこられた場所は魔法演習場。

高度な魔法結界も張り巡らされているので、魔法使い同士の戦いには便利な場所だろう。

問題があるとしたらミナの魔法を防ぎきれるか……という点だけだ。

あれ、駄目じゃね？

結界が壊れたら魔法の威力はそのまま貫通する。

下手したら、また城に大穴が空くんじゃなからうか。

「何でも良いけど……相手はここにいる全員？」

「貴女が手を出したのは国なのですよ、魔女」

演習場の中にはオレとミナを除いて六人。

恐らくは全員、名の知れた魔法使いのだろう。

まあ、本当に危なくなればオレが助けに入ればいいのか。

魔剣は魔法相手に絶対的な優位性を誇る。

相手が複数人で来てる以上、こちらが加勢しても文句は言わせないし、流石に向こうも、それくらい考えてるだろう。

ま……負けるハズないと思うけど。

「行くわよ、みんな！」

そうこうしてるうちに六人の魔法使いが戦闘体制に入る。

なるほど、確かに中々の魔力だ。

「冷気の精霊よ！全てを凍てつかせ、我が敵を……」

「うるさい、凍れ」

「なっ！？」

けれど、その程度ではミナに太刀打ちできない。

魔法使い達が一齐に氷の魔法を詠唱した次の瞬間、ミナは一言で六人を上回る氷の魔法を発動させた。

全員で同じ属性の魔法を使えばミナを越えれるとも思ったのだからうか？

魔法使い達の顔はそれぞれ驚愕に歪んでいる。

まあ、無理もない。

ミナはほとんど予備動作無しで演習場の全てを凍らせたのだから……てか、オレの靴まで凍りついて床に張り付いてるんですけど。

よく見るとそれは魔法使い達も同じで全員その場から動けずにいる。

「くっ……！怯むな！！氷の魔法が得意な相手には炎で応戦するんだ！」

うん、セオリー通りの良い手だ。

ただミナは別に氷魔法が得意って訳じゃない。

「紅蓮の炎よ！道を阻む全てを焼き尽くせ！」

「へえ。上級魔法とはやるじゃない」

それぞれ別の方向から炎の上級魔法チェインフレイムがミナに襲いかかる。

いける！！

魔法使い達は全員そう思った。

氷の魔法では咄嗟に炎に対抗できず、六方向から迫る炎に回避する術はない。

しかしミナの魔法は彼女達の予想よりも遙か高みにあった。

「風よ、跳ね返せ」

短くそう呟いた瞬間、ミナを中心に風が荒れ狂い炎を全て術者に向けて押し流す。

「……バカな」

自らに向かって押し流される炎を目の当たりにして隊長だけが、そう呟いた。

「で、まだやるの？」

靴が凍りついて地面から離れず、炎を浴びて風に転ばされた魔法使い達をミナが見下ろす。

誰が見ても実力差は明らかだろう。

……それでも戦意を失わない魔法使い達は無謀なのか勇敢なのか。

「私達の国を愚弄した罪は払って貰うわ」

隊長は地面から離れない靴を脱ぎ素足で立つ。

演習場全部凍ってるのに冷たくないのか……。

氷の床に立つ彼女はリユートから見ても痛々しい。

因みにリユートも動けないままな上に炎の余波を浴びてたりする。

ま、ミナはあれでいて優しいから火傷した所でも見せれば貴重な素直なミナが見れるだろうから良しとする。

さて、それよりどう決着をつける気だ？

魔術師達は全員覚悟を決めた目をしてる。

殺されようが和解はするつもりはない。と言っているかのようなのだ。

「もう私とリユートに構わないなら、これで終わりにする」

「人の国の城を壊して都合がいいですね」

「……わかったわ」

ミナが冷たく呟いた。

ああ、これは彼女、キレたな。

「アンタ、言ったわよね？私が手を出したのは国だって。なら、私に喧嘩を売ってきたのは国の魔術師よね？」

「……？魔女、何を言ってる……」

ミナが両手を前に出して魔法を使い始める。
かざした手の先に現れたのは真つ黒な闇。

ミナは普段、その場の思いつきで魔法を使う。だから同じ様な魔法でも細部が変わっていたりする。

……けど、この魔法はどこかで見たことがある。

小さな闇は光が凝縮されて見えないからだ。

その魔法は膨大な光となり、地平の彼方まで焼き尽くす。

つて、オレの家が魔獣に襲われた時に使った魔法じゃないか！？

視認外の魔獣の指揮を取っていたであろう何者かを一瞬で焼き払った魔法。

違う点があるとするなら、前はビー玉程度の大きさだった闇が、今回は人の頭くらいの大きさがあるって事くらいだ。

「待て、ミナ！それはシャレにならない！」

慌てるオレに彼女は綺麗な笑顔を向けてくれた。

「大丈夫よ、リユート。また城に穴が空くくらいだから」

……何を基準に大丈夫って言ってるんですか、貴女は。

「レーザー・カノン」

とても懐かしいフレーズと共に闇は暴虐な光となり天を貫いた。

そう貫いたのは天……すなわち上だ。

ミナは以前、地平の彼方を狙った光を今度は上に向けて打ったのだ。

ただし……前は数秒で終わった照射が今回はまだ続いている。

それはまるで数十kmの長さを持つ光の剣のようだ。

「魔法使い、アンタが国として私に喧嘩を売るって言うなら私はこの魔法を向こうに降り下ろすわ」

ミナは一点を指し示す。

その先にあるのは演習場の壁だが、さらに向こうに何かあるのかに気づき魔法使い達は顔を青ざめる。

「魔法棟……!?!」

そこは魔法使い達の寮であり研究室だ。

ここからはかなりの距離があるがミナのレーザー・カノンで薙ぎ払われれば跡形も無く消えるだろう。

「私達以外は関係ない! 他を巻き込むな!」

「最初に国を持ち出したのは、そっち。私は本来、国に不利益を起

「こすつもりはないのに……ね」

「思いつきり天井に穴空けてるじゃないか」

「うるさい、これは別」

何が別なんだろう。

オレのツツコミを無視してミナは魔法使いに話しかける。

「アンタ達がまだ国として私とリユートに害を成すなら私はこれを降り下ろすわ」

魔法使い達は悔しそうな表情を浮かべる……が、何もしてない同士を巻き込む訳にもいかないようだ。
魔法隊長がゆっくりと口を開く。

「わかった……。今後一切、手は出さない。……けど、謝りもしないわよ」

「うん、わかってる。こっちにも事情があったとは言え、お城を壊したのは事実だもの。ありがと」

魔法使いはバツが悪そうに顔を背ける。

ミナとて本当に魔法棟を消し去るつもりなんてなかった。
やがて光の剣の照射はゆっくりと収まっていく。

「三十秒くらいか……燃費悪いなあ」

「……あんな街の外から王城を直接消滅させれそんな魔法に燃費も何もないだろ」

使えるってだけで、戦争時の切札になりうる。

「傾国の魔女……まさか本当に国を滅ぼす程の力を持っているとは……一年前とは大違いです」

……ああ、そつか。

一年前のミナは知らないけど、魔法使い達は一年前のミナを基準にして動いていたのか。

その頃の彼女になら勝てたのかもな。

そんな魔法使いに彼女は微笑む。

「大丈夫よ。リユートが望まない限りそんな事はしないから」

……いや、オレが望んだらするのかよ。

「お待たせ、リユート。ご飯食べに行こ？」

色々面倒くさい事も起きるけど……。

そう言ってきた彼女の少し寂しそうな顔を見ると、傍にいてやりたくなる当たり、オレは負けてるんだろっなあ。

「はいはい。少し遅くなっただし丁度空いてる時間だろ」

オレ達は港の方へと歩き出す。

「って、リユート火傷したの！？……ごめんなさい。でも、魔剣召還してれば私の魔法無効化できるよ……？」

……そういえばそうだった。

四十話 100といる1の場合（後書き）

ヒロインがどうみても悪役っぽいですね（涙）

始めてミナのチートクラスの魔法が出てきた回かと思います。

あまり戦闘重視の無双物ではないのでミナが本気を出す機会は少な
さそうです（笑）

四十一話 100のお勧めする酒場にて（前書き）

長らく更新に間が空きましたorz

これに慣れて更新が滞る事ないように注意いたします…。

それでは四十一話になります。

四十一話 100のお勧めする酒場にて

「こんばんわ、お姉さん」

「あら、リユートじゃないか！久しぶりだね！そっちの娘は彼女かい？」

行きつけの酒場のドアを開きカウンター席に座る。

テーブルの方が良かったんだが、今日はいつもより混んでいた為、二人で座るのは申し訳ない。

「今、一緒に旅してるんだよ。ミナ、この人はソフィアお姉さん。ここの酒場の看板女優さ」

ちなみにお姉さんと呼ばないと怒る。

会計に響くので客は素直に従うしかない。

ギリギリお姉さんと呼べる程度の歳なので間違っても看板娘だなんて言わないけど。

「私は彼女でもいいんだけど。……こほん、ミナです。よろしくお願ひします、ソフィアさん」

「あらあら！リユートは相変わらずモテるわねー。私の事はお姉さんって呼んでね、ミナちゃん！」

はい、ソフィア姉さん。と返事をするミナ。

よしよし、ここの会計はソフィアさんをどれだけ若く扱うかに掛かっている。いいぞ、ミナ。

ミナの発言に不穏な部分があった気もするけど気にしないようにす

る。

「それで、今日はどうするんだい？」

「予算は気にしないでいいからお勧めと良いネタがあればそれを。彼女にこの美味しい物を食べさせてやりたい」

「あら、太っ腹。いいわ、期待に添えるよう旦那に張り切ってもらわうわ」

ソフィアさんは飲み物にシャルのジュースだけ置いて奥へと消えていく。

ちなみに旦那さんが厨房で料理の担当をしている。

この混み具合だと料理が来るのにも少し時間がかかるだろう。

ま、一騒動あった後だし、ミナとゆっくりするには丁度良い時間だ。

「ね、リユート」

ミナがオレの名前を予備ながらふとももに手を置いてくる。

……ミナの力があれば多少腕が良い程度の魔法使いなんて敵じゃない。でも……人に嫌われるのは精神的にキツイ。彼女も甘える対象が欲しいのだろう。

ミナは少し潤んだ目で見上げて口を開く。

「やっぱり……モテるんだ？」

……え、そこ？

ミナはふとももに置いた手の人差し指と親指にだけ力を入れ……
…って、痛い！痛い！つねるな！！

ふとももに手を置かれた理由を勝手に妄想したのが非常に恥ずかしかった。

「わっ……すごい！」

運ばれてきた料理を見てミナが歓声をあげる。

正直に言うとオレも驚いた。

普段、ふらりと食事に来た時とは出された物が違いすぎる。
貴族御用達の店にも匹敵するんじゃないか、これ。

「ね、リユート。食べていい？」

ミナが期待に満ちた目を向けてくる。

どっちらさつきまでのご機嫌斜めはどこかに消し飛んだようだ。

「ああ、食べようか」

「うん、頂きます！」

ミナが両手を合わせながら言っただけでフォークを取る。なんでも元の世界での作法だそうだ。

そのままムニエルにフォークを刺して口に運ぶ。

「……………」

沈黙。

口に合わなかったか？と一瞬思ったけれど、またフォークをムニエルに刺して口に入れ……を繰り返す。

オレも適当に摘まみながらミナが止まるのを待っていると彼女は結局一皿を無言で完食した。

「私……こんなに美味しい料理、初めて食べた」

「そこまでか!？」

リユートにとつても非常に美味な品々だが、ミナはそれ以上の感銘を受けていた。

そもそも仕送りとアルバイトで必死に暮らしていたミナには金銭的にも時間的にも外食なんてして余裕はなかった。

彼女にとって一番美味しい物とは練習に練習を重ねた自分の手料理で自分より料理が上手な人との出会い等、皆無だったのである。

「あはは！ミナちゃんみたいなお可愛い娘に誉められるなら旦那も喜ぶよー!」

いつの間にかカウンターに戻ってきたソフィアお姉さんがミナに話しかける。

「あの、ありがとうございます。こんな美味しいもの……ホントに「お礼ならリユートに言うんだね。今回の料理はどれもそれなりの値段だからねえ。旦那も良い素材を存分に使えて楽しそうだよ!」

ミナが喜んでくれたから問題はないが会計は覚悟を決めておいた方が良さそうだ。

「それにしても今日はすごく混んでますね」

「ああ、明日からお祭りだろう?みんな待ちきれずに騒ぎにきたのさ」

「お祭り……あるんですか?」

そう聞くと何故かソフィアお姉さんはすごく驚いて目を丸くした。

「リユートが知らないってどういう事だい?ちょっと待ってな!」

そして少し離れた席で騒いでる連中にビラを一枚貰って戻ってきた。

これだよ!とパンツと置かれたチラシを手に取ってみるとミナも横から覗きこんできた。

「王都武道祭、急遽開催……?へえ、いきなりですけど、面白そうですね」

なるほど。

血の気が多い奴なんかは抑えきれずに前日の今日から騒ぐ訳だ。

「いいから、全部読みなさいって」
「……？」

ソフィアさんに言われ視点を下へと流して行く。

祭りは三日間にかけて行われて王城の中庭まで一般開放され、そこで行われるらしい。

出店なんかも出てさぞかし盛り上がるだろう。

変わった所と言えば普通こついつた大会はトーナメントかリーグ戦なのだが、今回は最初から相手が決まっているマッチ式らしい。

ようは決まった相手一人に勝てばいいのだ。

まあ、マッチ式なら確かに国が対戦相手を決める訳だから一方的な戦いになりにくいし盛り上がるか。

事前に全ての対戦カードがわかっている分、どちらが勝つかといった賭けもやりやすいだろう。

下に羅列してある対戦カードを見ていくと中々の大物もいる。

お、旧鉱山で一緒になったエンブスさんじゃないか。

対戦相手は知らない人だが、あの人の戦いを見るのは面白そうだ。

有名ギルドの冒険者や名高い傭兵までいるあたり国は今回の祭りに相当力を入れているらしい。

これは最後のメインカードの人は責任重大だろうなあ……。

一番盛り上がる最終試合が一方的な展開では興奮めも良いところだろ

う。負ける側も善戦くらいはする必要がある。

オレは軽い気持ちでシャルの実ジュースを口に含み最終カードを試みた。

聖者カムイ VS 剣王フェトム

「ぶっ!?!」

「ちよつと、汚いわよ」

余りに予想外の事態に盛大に吹き出してしまった。ジュースなんか飲みながら見るんじゃなかった。

「す、すいません」

「まあ、酒場だし慣れてるけどねえ」

あー、そりゃ吐く奴とかも多いただろうしな。

ソフィアさんはサッと手早くテーブルを綺麗にしてくれる。

ちなみに隣の黒髪はというと……。

「……ぷっ、くくく……あは……ケホッ！……くく……」

とかむせるほどの爆笑を我慢している。

なんだ、そこまで面白かったか。

確かに当事者でなければオレも笑いたい。

「リユート……本当に知らなかったのかい？」

「いえ、戦う事は知っていたんですけど……」

まさか盛大な祭りになってるとは予想すらしていなかった。

日付を見てみると確かにカムイさんとの試合予定だった三日後が最終日だ。

ちなみに発行日を見てみると二日前。

試合が決まってからたった二日間で、あれだけの猛者を集めてチラシを撒いたってのか？

ありえないだろ……。

今までは余り意識はしていなかったけど、国の権力ってやっぱりすごいんだなぁと頭の片隅で考える。

別に不都合は無いけど物凄く面倒だ。

「ま、良いじゃない。やる事は同じなんだし……ん、美味し」

目の前の魔女は笑いを堪えるのから回復して料理を楽しそうに食べている。

「はあ……確かにそうか。難しい事考えても仕方ないか」
「うんうん、それにこんなに美味しい料理を前にして余計な事を考えるのは勿体無いよ」

ああ、確かにそうだ。

こんなにも楽しそうにしてるミナを前に余計な事を考えるのは勿体無い。

どうせオレがやる事はカムイさんと全力で戦うだけだ。

「よし、気を取り直して食べるか」

「私、一人じゃこんなに食べれないから頑張つてよ?」

テーブルの上にはまだまだ頼んだ量の半分くらいの料理が残っている。

ちょっと頼み過ぎた気がしないでもないが、これくらいなら食べれるだろう。

「ミナ、ありがとな」

「どづいたしまして」

ああ、今日の彼女は良く笑ってくれる。

酒場で過ごす夜はとても早く時間が過ぎていった。

「ごちそうさまです。ソフィアお姉さん」
「あいよ。王都を出る前にまた一度くらいは来るんだよ、その子も一緒にね」

酒場を出ると潮の香りの風が頬を撫でる。

お祭り騒ぎで熱気に包まれた場所から出てきたばかりで、心地よく涼しい。

「んー、お腹いっぱい。幸せ」

「はは、ミナが幸せとか言うのも珍しいな」

何気なく返した言葉だったがミナは少し真剣な表情を浮かべる。

「そうかも。ていうか、初めてかな」

「えーと、ごめん」

「あはは、大丈夫。リュートのお陰よ、謝らないで？」

思い出したくない事に触れてしまったかと思っただけど、ミナは上機嫌のままだ。

心の中で安堵していると彼女は腕に抱きついて来た。

「おっと……今日は大胆だな」

「んー、酔った勢い、かな」

何に酔ったんだ。

「あれ、シャルの実のカクテル？美味しかったなあ」

いや、あれはシャルの実の果汁を天然水で割ったジュースだ。

「お酒って初めて飲んだけど体ぽかぽかして気持ち良いね」

体が暖まってるのは料理に入ってた魔香草のせいだと思うが……なるほど、大体わかった。

酒場で出されたからお酒だと勘違いして、飲んだ事がないから、そのままお酒だと思い込んでるのか。

「酔ってなきやこんな事できないもの」

ミナはオレの腕を力入れて抱きしめ。

いや、間違いなく酔ってないんだけどな、ミナ。

なんていう無粋な言葉は心の中にしまっておこう。

こんなに甘えてくれるミナを自分から手放す気なんてないっ！

「じゃ、掴まっていいから足元気をつけるよ？」

「うん。帰ろ、リユート」

暗い夜道、僅かに照らす民家の光を頼りに歩くとミナが口を開く。

「リユート、あのバカとの試合が終わったら……行くの？」

「バカって……まあ、そうだな。そうしようと思う」

手持ちの資金に不安はあるけど、そんな長々放って置く訳にも行くまい。

「まずは、クレアに会いに行く。他の家族の手掛かりもあるかもしれないしな」

それにクレアは家を持っているから簡単に会えるだろう。

「クレアさん、リユートが知らない女の子連れてきたら驚くんじやない？」

「知らない女の子……？つて、ああ」

確かに今のミナはクレアからしたら知らない女の子同然か。クレアの知ってる彼女は怪我をしてる頃のミナだ。

「今更、置いて行くなんて言わないでよ？」

ミナがジト目で見上げる。

さっきまではあんなに機嫌良さそうだったのに感情豊かな子だ。

「言わないよ。ていうか……」

女の子相手に言うのは少し恥ずかしいけど……オレも意思表示をするべきだろう。

「ミナに一緒に来て欲しい」

オレがそう言うとミナは驚いて顔を赤くした後、直ぐに……。

「うん！」

笑顔で頷いてくれた。

四十一話 100のお勧めする酒場にて（後書き）

さて、もう少しで王都での生活も終わりミナとリユートは行動範囲を大きく広げ世界へと旅立ちます。

一応ながらも、この小説にもプロットはありましてエンディングまでの大まかな流れはすでにできているのですが……ここまで書いていると作者の頭の中で勝手にミナとリユートが動いて、新しい話も出来てきたりします。

最近、この全く本編には関係ないミナとリユートの冒険譚を書くかストーリーに関係ある部分のみを書くか少し迷っております。

良ければ、いつも読んで下さってる読者様方のご意見も聞かせて頂けると嬉しいです。

四十二話 100とお祭り

「お祭りに行きたいです」

リズと公爵と朝食を食べていたら、今起きたのか階段を下りてきたミナがバンツ！と机を叩きながら進言して来た。

「お祭り……？」

「今日から王都武道祭……？なんでしょ？」

……ああ。

試合時に入る観客の多さくらいしか意識してなかったけど、確かに普通に遊べるような祭りだ。

しかも昨日のピラをみる限り中々の規模だ。

「で、遊びに行きたいと」

ミナがこくと頷く。

今日はやる事もない。

特に断る理由もなければ、近いうちに市場の情勢を見ようと思ってたくらいだから出かけるのは丁度いいか。

「いいよ。出店も沢山出てるハズだし……少し腹を空かせて昼過ぎにでも行こうか」

朝食はもう食べてしまったし、せっかく食べ物の露店も沢山出てるだろうから、それなら昼食もそっちで済ませたほうが楽しめるだろ

う。

「んー、わかった」

渋々といった様子で頷くミナ。

早く行きたいけど理屈として時間がたってから行ったほうが良いのはわかってるみたいだ。

「ハツハツハ。こんな早く行っても開いてる店も少ないだろう。ほら、ミナも朝食にはどうかね？」

「そうですね……よね。ありがとうございます、公爵。私も一緒にさせて貰って良いですか？」

「勿論だ」

結局、ミナも大人しく皆と同じ朝食を少し遅れて食べる事になった。

すでに夏は終わりに近づきつつある。
日差しはまだ暖かいが風が吹くと肌寒く、ずっと立っているのは少しキツイ。
時間はすでに昼を大きく回っている。

「ミナ……遅いなあ……」

すでに待ち始めて1時間は過ぎている。
オレも早めに来たし明確な待ち合わせ時間を約束していなかったとは言え明らかに遅い。

「つか、どうせ公爵の家から出るのになんで外で待ち合わせる必要があるんだ？」

朝食を食べ終わりゆっくりと準備をしていたらミナが部屋に来て外で待ち合わせたいと言い出した。

一応、理由は聞いたけど、さっさと行けと追い出され軽く外を回ってから待ち合わせ場所に来てみたが、待ちぼうけなのが現状だ。

すぐ近くに噴水があり、イスもあるけど今更ここを動く気もない。
無意味な意地だ。

「じめん……！リユート……待った……よね？」

後ろから少し申し訳なさそうな声が聞こえる。
ま、別に待つのは慣れてる。怒ってはいないけど一応は……っ
と。

「まったく……ミナ、遅い……ぞ……」

少くらいお小言を……と思ったけど振り向いた瞬間言葉が紡げなくなる。

「ごめんね、リュート……。せっかくお昼まで時間があるから、女の子らしい格好しようと思ったらすごく時間がかっちゃって……」

いつもの流れるようなストレートではなくアップに纏めた髪。

普段から来てる制服ではなくてワンピースのような服だが一枚布のようだ。腰の辺りを帯で縛っている。

「えつとね、私の世界で浴衣って言って、丁度いい生地があったから無理矢理それっぽいのを作ってみたんだけど、思ってたより時間かかって……。遅れてるのはわかってたんだけど、どうしてもリュートに見て欲しくて……。えつと、だから、その……ごめんなさい」

怯えたような申し訳なさそうな顔で謝る彼女。

……。やれやれ。ミナにそんな顔はして欲しくない。元々、少し注意を促すだけのつもりだったけど、こんな顔されちゃ何も言えないじゃないか。

ポンと彼女の頭に手を乗せるとミナはビクッと体を震わせる。

「可愛いよ、ミナ。そんな顔してないで、さっさと遊びに行こう」
そう言って手を差し出す。

ミナは最初は少し驚いていたけど、すぐに柔らかい笑みを浮かべてくれた。

「うん……！」

「ていうか、よくこんな短時間で作れたね。その服」

真昼間っから手を繋いで二人で歩く。

多少、周りの視線を感じる気もするけど気にしない事にする。

「んつと、浴衣？」

ミナは結局、遅れはしたものの、たった数時間で今着てる服を作り上げたらしい。

どう考えても間に合う時間じゃない。

「ちょっと魔法を使ってみたのよ。多分、そんな長く持たないから明日にはバラバラの布切れになってるわ」

「……魔法ってそんな万能な物じゃないと思っただけど」

「ただの先入観じゃない？」

……少なくとも人が魔法を使い始めて何百年とたっている。
その中で培われた知識を先入観と切り捨てて良い物が……。

「まったく……でたらめすぎる」

「何か文句ありますか？」

「痛い痛い、身体強化して人の手を思い切り握るな！」

まったく……厄介な魔法を覚えやがって……。

「言つとくけど喧嘩しに来たわけじゃないから」

「わかつてるさ、それくらい」

ま、これくらい軽いじゃれ合いだろ。

……たまに本気で痛いけど。

「試合は明後日だしな。終わればまた旅に出る。ゆっくり楽しもうか」

「ん。ねえ、お昼どうするの?」

「露店が沢山出てるから適当に何か買おうかと思ってたけど、それでいいか?」

「いいけど……何かあるのかさっぱりわかんないんだけど」

それもそうか。

最近、少しなじんでるからミナが異世界出身だと言つ事を忘れかける。

「適当に回りながら選ぶか」

「美味しい……！」

言ったら殴られるから黙ってるけど、やっぱりいつも何かを食べてる気がする。

いや、まあ、食べる量はそつでもないんだけど。

「これ、何？」

「王都は北が港だろ？そこで取れた魚をすり身にして焼いただけの料理さ」

「あら、随分と簡単なのね」

「ソイツは骨がないから時間も掛からない上に味もいいから祭りみたいな数を容易するトコじゃよく見かけるよ」

「……骨がないって……どうやって泳いでるのよ」

「や、魔法で」

ミナが一瞬、何か変な物を見たような顔でオレを見る。

「変な魚」

「いや、魔法での移動はミナの魔法よりは一般的だと思うんだけど」

「なんか納得いかないなあ……て、リユート！これ見て！」

いつもより少し子供っぽくはしゃぐミナを追いかける。

パーティーの夜は少し大人っぽく見えたと思えば今日は本当に小さな子供みたいだ。

促されて露店をのぞいてみるとそこには小さな人形が幾つも並んでいた。

「ほら、これ！」

そう言つて差し出す人形を見てみると思わず溜息が漏れる。

「……なんだ、これ」

灰色の髪に剣を持った男の人形。
着てる服にまで何か見覚えがある。

「どうみても、リユートじゃない」

ですよ。

ていうか、なんでこんなもの売ってるんですか。

「あはは、可愛い。すいませーん、これください!」

「買うのかよ!？」

流石と言うべきか行動が早い。

店主もにこにここと対応してるし。

「おお、勇者リユートさんもいるじゃないか!？お嬢ちゃん……その黒髪もしかして魔女かい？」

「あ、えつと……はい、一応」

流石に勇者の人形なんて売ってるだけある。

ミナは今日髪を纏めているせいで気づかる事はなかったけど、店主は髪の色で気づいたようだ。

まあ、隣にオレもいるしな。

気づかれたミナは少し戸惑っている……かな？王城で喧嘩売られた後だから無理もない。

ていうか、何気にこういう場で気づかれたのって初めてじゃないか？

まあ、問題ないだろう。
基本的に、この世界の人達は勇者大好きだ。最近までそんな自覚なかったけどな。

「はっはっは！なんだよ、魔女と剣王が良い仲つてのは本当だったのかい？お買い上げありがとな。ほら、おまけにコレもつけてやる」
「んと…あ、はい！ありがとうございます！これは……あ」

ミナが店主から受け取った物。それは別の人形だった。

ていうか、おいおい……。

長い髪に緑のローブ。

それ以外に資料はなかったのか、オレの人形よりは明らかに似てない。

けど、それは明らかにミナを模した人形だった。

「あ、可愛い……」

「まさか勇者本人が買いに来てくれるなんて思わなかったぜ。こりゃあお嬢ちゃんの人形は作り直さなきゃなあ」

「あ、いえ。この子、すごく可愛いです！」

「自分を可愛いって言うてるように聞こえるよ、ミナ」
「な、違っ!？」

ちなみに、この後しっかり蹴られた。

沢山ありすぎる店を回りきる事なんてできない。
けど、どの店も楽しくてついつい眺めてしまう。
勇者として召還されていなかったら多分オレも店を出すほうに回っ
ていたに違いない。

いつのまにかすっかり日もくれて夕食は公爵の家で食べる約束をし
てある為、すでに帰っている途中だ。

「ふう、久しぶりにいっぱい遊んだなあ」

「リユートと一日中遊んでたのって初めてかもね」

確かに今まではちょっと忙しすぎた。

そして公爵の家に泊まってからはのんびりしすぎた気がする。

「いろんなトコを回るんだ。これからも機会は沢山あるぞ」

「そう？それなら嬉しいけど」

明後日からはまた忙しくなるだろうなあ。

「ねえ、リユート。試合だけぞな……」

「んー？一応は勝つつもりでやるよ」

「そうじゃなくって……どこまで見せるの？」

あー……そつちか。

別にオレ達は国の為に動くつもりはさらさらない。

だから、自分たちの力を見せる必要もない。ていうか、なるべくなら隠しておきたい。

特に魔剣は初代勇者パーティーと同じ能力だからばれたらまた面倒くさい事になりそうだ。

「全力でやる。ただし、魔剣は使わない」

「……妥当な所かな。あの馬鹿勇者は魔法使つてこないから魔剣で無効化するものもないしね」

カムイさんの能力、聖殿の盾は守備の能力。

理不尽な攻撃力を持つ能力以外なら剣である程度はどうにかなるはずだ。

ていうか、あの人、あんなに自分の能力の事喋り捲ってていいのかと心配になる。

「ま、明日は体を休めて明後日思いつきり暴れてくるさ」

「勝ったからって王女の婚約者になったりしたら燃やすけど？」

……そういえばそんな話もあったな。

四十三話 100と3(前書き)

さて、いよいよユートとカムの試合です。
切り所がわからず随分長くなりましたorz

誤字脱字指摘、感想お待ちしております。

王都武道際最終日……残す試合も僅か数戦となった会場を歓声が包む。

「いや、人入りすぎだろ、これ」

城の中庭まで開放するって話は聞いてたけど、観客はそれだけでは納まり切らず急遽、城内部の中庭を見渡せる場所のほとんどを開放し人を押し込んでいる。

オレとカムイさんの試合まで後数十分くらいだろう。控え室で準備をすませ外を見てみたが、明らかにオレが会場に来た時より人は増えてる。

「……最終試合までもっと増えるのかなあ」

オレは冒険者ではなくて商人だから名声とかあまり興味ないし目立ちたくないんだけど。

まあ、手遅れか。

ちなみにミナは観客席にいる。王女の計らいで良い席をとってもらったらしい。

「ミナがどこにいるかわかれば少しはやる気もできるかな。さて、そろそろ行くか」

勇者同士の戦いなんて歴史にあったのかなあ。

「お待たせしました！！この大会は次の試合の為に開かれる事になったといつても過言ではないでしょう！！いよいよ勇者と勇者の異例の決闘！今大会最後のカード、勇者カムイ対勇者フェトムです！！」

- - わああああああああああああああ！！

盛大に盛り上がる会場。

まだリングにあがってすらいないのにちよつと耳が痛い。

「リユート殿！今日は良い勝負になるといいな」

すでに先にリングにあがっているカムイさんが笑いかけてくる。
ミナ曰く馬鹿らしいけど、性格自体は良い人だと思う。

「お手やわらかにお願いします」

「そうはいかん。全力だ」

リングに上がり差し出された手を握り返すとそう言って笑われてしまった。

「準備はいいですか？二人とも」

「ああ、いつでも大丈夫だ」

「こっちも大丈夫です」

さっきまであんなに騒がしかった会場が今は静まっている。

どうせ、またすぐ騒がしくなるんだらうけどな。

『では、リユート様、カムイ様。これより、最終試合を開始します。が、その前に簡単なルールの確認を。武器はご持参して貰っていますが真剣の使用は禁止です。必ず刃を潰してください。大丈夫ですね？リング外への相手への攻撃は禁止です。相手が戻ってくるのを待ってください。20秒以内に戻れない場合敗北となります』

「大丈夫大丈夫、さっさと始めよう」

魔法で声を拡大してるあたりオレたちへの説明ってか観客への説明だらうな。

今回の試合は全ての試合が同じルールではないみたいだし、確認だろう。

てか、カムイさん、そんなに早く戦いたいか。

『ははは、すいません。それではカムイ様、リユート様。行きますよ？……最終試合……始め！』

試合開始の合図が響く。

そして数秒も経たない間に高く鋭い音が会場に鳴り響いた。

「うお……つと！？やる気、まんまんだな、リユート殿」

「正直、これで決まるとは思ってたんですけどね」

開始の合図と共に斬りかかったのはオレ。

決まるとは思えなかったけど決まればいいなと希望を込めて斬りかかったがあっさりと剣で防がれてしまった。

やれやれ、すぐ終わらせれば情報も隠せるし楽だし一石二鳥だったんだけどな。

カムイさん、多分強いし……。

「さて、リユート殿。不覚にも先制は奪われてしまったから次はこちらから……と言いたい所だが、できればもう一度斬りかかって来て欲しいのだが」

「……は？」

何を言ってるんだ、この人。

そりゃそのうち嫌でも斬りかかるけど来いと言われて行く馬鹿はない。

なんか、ミナや他の人がこの人を馬鹿呼ばわりしてる理由が少しだけわかった気がする。

「いや、何、このままでは不公平だろう？リユート殿の能力は卓越した剣技と聞いた。しかしリユート殿は俺の能力を知らない。俺の能力は防御系だからリユート殿の協力が必要なんだ」

少しわかったどころか今はっきりとわかった。この人、まっすぐな馬鹿だ。

「えーと……普通に斬りかかればいいんですね？」

……乗るオレも馬鹿か。
しかし、能力を知っておくのは悪い事ではない。

「おお、感謝する！」

なんで感謝されなきゃいけないんだ。

ま、あの人なら騙してカウンター決めに来るって事もないだろう……。

これまでの言動が全て演技でオレを騙す為にやってたならオレはこの人を尊敬する。

「えっと、んじゃ、行きますよ……？」

「おう！！」

本当に斬っていいんだろうか。なんか調子が狂う。

とりあえず適当に上から剣を思いっきり振り下ろす。

「聖殿の盾！！！」

技名叫ぶの！？

しかし、その聖殿の盾とやらはオレの当初の予想を簡単に覆す程に優秀だった。

金属と金属がぶつかりあう様な甲高い音と共に見えない壁にオレの剣は阻まれる。

「な！？」

カムイさんが使っているのは左手一本。いや、ここまでではミナから聞いていた通りだ。

驚いたのはまるで壁を思いっきり殴ったかのような、その手ごたえ。

攻撃が……まったく通ってない……！？

その事に気づくと同時に慌ててバックステップで距離を取る。

「ははは、驚いたか？リユート殿。これが俺の能力、聖殿の盾。見
といてよかっただろう？」

カムイさんは朗らかに笑っている。

が、こつちとしては笑い事ではない。本当に見ておいてよかった。

最初、オレはカムイさんの能力を見えない盾のような物だと思っ
ていたが甘かった。

アレはミナの魔剣と同じ……ミナの魔剣がその重量を無視するよう
に、カムイさんの能力は敵の攻撃を完全に無視する。

恐らくは左手を前に突き出し、そこに来た攻撃は全て止まる。

盾なんて生易しいものじゃない。まるで壁だ。

相手は何も感じずこちらだけが一方的に体制を崩す。近接戦闘に置
いては防ぐだけで有利になる壁。

盾ならば弾いたりもできるが壁を壊す事は不可能だ。

さて……どうしようかな、これ。

魔法を使えない純粋な剣士であるオレにとっては最悪の相性って言
ってもいい。

「諦めるか？リユート殿」

「冗談……!!」

ははは、柄にもなく……熱くなってきた！

「うむ、リユート殿は思った通りの武人。次は俺からも行くぞ！」

眼前の敵が剣……いや、彼の武器は刀と言っらしい。

それを振り上げた……と思った次の瞬間、降り下ろされた刃が目の前に来る。

早い！？

冷たい感触が頬を掠める。

ほんの一瞬反応が遅ければ今頃は意識を刈り取られていただろう。

「はは、流石リユート殿。初見で俺の刀を避けるとは！しかし、まだまだ行くぞ!!」

「……っ!？」

なんだ、この人の剣技は！？予備動作が……短すぎる!!

剣とは力ずくで敵を叩き斬るもの。

しかし、カムイさんの技はそんな理屈を無視するかのよう軽く、早い。

これが刀……オレの剣技じゃ対応できないな。

避けて一撃を擦じ込もうにも、その前に次の攻撃が襲いかかる上に、それすら避けて斬っても片手で受け止められる。まったくもって勝ち目がない。

仕方ない……久しぶりにアレを使うか。

襲いかかる連撃の中、深呼吸をして頭のスイッチを切り替え、今まで避け続けてた刀を剣で受け止める。

「流石に避けきれなくなってきたか!!」

カムイさんが得意気に笑うが残念ながらはずれだ。

ただ……魔獣相手の戦い方から人間相手の戦い方に切り替えただけの話。

それにまったく気づかないのは好都合と言う他ない。

「さて、反撃開始と行きますか」

「出来るものなら……うおっ!？」

聞こえないように呟いたつもりだったけど、カムイさんにも聞こえたみたいだ。

せめて警戒すれば良いものを実直に斬りかかってくる。

そして、それを見逃す程、オレはお人好しではない。

カムイさんの刀を受け止め、そのまま全ての力を後ろに流す。

結果、向こうは完全にバランスを崩して、こちらは懐に入った。

近すぎて、できる攻撃も限られるが、これならカムイさんの左手も間に合わない!

剣を持ったままの右腕の肘をカムイさんの顔面に当て、よろけた所に後ろ回し蹴りを放つがガンツ！！とまるで巨大な岩を蹴ったような感触が帰ってきた。

痛っ……聖殿の盾かぁ。

どうやら肘打ちの後、咄嗟に左手を前に出したらしい。まったく厄介な能力だ。

カムイさんは鼻を抑えながら刀を構え直す。

「痛たた……なんだ、その剣技……いや、知っているぞ。その動き……王宮剣術か！」

お、バレた。

そういえば、この人、こっちの世界に来て近衛騎士に負けたんだっけ。なら、王宮剣術を知っていても不思議じゃない。

……一年も前の事をまだ覚えてるのはすごいと思うけど。よほど悔しかったんだろうか。

「一応、騎士の家系に生まれたので……小さな頃から父に王宮剣術を仕込まれてたんですよ。もともと……魔獣相手には役に立たないので強い人間にしか使いませんが」

そしてカムイさんは紛れもなく強い。

刀の腕もかなりのものだし聖殿の盾は彼と相性が良い。

対魔獣用の剣術でどうにかなるほど甘い相手ではない。

「ははは、なるほど。知っているな、俺は。まさか、ここで王宮剣

術を破れるとは思っていなかった」

「そう簡単には負けませんよ？」

「ああ、だからこそ良い試合にもなる。回りを見てみる」

回り……？

ぐるっと見回してみるが異常な量の観客に囲まれてる事以外至って普通だ。

つか、ザツと客席を見てみるがミナが見当たらない。

これだけ大人数なら見つからなくても不思議ではないけど。

アイツの黒髪、目立つんだけどなあ。

「気づかないか？」

「へ！？あー……」

やばい、試合とはまったく別の事を考えていた。

少し焦ったけどカムイさんは気にした様子もなく続ける。

「これだけの観客がいるにも関わらず俺たちが会話できるくらい静かなのは変だろ？みんな、俺たちの闘いに夢中なのさ」

「ああ、そういえば……」

他の試合の時はもっと盛り上がっていたハズだ。

「感謝する、リユート殿。これだけの闘いはそうそう味わえない。これだけ価値のある勝利も！」

「あまり目立ちたくはないんですけど……ま、負けるつもりもありませんけど……」

互いに剣を構え直す。
休憩時間は終わりだ。客席からも息を呑む音が聞こえるような気がする。

「行くぞ！」

高速で降りかかる一撃をなんとか受ける。

速さではカムイさんの方が上だが、少しずつ自分に有利な状態を作っていくというのが王宮剣術の特性な為、二、三撃と重ねられても対応は難しくくない。

……とは言え、決定打がないんだよなあ。

弾き、受け流し、そしてできた隙を狙い剣を降り降ろすが……。

「聖殿の盾……！」

ですよね。

あっさりと剣は弾かれる。

打ち合いで少しずつ有利になっても、こっちが攻撃した瞬間、片手で防がれ振り出しに戻るの繰り返しにしかない。

「リユート……！」

「……！」

どこからか聞き慣れた声が聞こえた。

ああ、魔女の声援なんて貰っちゃ負ける訳にはいかないなつ。

そして、その声援をきっかけに会場に一つの変化が起こる。初めは遠慮がちに……しかし、やがては叫ぶように。

『リユート!!リユート!!リユート!!リユート!!リユート!!リユート!!リユート!!』

『カムイ!!カムイ!!カムイ!!カムイ!!カムイ!!カムイ!!カムイ!!』

魔女の声援に乗せられリユートに声援を送る人達が現れた。

そして、それに対抗するようにカムイに声援を送る人達も現れたのだ。

予想を上回る戦いに思考停止状態だった観客だが、完全に状況に追いつきお祭り思考になっていた。

目立つのは嫌だ……ったハズなんだけどな。

カムイさんの言う通り、こんなに良い試合ができる事なんてそうそうないだろう。

そんな状況で自分に送られてくる声援。

嫌な気分になるハズがない。

自然と口の端が上がってしまうのがわかる。

この騒ぎでは先程までの様に会話はできないけど、向こうも楽しそうだ。

延々と変わらない、然りとて気を抜けない斬り合いを繰り返し、隙を作る。

また聖殿の盾とやらで防がれるだろうが、見逃す手はない。
手にした剣を降り下ろす。

「……………っ!？」

慌てて頭を降り、回りを見渡す。

今、何が起きた？

右側頭部が痛む。多分、殴られたんだろう。相手は一人しかいない。
カムイさんは完全に体制を崩していたはずだ。あの状況では聖殿の
盾を使う以外に選択肢はないはず。
あそこから攻撃するなど、普通ではありえない。

目の前にいる彼を捉える。予想外の反撃に混乱し、状況把握が遅れ
たがカムイさんを見た瞬間、何が起きたのか大体は理解できた。

彼は頭から血を流し、片膝をついていたのだ。
出血は大した量ではなく致命傷には程遠いが、明らかにオレよりも

大きなダメージを負っている。

つまり、カムイさんは……聖殿の盾を使わず崩れた体制から無理矢理、剣を振り上げたのだ。

結果、確かにオレは意識の外からの攻撃により一瞬意識が飛び状況把握が遅れた。

しかし、自分はオレの降り下ろしを無防備に食らったのだ。明らかにカムイさんの方がダメージは大きい。

あそこで聖殿の盾を使わない理由なんてないハズだ。

何故、そうしなかった……？

使えなかったのか……？

理由は分からないが、それ以外に考えられない。

まあ、そんな事は後で考えればわかる。

今は勝ちに行く！

カムイさんはまだ立ち上がれていない。

対してオレはほとんど戦闘に影響はない。

オレは、それが畏とも知らず剣を横薙ぎに降った。

「掛かったな、リユート殿」

方膝をついたまま、カムイさんがそう言った。

ガキイン！と甲高い音を鳴らして片手で受け止められる剣。まるでミスリルの塊を殴ったかのように剣を持つ手が痺れる。

やばい。そう思った時にはすでに遅かった。

「一刀に斬り伏せる！！」

全身のバネを使い振るわれた刀は太刀筋がわかりやすく普段なら避ける事も簡単だろう。

ただ、全体重を乗せた一撃を防御された後のオレは一步も動く事ができず、刀を盾代わりする事しかできなかった。

ああ、今日は良い天気だな。

景気良く吹っ飛ばされてる最中は空の青さが目に焼き付いた。

そして、一瞬の現実逃避を終えるとオレの体は一度、地面にバウンドし更に四回転半ほど転がってようやく停止した。

体の痛みを無理矢理押し殺して頭を動かす。

完全にしてやられた……。

盾を使わず相討ちに持ち込んだのは次のオレの一撃を誘う為。

完全に好機だと思ったオレの全力の一撃を聖殿の盾で防御し、反撃する。

盾で防がれ続けた所に生まれた隙を狙わないのは、よほどの警戒心が必要だろう。

現にオレは疑いを持たず嬉々と斬りかかった。

最初の相討ちさえ凌げれるなら、なんて有効な手だ。

……いや、一番最初の相討ちでオレが手加減した事すら計算のうちか。

延々と盾で防がれて来たのだ。

防がれば岩を殴ったかのような手応えに自分の手が痺れるだけ。必然、無意識のうちに防がれると思った攻撃は手加減してしまう。そして……そんな一撃なら歯を食いしばれば耐えれない道理はない。

やれやれ、まったく嫌になるほど計算され尽くした罠だ。

馬鹿呼ばわりされていても戦闘に関しては天才的だな。

次いで自分の状態の確認を急ぐ。

ダメージは……立てない程ではない。

剣でガードしたとは言え直撃した脇腹が痛むが打撲程度だろう。後は吹っ飛ばされた時にできた擦り傷。背中が多少痛むのは恐らく地面に強打したからだろう。

ゆらりと立ち上がると思ったよりダメージは小さい。

致命傷には至らなかったようだ。だが……。

こっちが致命的かなあ。

どうにか離さずに持っていられた剣……いや、半分に折れたソレを剣と呼ぶのかも怪しい。

流石に折れた剣でカムイさんクラスの實力者に敵うとは思えない。

静まり帰った会場は、まるでオレのギブアップを待っているかのようだ。

ここまで戦ったんだ。今、敗けを認めても誰も攻めはしないだろう。

一応、手がない事もないが……。

ソレを使っても良いものか？そう考えて見たが、その思考すら霧散させてくれる叫びが耳に届く。

「リユートー!!」

試合中、一度、聞こえた声。静まり帰った今は余計にはつきりと聞こえた。

ああ、そんな所に居たのか。

近くはないが、中庭を一望できる城のバルコニーにミナは居た。彼処からなら試合もハッキリと見えただろう。

「リユート！本気で……戦え!!」

いや、さっきまでも本気だったんすけど。しかも剣は折れたし……。

「武器なら……あるでしょう!?使えっ!!」

「……っ!!」

彼女が何を言いたいかは、すぐにわかった。

と言うか、オレも戦い続けるならソレしかないと思っていた。

「リユート……勝つて!!」

「はは、あはは。やれやれ、我が俣だな、うちの魔女は」

余りの身勝手っぷりに笑いが込み上げてくる。しかし、それは嫌なものではなく心底楽しい。

使わないって言ったんだけどな。

「ほほう。今ので決めたつもりだったんだが、まだ手があるか？リ
ュート殿」

カムイさんも意外そうに話かけてくる。しかし、その顔はまだある何かを期待してるように見える。

ああ……こんな楽しい試合をここで終わらせるなんて勿体無い。幸いにも魔女の許可も貰えた事だ。

「ええ、一応、切札がまだ残っています」

「そうか。見てみたいものだ」

カムイさんがニヤリと笑う。

多分、オレも笑っているんだろう。

体は動く。カムイさんが重さではなく速さを重視した剣を使う人で良かった。

オレは両手を前に突き出し、この力を使う。

面倒な事になる気がするが、後で考える事にしよう。

「魔剣召還」

風が吹いた気がした。

瞬時に黒と銀の剣がオレの手に握られる。
啞然とした観客の中で誰かが呟いた。

「魔剣……魔剣、アウル……!!」

「はは、驚いた。この世界に来て初めて聞かされた伝説に出てくる魔剣か！」

驚いたと言ってるわりには心底楽しそうだ。

いや、カムイさんだけではない。

観客からも次々と声上がり、ちょっとしたアウルコールが響いて来ている。

……別にアウル関係ないんだけどな、この剣。

確かに伝説の魔剣アウルと同系列の武器ではあるけど、これはミナがくれた物だ。

……よし。

スツと右手に剣を持ち掲げると会場は今までで一番、静まり帰る。

「この魔剣があるのは……魔女がオレを助けてくれたから」

観客とカムイさんが「何を言ってるんだ？」と不思議そうな顔をす
る。ミナだけは何か嫌な予感でもしてるのか警戒心を抱いているよ
うだ。うん、正解。

「だから、オレはこの魔剣に、彼女の名を借りよう！」

魔剣アウルも能力者の名前を継いでいる。なら、オレの魔剣も彼女の名を貰ってもいいよな？

「ミヅキ！！魔剣、ミヅキと！！」

一呼吸。

観客がオレの言葉の意味を飲み込むのに掛かった時間だ。

ワアアアアアア！！

「、！！！！！！」

中庭に鳴り響く大喝采。

それに紛れミナが何か言ってるが聞こえない。

とりあえず後で殴られるのだけは覚悟して置こう。

『ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！ミヅキ！！』

先程、オレとカムイさんに送られた声援が全て『ミヅキ』になったかのような大声援で中庭は満たされる。

ミナは何か赤面して顔を伏せている。可愛い奴だ。

「さて、お待たせしました」

盛り上がりは最高潮。

決着には相応しい舞台だろう。

オレは目の前の敵に剣を構える。

「何、構わない。しかし、これ以上は楽しみで待てそうもないがな」

魔剣と聖盾。

互いに信じる武器はどちらがより優れているのか。

当然、オレはミナの剣が負けるだなんて微塵も思っていない。

「さあ、第二ラウンド開始と行きましょうか」

四十三話 100と3(後書き)

長い上に、書ききれずに途中までになっておりますorz

文章を綺麗に纏める才能が欲しいっ。

中途半端なのでなるべく早く次話投稿できるようにしよう……。……。

四十四話 100の能力全開(前書き)

お待たせしましたorz

前回に続きカムイvsリユート戦の続きになっております。

戦闘シーンを書くのはやっぱり難しいですね(汗)

それでは楽しんでいただけたら嬉しいです。

魔剣。

初代勇者パーティーの一人、アウルの能力にして不死の力を持つ最初の魔王にダメージを与えた唯一の武器。

その能力は魔力の消滅。

その刃で斬られたものは魔法も能力も消滅する。

その能力は本来の持ち主であるミナですら魔剣を手にしたままでは、攻撃魔法は使えなくなる程に強力だ。

しかし……聖殿の盾って斬れるのか？

如何なる能力も無効化する剣。

如何なる能力も通さない盾。

これって見事な矛盾じゃないか？

「名前まで付けて、あれだけ盛り上がったのに、あっさり負けたら恥ずかしいな……」

今のオレのコンディションで聖殿の盾を破る事はできない。
完全に魔剣頼りだ。

考えても仕方ないかあ……ぶつけてみればわかるし。

相変わらず重みをまるで感じない魔剣を構え直す。すると正面のカムイさんは待っていたかのように左手をこちらに突き出した。

……ていつか、待ってたのか？オレが構えるまで。

大歓声の中、彼の声事態は掻き消されて聞こえない。だけど、はっきりと、叫んだ内容はわかった。

「来い！！」

それを理解した瞬間、反射的に地面を蹴った。

魔剣を肩に担いで真っ直ぐに突進する。

恐らくは向こうも魔剣は警戒してるハズ。

だからこそ！！

リュートの予想通りカムイは左手を前に出す。

どちらの能力が勝つか、は大事だよなっ。

リュートは力任せに剣を降り下ろす。

結果、リュートは確かに剣を振り抜いた。

まるでガラスを引っ掻いたような甲高い音が響く。

耳を塞ぎたくなくなるような音だが闘技場の人々はそれすらも掻き消す程の喚声をあげる。

……っ、盾は斬れないか。

いや、盾は斬れたはずだ。確実に手応えはあった。なら……突破する前に再生した？

魔剣は確かに聖殿の盾をも無効化した。が、聖殿の盾は消された瞬間、次の盾が出現したのだ。

何十何百と無効化された事だろう。しかし、それでも刃を通さず持ち主を守りきった。

魔剣すら通用しない最悪の状態は回避できたが盾は健在。その状況にリユートは多少悔しさを覚えたがソレはカムイも同じ……いや、カムイの方が大きかった。

今まで聖殿の盾は全ての攻撃を完全に防いできた。

しかし、今のリユートの攻撃……盾は刃こそ通しはしなかったが、斬られた衝撃でカムイは数歩後ろに歩かされた。

盾は斬れないが……無敵の壁はなくなった。

それだけでも、ありがたいか。

それだけでも勝てる兆しは見える。

オレは先程と同じ様に剣を構える。

カムイさんは大きく目を見開いて驚いていたようだが、オレが構えたのに気づくと直ぐに刀を正眼に構えた。

盾を使っても吹っ飛ばされる以上、迂闊には頼れないだろう。

とは言え、オレも右手は気軽に使えないか……。

さっき斬られた時に剣を盾にしたとは言え、かなり強打され脇腹を

痛めた。もし真剣だったらと思うと背筋が寒くなる。

やれやれ、魔剣を召還したのにまったく有利になった気がしないな。

リユートはそう考えたが、カムイとて先の一撃を入れる為にわざと頭部に攻撃を食らっていて、決して無視できるダメージではなかった。

互いにまったく余裕がない状態で徐々に距離を詰める。

長期戦になると不利……なら、下手に待たずにこちらから……って！？

リユートが斬りかかろうとした瞬間カムイが先に動く。

予備動作が少なく素早い攻撃。しかし、今度は多少の余裕を持って防御する。

危なっ！？魔剣じゃなかったら間に合わなかったかもなあ。

カムイさんは自分の方が速さは上だと思っている。考えてみれば先手を取り一気に決めたかったのは向こうのほうが強いだろう。

もつとも、それは魔剣に持ち変えた事によりある程度差が埋まってるハズ。

重さを感じなければ速くなる。速くなれば攻撃力もあがる。

模擬剣であった先程よりもリユートは強くなっている。

切り返し降ってくる刀をリユートは全て受け流し、一太刀ごとにカムイの攻撃がぶれていく。

よし、カムイさんの剣筋は全部見える。

このまま行けば勝てるのも時間の問題……。リユートがそう考えた時がカムイは突如攻撃を辞め後ろに下がった。

む……逃げられた。

本来なら相手が下がった時は追撃のチャンスだが、先程のカウンターで痛い目を見たためリユートは迂闊に動けなかった。

カムイは下がると同時に反撃の準備をしていたから結果的にそれは正解だったのだが、その時のリユートはカムイが何をしているのか理解ができずにいた。

刀を……鞘に戻した？

一応、柄に手をかけてるとはいえどう見ても無防備。鞘のまま戦う気か？

リユートの考えが纏まらない間にカムイは一気に間合いを詰める。その時にリユートが危機感を感じて後ろに大きく跳んだのは、ただの感でしかなかった。

キーンッ！！

ヤバイ。そう感じてバックステップを踏んだ直後、そんな短い金属音が聞こえた。

次にオレが目にしたのは、すでに刀を振りきっているカムイさんだった。

な、な、な、なっ!?

今、斬ったのか?

鞘から抜いた瞬間がまったく見えなかったぞ!?

聖殿の盾がある以上、能力ではなくカムイさん自身の技なんだろう。

カムイは再び納刀する。

……あの構えからじゃなきゃ今の技は使えないのか?

そして、あんな構えから他の技があるとも思えない。

けど、見えもしない攻撃相手にどうする?

体が痛い。勝てる気もしない。面倒くさい。

勝つたらもつと面倒くさい。

勝負は十分楽しんだ。正直、そろそろ負けてもいいかと思いはじめてる。

「けど、そういう訳にもいかないか」

少し視線を上げたら、心配そうに見てる魔女がいる。試合中は意識の外に出しているがずっと応援してくれてるんだろう。

「はいはい、ちゃんと勝ちますよ」

切札の魔剣を使って……コレも使う事になるなんてなあ。

オレに灰色の髪をくれた御先祖様に感謝を。

一呼吸、対峙した後、カムイさんが再び間合いを詰めて来た。流石にあの見えない斬撃に自分から突っ込む気にはなれないから有難い。

そこから放たれる見えない斬撃。

受けようと思っても振り遅れるから避ける事しかできないだろう。だが、同程度の早さを持っているなら話は別だ。

リユートはタイミングを合わせて剣を振り上げる。

彼の目にオレの剣はどう見えただろうか？

いや、きつと見えなかっただろう。

同じ見えない斬撃を軽々と捉え上に、弾いたのだから。

「なんだとっ!？」

「……っ!！」

カムイさんが驚愕している。まさか、あの攻撃を弾かれるとは思っていなかったのだろう。

しかし、オレにも余裕なんて微塵もない。

弾いた手は何時間も錘を乗せられていたかのように痺れている。

速攻で決める為にオレは、よろけるカムイさんに詰め寄る。

「聖殿の盾!!」

「邪魔だああ!!」

鈍い手応えと共に力任せに剣を叩きつけると自分の腕が軋んだ。

リユートの能力は人間には強力すぎる。

故に 使えない。

彼の祖先は獣人……そのしなやかさと強靭さは人のソレとは比べ物にならない。

だからこそその能力。

自身の身体性能を極限まで引き出す力。

だが、短時間なら竜族も上回る力が手に入る！

昔、ドラゴンを倒した力を発現させカムイさんに斬りかかる。

如何なる盾とはいえ、扱うのが人間であれば、竜の鱗すら貫く力の前では防ぎきれない。

何度か盾で防がれ、その度に腕の痺れは増して行く。

しかし、その甲斐もあり、カムイさんの左腕を盾ごと上に弾くのに成功する。

これでノーガードっ!!

狙うは足。

魔剣では殺しかねない為、ローキックで動きを封じる。

思いっきり放った蹴りは敵よりも自身に大きな衝撃を返す。恐らく骨にヒビが入っただろう。

だけど……まだ立てるっ!!

引き替え痛みを覚悟できたオレとは違いカムイさんはバランスを崩して尻餅をついている。

彼の身を守るのは最強の盾のみ。
オレは剣を逆手に持ち構えた。

「せ、聖殿の盾え!」

「突き破れええええ!!」

地面に剣を刺す勢いで盾を突き破ろうと降り下ろす!

魔剣で盾は無効化できるなら再生する前に全て突き破るのみ!

ガガガガッと轟音と共に自分の右腕から鈍い音が聞こえた。

折れたか……けど、左腕が残ってる!!

「うおおお!?!」

「これで……終わりだあ!!」

「はあ、はあ、はあ………」

これ以上、能力を行使すれば治療術で治らない後遺症が残るかもしれない。

しかし……その一步手前でオレは盾を突き破っていた。

下には大の字になり寝転がるカムイさん……そして、その顔の十数センチ横に突き刺さる魔剣。

いや、殺すわけにはいかないからわざと外したんですよ？

「く、くくく、ははは！悔しいな！」

カムイは自分の敗北を悟り笑う。悔しいと口では言っているが実際に楽しそうだ。

会場はまるで彼の言葉を待っているかのように静まり帰っている。

「悔しい、が無念はない！有難う、リユート殿。オレの……敗けた」

ワアアアアアア

カムイが自ら敗北を宣言した瞬間、会場は熱狂と拍手に包まれた。恐らくはリユートが負けても観客の反応は同じだっただろう。

「ははは、疲れたな」

まだ勝者宣言も終わらぬうちにオレはカムイさんの横に寝転がる。自然、嬉しそうに身を乗り出して笑っている魔女と目があつたが、ブイツと顔を背けられてしまう。

ミナのお陰で……随分強くなったもんだな、オレも。

以前のオレなら途中で投げていた試合だろう。

カムイさんは強すぎた。

この試合は、この直後に起こるもう一つの騒動と共に歴史に語られる事になる。

そして、オレ自身もこの試合をきっかけにして自分の最後の能力を大体知ることになった。

そう、試合が終わった後、疲れてはいたが体の痛みは全くなくなっていたのだ……。

四十四話 100の能力全開(後書き)

戦闘がぐだぐだになってないか説明がぐどくなってるないか非常に心配な話でしたが、どうでしたでしょうか？

次回は久しぶりのミナ視点になる予定です！

感想誤字指摘頂ければ嬉しいです。

では、以下にリユートの先祖帰りの能力の補足説明をつらつらと。

本編に影響ないので読み飛ばしてくださっても問題ありません。

四話(だっけな?)くらいにはった伏線をまさかこんな遅くまで引っ張る事になるうとは……orz

勇者の血を引く者は希に髪の色が先祖の色と近く生まれます。そしてそんな先祖帰りを起こした者は先祖の勇者の能力を使える事が多いのです。

リユートもソレですね。

そしてリユートの祖先は素晴らしい体を持った獣人でした。彼の能力は体を壊さないように無意識のうちにかけてるリミッターを解除する物でした。

彼は元々優れた運動能力に勇者能力を掛け合わせて素晴らしい戦果を残しました。

ただ獣人の体でも反動で体が痛くなる能力だったので、子孫の人間には使いこなせないようです。

リユートも昔、ドラゴンを退治した時に一度だけ使いましたが、竜の鱗を折れた剣で貫いた反面、ボロボロになってなんとか帰還したそうです。

勇者本人には強力な力が与えられますが、子孫まで使いこなせるとは限らないようです。

それでは、ここまで読んでくれてありがとうございます。

蛇足失礼しました。

四十五話 1が見ていた光景

別に敗けても良い。

むしろ敗けた方が良い。

私は最初、そんな風に思っていた。

敗けたからといってペナルティはない。

勝てば名声が貰えるだろうけど………ついでに付いてくる王女との婚約なんて厄介事以外の何でもない。

だから………適当に良い勝負をして負ければ良い。そう思っていた。

王女が用意してくれた席で見下ろした闘技場ではリユートとカムイが斬り合っている。

一見、リユートの方が優勢に見えなくもないが………押ししてるのはカムイ。

ロクに剣を振るった事がない私にもわかる。

1 vs 1の剣での試合では聖殿の盾は強い。

幾らリユートが斬り合いを制しても片手で立場を逆転させられる。

そして、その度に私の心はある感情により揺れていた。

悔しい。

齒を食い縛りリユートを応援するけど、中々あの盾を突破できない。
そして、ついには……。

「あっ!?!」

リユートは……大きく吹っ飛ばされた。

なんとか立ち上がろうとする彼に安堵するが、よく見れば剣は折れている。

そして私は、気がつけば彼の名を叫んでいた。

「リユートー!」

柄にもなく大声を出した甲斐もあってリユートはすぐに私に気づいてくれた。

「リユート!本気で……戦え!!」

ああ、もう。何を言ってるんだろう、私は!!アレは内緒にしとく
って決めたのに!!

でも冷静に考える頭と違い感情は止まらない。

「武器なら……あるでしょう!?!使えっ!!!」

「……っ!!!」

彼は私が何を言いたいかすぐにわかってくれたようで情けない顔で

笑いかけてくる。

……そんな情けない笑顔で顔が熱くなる自分が一番、情けない。

それを誤魔化すように、熱を吐き出すかのように声援を送る。

「リユート……勝ってー!!」

これが私にできる事の全てだと思う。

だって、実際に闘ってるのはリユートで……私は見てるだけなんだから。

リユートと馬鹿勇者が少しだけ言葉を交わして、リユートは両手を前に突き出す。

次の瞬間、闘技場の誰もが一瞬目を疑っただろう。

突如出現する剣。

静寂。

そして思考が現実を追いつき……喚声があがる!

『アウルー!!』

口々に伝説の勇者パーティーの一人の名を呼ぶ。

普段なら煩わしく感じただろう騒音も今は少しだけ誇らしい。

ただどアウルコールは長くは続かずリユートが片手を上げた事によりみんな静まる。

……？

「この魔剣があるのは……魔女がオレを助けてくれたから」
リユートがチラッとこっちを見る。その顔は、子供が悪戯する時の顔に似ていた。

「だから、オレはこの魔剣に、彼女の名を借りよう！」

ちょっと待て！何を言っ気だ！！

「ミツキ！！魔剣、ミツキと！！」

一呼吸。

私含め観客はリユートが何を言ってるか理解するのに、それだけの時間がかかった。

ワアアアアアア！！

「ちょ、馬鹿！何言ってるの！！」

咄嗟に抗議の声をあげたが、あっさりと歓声に掻き消された。

殴る！後で絶対に殴る！！

沸き起こるミツキコールに私は顔を伏せる。

何この罰ゲーム!!

そこからの展開は早かった。

多分、二人ともお互いが思うより余裕がなかったんだろう。

端から見てる私には双方が決着を焦ってるようにしか見えなかった。

そしてリュートが魔剣という切札を出したのに対してカムイも切札と呼べる技を使う。

それは武を知らないミナでも聞いた事があるほど馴染み深いものだった。

あれって……居合い？

刀を鞘に収めた構えはソレにしか見えない。詳しくは知らないけど刃を滑らせて高速で抜き放つ技だと思う。

現にカムイが抜いた瞬間は私には見えなかった。

でも、避けたって事はリュートには見えてるのかな？

私も剣をちゃんと使えるようになったら見えるのかなあ、なんて勘

違いしてる事は誰も知る由がない。

そして最後には本当にあつと言っ間だった。

リユートがカムイの居合いのお株を奪うかのような速度で、いつの間にか地面に寝転がるカムイに剣を突き立てている。

多くの観客は何が怒ったかわからないだろう。そして、それはミナも同じ。

「え……？何、今の？！何が起きたの……？」

リユートが何をしたかは見ていたけど……人ってあんなに速く動けるものなの？

少なくとも元の世界ではワールドクラスのスポーツ選手でも、あんな動きはできないと思う。

観客が盛り上がりミナが呆けているが、それでも時間は進み審判と思わしき人が五人ほどステージに上がる。

つて、多くない？

別に一人でいいだろう。

リユートもカムイさんも一人で動けるみたいだし。

『えー、みなさん！お静かに！！お静かにお願いします！』

観客の間に動揺が広がる。

普通なら勝者の名前を呼ぶだけだ。別に判定でもない以上、回りを静める必要なんてない。

しかし、尚も審判は呼びかけ続け、十分に観客が落ち着いてから、信じられない事を言った。

『只今の最終試合、協議の結果、勇者フェトムを反則と見なし、勇者カムイの勝利とします！』

「は、反則……！？」

思わず声が漏れた。でも、それは回りの人も同じみたいでガヤガヤ騒いでいる。

『ご説明します！一番最初に説明した通り、真剣の使用は禁止！必ず刃を潰した物をしようする事！』

……あ、魔剣。

スツカリ忘れてたけど、あれって殺傷能力高い刃物だ。

観客もミナモリユートもカムイも「そういえばそうだった」と少し間の抜けた顔をしている。

『勇者の能力という事で協議は難航しましたが、安全面を考慮し、これからの大会で同じ事が起きぬよう、反則とし扱うよう結論が出ました！よって……』

審判が息を大きく吸い込み叫ぶ。

『勝者、勇者カムイ!!』

「あはは、すごいオチ。そっか、リユート、結局負けたのか」

最後まで戦って、あの馬鹿勇者を倒したからかな？

リユートが負けたにも関わらず、私は随分スツキリして落ち込むどころか、なんだか笑いが込み上げてきた。

「ふふふ……。あははは。ばーか、何そんな所でばーっとしてるのよ。早く帰るわよ？リユート」

私は自分でも自覚できるほど機嫌よく絶対に聞こえるハズのない距離にいる彼に話しかけた。

そして、この試合は試合内容の素晴らしさと、ついうっかり反則してしまった脱力する結果により、後世に「ルールの確認を怠るな！」と強く印象付け永く事ある事に出される事になった。

「ぶっ、くくく……。あはははっ」
「そんなに面白いですか」

試合も終わっても熱気は覚めていない。
今も外ではリユートの勝ちか、カムの勝ちかが至る所で酒を飲み交わしながら論議している事だろう。

しかし、当事者である片方と魔女は解放されるやすぐに公爵家に戻って来ていた。

部屋には枕に顔を埋めて笑い転けている少女と、ベッドに腰かける笑われている原因の成年。

「そりゃ、すっかりルール忘れてたオレが悪いけど……」

「大丈夫よ。みんな忘れてたから。だからこそ面白いのよ」

それほど目を引く試合だった。

唯一、ちゃんとルールを監査してる人たちだけが気づけたんだ。

「まあいいや。それより話したい事があって来たんだ」

「リユートから私の部屋に来るなんて珍しいもの。わかってるわよ。でも、その前に……てりゃ！」

気取られないように強化を使わず肩を殴るけど、いつも通りポスンって音がただけだった。

むう。

「だから、なんで殴るんだよ!？」

「勝手に人の名前を剣に付けるからよ」

付けるの自体はいいんだけどさ。

「ちゃんと覚えてたんすね……。で、いいか？」

「ん」

すごく恥ずかしかったから、まだ殴り足りないけど一応真剣な話みたいだし仕方ない。

「オレの先祖帰りの能力について少し話したよな？」

「えと、使えないってやつ？」

リユートは頷き続ける。

「実はカムイさんとの試合で使ったんだ」

「……使えないんじゃないの？」

「能力が強すぎてオレの体が耐えられない。試合会場なら後の事を考えなくていいから使って見たんだよ」

なるほど。自分の体に害を成す能力なら確かに易々と使えない。

でもそうなるの一つわからない事がある。

「私にはリユートは怪我してるように見えないんだけど？」

「ああ、してないよ。どこもな」

そこまで聞いて何か違和感を覚える。

待つて。能力云々は置いといて……リユートは馬鹿勇者に吹っ飛ばされてたハズ。

あれは骨折してもおかしくはない。

それなのに見える範囲で擦り傷すら見当たらない……？

「まさか、勇者の能力!？」

しばらく発動してなかったけどリユートの本来の能力はまず回復系とみて間違いないと思う。

私が声を出せ、足を動かせるのが、その証拠だ。

「多分な。オレは先祖帰りの能力の反動で確かに足の骨にヒビくらい入っただろうし右腕に関しては確実に折れた。試合が終わった後には治ってたけどな」

でも、私が前に指を噛んだ時は発動しなかった。

つまり発動条件を満たさなかったんだろう。

同じ事を考えてたのか私とリュートの声重なって結論を出す。

「一定以上のダメージ」

多分、これだろう。

そして発動したら全てが回復する。

「現に足の骨にヒビが入った時は発動しなかったよ。でも、腕が折れて、カムイさんの盾を貫いた時は多分治っていた」

発動条件は骨折程度の重症？

「……リュート」

「嫌だ」

私は何を言うのかわかっているのか即座に拒否られる。

「試してみない？」

「だから嫌だって！？違ったらどうするんだよ！」

うん、流石に私も自分の立場だったら嫌だ。

「なんか不便な能力ね……」

一応、すごく強いとは思っけど限定されすぎだ。

「ま、いいんじゃないか？こんな不便な能力で」

確かに強い。

どこまで治療できるかわからないけど、致命傷を無かった事にできるのは反則だ。

「そっじゃなくてさ……」

声には出していないハズなのにリュートは私の考えてる事を見通したようにポンと頭に手を置き髪を撫でる。

……自分で言うのもなんだけど髪だけはちょっとした自慢だ。気安く触られるのは抵抗あるけどリュートなら我慢できる。

そして、次の一言で危うく泣きそうになった。

「ミナが喋れるようになった。歩けるようになった。十分だろ？」

「……っ!？」

「だから、なんで殴るんだよ!？」

さっきも聞いた気がする台詞を黙殺する。こつでもしないと本気で泣きそうだったんだ。

「あー、良い……。話したい事は話したし寝る」

……コイツは人の気も知らずに。

「っつて、どこで寝る気!？」

リュートはベッドに腰かけたそのまま横になり寝転がる私の膝辺りに頭を乗せてきた。

「いや、毎度布団に潜り込んでくるのに何を今更……」
「な、な、なあー!!」

ミナは意味不明な叫びをあげるが、リュートはその間にも寝息を立てる。

ミナからすればリュートと一緒に居たいのは本心であり居ないと寂しいのだが、くつつきに行くのは慣れて来ても、くつつかれるのはまったく慣れていない為、気が気でない。

そして毎晩ミナがなんだかんだ言っただけで布団に潜り込んでくるリュートは、この程度なら……と少し毒されて来ていた。

結局、振り落とす事もできず、彼女はリュートが起きるまで非常に長い時間を変則膝枕で過ごす事になる。

「……………後で燃やす。絶対に燃やす」

四十五話 1が見ていた光景（後書き）

久しぶりのミナ視点でした！

ミナ視点は書くのが大変ですが、楽しくもあります（笑）

今回はどっちの視点で書こう。

もうそろそろ二章も終わりに近づきつつあります（二章だったんで
す、一応）

それでは、誤字脱字感想等、よろしければお願いします。

四十六話 100と王都と聖殿と（前書き）

少し投稿が遅くなりました。

展開に多少迷っております。

本来ならこの話で王都での話は終わりになる予定だったのですが、次の話まで食い込んでしまいました。

次話でちゃんと纏められるだろうか……。

四十六話 100と王都と聖殿と

「ふう……流石に疲れた。つてもう、こんな時間か」

水晶球から手を離して背筋を伸ばす。

朝から調べ物をしていたが、夢中になる余り時間が過ぎるのを忘れていたらしい。

太陽は真上に登りつつある。

王立大書館。

以前から気になっていた事を調べようと思いオレは開館と同時に籠っていた。

名前の通り大量の本が保管されていて北の王国で調べ物をするならここが一番だろう。

最もオレが使用していたのは情報が魔力によって保管されている水晶だ。

効率はいいんだけど情報を引き出すにもわりと馬鹿にできない量の魔力を消費する為、使用者は多くはないが、オレは魔法が得意ではないから魔力がすっからかんになるうと大した問題はない。

「腹減ったな……。一人で外食しても詰まらないし帰るか」

公爵とリズはアレで貴族だから忙しいかもしれないけど、ミナくらいは居るだろう。

それにしても……流石は勇者召還国と言うべきか。

調べたい事の大半はあっさり見つかった。

まずはケルロン。

魔獣ケルベロスが人に懐くなんて聞いた事無かったが調べてみるとわりとあった。

ケルベロスはおろか魔狼フェンリル……獣型魔獣では最強クラスの魔獣ですら従えた勇者がいたそうだ。

まあ、ケルロンに関しては最初はともかく今更警戒してた訳ではないのでほんのついでだ。

庭で尻尾追いかけてくるくる回ってたり、あくびしながら寝転がる姿なんて見たらなあ……。

次に魔剣。

有名なのは言うまでもなく魔剣アウルだ。

しかし、記録には他にも召還された勇者の中では魔剣使いが居たようだ。

ただ、これに関しては詳しい事はどこにも書かれていなかった。

「王国が意図的に隠してるとしか思えないくらいに情報がないんだよなあ」

ただ、最初の魔王を倒した能力ではあるものの攻撃力も防御力も取り立てて高い能力ではない。

隠す意味がわからない。

そして最後に、オレの能力。

一定条件下で発動する回復とでも言うべきか？

これに関しての情報がまったくない。

こっちは隠されてると言うより本当に前例がないんだろう。

わかっている事と言えば……。

一定以上のダメージを負っている事。
他人の傷も癒す。
発動すれば全てのダメージを癒せる。

こんな所か。

とは言え、此れにも確証はないわけだが。

他にも細かい事は色々あったが大事なのはこれくらいだろう。

考え事をしているうちにいつの間にか公爵家に帰り着いていたので
思考を中断してドアを開ける。

「リユートです。今戻り……」

「だから、起きたらもう居なかつたって言うてるでしょう？」

「心当たりくらいないのですか！？今すぐにお父様とちゃんとお話を……！！」

「あら、リユート様。お帰りなさい」

広間に入った瞬間、そこは魔女、王女、令嬢による混沌空間だった。

「ただいま……リス」

うん、公爵令嬢は別に関係ないか。

「ですから、あの試合はリユートの反則とは言え、カムイを地に這わせたのはリユート。弱い方を私の婚約者にしようだなんて間違ってます……って聞いている!？」

「聞いてます……」

面倒だし聞きたくないけど。あ、これ美味い。

昼時も近い事もあり、空腹なオレの要望も叶い食事をしつつ王女の要望を聞いていたが、なんとも面倒な話だ。

要約するとリユートの方が強いんだからカムイとの婚約は間違ってます!という事らしい。

「試合に負けたのはリユートでしょ? 大人しく馬鹿勇者と婚約すればいいじゃないの」

「……自分でしたら、カムイと大人しく婚約するのですか?」

「絶対嫌」

カムイさん、そんな悪い人じゃないんだがミナとレーナ王女からの評価は著しく悪いようだ。

「とにかく! どうせ王城には来て貰いますから父上にリユートからも一言お願いします」

王族の婚約権をただの商人にどうこう言える訳もなく聞きながしていたが、聞き捨てならない事を言われる。

「いや、王城に行く予定はないのですが」

「父上の命令です」

「なんで!？」

まったく心当たりがない。

「よくわかりませんが魔剣がどうこう言っていました」

……………。

あ、はい。また面倒事ですか？

やっぱり試合で魔剣を使ったのはまずかったかな……………。

いや、どうせもうすぐ王都は出る予定だった。というか、ミナの許可次第で明日には出る予定だ。

商人にとって急な出立なんてよくある事。

謁見の日にち前に王都を出れば……………。

「それでは、食事が終わったら一緒に行きましょう」

「……………はい」

敵の行動はオレの予想より遙かに早かった。

「父上、リユートをお連れしました」
「うむ」

いろいろ駄々を捏ねてみたが結局、連れて来られてしまった。
まあ、王都で王族の命に逆らうなんて流石に無理な話だ。

「すまん、リユートよ。どうしても話しておかなければならない
事ができたのだ」

「どうしても……ですか」

「うむ、魔女もよく来てくれた」

別に呼ばれた訳ではないがミナも謁見にはついてきた。
流石に今回は自分から来ただけあり悪態もつかずに軽く頭を下げて
いた。

しかし試合翌日の急な謁見……どうしても話さなければならぬ事、
か。
面倒くさいだけだったが流石に気になる。

「リユート、君の能力の事だ。そう、魔剣の事なのだよ」

「リユートの能力が魔剣だったらどうしたの」

「貴様、また……!!」

ミナが機嫌悪そうに食って掛かる。
元々ぴりぴりした空気だった事もあり騎士の一人が剣を抜こうとす
るが王が手で制す。

「構わん。彼女にとっては勝手に呼ばれた違う世界。良い感情を持たないのは当然だ」

不服は残るようだが騎士は柄から手を離す。

「ミナも押さえて。まず話を聞いてみよう」

「……ごめんなさい。でも、そうじゃなくて」

ミナが立ち上がり王と視線を合わせる。

「この際だから召還がどうかはもういい。恨んでもない。代わりに……リユートに手を出すなら許さない」

明らかに王に対する敵対発言。

いや、気持ちは嬉しいけどここでは逆効果だ。

先程の騎士がまた剣を抜こうとしてるし、他の護衛も文官も戸惑っている。

ただ、王本人はそれを豪快に笑い飛ばす。

「ハツハツハ！ いやはや、魔女はすっかり商人に夢中だな！」「
だったら何？」

「否定もしないか。ふむ、最初の頃と比べると大分変わったな、
魔女。いや、勇者ミツキか」

最初って言うって城を半壊させた時か？

ミナが城での評判が良くないのもこの事件のせいだろう。

まあ、王本人は気にしていないみたいだ。抜けた所はあるが器は広いのかもしれない。

「それもリユートに助けられたからよ。だから守ろうとするのも当然でしょ？」

「なるほどな。まあ、警戒しなくていい。勇者リユートに害を成したりしない。ただ魔剣について知って欲しい事があるのだ。それならいいだろう？」

王がそう言うとミナは黙ったまま片膝を付く。

てか、公爵とかには礼儀正しいのに王相手にだけ切れすぎだ。

「まあ、簡単な話だ。魔剣についてはほとんど何も記録に残っていない」

おい。

「えっと、何かの冗談ですか？」

わざわざ呼び出して何もわからないとか、ふざけるとしか思えない。

心なしかミナの回りの空気も黒くなった気がして怖い。

「はは、すまん。記録に残ってないというよりは残してないのだ」

何故記録に残さない？という疑問は浮かぶが恐らく本当の事なんだろう。

今朝、魔剣について調べてもほとんど情報がなかったのが事実だと指し示している。

「で、それならなんでリユートを呼び出したの？」

若干切れ気味な声でミナが尋ねる。
同感ではあるけど怖いです。

しかし王は気にした様子はなく彼女の疑問に答える。

「魔剣の情報は全て一ヶ所に纏めているのだよ。理由はここでは言えん」

「一ヶ所……召還国である此処以外だとしたら……聖殿？」

ほとんど感だったがどうやら正解だったようで王は大きく頷いた。

「その通りだ。そこで魔剣アウルの守護をしている者が居る。彼に魔剣の事を教えて貰うといい。何、勇者リユートも知っている人だ」

オレの知っている？誰だ？

生憎見当も付かない。

「明日の昼に馬車と護衛を用意しよう。観光気分楽しんで来ると良い」

「はあ、疲れた」

「まったくね……」

長い話も終わりミナと二人帰道につく。

本来の話はアレだけだったみたいだが、あの後、王女が介入してきて婚約騒動の話となり結構時間がかかった。

とはいえ婚約の件は王の預かり知らぬ所で広まっていたようで、国としてもどう扱うか決めかねているようだ。

とりあえず、しばらくオレは無関係でいられるだろう。

「それにしてもリユート。やっぱりもてるのね」

「王女の場合純粹な好意とは違う気もするけど……。とりあえず、機嫌直せ」

大きな三角帽子の上からミナの頭をポンポン叩くが相変わらず機嫌は悪そうだ。

一緒に歩いてれば帰る頃には機嫌を直してくれてると思うがどうにも居心地が悪い。

「って、リユート。帰るんじゃないの？」

明らかに公爵家とは違う方向に曲がるオレにミナが尋ねた。

帰るには帰るが、少し買わなければいけない物がある。

「少し寄り道。一緒に来てくれるか？」

そう言って彼女に手を差しのべると視線を反らしながら手を握り返してくれる。

その横顔は真っ赤になってる。どうやら機嫌は直してくれたみたい

だ。

本当に気分屋だなあ、なんて呆れつつも嫌な気分ではない。

「ところで何を買つもの？」

「ん、塩」

「……塩？」

言うまでもなく生活の必需品だ。

「後、明日は朝早くから港に行くから付き合ってくれないか？」

「別にいいけど……何しに？」

「行けばわかるぞ」

明日は忙しくなる。ニーズヘッグ公へのお礼と挨拶もあるし、さ
つさと買い物が終わらせて帰ろう。

四十六話 100と王都と聖殿と（後書き）

次の話で久しぶりの魔王様視点の話を書く予定だったので、もう少しだけ（多分次話まで）王都の話が続きます。そこで第二章も終わりです。

そしてそして次は久しぶりの魔王様！
強くも世界なんて興味ない魔王と天然で魔王大好きな天使のお話です。

人間の知らない所で魔人にもいろいろあるのです。

四十七話 100の旅立ち（前書き）

久しぶりに投稿早くできました。

とは言え多少短いです。

二章もこれで終わりになります。

また少し別視点の話を書いた後に三章な入る予定です。

誤字脱字指摘、感想等頂ければ嬉しいです。

四十七話 100の旅立ち

「短い間だったが楽しかったよ。ありがとう」

「いえ、お礼を言うのはこちらですよ。何から何までお世話になりました」

太陽が登り始めたばかりの早朝。

オレとニースヘッグ公爵は短い別れの挨拶を交わす。

出立は昨日のうちに伝えてあった。

ちなみに昨日、王様が言っていた聖殿とやらに行く気はない。

だからこそ朝早い出発だった。

少し離れた所ではミナがケルロンに荷物を乗せながらリズと話している。

王女との相性はいまいちだがリズとは本当に仲良しになった。

この世界で初めての友達と言った所か。

そう考えると頬が緩むのが自覚できる。

「落ち着いたら、きっと王都に戻ってくる。だから、またね」

「当然ですわ。リユート様を独り占めされては敵いません。二人一緒にもた戻ってきてください」

そのうち商売上の都合戻っては来るだろうけど、なるべく早くした

方が良さそうだ。

「よっと……。ケルロン、これからよろしくね」

「ワフッ!」

「準備できたか？」

ケルロンを見ると結構な量の荷物をくくり付けられているが、本人は平気そうに尻尾をパタパタ振っている。

流星、魔獣ケルベロス。体軀は馬とそれほど変わらないが魔力により強化されている身体能力は比べ物にならない。

今回からは馬の代わりにケルロンに馬車を引いて貰う事になっている。

「うん、行こっか」

ミナはさっそくケルロンに跨がる。

「いつてらっしゃいませ、リユート様」

「いつてきます、リズ」

短いいつものやり取り。また「ただいま」を言う為の儀式。

それを終わらせて二人に手を振り、朝日で照らされる道を歩いて行く。

「流星に空いてるわね。港はあんなに人が沢山居たのに」

「港の朝は早いからなあ……」

北側は朝日が昇る前から動き出す。

ちなみに昨日約束した通りミナには今日の朝、港に付き合っ

ている。
戦利品は上々。

最も代償としてミナはさつきから何度か欠伸をしていて眠そうだ。
「王都を出たらしばらく何も無い旅路だ。もう少しでゆっくり寝れるぞ」

「ん、大丈夫よ。元の世界でも、たまに徹夜とかしてたし」

とは言えやはり眠そうに見える。

一度、馬車……てか、犬車か？に乗ればすぐに寝息をたてそうだ。

まあ、金にそこまで余裕があった訳じゃないから本当に小さな馬車だけだ。

多少の荷物を乗せたら二人がどうにか寝転がれる程度だ。

そのうち買い換えないとなあ。アレじゃ余りにも荷物を積みなさないぞ。

冒険者や旅人ならいいだろうけど生憎、オレは商人。物資の量はそのまま儲けに繋がる。

「リユート」

ケルロンに乗ったミナがオレの名前を呼ぶ。
その顔は実に機嫌が良さそうだ。

「楽しかったね」

「ああ、そうだな」

「また来るよね？」

「安心しろ。商人の商売の基点は王都だ。そのうち戻って来るよ。」

あまり長居はしないけどな」

そっか。と呟いてミナは前を見る。

その視界の先には境である門が見えた。

約十日間ほどの短い滞在だったけど、本当に色々あった。

「でも、今回の目的は商売じゃないんでしょ？」

「まあな」

そう。今回の主目的は金稼ぎではない。

いや、ついでに金も稼ぎはするけど。

先立つ物が無ければ旅はできないからな、うん。

「楽しみだね、みんなに会っつ」

「あれから半月以上たってるのか……みんなどこにいるやら」

ランディ、コレット、クロウ、メリア。

この四人の行き先が見当もつかない。

クレアは多分、元オレの家があった近くの街にいるだろう。

「クレアに会いに行つて……何か知ってたらいいんだけど」

何の手掛かりもなく国中探し回るのは勘弁して欲しい。

「クレアさん、怒るんじゃない？リユートの隣に見知らない女の子がいたら」

「別にミナなら平気……つて、あー、そっか……」

「クレアさんの知ってる私は怪我してた頃の私だし」

ミナはクスクス笑うが本気で怒るような気がしてきた。

家に居た時も何故かミナに対抗心燃やしてたしなあ。

「さて、行こう？リユート」

「ああ。もう門か」

色々話しているとうちに気づけば門の前。

ミナがケルロンから降りて用意されていた馬車を繋ぐ。

ちなみに荷物も全部馬車に移し変えて置いた。

一番前に二人で座って前を見る。

太陽も少しずつ登ってきていて、ここももう少したてば活気付くだろう。

「静かなうちに出発しましょ？私達、目立つし」

「そうだな」

黒髪の少女っただけで十分過ぎるほど目立つのにケルベロスに牽かれた荷台とかどんな組み合わせだ。

ケルロンは馬と違い知能が高いから人の言う事も理解してくれる。と言っても素直に従うのはミナにだけだ。

だから彼女はケルロンに出発の合図をかける。

「ケルロン！走って！！」

「ガウツ！！」

「きゃっ！？あははは！！」

「ちよっ、車輪が壊れるぞ！？」

「ケルローン、もうちよっどゆっくり〜！！」

普段よりも子供っぽくはしゃぐミナがケルロンに指示を出すと小走り程度の速さになった。

荷台を牽きながらあんな速度で走るとは流石は魔獣だ。

「またしばらくリユートと二人きりかあ」

そう言いながらポスンと胸元を叩いてくる。

「叩くな。ま、よろしく頼む」

「うっさい」

旅の始まり。

彼女はそう言いながら強めにまた胸元をポスンと叩いてきた。

「僕が欲しいのは世界ですよ。この世界を支配したいんです。それには貴方達と組むのが一番でしょう?」

王国より遙か南。

今や滅ぼされた南の国は魔族に支配されていた。

普段は人なんて寄り付くはずがない場所。

そこで緑色の髪をした少年が身長2Mを超える人と密談を交わしている。

緑色の髪の少年は髪の色さえ気にしなければ少し背の小さな人間だろう。

しかし、もう一方の大男は違う。

赤い目に口の左側からのみ伸びた鋭い牙。

腕も異常に太く人の胴体ほどある。

彼は……魔人だ。

本来なら魔人が人族と交渉する事など有り得ないが、この時ばかりは事情が違った。

「確かに……お前の言う事が本当なら現魔王を気にせず人間に戦争を仕掛けれるが……」

現魔王ケーファーは実力は本物だが人間相手に戦争を起こす気がない。

闘争を本能とする魔人にとっては煩わしい事だが、彼以上に強い魔人がいないのも事実なのだ。

「迷う事なんてないんですよ。僕的能力を使い四天王の貴方が率先して戦争を起こせばいいだけです。誰も文句なんて言わないでしょう」

魔人の男は悩む。

四天王と呼ばれる自分でさえ魔王には叶わない。

そして魔人にとっては強さが全て。

だからこそ魔王ケーファーがいる今代は比較的、世界は平和だった。

しかし、ケーファーを超える強さを持った者がいるなら話は別だ。

「……人間の手を借りるのは不本意だがいいだろう」

魔人は悩んだ末結論を出した。

このまま暇を持て余し自分の存在意義を見失うよりは人間と手を組んだ方がマシだ、と。

「そうこなくっちゃ。よろしくね。僕は66番目の勇者、ネクロマ

ンサーのミヨル」

そう答えた少年の後ろには何十匹にも及ぶ魔獣……元魔獣と言っべきか。

彼が能力を使い使役しているのだろう。

到底、生きてるとは思えない魔獣の群れが居た。

少年は魔人ですら気味が悪いと思わざるをえない笑みを浮かべてこう言った。

「人間を……支配する人間だよ」

四十七話 100の旅立ち（後書き）

とりあえず、本当に短い話でごめんなさいorz

後半がなんだか新展開っぽいですね。

でも彼らの活動はしばらく水面下だったりしてリユート達の旅にしばらく影響はありません（笑）

それでは次は魔王視点になるかと思えます。

いつも読んでくださってありがとうございます♡（――）♡♡♡

四十八話 魔王の陰謀（前書き）

お久しぶりです。

少しのんびりしてたらいつの間にか1ヶ月ほど過ぎていました。驚きです。

流石に寒くなってきましたね……（涙）

さて1ヶ月ぶりの更新なのに本編じゃありません。久しぶりの登場の魔王様です。

楽しんでいただけたら嬉しいです。

四十八話 魔王の陰謀

そこでは至る所で木々が燃えていた。
凡そ人族では近寄る事も叶わないだろう。

さらに最悪な事に其所は王国でも最も南………辺境の山であった。

魔族の支配する領域に最も近きその山に山火事に対応できるだけの人がいるはずもない。

そして炎の中心には燃えさかる体を持つ獣と黒き翼の魔人が対峙していた。

「サラマンダー………なんで魔界の火山にしか棲息してないはずなのにいるんだろう?」

黒い翼の魔人………今代の魔王ケーファーは、不思議そうに呟く。

サラマンダーは魔界のとある火山にしか棲息していない。その為、人類にはほとんど認知されていない魔獣である。魔界で生まれ魔界で育ったケーファーには、少し珍しいくらいに感覚しかないが。

「ま、コイツが居たんじゃ傭兵団が壊滅したのも当然かな」

人は炎に弱い。多少の冷気や打撃には耐えられるけど、ちょっとした炎でも火傷をしてしまう。

でも……サラマンダー程度の炎は僕には効かない。

「ギャルルルル!!」

突如サラマンダーが雄叫びを上げケーファーに攻撃を仕掛ける。中距離から放つパンチ。普通なら届くはずがないソレは、まるで腕が伸びたかのように炎の弾丸を放つ。

「おっと!!」

ちよつと不意をつかれたけど避けれない程じゃない。

適当に撒き散らした炎ならともかく指向性を持った攻撃は流石に熱いんだ。

「風竜の息吹」

僕の手の中に不可視の風が渦巻き刃となる。

普段なら魔獣に関してはスルーだけど今回は討伐が目的だ。

「ギャル!!」

ドコンツ!!と鈍い音が響き炎のパンチが再び遅いかかってきた。

僕はそれをくぐり抜け横腹を風の剣で切り抜ける。

「ギユウツ……ギャルルルル!!」

激情したかのように雄叫びをあげるサラマンダー。

痛いんだろう。ごめんね、でも。

「今の僕は人の味方だから」

なるべく苦しめないようにだけしてあげる。

ストーンツと軽く胸を突くとジャリッと何かが削れる音がしてサラマンダーの体から溢れる炎がとたんに弱くなり消えた。

サラマンダーの体の中にある炎のコアを貫いたんだ。

これがある限りサラマンダーは炎を触媒にして再生する。

情報を持たない傭兵が勝てるはずがなかったのだ。

反面、炎のコアはサラマンダーの心臓と言っても良い。弱点を貫かれたサラマンダーはもう動かない。

「ハア……あんまり気持ちの良い事じゃないなあ。ルーシーも待つてるし帰るかな」

そして僕はルーシーが待っている辺境の村にサラマンダーを担いで帰る。

これで少しでも人達と仲良くなれば、と期待をして。

「おっと、その前に……水竜の悲哀」

山火事も消しておくべきだろう。

辺り一面に竜が号泣してるかのような雨を降らせる魔法を使っていた。

「追い出されたら今日の『飯どじ』……」

「おかえり!!! ケーファー!!!」

サラマンダーを背負って村まで帰ると入口には沢山の人を立ていた。

その中の一人、純白の翼を持つ少女が僕に駆け寄ってくる。

「ただいま。ルーシーって、うわ!?!」

「えへへ」

駆け寄って来たルーシーはそのまま僕に抱き付いてきてサラマンダーなんて錘を持っている僕はそのまま転んでしまった。転ばせた本人はすごく楽しそうだ。

この子はルーシー。

恥ずかしながら僕の彼女であり天使だ。

別に天使の様な女の子と言う意味ではなく本物の天使なのだ。

「流石、天使様……傭兵の人たちですら歯が立たなかった魔獣を一人で倒すような魔人を使役してるとは」

「うん! ルーシーとケーファーは仲良しなんだよ!」

ルーシーの返答が少しずれてるけど気にしない。
彼女はどこか頭のネジが外れているのだ。

可愛いから良いんだけどね。

今回、僕はこの村の人たちから依頼を受けてサラマンダーの退治に
赴いたんだ。

なんで今まで話もしてくれなかった人間相手にそんな交渉ができた
かと言うと……そこにはルーシーの存在がある。

人間の間では天使の存在はあまり知られていない。

事実、ルーシーを見た人もまさか彼女が天使だなんて思わず翼のある
亜人程度の扱いだっただ。天使は魔人を狩る時以外は空の上にある
浮き島に引きこもってるから人には姿なんて見せないのだ。

ところがここは魔界に最も近き場所。

魔獣に悩まされた事は数知れず。

そして……天使に助けられる事も稀にだがあっただらしい。

結果、この村では天使を祀っている。

そして村で金を出し合い雇った傭兵団が魔獣に負けて途方に暮れた
時にルーシーが現れたから、それはもう救世主と持て囃された。

そして僕はルーシーの使い魔扱い……ま、いいんだけどさ。

今までと比べたら大きな前進だ。

「魔人殿……少々よろしいですか？」
「はい？」

振り向くとそこには初老の男性が立っていた。確か、この人は……。

「えっと、どうかしましたか？村長」

答えると彼は少し嬉しそうに笑う。

「少しお時間を頂いてもよろしいかな？」

とても柔らかい笑みだが、声は真面目だ。

恐らく他の人には聞かれたくない話なんだろう。

「いいですよ。どちらで？」

「私の自宅でよろしいですか？」

別に断る理由はない。

最悪、追い出されるだけだ。

僕は覚悟を決めて彼の家について行く。

「失礼ですが……貴方は魔王ですか？」

席に着くや否やそう問いかけられて少しビクツとする。

まあ、隠す事じゃない。

「はい。今代の魔王……ケーフアーと申します」

また今夜も野宿かな、これは。

でも、彼は僕の予想を裏切る。

「はは、やはりそうでしたか。どうりでお強い訳です」

村長は軽く笑うだけだった。

「え、いや……魔王ですよ？僕」

追い出されたい訳じゃない。

でも、今まで逃げられるだけだったから困惑する。

「ふむ。なんといいですか……よく黒い翼の魔王に襲われた。と話は聞くのです」

……別に襲った覚えはないのにな。

ちょっと凹む。

「しかしですね。ちょっと襲われた……って話が多すぎるんですよ」

………？

「なのに、魔王に殺された……とは滅多に聞かないんです」

「……あ」

普通に考えたら魔王に襲われて生き残る方が難しい。

街単位ならまだしも個人が魔王に襲われて無事はハズがないのだ。

「兼ねてから不思議に思っていたんですが……ケーファーさんを見て納得しました。今の魔王は、無闇に人を襲ってなんかいない」

僕が今まで我慢してきた物が報われた。

そんな気持ちになる。まだ終わってなんかいないけど、本当に、や

つと一歩だけ進めた。
感謝したいけど言葉がでない。

「ははは。どんな事情があるかはわかりませんが、私達にとって都合が悪いものではありません。さて……すみませんが、本題に入ってよろしいですか?」

どうやら村長にとって僕が魔王かどうかは本当に重要な事ではなかったらしく、さっきよりも真剣な顔で、じっと見てくる。

なんだろう……緊張してきたな。

「はい、なんででしょう?」

「実は、あの魔獣を譲って頂きたいのです」

「……へ?」

魔獣って、サラマンダー?

どうして?

少し不思議に思った後に、何かしらの見せしめや、生け贄に使われるんなら……嫌だ。

なんて深読みするけど、村長は真剣な顔で事情を説明してくれた。

「見ての通り、この村は辺境。資源は豊富なのですが人が少ないので、とても裕福とは言えません。普通に暮らして行くのに問題は無いのですが……。此度は魔獣退治の為に、傭兵を雇うのに村から金をかき集めたのです」

「えっと、そこまではわかります」

むしろ傭兵を雇えるお金を出せるだけ、そこらの田舎よりは不自由ないだろう。危険だけ。

「それで、何故、サラマンダーが？」

サラマンダーと言う魔獣ですか。と村長は呟き、続けた。

「これからの冬の食料にしたいのです！」

えー。

思わず心の中でそう言った。

しかし彼の演説は続く。

「冬の食料の備蓄はありますが、余りにも少ない。越せない事はないでしょうが、辛く長い冬になるでしょう。しかし！あのように巨大なサラマンダーならそれも解決できましょうぞ！」

確かに熊の三倍ほどの体躯のサラマンダーならかなりの食料だと思う。

魔力を持つ事以外は動物とそんなに変わらないから食べれもするだろう。

でも人間は魔獣を珍味やゲテモノ扱いしてたと思っただけ……なんていうか。

強い。

田舎強い。

見境無しだ。

「はは、そういふことなら良いですよ」

「本当ですか!？」

意味もなく無体に扱われるなら絶対に譲らない。
けど、食料なら自然の摂理だと僕は思う。

だから、僕は彼の頼みに頷いた。

「ありがとうございます。では、食料に大分余裕ができましたし、
今宵は少し贅沢に村で晚餐を開きましょう! ケーファーさんも良か
つたら食べてください!」

そついうと村長は嬉しそうに外へ出ていく。

背に腹は変えれないから傭兵を雇ったけど、やっぱり冬越しは悩み
の種だったんだろう。

ていつか、僕、置いてかれたんだけど外出て良いのかな?

「良いよね、きっと」

ここに居ても仕方ないし。

村長の家と言っても他の家と大して変わらない。強いて言うなら村
の真ん中の広場に一番近いくらいだろう。

ドアを開けると、目の前は広場で、さっきよりも随分賑やかになっ
てる気がする。

現に慌ただし走り回ってる人や遊んでる子供の姿が見える。

辺境の村なのに若い人が多いなあ。

ケーファアはそんな感想を抱いた。

普通なら若者は王都や大きな街に出るが、この村は魔界に近い事を除けば資源も豊富で暮らしやすいのだ。

魔獣にしても、討伐が必要なほど魔界から来るなんて稀なのである。魔獣には魔獣のテリトリーがある。

少し広場を散歩していると、それに気付いた子供達の一人が駆け寄ってくる。

「魔人のお兄さん、魔獣退治してくれてありがとう」

女の子は、そう言って無邪気に笑う。

僕は思わず、その頭に手を乗せて撫でる。

「傭兵の人達は魔人なんて信用しちゃう駄目だ〜って言ってるけど、魔人のお兄さんは良い人だよな？」

「あはは、そう言われると少し困るけど……。人に危害を加えるつもりなんてないよ」

僕はルーシーとの未来の為に人と仲良く暮らしたいだけで、特別に人が好きって訳じゃないから良い人かと聞かれたら困る。けど、彼女は気にした様子もなく嬉しそうに話し出した。

「私のお兄さんもね、傭兵なの。炎の怪物がでてきて、逃げて来たんだって。戦った人は誰も帰って来なくて……。残った傭兵さんと村

の男の人で、もう一度戦おうって相談しと時に魔人のお兄さんと天使のお姉さんが来たの」

傭兵は全滅。

そう聞いてたけど、一応逃げれた人は居たらしい。

最も部隊として機能しなくなった以上、全滅は全滅だけど。

「それでね。傭兵さん達がまた戦いにいったら……多分帰ってこなかったと思うの」

……まだ小さいのに鋭い子だ。

人族全てがこんな小さな頃から察しがいいなかと考えたけど、他の子が無邪気にはしゃいでる所を見ると、この子は人一倍敏感なんだろうな。

「大丈夫だよ。炎の怪物は僕が倒したから」

「うん！だからね、魔人のお兄さんにコレあげる！」

そういうと彼女は自分の首に巻いていた物を、ふわりと僕の首にかけた。

「お姉ちゃんに教えて貰ったの！マフラーって言うんだって。これから寒いから暖かいの！」

魔力で包まれてる僕は多少の寒さなんて感じないのに、ふわふわした糸で紡がれたソレは確かに暖かく感じた。

これは……かなり嬉しい。

なんか作りが歪なのは作り慣れてないのに一生懸命作ったんだと思

う。

「ありがとう、大事にするね」

僕がそう言つと彼女は、あはっ。と声をあげて笑つてくれた。

「おーい！お嬢ちゃん！これからちよつとした宴会をやるみたいだから、料理手伝つてくれんか!？」

「あ、はーい！ごめんね、魔人のお兄さん。私お手伝い行つてくる
！」

そう言つと彼女はパタパタと走つていく。

あの年で料理の手伝いとかしてるんだ……。

その日の夜ご飯は久しぶりに豪華だった。
ルーシーも喜んでくれたし村の人とも仲良くなれたと思う。

傭兵の人達はまだ気を許してくれてないみたいだけど、頑張ればな

んとかなる気がしてくる。

だって、今日はこんなに楽しい日だったから。

ご飯も終わって、みんなが酔いつぶれ始めた頃、ルーシーと二人で散歩に出た。

でも、ご飯の時はあんなに楽しそうにしてたのに何か困ったような顔をしている。

「ねえ、ケーファー」

「ん？」

「すごく遠いからね、気にしてなかったんだけど………どんどん近寄ってくるから言うね？」

「どうしたの？」

「ケーファー以外の……魔人の気配が近寄って来てるの」

ルーシーは僕の手をギュッと握りしめて、そう言った。

四十八話 魔王の陰謀（後書き）

さて、次も魔王様のお話になると思います。

そしたら……うーん、王都に残った人たちのSSを一話使って書くか、さつさと本編に行くかどうかでしょう……。

また、こつこつと更新していきますので御愛読よろしくお願ひします
すゝm(――)mゝ

誤字脱字報告、感想等頂けると喜びます。

四十九話 魔界の陰謀

天使は魔人の天敵。

個々の強さは魔人が上回るだろうけど、天使達は群れて襲いかかってくる。

基本的に自分勝手に行動する魔人にとって複数の天使に襲われては逃げる事も難しい。

そして何より……天使は魔人を察知する能力に長けている。
丸一日歩くような距離から補足できるみたいだ。

だから、僕はルーシーの言葉を疑ったりはしなかった。
けど、間違いなく……油断していた。

ここまで近くに來たら僕にも同族の気配はわかる。
特に、これほど強い魔力を持っていれば。

「それに、随分覚えのある魔力だなあ」

ガチガチに近接能力に特化したタイプだ。

このタイプの魔人とは何度も戦った事があるけど、正直強い魔人は少ない。

みんな大なり小なり肉体強化はしてるから、それを極めるより攻撃魔法や防御魔法を磨いた方が強くなれるのが理由だけど……。

この魔力量を全部、強化に回してるとしたら話は別。

「ていうか、これ、四天王の魔人だろうな」

厄介だ。僕の方が強いけど、油断はできない。

ルーシーについてきて貰えば良かったかもしれない。

とは思うものの、すでに手遅れ。

四天王ガルフスと呼ばれる魔人は、もう視認できる位置まで来ている。

……そういえば、四天王のイライザがやられたって話があったけど、今は三人しかいないのかな？

なんて無駄な事を考えているうちにガルフスはハッキリと見える位置まで来ている。

どんな用件かはわからないけど、覚悟はしたほうがいいかなあ。

「久しぶりだな。魔王」

目の前に来たガルフスは、いきなり襲いかかる事はなくそう言う。ちよつと前に気付いたけど少し後ろに人間の男もいた。

あまり魔力を感じない所を見ると魔法使いでもなさそうだけど……なんでガルフスと一緒に？

「うん、久しぶり。その様子だと魔王の地位を掛けて戦いに来た訳じゃなさそうだね」

ガルフスの腕はただでさえ人間の胴体ほどの太さがあるけど魔力を全開にした戦闘状態の彼はもう一回り巨大化する。

上級魔法にも匹敵する威力を持つ拳がガルフスの最大の武器だけど、今はソレを使う様子もない。

彼自信も余裕そうにニタニタ笑っているし僕に喧嘩を売りに来たわけじゃなさそうだ。

「ああ、今日は警告と嫌がらせに来ただけだ」

ガルフスは嫌な笑いを浮かべながら続ける。

「俺たちは、アンタを魔王とは認めない」

僕は、その言葉を少しの間、理解する事ができなかった。魔族の間では力こそが全てで、一番強い者が王となる。

彼自身が僕を認めないなら、わかるけど彼の言い分ではまるで、魔界全体の意思のようだ。

「フン、もっと簡単に言っただけ。元魔王のケーファア。アンタより強い奴がいるんだよ」

「なんだって……？」

僕だって自分の力に自惚れるつもりはない。現に勇者の一人に圧倒され逃げ出している。

けど魔界の強者はことごとく倒した。

だからこそその魔王の称号。

それなのに、戦いもしないで僕より強い魔人がいると聞いても、簡単には信じられない。

「って、まさか、その人間？」

正直、余り気にしてなかったけど、フードを目深に被った彼は怪しすぎる。

……男の人だよな？

「無関係、とは言えないがコイツじゃない」

だよ。幾ら切羽詰まっても人間を王に仕立てるとは考えずらい。

本人は一言も聞かず、見えている口は笑っている。
なんか怖い。

「俺たちは魔王の指揮の元、人間達に戦争を吹っ掛ける。魔界に来い、ケーファー」
「……………嫌だ」

戦争が始まれば人との共存なんて夢の又夢だろう。
けど、魔界がルーシーを受け入れるとも思えない！

そして…………。

「今代の魔王は、この僕、ケーファーだ！戦争なんてさせやしない！！」

僕は、二枚の翼を大きく広げ魔力を解放する。
争い事は余り好きじゃないし、訳もわからないけど…………目の前のガ
ルルスと人間を野放しにしちゃいけないと本能が叫んでいる。

「そうこなくつちゃ、面白れえ！！」

ズドオン！！と爆音を響かせガルルスが地面を踏みしめる。
その四肢は先ほどよりもさらに巨大化していてアンバランスだ。

ガルルスは近距離戦では無類の強さを発揮する身体強化に全てを注
いだタイプ。

僕は距離を置こうと翼を羽ばたかせ飛ばうとするが、それを人間が
静止する。

「ああ、周りを良く見て」

畏かとも思っただけどガルフスも不意打ちしてくる気配はない。

一応、警戒はしつつも僕は辺りに意識を向ける。

何か動いてる？

いや、これは……。

「魔獣!？」

魔獣なら多大な魔力を持っているから感知できないはずがない。

でも現に僕は魔獣に囲まれているようで、魔力も感じない。

「アハハ。君が空から安全に攻撃するつもりなら……コイツらが街
を襲うよ?」

「なっ……!？」

街は無関係だ。そう言った所で意味なんてないだろう。

ていうか、なんで魔獣が人間に従っているのさ!!

「言っただろう?警告と……嫌がらせに来たってよお!!」

ガルフスは数Mの距離をたった一步で詰め、巨大な拳を振りかぶる。
ただ僕だって彼の強さは知っているし、そうやすやすと当たっては
やらない。

「野郎、逃げんな!!」

「くっ……火竜顕現!!」

大きく翼を羽ばたかせバックステップ。

そして人間相手に使えばオーバーキル必至の魔法。

体中から炎が溢れでて形成されたのは燃え盛る竜の頭部。

それはガルフスに向かい一直線に突っ込んで行く。

「ウオオオオオオ!!」

咆哮をあげ両の拳をガルフスは竜頭に叩きつける。

竜頭は弾けガルフスは炎の竜巻に包み込まれる。

けど……ガルフスの魔力で強化された体は攻撃力は元より防御力も高い。

これくらいでやれるとは思わない!

「火竜……」

「遅ええ!!」

炎の竜巻の中から巨体が飛び出てくる。

同時に降り降り降るされる拳を僕は両腕で受け止め後ろに吹っ飛ばされる……けど!

「顕現!!」

お返しとばかりに先ほどと同じ魔法を吹っ飛ばされながらも放つ。

ガルフスも、これを迎え撃つ事はできず、直撃するが、吹き荒れる炎の竜巻から、何事もなかったかのように歩いて出てきた。

「へへ、流石に痛いが……アンタの方が深刻そうだな？」
「くっ……。」

攻撃を防いだ両腕が痛む。

空から攻撃すればガルフスはただの的だけど、それをしたら町が襲われる。

かと言って、このまま戦っても……。

「逃げる？ケーファー」

「って、びっくりした!？」

悩んでいたら、いつのまにか僕の隣にはルーシーが立っていた。

傍には転移魔法セラフィック・ゲート。

これを使って来たんだろう。

いきなりの天使という天敵の登場にガルフスも固まっている。

でも……助かった。

「うっん、ごめん。今回は逃げれないんだ。ルーシー、少しだけ時間稼いでくれないかな？」

端から見たら無茶なお願い。

か弱い女の子を盾にするような最低の言葉。

でも彼女は笑ってこう言ってくれる。

「戦うの？珍しいね、うん、いいよ！」

そして、ガルフスの前に立ち塞がる。

「いいの？ガルフス」

「フン、一瞬で叩き潰してやる。身の程知らずの魔王様に……いや、元魔王に後悔させてやらないとな」

これで、また町を襲うという話になったら困ったけど、どうやら受けられるようだ。

確かにガルフスなら並みの天使の一人ならすぐに倒せるだろう。そしてルーシーも、そこまで強い天使じゃない。

けれど……。

「いつまで避けれるかな？」

「避けないもん！」

ガルフスが巨拳を降り降ろすとルーシーも手に小型のセラフィック・ゲートを出現させる。

次の瞬間、彼女の手握られていたのは大きな盾。

それはガルフスの拳を正面から受け止めた。

彼女自身は確かに、そこまで強くない。

しかし、彼女の扱う武具は、どれも強力無比な物だった。

「まさか、戦女神の盾？数年前に天界で起きた混乱で行方不明だったんじゃないかねえのか!？」

「行方不明っていうか……ルーシーが嫁入り道具として貰ってきたんだよ?」

ルーシーの答えにガルフスがあんぐりと口をあける。

これは僕もたまに頭が痛くなる問題んだけど、ルーシーは数年前に僕と駆け落ちする時に、天界の武器を多数、嫁入り道具くらい貰っていいよね。と言って盗んで……いやいや、借りて来ている。

次にルーシーの手の中に現れたのは古い本。

魔法を記録する魔導書。

一度、魔法を記録させたら術者の技量も関係なく詠唱の必要もなく魔法を呼び出せる。

その本は記録者であり、使い手だった少女の名前を取り、こう呼ばれている。

アリスの魔導書。

勢い良く本のページがバラバラと捲られ、ある所で静止する。

魔法の発動条件は二つ。

多大な魔力を注ぎ込む事と、魔法の名前を唱える事。

「アイシクルバインド!」

「ぬ……おおお!?!」

突如、ガルフスの体が氷に包まれていく。

並み以下の魔族なら、凍死はせずとも、氷に封印される程の魔法だ。

「この程度で俺の動きを封じたつもりかああ!!」

ガルフスを覆う氷がひび割れる。

アリスの魔導書は、通常よりも数倍の魔力を消費する為、ルーシーには連発できない。

「ルーシー、ありがとう!後は任せて。雷竜の嘆き!!」

「なっ、お前、自分の女ごと……!?!」

任せて。と言った直後にルーシーとガルフスを無数の雷が襲う。

ケーファーが恋人を自分の魔法で攻撃するなんてありえないと思い込んでいたガルフスは、ルーシーが近くにいる事で油断していた為、迎撃が間に合うはずもない。

そして次に目にしたのは、雷の豪雨の中、平気な顔で下がって行くルーシーの姿だった。

「天使に雷は効かないのね!」

ルーシーは楽しそうにそう言ってケーファーの後ろまで下がって行った。

「ガルフス、終わりだよ」

僕の手の中にあるのは小さなナイフのような形をした魔力。

ルーシーが稼いでくれた時間で作り上げた魔法。

それを上から斜めに降り降ろす。

「古竜の咆哮」

僕が振り下ろした小さなナイフの軌跡そのままに大地が切断される。それは距離を無視して遙か遠くに見える山にすら亀裂を入れ一呼吸置いて……爆発した。

「グ……あ、うおおおお!？」

斬った軌跡の途中には当然ガルフスも含まれており、強靱なその体に一筋の真っ赤な亀裂が走っている。ていうか、正直、切断できなかったのが予想外だ。それだけ肉体強化をすればアレに耐えられるんだろう？

「ガルフス!何やってるんだよ!!」

傍らに居たフードの男が初めて狼狽した様子を見せる。

魔力を余り感じないトコからも彼はそんなに強くはないんだろう。

「う、うるせえ……!くっそ、あの小娘がまさか神器級の武具を持ち出してくるとは……」

「もついい!こんなトコでやられる訳にはいかないっ!逃げるよ!」

フードの彼が、そう言つと先程まで距離をとつて囲んで来ていた魔獣が僕に襲いかかつてくる……けど、何か遅い？

「風竜の息吹」

両サイドから飛び掛つてきたガルードを風の剣で難なく切り落とす。本来なら翼を用いる事によつて僕のように高い移動能力を有する固体のハズだけど、その動きは野生動物のソレを大して変わらない。けど、今はそんな事気にしてもいられないか。

「逃がすと思つてるの？」

今、ここで、ガルフスとフードの男を逃がすと後々非常に厄介な事になりそうだ。

フードの男は人間。早さには限界がある。ガルフスも優れた身体能力を持っているけど、それでも僕より早くはない。翼を持つ魔人に速さで勝てるのなんて、最上位の天使くらいだろう。

「そうだね。君の事は聞いている。だから、どうすれば君が追つてこないかも、知つてる」

「……？まさか！！」

フードの男がにやりと笑つて、声を張り上げる。

「行ってこい！魔獣達、町を襲うんだ！！」

途端動き出す当たりの影。そして、影の一つが彼の元に高速で近寄り彼はそれに跨つた。

彼の傍に来たのは漆黒の様な巨大な馬に乗つた騎士。デュラハン。

彼はデュラハンの馬に跨り騎士の前に座っている。これを倒すとすると少し時間がかかるだろう。

「じゃあね。追いかけて来たかったら来てもいいけど……町がどうなっても知らないよ？ガルフスも行くよ！！」

彼とガルフスはそういつて走り出す。その拍子にフードが取れて見えたる姿の髪の色は……緑。

「まさか……勇者！？」

魔物を操ってるように見えるのは勇者の能力。そう考えれば納得もいくけど、なんで勇者が魔人と手を組んでるんだよ！！

「ああ、でも考えてる時間なんてない！急いで戻ろう！」

「うん！！」

ルーシーのセラフィック・ゲートは使うのに簡単な条件がある。なんで、あの町で使えるようにしておかなかつたんだ、僕は！！

「ケーファー。急いで帰るけど、多分、大丈夫だと思う」

「……？」

ルーシーはにっこり笑ってスピードを上げる。

僕は頭に疑問符を浮かべつつも彼女に追いつこうと大きく翼を羽ばたかせて滑空していった。

「よう、遅かったな。天使の姉ちゃん」

「あはは、みんな、ありがとー！」

町の入り口についた僕が見たのは動かなくなった無数の魔物と武装した十数人の男性……数人は見覚えがある。この町が雇った傭兵の人達だ。

「あのね、ケーファー。ケーファーのところに行く前に、みんなに魔物がいっぱい来てるから一緒に戦ってっってお願ひしたの」

ルーシーは僕に笑顔で話しかける。

そしてルーシーの後ろにいる、この戦いで指揮を執っているだろう人が僕の目の前に来た。

「魔人。アンタを信用した訳じゃない。けど、俺達は、この町に雇

われたからには、この町を守る。だが、敵の数が多すぎる。頼む、手伝ってくれ」

傭兵の人は決して頭を下げはしないが、その言葉は僕を頼りにしてくれていた。

魔獣の先頭集団は鎮圧していれど、まだまだ魔獣の数は多い。何故か動きは少し鈍いけど、あの男はかなりの数の魔獣を動員していたようで、たった十数人の人間で戦うのは辛いだろう。

しかも、傭兵は数人。後は町の腕に覚えのある男の人だと思う。

「うん。僕の方からもお願いする。一緒にこの町を守ろう！」

そう言うと傭兵の彼は、少しだけ笑って、僕の肩を叩いてすれ違わずにこう言った。

「ありがとな。ここには、妹も連れてきてるんだ。絶対に魔獣を町に入れさせたりはしない」

自分の士気が高揚してるのがわかる。どうやら僕は頼られてすごく嬉しいらしい。

こうして、僕と人間との初めての共同戦が始まった。

四十九話 魔界の陰謀（後書き）

よくよく見てみたら次で50話。

それにしても最近、投稿感覚が伸びすぎてる気がする。

もうちょっと早く投稿できるように……って毎回言ってる気がします……

さて、1話王都の人々の話も混ぜようかとも思いましたが、もう少し後にして本編に戻ろうかと思えます。

やっと王都から出てまともな旅らしくなってきたので、リユートの商人としての暮らしを書いたりミナがリユート相手に八つ当たりしたり、甘えたりしつつ、ストーリーを進めていく感じになるかなー、と予想。

書いてみないと自分でもわからないってどうなんだろうorz

五十話 100の家の西の街

「もう真つ暗。思ったより時間かかったわね」

「オレとしては、預かってくれる馬屋があつたのに驚きだよ……」

早朝に王都を出て数時間。

本来なら翌日の昼前あたりに着くであろう距離をオレとミナは半日で駆け抜けた。

いや、実際に駆けたのはケルロンだけ。

正直、流石は魔獣と言うべきか。

ケルロンは、一度の食事の時間を除けば、ここまで休まずに馬車を引いて走り続けた。

しかもケルロン自身は疲れた様子もない。

そのお陰で夕日が沈む前に街に着いたんだが、今度はケルロンを預けるのに手間取った。

まあ、魔獣だから仕方ないんだけど……。

まさか好んで預かりたいなんて人もいないだろう。

「それで……直ぐにクレアさんの所に行くの？」

「ああ、そつだな。出ればクレアの家に泊めて貰いたいし」

正直、残金が少し心許ないしなあ。王都を出る直前に、ほとんど使ってしまった。

「有名な魔具店なんだけど……今からなら丁度店が終わる頃かな」

ここから歩くとなると多少時間がかかる。
けど、隣でカチコチに緊張している魔女を見ると丁度良いかと思っ
てしまう。

「大丈夫だつて」

彼女の頭を、とんがり帽子越しに撫でると無言でポスンっ！と胸板
を殴られる。

ま、殴ってくる元気があるなら平気だろ。

少し古ぼけた扉を、ゆっくりと開く。

別に本当に古いのではなく、魔法道具屋っぽさを出す演出とクレア
は言っていた。

ギーと音をならして動く扉に、カウンターの女性も気づいたよう
で顔をあげる。

「すみません、お客様。今日はもう閉める時間です………っ、
あら、リユート。いらっしやい」

カウンターに居たのは運の良いことにクレア本人だった。

「どうやら、今日の売上を数えてるようで、オレだとわかると、すぐ
に手元の紙に視線を落とす。」

「久しぶり………って、いうか、随分普通な反応だな」

「今忙しいのー。と言いながらクレアは帳簿と思わしき紙にペンを走
らせる。」

「いや、さ、確かに大事だけどな？」

「いつもの酒場」

「ん？」

「あそこで話そ？もう少しで終わるから先行ってて」

「一応クレアは仕事中。」

「ま、妥当か……。」

「わかったよ。ちゃんと来いよ」

「クレアは短く、ん。とだけ返事をする。」

「そして店を出ようとするが………そこには石像の如く動かないで出入
口を塞いでる少女が居た。」

「………近くの酒場まで行くぞ？」

「あ、はいっ。行きます……」

何故、敬語……。

とりあえず、固まって動かない少女の手を引いて近くの酒場に連れ込んで適当な椅子に座る。

「とりあえず、落ち着け。ほら、飲み物どれにする？」

「なんでもいい。……冷たいの飲みたい」

ミナはそれだけ言うと、ぐったりとテーブルによしかかる。

「緊張しすぎだ」

ミナからしたらクレアは普段は優しくだったが、リユートの事となると少し人が変わる為今、リユートの隣に自分がいる事になって言われるか怖くて仕方ないから当然の事だった。

何度か嫉妬の余波は浴びたものの基本的にクレアには良くして貰っていた。

元の世界の肉親に余り良い感情を持っていないミナにとってもクレア達は家族同然なのだ。

「わかってるけど……やっぱり怖い。変わった自分がどう思われるのか」

「考えすぎだつての。お、ほら、飲み物が来たぞ。飲んで落ち着け」
「……貰っ」

彼女は、そう言って乾杯もせずにグイッとグラスの半分ほどを一気

に飲み干す。

不安なのもわからないでもないけど……。

そして彼女の不安を解消できないままにリュートとミナが向かい合
って座っているテーブルの間の椅子に人が来る。

「お待たせ、リュート」

その声にミナが驚かされた猫のようにビクツと反応した。
ここまで来ると、ちょっと面白い。

「早かったな」

「帳簿はほとんど終わってたし、後は戸締まりだけだから。でも、
お店の中では一応……ね？あ、すいませーん！私にもコレと同じの
ください」

席に座るとクレアは即座に自分の飲み物を注文する。

なんていうか、ケルベロス……いや、ケルロンに襲われた時よりは
心配していないみたいだ。

「さて、それじゃあ、あの後どうなったか聞かせて貰える？」

手早く運ばれてきたグラスを持ちながら彼女はそう言った。

「ふうん。すぐに顔出さなかったのは少し稼いでた訳ね。で、王都に行ったら武闘祭に捕まった、と」

「そういう事」

「ま、武闘祭の事は、こつちまで噂になってるわよ。で、その子が魔女ミツキ？っていうか……ミナちゃん、よね？」

またミナがビクツと体を震わせる。

それでもなんとか声を出せるようで先程までよりは落ち着いたみたいだ。

「えっと、お久しぶりです……クレアさん」

うん、すっげー小さい声でぎりぎり聞き取れるかって音量だけかなっつ。

ただクレアはそれを気にした様子もなくミナの手を取りはしゃいだ。

「そうよね！ミナちゃんだろうなとは思ってたんだけど……でも怪我はどうしたの！？とにかく無事で良かったわ……。ごめんね、半分ミナちゃんの事は諦めてたわ、私。でも、本当に良かった……！」

とりあえず歓迎してくれてるようだけど、いきなりのテンションにミナが、どうしていいかわからなくなってる。時折、こっちに向けられる視線は、助けて。と言いたいように見えるが、あえて無視だ。

「あ、ありがとうございます、クレアさん。怪我はリユートの能力で治して貰って……」

「待って、ミナちゃん」

クレアがミナの発言を遮る。

ミナは一瞬不安そうな表情になったけどクレアは、笑顔でこう続けた。

「そんな丁寧な言葉使いしないで？リユートと同じでいいわよ。私達、『家族』なんだから」

その言葉でミナは完全に固まった。そしてゆっくりと頭の中でクレアの言葉を理解して笑顔で返事をする。

「うん、ありがとう……クレアさん」

「あはは。ま、さん付けくらいはいつか」

ミナの言葉にクレアは機嫌良さそうに笑う。

実はクレアが言った言葉は普段ランディが皆に言っていた言葉だ。今回はランディがいない為、クレアはその役目を買って出てくれたようだ。

「泣くなって」

「なっ、誰が泣くか！」

「痛っ!?!」

目尻に涙を溜めたミナをからかうとテーブルの下で足を踏まれた。

ってか、わざわざ身体強化して踏みやがったな……かなり痛い！

「ふんふん、ミナちゃんとリユート……随分仲良くなったみたいね」

今のやり取りのどこにそんな要素があったのか知りたいが、クレアがジト目を向けてくる。

「うん。リユートにはいろいろ、シテもらったから」

「何をだよっ!?!」

クレアがまた変な嫉妬心を出したかと思えばミナも変な事を言い出す。

なんだこれ。

「まあ、いいわ。私も明日はお休みだし、時間はたっぷり……話し合いましょう?」

「うん。わかったわ、クレアさん」

どうしてこうなったか理解はできない。

だけど自分にコレを止めれない事は理解できる。

だから、オレは……。

「すみません、注文いいですか?」

適当にツマミでも食べながら現実逃避してる事に決めた。

二人の小競り合いは実に二時間ほど続き、落ち着く頃にはオレが頼んだツマミも消化され尽くしていた。

「んで、リユートとミナちゃんは私の家？」

「ん、駄目か？実は宿代も心許ない」

安宿に泊るくらいならクレアの家を希望したい。

「大丈夫なの？貸す？」

「商品はあるから明日売ってくるよ」

クレアは明日は休みらしいがオレはそうもいかない。

ミナは……ま、どっちでもいいか。

商品を大量に持ってこれたのはミナのお陰だしな。

「そっか。まあ、いいけど空き部屋一つしかないから狭いわよ？」

「私、リユートと同じ部屋で大丈夫」

「よし、ミナちゃんは私と一緒に寝よっか」

発言を即座に却下されたミナが、むう。と黙り込む。

まあ、これが普通だろう。

「女同士お話ししましょ？代わりに私でわかる事なら教えてあげるから」

そう言われミナとしても聞きたい事はあるらしく素直にクレアと同じ部屋で寝る事を同意していた。

そんな訳でオレは久しぶりに、ちゃんとしたベッドで一人で寝る事になった。

それは確かに少しだけ寂しいと感じたけど、寝心地の良い一人だけの空間はすぐに俺の意識を飲み込むほど、気持ちよくもあった。

五十話 100の家の西の街（後書き）

五十話です。

なんかキリがいいです。

この話から実質の三章になります。

そのうち章機能もちゃんと使いたいです。

リユートの能力とかも出てきたし、後書き辺りに気まぐれで人物紹介でも書いていこうかと思っているのですがどうでしょう？

大々的に人物紹介のページ作ってネタバレ載せるのはどうかと思って読んでくれた人向けに綴ろうかなとか思っています。

それでは、誤字脱字感想等お待ちしております。

五十一話 彼女の夢（前書き）

さて、実は、この話本編にはまったく関係ありません。

読まなくても、これから先の展開にまったく影響ありません。

しかもわりと思いつきで書いたので、話がどっか破綻してるかもし
れませんorz

それでも構わない！って方は読んで頂けたら嬉しいです；；

五十一話 彼女の夢

「これくらいの贅沢は……いいよね」

雪の振る夜、私は普段より少しだけ弾んだ気持ちで帰宅していた。今日はクリスマス・イヴ。

自分には関係ないと思ってたけど、飲食店でアルバイトしてる私に関係ないハズがなかった。

人で溢れかえる店内はまさに戦場。

私も目が回るくらい動き回った。

一番、お仕事できるアルバイトの先輩はデートとかでお休み取ってるし……。

お仕事は明日もある。

流石にちよつと疲れた私は自分へのご褒美に普段は決してしない贅沢を少しだけしてみた。

手持ちの袋の中に入ってるのは、フライドチキンとイチゴのケーキ。……って言ってもコンビニで買ったヤツだけだね。他のお店、閉まってるし。

25日は土曜日だからお給料はもう入ってるハズだし、これくらいなら大丈夫なハズ。

私も少しだけ、このクリスマスを楽しもう！

いつもより軽い足取りで長い髪を靡かせて歩く。

ちらほら降る雪を眺めながら……。

そして私は、ふいに空から何か大きな物が落下してきてるのに気づいた。

それはどんどん近づいてきて、やがてソレがナニか認識できる距離になる。

「……人？」

そう思った次の瞬間には私の後ろでグシャ！と嫌な音がした。

……えー。何これ、私、振り向かなきゃいけないの？

私が見たのは、灰色の髪の少し変な格好をした男の人だった。

『世界に蔓延る勇者達』 番外編〈彼女の夢〉

一瞬だけ不謹慎な事を考えて現実逃避をしたけど、よく考えたらそんな場合じゃない。

あの高さから落ちて助かるだなんて思えないけど、それでも何もしない訳にはいかないよね。

「だ、大丈夫ですか!？」

私は慌てて振り返り、それを後悔した。

どのくらいの高度から落ちてきたのかわからないけど、間違いなく人が助かるような高さじゃなかったはずだ。

その証拠に辺り一面は綺麗な雪の白に赤い色が混ざってる。

「えっと、これ……病院? いや、んっと、警察?」

混乱した頭で携帯電話を握りながらそう考える。病院を除外したのは……どう考えても助かると思えなかったからだ。

「あー、いや。どっちもやめてくれると助かる」

「へ?」

いきなりの声に辺りをキョロキョロと見回す……けど、声の主は見当たらない。

でも、なんだろう。この声……聞き覚えがあるような、すごく優しい声。

何、考えてるんだろう。私、こんな状況で。

改めて気をしっかり持つと血溜りから真っ赤に染まった人が起き上がってくるのが見えた。

「……………え? ふえ!?!」

驚きの余りに自分でも驚くくらい情けない声が出る。
でも、仕方ないじゃない！こんなホラーみたいな光景！

「あー、痛……くもないか。辺りのはオレの血か？その割にはなんともないな」

よくわからないけど、空から落ちてきた人は無事なようで自分の手を動かしながら喋っている。
なんなの？なんで、生きてるの？

んーん、生きてる事自体は良かったけど……っというか、どこから降ってきたの！？

上を見上げても人が落ちれるような高層ビルなんてない。一番高くても民家の屋根程度。

飛行機からでも飛び降りたならわからなくもないけど、何の為に？

「あの、えつと……大丈夫ですか？」

結局、色々聞きたかったけど、出てきたのはそんな普通の言葉。

「ああ、うん。自分でも信じれないけど無傷みたいだ」

いや、おかしいでしょう。明らかに辺り一面、アナタの血塗れなんだけど。

「ていうわけで、大事にしたくない。どこにも連絡しないでくれな
いか？オレにも何がなんだかわかってないんだ」

「……貴方が、そう言うなら」

納得はいかない。

けど、見かけは本当に傷一つ無い。いや、血塗れだけど。それに何か事情があるみたいだし。

彼は私に片手を差し出してこう言う。

「オレはリユート。悪いけど少しだけ質問していいかな？」

「……美奈。水月 美奈です」

差し出された手を恐る恐る握り私は彼の名前を知った。

名前はリユート。苗字はないみたい。

少し変わった格好をしてる。ていうか帯刀してるんだけど、何それ、本物？

一番、目を惹くのは灰色の髪。雪を合わさってすごく綺麗。

それに、よくわからないけど……この人の隣にいると気が抜ける。

正直に言えば私は、会ってすぐの得体の知れない人物相手にすごく安堵感を抱いてる。

近くの公園に移動して少しだけ話を聞いた感想が、これ。

そして本題。

どうして空から落ちてきたのか？

これは私の理解の限度を超えていた。

「ケル…ベロス？召喚……？」

「はあ、やっぱり、この世界には魔法がないのか。ていうか魔物すらないみたいだな。かなり発展してるもんなあ、平和な証拠か」

「いや、えっと、ごめんなさい。言ってる事がよくわからない」

ていうか、なんだろう。危ない人なのかな。

魔法とか魔物とか小説じゃあるまいし。

「全部話せば長くなるから、今度な。要点だけ言うなら、オレの居た世界では異世界の人間を召喚する。なんて事をしてたんだ。そして、ケルベロスと戦闘中に何故かそのゲートが現れて入ってみたら上空千メートル。正直死んだと思ったね」

「ていうか、なんで生きてるのよ」

「わからん」

……。

信用できない。できないけど……信用したいと思ってる自分がいる。ああ、もう！！なんなの！！なんで、こんな奴に惹かれてるの！？

私は……そんな軽い女じゃないっ！！

何度か告白された事はあるけど、恋愛してる暇なんてないから断った。

それなのに、こんなわけわかんない奴に惚れるだなんてありえない。でも、頭で幾らそう思っても、心は従ってはくれず、私は自分を追い詰める言葉を言ってしまう。

「何か、証拠あるの？」

明らかに疑っていると宣言してるような物だけど彼は少し余裕そうに笑みを浮かべて人差し指を立て……。

「この世界には魔法がないんだろう？なら、これでどうだ？」

その指先に小さな炎を灯した。

「何、それ……。手品？」

「手品つてのがよくわからないが……。魔法つてほど大きな物でもないけど、魔力を火に還元しただけだよ」

オレは魔法が使えないからな。と彼は続ける。

駄目だ。トリックなんだ言いたいけど、私は今ので完全に彼の言う事を信じてしまった。

「とりあえず、ありがとう。美奈のお陰で、この世界の事は少しわかったよ」

「ん、どっいくの？」

「さあてね。とりあえず元の世界に戻る方法でも探ささ」

そう言って遠ざかってく彼。

ふいに私はどうしようもなく不安になる。

「あ、あの！」

「ん？」

待て、私は何を言うつもりだ。

「行く所ないんでしょう？だったら……」

やめて。男を養う余裕なんてあるはずない。

「私の家に……来ない？」

「……なんで、あんな事言っただろうな、私」

25日。リユートと同居2日目。

アルバイトが終わって私は、両手に昨日より大きな袋を1つずつ持って帰宅する。

今日は昼までだったから、お金を下ろしてスーパーに行ってきた。つていうか、買いすぎ……。どうするのよ、こんなに買って。リユートと二人なら数日あれば食べきる量だろうけど、問題は出費だ。

生活はできるけど、貯金は無理だろうなあ……。

高校生になって始めたアルバイト。そのお陰で中学生の時ほどギリギリの生活じゃなくなった。けど、男性一人分の食費が増えたら、またギリギリの生活になるかもしれない。

リユートが帰れば元の生活に戻るだろうけど……。なんて、考えて、帰って欲しくないと思ってる自分に気づく。

あー、もう、なんでこんな事考えなきゃいけないの!?

お金の面を心配するならまだしも、あんな男が居なくなる心配だなんて!!

「ただいま!」

ついイライラして乱暴に自宅のドアを開ける。

一人で暮らすには十分な小さな部屋。二人で暮らすには少し狭い部屋。

でも、その小さな部屋には帰ってきた私以外、誰もいなかった。

「リユート?リユート、どこにいるの?」

聞かなくてもわかる。小さな部屋に隠れる場所なんてあるはずがない。

「リユート……ト……？」

靴を脱いで部屋の真ん中まで行った所で私は膝から崩れ落ちる。

ああ、昨日会ったばかりの人がいなくなったただけなのに、なんでこんなに悲しいんだ。

「リユートお……」

ぺたんと力なく座ると涙が出てきた。

どこに行っただろう？元の世界に返った？

部屋を良く見るとリユートが持っていた3本の剣のうち、折れた1本だけが置いてかれている。

それだけが、ここにリユートが居た事実を残して、リユートは私の前から消え……。

「美奈？……泣いてるのか？」

………は？

振り向くと玄関に真新しい服を着たリユート。

………なんで、アンタがいるんだ。ん、正直に言うとう嬉しいんだけど。

リユートは私の傍に来ると頭を撫でて来る。

「！？、~~~~っ！……！」

「痛っ……くはないけど、なんで殴る!？」

うるさいー！
声を出すと大声で泣きそうだから、ぼすんっ！とリュートの胸板を殴った。

「ご飯っ……作るー！」

「え、いや、あの……ありがとう？」

ああ、もう恥ずかしいー！

「ところで、何やってたの？ていうか、どうして出かけたの？」

包丁を持ち野菜を切り始めると少し落ち着いてきた。まさかリュートが出掛けるだなんて思わなくて驚いた。

「ん、いやさ。まさか世話になりっぱなりって訳にもいかないだろう？ちよっと、この世界のお金を作って来たんだ」

「作ってきたって……どうやって？」

「いや、苦労したよ。ミスリル結晶剣でも売ろうと思ったんだけど武器屋ってないんだなあ」

当たり前なんだけど、リュート常識無さすぎ。ていうか、警察に職務質問されてたら、どうするんだらう。

そんな私の心配とは関係なくリュートは嬉しそうに今日あった事を話してくれる。

「それで質屋？だかに行こうとしたんだけど、そこでも身分証を出せとか言われるしさ。貴族じゃあるまいし、そんな物持ってないって」

話しぶりからしてリユートの居た世界って中世くらいなのかなあ。

「どこかで買い取って貰えないかと質屋を渡り歩いてたらな。丁度、居合わせた組長って人がオレの剣に一目惚れした！って言って買ってくれたんだよ！」

調子よくフライパンの中を菜箸で混ぜていた私の手が止まる。

「いやあ、事務所で飲み物まで出してもらって、用心棒やらないか？なんてまで言って貰えてな。そっちの返事はまだ保留してあるけど、剣は1本買い取って貰えたんだよ」

なんていうか、それは……とても危ない人達な気がするの私の気のせいなのかな？

とりあえず、考えないようにしよう。

「まったく、よく昨日の今日でそこまでうるつけたわね？」

「一応、旅してたからなあ。道を覚えるのは得意さ」

とりあえず、話しながら作っていた料理を次々とテーブルに並べる。この家でここまで豪華な食卓になったのは初めてだ。

「お、うまそ」

「正直、作りすぎたかなって思うけど……。料理は得意だから。安心して食べて」

「ありがたく」

そう言つとリユートは、お箸を持って器用に食べていく。

異世界にもお箸ってあるのかな？

「ん、そだ。美奈、こつち来て？」

ぼんぼんと彼が手で叩くのは、彼の隣。

「……へ？」

「いいから、おいで」

またぼんぼんと自分の隣を叩く。

えーっと……？

つて、だからこんなに動揺する必要ないっ！

リユートと私のご飯を食べてるのは小さな丸テーブルだ。上には目一杯料理が乗っている。

別にわざわざ立つ必要もないくらいの距離。私はテーブル沿いに、座りながらずれる。

そしてリユートの隣に行くと頭をぽふんと叩かれる。

「何するのっ！」

「ちょ、殴るな！」

お返しに肩をぽすんと殴る。残念ながら私は同年代の女の子と比べても非力な方なのでリユートは痛くなさそうだ。

「ほら、これ。いつまでかわからないけど、いや、迷惑だっけ言うなら出てくけど……世話になるから家賃」

そう言ってリユートが私に渡して来たのは数センチはあろうかというお札。しかも全て諭吉さん。

「な、な、何これ!？」

「組長さんが剣を買ってくれたっていったら？その代金の大半。この世界の貨幣価値がわからないから、どれくらいかわからないけど……」

「えっと、すごい大金……なんだけど」

百万円どころの騒ぎじゃない。

ていうか、こんなお金手にしたのは初めてでなんか腕が震えて来た。

「そっか。良かった。あ、ちなみに、オレも自分で行動するから全部じゃないぞ？それ。少しだけ抜いてある」

「いいけど……。ていうか、こんなに貰えない!?!」

食費くらいは払って欲しい。そうは思うけど、これは貰いすぎだ。

でも、リユートは、札束を付き返す私の両手を握り返してこう言う。

「美奈に持ってて欲しい。オレ、この世界で信用できる人がいないから。できるなら……帰るまで美奈と一緒に、ここで暮らさせて欲しい」

リユートの真剣な顔。

ああ、もう、そんな顔されたら断れない。

それに……少なからず何もわからない、この世界で私の事を頼りにしてくれてるのは嬉しい。

「私も……リユートと一緒に暮らしたい……」

気づけばそんな言葉を口走っていた。

~~~~つ!~!

自分の顔が赤くなるのがわかる。  
もう駄目だ。口にしたら押さえきれぬハズがない。  
頭で幾ら否定しようともう間に合わない。私は……リユートに惚れ  
てる。

まるで、ずっと前からリユートの事が大好きだったみたいに、リユ  
ートの事しか考えれなくなってる。

そして、リユートも……。

「オレも……空から落ちてきて美奈を見て、なんか……この子、可  
愛いなって思った」

そう言ってくれた。

顔も真っ赤だ。リユート可愛い。

リユートの顔が近づいてくる。

マズイ。お互い手を握りながら、この距離。

拒否する術が思いつかない。ていうか……私も、これを望んでる。

自然と目を閉じて……顎を引く。唇にさわるかすかな感触が温かか  
った。

「リユ……ト……？」

ふわっとリユートに持ち上げられた。

あ、これ、お姫様抱っこ……。

恥ずかしいけど、頭がぼーっとして拒絶できない。照れ隠しに殴る  
うって気にすらならない。

そのまま、ベッドに私は寝かされる。  
体が熱いけど、体のどこにも力が入らない。

私の上にはリユート。

……えっと、駄目だよな？私まだ、高校生だし。

そんな風に思えど体の力はうまく入ってくれない。  
リユートはそんな私の首に手を回してくる。

駄目、もう一度キスされたら、何がなんだかわからなく……！！

駄目、駄目、でも、リユートなら……。

「やっぱり、まだ駄目っ！！って、きやつ！？」

上にいるリユートを跳ね除けようと手を伸ばした私は……あっけなくベッドから落ちた。

「って、あれ……？」

見覚えの無い天井。少なくとも私の部屋じゃない。

今まで私が寝てたベッドを見てみると、そこにはもう一つの寝息があった。

アレは……クレアさん？

え、あれ？リユートは？

ていうか、リユートと出会ったのは、この世界の王都で、私の居た世界のクリスマスじゃなくなくて……。

……っ！！！！？

全てを理解した私は、扉を開けて台所の水差しの水を少しコップに入れて魔法で冷やし……それを一気に口にする。

顔が熱い！いや、ていうか、普通に恥ずかしい！！

今までの全部……夢！？

とりあえず、恥ずかしくてどうしたらいいかわからない。

ああ、もう！！とりあえず、リユートが悪い！！

冷たい水を呑んで少しだけ頭が冷えた私は先程まで眠ってた部屋じやなくて、その隣……リユートが寝ている部屋のドアを開ける。

スースーと寝息をたててるリユートをみるとソレだけで、一気に頭が冷えて安心できる。

ああ、夢の中でどうして、あんなに私がリユートに惚れてたのかわかりませんでしたけど考えてみたら当たり前なんだ。だって、現実の私が、こんなにリユートの事が好きなんだから。

とりあえず、いつも通り眠ってるリユートの布団に潜り込んでみる。

……暖かい。

リユートに助けられてからはずっと感じてる温もりだ。

ここなら変な夢も見ずに気持ちよく寝られそうだ。

「明日、クレアさん、怒るかな……」

なんて思うものの、中途半端に飛び起きた頭は即座に眠気に襲われ、その暖かさに包まれて意識は混濁していった。

「……………っ!？」

急激に夢から現実に引き戻される。

気持ち悪いほどに頭が切り替わると、すごい汗をかいている事に気づく。

辺りを見回すとそこは、クレアの家。たまに泊まった事があるし、見間違えるハズもない。

「夢か……。つか、夢で良かった……」

自分が異世界に召喚されて、そこで出会った少女に一目惚れをする。なんつー夢だ。

ていうか、相手の少女が確実にミナだった。

一目見て可愛いと思って目が離せなくなって、一緒に住む事になって、彼女の為に何かをしてあげたくて、お金を作って、最終的には彼女を押し倒して……。

ああ、もう本当に夢で良かった。

今まではベッドで一緒にミナが寝ていたから意識しないようにしてたけど、こんな夢を見るだなんて一人で寝れるからって今日は油断



したのか？

まあ、夢の話だ。考えてもわからないだろう。外を見るとまだ日が昇る前だ。

今から商売の準備をしても、まだ人が出歩かない時間から物売りをすることになるだろう。

意味がないとは言えないけど、労力とつりあってない。もう少しだけ寝なおそう。

にしても、あんな夢を見るなんてなあ……。

とりあえず今日はミナと一緒に寝てなくてよかった。今の状態だと自分が何をするか……。

と、そこまで考えて自分の右手が何か柔らかい物体を掴む。何か嫌な予感がする、けど放っておくわけにもいかず右を見てみると、そこには見慣れた黒い髪の少女がいた。

「えーと、ミナ……さん？」

名前を呼んではみるけど、スースーと寝息が帰ってくるだけだ。どうやら完全に寝ているようだ。

いつ潜り込んで来やがった……！！

ていうか、ヤバイ。あんな夢を見た後にあどけない寝顔はオレの心にダメージがでかすぎる。

「……よし、仕事に行くか！」

そうして、オレは今日、朝早くから誰も起きていない街に商売にでかける事にした。

## 五十一話 彼女の夢（後書き）

てわけで、初の番外編です！  
タイトルの通り夢オチです！！

第 話てのと実際の話数をずらしたくない。と言う妙な拘りがある為、こんな話も一応。51話ということにさせて頂いています。

とりあえず、好き勝手に書いてごめんなさいorz

もし、ミナが召喚されず、リユートが日本に飛ばされてたら？というIFストーリーです。

本当にそんな話の実現した場合、こんな簡単には進まないでしょうけど、まあ、ミナ（とリユート）の夢なので、と言うことで！

ここまで突拍子もないのは珍しくなると思いますが、こんな感じのために番外編的なストーリーとはまったく関係ない話をこれからぽつぽつ追加すると思います。

その時はタイトルに数字を入れなくて「彼」or「彼女」にでもしようかなあ。とか思っているんですが未定。

とりあえず、ぐだぐだなお話でごめんなさいorz

しかし、読んでくださってありがとうございます！！

誤字脱字報告感想等、頂けると嬉しいです。

五十一話 1の手料理(前書き)

新年初更新になります。

去年4月から始めた、この小説ですが、読んでくれる皆様のお陰で細々と続き年を越すことができました。

本当にありがとうございます。

変わらずゆっくりとですが、更新していることと思いますので、よろしくお願い致します。

## 五十一話 1の手料理

「ここが……自由市……」

行き交う人々。王都に近い事もあるせいか、この街も活気がある。

この中からリユートを探す。

そう考えると少し嫌になる。

元々、人混みは好きじゃない。

朝、目を覚ますと隣で寝てたハズのリユートは、居なかった。

とりあえず部屋のドアを開けてみると美味しそうな朝御飯と………笑顔で怒ってるクリアさんが待っていた。

うう………。勝手にリユートの寝床に忍び込んだのは私が悪いけど朝から正座でお説教はきつかったなあ。

怪我をした時よりも容赦がなくなってる。

………嬉しくもあるんだけどね。

まあ、今はそれはいいや。

とりあえずクリアさんが起きた時にはリユートはもう居なかったら

しい。

けど、多分ここで露店を出してるんじゃない？って言われたから探しに来たけど……。

「いらっしやい！奥さん、どうですか？昨日、王都で捕れたのばかりで新鮮ですよ！」

……居た。

なんか入り口のすぐ傍のすぐ目立つ所に居た。

「何やってるの？」

「いらっしや……って、ミナか。見ればわかるだろ？魚売ってるんだよ」

「こういつのって普通、業者に纏めて売るんじゃないの？」

「そりゃ飲食店に買って貰ったりはするけど、市場で自分で売るのが一番儲かるからな」

時代の差なのか世界の差なのかはよくわからないけど、私の知ってる物流とは随分違うみたいだ。

それにしても……。

「これ、王都を出る日に買ったお魚？」

「ああ。ミナがいるお陰で冷やすのも凍らすのも楽だからな」

「でも全部じゃないわね」

「冷蔵保存してた奴だけだな。冷凍したのは、ミナが維持してくれたら、もっと日保ちするから遠くで売るよ」

海から離れたら魚介類の値段は当然上がる。

科学が余り発達してないこの世界なら、尚の事だろう。

だから、王都を旅立つ日の早朝に私を連れて港まで行ったのか。

有り金のほとんどを、お魚に注ぎ込むなんて何事かと思ったけど…。

「でも、なんでお魚？塩とかの方が楽なんじゃない？」

「楽だよ。楽だから同業者も沢山いる。それに比べて生魚は魔法が使えないとすぐ腐るからな」

そう言われてリュートからお魚を受け取った女の人が代わりに銀貨を一枚渡している。  
渡したお魚は三匹。

「高くない!？」

仕入値の三倍ほどの値段だ。  
たった一日運んだだけなのに。

「それでも相場よりは安いよ。今のも三匹買ってくれたから少しおまけしたし」

冷蔵庫つてすごいんだな。今更ながら、そんな事を実感する。

「でも魔法を使える人って、そんなに少ないの？」

「いや、半分以上の人は使えるよ。だけど戦闘に使える人となると、その半分になる。そして、そのレベルなら引く手は多いからリスクも高くて危険な行商に手を出す人は少ないよ」

なるほど、ね。

魔法の有無一つでも世界って結構変わるんだなあ。

私の魔法……戦闘だけじゃなくって、色んな所でリユートの役に立ってるんだな。

今までも、火を灯したり戦闘外の事も少しはしたけど、今回ほど日常で役に立ったのは始めてだった。

いつも殴ったりしてるけど、やっぱり女の子として役に立ちたいっていうのはあるし、戦闘は、それとは程遠い。

と、そこまで考えてから気づく。

確か私にも一応、女の子らしくて、それでいてリユートの役に立てる事があったはず。

うん、ある。

「ねえ、リユート。お腹空いてない？」

「もう昼過ぎだしなあ。って言っても、こんな一等地を離れるのも勿体無いし……悪いけど何か買ってきて貰えるか？」

「あ、えつとね、それなら……私が作ってもいいかな？」



指先に魔力を集中する。  
そして、風に変換。

魔法による即席の不可視の刃。

長さは……10cmくらいかな。

そう意識すると魔力はより収束して短く切れ味の良いナイフが出来上がる。

えーと、トマトにポテトに黄色いピーマン……。

この世界には元の世界ではまったく見たこともない野菜も多いけど、似たような野菜も多い。  
似たような野菜は味も似てる傾向にあるから今日使うのはそういう野菜。

次々と風のナイフで細かく切っていく。  
お鍋には魔法で精製したお水。

フライパンの下も魔法で顕現した火。

「なんかもう、なんでもありですね、ミナさん」  
「なによ、悪い？」

リユートが少し呆れ気味に言ってくる。

一応、この世界でも私ほど魔法を好き勝手に使える人は、ほとんどいないらしい。

切った野菜は軽く炒めて、お鍋の中に。

「鍋でかすぎないか？」

「沢山一気に作った方が美味しいのよ。自分で冷凍するから良いでしょ？」

「ま、いいけど……やっぱり馬車、もう少し広いのに買い替えたいなあ」

確かに今の馬車は少し狭い。

これ以上荷物を積む事になるなら寝るスペースも危うい。

けど、食料はどうせ積まなきゃいけないから、リユートも何も言わないんだろう。

それにもう野菜は全部鍋に投入されてる。

後は塩とコシヨウで味を整えながら煮込むだけ。

鍋の下に強めの火を出し、蓋を魔法で固定したら後は待つだけ。

「一応、朝早くからここにいるから空腹ではあるんだけど」  
「三十分くらいでできるわよ。少し待ってて」

それくらいなら。とリユートはまたお魚売りに戻る。

無理矢理蓋を固定して強度を上げて簡易圧力鍋にしたから、そんなに時間はかからないハズ。

……こんな良い場所取れるくらい朝早くからお店出してたの？

ふと思い付いたけど、そんな時間に人が歩いてるハズもない。場所は確かに良いけど流石に非効率的な気がする。

うーん、リユートの考えてる事はよくわからない。

ぼーっとリユートがお客さんと話してるのを見てる。笑顔で結構楽しそうだ。

リユートは商人に向いてるのかなー。

位置的に目立つのもあるだろうけど、心なしか回りのお店よりもユートの回りにいる人は多い気がする。

人を惹き付けるのも商才なのかな。

……って、よく見たら私も結構見られてない？

珍しい黒髪に魔法使いらしい恰好。

確かに目立つ容姿だ。

けど、ここは行商人や冒険者まで様々な人が集まる大きな市場。それだけで、ここまで人の視線が集中するのかな？  
というか、人々の視線は少しだけ横にずれてる。

自分の横を見ると、そこにはぐつぐつと煮える鍋。

そういえば、この世界では煮るって調理法は珍しいんだっけ。

火は基本的に魔力を使って起こす。魔法にしる魔具の補助を借りるにしても、使ってる間は魔力を消耗し続ける。数十分の間、火を維持するのは難しいとリユートが言ってたのを思い出す。

つと、そろそろいいかな？蓋の固定を解除つと。

少しだけ飲んでみると、多少味は薄いけど美味しい。

火はまだ付けっぱなしにして置こう。そうしたら次食べる時は、もつと美味しいハズ。

「リユート、はい」

「できたのか？」

「ん」

丁度、お客さんが途切れたらしくリユートはすぐにスープの入ったお椀を受け取って、それを口に運ぶ。

「暖たまるなー。美味しいよ」

「そっか」

正直、人に手料理を食べて貰うのは緊張する。相手がリユートなら尚更だ。

そのせいで私は素っ気ない返事を返したけど、リユートは機嫌良さそうにスープに口を付けている。

ま、リユートだもんね。

うん。美味しくできた。料理はやっぱり楽しい。

「あら、お魚屋さん、美味しそうね、それ」  
「いらっしゃいー……って、これですか？」

お客さんに素早く反応するリュート。だけど、お客さんが見てるのはお魚ではなくて、リュートが持っているお椀。

「お幾らかしら？」

思わず顔を見合わせるリュートと私。

「えっと、どうする？」

「別に……いっぱいあるしいいけど」

「値段は？」

って、私が決めるの？

掛かった材料費と作った人数分を大雑把に計算する。

元の世界では料理の売価は原価の三倍くらいだっけ？  
だから……。

「一人分、銅貨十二枚くらい？」

かなり適当だけど。

「あら、安いわね。うちには大飯ぐらいの旦那と息子がいてねえ。  
五人前くらい頂こうかしら」

そう言って私に銀貨を一枚渡して来る。

「え！？ちょっと、リ्यूート！どっしよっ、っねー」  
「落ち着け」

パニックになる私。

対して冷静にお釣りを渡すリ्यूート。

なんかムカつく。

でも、そんな私の心境とは関係なく今のやり取りを見てたお客さんが、話かけてくる。

「へえ、それも売って貰えるんだ？」

「ふやい！？」

「そうだなあ。二人分貰えるかい？」

「へ、あ、はいっ」

びっくりした。思わず変な声出た。

リ्यूートが笑ってる。

後で燃やす！

「結局、無くなっちゃった」

「随分売れたな。銅貨十二枚なら確かに安いし作る手間考えたら買いたくなるのもわかるが」

帰り道、手に持った大鍋は見事にからっぽになっていった。

スーパーのお惣菜みたいな扱いなのかな。

私は余り買った事ないけど。高いし。

「でも、びっくりした。売れるんだね、料理」

「売ってる方は珍しいけどな。シャルの実みみたいな果物が普通に売ってるんだし、売れない事はないだろ」

「そっか」

持つてる財布が重い。中には数枚の銀貨と大量の銅貨が入ってる。今度、両替しないとな。

「また料理作ってもいいかな？」

そう聞くとリユートは、あー……。と少ししい難そうにした後、真面目な表情になる。

「今日帰ったらクレアに話を聞いてみる。ランディ達の居場所がわかかったら、すぐに出ようかと思う」

「……あんまり、ゆっくりは、できないもんね」

「ああ、悪い。けどミナは、この街に残っても……」

「うるさい。いいのよ、私がリユートと一緒にいるって決めたんだ

から」

少し寂しいけど……これくらいは覚悟できてる。

ポンと頭の上に手が乗せられた。  
お返しに脇腹を軽くグーで殴る。

「帰るか」

「うん」

「旅立ちって、やっぱり寂しいからさ、ミナが居るってのは安心する」

「……バーカ」

私はさっきより少しだけ強くリュートの脇腹を叩いた。



リユートの家を出て数日、状況がわからないので戻るわけにも行かず、僕らは東へと進んでたんだ。

続く緊張からかメリアが体調を崩し、一先ず近くの街の宿でも借りようと地図を広げたのですが、現在位置がはつきりとはわからず、どうしようかと思っていた所、地図に乗ってない小さな村を見つけた。

今はそこにお世話になってるから心配しないで。

ちよっと今のメリアを動かすのは難しいから帰るのはしばらく後になりそうだよ。

お年寄りしかいない小さな町だけど、聞いてみたら歩いて行ける距離に少し大きな街もあるみたいなんだ。

どうか、クレアもリユートも無事でいてくれると嬉しいよ。

クロウ

「で、なんで昨日は見せてくれなかったんだ？これ」  
「昨日見せたらリユート、今日行っちゃったでしょ」

今日も商売を終え、帰ったらクレアが一枚の手紙を見せてくれた。

ちなみに生魚は昨日の時点ではほとんど売り切った為、今日はミナの料理を数品売る手伝いをしてただけだ。  
当のミナは奥で洗い物をしてる。

「しかしクレアなら手掛かりくらいもってるかと思っただけど、居場所がわかるとはな」

無事なのが別れば儲け物だくらいに思っただけに収穫は大きい。

確かにメリアは身重……あまり動かさない方がいいか。

「でも、ちょっと気になるのよね。地図にも乗ってないお年寄りばかりの町って」

「ん、たまにあるんだよ。余り気にしないでいい」

そう？とクレアは気にしてなさそうに地図を持って来てくれる。

多分、余り良い理由でできた町じゃない。  
知らないなら、知らない方が良かったらう。

「でも、町の場所がわからないわよね。東にある街って言ったら」  
「レかな？この近くにあるのかなあ」

「歩いていける距離なら行ってみて探せばいいんじゃないの？」

台所から濡れた手をパタパタさせてミナが椅子につく。

話は聞いていたみたいだ。

「ただ、町ができた理由を考えれば大体どこら辺にあるかは予想できる。」

「ここから東、数日で行ける大きな街なら多分、ここだな。そうすると、クロウ達が居る町は多分……この辺り」

地図上の街より少し南西に位置する何も無い場所を指で丸をつける。  
正確な場所はミナの言う通り行ってみるしかないが、すぐ見つかるだろう。

「この辺りって……川からも少し離れてるし山も森もない平原よ？」

「平原の方が住みやすいんじゃないの？」

「住むだけなら、そうよ。少なくとも、大きな街は、そういった場所にある事も多いわ。けど、暮らすなら水場が近くて農業がしやすい川辺か、動物や木の実が多い森の方がいいの」

クレアの言い分は正しい。ミナの質問に対しても、ほぼ完璧な返答だ。

ただ、それでも例外はある。

水を汲むことはできても、水害に対応できない。

木の実を取る事はできても、狩猟はできない。

オレの予想が正しければ、この村には……本当に働けなくなった老人しかいないだろうから。

テーブルではクレアがミナに、この世界の事を教えている。旅をしているオレよりもクレアの方が詳しい事も多いだろう。

「ちよつと馬車小屋に行つてくるよ」

何にしてもクレアの予想通り、居場所がわかったなら明日にでも旅立つ。ケルロンを預かってくれた所に話をつけて来た方が良い。

オレは二人の返事も聞かずに玄関の戸を開いた。

……気晴らしにもなるしな。

旅をしていれば、自分ではどうにもならない嫌な事なんて幾らでもある。

むしろ、そこを割りきれない自分は商人として甘い。

これから行く村。

ケルロンなら二日もあればつくかもしれない村。

そこは所謂……世捨て人の集落だろう。

「勇者様、どうかなさいましたか？」

馬車小屋の前には店主が居て心配そうに話しかけて来る。

「明日、街を出ようと思います。だから料金払っちゃおうかと思いまして」

落ち込んでても仕方ない、よな。  
商売の基本は顔。いつも笑ってる必要はないが、へコンでいるのは論外だ。

「そうですか。いや、魔獣と聞いて驚きましたが下手な馬車馬より大人しくて、いい子でしたよ」

「ミナが居ないとどうなるか少し心配でしたが、それなら安心してどこへでも預けれそうですね」

とは言っても預かってくれる場所を探すのは、これからも大変そう  
だ。

こここの店主は偶然、先週は王都にいたらしい。  
だからオレが勇者だと知っていてケルロンを預かってくれたのだ。

「ありがとうございます。また、ここに来た時はお世話になると思  
います。では、また明日」

「はい、お待ちしております」

よし、これなら大丈夫だ。

帰って心配をかける事はない。

来的时候よりは軽い足取りで、クレアの家に戻る。

そこには……仏頂面の魔女が玄関扉の横に立っていた。

「おかえり。出てった時とは比べて機嫌良さそうね？」

「悪かった。もう大丈夫だよ」

うん、やっぱり出る時の態度は良くなかった。これからは気をつけ  
よう。

そう思いミナの頭に手を乗せる。

「触るな!!」

瞬間、何が起きたかわからない。

ミナはオレの手を払い、次いで胸の辺りを殴ってきた。

身体強化をした訳でもない拳は、ぽすんっ！と小さな音を鳴らすだけで大した痛くもなく止まる。

けど、それは、それだけミナは本気で殴ったからだろう。

「リユートが何かに落ち込んでる。そんな事、誰でもわかる。クレアさんだって心配してた」

「……ごめん」

「だから、謝るなっ。笑うなっ。……心配くらいさせて」

……どっしりと。

とりあえず、ミナの頭に再度、手をのせてみる。  
今度は振り払われる事はなかった。

「リユートが出て行って……少し考えたらリユートが落ち込んでる理由がわかった」

殴って来た手で服を掴みながらミナが話す。

「余裕のない家庭が、どうするか。誰を最初に切るか。……そういう、お話でしょ?」

「……よくわかったな」

「元の世界でも昔はあったらしいから。確かに自分ではどっしりよう

もないけど、割りきれないよね」

どこの世界でも考える事は同じか。

「私は実感がないからリユートが、どんな世界を見てどんな風に感じてるかわかんない。けど、隠すな」

「わかったわかった。隠して悪かった」

若干暴走気味な気がしなくてもないが、ミナの言ってる事はほとんど合っている。

確かに……旅のパートナーに、こんな事隠しても仕方ないか。

「よろしい。ほら、クレアさんが、夕御飯作って、待ってるよ」

「本当にミナは食べ物の事、ばっかりだな」

「〜!! だから私を食べてばかりいるみたいに言っな!」

オレとミナは、次の日に、また旅立つ事になる。

クロウ達がいるだろう村へ。

ただ、一つだけ気になる事があった。

村にある食料は恐らくギリギリか、それ以下。冬を越えれない人も多いだろう。

それなのに、クロウを受け入れた理由は多分彼の薬学が必要だったからだ。

だからこそ、そんな村にクロウと、その妻メリアは受け入れられた。

……なら、ランディとコレットも、そこにいるだろうか？

オレは、そんな疑問に答えを出せないでいた。

「隊長！昼頃に、魔獣に引かれた馬車が東に走って行くのを見た  
証言がありました！」

「魔獣……。恐らくは、それだろうな」

リユートとミナが旅立った、その日の夕方。

街には今しがた到着したばかりの騎士達が聞き込みをしていた。



本来なら近衛騎士団団長である男は騎士たちを引き連れて唸る。

「まったく……。人が父と母に報告をしに帰ってる際に王都に来て、急いで王都に戻れば旅立った後……やっと追いついたと思えば、また入れ違いか」

ちなみに報告と言うのは、死亡報告だ。

紛いなりにも弟が死んだのだから、直接自分が実家に帰っていた。

しかし、当の弟はのうのと生きており王都で武闘祭なんかに参加していたのだから、話にならない。

「コガ隊長、それで……。どう伝えましょう？」

「今は隊長ではないよ。そうだな、それも頭の痛い問題だな」

近衛騎士団だったコガの鎧に付いてる紋章は今は近衛のソレではない。

そして彼は今の部隊の隊長でもなかった。

「とりあえず、俺から伝えとくよ。明日、早朝には出立になるかもしれないから覚悟しとけ」

休む間もないですね……。と騎士は項垂れる。

実際、移動と言うのは、かなりの体力を使うのだ。

けれど、リユートが扱う馬車はケルベロスが引いていると聞く。少しくらい無茶をしなければ、馬では追い付けないだろう。況してや、こちらは大人数での行軍なのだ。

「逃げ切れると思うなよ、リユート」

意気消沈する騎士達の中、副隊長である彼だけが、足取りを強く、隊長と、もう一人の副隊長に報告へと行った。

五十三話 100に手紙(後書き)

忘れてる方もいるかもしれないので、追記するとコガはリユートの実兄です。

近衛騎士団の団長やっています。

話が少しシリアス方面に向かっている気がしますが、実際にはそんなシリアス報告にはまだまだ行かないと思います。

とりあえず次話は本編ではなく、少しだけ日にちを遡って、王都の、あの人の旅立ちの話になります。

こっちは早めに投稿して、本編をいつも通りの感覚で投稿しようなど企んでますが、どうなるか……。

五十四話 王女騎士団編成（前書き）

いつの間にかお気に入り登録が1000件突破しておりました。

これだけの人に呼んで貰ってるのに正直驚いてます、感謝感謝。

とりあえず、前話で宣言した通りの番外編です。

早く投稿するという目的も達成できて少し嬉しい反面誤字脱字が多  
そうで怖いっ！

誤字脱字感想等、送った頂けたら嬉しいです。

五十四話 王女騎士団編成

「ファイアボール！」

「くっ………聖殿の盾！！！」

「爆ぜろ！」

父上の手から放たれた複数の火の魔法。

対する勇者カムイは聖殿の盾で防御するが、四方八方で起きた爆発になす術もなく飲み込まれた。

まっかく………この馬鹿は本当に魔法に弱い。

カムイの扱う聖殿の盾は絶対的な防御力を誇る反面、その効果は一方方向のみに限定される。

今のように複数方向からの攻撃には微々たる効果しかない。

爆風が私の白銀の髪を撫で、それが収まる頃には煙の中に、ぷすぷすと所々が焦げた馬鹿が倒れていた。

大変、不本意ではあるが………現時点での私の婚約者だ。

「大丈夫ですかー？カムイさん？」

治癒術師の女の子が倒れてるカムイに近寄る。

はあ。リユートはファイアボールを下にくぐり抜けて近衛騎士を倒

したと言つのに……。  
そして恐らくは父上の事もあっさり倒し、正式な私の婚約者になつた事だろう。

魔法のない世界で戦い育つたカムイと魔法を前提とした戦いをしてきたリユートを比べるのは酷だが、今の戦いで王対カムイの戦いは王の五連勝。

レーナが嘆きたくなるのも無理はなかった。

そもそも何故、王とカムイが戦っているか？

それは武闘祭最終決戦の少し後まで遡る。

王女レーナとの婚約に受かれるカムイを見て、何か面白くなかつた王が、こう言い放つたのだ。

「娘が欲しければ儂を倒してからにするんだな!!」

その結果が今に至る。

「俺は……また、負けたのか」

治癒術により目覚めたカムイが、ガクリと膝をつく。

「本当、強いのは接近戦だけ。リユートにでも対魔法戦を教えて貰うべきでは?」

「うむ……。しかし、それはプライドが……。だが、この際……」

適当に言ったが、どうやら本人もその事で悩んでたようだ。  
リユートの迷惑にならなければいいのだけど。

「フン。まだまだ儂もやれるものだな」

ちなみに父上は、近衛騎士よりも弱い。

カムイは近衛騎士の平均よりは強いが、魔法が大の苦手。父上は魔法が得意だ。

もしかしたら私でも勝てるのでは？

そう思える程に勇者カムイは魔法に弱い。

「王！ここに居られましたか」

一段落したゆるい空気の訓練場に、凜々しく芯の通った声が響く。

一瞬、リユートかとも思っただけど、違った。

「弟が生存していたと聞き急ぎ帰って来ました。今、アイツはどこに？」

近衛騎士団団長コガ「フェトム。」

リユートの実の兄。

鎧には近衛の証である紋章が輝いている。

そういえば、リユートが死んだって教えてくれたのはコガだ。

帰って来たという事は実家にでも行っていたのか？

「おお、よく戻ってきたな、コガ。リユートなら聖殿へと送る為に後で城に呼んでいる。長い旅路で疲れただろう？休んでいれば来るさ」

「そうですか……。まったく、アイツはいつもいつも心配ばかりっ」

ふふ、しかめっ面だけど、なんだかんだ言っただけで弟が心配なだけだな。私は彼が、どれだけ弟を大事にしてるか知っている。

そして、弟を思うコガに空気を読まない声が飛ぶ。

「コガ……近衛騎士団団長のコガ殿か！頼む、俺と勝負をしてくれ！」

……またか、この馬鹿は。

「お手合わせ、感謝するぞ、コガ殿」

「一応、近衛騎士団が逃げたと思われても困るからな。でも、いいのか？リユートだって俺には一度も勝ってないぞ？」

バカカムイの進言は意外にもあっさり通った。

コガにしても近衛騎士団のトップにまで上り詰める人間。決して日和った性格はしていない。それが原因だろう。

でも、近衛騎士の層は厚い。

カムイが勝った近衛騎士とは比べ物にならない力はコガは持っている



る。

そのコガ相手にどこまで戦える？勇者カムイ。

「生憎、俺もリユート殿には勝ったんでな！行くぞ！！」

実質、負けたような状況で何を言ってる！？

私とした事が思わず声に出してツッコミそうになる。

流石は馬鹿と言った所か。

「それは楽しみだな。トルネードセイバー！！！」

走り寄るカムイ相手に距離が離れた状態でコガが剣を振る。

しかし、その距離は目視できない風が埋めつくし容易くカムイを吹き飛ばす。

早いつ。

ほとんど呼び動作無しでの魔法攻撃。

カムイが聖殿の盾を展開する間もなかつたじゃない！？

「なっ……？だが、この程度で！」

「終わる訳ないだろ？ファイアボール！」

カムイが体制を整える前に襲いかかる無数の火玉。

避ける術があるはずもなくカムイは左手を前に突き出す。

「爆ぜろ！」

なんか……さっきも見たような。この光景。

火球は炸裂して辺りを煙で包む。

先程は、この煙が晴れた時、カムイはぶすぶすと焦げていた。

「呆気ないな……。おい、生きてるかー？」

「近づいたぞ！コガ殿！」

だが、その場にいた皆の予想に反してカムイは煙の中から飛び出す。

「なんでっ！？」

驚きの余りに思わず声が出る。

ファイアボールの数も個々の威力も父上よりコガの方が勝っていたハズなのに！

「ふむ。僕は聖殿の盾を無効化する為に拡散して放ったが、コガは威力を集中する為に前面に収束させている。結果、完全には言えずとも聖殿の盾で防げたと言った所か」

横で父上が答えをくれる。

コガが聖殿の盾について熟知していなかったからこそ掴めたチャンス。

カムイは今まで見たことないような真剣な、そして楽しそうな顔でコガに斬りかかる。

くっつ！馬鹿のくせに！馬鹿のくせに！

悔しいのが顔に出てたのか父上が肩に手を乗せてニツカリ笑った。

「コガは近距離でも恐ろしく強いぞ？」

意気揚々と刀を肩に担ぐカムイ。

しかし、楽しそうな笑みを浮かべていたのはカムイだけではなかった。

「そう来なくつちなあ！」

一合目、カムイの高速の剣を真つ向から受け止めた。

二合目、袈裟に斬る一撃を下に流す。

三合目、切り上げる太刀を上弾く。

カムイとコガは互いに武器を上段へと構えた型になるが、弾かれたカムイと弾いたコガでは次の行動に移れる早さが違う。

これが、王宮剣術……！！

たった三太刀だったが、軽い感動すら覚えた。リユートのも、すごかったが、コガはより洗練されている。

だが、カムイとて前世では最強の武士であり、勇者だ。

コガが確信を持って切り下ろした一撃は軽々と聖殿の盾に防がれた。

「これが、聖殿の盾……噂に違わぬ防御力だな」

「近づけばどうにかなると思ったが……甘かつかつ！！」

言い終えるのと同時にカムイは刀を振り下ろし、コガは前転により避ける。

あの馬鹿勇者が近衛騎士団団長相手に押している。

その事実には驚きを隠せない。  
近距離での魔法は僅かな発動の隙が命取りになる事もある為、使いにくい。

あの距離でのカムイは本当に強いのか……。

ただ父上が冷静なのが気になる。

試合はカムイがコガに突きを受け流された所だ。

「レーナ。見ておくと良い。アレがコガが近衛最強と呼ばれている原因だ」

突きを払い懐に入るコガ。そのまま右手を開き突き出すが当然、聖殿の盾に防がれる。

しかし、それこそがコガの狙いで試合の終わりだった。

「カムイ。君はどうにも能力に頼りすぎる節がある」

「そういうのは破ってから言っただけ欲しいものだ」

その瞬間、コガが勝ちを確信したかのように唱えた。

「竜魔法、閻竜の戯れ」

「なんだとっ!?!」

瞬間にカムイは聖殿の盾事、薄暗い球体に閉じ込められる。

竜魔法……?何、それ……。

「手加減はするけど、少しの間は動けなくなるぞ」

「な、動けない、だと!?!」

「時崩」

コガが最後にそう呟くとカムイは小さな呻き声を上げ、球体が消えると同時に膝から崩れて倒れた。

「何、何なの……」

発動までのラグもほとんどなく、発動時に生じる魔力波も感じれなかった。

あんな魔法、知らない。

「竜魔法。その名の通り竜族の扱う魔法だ。効果は様々だが、どれも僕らが使う物より遥かに強い」

「竜族つて……なんで、そんなものをコガが!？」

「竜と契約した人間にも扱える。フェトム家は時間を操る閻竜と昔から契約してるのだ。騎士になったと同時に竜魔法を覚える」

それなら、リユートも騎士になればアレを使っていたのか？

そんな、どうでも良い疑問が頭を過る。

「しかし、カムイか。僕に負けるからどうかと思えばコガに竜魔法を使わせるか。強いか弱いか判断に困る奴だな」

父上は、髭を撫でながら困った顔をしている。

そしてさらに、父上を困らせる問題が王宮城に運び込まれて来た。

「王！大変です！勇者フェトムは、朝方南に向かいすでに出ていってと目撃者が!!すでに王都にはいないようです!!」

「ですから！リユートは私が聖殿へ連れて行きます！護衛なら聖者パーティーがいるでしょう！？」

「ならん！救国の剣王と傾国の魔女ならともかく、カムイは儂にも劣るではないか！！」

ああ、もう！父上は頭が堅い！

カムイだけならともかくアウゼルもロザリーもいるのに！

端でカムイが膝を抱えて落ち込んでるが、気にしてられない。

「俺が行きます。人が来てやったのに、あの愚弟……一言言っただけでや  
らねば気がすみません」

「近衛騎士団長を大した理由もなく外に出せる訳がないだろう」  
「しかし……！」

相手が勇者とは言え、コガには私情が多分に混じっている。

父上が許可を出さないのもわかる。

けど、私は安全さえあれば。

コガは理由さえあればいいなら話はつけれる。

「コガ。王女権限で貴方の近衛騎士の身分を一時的に剥奪する」  
「なっ、王女!?!」

「レーナ!理由もなしにまた……!」  
「理由ならありますわ!」

この手なら父上も断る理由もないだろう。  
私にもコガにも!

「臨時に私の騎士……そうね、王女騎士団を設立する。副団長はカムイとコガ。依って近衛騎士の身分は一時的に剥奪。理由は私の旅路の安全の為」

「!……なるほど!」

「俺が……王女の騎士に?」

角に居たカムイも顔を上げる。

忠義を重んじる彼の性格なら断らない。

「当面の目的は勇者の補佐。まずは勇者に叱るべき場所での訓練を受けさせる為に保護。コガ、各地に散らばった勇者の行方に心当たりは?」

「ハッ!ここから南に元自宅があった者が近くの街に滞在してると思われます、隊長」

「よろしい。カムイ、ロザリーとアウゼルにも声を掛けて置いて。他にも数人見繕うわ」

「御意に」

そして最後に笑顔で王様に話しかける。

「よろしいですわね?王様。勇者のサポートは国の急務ですもの」

王様は驚いたような諦めたような呆れたような……微妙な表情で疲れたように声を絞り出した。

「……もういい。勝手にしてくれ。正し、絶対に無事に帰って来い！コガ、わかってるな？」

「この身に掛けてもお守りします。」

これでは準備するだけだ。

頭の中に面子は浮かんでいる。

「プリンセス・ナイツ、設立です！」



五十四話 王女騎士団編成（後書き）

王女視点が書いてて一番難しいっ！  
そう思える話でした。

ちなみに、コガの名前の由来はリユートが「竜」と言う事で「虎牙」と当て字で決めた感じですよ。

この世界に漢字という概念はないので作者の頭のなかでの話ですが  
（笑）

ちなみに魔王さんが使ってるのも竜魔法です。そっちの話はまたそのうち。

また次話もよろしくお願ひしますm（――）m

五十五話 100とクロウの依頼

ガタガタと軽快な音を鳴らし一台の馬車が平原を走っている。ただし、その馬車を引いているのは魔獣ケルベロス。正確に言うなら犬車、又は魔獣車なのかもしれない。

恐らくは目的地である村も近くにあるだろう。

リュートがそう考えていると急に馬車が大きく揺れた。

「ギウヤン!？」

「きゃっ!」

ケルロンの甲高い鳴き声とミナの驚いた声が聞こえた。

前でケルロンの手綱を握っていたオレは多少の揺れなら平気だが、後ろで機嫌良さそうに果物を食べていたミナは支えるものがなかったハズ。

無我夢中に手を伸ばしミナの服の端を掴む。

幸いにも馬車は横転する事もなく、振り回されただけで済んだようだ。ミナも、なんとか掴めたから振り落とされてはいない。

「何。いきなり」

「一応、必死に助けたつもりなんだけど」

何も考えず掴んで手繰り寄せたお陰で腰から抱く形になっていて、冷たく睨まれた。

怖い。照れ隠しだと信じたい。

事故で胸を鷲掴みにするなんて、ありがちな展開にならなくて良かったと切に思う。

ミナなら間違いなく攻撃してくる。

ついでに躊躇いや戸惑いもないだろうな。

「それで、どうしたの？」

「ケルロンが何かに足を取られて転んだらしい」

「ケルロン!？」

馬車はケルロンを中心に半回転しただけだ。

むしろ馬車に引っ張られた側の方が危ないが……。

ケルベロスだしなあ。

上位魔獣が、その程度の事で、どうにかできる訳がない。

心配そうに駆け寄るミナをみて、ケルロンも、良い子にお座りして尻尾を振ってる。

「大丈夫？痛い所はない？」

ケルロンとしては、ミナに頭を撫でられ心配されてるせいで、むしろ機嫌良く見える。

……けど、ケルロンがケルベロスで良かった。本当に。

ケルロンの足に鈍く銀色に光る何かが噛みついてる。

コレに足を引っ張られたせいで転んだんだろう。

ミナもケルロンの足に光るソレに気づいたようだ。

「リユート。コレって……」

「虎挟み、だな」

ケルロンが引つ掛かって引つ掛かって引つ張ったせいか半分壊れて使い物にならなくなっているが、鋭い棘が幾重にも、ついた金属の片側がケルロンの足に刺さっている。

普通の馬がコレに足を挟まれれば危ないなんてレベルじゃない。

なんで魔獣くらいしか通らなさそうな場所に虎挟みなんてあるんだ？

「リユート、ケルロン大丈夫？」

「ん？あー……」

大丈夫だと思うけど一応は刺さっている虎挟みの片側を外してみる。すると少しだけ血が滲みケルロンがそこをペロペロと舐めた。

「少しだけ血が出てるけど問題ないだろ。とりあえずケルロンには、ここで休んで貰おう」

「ケルロンにはって……私達は？」

ケルロンを置いて行くのは馬車を置いて行くのと同じ。

着の身着のまま旅をするのは無茶だけど、近距離なら問題ない。

オレは一点を指差して答える。

「ほぼ予想通り。ミナ、あそこに小さな村があるだろ？」

恐らく、クロウとメリアも、そこにいる。

虎挟みを仕掛けたのも、あの村と考えていいだろうしな……。

「流石はレグラス爺さんじゃ。これで、なんとか冬も越せそうだな」

「ははは、まだまだウェアウルフ程度には負けんよ」

「わたしも若い頃に、レグラスさんと会っていたらねえ」

あれから更に徒歩で一時間。

村の裏手についたオレとミナは、影から村の様子を伺う。

予想通り、老人しかいない。

ただ、なんとというか……予想外に妙に活気がある。

あの爺さんなんて、ウエアウルフを担いでる。本物か？本物なんだろうな。ソレっぽい事言ってるし。

「こつちの世界のお年寄りって、あんなに元気なの？」

と、ミナが呆れているが、オレはソレに答えなかった。

……考えてわからない事を考えても仕方ないか。

気を取り直して行動に移ろう。むしろ閉鎖的な村よりはやりやすいハズ！

目の前に元気に話してる村人がいるなんて好都合じゃないか！

「こんにちわ、みなさん」

少し無理矢理とも思える思考で自分を強制的に納得させて、笑顔で話しかける。

笑顔。それは商人の基本であり、奥義。

数人の村人は少しだけ驚いたようだけど、邪険にされる様子もない。恐らくは村に若い人が来たのが珍しいだけだろうな。

「商人の方ですか？ここには物を買うだけの金はないですよ。もっと向こうに大きな街が……」

「いえ、人を探してまして。1ヶ月くらい前でしょうか。この辺りに馬に乗った四人が来ませんでしたか？内一人は子供なんですが」

そう聞くと南の方を指差して答えていた御爺さんが固まる。周りの人も戸惑って、どう答えていいかわからないようだ。

そんな中、ウエアウルフを抱えて老人が、オレの前に立ちはだかる。

「あんたら、先生に何の用だ？」

「先生……？」

「クロウ先生は、今の村に必要なんだ。先生に何の……」

「やっぱり、クロウはここにいるんだな!？」

クロウの名前が出て思わず肩を掴む。

年の割りにガツシリとした体は、若い頃は腕良い冒険者や自衛団だったのだろう。

「つと、すまない。クロウに合わせてくれませんか？家族、なんです」

落ち着け、オレ。

老人もクロウを心配しての事なんだろう。

「……先生に危害を加えるつもりはないな？」

「もちろんです」

「はあ、今先生を連れてかれても困るんだが……」

「そればかりは本人と相談するしか……」

オレがどうこう言える事じゃない。

「まあ、いい。ついて来なさい」

「あ、ありがとうございます!」

御爺さんの後を着いていくと、すぐに小さな小屋に案内された。流石は小さな村だ。

だけど……村の中では中々できた家だな。

木材と藁を積み重ねたような家も多い中、それはちゃんとした木造の小屋だった。

「先生、お客さんです」

御爺さんがドアを開けそう言つと中からは聞き慣れた声が聞こえてくる。

「また誰か怪我をしたのかい？」

またオレの後ろで緊張からカチコチになってるミナがびくつと震える。

けど、まあ、怯えた様子がない分、クレアの時よりマシだし大丈夫だろう。

「久しぶりだな、クロウ」

「……リユー……リユート!？」

扉を潜ると、そこには横になってるメリアと、それに付き従つようにクロウが居た。

「メリアか……お休み中か。大丈夫なのか？」

「あ、ああ、うん。少し早いかもしれないけど元気だよ」

早い……って、言うのはメリアのお腹にいる子だろう。



まあ、クロウが居れば大丈夫だろう。

「ランディとコレットは、ここには居ないのか？」

「……うん」

クロウが申し訳なさそうに頷く。

クロウでさえも薬剤の知識があるから、この村で重宝されているの  
だろう。

傭兵と子供を受け入れる余裕はこの村にありそうにない。

はあ。予想通りの事とはいえ、やはり少し残念だ。

「ところでリユート、そっちの子は？」

クロウが角で佇むミナを指す。

……なんで、コイツ家族の前だと小動物みたくなってるんだ？

「ミナだよ。訳あって怪我は治ったんだ」

「もしかしたらと思っただけど、やっぱりミナちゃんか！いや、良かったね」

クロウは本当に嬉しそうに笑う。

前から怪我の事をどうにかしてあげたいとは思ってたみたいだしな。

だけど、ミナ。もう少し大きな声で喋ってやれ。

少し離れた場所で何か言ってるが聞き取れない。

まあ、クロウは笑って頷いてるからいいけどさ。

「今はミナに手伝って貰って、国内を歩いてるんだ。当面の目的は家族……というか、ランディとコレット探しかな」

「ランディは、南にある街で傭兵の仕事見つけたみたいだけど、今はどこにいるんだろうなあ」

「傭兵の仕事にコレットを連れて行くなよ……」

ここに住めない以上、連れてくしかなかったのかもしれないけど。

「ねえ、リユート」

「ん？」

「ミナちゃんも……」

「はい？」

「旅に出る前にお願ひがあるんだ。この村を……救う手伝いをしてくれないかな？」

「月光草。魔力を多く含んだ土地に生息する植物。豊富な魔力さえあれば、どこでも育つ生命力の強さと月光を浴びて青白く輝くのが特徴。昼間は雑草と見分けがつきにくい……ね」

クロウから渡された資料をざっと読む。  
まあ、そこそこの名を知れた薬の材料だ。

「高いの？」

「ううん。そんなに高価な訳じゃないんだけど、市場にはあんまり出回らないんだ」

「まあ、月光草を取りに行くなら他のアイテムを狙った方が儲かるしな」

好き好んで取りに行く人は少ないアイテムだ。

何かのついでに見かけたら採集するくらいだろう。

「南の街で、ちょっととした感染症が出たんだ。この村でもね」

クロウは元々薬剤師である分、病の知識は豊富。その感染症とやらの薬も作れるのだろう。

問題は……材料か。

月光草が育つのは魔力のある土地。

魔力があると言う事は魔物、下手をすれば魔獣がいる可能性が高い。

「そんなに恐ろしい病気なのか？」

「ううん、放って置いても二週間くらいで治るよ。感染力もそんなに高くない」

頬杖をついた手がズルツと滑りそうになる。

「待て。放っておけ、それなら」

「でもね。ここの村は抵抗力の低いお年寄りばかりなんだ。そして、

この時期……二週間も動けなくなったら、冬の蓄えができない」

「……あー、そういう事か」

さつき表でなんとか冬を越せそうとか話していたけど、まだ準備はできてないらしい。

「リユート。この村がなんでできたかわかってるよね？その割りに  
は、みんな元気だと思わない？」

本来なら冬越えを諦めてもいいくらいだ。

大きな街ほど、楽で小さな村ほど辛い。

「僕らが来た時はリユートの想像通りの村だったと思う。ここの人  
たちは身寄りもないから……」

ゆっくりと緩慢な死を待つ。それが本来の選択肢だろう。

「でもね、僕らが来たから。僕とメリアと、その子供の為に、みんな  
なもうちよつと頑張ろうって、気になってくれたんだ」

「なるほどな。わかった、わかった。どうせオレが行かなきゃ自分  
で行くんだろ？」

「魔物は怖いけどね」

そう言っつてクロウは穏やかに笑う。

「いいじゃない。どうせ、子供が生まれても、メリアさんがすぐ動  
けるとは限らないんだし、この村は必要よ？」

「それもそうか……。ま、任せとけ」

「って、ミナちゃんも行くのかい？」

ああ、そういえばクロウにミナが勇者って話はし忘れてたな。

ミナもソレに気付いたらしくクロウに笑いかける。

「大丈夫。私、リユートより強いから」

……… 真実を知らなきゃ冗談にしか思えないよな。

## 五十六話 1と意外と普通な初クエスト（前書き）

風邪を引いてしまつて熱が39度超えて丸一日休んでる間にお気に入り登録が数十件増えてて非常に驚きました。

三連休だから、読んでくれる人が多いのかな？と勝手に憶測しております。

ちなみに、熱は1日で下がったのでインフルエンザでもなく更新速度にも影響がありませんでしたw

z お前が言つなと言われそうですが、風邪には気をつけましょーor

## 五十六話 1と意外と普通な初クエスト

辺り一面に広がる緑。

生い茂る草木を掻き分けて歩いて行く。幸いにも魔法で身体能力を強化してあるので辛くはない。

「さて、この辺でいいかな。ミナ、これ」

そう言っつてリュートが渡して来たのは大きな袋。

これに月光草を入れるのかな？  
つて、言っつてもどれかわからな……。

「いや、コレはキノコ用。そこら辺に生えてるから適当に集める」  
「なんで!？」

時間にして正午くらい。小さな村を出てきた私達は、大きな森に入つていた。

「なんでつて……月光草は夜にならないと見つからないしな」  
「それで、なんでキノコ」  
「売っつてもいいし、食べてもいいしな」

予想外の展開に思わず膝と手ををついて脱力する。

何、キノコ採集つて。

なんていうか地味だ。というか元の世界でもできる。

「おーい……疲れてるなら、オレ一人でやるから、ケルロンと休んでてもいいぞ?」

「いい、やる……」

変な情けを掛けられるのは逆に気に入らない。

「木の影とか落ち葉の中によくあるから。後、一応、魔物にも注意な」

そう言いながらリュートはすでに地面をがさがさと探っている。

つてか魔物を感知する力なら私の方が強いし!

大きなお世話だ!と私は少しだけ機嫌悪くキノコ採集を始めた。

ぺしつと枯葉を蹴ってみるけど、そうそう都合良くは見つからない。

それでも、少しふらふらしていると赤い斑点のあるキノコが群生しているのを見つけた。

えーっと派手なキノコは毒があるんだっけ?ん、ていうか……。

「リュート?」

「おー、どうした?」

名前を呼ぶとリュートが少し歩いてくる。リュートの持つ袋は、すでに少しふつくらしていて、そこそこの量を収穫してるみたい。

「毒キノコと違って、どうするの?」



「毒キノコ？」

私がそう聞くとリユートは首を傾げる。

もしかしたら、この世界には毒キノコなんてないのかな？  
それとも一般常識レベルにみんな見分けられるのかな？

何分、元の世界での常識は通じない部分がある。  
けど、リユートは更に斜め上な答えを差し出してきた。

「解毒するに決まってるだろ？」

「げど……く？」

何、げどくつて。

解毒？確かに解毒魔法は聞いた事あるけど、キノコに使う物なの？  
それ。

一人で混乱する私。

その様子を見てリユートは、何か思いついたように話してくれる。

「そっか。ミナの世界には魔法がなかったんだっけ。毒性を持つ食べ物  
を解毒してくれるお店があるんだよ。優秀な魔法使いに人気のある職の一つだな」

……何、ソレ。

「……人気、あるんだ」

「一番人気はやっぱり冒険者だけど危険も多いしなあ」

そう言っつてリユートは、また地面を探り出す。

私も、ちゃんと探すかな。

手始めに、さつき見つけた赤い斑点のを袋に入れる。

それ以降は簡単だ。ちよつと草を退けたり木の影を見ると、なんらかのキノコが生えている。

「もう秋も終わるって言うのに結構あるのね」

私が好き勝手に動いてもリユートは、なるべく離れないように着いてきてくれる。

一応、心配してくれてるのかな？

「人が来る事もないしな、ここら辺は」

「来ないの？」

ケルロンで走って数時間。街からも、そんなに離れてなくて、こんなに食べ物があるのに。

「たまに魔獣が出るんだよ。キノコ一掴み銅貨十枚。解毒も考えないと利益は更に下がる」

例え、十回に一回でも魔獣に会えば死ぬからな。とリユートは続けた。

確かに今は魔獣が出る気配がない。

何事もなく帰れる可能性が高くて、死ぬかもしれないなら、リスクは合っていない、か。

リユートと私が居るのは、もし出てきてもなんとかできる自信が、

あるからだ。

この世界も大変そうだなあ。

「よし。じゃあ、日が暮れる前にご飯でも作るか」

話ながら採集をしていたら、いつの間にか袋の中には結構な量のキノコが入っていた。

うん、お腹も減った。

「馬車まで戻る？」

「また森に入るのも手間だし、ここで作るよ」

「作るって、何を？」

むしろ何で？って聞いた方が良いのかもしれない。

馬車からは採集用の袋しか持って来ていない。材料がないんだ。いや、あるにはあるけど、使うハズがない。

そう思い込もうとしたけど、リュートは自分の持つてる、キノコやら毒キノコやらが、もっそりと入ってる袋を掲げて言った。

「今取ったキノコ。簡単な鍋にでもするか」

解毒するんじゃないの……？

「えーと……ミナ？」  
「……………」

日の沈みかけている森は、もうかなり暗い。そんな中、リュートは困ったような笑顔を浮かべている。

私はどんな顔をしてるんだろう？

さぞかし微妙な表情を浮かべてるに違いない。

私とリュートの間にあるのは小さな鍋。

中には先程取ったキノコとリュートが、食べれる。と言った野草。

簡単な調味料で味付けされたキノコ鍋は味も、そこそこだろう。

うん、でも今は旅先だ。そこそこの味のご飯が食べれるだけで文句はあるハズがない。

けど、それとは別にすごく不安な事がある。

……ていうか、みんな不安に思うよね？

「大丈夫だから。この中には、間違いなく毒性持ってるのは入れてない」

「う、うん……」

リユートの事は信用してる。

この世界、元の世界の誰より。

でも、それと恐いのとは別！！

とは言え、そろそろお腹も減ってきた。

私は意を決して、お箸を伸ばす。

スーパーで売ってるキノコは何も考えずに食べてたなあ。

カプツと適当に取ったキノコを口に入れる。

味はシメジに似ていてそれが、ほんの少し私を安堵させてくれた。

ああ、食べちゃった……。

もう手遅れ。

そう思うと残りの、お鍋にも素直に、お箸が伸びる。

リユートも、ほっとしているようだ。

……ごめんなさい、リユート。

二人分にしては少ないお鍋。

その量を食べるにしては随分と時間が掛かってしまった。

「大丈夫か？」

「ん、いつでも行ける」

お陰で辺り一面真っ暗。

所々射し込む月光でなんとかリユートが見える程度の光源。

でも、今日はこのくらいが丁度良い。

「とりあえず登るか。今日は良い天気だ。月光草もよく輝いてるだろ」

そう言っつてリユートは手早く片付ける。

「行こう、ミナ」

「……今更、手なんて繋がなくても」

差し出された手に思わず頬が熱くなったけど、この暗さならバレてないだろう。

「夜の山道は危険なんだよ」

まったく。と悪態をついて手を取るけど満更でもない。

そのまま、リユートに引かれて山道を登って行く。

……なんか、懐かしい。

出会ったばかりの頃は、どこでも、今みたいにリユートに手を引かれてた。

「見つかるかな？月光草」

「上、見てみな」

リユートが笑って答えてくれる。

視線の先は鬱蒼とした森のハズなのに、仄かに青く光っている。

「あの様子だと群生してるな」

「すごい……。本当に光ってる」

魔法以外で初めてファンタジー世界を強く実感した。

そしてリユートは手を離し楽しそうに駆け上っていく。

「何、急いでるのー？」

「来ればわかるよ!」

……？

まるで子供のようにリユートは月光草の光に入って言って見えなくなる。

「……もう」

なんなんだ、一体。

幸いにも足元は青い光の残光で少しだけ照らされている。

これなら注意すれば足を取られる事もないかな、と私も駆け上がっていく。

そして青い光に踏み込む。

「ようこそ、冒険者の領域へ」

そんなリユートのふざけた台詞が耳に入るけど、頭には届かなかっ

た。

私が見たのは辺り一面に咲き誇る青。

ソレは花ではなく草。けれど、キラキラ光る景色は私には咲いているようにしか見えなかった。

地面だけじゃない。立木すらも青の光を浴びて輝いている。

まるで、ここだけが聖域なのかと思えるくらいに輝いていた。

「……………綺麗」

今まで見たこともない景色に私はソレしか言えない。

「命を賭けるには安い対価かもしれないけど、冒険者でしか見られない光景も多い。ちよつと良い物だろ？」

「これが見せたくて子供みたいに、はしゃいでたのね、リユートは」  
「あはは」

笑って誤魔化された！

……………けど実際に、この光景を見てしまった今なら気持ちわかる。

「それと……………初クエストクリアおめでとう」  
「え？」

クエスト？

「商会、個人、ギルド、どこからでも良い。依頼のクリア。受領から完了までミナが居るのは初めてだろう？」

まだクロウに届けなくちゃいけないけどな。とリユートは笑う。



……そっか。  
リユートとの旅で私はリユートと一緒にクエストをクリアしたんだ。  
そう思うと少しだけ嬉しい。

「でも、これ採集するんだ。なんか少しだけ勿体無いね」

「そんなに多くは取らないよ。無意味に取っても魔力が肥沃な土じやないとすぐ枯れるんだ」

「クロウさんに渡す分だけ？」

「元々、街の方で流行った病気の薬になるみたいだし、そっちの分も、かな」

「……結局、お金儲けは考えるんだ」

ちよつと呆れてジト目をしてみるけど、リユートは、

「商人だからな」

と胸を張った。

まあ、それはそうだよな。

しかも病気を治す薬になるなら文句を言えるハズもない。

「さて、日が明ける前に村に帰るよ、ミナ」

「……正気？」

「言いたい事はわかるけど月光草の日持ちを考えると余裕がないんだよ。ケルロンなら危険もないだろ」

夜は魔物が活発化する時間。魔獣は元より野生動物だって、夜行性な者もいる。

即ち、視界も効かない夜は危険でしかない。

……けど、ケルロンなら確かに大丈夫かな。

上位の魔獣であるケルベロスを相手にできる敵なんてそうそう居ない。

「仕方ないわね。行こう、リユート。麓でケルロンも待ってる」

こうして私の初クエストは何事もなく幕を閉じた。

## 五十六話 1と意外と普通な初クエスト（後書き）

感想、メッセージ等で指摘して頂いていた誤字の部分を修正しました。

教えてくれる人達のお陰で、少しは真つ当な文章に慣れてるかなあと思う日々です。

いや、ホント、誤字脱字多くてごめんなさ……。

人物紹介や、章管理もちゃんとやらなきやなあと思う今日この頃、ガンバリマス。

五十七話 100の兄(前書き)

投稿期間が少し空いてしまいました。  
なかなか目標通りにはいきません。

その代わりに？今回は少し長めになっています。

誤字脱字・感想等頂けたら嬉しいです。

五十七話 100の兄

「ケルロン。前の方に草むらがあるから避けて走ってくれ」  
「ワウツ！」

俺たちを乗せた馬車は、草の生い茂る場所だけを避けて次の街に向かう。

村人に聞いた話では虎挟みは草のある場所以外には仕掛けていないらしい。

自分で仕掛けて自分で引つ掛かつちゃ笑い話にもならないしな。

魔獣を捕獲しようとするのは、そう珍しい事でもないけど、あの年の人達が意欲的にやるのは少し驚いた。  
まあ、以外にも元冒険者は多いらしい。

ちなみにミナは後ろの荷台でぐっすり寝ている。  
オレは慣れてるから平気だけど、月光草を採集してから今まで休まず動いていたから、疲れたんだろう。

だけど、まだ休む暇はない。  
オレの腰にぶら下がっている商品の鮮度は、たったの一日しか持たないんだ。

話は少しだけ前に遡る。

「はい、リユート。これが月光草を精製した流行り病の特効薬。飲んで数時間も立てば楽になるよ」

「ありがとなー、クロウ」

「月光草はリユートが取って来てくれた物だしね。これくらいお安いご用さ。これで村も春は迎えられる。でも、どうするんだい？その薬」

「明日あたり街で売ろうと思ってる」

「え？その薬、劣化が激しいから明日には効果がかなり薄れるよ？」

正直、その言葉を聞いた時、オレとミナは固まった。

元から売れないならともかく、今なら売る事ができるっていうのが、なんとも性質が悪い。

一応、ミナに声を掛けてみるが、なんて帰って来るかは予想は容易い。

「やめとくか？疲れてるだろ？」

「……勿体無い。頑張る」

ミナも元の世界では、お金で苦勞したらしいし当然の返事だよな……。

ふう。と溜め息をついてクロウに向き直る。

「悪いな、クロウ。オレとミナは、もう行くよ」

「あはは、残念だな。まあ、リユートには家に連絡すれば、すぐ会えるか」

そう言つてクロウは苦笑いをしてくれた。

つて、ああ、そうそう。一つ大事な事を良い忘れてた。

「悪い、家壊れた」

「ええっ!？」

以上、回想終了。

とにかく、こんな訳で早々と次の街に向かっている。

ちなみにオレと連絡を取るのは商会を通せば良いだけだから問題はない。

しかし、家かあ……。

考えてみたらオレの家ないんだよな。

前程ではなくても、そのうち買った方が良いよなあ。

「と、思ったよりも近いな」

ふと気づくと前には大きな街が見える。

隣の国との交流が盛んな街だけあり、かなりの大きさだ。

時間にして……三十分ちよいか。  
歩いてこれると言われるだけあってケルロンなら早いな。

「よしよし。着いたらなんか食い物買ってやるからな。もう少しだけ頑張ってくれ」

ケルロンにそう言うのと返事こそなかったが、尻尾がパタパタと振れて、心なし速度が上がる。

さて、何事もなくランディとコレットの手掛かりが見つければ良いんだけど。

「はい、奥さん。お釣りです」  
「ありがとね」。助かるわあ」

薬と引き換えに銀貨を受け取り銅貨を返す。

少し割高かと思える価格設定だったけど、売り上げは思いの外好調だった。

主な客層は子供を持つ貴族や商人、それに……。

「本当に運が良かったわ。旦那が一昨日から流行り病で寝込んでね



え

一家の大黒柱が掛かって場合だ。

幾ら感染力が強くないと言っても、それなりに流行ってる病気だ。命に別状もないから注目はされないけど、考えてみたら稼ぎ頭が二週間も休むのはキツイだろうな。

それに比べたら薬を買う方が、かなり安く上がる。

そんな理由で商売は繁盛。手持ちの薬も残り少ないし、すぐに売切れるだろう。

つてか、こんな門を潜って、すぐの人がごった返した場所で無ければ、売り切ってる所だろう。

お陰で、よくこんな質問をされる。

「それにしても、なんで、こんなに人通り多い場所で売ってるのかしら？探すのに苦労したわ」

ですよ。

場所や人が入り乱れる正門近くは商売に向いてない。

禁止されてる訳ではないから、ちらほら見かけはするが、街中のマーケットの方が便利だし人も集まる。

ただし、そこに行くには馬車を預けなければいけない訳で……。

「ツレが荷台で寝てるんですよ。最近、バタバタしてたので起こすのも忍びなくて」

と苦笑して返す事しかできない。

「あらあら、なるほどねえ。でも、わんちゃんは、みんなと居れていいかもねえ」

女性はケルロンを見て、そう笑いかける。

どうにも、この辺りは他の国に近いお陰で魔獣に対する警戒心が他より薄いようだ。

ケルロンも、警戒されるよりも気楽らしく、さっち買った骨付き肉を食べた後に寝転がっている。

「それに、今日は街の中が騒がしいから、ここの方がまだ落ち着くかもねえ」

「騒がしいって……何かあったんですか？」

「それがね、王都の騎士団が来てるのよ。誰かを探してるみたいだけど」

王都の騎士？

こんな所まで派遣されるだなんて珍しいな。

余程、本気で、その誰かを探してるのかな。

その誰かに対して軽く同情を覚える。

しつこいからなあ。王都の騎士連中は。

とりあえず、この話を聞いた時にすぐに逃げるべきだったと気づくのは、それからすぐの事だった。

何をしに来たのか、騎士らしき男が、目の前を通ると、驚いた様子

で街の中に駆け込んで行く。

まあ、オレの灰色髪が珍しかったのかな？

とか、その程度にしか考えなかったが、彼が去ってから数分。

街から騎士風の人が数人出てくる。

まさしく王国騎士の鎧なんだが……どうにも紋章が見覚えがない。騎士とも鳴れば胸にある紋章で、どこの所属か大体わかる物だが、今集まっている騎士達の盾に剣がクロスして描かれてるのは見覚えがない。

相当、階級が高い騎士団ではありそうだけど……。

と、考えていると少し離れた所から非常に聞き飽きた……もとい慣れた声が響く。

「トルネードセイバー！！」

ちなみに、トルネードセイバーとは呪文詠唱の代わりに剣を振る魔法だ。

魔法とはイメージが重要だからこそ可能な芸当だ。

ただし、魔力の消費量に比べ威力は控え目だ。

それでも騎士や剣士に愛用者が多いのは、中距離で手早く攻撃を仕掛けられるからだろう。

不意を打たれたら人では反応できずに吹っ飛ばされる。

ただ、あくまで人間なら……の話だけど。

「ガウツ!!」

ケルロンが小さく吠えた直後、バチバチツと弾けるような音がして、黄色い閃光が視認できない速度で走り、風の刃を迎え撃ち四散させる。

後ろを見るとケルロンが右の口を軽く開いていて、まだ少し放電していた。

「っと……ありがとな、ケルロン。助かったよ」

そう言うがケルロンはまだ気を緩めずに前方を見据え立ち上がった。

「魔剣召喚、ミヅキ!」

別に名前を呼ぶ必要はないが、呼んだ方がすぐ出せる。まあ、何度も言うけど魔法はイメージだ。

例外にオレの能力みたいな自動発動タイプもあるけど。

「少し灸を据えてやるつもりだったが……ケルベロスが助けに入るのは予想外だったな」

人を分け金髪の騎士がオレの前に出てくる。つてか、どうみても兄さんだ。

「えーと、久しぶり。兄さん」

とりあえず朗らかに挨拶してみるものの相手は明らかに怒ってる。

何かしたっけ？オレ。

何もしてないよな。召喚された時以来会ってないし。

「死んだかと思えば生きてて、急いで王都に戻れば勝手に出立……少しは心配する方の身なれ、愚弟」

ああ、会わなかったのが駄目だったんすか……。

まあ、オレ死亡説がどこまで広がってるかなんて知らないんだけどな。

「いや、まさか死んだなんて噂……」

「口答えはいい。灸を添えてやる」

うわ、まったく人の話聞く気ねえ！？

「昔からお前は好き勝手……商人になったただの勇者になったの……たまにはキツチリ言いかせてやる」

そしてコガ兄さんは何やらブツブツ言い出す。

正直、嫌な予感がする。そして一秒後に予感は的中した。

「ファイアボール!!」

「街中で魔法なんか使っくんじゃねえ!？」

一度に放たれた六個の火球。

オレが兄さんに勝てなかった理由は魔法だ。

オレは剣に寄る近接攻撃しか手段がないが、コガ兄さんは、剣と魔法に寄る中距離からの攻撃にも優れている。

だが、今は魔剣がある！

重量がゼロだからこそその剣速で全ての火球を斬る。

魔剣の特性は魔法や魔力の無力化。

ファイアボールは全て跡形もなく霧散した。

「ガルルツ！！！」

「ケルロン、待てっ！」

ケルロンがお返しとばかりに真ん中の口を開く。けど、ここでケルロンが本気を出せば街への被害が尋常ではなくなる。

……正規騎士だからと言って向こうは好き勝手やってるけど。

こういう時、流浪の身は不利だなあ。

しかし、兄さんに殺される事はないだろう。それに魔剣がある今、そう簡単に負けるとも思えない。

元々、剣の腕だけなら互角以上にやれるハズだ。

「トルネードセイバー！！！」

「迂闊なっ！」

コガ兄さんの放つ二回目のトルネードセイバー！

トルネードセイバーは剣を振らなければ発動できない為、軌道とタイミングが非常にわかりやすいという弱点がある。

オレは直線上に魔剣を置くだけでいい。  
それだけで風の刃は、そよ風と化す。

「近づいたつと……！」

「腕をあげたな、リユート」

コガ兄さんはニヤリと笑う。近距離戦に持ち込みはしたけど、一手間違えれば距離を放されるし、油断したら逆にやられる。  
有利と言えるほどのアドバンテージはない。

「武器の性能のお陰さ」

魔法を受け流した魔剣はバックハンドで持っている。  
本来なら力が入りにくい為、あまり好手ではないけど、魔剣なら関係ない！

そのまま力任せの一撃で剣もろともぶっ飛ばす！

幾ら相手が近衛騎士団団長とはいえ、人間としての限界がある。

この一撃を受け止めるにしても、流すにしても完璧には不可能なはずだった。

しかし、兄さんはオレが、まったく予想してなかった手を打ってきた。

実際に斬る訳にはいかないから剣の腹を向け振ったが、それを差し引いても、素手で受け止めれるはずがない。

なのに、魔剣が兄さんに届く前に、誰かの片手はオレの剣を受け止めた。

いや、よく見ると、魔剣は僅かに手に届いていない。つて、これは……!?

「聖殿の盾!？」

あらゆる攻撃を完全に防御する無敵の盾。これを使えるのは知ってる限りで一人しかいない。

「カムイさん!？」

聖殿の盾と言えど魔剣の一撃は防ぎきれずカムイさんは尻餅をつく。

「魔剣はやっぱり防御できないか、いてて。よう、リユート殿」

何故カムイさんがいるのか？  
そう自問するが、答えはでない。

でも、はっきりとわかっている事がある。

兄さんを庇った以上……敵だろう。

「悪いな、リユート殿。俺も二対一なんて真似は好きじゃないが任務とあらば仕方ない」

「任務……!？」

「お前、王の聖殿に行けって言葉を無視しただろ？」



とコガ兄さんが言う。

あー……………そういえば、そんな話あったな。

「俺とカムイの目的はリユートとミツキの拿捕。そして聖殿まで送り届ける事だ。何、大人しくしてれば魔女に危害は加えない」

「オレは!？」

普段なら任務重視の兄さんが大分、頭にきてるようだ。

昔から溜まりに溜まったのが爆発したんだろーな！

カムイを見ってみるがどうにも困った顔をするだけだ。

「すまないな、リユート殿。団長にコガ殿の好きにやらせるように言われているのだ」

「誰だよ、団長……………」

怨むぞ。

しかしながら、向こうは完全に、やる気。オレとしても一方的にやられる気はない。

気を取り直して魔剣を構える。

「さて、行くぞ」

まずは、そう言いながらカムイさんが前に出てくる。

防御力の高いカムイさんがオレを抑え、隙あらばコガ兄さんの魔法が飛んで来るのだろう。

なら、魔法を打てないくらいカムイさんに近づくしかない！

近距離で戦う味方に誤射なんて洒落にならない。

カムイさんと魔法を同時に捌くのは厳しいし、それしかないだろう。

踏み込む上段から切り下ろす。

あっさり避けられるが、聖殿の盾を駆使された前回より、よほどやりやすい。

「ライトニングスタッフ！」

「聖殿の盾！」

「なっ!？」

カムイさんとオレが、近距離にいるにも関わらず躊躇いなく打たれた雷撃の槍。

普通なら正気の沙汰ではないが、カムイさんは聖殿の盾で完璧に防御している。

小範囲に放たれた雷は的確にオレだけを貫いて行く。

肩、脇腹、左股。

右腕に当たった分は魔力を遮断する竜毛の籠手が防いでくれた。

やっぱり手加減はしてくれてるみたいだな。

大したダメージじゃない、けど……。

雷の魔法に打たれた部分はダメージだけでなく、痺れて動かさしに

くい。

麻痺効果。

こっちが本命だろう。

「その状態で、俺と勇者カムイの剣を受けるのは無理だろう？安心しろ、優秀な治療術師を連れて来ている。多少の怪我ならすぐ治るさ」

「悪いな、リユート殿。まあ、手加減くらい俺でもできる。安心してくれ」

コガ兄さんとカムイさんが、剣を構える。

人が動きにくいのを良い事に、右と左から挟み撃ちにするつもりらしい。

さて、どうするか。

兄さんは雷撃が当たった場所、全てが麻痺してると思ってるだろうけど、籠手に守られた腕は問題ない。

他は少しまずいな……。

ダンッ！！と地面を強く踏みつけると少しだけ麻痺が和らぐ。

足は動いてくれそうだ。

治して貰えるとは言え、斬られたら痛い。

それを喜ぶ趣味もないし、できるだけ抵抗はしよう。

頭に先祖帰りの能力が過るけど、斬られるより怪我をしそうだから、無視をする。

勇者の能力の事もよくわかってないし無駄な怪我は避けたい。

「結局、普通になんとかするしかないかっ！来いっ！！」

オレが武器を構えると同時に、二人は左右から斬りかかってきた。

ああ、無理だ、これ。

本気ではないにしろ、自分と互角に戦う相手の挟み撃ちなんて、どうしようもない。

そして、オレがそう気付いた瞬間、後ろから別の声が聞こえた。

「魔剣召喚」

聞き慣れた声が響く。

次いで上空から、無数の黒い剣が降って来て地面に突き刺さる。

それは、オレを中心に歪な円を描いていて、オレ自身にも刺さっているけど、痛みはない。

兄さんとカムイさんは間に突如、現れた剣に対し冷や汗を掻いて、斬りかかる体制のまま固まっていたている。

目の前に剣の雨が降れば無理もないか。

「うるさくて、ゆっくり寝てもらえないわね」

そう言いながらケルロンの後ろの荷台から少女が降りてくる。ってか、寝てたけどね？数時間。

「じゅめん、リポート。気付いたら寝てた」

ミナ自身、悪いと思っっているようで苦笑しながら謝ってくる。

「疲れてただろうし仕方ないさ」

「ありがとう」

短い会話を交わすとミナは次にカムイと兄さんに向き直る。

「いまいち状況の把握が、できてないけど……何、やってんの？あんな達」

ミナは少しイラついてるようで、怒ったように言う。

さらに、オレの襟元を掴み引き寄せ、カムイと兄さんにこう言った。

「これ、私のなんだけど。勝手にしないでくれる？」

……なんかいきなり所有物発言されてます、オレ。

五十七話 100の兄（後書き）

現在一話から順番に手直ししています。

具体的には、こころ変わる視点をもう少し統一。

三点リーダーを一つしか使っていない場所を修正。

今まで場移を改行の空白のみで表してたのを、わかりやすく  
を間に入れる。

文章の一部表現を変える。

こんな所でしょうか？全部の修正には少し時間がかかりそうです。

あ、本編はいつも通り更新します。

話の大筋は変わらないので、読み返す価値のある修正ではありません  
んが、少しでも読みやすくなったらと思います。

五十八話 100への伝言

辺りを囲っていた騎士達がざわめき出す。

カムイさんとコガ兄さんも事態を把握したように後ろに跳び距離を取って構え直す。

そして、訳がわからず離れて静観してたギャラリーすら口々に、その言葉を紡いでる。

傾国の魔女。

本当にミナは有名人だなあ。

オレも一応は勇者だし、そこそこ名前も知れているんだろうけど、ミナは間違いに有名だ。

今代最強と言われる勇者であり、実際に城を半壊させたのが大きいんだろう。

そして、その夜空のように黒く流れる長い髪は目立ちすぎる。

「ハア……。魔女がないから好機かと思ったら、荷台に居たとはな……」

コガ兄さんが、疲れたと言わんばかりに声を出す。

カムイさんは額に汗を浮かべ、剣を片手で構えている。いつでも、聖殿の盾を使えるようにだろう。

「どうして私達が襲われてるのか教えてくれないかしら？」

「傾国の魔女を襲う気はないさ。ちよっと聞き分けのない弟に拳骨をかまそうとただけさ」

「弟？」

コガ兄さんは肩を竦めて見せ、ミナは怪訝そうにオレを見る。

「……本当だよ。一応、血の繋がってる兄弟だ」

「一応って何」

声が淡々としてて、恐いんですが。

「家を勘当されてる」

そう言うで一応、納得したのか、ずっと掴みっぱなしだった襟元をようやく解放して貰えた。

「それで、騎士様が私達に何のよう？まさか、弟を殴る為だけに、これだけの人数を動かした訳じゃないでしょう？」

ミナはそう言うけど、兄さんは近衛騎士の団長。

その気になれば、このくらいの数は動かせるから恐い。

ただ今回は真つ当な用があるらしく、剣を下げて話します。

……手に持つてる限り戦闘意思は有るんだろうけど。



「オレ達、王女騎士団の目的は勇者の援助だ」

なんつー名前の騎士団だ。

「取り急ぎは、救国の剣王と傾国の魔女を聖殿まで護送する事だ」

聖殿……そういうば、王様からは行けって言われてたっけ。

そう考えると追っ手が来るのも予測できた訳だけど……。

「なんで、そんなに聖殿に拘るんだ？あそこには魔剣アウルが保管されてるだけじゃないのか？」

正確には聖殿は北東西連合からなる軍事拠点であり、南の魔人、更に言えば魔王の進行を退ける為の最前線だけど、この際、これは関係ない事だろう。

「俺達にも、ほとんど教えられてないから詳しい事はわからない。

が、魔剣の能力を持つ勇者は聖殿に連れていく習わしがある」

「なんだそりゃ……」

一応の理由はあるんだろうけど、予測がつかない。

「リユート、どうするの？」

横で話を聞いていたミナは完全にオレに任せる気の様だ。

まあ、それはそうか。

「ランディとコレットを探したいって言うのが本音だけど……」

生憎、手掛かりがなくどうしようもない。

「諦める、リユート。いくら勇者一人でも、この人数相手に勝ち目はないだろ」

兄さんは兄さんで好き勝手言う。

つてか、そりゃオレが二人居ても勝てないだろうけど……。

「ミナ、どうだ？」

「ん、手加減はできないかな」

なんて余裕そうに答える。

「構えろ」

「おい！兄さん何やってるんだ！」

コガ兄さんの一言で回りを囲っていた騎士達が攻撃体制に入る。

とは言っても近距離戦ではなく、魔法を打つ構えだ。

「お前に関しては護送中にでも、たつぷり説教をしてやる。傾国の魔女、君は少し好き勝手しすぎだ」

「勝手に呼んだのは、そつち。今では感謝したいくらいだけだ」

「なら大人しく聖殿へ来て頂きたい」

「リユート次第」

それが合図となりコガ兄さんが魔法を唱え回りの騎士もそれに連れて詠唱を開始する。

「炎よ！その力にて我が敵を打て。ファイアボール！！」

その言葉と共に八つの火球がミナ目掛けて飛んでくる。

それに騎士達の放った様々な属性の魔法が続く。

それに対しミナは地面に刺さる数多の魔剣を抜き右手と左手に一本ずつ構える。

『身体強化、速度、視力』

たまにミナが使う別の世界の言語。極短い間に詠唱は完了したようだ。

そこからは一瞬だった。

地面に刺さっている魔剣は胸程の高さがある。

多くの魔法は、それに衝突し勝手に消えた。

地面の魔剣に当たらない高めに放たれた魔法は全てミナが二刀流により切り払う。

くるくる回るその姿は、踊っているかのようだ。

全ての魔法を消滅させた後、ミナは片手の剣を降ろし、もう片方を肩に担ぐ。

「ふう。終わり?」

恰好は魔法使いなはずなのに、どうみても剣士にしか見えない。

余りの出来事に騎士達は何が起きたのか理解できずに戸惑っている。

その中でカムイさんがなんとか言葉を絞り出した。

「まさか……それは全部、魔剣なのか？」

周囲がざわめき、ミナも少し驚いた顔をしる。そして短く、声をあげた。

「あ、知らないんだっけ？」

「……まあ、魔剣はオレの能力って事になってたからな」

コイツ、自分の能力を秘密にしてたのすっかり忘れてたな。

いや、助けて貰った手前、文句なんて言えないんだが……。

「そういえばリユート殿は魔剣の名を『ミツキ』と名付けていたな」

「リユート……まさか、お前の魔剣は継承魔剣なのか？」

継承魔剣。その名前の通り他者から譲り受けた魔剣だ。

勇者シグルトがアウルに魔剣を授けられた際に使われた言葉だが今と成っては余り使われない言葉ではある。

まあ……誤魔化しようがないよな。

「そつだよ。元々、魔剣召喚はミナの能力だ」

ざわめいていた騎士達の間には明らかな動揺が走る。

当然と言えば当然だろう。

別に魔女と呼ばれるミナに勝つ必要なんてない。

今の魔法もアレで勝てるとは思ってなかっただろう。

ただ、オレとミナにリスクを背負わせれば良かったんだ。ここで負けても別に聖殿で数日過ごすだけなんだから。

しかし現実はどうか？

牽制として放った魔法は全て消滅させられた。

自分達の魔法は届かない。

一方的に魔女に狙い打ちにされる。

いや、実際には魔剣も欠点はあるんだけどな。

ただ、それは使ってるオレとミナの視点であって他の人からは伝説に出てくる武器。

そのプレッシャーはかなりの物だろう。

コガ兄さんさえ、次の指示を出せないでいる。

「まだやるって言うなら……手加減できないわよ？この人数」

ミナが冷たく言うと辺りの騎士達が少しだけ下がる。

はは、あの程度の冷たさで下がるなんて温いな。オレなんてもっと冷たくされてる。

「やれやれ、一旦引いた方が良さそうだな」

溜め息を吐いてコガ兄さんは続ける。

「リユート。女王騎士団は明日の正午まで宿を出ない。それまでに返事を決めておけ。次は、退けないぞ」

そして、騎士を引き連れ街へと戻って言った。

「リユート。明日、戦うの？」

騎士がぞろぞろと街中に入り見えなくなるとミナが心配そうに話しかけて来る。

なんだかんだ言っつて、人とは戦いたくないんだろうなあ。

「大丈夫だよ。明日は戦わない」

「聖殿に……行くの？」

「正直、それも悪くはないんだが……」

目的地もわからないし、長期間拘束される訳でもないだろうし。ただ、その必要もなさそうなんだよな。

「コガ兄さん……向こうの騎士はこう言っただよ。『国の騎士は逃げる訳にいかないから、行きたくないなら、そっちが昼までに逃げろ』ってさ」

無駄に戦って犠牲を出すのも馬鹿らしいから、それっぽい言葉で包んで伝えてくれたのだろう。

「えっと、じゃあ……」

「うん、戦う必要はない。けど、明日は早めに出なきゃな」

「……そっか」

最近、ずっとバタバタしてて、またゆっくりできないのに、ミナは安心したように笑う。

人との戦いに慣れてないんだろうな。

……この世界を旅していたら人との戦いも少なくはない。  
金品目当ての強盗や、奴隷目当ての誘拐団が主な相手だろう。

その時……ミナは戦えるんだろうか？

「どうしたの？リユート」

余程、深刻な顔をしていたのか、ミナが心配そうに覗きこんできた。

「ん、考え事。大丈夫だよ」

「そう？大丈夫ならいいけど……。これからはどうするの？」

「そうだなあ」

物騒な考えは後にしよう。

ケルロンとオレが居るなら、そうそうヤバイ事にもならないだろ。

とりあえず、今すべき事は……。

「納金だな」

「納金……？」

ミナはよくわかっていないようで、首を傾げていた。  
そりゃそうか。

「はい。確かにお預かりします。苦難を無事に乗り越えられたようで、何よりです」

「それも援助あつての事。ありがとございました」

受付のお姉さんと軽く社交辞令を交わして、銀貨を数枚渡す。

それは商人全員への援助であり、自らが窮地に立たされた時の保険だ。

商会。

この国どころか、大陸の商人の凡そ半数が加入してる。特に危険が多い旅商人は、ほとんどが加入している。

加入の条件は簡単だ。

収入の1割程度を納金すれば名簿に加えて貰える。

馬鹿にできない金額だが、利点も多い。

商会を通じて、取引が来る事もある。

商人同士の情報が入りやすくなる。

そして、以前オレも世話になったが、非常時に商売が再開できる程度の援助が貰える。

命さえあれば、いつでも復帰できるって訳だ。

そう考えると高い加入費とも思えない。

「……生命保険みたいな物ね。ちょっと高いけど」



ミナは横でぼやいている。  
彼女の世界でも似たようなシステムはあるらしい。

「あ、リユート様。伝言が入ってます。こちらですね」  
「伝言？」

受付のお姉さんから紙を受け取り目を通す。

内容は傭兵募集。

なんで商人にこんな伝言を寄越すんだ？

最初は、そう思ったが期限を見ると、すでに過去の物だった。

「送り主は？」

「商會に加入してない方の名前は控えていないので……」  
未加入……商人って線は無さそうだ。

貴族も金銭を幾らか払い正式な依頼にしてくるから無し。

「討伐内容は……森に住む魔物が。炎の魔獣を見たという報告もつて、アンノウンかよ……」

アンノウン。つまりは敵の詳しい情報無し。

熟練者が最もやりたがらない仕事だ。

「何見てるの？」

ミナが横から傭兵募集の紙を引っ張って覗き込んでくる。

「伝言らしい。けど、依頼期限も切れてて訳がわからん」

「炎の魔獣って何？」

「魔獣つてのは沢山いるからなあ」

数が多く実害が大きい魔獣ほど有名になるが、希少だったり辺境にいたりする無名の強力な魔獣もいる。

昔、公爵の依頼でソレっぽいのを狩ったけどアイツは溶岩の中を泳いで岩を喰う。

森にいるとは思えない。

「誰か受けたのかな。この依頼」

「アンノウン混じりとは言え、条件は悪くないから受けた人はいるだろうな」

多少、距離があるが金払いは悪くないし、アンノウン以外の敵は数だけだ。

でも、オレに伝える意味があるか？

そう考えた所で一つの可能性が思い浮かぶ。

「まさか、ランディか？」

にしても、何でこんなわかりにくい……。

しかし、それ以外の可能性は思い付かない。

「ランディなの？これ受けたの」

「それ以外に心当たりがないって言うだけだな」

場所は国境。と言うより最前線付近の村。

人は少なく魔獣の出現率も高いが資源の豊富な場所だ。

商会の地図を見て、道を確認する。  
勿論、自分自身の地図もあるけど、商会の地図は、その都度情報が更新されている為、非常に重要だ。

「って、なんだこれ……」

「どうしたの？」

地図を見ると丁度、この街と目的地を結ぶ道を赤いラインが大きく横切っていた。

「赤いラインは立ち入り禁止。少し迂回したら黄ラインになってるだろ？これは危険地域」

別に立ち入り禁止と言っても強制力はない。

ようは「死にたくなければ近寄るな」って事だ。

「あの、この立ち入り禁止ってどうしたんですか？」

先程まで話してた受付の人がまだ暇そうだったので聞いてみる。

「そこは、えっと何やら見慣れない魔獣の大軍が出たって話です」

「見慣れない魔獣……？」

「はい。見た目はウエアウルフらしいのですが、どうにもアンデット化して徒党を組んでいると……」

「魔獣の大軍か……。危険地域は魔獣が移動する可能性の高い場所か」

「はい。何分、初めての事態なので大きめに範囲を取らせて頂いてますが、近寄らない方がよろしいかと……」

オレは地図を見ながら頭を抱える。

確かに近寄りたくはない。

が、黄ラインまで迂回したら、かなりの遠回りになってしまう。ケルロンとは言え、数日では効かないだろう。

「倒して行けないの？」

「ミナが居ればいけると思う。が、なるべく危険な道は避けるべきだ」

今回うまく行ったとしても、そんな事を続けたら、いずれ小さなミスで死ぬ事になる。

「せめて、もつと人数がいたら……」

禁止地域を避けるとしても、危険地域へ行く傭兵を雇うには、相応の金額が必要になる。

せめて同じ目的の、南に行きたい冒険者や傭兵が居ればいいんだが……。

……いや、いるじゃないか。

少し時間は取られるだろうけど、遠回りするよりは余程早い。

そうと決まれば話は早い方がよい。

「ミナ、行くよ」

「……どこに？」

ミナの手を取り商会を出ると彼女は少しだけ頬を赤らめて声をあげる。

「ちょっと説明くらいしなさい！ああ、もう、放せ！」

本当に、このミナの口調に遠慮がなくなってきたな。

……まあ、握った手は振り払われてないし、いいか。

五十九話 100と騎士団の行軍

「高すぎる！相場の二倍じゃないか！」

「でも聖殿までいけば高級品。こんな値段じゃすまないぜ？」

「しかしだなあ……………」

「ケルロンの足に合わせて来たんだ。疲れてる騎士隊を労つてもいいんじゃない？」

「くっ…………。ええい、金貨三枚！」

「ま、そのくらいならいいか。毎度！」

コガ兄さんは腰に下げた革の財布から金貨を三枚出して渡してくる。

取引成立。

代品は、馬車の荷台の荷物全てだ。

と、言っても冷凍した魚しかないが。

「みんな！今日の夕食は王都の魚だ！大量にある！！それまでギリギリ歩くぞ！」

コガ兄さんが大声で言うと辺り全ての騎士達から歓声上がる。

街より少し南に位置する平原。

オレとミナは王女騎士団の連中と一緒に、聖殿へと向かっていた。

立ち入り禁止が解かれるのは、いつになるかわからないし、それなら聖殿で数日漬しても、危険地域を通る方が早い。

流石、王女の名を冠する騎士団だけあり個々の錬度も高いらしい。これなら心配はいらないだろう。

聖殿へ行く趣旨を伝えた時、兄さんは渋い顔をしたが、王女様が大歓迎だ！と喜んでくれた。

そして次の日、昼食を済ませ街を出て話を聞いて見たら随分無茶な行軍をしてたらしい。

そこにつけこませて貰った。

一段落ついた分、騎士達も昨日よりは気楽だろうが、今までの苦勞がなくなる訳じゃない。

報いた下に褒美を出すのも上の仕事。

戦場で効果的で簡単な褒美。それは食事！

って訳で、相場より大分高値で魚を全て売らせて貰った所だ。

王都の北は漁港。

そこで取れた慣れ親しんだ魚は騎士達も喜ぶ事だろう。

見るからに足取りが軽くなっている。

「士気の維持も大事な仕事ってな」

「騎士を辞めたお前が言うな。確かに値段の事を除けば助かったよ。王女様の指揮は下の事まで考えていない」

とは言え、まさか酷使している訳ではないだろう。

それでも働き続けていれば……ましてや、野営が続く行軍では『やる気』と言つものは減っていく。

それを繋ぎ止める何かが必要なのだ。

「それを王女様に求めるのも酷だろう。副隊長の兄さんやカムイさんが、やればいいさ」

「その通り。と言いたい但实际上にはオレ一人なのがな」

そう言いながら兄さんは地図を広げると視線を落とした。確かに、あの人に用兵は向いて無さそうだ。

「危険地域は、この辺りか？」

「商会の地図では、このラインかな。横は王国中央くらいまで」

「とんでもない範囲だな……。今日は早めに休んで明日の朝方から一気に危険地域を抜けるか」

兄さんが指した場所は丁度平地で草原になっている。

二人の旅なら危ない場所だが、大人数での行軍では見張りも立てやすいだろう。

「って、ここに村があるんじゃないか？」

「場所が場所だ。農村だろう。こんな大人数が泊まれるとは思えん」

……なるほど。

予定地から一時間程、歩けば小さな村があるだろうが、そんな小さな村じゃ十数人は厳しいか。

少数での旅では、まったく考えなくて良かった部分だ。流石に、この辺りは兄さんには敵わない。

しかし、村か。

近くに大きな街がない以上、多少の人は集まるはず。



そうなるかと酒屋くらいはあるだろうな。距離も近い。

「……どうした？ブツブツ言ってる」

「ん？いや、なんでもない。そういえば、ミナは？」

どうやら無意識に口に出てたらしい。

オレの言葉に兄さんは前方を指して続ける。

「一番前で、王女様の乗る馬車の護衛をしてる勇者と話してるみただぞ。名前は確か……ロザリーだっけな？」

本名は長いから忘れた。と兄さんは続ける。

勇者の中には、たまにやたら長い名前の人がいるからなあ。

……この世界にもいるけどさ。

「とりあえず、ちょっと用事ができた。ミナと話してくる」

「ああ。馬車の魚は勝手に下ろしていいのか？」

「魚以外の私物には手をつけないでくれよ」

まだ解毒してないキノコなんて物が夕食に出てきたら洒落にならない。

「ミナ！」

小走りになって叫ぶと、歩いてるケルロンに乗っているミナが振り向いてくれた。

隣で馬に乗っている女性も、こっちを振り向いている。……どうなってるんだ、あの髪型。

女性の髪は綺麗な金色が肩より長い程度であったが、左右からくる

くると螺旋状になって垂れている。

どうやって固定してんだ。

暫し髪に疑問を抱いているいてミナの視線が余りに冷たいのに気づかなかつた。

つて、え、何、なんか怒ってる？

「恥ずかしいから大声で呼ぶなっ」

近づいた瞬間、ケルロンの上から殴られる。いや、いつも通り痛くなんかないけど。

むしろ騎乗してる分、不安定な体制のミナは「きゃっ」と短く悲鳴をあげバランスを崩した。

咄嗟に手を伸ばして肩口を掴み引き寄せる。

「よっ……と！大丈夫か？」

「う、うん。ありがと」「くすくす。傾国の魔女も、可愛い悲鳴をあげるのですわね」

「なっ!？」

ミナは金髪の女性に指摘されると慌ててオレから離れる。

さつきまでは驚いて、それどころじゃなかったようだが、顔が真っ赤だ。

「ロザリー……で、いいのかな？」

「構いませんわ、勇者フェトム」

「オレの事も知ってるんだな。リユートでいいよ。家名は今はないんだ」

ロザリーは少し驚いたようだが何も聞かずに納得してくれた。

服装や雰囲気からして彼女も元の世界では貴族だったのかな？  
家名を捨てる事は上流では、不名誉とされているから、気になる部分もあるだろう。

それでも気にしないよう振る舞ってくれているのは、ありがたい。

「にしても、仲良いのか？二人共」

オレが来るまで、ミナとロザリーは普通に話してたように見えた。  
元の世界のミナは知らないけど、こっちの世界では珍しい光景だ。

「やっぱり女同士だと少し話しやすいしね」

そうミナが返すと隣のロザリーがクスクスと笑う。

「……………何よ」

ミナが目を細めて聞き返すが迫力が無い。

「いえいえ。以前のミナは随分と恐い顔をしてたので、仲良くなったのは昨日ですわ」

「余裕がなかったのよ、あの時は！」

余裕ないからと言って城を壊すのはどうかと思うが、言わない方が身の為だろう。

オレの。

「今は余裕がありますのね？羨ましいですわ」

ロザリーはチラツとオレに視線を合わせてくる。何か見透かされているようで、恥ずかしいが、彼女の視線はすぐに王女を護送している馬車を挟んで反対側にいる赤髪の男に向けられていた。

「彼も勇者なのか？」

「そうですね。カムイ率いる聖者パーティーの炎の担い手アウゼルですわ」

どうやらロザリーとアウゼルで馬車の両側を護衛する形をとっているらしい。

カムイさんが居ない所を見ると馬車の中で直接護衛についてるのか？あの人の能力は防衛向きだし、その可能性は高い。

因みに王女は安全の為、ほとんど外に姿を見せていない。宿では、どれほど退屈かを語られた。

カムイさんは王女に好意を持ってみたいだし、喜んでもらう事だろう。王女がどう思つかは知らないが。

そう考えていると隣にいるミナが、もう一つの華のある話題を咲かせる。

「ロザリー。貴女、もしかしてアウゼルが好きなの？」

ミナ自身はそんな事を言われたら真っ赤になって固まるだろうに……。  
やっぱり女の子ってのは色恋の話題が好きなのか？

それに対するロザリーの返答は随分と余裕のある物だった。

「わかりませんわ。でも、沢山助けて貰いましたの」

そう言っただけ彼女は微笑む。

ミナも「そっか」短く言っただけ楽しんでる。

そんな雰囲気ですり歩いて居ると後ろから、今日はもう休むぞ！明日は早いから準備しておけ！と声が響き騎士達は次々と野営の準備に移っていった。

「随分と早いわね。騎士の人ってみんな、こんな感じなの？」

「いや、明日、朝早くから危険地域を一気に抜けるらしい。その為だろうな」

範囲自体は一日で抜けられそうな物だが、戦闘があれば勿論時間は伸びる。

だから、余裕を持って進むんだろう。

「そうだ。ミナ、ケルロンを貸してくれないか？」

「ケルロンが良いなら良いけど」

ミナがケルロンから降りると、こっちに依ってきて「がっつ！」と吠えてきた。

まるで「体を動かし足りない！」と言ってるように聞こえるけど、真偽は知らん。

「よしよし、もう一走り頼むな」

「どこ行くの？」

「隣町まで買い物」

ケルロンの足なら往復したって、そんなにかからない。

「まあ、いいけど。何、買って来るの？」

「酒の予定だけど……行ってから決める。果物あれば買って来るよ」「ほんと？ありがと」

ミナの返事はそっけないけど、口元は笑っている。

元手にさっきの金貨三枚もあるし、安いものだろう。

「さあ、行こうか。ケルロン！」

「がっつ！！」

威勢の良い鳴き声と共に、ケルロンは駆け出す。

その早さは先程までの行軍とは比べ物にならない、魔獣の本気だった。

しばらくして帰って来た大量の荷物を抱えたリユートに、数日は持つだろう量の果実を貰って、ミナはご機嫌だった。

次の日には何事もなく危険地域を抜けた騎士団の面々に酒類と軽食を売り歩くリユートの姿があった。

## 六十話 1と聖殿都市

遠目に見えた時は山かと思った。

少しずつ近づいて行くと、とても長い長い壁だと認識できた。

今、近くで見て私は思わず感嘆の声をあげる。

「すごい……」

「北東西どの国にも属さない要塞都市。大陸を分断するかのような長い防壁の裏に作られた武器の宝庫。通称、聖殿の都だ」

元の世界の万里の長城に似ている。

ここからでも、まだ遠くに見える防壁に一定の間隔を置いて塔が立っている。

それが、見張り台なのか矢倉なのか私に判断はできない。

そして、そこからは沢山の屋根。

高層ビルなんて物こそ無いけれど所狭しと家が並んでいる。

外周には見える限りでは商店が通りの横で所狭しと営業していた。

「これ、全部が都市なの？」

「流石に全部ではないさ。四分の一くらいかな」

横に伸びて見えなくなっている防壁を指差して聞く私にリユートが答えてくれた。

因みに四分の一とは言っても、ここからじゃ右手側も左手側も終わりが見えない。

「もしかして、すつごく大きい？」

「各国の首都より大きいな。細長いから不便な作りだけど」

街があるのが奥は壁までとすると歩いても数十分くらいかな？

横の終わりは見えないけど……王都より面積が広いと思うと嫌になる。

「因みに、一番広い街はストロノー牧場だ。本来なら、ただの店と牧場だったんだが、規模の大きさと利便性から、ほぼ街になってる」

ストロノー……？どこかで聞いた事がある気がする。

「城のパーティーで試食をお願いして来た商人だよ」

……！！

思い出した。色んな食べ物を紹介してくれた人だ。

「すごい人だったんだ……」

「食物に関しては、あの人に敵う人はいないよ。さて、聖殿は……あれか？大分ズレたな」

リユートの視線を追うと、街から少し離れた場所にポツンとソレっぽい建物がある。

パルテノン神殿みたい……見た事ないけど。

それよりも、結構遠い。リユートがズレたって言ってるのを考えると多分、あそこに着く予定だったんだろうな。

「兄さん！聖殿から大分離れてるけど、今日行くのか？てか、いつまでここにいるんだ？」



「今日はもう休むよ。王国の宿舎を使うから少し待ってる……って、おう、来た来た」

街からガチャガチャと音を鳴らして重武装の兵士さん達が近づいてくる。

……ていつか、騎士かな？

「王国の聖殿騎士団だ。聖殿都市での王女様の護衛の任務をして貰う事になっている」

「王女騎士団ですな？僕は聖殿騎士団第三隊隊長ロウムです。王女の護衛に参りました」

「ああ。ありがとう。これで王女も狭い馬車から出歩けるよ」

馬車に引き籠りっぱなしの指揮官ってどうなんだろう。

「護衛って、コガさんやバカカムイじゃないの？」

「俺達は名目上部下だからな。王女が行けと言うなら行かなきゃ行けない。ずっと側で守ってる訳には行かないんだ」

なるほど。

今までも警戒してレーナ王女はずっと馬車の中。夜に少しだけ外に出てきたくらいだ。

でも、この人達が護衛に付くなら少しは自由に動けるのかな？

隊長と名乗ったロウムさんを見る。

如何にも歴戦の戦士と言った風貌の、おじさんだ。なんか見てるだけで頼もしい。

「初めまして、魔女殿。王女騎士団共々、聖殿都市を出るまでは御

一緒させて頂きます」

「は、はじめまして……。私の事、知ってるんですか？」

「ハハハ、黒髪の勇者は有名人ですからな。城を半壊させた話は三  
国に広まって降ります」

「うあ……」

その話は散々言われてる。

正直、恥ずかしいっ！

今思い返せば流石にちよつとやりすぎた気がする。

……そう思えるのも余裕があるから、かな？

ロザリーに言われ事が頭を過った。

余裕があつて羨ましい。

そういえば召還された時は帰る事ばかり考えてたよね。

こうして、色々考える事ができるようになったのも、リユートのお  
陰かな？

そうだよね。

リユートの……。

「リユート！毎晩毎晩、どこに行っていた！昼は馬車から出して貰  
えないし、つまらなかつたぞー！」

「おっと……。商人も中々に忙しいのですよ。まさか、前の街以来  
一度も顔を見れないとは思いませんでしたが」

……何やってんの、リユート。

視線を向けると、いつの間にか馬車から出てきてリユートの腕に抱きついている王女と、満更でも無さそうにしているリユートが居た。

確かに私は彼女って訳じゃない。

何も言う資格はないかもしれない。

……でも、気に入らない物は気に入らないよね？

「リユート………！」

「リユート殿！！俺の婚約者に何をしているか！！」

いざ叫ぼう。

そうした直後に私より大きな声が響いて来た。

その声の持ち主は馬車から飛び降りてリユートに駆け寄る。

あのバカ勇者！！

お陰でタイミングを逃した私は動けない。

「まだ仮であろう！本当の婚約は父上に勝ってからのハズ！」「父上って……王様って強いんですか？」

「リユートの方が強いに決まっている！」

「くっ……俺とてすぐに勝つさ！！」

リユートを中心に騒ぐ一行。

リユートはこっちに気づくと困ったような笑みを浮かべる。

……普段は私が困らせてるのかな？  
客観的に見ると中々にリユートの心情が見える気がする。  
ここで、私まで騒ぐのはちょっと可哀想じゃないかな？なんて考えも浮かんできた。

「彼が……魔剣使いですか？気になりますか？」

「そんな事！！………なくはないんですが」

横に立ってるロウムさんにいきなり話かけられ、反射的に否定……  
した事を否定する。

駄目だ。否定できなくなってきた。

って、ロウムさん、なんですか、その微笑ましい視線は。

私はちょっと機嫌悪そうに見返すが、ロウムさんは流石の年の功と  
言うべきか、軽く笑いながら返してくる。

「いやはや、すみませんな。娘が丁度魔女殿と同じくらいの歳な  
のです。つい、お節介を焼きたくなってしまうです」

「別に……いいですけど」

恥ずかしかつたけど、嫌じゃないし。

「魔女殿、今宵はこれより我が聖殿騎士団第三隊の宿舎で食事を  
用意しておりますが……このままでは、彼の隣は取られてしまうので  
は？」

「む……それは、ちょっと困ります」

そうでしょう、そうでしょう！とロウムさんは大袈裟に頷く。  
私も本気で言ってる訳じゃない。

口元がにやついているのが自覚できるくらいだ。

何だろう、この人、楽しい。

「私、ちょっと行ってきます。リユートを隣の席まで引き摺らなきゃいけません」

「了解いたしました！御武運を！」

ロウムさんは一転引き締まった表情になって敬礼をしてくれる。真剣なのは表情だけだろうけど。

お陰で……さっきみたいなの、イラつきはもうないけど。

余裕。

うん、余裕だ。

「二人共、前にも言ったけど……コレ、私のだからね？」

リユートの袖を指先で摘みながら、そう言うのは思ったより恥ずかしかった。

「これは、中々に……」

「私、この世界でこんなに多彩な食事を頂けるとは思いませんでしたし

たわ」

「王城の食事よりすごいじゃないか」

上からリユート、ロザリー、アウゼル。

三人が目の前に並べられた食事に各々の感想を言ってる。そういう私も楽しみで仕方ないんだけどね。

「聖殿都市は各国の物資が集まりますからな。今日は王女様に魔女殿も来ると聞き料理番も張り切っていました故」

宿舎に入ると部屋に案内された後、食事に集まった。

因みに私とロザリーが同じ部屋だ。王女騎士団の人達はしばらく、ここに駐屯するらしい。

今の席は丸テーブルにリユート、私、ロウムさん、ロザリー、アウゼルで輪になってる。

王女とバカ勇者とリユートのお兄さんは向こう側。

「ささ、皆さん遠慮為さらずに」

ロウムさんの、その言葉を合図に皆食べ始める。

勿論、私も。

「流石異世界ですわ。見た事がない食べ物沢山！」

「ロザリーが、そこまで喜ぶのは初めて見たな」

「少しだけ異世界に来て良かったと思いましたわ」

仲良いなあ。

あっちの二人。それに比べて、こっちのは……。

「何難しい顔しながら食べてるの？」

「いや、これを大量に仕入れて王都に持ち帰れば売れるんじゃない、モガツ！？」

大体そんな事だろうと思った。

喋ってる途中に、良くわからない野菜を良くわからない風に料理した物が刺さったフォークを口に突っ込んでやった。

「どう？美味しいでしょ？道中で騎士さん達相手に荒稼ぎしてたんだから、こんな時くらい楽しめ」

リユートの口に入れた料理を自分でも食べてみる。  
あ、美味しい。

「もぐ……うまいな。それもそうか」

うんうん。

せつかくこんなご馳走なんだから、美味しく頂かないとね。

「ふむ。リユート殿、気をつけてください。尻に敷かれてしまいますぞ？」

「こぶっ！？」

ロウムさん！？

この人、良い人だけど、オヤジだ！

「冗談になってないのが怖い所です」

リユートも淡々と料理を食べながら返すな！

じいー……と、リユートを睨み付ける。  
でも、流石にリユートも慣れてきたらしく、何処吹く風と言った様子で食事の手を止めない。

あー……もう、いいや。本気で怒ってる訳じゃないし、私もご飯食べよ……。

そう思って、お皿に手を伸ばした時、頭の上にポンて手が乗せられた。

「なんだかんだ言って助けられてるからな。多少の言う事は無条件で聞かせ」

「うるさい」

……うるさい！

けど……楽しい。

明日からは聖殿。

聖殿で何をするのかは、わかんない。けど、忙しくなるんだろう。

なら……今日は、もう少し素直に楽しもう。

「リユート」

「ん？」

「ありがとう」

目を合わさずそう言つとリユートは少しだけ嬉しそうに笑って食事に戻った。



「ここからは、僕も立ち入りを許されておらぬ。二人で入ってくれ」  
ロウムさんに連れられて聖殿内部に入った私とリユートは大きな扉の前に来ていた。

「二人でって……道は？」

「中は大部屋でな。中央に魔剣アウルが刺さっている。そこに行けばわかる」

「わかりました。ちょっと行ってきます」

リユートとロウムさんの話が終わると大きな扉は錆び付いた様な音を出しながらゆっくりと開いて行く。

「行こう、ミナ」

「……うん」

リユートが差し出してきた手を握る。

聖殿内部は広く薄暗い。この世界の技術じゃ仕方ないかもしれないけど、少し不安だったから、手を取った。

「物凄い広さね」

「なんで、剣一本の保管にこんな……？」

確かに王都の闘技場が丸々一つ入りそうなくらいに広い。

「ま、彼に聞けば良いか」

そう言うリユートの先には……剣。

台上に一本の青白く輝く剣が刺さっている。

きつと、アレが魔剣アウル……。伝説の武器。綺麗……。

そして、魔剣の刺さっている台の下に青い髪の青年が、片膝を立てて座っている。

横には黒髪……。って、私よりも長い。

それでいて、下は赤、上は白の袴……。巫女さんにしか見えない！

聖殿と呼ばれてるとは言え、まさか巫女さんがいるとは思わず驚いた。

「よお、アンタ等が魔剣使いかい？何百年ぶりかねえ」

青い髪の男はリユートと私があると勝手に話し出した。

って……。何百年？

「……誰だ？王はオレも知ってる人が待ってると言っていたが？」

リユートも彼には見覚えがないようで、警戒して話してるみたいだ。それに大して青い髪の青年は楽しそうに笑いだす。

「知ってるんじゃないか？この世界に生まれた人間ならな」

わけがわからない。

リユートも私も、そう思った。けど、彼は気にせず自分の名を名乗

る。

「俺の名前はアウル。魔剣士アウルだ」

六十一話 100と新しい技術(前書き)

お久しぶりです。

四月は忙しく更新が滞っておりましたorz

五月に入り、むしろ暇になって来たので、またコツコツ更新させて頂きます。

何気に一周年です。

おめでとつございます、自分。

ここまで続けられてるのも一重に読んでくれる皆様のお陰です、本当にありがとうございます！

六十一話 100と新しい技術

「王女様は聖殿に来ないのですか？」

「ああ、今日はな。馬車の中はバカ勇者しか話し相手も居ないから公務は順調だったのだが、王都に届ける手配をせねばいけない。今日はロウムに任せる」

「うむ、儂が責任を持って案内しましょう。リユート殿、ミナ殿、どうぞ馬車へ」

正午より少し前、長旅で疲れが溜まって居たこともあり、オレ達はやっと活動を再会した。

目的地は大陸中央に位置する聖殿。……だが、王女騎士団の面々は今日は来ないらしい。

「ケルロンは？」

「聖殿の外までなら連れて行っても問題はありません」

「そう。ケルロン、馬車についておいで？」

ミナが撫でるとケルロンは尻尾を振りながら一吠えする。

聖殿か。

遙か昔、初めて魔王を名乗った人間が居て、それまで存在しなかった魔物を従え攻めてきた。そんな伝説の話。

実話を元に行っているだろうけど、どこまで本当かは疑わしい。

けど、確かに、その時に最後の砦となったのが、この聖殿であり、中には勇者シグルドが魔王を倒した魔剣が安置されている。

今は要塞都市として大陸でも屈指の軍事力を持つ街だが、当時はただの神殿。  
どれだけの絶望を抱えながら戦いに備えていたかなんて考えたくもない。

「この辺まで来れば良く見えますよ」

馬車の先頭で騎手をしているロウムさんが前を指差す。

「……大きい」

所々、ヒビが入ってたりするが、そこは昔の建物だ。

多少は仕方ない。一応、何度も補修はしているらしい。

しかし、その事を差し引いても聖殿はミナが感嘆の声をあげる程に圧倒的な存在感を放っている。

「昔は、もっと小さかったらしいけどな。補修や改装、皆として利

用する為に増築を重ねていたら、巨大になっただけらしい」

「ふうん。なんか修学旅行に来たみたい」

「しゅうがく……?」

「こつちの話よ」

とりあえずミナは楽しそうだ。

しかし、ここまで来ると見張りも多いな。

辺りを見回すと彼方此方に各国の兵士やら騎士やらが立っている。

名前こそ聖殿だが、実態は最強の軍事都市のシンボルなんだから当然だろう。

普段なら入る事すら叶わない場所だ。

って、言っても商売にはならなさそうだけど。

まさか、聖殿の壁の一部を欠片として持って帰る訳にも行くまい。

「ご苦労。ノースポーラ王国聖殿騎士団だ。予定通り魔剣の勇者をお連れした」

「ああ、話は聞いています。どうぞ」

服装からして西の帝国の騎士だろうか？

重装備の騎士に道を開けて貰い馬車を降りる。

「中は薄暗いので足元に注意してください」

聖殿の中は、小さな火の魔石が一定間隔で飾られていて、それが灯りになってはいたが確かに薄暗い。

「窓一つないんだな」

「うむ。どうしても知られたくない物があつてな」

「……魔剣じゃないのか？」

「似たような物だがのう」

そもそも軍事要塞としてなら防壁がある。

ここは、なんなんだ？

今までは漠然と魔剣が安置されてる程度にしか思っていなかったけど、考えてみたら剣一本を守るには嚴重すぎる。そして中に入ってから、わかった事だが警備の嚴重さに比べると建物の構造自体は普通なんだ。

ふと右腕が何かに引っ張られる。  
見てみるとミナが袖を掴んでいた。

「……………どうした？」

「別に」

……………？

訳がわからない。

「ははは、リユート殿は本当にミナ殿に便りにされておるな！」

ロウムさんは何やらわかっているようで、豪快に笑う。  
もしかして……………。

「怖いのか？」

「ありえない」

即答で否定されたけど、聞いた瞬間、袖を掴んだ手がビクツとしたのに気づかないオレじゃない。

まあ、確かに薄暗いしな。

人も少ないし無理もない……………のか？

緩やかにカーブした道をしばらく歩くと一際大きな扉の前にたどり着く。

道自体は単純だな。

迷路になってる訳でもない。

剣を守るつとにするなら聖殿自体に防衛機能を付けて置きそつな物だけだ。

どうにも何かを根本的にわかってない気がする。



しかし、考えても答えは出そうもない。

「ここからは、僕も立ち入りを許されておらぬ。二人で入ってくれ」

「二人でって……道は？」

「中は大部屋でな。中央に魔剣アウルが刺さっている。そこに行けばわかる」

「わかりました。ちょっと行ってきます」

目の前の扉が嫌なら音をたてながらゆっくりと開く。

中は不思議な淡い光に包まれたホールのようなようだ。

「行こう、ミナ」

「……うん」

袖を掴みっぱなしのミナに改めて手を差し出すとギュッと握り返してくれた。

情けない事にオレも緊張しているらしい。

「物凄い広さね」

「なんで、剣一本の保管にこんな……？」

まるで大きな闘技場のような部屋だ。

例え魔人同士でも、この部屋なら戦えるだろう。

「ま、彼に聞けば良いか」

部屋に入ってすぐには気づかなかったけど、人の気配がする。

視線を巡らせて見つけた青年に歩み寄る。

彼の後ろには青白く光る剣が台座に刺さっている。

恐らくは魔剣アウル。

青年の横には一人の女性がいた。  
見慣れない赤と白の服装。ミナよりも更に長い黒髪。  
彼女も勇者か？

しかし気になるのはやはり男の方だ。  
オレが気配に気付いたのは女性が居たからだ。  
この男は何か、恐ろしく気配が薄い。  
皆無と言う訳ではないのが、また気味が悪い。

「よお、アンタ等が魔剣使いかい？何百年ぶりかねえ」

こつちが、悩んでる間に青髪の男は飄々とした様子で話かけてきた。  
何百……？何代前かの勇者か？  
勇者なら多少寿命が長くても能力という事で納得がいく。

しかし、オレはコイツを知らない。

「……誰だ？王はオレも知ってる人が待ってると言っていたが？」

そう言うと青髪の青年は楽しそうに笑い出す。  
それを、隣の女性に目で咎められると、楽しそうに話し出した。

「知ってるんじゃないか？この世界に生まれた人間ならな」

この言い様。やっぱり勇者か？  
以前勇者であった者なら名前くらい知っている人は少なくない。  
とは言え、オレはそこまで熱心に召喚の歴史を知っている訳ではな  
いから、まったく心当たりないんだが。

だけど、次に男が名乗った名前は常識を越えていた。

「俺の名前はアウル。魔剣士アウルだ」

一瞬、思考が止まる。

アウル……？

その名前なら知っている。

いや、知らないハズがない。

世界を救った初代勇者パーティーの一人。

「待て。アウルは魔王との戦いで死んだハズだろ？」

魔剣士アウルは、シグルドに魔剣を継承したと同時に力尽きたハズだ。

それに魔剣が能力なら、先祖返りもない初代勇者には他の能力はあり得ない。

「ああ、死んだよ。確かに俺は死んだ。今の俺は魔剣士アウルってよりは、魔剣アウルだ。剣の思念体っていった所だ」

「剣の……思念体？」

「ああ。不死の王……初代魔王を倒した後、気付いたら、こうなっていた。物に触れる事はできないが、考えてる事はできる。ちなみに、コイツはナギ。今の魔剣アウルの使い手だ」

アウルがそう言うとナギと呼ばれた女性は丁寧に頭を下げる。

「ナギと申します。よろしくお願ひしますね、リユートさん」

「あ、はい。よろしくお願い……って、痛っ!？」

挨拶してる最中に手を強く握られた。

「何デレデレしてる」

「初対面だ!ただの挨拶だろ!？」

「まったく」

確かに綺麗な人だとは思ってたけど、今は流石に理不尽じゃないか!？」

そうは思っても、ミナが聞かないのはよく知っている。

「ふふ、大丈夫ですよ、ミナさん。私は、ここにずっとアウルと一緒にいますから」

ナギが柔らかなく微笑むとミナもぎこちなく笑い返す。

とりあえず、あれでいて社交的な子だ。オレ以外には。

「ナギは俺と違って普通の人間だ。だから魔剣を使えるんだけどな」

「魔剣使いを、聖殿に連れてくる理由は、アンタがいるからか……」

「魔剣に関しては俺達以上に知ってる人はいないからな」

「それなら、二人でナギが魔王を倒せば、すぐ終わるんじゃないか?」

半分冗談で、そう言ってみたがアウルは少しだけ真面目な表情で答える。

「残念だけど、魔剣アウルは、もう無効化ができないんだ」

「……なんだって?」

魔剣と言えば、魔力の無効化。  
その能力のお陰で、初代魔王を倒せたんだ。  
その能力がない？

「刃が欠けたのがいけなかったのでしょうか？途中から、一切魔法の無効化ができなくなつて、しまつたんです」

ナギが台座から剣を引き抜き、じーっと見ている。  
確かに剣の中程が大きく欠けていた。

「召喚しなおせば治るんじゃないか？」

「生憎、俺がどんな原理で思念体になつてるかわからん。魔剣を消した後、再召喚が可能なのか？俺は消えないのか？わからない事ばかりだな」

「……これまでに魔剣使いは何人が居たんだろう？そいつらはどうなつたんだ？」

「死んだよ。戦争中に」

「え？」

言葉の意味は理解できたけど、思わず聞き返してしまつた。  
そうしてしまつて、アウルは呆気なく言つたんだ。

「それぞれの時代の魔王との戦争中に皆死んだよ」

「みんな……死んだの……？」

今まで黙っていたミナがアウルにそう聞いた。

彼の言うことが本当なら……いや、本当なんだろう。

つまり、魔剣使いは、全員魔王との戦いで生き残れなかつた事になる。

「ああ、死んだよ。なんでだと思っ？薄々気付いてるんじゃないか？」

ミナは、戸惑っているが、オレにはなんとなく理由はわかる。凄く単純な理由だ。

「魔剣は、勇者の能力の中では……弱い」  
「その通り」

攻撃に使う分には、剣と変わらず。  
防御に使うにしても、カムイさんの様な能力の方が強い。

「世間じゃ無敵の能力みたいに言われてるけど、案外もろい。だが、厄介な能力を持つ魔人相手には非常に効果的な武器でもある」

そう、例えば初代魔王の様な。

「本題だ。なんで魔剣使いが、ここに呼ばれるかの理由は二つ。まずは、俺が迂闊にここを動けないから来て貰う。二つ目は、これから魔剣の使い方を教える」

魔剣の使い方、それはオレやミナがまだ知らない領域があるって事だろう。

「魔法使いのお嬢ちゃん。魔力が何かはわかるかい？」

「……王城で習った程度なら。魔法を使う為の元。魔力を束ねて魔法を創造する」

……あー、うん。随分適当だ。

まあ、ミナの事だから真剣に勉強なんてしなかったんだろう。

触媒を身につければ回復量上がる事も知らなかったみたいだし。

まあ、大体合ってる。

魔力というのは世界に、自然に、人体に当たり前に存在するし、少し練習したら誰でも操れるようになる。

それを魔法にするとなると途端に難易度は跳ね上がるんだが……。

一応魔力だけなら、血筋からして、オレも結構あるらしい。

そして、アウルの言葉は、近接戦闘を得意とするオレには、魅力的と言わざるを得なかった。

「そう、魔剣つてのは魔力の剣だ。それをもう一段昇華させる。言わば必殺技みたいな物だな。つまりは……魔法剣だ」

聖殿の中だと言うのに不意に強い風が吹く。

気づけばナギが魔剣を握っており、彼女の持つ剣の刃には風が纏わっている。

「相手の魔法は無効化しつつ、こちらの魔法は使える。射程距離こそ短いが中々便利だぜ？」

そう言うアウルの顔は子供が悪戯を成功させた時の様に無邪気で楽しそうだった。

## 六十二話 伝説の回想

「アリス、ここに居たか。少し気が早いんじゃないか？」

草臥れた神殿の屋根の上に、如何にも戦士という風貌の青年が登つて来た。

彼の目当ては先客である金色の髪を靡かせて遙か地平線の向こう側を見つめる少女。

「うん。焦っても仕方ないってわかってるんだけど、何かしてないと落ち着かなくて」

青年が隣に立つとアリスと呼ばれた少女は青年に体を預ける。

「怖い……」

「その時に為れば、そう思う暇もなくなるさ。南国の最後の防衛部隊からの伝令が途切れた。もうすぐ、ここが戦場になる」

「もし負けたら終わり……なのね。なんとかならないのかな？」

「ここで勝つ事はできる。けど、ここで負けたら取り返せないだろうな」

二人は、ほんの数週間前に異世界から召喚された別次元の人間。

本来なら、窮地に立たされた国を救う為の魔法であったが、それは数人の異世界人を召喚するに留まった。

数カ月前に突如現れた不死の王を名乗る人種は、後に魔物と呼ばれる未知の生物を解き放ち、混乱の隙を広げて瞬く間に南の国を壊滅



させた。

そして今は東西の国も領土の半分が戦場になっている。  
これ以上押し込まれれば、唯一無事な北の国が麻痺し補給が滞り、  
人類の敗北は必至である。

「すまない、アリス。頼りにしてる」

青年はアリスの頭に手を乗せて、申し訳なさそうに呟いた。  
対してアリスは、手で目元を拭うと笑って答える。

「大丈夫だよ、シグルド。私は、大魔法使いだもん」

勇者達に一番、大変だった戦いは？と聞けば揃って「不死の王との  
最終決戦」だと言うだろう。

なら、その次は？

それも、全員一致して答えるに違いない。

それが、数日後に始まる神殿防衛戦。それほど、この時、人類は追  
い詰められていた。

そして人類の反撃は始まる。

「わ、本当にすごい数……狙う必要無いじゃない、これなら」

アリスが以前と同じように神殿の上から地平を見渡す。  
ただ今回は、地平線は見えず、見えるのは夥しい数の魔物。

奥では魔人が、数人いるのだろう。

「大丈夫、私は大魔法使いだもん。シグルドを守らなくちゃ」

アリスは自分に言い聞かせるように呟き、詠唱を開始する。

彼女の頭上に産み出されるのは、彼女自身よりも大きな火の玉。  
しかも、それが四つ。

普通の魔法使いなら、一つでも全ての魔力を消費してしまうだろう。

これが為せるのは、この世界に来た時に身に付いた特殊能力のお陰だ。

魔力を消費しない。

この能力により彼女は自分が使える魔法なら何発でも放てるのだ。

「行け！フレアストライク！」

アリスの号令と共に、真っ赤な炎の塊は敵前線部隊に向かって飛んでいき、まるで溶岩の様に弾けた。  
擦りでもすれば、大火傷は必死だ。

「まだまだあ！フレアストライク！」

アリスは次々と大魔法を連射する。

幾ら魔力が減らないとは言え、少女の体力は急速に消耗していく。それでも、大魔法を打ち続けるアリスに魔軍も驚異を覚える。

だが地上を進んでも、アリスの放つ灼熱の炎に焼かれるだけである。

彼女には、機動力が高く自由の効く空を飛ぶ魔物が差し向けられた。

「やっぱり来た！」

しかし、火力役を優先的に潰しに来るのは今までの戦闘でも明らかだ。

人類とて何も考えていなかった訳ではない。

「皆さん、お願いします！」

「良く狙え！一匹足りともアリス様に触れさせるな！一斉掃射！」

神殿周辺に潜んでいた兵から一斉に矢が放たれ魔物は落ちて行く。

全ての弓兵をアリスの護衛に当てていたのだ。

アリスは一人で全弓兵と凌駕する火力を發揮する。

それならば、射程、属性に優れるアリスを守れば良い。

「良くやった、アリス！引き続き援護を頼む！」

「アリス様！我らの勇姿、見ていてください！」

「アリス様が勝機を切り開いてくださった！全軍前へ！」

勇者シグルドを先頭に連合騎士団特攻隊が敵陣に駆け込んで行く。

彼らはアリスの作った綻びを広げ、もう少しで来る本隊を有利な状態で戦闘に入らせるのが目的だ。

本来なら、決死の覚悟すら必要な過酷な部隊だが、シグルドは能力

を頼りに味方を導いて行く。

勇者シグルドを戦闘に連合騎士団特攻隊が敵陣に駆け込んで行く。彼らはアリスの作った綻びを広げ、もう少しで来る本隊を有利な状態で戦闘に入らせるのが目的だ。

「正面から敵の後詰めが突っ込んで来るぞ！左側が薄い！左だ！一気に駆け抜けて回避するぞ！」

「うおおおおお！！！」

近辺にいる魔物の動きを把握する。

一見、地味だがシグルドには奇襲すら通じず、逆に戦場の全てをリアルタイムで見据えられている。

「シグルドさん！本隊がもうじき戦闘に入ります！騎馬隊が、先行して突っ込んで来ます！」

「これ以上やると被害が大きいか……。引くぞ！一度、引いて体制を立て直し、本隊と合流して戦う！」

嵐の様に敵陣を荒らしたシグルド部隊は、波が引くかのように撤退を始める。

魔物もそれを追撃しようと追うが、魔物達が追い付きそうになると、空間に闇が広がっていた。

深淵のフェアリス。

勇者パーティーの一人にして、その能力は闇の使役。

攻撃も防御もできない能力だが、使い次第では絶大な援護効果を産み出していた。

シグルド達は仲間の能力である闇に躊躇なく飛び込むが、魔物は一瞬とはいえ動きを止めてしまう。正体不明の暗闇に飛び込むというのは、そう安々とできる事ではない。

「自軍の撤退を確認……一斉放火」

唯一、闇の手間にいたファリスは、そう良いながら闇に隠れていく。そして入れ替わるように現れたのは、火水雷土風光と様々な属性の攻撃魔法。

凡そ狙いを定めたとは思えない命中率だが、その段幕の前に魔物達は後ろに下がって行く。

「連合魔法隊……流石だな。怪我人は、神殿後方まで下がれ。治癒が効かない怪我をした者は勇者を頼れ」

闇の中に潜んでいたのは、大陸中から集めた魔法使い。皆、この戦争を今まで生き抜いてきた一級の戦士達。

ファリスは、闇を解きサーベルを構え敵を見据える。

「本隊と共に……戦線を押し上げる。怪我人は、神殿後方の治癒術隊の所へすぐ下がれ。……不老不死すら可能にするヒーリング使いもいるんだ。恐る事はない」

再びファリスの前方を大きな闇が包む。

これにより敵は、魔法部隊の位置を正確には掴めず、混乱してる間

に本隊に制圧される事となった。

「フン、現地人を調子に乗らせ過ぎたか」

魔軍の陣営から、現状を見て一人の男が戦闘に立つ。

この戦争に置いて、数で攻めてくる魔物は厄介だったが、所詮は烏合の衆。

真に難敵だったのは彼らだ。

連合軍の前線の兵士が、彼の姿を見て次々と叫ぶ。

「か、風の魔人だ！」

「下がれ！距離を取るんだ！」

「下手な威力じゃ剣も魔法も通じないぞ！牽制しつつ後退するんだ！」

幾つかの攻撃魔法が魔人に飛ぶが風の魔人と呼ばれた彼は、身に纏う風で全てを吹き飛ばしながら、近づいて来る。

連合軍が、ここまで敗退を続けた理由は、圧倒的な強さを持つ魔人が、魔物を束ねていたからである。

今度も撤退している部隊に魔物を突っ込ませれば、陣形が崩れ部隊は本来の力の半分も出せない事だろう。

魔人も、それをわかってしている為、敢えて自らが戦闘に立ったのだ。

その魔人の前に撤退していく人々とは反対に歩み出ていく者がいた。

「お前で何人目かな？風に守られた俺を相手に勝てるハズないぞ？勇敢なのか、無謀なのか……」

「うるせえな。とつと終わらせるぞ」  
「終わるのはお前だけだな」

過去にも風の魔人に挑んだ者は何人か居た。

結果は散々な物で、それが、この魔人に自信を与える事になった。  
対した男は大型方刃の剣を構える。

とは言え、多少武器が攻撃力に優れていても風の鎧を貫く事はできない。

「行くぞっ」

男は剣を大上段に構え振り下ろす。

魔人は本来なら特に防御する必要すらないが、余りに単純な攻撃だった為、敢えて片手で受ける仕草をした。

「やれやれ、何故無駄だとわから……な……」

そこまで言うてから、魔人は自分の右腕の間隔が無くなった事に気づく。

「能力に頼ってるから、そういう事になんだよ」

男が更に剣を水平に二回振ると魔人はあっけなく倒れた。

きつと何が起きたかすら、わからなかっただろう。

「能力以外は雑魚じゃねえか。能力が効かない相手の事も想定しておくんだっとな」

倒れた魔人を越え辺りを見回すと、周囲の魔物は彼が戦闘に入った瞬間に、転進し再び攻めに転じた味方が制圧しつつあった。

「良くやった、アウル！！これで、この戦いは大きく連合に傾いたぞ！」

後ろから馬に乗ったシグルドが声をかけてきた。

「油断するのは早い。まだ魔人がいるかもしれないからな。それらしい奴が居たら教えてくれ」

魔人を倒した男、アウルが手にした剣は魔法を無効化する力がある。彼の前では風の鎧は無力だったのだ。

「俺の能力の範囲には、それらしい敵はいない。魔物の動きも統制を欠いてるしな」

そして、アウルが手早く魔人の前に出てこれたのは、シグルドの能力のお陰だった。

この二人は、これからの戦いで大きな戦果をあげて行く。

「さあ、残党の掃除と行くか」

「ああ、頼むぞ。みんな！敵の魔人は倒れた！！今こそ好機だ、魔軍に反撃を開始する！」



あれから、どれくらいの時間が流れたかなんて自分でも覚えちゃいない。

最終決戦で死んだハズの俺は数千年たった今でも、ここにいる。

「アウル、来ましたよ」

隣にいるナギがそう言うのと部屋の古くさい扉が音を立て開き、灰色の髪の青年と黒髪の少女が入ってきた。

黒髪の方は風貌からして魔法使い。  
魔剣士は男の方が。

何にせよ魔剣使い自体が数十年ぶりだ。

ここは退屈すぎる。

少しは楽しめる奴等だと良いんだが。

隣にいるナギが、静かにため息を吐く。

いつもながら、勝手な剣に呆れているのだろう。

まあ、やる事はかわらねえ。

新しい魔剣士に俺の経験と技を教えてやる事にするか。

六十三話 100と魔剣の修行

「魔法剣……。でも、オレは魔法自体使えないぞ？」

アウルの見せてくれた魔法剣は確かに魅力的だ。単純な攻撃力の底上げは勿論、選択肢が増える。

しかし、それとオレが使えるかは別だ。何せオレは普通の魔法すら使えない。

「大丈夫。魔法剣は魔法よりも扱いやすい傾向にある。俺も魔法は使えないしな」

「大事なのは、イメージです。リュートさん、まず魔剣を構えてください」

アウルとナギに諭され、とりあえず剣を召喚する。ミナはつまらなさそうに腰に手を当て立っている。

「魔剣に魔力を送ってください」

言われるがままに手にした魔剣に魔力を送る。ここまでは普通の魔具と同じだ。

「後はお前のイメージ次第だ。適当に属性を決めて声に出せ」

頭に自分の中で最強の魔法を思い浮かべる。地平線の向こう側まで焼き尽くす光の奔流。

ミナの魔法……レーザーカノン。

一回ほど見たことがあるが、どちらも強烈に印象付いてる。

イメージには困らない！

その属性を叫ぶ。自分の新しい技を求めて！

「光よ！！」

……。

……。

最初からミナの威力に追い付けるなんて思っではいなかった。けど、流石に、これも予想外だ。

「……せめて何か反応しろよ！？」

魔剣はオレの手に変わらず握られている。

そう……何も変わらずに。

「才能が、まったくねえな」

「うるさいよ」

こうして、オレの初めての魔法剣は、清々しいまでの失敗に終わった。

「炎よ！大地よ！風よ！水！雷！闇！」

魔剣に魔力を供給しながら、ひたすら思いついた属性を叫ぶ。

あれから二時間ほど。

結果は散々なものだった。

「初めてのケースです。困りましたわね」

「今までの勇者は、威力は置いといて形はすぐできたからな」

「私、この世界来て、すぐに魔法使えたけど」

三人はもう魔剣の台座近くで寛いでいる。

一体、何がいけないんだ……。

「光よ！！！」

と、叫んでは見るが結果は変わらず。

「うまくいかないとは言え、コイツを使えるかどうかで、生存率は  
大分変わるしな」

「そんなに違うものなの？」

アウルはどうしたものかと悩んでいる。

ミナは、いまいち重要性をわかっていないようだが、事実、オレは  
何度か死ぬような目に合っている。  
今こうしているのは、ミナがいるお陰だ。

「近距離限定だが、飛び道具と属性攻撃ができるようになるからな。  
ナギ、エアエッジだ」

「はい」

ナギが魔剣を大上段に構えると、そこに先程と同じく風が集まっ  
てくる。

「リユートさん、剣を横に構えて頂けますか？」

「こっか？」

「はい。では、お力を入れてください」

ナギに言われた通り剣を握る手に力を籠める。  
ようは、攻撃を受け止めると言うことだろう。

「では、参ります。エアエッジ！」

そう言い高速で剣を振り下ろす。

「っ！？」

構えて魔剣に衝撃が走り、やがて消える。

それは、まるで距離を無視して本当に斬られたような感触だった。

「エアエッジ。射程は3M程だが、術者の斬撃とほぼ同威力の性質  
を持つ風の魔法剣だ。どうだ？中々の物だろ？」

「術者の斬撃と同威力って事は……」

「リユートが使えば、ナギよりも威力が上がるだろうな」

……射程距離こそ短いが、威力が自分の攻撃力と同等と言うことは、風を打ち飛ばすだけのトルネードセイバーより強いだろう。

「なんとしても、身につけてやる！風よ！！」

大切なのは集中力とイメージ。

そう自分に言い聞かせてひたすら試す以外に方法はない。

「例えば炎の魔法剣で今のはできないの？」

「難しいですね。風は強くなれば人を吹き飛ばす事もあります。それを応用して斬撃に変えて飛ばすのがエアエッジです。炎は、焼く事はできますが、人を吹き飛ばしたりはできませんから……」

「爆風とかは？」

「爆『風』ですから。言わば炎と風が混在してるだけで、吹き飛ばしてるのは風です」

「あ、そっか」

何やらミナとナギは、そこそこ仲良くなってるようだ。

彼女は順調に、この世界に馴染んで来てるなあ……。

「リユート！剣を見る！」

「ん？」

アウルに言われ、魔剣を見ると、いつもは銀に輝いている刃が、赤く光っていた。

「これは……魔法剣！？」

「できたの？」

「ああ！やつと……って、あれ？」

駆け寄ってきたミナに見せようと剣を構えたが、そこにあるのは、いつもの魔剣だった。

「……何も変わらないように見えるんだけど」

「あれ、おかしいな……」

「まあ、慣れないうちは、そんな物だ。嬉しくて集中力を切らしたんだろ。とりあえず、リユートは炎の魔法剣と相性が良いらしいな。これからは、炎主体で練習するか」

結論から言えば、結局、この日に魔法剣が発動する事はなかった。

「やれやれ、もうすぐお前らを帰す時間か」

「帰す？後は勝手に修行しろって事か？」

「いえ、都市には留まって貰います。ただ、兵舎に泊まって貰いますので、騎士隊の皆様迷惑にならないようにしますと……」

何時間、ここに居たか詳しくはわからないが、腹も減ってきた。夕食時か。

「魔法剣に関しては、どうなるかわからねえけどな。最悪、習得できねえかもしれねえしよ」

アウルが、どうしても良さそうに言うが、わりと本気で凹む。

「んー、多分、大丈夫よ、リユート。気にしないの」

あれから、ミナはずっと何かを考えているようで、今も視線は合わさず言葉だけで励ましてくれた。

どうにか習得したいんだけどなあ、魔法剣。

軽くため息を吐く。

と、アウルが、また楽しそうに笑う。

見透かされてるようで、余りいい気分ではないが、コイツがこの表情をする時は何かある時だ。

「まあまあ、リユート。魔法剣の扱い方は何も魔法剣だけじゃねえ。

戦闘においてもお前達は魔法剣の使い方を知らないだろ？」

「言っとくが、昔から剣には少し自信があるよ」

「剣じゃない。魔法剣さ」

……？

魔法剣は武器として使う場合、重量を感じない事を除けば剣と大差ないハズだが。

「言っても、わからないだろうな。ナギ、相手をしてやれ。そのくらしいの時間はある」

「……リユートさんはまだ魔法剣を使えないのに良いのですか？」

ナギが、こちらに視線を向けてくる。

ナギも、ここで何年か剣を習っているのだろうが、オレだって剣を扱っている期間では負けないハズだ。



「ああ、構わない。魔法剣も使って来ていいぞ」

そう良いながら魔剣を召喚し構える。

最初、この部屋は大きな闘技場のようだと思っただが、なるほど。模擬戦を想定しての作りなのかもしれない。

「わかりました。アウル、魔法剣を使う時は指示をお願いします」  
「おう、任せとけ」

どうやら魔法剣のタイミングはアウルが指示するらしい。  
確かに、アウル相手に年季で勝てるハズがない。これは少し厄介かもしれない。

「では、参ります」  
「よろしく頼む」

お互いに剣を構え向き合う。

ナギの使う魔剣は普通の剣より少し細身で片刃のソード。  
女性らしいかもしれないが、重量の感じない魔剣には関係ない事だろう。

ナギの右足が地面を這うように前に出る。

そこを急速に間合いを詰めて上段から剣を振る。

「きゃっ!?!」

「おお、言っただけあって中々早いな」

「怪我しないようには気をつけるよ」

「ナギは優秀な回復魔法の使い手だ。手加減はいらないぞ」

「アウルっ!?!」

「そついう事なら！」

初撃は受け止められたが、そのまま力で押し込む。

ナギの身長は女性にしても少し低めだ。

男の力で上から押さえつけられれば、耐えられるはずがない。

「力勝負には……応じません！」

ナギが、身を擦って流そうとするが、オレだって剣は扱い慣れてる。そんな簡単に逃がすつもりはない。

「リユートさん、これが、もう一つの魔剣の使い方です」  
「なっ!？」

不意にナギの魔剣アウルが、陽炎の様に歪んだと思ったら、魔剣ミツキがすり抜けた。

「魔剣の魔力を抑制する事で、物質への干渉ができなくなるんです」  
力勝負にこだわり過ぎると、相手が剣を引いた時に大きくバランスを崩しやすい。

そんな事はわかっているから、バランスは崩しはしなかった。

……が、明らかにオレよりもナギの方が一手早く動ける。

「ですから、こんな攻撃もできるんです！」

ハイキック!?

剣技からいきなり格闘技かよ!

剣を持ったまま格闘ができない訳ではない。

が、どうしたって威力は鈍る。

しかし、ナギの魔剣は、刃がまるで存在しないかのように地面をすり抜けている。

なんとか防御したは良いけど流石に威力は殺しきれない。

本気で……行くか！

ナギは再び魔剣を完全に顕現させ、真っ直ぐに斬りかかって来ている。

確かに、オレには回避か防御しか選択肢はない。

ただし、ナギは余力は強くないようだ。

なら、振り下ろされた魔剣を切り上げ、弾き飛ばす！

切り下ろす方が圧倒的に有利なのは言うまでもないが、普段から魔獣を相手に全力で剣を振ってきたオレなら、できない事はないハズだ！！

踏み込んで上からの魔剣を迎撃しようとして魔剣をかち合わせた瞬間、ナギが少し申し訳なさそうな顔をしてるのが、見えた。

「貴方は確かに強いです。でも、魔剣の戦い方をまったく知らないんです」

ナギの魔剣アウルがまた陽炎のように揺らぎ、魔剣は何の手応えも残さず中空に振りきられた。

そして彼女が、言葉を言い終わる頃には、すり抜けた直後、再び顕現した魔剣は、袈裟懸けにオレの体を斬っていた。

「……………なっ。がっ!?!?ぐっ……………!!」

熱い!

痛いを通りこして、ロクに言葉がでない!

無様に叫ばなかったのを褒めて欲しいくらいだ!!

床に赤い水溜まりが広がって行くが、そんな事を気にしてる余裕も、ありやしない。

「リユート!!」

目を見開いたミナが泣きそうな顔で近寄ってくる。  
多分、大丈夫だから心配すんなっての……………。

「リユート。これが、魔剣の戦い方だ。魔法剣もそうだが、透過と実体化を使い分ければ、今よりも使い勝手は数段あがる。って、そんな状況で言っても、頭に入らねえか。ナギ、ヒーリングを頼む」  
「はい」

ナギが小走りで、こっちに駆け寄って来る。

が、やはり予想通りだ。もう痛みはまるでない。

「大丈夫だ……………。あーあ、すごい血だな」

以前、カムイさんとの戦いで、オレの能力は一定以上ダメージを受けたら回復する類いの物だと予想したが、やはりそうらしい。

「リユート！大丈夫なの！？つて、あ、そっか……」

慌てていたミナも、思い出したようで、力が抜けたように、ぺたんと座り込む。

「ありがとな、心配してくれて」

「……損した」

ミナは、そう言っつて、そっぽを向く。

「これは……どういふ事ですか……？」

「どうした？意外と浅かったか？」

何も知らないアウルとナギは、不思議そうな顔をしている。

まあ、そうだな。

アウルはともかく、ナギからしたら、確実に斬ったはずなんだから。

「詳しくはオレもわからないけど、一定以上ダメージを食らったら完全に回復するみたいなんだよ」

言っつた途端にアウルとナギが押し黙る。

……え、なんかまずい事言っつた？

「リユート。それは、小さな傷には反応しないが、大怪我を回復する時に小さな傷も治る類いの物か？」

「あ、ああ。そうだけ。知ってるのか？」

カムイさんの試合の時、骨にヒビが入っつた時はなんともなかつつた

が、折れた時は、それも含め擦り傷まで全部治った。

「知ってる……いや、俺達はそれを能力だと考えていなかった」

……？

「過去に一人だけ、お前と同じ奴がいたんだ」

今回、召喚された勇者の人数は100人と例年より桁外れに多い。

けど、これまで召喚された勇者と考えられるなら、その数倍いるだろう。

「確かに、過去の勇者に同じ能力を持った奴がいても、おかしくないか」

正直、自分の能力の情報は欲しかった。

これは朗報だ。

そう思ったが、アウルは首を横に振る。

「違うんだ。その能力は……いや、能力の名前ではないんだが……。その能力を持っていた奴は、こう名乗っていた」

アウルが重々しく口を開く。

「不死の王ってな」

どこかで聞いた事がある名前だ。

心がざわつくのを隠せない。

「俺達が倒した……初代魔王の能力だ」

「疲れた……」

着替えもせずベッドに倒れ込む。

これだけ体を動かしたのは実戦以外じゃ久々だなあ。

「魔法剣……ねえ」

聖殿を出て、食事の後に一人で魔法剣の練習を試みたけど、あの一回以来さっぱり発動しない。

むしろ、なんであの時は発動したんだ？

感触を思いだそうとしても、さっぱり思い出せない。少しは魔法の勉強もしておけば良かったかなあ……。

「リユート、帰ったの？」

ドアが開く音がして、聞き慣れた声が聞こえる。

なんだかんだ言ってミナは泊まるとよくオレの部屋に来る。……のはいいんだが。

「ノックくらいして貰えませんか」

「いいでしょ？別に」

……何が良いのか問い詰めたいけど、まあ、オレも本気で言ってる



訳ではない。

まだ家があった頃にはコレットがよく勝手に入って来たものだ。

……そういえば、家もどうにかしないとな。

最近忙しくて忘れかけるけど、家は壊れたんだった。  
気が沈む。

「……今日の事で悩んでる？」

「ん、いや、え……んー、どうだろう」

どうやら悩んでるのは見抜かれたようだけど、今考えていたのは別の事だから返答に困る。

ミナも不思議そうな顔で、こっち見てるし。

「ねえ、リユート」

「んー？」

「さっきまで練習してたんでしょ？魔法剣。使えた？」

……………。  
いきなり痛い所をついてくるな、この子。

「まったく……」

「そうだと思った。あのね、リユート。魔法剣だけど……」

ミナは少し言い難そうにしながら、オレに大ダメージを浴びせる一言をはなつ。

「練習、辞めた方が良いと思う。意味ないし……って、リユート！  
？」

ミナの言葉が胸に刺さる。

自分でも薄々、もしかして使えないんじゃないか？と思ってたから尚更。ベッドに突っ伏すオレを見てミナが慌ててるけど、流石に今のは痛い……。

ナギに斬られた時より効いた。

「えっと、違っ……リユートが考えてるような事じゃなくて……ほら、そのうち使えるようになるから、ね？」

「何の根拠もない慰めありがとう……」

「だから……！ちゃんと、私がリユートに教えるから！魔法剣！」

……教える？ミナが？

「……ミナ、魔法剣使えるのか？」

「私も一応、魔剣持ってるし……」

……聖殿で何か考えてる様子はあったけど、練習してるようには見えなかった。

つまり、ミナが魔法剣を身につけたとしたら、オレが練習に出ている間にだろう。

……これが、傾国の魔女か。

魔法に対する才能の差を嫌でも実感する。

いや、アウルも簡単だって言ってたし、もしかしてオレの才能が……いやいや、うん、悲しくなる。考えるの辞めた。

「だからさ、リユート。聖殿では練習するだろうけど、兵舎でまで練習しなくて良いんじゃないかな？」

「んー、でもなあ……」

継続は力。

オレが剣の扱いに長けてるのも、ずっと鍛錬を欠かさなかったから。魔法が使えないのは何も学ばなかったから。

なら、少しでも魔法剣に費やす時間は増やすべきだと思……っただ、何かミナが意外に真剣な目で、見てきてる。睨まれてるって言った方が近い気すらしてくる。もしかして……。

「寂しかったのか？」

「……そんな事はないけど」

とは言いつつも、ミナは目線を反らし指先で長い髪を遊び始める。

「リユート、騎士さん達と一緒に時は夜は他の町に仕入れに行つたし、昨日はご飯終わったらお互いすぐ寝ちゃったし……なんか落ち着かないな……」

……そういえば、ずっと二人旅だったお陰で、いつも傍に居たような気がする。

その反動……か？

ミナの頭に、手を乗せると、いつもなら睨まれるのに、それもなくて目を合わせないようにしてる。

「明日、丁度買い物に出掛けようと思ってたんだ。昼までには終わらせるけど……一緒に来るか？」

「……………」

「無視かよ!？」

「うん、って言ったら負けな気がする……」

……この子は一体、何と戦っているんだろう。

まあ、そんな小競り合いも無視して一緒に買い物には出て来た訳だが。

「つまらない街ね……」

ミナは若干不機嫌だったりする。

いや、理由はわかってるんだが。

「元々は要塞だからな。冒険者が多く訪れるから、宿や武防具屋は多いけど、他の街みたいな娯楽施設は極端に少ない」

この街に用事があるとするとするなら、ここより南の魔の領域へ行く奴が帰って来た奴だけだ。

「でも、ここが真ん中なんですよ?それなら商人さんも、来るんじゃないの?」

「残念ながら、この街には商人はほとんどこないよ」

ミナは首を傾げて、なんで?と聞いて来るが、単純な問題だ。

「あくまで大陸の中央であって、人の世界の中央じゃないんだよ。ここから先は腕に覚えがある冒険者か物好きしかいかない。特産品もないしな」

「見た限り、武器がすごく多いけど、これは？」「高すぎる。量産品なら西の帝国が随一だし、下手したら家が建つような業物ばかりだよ、ここにあるのは」

「うわぁ……」

間違っても、只の商人が手を出そうと思う品物ではない。

「そんな街に何を買いに来たの？」

そんな街って言うのも随分酷なあ。

一応、冒険者にはすごく魅力的な街なんだけど。今回の買い物にも、この街は適してるし。

「新しい防具だよ。昨日、思いつきり斬られたから……」

「そういえば、スツパリやられてたっけ。服まで治れば良いのに」

「それなら便利だけど……魔剣の能力を考えると、どうせ買い換えたいしな」

実体化と透過。

剣と体術をいつでも切り替えれるのは便利だ。

剣技の戦いでも、拳や蹴りに頼る事は実に多い。

今までは革を張り合わせた強度と軽さを両立した物だったが、籠手と具足は金属製に変えた方が良さだろう。

「……でも、高いんじゃないの？この辺」

「ああ、だからコイツを売ろうと思う」

今まで装備していた籠手を外す。

竜毛の籠手。

「昔、ドラゴンを倒した時に作った物でな。普通の店じゃ買い取って貰えないけど、この街なら別だ」

高すぎる品物は買い手も少ない。

けど、この街の冒険者は、より良い装備を欲しがる。魔の領域なんて死地に飛び込むんだから当たり前だ。

竜の体毛で編まれた籠手は魔力を通さない。

欲しがる人は少なくないハズ。

「竜って……普通に倒せるんだ」

「10回戦えば9回は死んでたな」

「……よく生きてたわね」

まったくだ。

運が良かった以外の何物でもない。

命懸けで倒した竜の装備は、こうして手放す事になった。

って、言ってもミナが魔剣をくれて以来ロクに使った事もないから丁度良かったかもしれない。

引き換えに新しく買い揃えた装備は、どれも満足できる物が用意できた。

白を基調色にした抗魔服。

アクセントのエメラルドグリーンのラインは幻獣カーバンクルの毛皮らしく高い魔法抵抗力があるらしい。

物理的な防御力は以前のレザーアーマーに比べたら数段落ちるが、軽さに優れている。

これはミナの魔法対策。

どうやらミナは魔法の加減が苦手な傾向にあるらしい。

日常的に使う魔法にしても実はかなりの魔力が使われている。戦闘魔法に為れば尚更だ。

ミナの方がオレよりも強いとは言え、一緒に戦う時はどう考えてもオレが前衛になる。

つまり、ある程度ならオレを巻き込んで魔法を打てるように考えた結果だ。

そもそもミナが倒してくれるなら防御に集中してもいいから、前みたく相討ち覚悟な場面はなくなるんだよな。

ついでに、不死の王もあるし。

アウルは、絶対に誰にも言うな。ばれないようにしろ。と言ってきたが、こんな自動で発動する能力、ばれる時はばれるだろ。

魔剣でさえ、最初は隠そうと思ってたのに、今はオレの能力だと知れ渡っている。

実際にはミナの能力だけだ。

随分、話が逸れた。

装備に戻ろう。

手首から先にはオーダーメイドで鉄甲を付けて貰った。

単純に敵の攻撃を防ぐ盾代わりにもなれば、ナギがやったみたく、魔剣を透過した時の格闘では武器にもなる。

剣ほどではないが、体術も使えるから有効な場面は多いだろう。

目立った特徴は、こんな所か。

これでも結構値段はしたのだが、それでもまだ余裕がある。

「んー、ミナもついでに装備を新調するか？」

「私？別に、いい。これ、気に入ってるし」

確かにミナの服は一つ一つが結構な物だったりする。

まずは彼女が元の世界から着ていたシャツとスカート。

制服と言っらしいが、かなり良い生地を、とんでもない技術で加工しているらしい。

ポロポロだったから、ハンスに頼んで補修して貰ったが。

そして、その上から魔法使いのローブを羽織っているが、これも店で最高級だった品だ。

ミナを余り待たせなくなかったから、暖かそうな物を選んだだけだ  
けど。

あの時は公爵に、ミスリル結晶を売ったばかりでお金に余裕があったしなあ。

他には首飾りと指輪。

首飾りは一応、奴隷の証だけど、見て気づく人も居なければ本人も  
気に入ってるようだ。

指輪は竜の涙と呼ばれる宝石。

魔力を回復する為の触媒だけど、多分、これが一番高い。



……あれ？

よく考えたらミナって、めちゃくちゃ良い装備してないか？

纏めて買った訳じゃないから気付かなかったけど、どれも一級品だ。

頭に被ってる三角帽子くらいか。大した事ないのって。

しかも、ほとんど、オレが買ったやつな気がする。

思った以上にミナに貢いでた事実気づいて愕然とした。

……まあ、いいか。

大事に使ってくれてるみたいだし。

「それ、いつも着てるよな」

「……悪い？ちゃんと毎日洗ってるわよ」

うん、魔法でね。

乾かすのも魔法でね。

最近、魔法がなんなのか、たまによくわからなくなる。

「オレのも洗ってくれてるしな」

「ついでよ、ついで。大した変わらないもの」

そう言いながらミナは視線を反らす。

「ありがとな」

「あー、もう、うるさいなあ。それより、そろそろ戻らなきゃいけないんじゃないの？」

台詞はそっけないけど、顔は真っ赤だ。  
思わずオレまでにやけてくる。

けど、時間がまずいのも確かか。  
もう随分と日が高い。

「そうだな。兵舎で昼食食べたら、また聖殿か」

「……今度は斬られないようにしてね。それもちゃんと洗うから  
魔法抵抗力の強い服って魔法で洗えるのか？そんなどうでも良いこ  
とを思いついたけど、言えば多分殴られる。」

だから、何も言わず、ミナの手を取って兵舎に歩き出す。

「ちよつと!？」

驚いたようで抗議の声をあげたけど、無視。

家に来たばかりの頃は、これが当たり前だったりしたものだけど。

頬を赤く染めて下を向いて何やら呟いてるミナを兵舎まで手を引い  
て行った。

六十四話 100とお買い物（後書き）

五月はちょっと更新頑張る予定。きつと。たぶん。

実は、リユートと昔の魔王の能力が云々って話を書こうと思ってたら、買い物に時間をかけすぎて、そこまでききませんでした。

しかも、こんな話に関係ない話を、もつと書きたいと思う始末。

そのうち章もちゃんと分けようと思ってますが、現状が三章で中盤くらいかと思えます。

長くなりそうですが、四章くらいから関係ない話が増える予定。きつと。たぶん。

それでは読んでくださってありがとうございます。

誤字脱字報告感想等頂けると嬉しいです。

## 六十五話 100の不死の王

聖殿中心部、魔剣アウルが安置している部屋の前。

リユートとミナだけが中に入り置いていかれた面々は、そこで各々に時間を潰していた。

「ちゃんと許可は出ているハズなのに、何故私が入れない」

「まあまあ、王女。少々の間待っていて欲しいと言われただけではないか。すぐに入れるでしょう」

「……カムイ様、大分王女様に砕けて来ましたね」

「馬車の中で長い時間共に過ごしたからな。婚約者でもある事だしな」

「誰が婚約者か！父上にも勝てぬヘタレが！！」

王女、カムイ、そして聖者の癒し手として同行していた治癒術師のリン。

本来なら今日はリユート達と共に聖殿内部に入る予定だったにも関わらず最後の扉を閉められ荒れていた。

と、言っても荒れているのは実質、王女一人であるが。

カムイは王女と居れば特に気にしないようで、リンは、そもそも王女と一緒に居る事で緊張して、それどころではないようだ。

「まったく、やっとリユートと行動できると思った矢先に……あの青髪め！早くしろー！！」

レーナ王女は、自分が伝説の勇者パーティー相手に文句を言っているとは露知らず、扉に向かって騒いでいた。

「ああ、外は騒がしそうだなあ」

聖殿中心の扉は分厚いから、外の声はまったく聞こえない。しかし、オレとミナだけが中に入れられた時の王女の不機嫌さから大体予想はついた。

ごめん、カムイさん。王女の相手はよろしく頼んだ。

例え、オレが頼まれたら不機嫌な王女の相手なんて御免だけど。

「悪いが外の連中には少し我慢して貰おう。魔剣に関しては大々的に言わなきゃ、ある程度知られても問題はない。しかし、リユート、お前の能力は別だ」

「確かに強力な能力だけど……」

ひた隠しにする程か？

能力は勿論相手に知られない方が良い。

ただ魔剣にしても、ばれる時はばれる。

しかしアウルの言い方は、絶対にどこにも漏らさない様。そんな言い方だった。

「人の前で大怪我をするな。誰にも、その能力の事は話すな」

「そんな無茶区茶な」

話さないのは良いとしても怪我なんて、いつするか、わかったものじゃない。  
特にオレは。

「アウル、ちゃんと説明しなきゃ駄目ですよ」

少しイラつき気味に話すアウルを見かねて、ナギがため息を吐きながら前に出てくる。

「良いですか？リユートさん。その能力……不死の王は初代魔王以来、誰も持っていなかった能力なんです」

「これまでに勇者は数えるのも嫌になるくらい召喚された。その中に只の一人も不死の王はいなかった」

「だから、私たちも能力とは考えていなかったんです。不死の王を持っているのは魔王。そういう認識でした」

そこまで言って二人は黙った。

まるで、何か言いにくい事があるかのように。

「なるほどね。リユートが不死の王を持っているって知られたら、他の人の反応……ってというか、最悪リユートが魔王だと思われるって事ね？」

今まで黙っていたミナが口を開く。

オレにとってはとんでもない理論で否定したくなるが、アウルは黙って頷いた。

「更に言えば、魔王を倒せるのは魔剣のみ。だが、リユートは……」  
「魔剣の所有者はリユート。魔剣は所有者を傷付ける事はない。魔

剣アウルは無効化の能力はなくなってるしね」

「ああ。これが知れ渡ると無用の混乱が起きる可能性がある」

「ちょ、ちよつと待て！オレは、ただの商人だぞ？いきなり魔王だなんてありえない」

「わかってる。でも、リユートがそうでも関係ない人がどう思うかなんてわからないのよ」

そんな事があつてたまるか！！

そう反論したくなるが残念ながら心あたりがある。

オレは真つ当な商品しか扱っていないが、高額な物が多い為闇市をよく利用する。

普通の市場では売れにくいのだ。引き換え闇市は金持ちが多い。

しかし、それだけでも闇商人と毛嫌いする貴族も少なくない。

「……分かった。制御できる物でもないが、頼らないようにする」  
「そうしてくれると助かる。さて、話はこれだけだ。待ち人もいる事だし、修行をはじめよう」「はい、私、外の方々を呼んで来ますね」

ナギが扉に向かい歩いて行く。

不死の王を前提とすれば危険が多い場所にも行けるのに、余り頼れないのは残念だ。

待てよ？誰もいない秘境なら発動しても……。

と、そこまで考えた所で袖を引っ張られた。

引っ張った相手はオレが振り向くと、楽しそうに話す。

「でも、良かったわね。これで、リユートが大怪我しても心配ないし」

「まあな。でも、ミナに危険な事はさせれないから、怪我するような事はしないよ」

「……？大丈夫よ？リユート、私より弱いし」

…… 毎度悪気はないんだろうな。

この子。

相手が反則クラスとは言え、見た目は女の子なのだから、無駄に傷つく……。

「魔法剣フレイムブレイド！」

「はい！」

アウルが指示を出してナギが魔法剣を発動する。

魔剣アウルは瞬く間に燃え上がる炎に包まれ、刀身の二倍程の炎の剣となった。

「直撃はしないでくださいね、リユートさん」

ナギが剣を振り下ろすと熱風と火の粉を撒き散らしながら、リユートに襲いかかる。

しかし、リユートはそれを右にステップを踏み体を一回転させながら前方に踏み込む。



「当たつたらタダじゃ済まないだろうけど……単純過ぎる」

対魔法戦に慣れているリユートにとって、魔法剣と言えどナギの実力で当てるのは難しい。

前回の戦闘で魔剣戦を学んだリユートなら尚更だ。

「くっ……!？」

ナギが慌てて斜め上に剣を切り上げるが、無理な体制だった為に力が入らず手甲に防がれてしまう。

ナギは魔剣の透過を使おうかとも考えたが、手甲だけすり抜けるなんて芸当が簡単に成功するはずがなく、壁や人体の中では魔剣の具現化ができない為、リスクが高すぎた。

改めて冷静に見るとナギの剣は速い。

そして魔法剣なんて技もあって厄介だけれど、力が弱く剣筋が素直過ぎて読みやすい。

魔剣アウルを手甲で止めた瞬間、ナギは何をしたら良いのかわからないらしく、動きを止めてアウルに視線を送っていた。

本職の近接戦闘を得意とする者にはあり得ない行為だ。

そして、オレも、その隙を逃がそうとは思わない。

「下がれ！」

アウルが叫ぶのとオレが上段蹴りを放つタイミングは、ほぼ同じだった。

そして人から指示を仰ぐ場合、どうしたって行動は一手遅れる。

ナギは咄嗟に魔剣を透過し両手で防御したが、型が無茶苦茶だ。本当に咄嗟に手が身を守ったのだからうけど、痛くないハズがない。

得手は剣だが、昔は多少の体術習っていた。それくらい的事はわかる。

ナギはそれでもアウルの言うとおりに、バックステップで距離を取ろうとする。

対したオレは右の拳を付き出しているが、絶対に届かない。

が、それで狙い通りだ。

ナギが少し痛みがりつつも、距離が空いた事で仕切り直しになった事で安堵しながら、地に足を付けた瞬間にオレは呼んだ。

「ミツキー！」

「きゃっ……！」

空いた二人の空間の間に魔剣ミツキを召喚する。

さつき、蹴りの前に送還した為に素手状態だったが、魔剣の使い方を教えてくれたのはナギだ。

魔剣の切っ先は丁度ナギの喉元にある。

「……参りました。飲み込みが早いですね。流石に、純粋な剣の腕では勝てません」

「あー！俺が直接戦えればなあ！」

ナギが柔らかく笑い敗けを認めアウルが地面を踏みつけて悔しがっている。

うん、昨日散々練習した甲斐があって、魔剣の召喚送還は大分自由にできるようになってきた。

最もオレのは完全に消してしまっから、ナギみたいに透過ができるように練習は続けようと思うが。

後ろを振り向くと試合を見てくれた四人が、それぞれの態度をとっている。

レーナ王女は、手を振り歓声をあげてくれている。

カムイは真剣な表情だ。

……何を考えてるか気になる。

今の試合にそんな参考になる部分あったか？

もう一人の女の子……聖者パーティーの癒し手だけ？

彼女は王女を宥めている。

そして、ミナは興味なさそうに、こっちを見ているが……喜んでくれていると信じよう、うん。

王女と聖者パーティーは、聖殿内部に入る許可を貰ったらしい。

それなら魔法剣を覚えるまでは、この面子で修行をする事になるだろう。

それでも危険地域を迂回してるよりは、余程早いだろうな。

それに……魔法剣は魅力的だ。

余り、のんびりしてる暇はないが、しっかり覚えていこう。

……全然、覚えられる気がしないけどな。

六十五話 100の不死の王（後書き）

五月は更新頑張るとか言って、六月……。

申し訳ないですorz

王女様が難しすぎて何度書き直したか……そして時間空けすぎるのも嫌なので、少しかかるよ話を変えて更新させて頂きました。

なるべく早くしようとは思いますが次話は少し遅いかもかもしれません。

いつも読んでくれてる方々、本当にありがとうございますorz

六十六話 1と100の魔法講座（前書き）

お待たせしました！

完全にスランプでしたが、なんとか書き上げられました……！

過去の本文の加筆修正もやらないと……orz

六十六話 1と100の魔法講座

「対魔法戦を教えてほしい？」

「ああ……。俺の世界では魔法なんてなくてな。どうにも魔法が苦手なんだ……」

「私に負けるくらいだしな」

「うぐっ……。そ、それで魔法に詳しいミヅキ殿ならと……」

珍しくカムイが真面目な顔で話しかけて来たと思ってたら、戦闘に関する事なら本気で悩むらしい。

でも、少し気になる。

「レーナ王女って、強いのか？」

「王女たる者が無能では話にならない。城にいる魔法使いくらいと同程度には戦えるな」

……。微妙。

けど、私に聞かれても少し困るな。

私は魔法を使う側であって、使われる側じゃない。

カムイとは逆の立場だ。

「リユートは？アイツなら、魔法使い相手の戦いに慣れてるんじゃない？」

「そうなんだが……。どうにも声を掛けれる雰囲気では……」

リユートを見てみるとジッと剣とにらめっこをしていた。

……魔法剣の練習なんだろうな、あれ。

リユートが魔法剣を使えないのには、理由がある。

アウルとナギを見ていて気づいたただけだけど、多分間違ってると思う。

その理由をリユートに教えないのは……私の身勝手なエゴだ……。リユートに魔法剣を教える時に驚かせたい。喜ばせたい。

それだけの為に私はリユートに魔法剣が使えない理由を話してない。

うう……でも、私だって練習しても無駄だって、私が後で教えるって言ったんだから少しくらい聞いてくれてもいいんじゃないかな？

一心不乱に剣を眺めてるリユートを見ると本当にそう思うけど、それでも諦めないで練習してるからこそ、今のリユートの強さがあるんだろうけど……。

「リユート！バカ勇者が魔法対策を教えてほしいって！」

真剣な所を邪魔するのも悪いけど……気分転換にでもなればと思ってリユートを呼ぶ。

実際に、体を動かしていた訳じゃないけど少し気疲れしてるみたいだ。

「対魔法……？近寄って斬るしかないだろう」

余りにもシンプルな答えが帰ってきたきて、カムイと王女が固まる。



「いや、リユート殿。それができれば苦労しないのだが……」

こればかりは私もカムイに同意。

確かにリユートはそうやって勝ってるけど、言う程容易いとは思えない。

「できれば、リユート殿が戦っている場面を直に見てみたいのだが

……」

「いいんじゃない？なんなら、私がリユートの相手に」

「やめてくれ。無理だ。死ぬ」

……なんだよー。

カムイの提案に乗ろうかかって、思ったらリユートに即座に否定された。

まだ言葉を言い切ってもいない。

「無茶言うな。魔剣使ったら参考にならないだろ？それでミナの魔法を避けて近づくななんてできるか」

「まあ、ミツキ殿はな……」

なんか二人して散々な言いぐさだ。

ちゃんと手加減くらいするつもりだったのに。

なんて私が少しだけ、いじけてると視界の隅で王女が遠慮がちに言った。

「良ければ私が相手になろうか？」

「では、行くぞ」

「はい。いつでもどうぞ。レーナ様の魔法が合図と言つ事で」

リユートとレーナが距離を置いて対峙する。

10Mほど離れた間合いは、一足に距離を詰めるには遠すぎるが、魔法使いにとつても安全圏とは言いつらい。

「ファイアーボール！行け！！」

ファイアーボールは、実戦でも良く使われる魔法の一つ。

燃費の良さもさる事ながら攻撃力と汎用性が両立している上に、発動も早い。

それを三つほど、作り出し一気にリユート目掛けて放つ。

リユートはそれを軽く横に飛び、体を捻りながら前へと避ける。

「アロー！！」

「っ！！」

ファイアーボールを避けた所を王女はファイアーアローで狙い打つ。低級魔法ではあるが、その分、発動までの早さは折り紙付きであり、隙も少ない。

そして、炎である以上、当たれば相応のダメージもある。

回避から回避へと体勢を著しく入れ換えていては、リユートも前には進めなかった。

そして、僅かな時間だが中距離に足止めされたリユートにレーナ王女は本命の狙いを定める。

レーナ王女の右手に空気が弾ける様な音をたて、魔力が集中する。

「むざむざ、負けるつもりはないぞ、リユート！」

レーナ王女が唱えたのは、雷の魔法。

彼女が使える魔法の中では、上位に位置する攻撃魔法だ。

ファイアーアローを発動させると同時に唱えた為に、端からは魔法攻撃を自由に連射しているように見えるが、間に低級魔法を挟んでいたからこそ、余裕ができただけで、レーナ王女自身に中級以上の魔法を自在に打つ力量はない。

が、低級魔法で足止めをし、的確に中級魔法を使うのは、流石、王宮魔術師と同程度を自負するだけの事はある。

「サンダーランス……って、え？」

雷の魔法は全属性中二番目に早い。

故に狙いを定められて避けるのは困難だ。

だから、王女もリユートが今いる位置に向け魔法を放った。

……が、レーナ王女が手を向ける前にリユートは体を沈め斜め前に踏み出した。

それはまるで、レーナ王女が予め、どこに魔法を打つか理解していたかのようで、レーナ王女のサンダーランスは僅か前にリユートが居た空間を貫いた。

絶対に当たる。

とは、思っていなかったが、完全に回避されるとも思っていなかった。レーナ王女は咄嗟には動けず、その隙はリユートが剣の間合いに入るのに十分な物だった。

「まあ、こんな所かな」

「リユート！ 凄いではないか！ やはり、魔王を倒すのはリユートだな！」

試合が終わった途端にレーナ王女が、リユートの首に抱きつく。

「って、こら！」

「何をしてるの！！」

「って、怒りたいけど、ちょっと我慢。」

「リユートも王女相手に突き放す訳にはいかないだろうし、カムイが、勝手に騒ぐだろう。」

「……と、思っていたら、カムイは意外と気にせず……ん、違う。気づいてないの？」

「リユート殿！ なるほど、ああ、すれば良いのか！ 見事な回避だ。特に最後のなど、まるで動きを読んでいるかのようだった！！」

「ああ、あれは王女の右手にバチバチつと火花が散っていたからな。」

雷は直線的だから、来るのがわかっていれば避けやすいんだよ」

……バカ勇者は、対魔法戦に夢中みたいで、王女がリユートにくつついているのに、気づいてないみたい。

「なるほど。相手が何の属性を使って来るのかを見なければならぬのか……」

なんだろう、なんか……。

「基本的には火だけだな。合間に違う属性を混ぜるとパターン化を防げるから」

面白くない。

いや、ただの嫉妬なんだけどね？

「リユート」

「ん、どうした？ミナ……いや、ミナさん？」

こつちを見た瞬間、リユートの顔が強ばる。

「雷の魔法って避けやすいんでしょ？」

ちなみに私の右手には王女が使ったのと同じ魔法が唱えられている。

「ちょっと待て、ミナのは、別次元だか……魔剣召喚！」

「雷、槍、散！！」

私が魔法を打つより一瞬早くリユートが魔剣を召喚する。

少し送れて数本の雷の槍がリユートに向かい飛ぶけど、その内の一

本を斬られ、全て消滅する。

少しは落ち着いたかと思ったけど、私が大人の女性になるのはまだ先の事みたいだ……。

夜、ベッドで髪を乾かしているとドアがノックされた。

お風呂からあがったばかりで、あまり人に見せたい姿じゃないけど、この時間に私を訪ねて来る人なんて一人しかいない。

「どうぞ」

「邪魔するよ」

「リユートから来るなんて珍しいわね。どうしたの？」

「んー」

リユートはドアの前に立ったまま少し言い難そうに続けた。

「明後日辺りに出ようかと思ってな。魔法剣もできる兆しが見えな  
いし、ランディの事も気になる」

「そっか」

「ああ、それじゃ」

「あ、リユート」

言うだけ言って部屋を出ていこうとするリユートを止める。

「……ごめんね」

私が、そう言うとリユートは笑って返してくれた。

「いいさ。どうせ手加減してくれてたんだろ？」

そう言われて私の顔が少し熱くなる。

「……うん」

「ま、気にするな。おやすみ」

そうして今度こそリユートは部屋から出ていった。

雷の槍は、もしあたっても多少痛く痺れる程度の威力にはしてあった。

リユートは私が言いたい事をわかってくれて。

ちょっと無茶しても本気じゃないのもわかってくれて。

甘え過ぎだとも思うけど、私は、それが嬉しくて恥ずかしくて枕に顔を埋めて今日は寝てしまおう事にした。

……明後日か。

明日、ちゃんとあげよう。

まだ一つだけしか完成してないけど。

私が創った、リユートの為の魔法剣を。





六十七話 100の魔法剣

「リユート。ちょっとカムイと勝負して」

「……は？」

「いいよね？カムイ」

「別にリユート殿と戦うのは構わんが……」

オレとミナにとって聖殿で過ごす最後の日、彼女の一言からカムイさんの試合が決まった。

「……なんか、ごめん。うちの魔女、言い出したら聞かないから」

「いや、気にする事はない。リユート殿と手合わせするのは俺も楽しい」

「リユート！カムイに戦い方を教えてやれ！」

「……諸事情により、勝たせて貰うがな」

ああ、やっぱりカムイさんは一応いい人だ。

……単純だけど。

「さっさと始めなさいよー」

外野でミナが、だらだらと話しているオレ達を急かす。

いきなり言われた身にもなって欲しいが……。

カムイさんと戦うのは……なんだかんだ言っただけ楽しそうだ。

向こうも、そろそろ心の準備ができたらしく、剣を抜き構える。

「頑張るのだぞ、リユート。カムイもな」

王女が前へ出てきて激励の言葉を掛けてくれる。  
流石に、こう言った場を仕切るのは慣れているらしい。

「それでは、始め！」

王女の合図により、カムイさんが高速でオレに斬りかかってくる。  
いつぞやの試合とは逆の構図だ。

「今回は……随分と積極的です、ね！」

押し返すと同時に前蹴りをするが、あっさりと横に避けられる。  
流れるように逆袈裟に斬るが、力が入る訳もなく軽く受けられ、二  
度三度斬り結んだ所でカムイさんが大きく後に飛んだ。

「聖殿の盾に頼る訳にはいかないからな。それに、その王宮剣術……  
徐々に、体勢を崩される。そちらの好きに打たせて居ては勝てま  
い」

バックステップで距離を取ったのも、早めに仕切り直す為だろう。  
前回の戦いで色々、対策されてるみたいだ。  
そして、こっちに有効な情報は少ないな。

前回一番厄介だった聖殿の盾は少なくとも積極的に使う気はないみ  
たいだ。  
と、なると単純な剣技の勝負になる訳だが、前はオレが押ししてい  
たように思える。

警戒に値するとしたら……。

あの鞘に収めた状態から放たれる一撃。

辛うじて初動は見えるが、気づけば振りきられている一撃は防御も回避も難しいだろう。

ミナも何を考えて、試合なんてやらせているやら……考えても始まらないか。

せめて意味があると願おう。

剣を中段よりやや上に構え、カムイさんを見据える。独特の構えだが、威圧感が高めで、打ち込み難い。

が、打ち込み難いとあらば、活路を見出すのが剣士だ。

「くっ……行くぞ！」

ようは精神的な誘い受けの構え。

案の定カムイさんは速攻乗ってきた。

打ち合いは余りしたくないって言ったのに、やっぱり単純だ！

希望通り……打ち合いはしないけどなっ。

カムイさんはオレ自身ではなく剣を斬りにきている。

牽制だろうが、狙い通りだ。

「なっ……しまっ!？」

剣が当たる瞬間に、魔剣を透過する。

経験があるからこそわかるが、これをされると、かなり混乱する。

これなら盾も間に合うまい！

そう思い、右拳を振るうが、カムイさんはバランスを立て直そうと

はせず、そのまま地面を転がった。  
冷静な判断だ、正直に関心する。

「痛た……できるとは、知っていたが実際に、されるとかなり驚くな……」

「その状況で、反射的にバランスを立て直そうとしなかったのは、流石だよ」

地面を転がるのにダメージがないハズがない。  
勿論、鉄甲で殴られるよりは、かなり軽いが。

「一筋縄ではいかんと思っていたが……こちらも奥の手を出すか」

カムイさんは、そう言つと刃を鞘に収め、手を柄に掛ける。

……来た。

あの技だ。

「ほいほい、見せたい物ではないが、リユート殿には一度見せているしな」

カムイさんはニヤリと笑う。

さて……どうする？

今回は能力を使い体の性能を底上げしたから弾けたが……。

先祖返りの能力……しかし、あれは自分に掛かる負担も相当大きい。  
一応、不死の王もあるけど、あまり見せるなど言われたし……。

「リユート……」

悩んでいるとミナが、待つてましたとばかりに声をあげる。

「カムイと同じ構えをとって!!」

「なんで!？」

「いいから!」

いや、何も良くはないんだが。

思わず聞き返した言葉も、即座に一蹴された。

「早くしろ!」

なんか命令形になってます。

……仕方ないな。

鞘はないから、剣を腰に当て左手で鞘を握り、右手を刃に添える。右足を前に出して腰を低く構える。

「ほう。構えは為っているが、俺の『居合い』は、そう簡単に真似れる物ではないぞ?」

剣をやっつけていれば、多くの技があり、技を使う為の構えがある。だから、構えを真似るのは得意だけど……カムイさんの言う通り技は、そんな簡単に身に付く物じゃない。

つて、なんだ、この構え。

力、入れにくいったら、ありやしねえ。

「右手邪魔!刃から離して!!!」

おまけに、なんかダメ出し食らった。  
どういう事だよ。

カムイさんも律義に待ってくれてるが、何がしたいんだ……。

「これで、いいのか？」

「うん、行くよ。リユート！」

どこに!?

意味不明な言動に思わず、心の中でツッコム。

カムイさんですら、苦笑いをしている……って、思ったら何かに気づいたかの様に声をあげた。

「ん、風？」

風？

聖殿内部に風なんて……。

そう思ったが、確かに頬を風が撫でている。

そして、それは少しずつ強くなっているように感じる。

一体何処から……？

いや、何処からかはわからない。

が、何処へかは、すぐ分かった。

「約束したでしょ？私が魔法剣を教えるって」

そう言う彼女は誇らしそうに笑っている。

「時間掛かつちゃってごめんね。でも、その分、良いのを創ったつ

もりだから」

風は魔剣に渦巻いている。

その様子は、まるで竜巻で作られた鞘のようだ。

「まさか、魔剣の能力はミナのか！？それならリユートが使えないのも当然だ！」

アウルが珍しく、驚いたような声をあげる。

「後は振り抜くだけよ。癪だけどカムイの居合いを参考にしたの。威力は……同じだと思って貰っちゃ困るけどね」

そうして、彼女は、その名前を唱える。

「魔法剣神威」

「……ちゃんと握ってなさいよ」

「すまん。流石に予想以上だった」

ミナが天井に刺さった魔剣を見てジト目で睨んでくる。

魔法剣神威。

その威力はオレの予想を遙かに上回っていた。

本能的に危機を感じたのか鞘と聖殿の盾で防御したカムイさんに向け振った剣は、まるで竜巻から射出されたかの様に勢い良く飛び出した。

竜巻から放たれた剣は聖殿の盾を物ともせず切り裂き、鞘すら中身に入っていた剣ごと真つ二つに斬った。

二重の防御のお陰かカムイさん自身は、手のひらを多少深く怪我しただけで、済んだし、その怪我も一緒にいた治癒術師の女の子が直している最中だ。

……しかし、精神的なダメージはすごそうだけど。

「俺の刀が……」

治癒魔法をかけて貰いながら意気消沈している。

その落ち込み様ときたら、レーナ王女が気を使ってカムイさんに話しかけている程だ。

「しかし、呆れた威力だな……」

アウルが、遠くの壁を見ながら、ぽつりと呟く。

壁には地面から天井まで、薄くだが切れ目が入っている。

紛れもなく魔法剣神威の威力に依るものだ。

中央で戦っていたオレ達は壁とはかなり離れていたけど、剣を解き放った竜巻は、そのまま風の刃になり、切っ先の延長線にある壁に傷をつけた。

大した威力ではないが、紛れもなくオレが欲しかった遠距離攻撃である。



って言っても魔法剣神威自体は近距離でこそ、その真価を発揮する。遠距離にも攻撃できるってのは、おまけみたいなもんか。

そして、壁の傷を辿って行くと、その終着点に……魔剣ミヅキが刺さってる。

はい。

余りの威力にすっぱ抜けました。

ミナがジト目でさつきから睨んでくる理由はこれです。

我ながら情けないとは思うけど、言い訳くらいさせて欲しい。

効果もわからず、いきなり魔法剣を打たされた上に、ふざけた威力だったんだよ！

……まあ、実戦で、武器が手をすっぱ抜けたら高確率で死ぬけどさ。

「にしても、アウル。もしかしてオレは最初から魔法剣は使えなかったのか？」

「ん？ああ、そうだな。魔法剣を使えるのは、魔剣の能力者だけだ」

アウルの試合中の言葉を思い出し聞いてみると実に軽い調子で答えてくれた、ちくしょう。

「すみません、リユートさん……。まさか、すでに魔剣を継承されているとは思わなくて……。私達の落ち度です」

「しかし、そういえばリユートには、あの能力もあるんだしな。気づくべきだった」

あの能力……不死の王の事だろう。  
今は他の人もいるから名前を出せないんだろうな。

「でも、ナギは使ってなかったか？魔法剣」  
「使う時は俺が指示してただろ？ようは俺が発動させてナギが使ってたんだよ。今のお前らみたくな」

……そう言われて見たらナギは戦闘中は全てアウルの指示通りに動いていた。

全てが、そうだから魔法剣に関しても全く気にしなかったけど……  
つまり、オレがやっていた練習って……。

「だから言ったじゃない。無駄だった」

オレの心に言葉の剣が突き刺さる。

つまり、あれか。ミナは、その事に気づいていたのか。

「いや、しかし、一度だけ剣が熱を帯びただろ？あれは……！」  
「あれは、私が火とか熱の事を考えてたから発動したのよ。第一、リユートは風の魔法剣の事しか頭になかったじゃない」

……はい。

そういえば、あの時はミナとナギがそんな話をしてた覚えがある。

……なんだったんだろう。

ここ数日の悩んでいたオレ。

「黙ってた私も悪かったからさ……。あまり落ち込むな、バカ」

ミナが申し訳なさそうに顔を覗き込んでくる。

まあ、黙ってた理由も多分……驚かせたいとか、そんな理由なんだろうな。

はあ……まあ、いつか。

一応、魔法剣は使える様になったみたいだし。

これで、気兼ねなく明日、都市を出れる。

「ああ、ありがとな。ミナ」

そう言っただけで彼女の頭を撫でると、彼女は頭を左右に振って手を振り落とす。

「黙ってた……ごめん」

そう再度謝るミナの頭に手を乗せ直すと今度は振り落とされる事はなかった。

「よっと……うわ、重いなあ」

僕は鉱石のたつぷり入った荷台を試しに引っ張る。  
本来なら数頭の馬で引っ張って行くんだらうな。

「すみません、ケーファーさん。こんな仕事を頼んでしまって……」

村長さんが僕に頭を下げてくる。  
確かに、これを運ぶのは少し疲れるだろうけど、その日の食べ物に  
困る生活に比べればなんて事はない。

「いいんですよ。忙しい冬前ですから、お世話になっている以上、  
僕にも働かせてください」

「ありがとうございます。いや、しかし今冬は大分楽に過ごせそう  
です」

村長が嬉しそうに目を細めて笑う。

無事に魔物の群れを撃退した僕とルーシーはアレ以来、この村にお  
世話になっている。

僕の仕事は、専ら薪を集める事なんだけど、これが中々の力仕事で  
大変らしい。

けど、魔人の僕には何のその。

一人で数人分は働けるらしくて、その分、狩り等の食料採集に人を  
使えたお陰で、いつもより沢山余裕があるみたいだ。

今回の仕事も、この近辺でしか取れない特殊な鉱石を近くの大都市  
に売りにいくらしい。

なんでも、冬になれば村の外に出るのは厳しい為に、今のうちにお  
金を作らなきゃいけないそうだ。

お金が無ければ困った時にギルドへの依頼もできないらしい。

それも普段なら結構な規模で行くらしいけど、今回は僕と村の人を  
合わせて四人。

僕が引けば馬は必要ないし盗賊対策もいらなから、後は都市で売  
つてくる人がいればいいって結論みたいだ。  
街で買物できないのが僕の何よりの欠点だなあ……。

「じゃあ、行つてきますね。村長」

「おお。みんなも気をつけてな」

そうして僕たち四人は聖殿都市と呼ばれる都市へと出版した。

六十八話 100と次の村へ(前書き)

今回は話が短いです。

しかも、短い理由が「ここで切りたいから」という妙な拘りです。

ごめんなさいorz

余り長いのも短いのも避け一定にしたいのですが、文章力がgggg

……orz

誤字脱字、感想等頂けたら嬉しいです。

六十八話 100と次の村へ

「討伐隊……ですか？」

「ああ、そのうち散ると思われて居た魔物の群れだが、未だに群れている。流石に見過ごせなくなってきた」

レーナ王女は地図を見ながら呟く。

地図には、オレ達が聖殿都市に来る理由となった危険地域が描かれている。

……オレの記憶が正しければ少し南下しているな。

「しかし、王女騎士団だけでは危険ではありませんか？」

「ああ、だから聖殿騎士団から数隊連れて行く。私も同行するからな。万一の事があつては洒落にならない」

聖殿騎士団は、近衛騎士に比べれば実力は劣るとは言え、個々の実力なら、そう差はない。

カムイさんもいるし大丈夫か……。

「つて、聖殿都市の防衛はどうするんですか!？」

「ああ、数日後に帝国から援軍が来るらしい。なんでも、新部隊を増設したらしく、その試験運用を兼ねているそうだ」

試験運用つて……そうそう襲撃される訳でもないが、此処が落ちたら人類終わるぞ。

……考えて見たら数千年守り続けているのが奇跡な気がしてくる。

「心配するな、リユート」

心配していたのがバレたのか王女はクスツと笑う。

「帝国が自信を持って送り出してくる兵だ。なんでも弓兵を強化した部隊らしい。前衛部隊も居るし、我が国の聖殿騎士団とは言え、抜けるのは数隊。その穴くらいは埋めてくれよう」

「……レーナ様がそう言うなら」

実際に、たかだか商人であるオレが気にした所でどうしようもないだろう。

それゆりも……弓兵を強化した部隊か。

優秀な……と、言わず強化した。

となると現状の弓兵とは少し違うのだろう。

簡単に思いつくのは、弓か矢の改良といった所か。弓を使う冒険者は多い。

つまり、どうにか、弓矢を手に入れたら……。

「……リユート。間違っても変な事を考えるでないぞ？」

「あ、ハイ。大丈夫です」

自分で言っておいて何が大丈夫なのかが、わからない。

……下手したら国家間問題か。

流石に止めて置こう。

「帝国は我が国と違い魔法文明は遅れている。しかしながら、鍛冶に優れている。聖殿都市程の名刀は産み出せなくても、中々の品質



を量産する事に長けている。新しい技術は、きっと魔人との戦いの役に立つだろう」

王女は、機嫌良さそうに地図に羽ペンを走らせる。

「それで、いいのか？リユート。外にミヅキを待たせているのだから？？」

「そう……ですね。短い間ですが、お世話になりました」

「ふふん、どうせ、すぐに王都に戻って来るのだろう？討伐を終えたら私も帰るからな。必ず顔を出すんだ」

行商は大きな街でなければ成り立たない。

流石にお見通しのようだ。

曖昧に返事を濁し、兵舎を出るとミナが退屈そうにしていた。思ったより長く話し込んだからな……。

「お待たせ」

「ん、おかえり」

手を差し出して彼女を引っ張り立たせる。

「何を買うの？」

「食料かなあ。食べたい物あれば好きに買っていいよ。正し、日保ちしないヤツは余り買わないよ？」

「ホント!？」

ミナが目を輝かせる。

道中は王女騎士団の連中と同じ物食べてたし、最近は兵舎の食事だ

ったからなあ。  
兵舎の食事は美味しかったが、やはり自分の好みの食べ物を食べたいんだろう。

つてか、旅路は中々に暇だから食事が一番の楽しみだ。

ミナはさっそく商店を覗いている。

「リユーター、これ！」

「金渡すから好きに買え」

笑いながら懐から金貨を一枚出して渡す。

「……………金貨つて」

「どついつ経路を辿るかわからないからな。食料は多めに買っていくよ」

「まあ、そついつ事なら……………」

ミナは、仕方なしといった様子で金貨を自分の財布に入れると……………中から銀貨を出し店主に渡していた。

……………使いにくいもんなー、金貨。

しかも彼女が抱えて来たのは大量のシャルの実。確かに金貨を使うような買い物ではない。

つてか、食いきれるのか？この量。

余談だが、オレのそんな心配はまったく意味がなく、ミナは凍らせたり干したり様々な方法でシャルの実を保存し、最後の方は節約しながら食べるまでになっていた。

ホント、魔法ってすごい。

「ケルローン、そろそろ戻って来てー」

「ワウツー!!」

ミナが呼ぶと辺りを走っていたケルロンが、馬車に戻って来る。

荷物を積む間、軽く運動をしていた訳だ。

聖殿都市にいる間は、ずっと町外れで良い子にしていたから、ケルロン自身も体を動かしたかっただろう。

機嫌良さそうに跳ねて走って来る。

「おかえり。また、よろしくね」

「クウン」

ミナが頭を撫で、鞍をつけると、そんな甘えた声を出す。

オレの知ってるケルベロスと違う……。

「行くのは……東だっけ？」

「ああ。ケルロンの足なら二、三日って所かな。あの辺りは魔物の襲撃を受けやすい代わりに資源が豊富らしくてな。生活自体は、そ

う大変でもないらしい」

とは言え、いつ滅びるかわからない村ではあるけど。

ケルロンが走り出すと馬より余程早く景色が流れて行く。

この辺りは、まだ人通りが多く地面がなだらかだけど、僻地に行けば行くほど揺れるだろう。

馬車が壊れないようにある程度は加減して貰わないとな……。

馬車を走らせて数時間。

別に、いつもずっとミナと話している訳ではない。

長い時間、一緒にいれば何も喋らずゆったりと進んでいる事もある。だから、何も気にしていなかったが、前に座りケルロンの手綱を持っているオレと背中合わせに座っているミナは、いつもより静かだった。

ミナはシャルの実を口にしながら、ポツリと呟く。

「リユート、ここを真っ直ぐ行くんだよね？」

「ん？ああ、幸い道らしき物はあるしな」

目当ての村は、どうやら聖殿都市と、そこそこ交流があるらしく、道と言うには頼りないが人の通る後があって、走りやすい。

「この分なら二日で間違いなく着きそうだけど……どうかしたのか？」

「んー……なんでもない。多分……大丈夫」

「そうか？具合悪くなったりでもしたら、すぐ言ってくれよ？」

「うん。ありがと」

そして、またシャルの実を食べだす。

……？

ミナは他の世界から来たとあって、道にはかなり疎い。

今までは目的地がどんな所か以外は、ほとんど何も聞かずに着いてきた。

多少心配だけど、本人が大丈夫と言っているのに、これ以上聞くのもな……。

そう思い馬車を進ませる。

しかし、次の変化は僅か数十分でやってきた。

「グルル……」

「ケルロン？どうした？」

ケルロンが突然、速度を緩め唸り出す。

馬が全力で走った時並みの速さだったのが、徒歩とほぼ変わらないまでに落ちる。

その様子は何かを警戒してるかのようだ。

「ケルロンも気づいたんだ……。アレかな？」

背中合わせに座っていたミナが顔だけで、こちらを見る。  
前方には……霞む程遠くに、小さな馬車と人が見える。

「村の人が……？」

「ううん、違う。だったら、ケルロンがこんなに警戒する訳ない」

ケルロンは相変わらず、徒歩程度の速さで馬車を引き、少しづつ前方の『何か』に近づいて行く。

「リユート。多分あれが……今代の魔王だよ」

「……………は？」

六十九話 100と魔王と激昂の1

「……悪いんだけど、もう一回言って貰えるか？」

「だから、前にいるの魔王よ」

なんで、こんな場所に。

まず、それを疑問に思ったのは間違いじゃないはず。

魔王だつて言うなら魔界の奥地にでも引っ込んでろ。

「……倒すのか？」

「倒したいの？別にどうでもいいんだけど」

「あ、はい……」

とりあえず、冷静になろう。

前にいるのは魔王。

向こうも此方に……っていうか、ミナにか？

気づいたのか、馬車と付き添いらしき人……多分、人を待たせて近づいて来る。

以前戦つたつて言ってたから、向こうがミナを覚えていても不思議じゃない。

っていうか、オレならトラウマになる。

後に残して来た人達は、とりあえず戦力外って考えていいか。

そうなるも魔王が、なんでそんな人間を連れて、ここに居るかだけど……。

さっぱりわからん。

奴隷にしても、連れて帰るなら南だ。  
魔界はすぐそこなんだから、ここに居る意味がない。

「んー……敵意は？」

「知らないわよ、そんなの。とりあえず魔力の流れは穏やかだけど、魔王だし攻撃してこようと思えば、すぐできるんじゃない？」

「だよなあ……」

何にしても判断材料が少なすぎるか。

普段なら、危ない事は避けるべきだけど……。

「話してみるか」

「ん、気をつけてね。大丈夫だと思うけど、一応」

「いざとなったら不死の王があるしなあ……。ミナこそ自分の身を  
守ってくれよ？今更一人旅なんて嫌だからな」

ミナは驚いたように硬直した後に、悪戯を思いついた子供のような  
笑みを浮かべる。

「大丈夫。私はリユートよりも魔王よりも強いもの。でも……ちょ  
っと嬉しかったな」

「はじめまして……魔王さん」

「あはは。やっぱり気づいてたんだ。そうだよ。そっちの子は」



度目だしね」

目の前まで来た魔王は至って穏やかに笑う。

ホントにコイツが魔王なのか？

魔力も押さえているようで、今はさっぱりわからない。

「始めに聞いときたいんだけど……敵意は？」

「嬉しいなあ。そういう風に聞いて来てくれる人、あんまり居ないんだ」

「まあ、魔王相手だしね……」

「だよね……」

どうやら今まで相当苦労したらしく、心底憂鬱そうに溜め息を吐いている。

「害はないって考えていいのかな？」

「うん。僕の方から人間を襲う事はないよ。流石に襲ってくる人間は別だけどね」

ふむ。

とりあえずは信じてもいいか。

色々聞きたい事はあるが、とりあえず、この場でのお互いの安全は確認されたと思っていいだろう。

そう思った瞬間。

背筋に冷たい感触が流れた。

魔法を使う時に感じる波に似ているが、それとは比較にならないく

らい冷たい奔流。

頭から水を被せられたような気分になり警戒して魔王を見ると、彼もオレと同じように驚愕していた。

魔力の大きさに方向感覚が麻痺しかけたが、確かに、この魔力は魔王の放っている物ではない。

むしろ……もつと馴染み深い、いつも傍に居るような感覚が後から……後？

後に何があつたか一瞬考えたけど馬車しかないに決まっている。そして馬車に居るのは一人と一匹。

恐る恐る振り返ると、そこには耳を閉じ伏せて完全に怯えているケルロンと、黒いオーラに見える程に圧縮された魔力を放出させている魔女がいた。

「……ミナさん？どうしたんですか？」

冷や汗を押さえながら勇気を振り絞って話しかけて見るけど、無視して通り過ぎられる。

さっきまで、魔王なんてどうでも良さそうだったのに一体何があった。

心なしか目や髪の色も普段より、さらに濃い漆黒になっているように見える。

風もないのに漆黒の長髪がなびいてて、非常に怖い。

そんな状況で、なるべく笑顔で話しかけたオレは褒められていいと思う。

無視されたけど。

ミナは魔王の前に立ち話しかける。

「魔王。アンタ自分から人は襲わないって言ったわよね？」

「う、うん……。相手から襲ってきたら別だけど……」

「じゃあさ、それはどうしたの？」

ミナは魔王の顔を指差す。

いや、顔より少し下……。首？

魔王の首には、細い布が巻かれている。

アレは……。マフラー？

ミナが元の世界の技術で編んだ防寒具。

でもミナが作った物程、綺麗ではなく少し不恰好……。って、まさか！？

「ソレは、この世界では少なくとも、どこにでもある物じゃない。

それに、その毛糸は見覚えある……。私と……。コレットしか作れない物なのよ……」

マフラーが本当にミナとコレットしか編めないのかはわからない。

けど、確かにコレットである可能性は非常に高い。

だから、ミナは途中から魔王に対して怒ってるのか？

オレの頭にもやっとな話が入る。

ミナはコレットを可愛がっていた。

そして、コレットの持ち物を魔王が持っているのだから冷静でいられないのだろう。

「返答によつては……消し飛ばすわよ」

ミナが本気で怒ってるのは初めて見たけど、かなり怖い。普段、オレが怒られてるのは、まだ本気じゃないんだな……。そんなミナを前にした魔王は恐る恐る口を開く。

「いや、これは、その娘がいた村が襲われて……」

「襲つたの？」

「僕じゃないよ!？」

「じゃあ、誰が？」

「えーと……魔人？」

「やっぱりアンタじゃないの!！」

そう言うとミナは黒い炎の槍を数本空中に創りだす。

何あれ。

とりあえず、非常に危険な物だつてのはわかるけど。

「違つんだつて! コレは貰っただけだよ!」

「なんでコレットがアンタにソレをあげるのよ!！」

「お願いだから話を聞い……ああ、もう!！」

話をしてる最中の魔王にミナは容赦なく片手を突き出す。

それに伴い、黒炎の槍が魔王に襲い掛かるが、魔王も翼を広げて空へと回避する。

すげい……! !

今代の魔王は黒い翼を用いて空を翔るといふ噂はあったけど、なんて反応速度だ!

翼を持つ魔獣も少なからずいるが、魔力の補助があるとは言え、空を飛ぶというのはかなりの労力がかかるハズ……だけど、魔王はそれを驚くほど素早くこなしている。

「逃がさない！……重力、強化！！」

「え？ええ！？翼が……重く……！？」

ミナが空中にいる魔王に何かしたようだが、それでも魔王は空へと留まる。

しかし、幾ら空中とは言え先程のミナの魔法が効いているようで動きが鈍い。

「さっさと落ちてきなさい！魔剣召喚！！」

そして空にいる魔王のさらにその上に召喚される数多の魔剣。

それは刃を下に真っ直ぐ降り注ぐ。

流星の魔王も、これには顔色を青くし自分から急降下しながらなんとか魔剣の雨を避けていた。

「おかえり。さよなら」

「ちよ、待って……！えっと、助けて！！」

「オレかよ！？」

地面に落ちた魔王をミナがすごい怖い笑顔で迎える。

右手にはまた黒い炎の塊が生成されてるけど、本当にアレなんなんだろう。

そして、魔王はオレに向かって命乞いをする……けど、アレをどうにかするのさあ……。

今のミナを敵に回すのは正直嫌な予感しかしない。

嫌な予感しかしないけど……頭に血が上った彼女を好きにさせておいたら、きつと後悔するのは彼女だ。

「はあ。すっげえ怖いけど、ミナの為になるならなんとかするか……」

魔王を殺すのを反対する訳じゃないけど、さっきまで興味なかったのに一時期の感情でやって良いとは思えない。  
そして少なくとも魔王はコレットを知っている。  
もしかしたら、そう悪い関係でもないのかもしれない。

……もし、魔王が本当にコレットに何かしていた場合はオレの手で。  
そう覚悟を決めてミナの前に立つ。

「ミナ。ちょっと落ち着け」

「まさかリユートに邪魔されるとは思わなかったんだけど」

「落ち着いたら邪魔しないよ。だから少し冷静になれ」

ミナが少したじろぐ。

右手にある黒炎は消してくれたけど、体中から黒い魔力のオーラが立ち上っているところを見ると、さっぱり冷静じゃない。

「でも、コレットなのよ？あの子の物なのよ。あれは！間違いなく……」

「だから冷静になって話を聞こう。それから先どうするかは……オレが決める」

そう言ってミナの手を握る。

……つて痛ええ!?

手を握った瞬間激しい痛みに襲われて声がでそうになるけど、なんとか堪える。

魔力のオーラのせいか!?これ!?!?

手のひらが焼けるように熱い。

高濃度の魔力に触れて体が拒絶反応を起こしてるのか……?

「痛いでしょ?リユート、お願い。放して?」

ミナは少し悲しそうに言う。

どうやら、この魔力のオーラが人体に有害だつてのは理解してるようだ。

握ってるだけで手のひらが爛れる……それが嫌なら放せ?冗談じゃない!

調子に……乗んな!!

オレは痛みを無視してミナの体を抱き寄せる。

手のひらにあつた痛みが彼女を抱いて接触している箇所……いや、彼女との距離が近い場所全てに痛みが広がる。

それは魔法じゃないからか、高い抵抗力を持っているハズの装備すら素通りしてくる。

「ちょっと、リユート!痛くないの!?放して……!」

「痛いけど……!とりあえず、落ち着け!今のまま魔王をどうこうして後悔するのはお前だ!」

「っ……。あー、もうわかったわよ！とりあえず放して！」

ミナが両手でオレを突き放す。

本気の力で抱きしめれば、放される事はなかっただろうけど、痛みと、とりあえず了解を得たからオレもおとなしく突き放される。

あー……。ヒリヒリする……。

ミナは下を向いて少し肩で息をした後、魔王に向き直る。

「それで……。どうしたの。ちゃんと最初っから説明して」

黒いオーラを迸らせたまま、そう言った。

まあ……。問答無用で攻撃するつもりはなくなっただしいか……。

魔王も緊張した面持ちではあるけど、とりあえず放せる状況になったのは理解したようで安堵の溜息を吐き、小さな村と小さな少女コレットに出会った事を語り始める。

「まずさつきから言ってる通り、僕は自分から人に危害を加えるつもりはないよ。あの村に立ち寄ったのは偶然。僕がその村にいた時はちょうど近隣の魔獣退治に雇われた傭兵が壊滅して逃げ帰って来てた時だった」

それが、勇者と魔女と魔王の最初の出会いだった。



七十話 100と交渉と魔王の願い

「その話……本当でしょうね？」

「うん。だから女の子と傭兵の人はこの先の小さな村にいるよ」

「んー……魔人が言ってるって事自体うさんくさいけど、理屈は通るか……」

魔王……ケーファアの話した内容は恋人と平穏に暮らす為に試行錯誤を繰り返して、その結果、今の村で仕事を手伝っているというものだった。

向こう側に見える馬車も人間も、それなら納得が行く。

「それにしても魔王が馬車を引いてるなんてな」

笑い種にもならないが、ケーファアは少し恥ずかしいそうに笑うだけで、嫌そうな顔はしていない。

「となると、あの馬車に積んである鉱石は耐火粘土か」

「あ、うん。村長さんがそんな事言ってたよ」

「何、耐火粘土って」

「その名前の通り熱に強い粘土なんだけど……雷にも強いし、ある程度の強度もある。流石に、物理攻撃に耐えられる程じゃないから、盾や鎧にコーティングするのが主な使い道かな。しかも、魔界の近くで採掘されたんなら魔力を帯びてるだろうし、質は良いだろうけど……」

ふむ。

この道を通るって事は十中八九、聖殿都市で売るつもりなんだろう。

でも、それは……。

「魔王。ちょっと向こうの人達と話したいんだけど」

「ケーファーでいいよ。危ないから待ってて貰ってただけだからいいんじゃないかな？」

危ないってのはミナの事か。

正直、反論できないから困る。

ケーファーが手を振ると離れていた人達が近寄ってきた。

「もう大丈夫なのかい？」

「うん。ちゃんと話したから」

……魔王なんだよな？

村の人達はケーファー相手に何の気兼ねもなく話してるように見える。

少なくともオレの知っている歴史上の魔王とは随分違う。

……けど、まあ、いいや。

今、重要なのは魔王なんかじゃない。

目の前にいる村の人達だ。

「失礼します。この先の村の方々ですか？オレは行商人のリユートと申します」

「……！！ほう、行商人の方ですか」

そう、何故ならオレは商人だから。

「しかし、その値段では聖殿都市での売値よりも三割も低く……」  
「この耐火粘土は確かに質は良いものです。しかし聖殿都市は、最高級の品物に溢れています。売れる期間までの滞在費を考えれば決して悪い話ではないと思います」

「確かにそうなんだが……。以前来たときも思ったように売れなくて苦労したものだ……」

「失礼ですが、村自体の労働力に余裕があるとも思えません。ここで売って頂けるなら、ケルベロスの馬車で村までお送りしますよ」

「なあ、うちらも早く村に帰りたいし長引けば儲けが減るのも事実。村に帰れば仕事は幾らでもあるし、ここで買って貰った方がいいんじゃないか……？」

「ぐっ、そうだな……。リユート、あんたの言う通りだ。ここで買ってくれるなら、その値段で良い！」

「ありがとうございます。では、少々お待ちを」

心の中でガッツポーズをとりながら馬車に戻る。

一割程度安く買えればいいかと思っただが思いの外、交渉はうまく進んだ。

聖殿都市で売る価格とこのを考慮すれば、他の都市では二割増しで売れるだろう。

耐火粘土と言うのは、優秀な消耗品であるから需要が尽きる事もな

い。

聖殿都市にある他の装備が異常なだけなのだ。

「リユートって、もしかして、出来る人？」

「何、いきなり」

金貨を取りに馬車に戻るとミナが話しかけてきた。  
なんか意外な物をみたような表情してるし。

「いつの間に手持ちのお金、あんなに増えてたの？交渉の時もずっと主導権握ってたし……」

「王女騎士団相手に結構荒稼ぎしたしなあ。交渉は、向こうは死活問題だから必死なんだよ」

冬になれば聖殿都市に行くのも一苦労だろうしな。  
逆に、こっちは売って貰えなくても別に困らない。

「少し安すぎたけどな」

「……？良い事なんじゃないの？」

「目先だけを考えるなら……っと。払って来るからもう少し待っててくれ」

「ん、わかった」

三割は流石に値切りすぎた。

例え、ここを押さえても村の人達が良い顔をしないだろう。

……まさか値段交渉を一切しないで飲むとは思わなかったんだよ。

けど、それならそれで、やり方はある。

「お待たせしました。代金です」

「ありがとう。……少し多くないか？」

「質の良い耐火粘土ですので……多少、色を付けさせて頂きました。代わりに村でもご贖頂ければと」

笑顔でそう言うと同ころも、一瞬驚いた後に嬉しそうに笑う。

「ありがとう！これで村長にも胸を張って報告できるよ！」

流石に三割も引かれたとなると不安も残るんだろう。

昔の……商売を始めたばかりのオレなら、こんな事はしなかっただろうけど、余裕ができてからは先の事も見えるようになった。

向こうの村ではランディもコレットも世話になってるみたいだしな。村からの印象を良くしても損はないだろ。

「ケーファー。今日はそろそろ休まないか？」

「え？僕は良いけど……ちょっと早すぎない？みんななるべく早く村に帰りたいみたいだし……」

村に戻れば幾らでも仕事がある。

仲間の負担を少しでも減らしたいんだろうな。

良い人達だ。

けど……。

「うちの馬車と鉱石を積んだ馬車を連結させるにも少し時間がかかるんだよ。それからだと大した距離は進めないし……それなら、ちよつと豪勢に食事でもどうだ？聖殿都市を出たばかりだし、食料は

沢山ある」

ケーファアの目付きが明らかに変わる。

どこか期待していて、でもそれを隠そうとして隠しきれてない。

「う、うーん……。僕だけじゃ決めれないから、みんなと相談してみよ！」

村の人は少し離れた所で話し合っていて、こちらの声は聞こえていないようだ。

ケーファアは、歩いてそちらへ向かうが、どう見ても浮き足だっている。

チヨロいものだな、魔王も。

「……で、料理って誰が作るの？」

むしろ、魔女が怖いです。

「リユートって、手早く料理するのは上手だけど、余り人をもてなすような物じゃないよね？誰が作るの？」

「いや、ミナさんに作って貰えたら嬉しいなあ」と

ミナは溜め息を吐いて答える。

「別に良いけど勝手に進めないの。一言言ってくれたら私にできる事は断らないから。……多分」

「悪い。ありがとうな」

最後の一言が若干気になるけど、確かに相談くらいはするべきだっ

たか。

そう言うと彼女は機嫌が悪いどころか嬉しそうに悪態をつく。

「良いわよ。言ってくれたら。あーあ、しょうがないなあ」

そう言ってミナが作ってくれた食事は、いつも通りで、でもどこか華やかな物だった。

彼女曰く、豪華な料理なんて慣れない事よりも、美味しく作れる自信のある料理を揃えたそうだ。

半数くらいは、オレの好みな上に、他の人からも評判で、見栄をはるよりは正解だったろう。

馬車の連結作業で疲れた体に染み渡る。

特にケーファーは、自覚はないみたいだけど、はしゃいでる。

「本当に美味しいなあ。ルーシーにも食べさせてあげたいよ」

「ルーシーって……前、一緒に居た白い子？」

ケーファーは、ミナの言葉に頷く。

食事前は、緊張感溢れる空気を作って居た二人だけど、食事を食べ始めてからケーファーは、その味に。ミナは褒められて自然体に近くなつたみたいだ。

「そういえば二人は以前にも会ってたんだっけ？」

「うん。あの時は……本当に殺されるかと思ったよ」

「私だって酷い目にあつたわよ。結果的には良かったけど」

ケーファーが一瞬で落ち込む。

怖かったんだろっなあ……。

「あの子、なんなの？翼が生えてるし、あの転移魔法も見たことないんだけど」

「ん？天使だよ」

ケーファアの言葉に硬直する。

ミナは余り気にしてないようだけど、天使と言うのは一般的には……。

「天使って……架空の種族だろ？」

「人間にはあんまり知られていないみたいだけど、天使は魔人の天敵だよ。浮島に住んでて人には危害加えないみたいだから、知らない人の方が多いみたいだね」

「にわかには信じられないな……」

「私には、天使も魔人も魔法も同じなんだけど」

そういえばミナの世界には、そう言うのもいなかったんだっけ。それを考えれば天使が居てもおかしくない……のか？

「でも、天敵ならなんで一緒に居たの？」

「それは……僕とルーシーは特別っていうか……」

「付き合ってるの？」

ミナが一見ありえない言葉を言うけど、ケーファアは否定しない。

「僕とルーシーは小さい頃に一緒に遊んで……今では彼女と離れるだなんて考えられないんだ」

「魔王と天使の恋人つてのもすごいな……」



流石にありえない。

しかし、ケーファーは改めて自分が魔王である理由を説明した。

「僕が魔王になったのもルーシーと一緒にいる為なんだよ。魔界は争いが多いんだ。みんな、自分の力を誇示したがってるからね。魔王になれば、みんな言う事を聞いてくれるかなって思ったんだけど……戦いが生きてる理由みたいな魔人にとって僕みたいな平和に暮らしたい魔王は都合が悪いらしいんだ……」

「それで未だに魔王軍が大々的には動いてなかったのか……」

「人間と戦争なんてしたら平和なんて物とは無縁だし、天使からも執拗に攻撃されるだろうし……」

……苦勞してるんだな、魔人も。

むしろ、この魔王が異端すぎるだけだと思っけど。

「ケーファーは、最終的にはどうしたいんだ？」

「僕はルーシーと普通に暮らせたらそれでいいんだ。今の村の人はわかってくれてるけど、多分いつまでもいる訳にはいかないだろうなあ」

……魔人は世界の敵。

これは三カ国の共通認識だ。

幾ら辺境とは言え、ずっと長居すれば噂は広まる。

その時に国々はどんな対応を取るかな。

まあ、一国くらいは出兵するだろう。

魔界は戦いに明け暮れ人間には敵視される。

ケーファーの願いは少し難しいように思える。

「私……ケーファーを応援……んーん、ケーファーに協力したい」  
話を聞いていたミナがぼつりと呟く。  
その声は真剣そのものだ。

「誰かの都合で勝手に振り回されるのなんて嫌。誰だって……普通の幸せを掴む権利くらいあって欲しい」

七十一話 1の深夜騒動(前書き)

たまにある中身の薄い話です。

今回も本編にはあまり関係ありません！

旅の道中は長いので、全部書いてたらきりが無いけど、全部飛ばすのも味気ない。

と思っプロットにはない話を細々書いているのですが、どうでしょう？

誤字脱字報告感想等、頂けたら嬉しいです。

## 七十一話 1の深夜騒動

それは、世界の構造を変えるって事になるぞ？

夜、皆が寝静まった後に一人で考え事をしていると、リユートに言われた一言が頭の中で回る。

考えている事は昼間の出来事。

魔人と人の和解。

それは私が思ってる以上に、この世界では難しいみたい。

でも、そうだよね。

何千年って間、戦い続けて来たんだもの。

私の世界の歴史を見てみてもわかる。

「戦争中の国が、その国の人と仲良くするハズなんてないのかあ。どうしたらいいと思う？ケルロン」

夜、私は馬車を降りてケルロンと一緒に寝ている。

流石に地面にそのまま寝てる訳じゃないから寝心地は悪くない。

リユートは馬車の上で寝るように説得してきたけど、ちゃんと洗ってからのケルロンはふかふかで気持ちいいんだ。

ケルロンは頭が良くて言葉は喋ってくれないけど、理解はしてるみたいで色々な反応をしてくれる。

けど、今回は返事が帰ってこなかった。

「ケルロン？」

気になつてもう一度呼んでケルロンを見ると少し恐い顔で暗がりを見ている。

「……魔物？」

魔人クラスの魔力なら、ある程度近ければ自然に気づける。魔獣でも魔力の大きさの幅は広いけど集中すれば気づける。でも、何も感じないという事は、なんてことない魔物だろう。

暗闇を目を凝らしてみると確かに何かいる。

でも、魔物と言うよりは……。

「……人？」

私より少しだけ背が高い。  
ん、ちよつと待っておかし。

そう気付いた瞬間、気づくなと理性が警笛を鳴らす。

なんでこんな所に人が？

こっちに近づいて来てるのに、なんで足は動いてないの？  
ていうか、少し浮いてない？

夜だから気づかなかったけど……良く見たら少し透けてない？  
考えるな。考えちゃ駄目。

気づいちゃ駄目。言葉にしちゃ駄目。

そうは思いながらも、私の口は自然と動いてしまった。

「幽……霊……？」

その瞬間、背中に嫌な汗が流れる。

え、何、何なの。

どうみても人じゃない。

魔物でもない。

そこに居るのは人型の何か。

私の知識で当てはまる物は一つ。

元の世界で、たまにテレビとか本で見た事がある。

別に特別、怖い話が苦手ということもない。

でも、いざ実際にソレを目の当たりにすると感情が止まらない。

怖い。

「嫌……え、何？こないで……！」

咄嗟に右手に魔力を集めて魔法を使う。

発動したのは風。

別に意識して発動させた訳じゃない。

ただ無我夢中で攻撃魔法を想像しただけだ。

「こつちに……来るなあ！」

風を力任せに投げつけると槍のように鋭く幽霊を貫い……いや、すり抜けた。

「……へ？」

余りの事に変な声が出た。

だって仕方ないじゃない。

なんで魔法がすり抜けるのよ！！

「だ、誰か……ケルロン？」

手を伸ばすとふわふわした毛皮が触れた。

良かったっ……って、一瞬思ったけど、ケルロンは私の動揺っぷりを心配してるらしく、鼻を近づけてきて幽霊の方なんてさっぱり見てやしない。

ああもう！

一人つきりよりは大分マシだけど！

ケルロンの頭の上に手を置いて再び魔法を唱える。

前にケーファアの彼女が言っていた。

天使に雷は効かない。なら、たまたま幽霊に風が効かない可能性だ  
って！

手のひらが熱を持ち小さな指先大の火球ができあがる。

最もサイズが小さいだけで私が必死に作った超高温の火球だ。

なんか色も青い。

「これなら……！」

それを指先をピストルの形にして幽霊目掛けて打ち出す……けど、

やはりすり抜けてしまう。  
遠くで青い火球が大爆発を起こして辺りに熔岩染みた液体が飛ぶの  
が見えたけど、それどころじゃない。

幽霊はゆっくりとだけど確実に近づけてきている。

「何、今の爆発音!!」

「ミナ!大丈夫か!？」

そこでやっと馬車で寝ていた男達が起き出した。

遅い……!!

私は怯えてうまく声が出せずに心の中で悪態を吐く。

「ミナ……!今の爆発はミナか?って、こいつは……」

私はリユートに必死で、こくこくと頷く。

リユートはまだ少しだけ離れてる幽霊に気付いたみたいだ。

「リユート、それ……幽霊……」

「ああ。ゴーストか……安らかに眠れ」

そう言うとリユートは、いつの間にか握っていた魔剣で幽霊を真っ  
二つに斬った。

……斬れるの!?

なんか信じられない物を見た気がするけど……とりあえず、私が一  
人で起こした幽霊は終わった。



「……で、なんだったの、アレは」

「何って、ゴーストだが……え、なんで、オレ怒られてるの？」

「うるさい。怖くて悪いか」

「いや、悪くはないが……」

元の世界ではアレくらい普通の反応！多分！！

あれから他の人に事情を説明すると爆発は私が起こした物で問題ないということ、リユート以外の皆は馬車に戻って寝始めている。

リユートは、私の傍に来て頭に手を置いたと思ったら、可愛い所あるな。とか言い出したから正座させた。

そして、八つ当たりと幽霊の説明をさせている。

「説明して、説明」

このままじゃ怖くて眠れない。

「説明って言われてもな……。ゴーストだよ。魔力が人の記憶を拾った物だよ。元の世界にはいなかったのか？」

「いなかったって事はないと思うけど……」

流石に実際に見たのははじめてだから断言はできない。

「魔力は人の想いや技術、後は相性もあるか。そう言った物で動く。それは魔法使いであるミナの方が分かるんじゃないか？」

確かに魔力は私の想像通りに動いてくれる。

「オレは魔力を使うのは余り得意じゃないが……本人の意思に関係なく魔力が強い想いによって発動する事もあるんだよ。ゴーストはその一種だ。大体は……死にたくない。そんな想いが多いかな」

「あ……」

リユートが言いにくそうに続けて気付いた。

ここは魔界に近い。

多くの冒険者が、名誉やお金を求めて破れ、多くの兵士が国や家族を守る為に散った場所だ。

「……そっか」

「ああ。でも、それは本人じゃない。だから冒険者の間では斬って供養するのが、普通だな」

あくまで本人の想いを持っただけの魔力か……。

確かに死んだ後も、そんなのに彷徨かれてたら堪ったものじゃない。

だけど、一つだけ納得のいかない疑問がある。

「なんで斬れるの」

「……いや、斬れなかつたら困るだろ。魔法は効かないし」

「意味わかんない」

「んー、まずゴーストは純粋な魔力だから同じ性質の魔力は非常に通りにくい。まあ、四散させる程の物理的な威力があれば別だろうけど……」

つまり、青い火球を地面にでも当てれば爆風で吹き飛んだんだ。

「術式も技術もなく具現化しただけだからな。そう強い繋がりでもない。断ち切ってやれば四散するんだよ」

リユートはそう言って後ろを向いて欠伸をする。  
馬車に帰るんだろう。私もちよつと眠い。

でも、元の世界には魔力なんてあったのかな？  
知らなかっただけで、存在してる可能性はある。  
でも、もし無かったならゴーストと幽霊ってのは別の存在で、それなら幽霊ってのは一体なんな……。

と、そこまで考えて私は思考を中断した。

絶対に寝れなくなる!!

「んじゃ、おやすみな、。明日は少しゆっくり出るか……って、三ナ？」

私は馬車に帰ろうとするリユートの裾を思わず握った。

「えーっと……どうしたんだ？」

「……………」

「無視かよ!？」

この後のやり取りは恥ずかしいので、余り言いたくない。  
けど、リユートはいつも通り文句を言いつつ結局は私のお願いを聞いてくれた。



「なんて言うか……予想よりずっと活気があるね」

「こんな辺境の危険地帯に住むのは、それなりの訳がある。ここは魔力を含んだ鉱石が良く採れるんだ。だから、田舎だけど金回りはそこそこ良い」

都市はともかくとして、今まで立ち寄って来た村よりは幾らか発展している。

とは言え、規模は大きくはない。

しかし、流石に魔界の近く。

防衛設備にもかなり気を使っているなあ。

そう思いぐるつと見回す。

金属製で高い柵。

村側には魔法使い用の櫓まである。

柵の外は堀になっているから、いざとなれば炎か水辺りで侵入を妨害するんだろう。

しかし、こう見てみると、どうにも破損と言うか整備が行き届いてないように見える。

「最近、戦闘でもあったのか？」

「うん、そうなんだ。魔界で四天王って言われてる魔人の一人が来てさ。大変だったよ……」

「……四天王って、よく撃退できたな。流石は魔王って所か？」

「うん……もう一人居たから僕だけじゃ守りきれなかったかも。」

ルーシーが手伝ってくれたんだよ  
「ルーシー？」

聞き覚えのない名前に首を傾げる。  
ケーファーも、その事に気付いたようで何かを言いかけたが、遠くから叫び声が聞こえた。

「ケーファー……!!」

そして、人形の白い何かが高速でケーファーの胸元に突っ込んだ。

……いや、今地面と平行に飛んでこなかったか!?

「おつと!?!……ルーシー。そんな速度で飛んできたら危ないよ？」

「おかえり!早かったね!」

「ああ、うん。道中で色々あってね。村長さんいる？」

「ルーシーは天使だからケーファーの気配は遠くからでもわかるんだよ」

なんか素敵に会話が噛み合っていない気がするけど仲は良さそうだ。  
そうか……この子がケーファーの言ってた……。

「ケーファー。恋人って、この子か？」

「うん。名前はルーシー。見ての通りの天使さ」

ケーファーに抱きついていている女の子は確かに、この世界の人間ではないように見える。

いや、実際に人間ではないのか。

髪は確かに白いが若干青みがかっている。

背中には大きな白い翼。

その翼で地面と平行に飛んできたんだろうけど、有翼の亜人でも、あそこまでうまくは飛べない。

それほど魔力の制御に優れているのだろう。

「ルーシー。この人はリユート。道中でお世話になったんだ」

「こんにちわ。ケーファアの恋人さん？」

オレが話しかけるとルーシーは、とても人懐っこい笑顔で喋りだす。

「こんにちわ、リユート。私はルーシー！よろしくね」

その笑顔だけで本当に天使に思えてくる。

うちの魔女とはえらい違いだ。

なんて考えているとミナがオレの隣に立って少し居心地悪そうに口を開く。

「……………どうも。こんにちわ」

……………そういえば前に魔王と戦ったんだっけ？

ケーファアの時ほどたばたしたから……………っていかミナが、いきなりキレたんだが。

まあ、結果的に話せるようになったけど、ルーシーとも何かあったんだろう。

どうしたもか……………。と思いケーファアに視線をやると向こうも、少し困ったように笑いかけてきた。

様子見か。

するとルーシーがミナの手を両手で握る。

「初めまして！リユートの恋人なの？」

「へ！？いや……ちが……くないような……ノーマコメント！」

「お名前は？」

「ミ……ミナ！」

「ミナ、よろしくね！あ、ケーファー。私、みんなと遊んでる最中だったんだ！また後でね！」

と、一方的に捲し立ててルーシーは村の真ん中の方に飛んでいった。

いやー、飛ぶのうまいなあ。

「えっと……ルーシー……あんまり物覚え良くないから……普通に仲良くして貰えると嬉しいな」

「いいけど……いいの？」

過去に何があったのかは知らないけど、ミナは少し後ろめたいんだろ。

けど、当のケーファーは余り気にしてないようだし、ルーシーは覚えてない。

「うん。僕もルーシーも人間と仲良くやっていきたいからね」

「わかった……。ごめん、ありがとう」

そのやり取りで過去の出来事は精算されたようだ。

全てに置いて、こう上手くいけばケーファーも平和に暮らせるんだろけど……難しいか。



「ケーファー。とりあえず、村長に挨拶したいんだけどいいかな？」  
「うーん……今居るのかなあ。忙しい時期なんだよね。ルーシーは教えてくれなかったし……」

「行ってみないとわからないって事か。ミナ、少し村の中を見て待っててくれないか？」

「ん、わかった」

そうしてオレとケーファーは村長の家へと向かう。

ミナも途中まで付いてきたが、子供が遊んでる広場を見つけると、そっちの方へ向かった。

結論から言うと村長は居た。

ケーファーの余りに早い帰還に驚いたみたいだけど、部屋に通し飲み物を入れてくれる。

「ささ、どうかお座りください」

……絵に書いたような村長だ。

初老で真っ白な髭が生えている。

しかし、村長の家と言う割には他の民家と大差がない。

どうやら、権力者と言うより単純なまとめ役みたいだな。

城や屋敷みたいな馬車よりは落ち着いて良いが。

「それで、ケーファー。随分早いけど、何か問題でもあったのかい？」

村長は心配そうに尋ねる。

雪が振れば安物の馬車は走らせにくいから村から出れなくなる。

その前に現金を作りたかつたんだろう。

「少し安めだけど、この商人……リユートが途中で買い取ってくれたんだ。代わりに経費には一切手を着けてないからいい話だと思うんだけど……」

「初めまして。聖殿都市での滞在費を考えれば、多少安く買い取らせて頂ければ双方に利のある話かと思ひ提案させて頂きました。取引を簡単に纏めさせて頂いたのが、こちらです」

今回の取引に関して簡単に纏めた紙を差し出すと村長は真面目な顔でにらめっこした後、目を細める。

「確かに。私どもに取っても安定して、そこそこの収入を得れました。ありがとうございます。帰って来た男衆を別の仕事に回せると考えれば非常に良い取引です」

これで冬を安全に越せそうです。と村長は続けるが一転して、また真面目な顔になる。

「して……村にどういった御用ですか？」

そう。

別に取引だけが目的なら、此処まで来る必要はない。

……大した用件じゃないんだけどな。

「現地まで足を運べば、鉱石を売って頂けるかと思ひまして。それと……人探しです」

「鉱石は交渉次第……と言った所ですが、人探しですか？」

「はい。これは、こちらの村のクエストですよ？知人が……此に

参加していたのではないかと」

商会の窓口で受け取った依頼状を差し出すと村長は難しい顔で押し黙るが、やがて意を決したように口を開いた。

「ケーファー。お疲れ様。今日は、もう休んでいい。私はリュートさんとまだ話があるから先に帰ってくれ」

「あ、うん。わかったよ」

重い空気を察してかケーファーは何も聞かずに席を立つ。出ていく時に心配そうに、こつちを見たのがわかった。

はは、アイツは本当に魔王かよ。

ケーファーが扉を閉めると空気が一段と重くなったような気さえする。

「確かに、うちの村のクエストです。しかし、残念ながら……このクエストに参加してくれた傭兵の方は、ほとんど……」

「そう……ですか……」

金払いは良かったが、その分危険なクエストだ。

アンノウンが居るクエストは、何がどうなるか一番予想が付かない。だから……こうなる事も予想していなかった訳じゃない。

「一応、少人数ですが生き残った方もいらっしやいます。今は皆、怪我をして村で療養なさってますから会いに行ってみてください」  
「……わかりました。ありがとうございます」

そうは言われても期待する気には慣れなかった。大規模な討伐クエストで少数の生き残り。

期待しろって方が無理だ。

「何分、辺境な村なので宿もありません。泊まる場所を御用意させて頂きますので、暫し外でお待ちを」

「はい。ありがとうございます」

立つと意外と足元はしっかりとっている。

ランディ……。

ただ、そうなるの一つ気がかりがある。

コレットは、どうなった？

ケーファアの話では、此処にいるような話だったが……。

扉を開けて外に出ると、すぐに広場が見えた。

広場では子供達が走り回って遊んでいる。

その端っここで子供達を見ているのは……ミナ？

何、やってるんだ？

気になり彼女の視線を追うと、子供達の中に一人……見慣れた少女が居た。

綺麗な金色のショートカット。

服も出た時のままだ。

いや、多少、ボロくはなっているか。

女の子なんだから、多少は気を使えよ。と居ないランディに悪態を吐く。

ミナが見つめている楽しそうに走り回っている女の子は……間違いなくコレットだった。

七十二話 100とロレット（後書き）

一応、書いておきますがランディ、死んでません（笑  
あくまでリユート視点でそう思えるって話という事で。

しかし、余り進まなかった…もう少し進めようと思ってたのですが、  
思ったより文章量が多く…。

誤字脱字感想等あれば頂けると嬉しいです。

## 七十二話 1と2つの可能性の話(前書き)

さて、前がちよっと自分の書きたい所までかけなかった為に、少し早めに投稿させて頂きました。

この章もそろそろ終盤な訳ですが……いい加減、章管理とかをちゃんとしないと……。

後、過去の話の修正もサボって……orz

さて、しかし、ここまで長かった気もしますが次の章からやっと話は大きく動く事になるかと思えます。

当初の予定はで100話くらいで終わらせようと思っていたのですが、どこまで行くやら……。

## 七十三話 1と2つの可能性の話

「リユート！私、子供達の所に行ってくる！」  
「ん？ああ、話が終わったら適当に探すよ！」

リユートに村長と話してくるから、待っていてくれと言われたけど、何をしていいかわからなかった。

この村は余程、外から人が来ないみたいで、目立つお店すらないんだもの。

だから、適当にリユートの後ろを着いていったけど……遊んでいる子供達の中に見覚えのある女の子を見つけた。

リユートに一言告げて駆け寄ると、そこにいたのは確かにコレットだった。

リユートの家族で私に懐いてくれた女の子。

怪我をした私に無邪気に笑いかけてくれた。

私にとっても妹みたいな存在だ。

駆け寄り足を止めて子供達を見ていると何人かの子はチラチラと、

こつちを見るけど、すぐに気にせず遊びに戻る。

少しして、コレットがこつちに気付いた。

「コレット……」

名前を呼ぼうとした声が止まる。

こつちを向いたコレットは……他の子供達と同じように、すぐに遊びに戻ったから。



「あ……………」

そっか…………。

他の人も、そうだった。

怪我が治った私は、前とは随分印象が違うみたい。  
当たり前か…………。

話かけたら気づいて貰えるかな？

でも…………もし、気づいて貰えなかったら…………。

そう考えると足が前にでない。

あー、駄目だ。

私、怪我をしてた時の人間関係に臆病になってる。

これじゃ駄目だ！

とは、思うものの中々足は前に進まない。

子供達は相変わらず、多人数で走り回っている。

鬼ごっこみたいな遊びなのかな？

その割には入り乱れて走ってるけど。

うん、こっちの遊びはよくわからない。

「ミナ、何やってるんだ？」

「！？…………リユート。早かったのね」

びっくりした。

いきなり話しかけるな。

「早…………くもないと思うけど。ずっと、ここに居たのか？」

どうやら私は結構な時間ここで、ぼーっとしていたらしい。  
まあ、良い時間潰しにはなったのかな……？

「んつと、ほら。あそこ……」

「ああ、コレットだな。ずっと、ここで見てたのか？」

「だって……」

うるさいなー。

どうせ私は臆病だ。

「遊んでる最中で悪いけど……ちょっと話もあるしな。おい、コレット！」

「ちょ、ちょっと……！」

まだ心の準備ができてない私を無視してリユートが大声を出す。

あー、もう！

……自分じゃ動けなかったからありがたいんだけどさ！  
けどー！

なんて混乱してる間にもコレットはリユートに気づいて駆け寄ってくる。

「リユート！来てくれたのね！」

「おっと……！久しぶりだな、コレット。少し背が伸びたか？」

「えへへー、伸びてたら嬉しいな〜」

コレットは嬉しそうにリユートに飛び付く。

本当に無警戒で父親に甘える娘そのものだ。

ふと、コレットが私の方を見てきた。

「えと……あの……こんにち……わ？」

馬鹿。

私の馬鹿。

何を言ってるんだ。

けどコレットは、そんな私を気にする事なくマジマジと見つめてい  
る。

「もしかして……ミナお姉ちゃん？」

「えっと、うん。久しぶりね、コレット」

と、ワンテンポ置いてコレットが飛び付いてきた。

「ミナお姉ちゃん！」

「きゃっ!？」

「私、ミナお姉ちゃんも無事だつて信じてたの！お怪我はどうした  
の!？」

「……ありがと。怪我はリユートに治して貰ったの」

「そうなんだ！今はリユートと一緒に旅してるの？」

「うん。リユートと皆を探しに来たの。クロウやメリアも無事よ」

「そっかー。ミナお姉ちゃん戦えるの？」

「そうよ？私、すごい魔法使いなんだから」

矢継ぎ早にコレットが質問を浴びせてきて、お陰でみるみる緊張は  
溶けていった。

コレットは頭が良い。

これも、もしかしたら気を使われちゃったのかもしれない。

うん、やっぱり駄目だ。

お姉ちゃんの私をもっとちゃんと、しっかりしよう！

「ねえ、コレット。ランディは？一緒じゃないの？」

「えっと……ランディは……」

コレットが居るならランディもいるはず。

そう思って聞いたら、コレットは暗い顔をして言い淀む。

「どうしたの、コレット」

ランディに何かあったのかな？

私は嫌な予感を押さえてなるべく優しくコレットに尋ねる。

何か知っているのか、リユートも少し辛そうな顔をしている。

「あのね、リユート。ミナお姉ちゃんの怪我はリユートが治したんだよね？」

「あ、ああ。オレがって言うか……一応そう言うことになるのかな」「リユート。こっちに来て」

コレットが立ち上がりリユートの袖を引っ張る。

向かっているのは少し大きめの家だ。

穴が空いているのか角の一つに大きな布が被せられている。

扉を開けると……一人の青年がベッドに寝転がっていた。

「ランディ！生きてたのか！」

「お？おお！？リユート！お前、よく此処がわかったな！」

リユートは喜んでランディに近寄りランディは上体を起こして、二人はガツチリと手を握りあった。

「これだよ。この依頼状。これを商會に預けたのランディだろ？」

「ん？これは……確かに俺が受けた依頼だけど、商會になんて預けてないぞ？」

「へ？いや、だって……」

私とリユートが、てっきりランディが預けた物だと思い込んだ依頼状は、ランディではなかったらしい。

じゃあ、誰が？

必然的に、その事を考えるとランディと、ずっと一緒に居たであろう少女に視線が集まる。

「え、えへへ……」

コレットは……本当に頭が良い。

「確かに依頼状だけだなんて妙だと思ったけど……」

「ランディが、リユートに何も教えないから……急いで預けたんだからね！それ！」

コレットが、ぷんぷんと拗ねて頬を膨らませる。

まあ、ランディにも考えはあったんだらう。

「まったく恰好悪い所を見られたもんだな……」

ランディは苦笑いをしている。

「ランディ、怪我してるの?」

「えっと、君は……?」

ランディが、知らない人を見るような目で私を見る。  
でも、大丈夫。

説明したら、ちゃんとわかってくれるもの。

「久し……」

「リユート!ランディの怪我を治して!」

……。

コレット……?

私の声をコレットがかきけず。

別にわざとじゃなくて何かに必至みたいだ。

「コレット……。何回も言っただろう?俺の怪我は天使のお姉ちゃんにも治せないんだ。普通の治療術じゃ尚更だ。でも、大丈夫だ!こんな怪我、俺は乗り越えて見せるから。な?」  
「でも……」

ランディはコレットの頭を撫でながら笑う。

それでも、コレットは納得してなさそうな顔だ。

「どこか、怪我したのか?」

「ああ、ドジってな……。ウェアウルフのゾンビみたいなのに片足持ってかれちゃった」

ランディが笑いながら布団の中から右足を出す。

そこには、赤い包帯が巻かれておりそれから突き出している健康そうな右足があった。

「……………ん？」

「足を怪我したのか？確かに血は出てるみたいだが……………」

「いや、あれ？確か脛から先を全部持つてかれたような……………え？は？」

「……………ああ、そういう事か。丁度良かったな」

ランディさんは混乱してるみたいだ。

……………なるほど。私にもわかった。

リユートの能力か。そういえば、入ってすぐリユートはランディさんと握手してた気がする。

やれやれ。

本当に便利な力だ。

少し呆れながらも安心する。

ランディさんはどうやら、かなり大きな……………っていつか傭兵生命に  
関わるような怪我をしていたらしい。

命があるだけ、運が良かったんだろうけど、その怪我さえもリユートの「不死の王」が治したみたいだ。

「……………？……………なっ！？痛っ！？痛たたたた！？」

と、ふいにランディさんが足を抑えて蹲る。

「どづした！？ランディ！」

リユートが近寄るけど、ランディさんは答える余裕が無いほどに痛

がっている。

コレットに至っては半分泣きそうだ。

っていうか、私もどうしたらいいかわからない！

「リユート！どうしたの、これ！？」

「わからん！とりあえず、お湯とタオルを誰かから貰ってきてくれ！」

「私、行つて来る！」

コレットはすぐにリユートの言葉に反応して飛び出す。

結局、ランディの激痛が治まったのは、それから1時間程しての事だった。

「ランディ、痛みはもう大丈夫なのか？」

「大丈夫って事もないが……騒ぐほどじゃないな。それに足が戻ったとなれば、このくらいの痛みなんて事ないぜ」

ランディさんは冷や汗を流しながら無理して笑顔を作る。  
強いなー、この人も。

ランディさんの足の痛みについては、とある仮説を立てた。  
それ以上、話し合ってもわからない物はわからないんだから、考え



ない事にした。

理由は……拒絶反応だ。

数日間無かった物がいきなり戻った事により、なんらかの不都合が体に生じたんだろう。

リユートの能力も反則的だけど、何もかもうまく纏めてくれる訳ではないらしい。

「でも、歩けるのよね？」

「ああ、まだ歩きたくは無いがな」

私の自己紹介も、リユートの能力を説明した時に済ませた。

というか、リユートの能力を説明するには、私の怪我が治った時の事を説明するのが一番手っ取り早い。

本来なら、内緒にしといたほうが良い能力だけど……リユートの家族間なら問題ないだろう。

「でも、治ってよかったね」

「ああ。流石に傭兵は廃業かと覚悟してたからな」

コレットは一転して嬉しそうだ。

ああ、今の騒ぎで私も疲れた。

というか、汗でびっしょり……。

「リユート、落ち着いたし私、ちょっと着替えてくる」

「ん、わかった。村長が食事用意してくれるみたいだし、すぐ戻って来いよ」

「わかった」

とはいえ、今着てる服の洗濯もしたい。

魔法でちゃちゃつとやるとは言え、そんなすぐには戻ってこないだろう。

なるべく急がないと。

家の外に出ると冷たい風が吹いてくる。

うう………寒っ。

冷たい風が頭を冷やしてくれると色々考える余裕が出てきた。

これで………家族探しも終わりか。

なんか色々あったけど、あっという間だったな………でも、みんな無事で良かった。

この後は、どうするんだろう？

と、私はリュートとの約束を思い出す。

リュートのやりたい事。

それが終わったら………告白の返事をくれる。

今まで意識しなかった訳じゃない。

でも、考えないようにしていた。

………流石に今日は、意識しちゃうな。

鼓動が高鳴る。

自分でもどうしていいかわからないくらいに体が熱くなる。

風はこんなに冷たいのに。

リュートの返事が良い物でも、私たちの関係は多分、表面上は余り変わらないだろう。

けど………振られたら私はどうしたらいいんだろう？

そう考えると居てもたってもいられなくなって、何処へという訳でもなく私は走り出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1330/>

---

世界に蔓延る勇者達

2011年9月29日00時33分発行